Waseda Bungaku Sha
Meiji bungaku kenkyū

早稻田文學

再版





大正十四年

三月號

本間久雄著

婦人問題十講

四六判函入
クロース裝

定價二圓八十錢
送料十二錢

「現代の社會改造の諸運動乃至當來の新文化建設の諸運動は、男女の相互扶助又ば男女の協力によつて實現さるべきものである以上、所謂婦人問題は、決して婦人だけの問題ではない。それは實に男女兩性に取つての重大な一個の思想問題であり社會問題である。――著者はかゝる立場から男女問題についての近代諸學者の學說と主張とを參照してこゝに男女關係の世界的趨勢と共歸結の方向を明かにす。

五版

內容

(一講)婦人運動の由來と意義(二講)新性的道德(三講)自由離婚の是非(四講)結婚の進化(五講)戀愛觀の變遷(六講)近代の結婚改造案(七講)婦人と職業問題(八講)婦人參政權運動(九講)新マルサス主義と產兒調節(十講)我國婦人思想の發達

本書は最近支那上海の婦女問題研究會によつて「婦女問題叢書第一編」として**漢譯公刊**せられ、遠く支那にまで影響を與へつゝある名著なり。

東京神田表神保町

株式會社 東京堂書店

振替東京二七〇番

早稲田文學 第二百二十九號目次

明治文學號

混沌期の研究

國學院大學叢書第壹編

文學博士 芳賀矢一先生編（コロタイプ版挿繪十一葉）

日本趣味十種

四六版	美装
四百四十頁	
定價	參圓五拾錢
送料	金六拾錢

目次

執筆者は何れもその道の權威者である

日本趣味愛好者にとつても、また歴史研究者にとつても、眞に得難き珍重の書!!

東京牛込赤城元町　株式會社　文教書院　振替口座東京四四三五三番



早稻田文學

三月號

第二百二十九號

新舊過渡期の回想

逍遙

明治最初の十年間は、どの方面から觀ても、際立つて新舊の過渡期であつた。幕府の滅亡、新政の開始、改元、新帝の卽位、遷都。これで先づ、太い第一線が、自然にわが國史年表のあるページに引かれるわけだが、其次ぎの太い線も、十年宛で區切るといふ編輯上の慣例や都合からではなく、是れまた殆ど自然に明治十年の處で引かれる。といふのは、かの西鄕、板垣、副島らの先外武斷派と大久保、岩倉、木戸らの主內文治派が最後の大衝突の後に決裂して、幕閣に於ける施政の大方針が確定されるに至つたのが恰も此際であるばかりでなく、朝黨と野黨、藩閥と非藩閥、守舊と革新、頑固と文明等の各種の黨勢が漸次其歸趨すべき邊に落ち着きかけたのも此際であつたからである。鐵道も此前後に敷きはじめられた。最初の國立銀行も此年に出來た。開成所が東京大學になつた。學習院が創立された。其翌年には電信局が出來、府縣會議が開始された。それと相前後して維新の三功臣が死んだ。民選議院論が沸騰しかけて憲法政治の微影が動きはじめた。大久保利通は「維新の形骸は元年東北の亂に成り、其精神は十年西南の戰に定まれり」といつたさうだが、成るほど、さうもいへたのである。けれどもそれは主として政治上の大勢なのである。社會一般は、まだ〲四分六分の繼粉よろしくで、ほんの橋渡しが濟んだばかりの過渡狀態に止まつてゐた。隨つて其反映である所の民間文藝が混沌未分の境に彷徨してゐたのは自然の數である。其うち劇だけは、作者に、五瓶、南北以來の巨匠河竹新七の其水(默阿彌)がをり、三世治助や三世如皐がをり、若手の俳優には、——最も多く屬望されてゐた彥三と田之助は、ちやう

ど其頃相ついで夭折してしまつたもの丶、——例の圓、菊、芝、左らが恰も躍進しはじめた時であつたので、むしろ一種新鋭の意氣を發揮しはじめてゐたともいへるが、最も委靡してゐ　のは化政度の滿開期(エフロレセンス)以來、天保、弘化を經て嘉永頃までは、ともかくも其華やかさを續けて來てゐた所謂戲作系統の文學であつた。

勿論、此衰微の兆は早く既に嘉永の初めに見えてゐた。最長命者であつた瀧澤馬琴と岩瀬京山が、前者は嘉永元年に、後者は其五年に死んだのは、取りも直さず化政度文學の終焉であつたのだ。まだしも草双紙だけは、最も人氣のあつた柳下亭種員は、嘉永五年に死んでしまつたもの丶、後に一時二世種彥を名宣つた笠亭仙果や二世春水や萬亭應賀らによつて其餘勢を維持し得てゐたが、曲亭によつて始めて知識階級の嗜讀に堪へるやうになつて來た讀み本系の小說は、松亭金水をさへ文久二年に失つて、殆ど全く後繼者を絕つに至つた。人情本は有人、梅彥、谷峨らによつて、滑稽本は二世春水、谷峨、魯文らによつて辛うじて其殘喘を保つに過ぎなかつた。さうしてそれは既に明治以前の有樣であつたのである。

本來、わが德川期の民間文藝は、嘗て私が歌舞伎、浮世繪、小說の三角關係と特稱した、外國には類例のない、不思議な宿因に纒縛されつ丶進化し來つたものである。或意味に於ては、此三角關係が三者の發達上に有利であつたともいへるが、わが文藝をして遊戲本位の低級なものたらしめたのは、主として之が爲だ。といふのは、此關係は、正當にいふと、更に狹斜といふ一綱を加へて、四角關係と見るべきもので、隨つてわが德川期の野生文藝は、其勃興の初めから、其必然の結果として、ポオノグラフィーに傾くか、バッフシネリーに流れるか、少くとも此二つの者に幾分かづ丶感染せないわけにはゆかない宿命を有してゐた。つまり、題材も、趣味も、情調も、連想も、理想も、感興も、主として狹斜か劇場かに關係を持つてゐて、戲作(文學)と浮世繪(美術)とは、之を表現する手段、樣式に外ならなかつたのである。前にいつた如く、此四角關係は、或時代までは、互ひに相裨けて其發達を促成した氣味もあつたが、後には其纒

脚式の長距離競走が因襲の累ひを釀して、千篇一律の常套に墮し、化政度以來幾千たびとなく反覆して來た同じ着想、同じ趣向のパーミユーテーシヨンも、維新間際となつては、もう全く行き詰りとなつてしまつた。歌舞伎や操り（淨るり）の適用も、何にしろ、元祿、享保以來であるので、もう何としても遣り繰りの法が附かず、それに第二の源泉たる狹斜趣味とても、時勢につれて、俄に樣子が變つて來たが、因襲に縋つて、たゞ樣に依つて胡蘆を畫くことにばかり慣れてゐた末期作家の連中には、急には此新機運に善應することが出來ず、おまけに、力と頼む相棒の浮世繪は、龜井戸が死に、國芳が死に、やつと二世國貞や芳虎や國綱や國周や芳幾らによつて過渡期の傳統を維持するに過ぎなかつたので、戲作は一般に不振となつた。爲永春水及び其亞流が、此衰頽期に於て、比較的高く擡頭してをり、明治、大正の評家にすら多少の好感を以て迎へられるのは、狹斜情調を常套的な吉原から深川乃至柳橋へ移すと同時に、淺狹ながら、ともかくも市井生活の寫生へと筆を轉じてゐた爲でもあらう。無自覺ではあつたらうが、爲永派は、さすがに此點だけに於て——娼妓よりも藝妓や素人娘を主位に置いて、リヤルに立脚したといふ點に於て——混沌期以後の、即ち明治胎生期文學の先驅を成してゐた。

讀み本系、草双紙系の小說が目立つて不振に落入つたのには、更に他の原因があつた。蓋し是等の作物の材源は、上に言つた如く、第一には歌舞伎であり、淨るりであり、狹斜風俗であり、花柳情話であり、第二の材源は、初中期に於ては、主として源平時代及び其以後の物語、戰記、史譚、傳說、或は其當時の街談巷說であり、之を後にしては、其布衍、潤色、改作、翻案及び其千變萬化の新奇な結み合せであり、それが漸く窮盡するに及んでは、わが古典文學や佛敎文學の草双紙化をさへ識るに至つたのであつたが、尙第三のリソールスとしては、著名な支那小說を措據して、夙に其翻案や紹介に力めたものだ。中んづく「剪燈新話」系の怪談や「棠陰比事」風の裁判譚は、元祿のルネサンス以前にもう既に盛んに紹介され、續いて「三國誌」、「水滸傳」、「西遊記」、「吳越」、「漢楚」の武張つた、荒唐なものから、「醉菩

提」、「金翹傳」風の世話がゝつたものまで、片假名まじりの大意譯として一般に行はれ、化政度に入つては、其中の最も人氣のあるもの、例へば、「三國誌」、「水滸傳」、「西遊記」などを北齋の密畫入で新時代の嗜好に適するやうに譯し直したり、悉く草双紙式に翻案したり、遂には種の分らんやうに奪胎換骨するのを第一の誇りとする事ともなつたが、此支那小說脈も此派の最高權威であつた馬琴の死と共にピタリと止まつた。彼れ以上に支那小說を讀破し、鑑賞し、配劑し、適用し得る者が出なかつたからである。

之を要するに、凡作家らの適用し得る程度のあらゆる便宜な種本は、安政度までに、殆ど悉く使ひ盡されもし、荒し盡されもしてゐた。勿論、內外の名著や珍籍の中には、まだ〳〵夥しい遺利があつたのだけれど、それらは迚も末期の凡作家らの味解し得る所でなく、調理し得る材料ではなかつた。そこで、由來創意の貧乏に困しんでゐた彼等は、思ひ附の身代限りに遭遇した。其趣向の源泉が危なく干上がらうとした。其結果、末期の作には、二樣の新傾向が現れた。それは講談物の飜案と名作の草双紙化である。前者の暗示は夙に馬琴の「模稜案」などに見えてゐたともいへるが、金水の「阿佐倉日記」や「大川仁政錄」等に至つて露骨となり、安政以後の草双紙に於て更に其著しさをも加へた。二世春水の長篇物のそれの如きは其代表だといつてよい。

同時に、名作を、特に馬琴の當り作を、婦幼の爲に、祖述、ではなく、極平易に祖約して、草双紙仕立にすることが流行り出した。河竹新七（默阿彌）や瀨川如皐なぞの當り狂言を定例のやうに草双紙に引直したのも、創意の涸渇、趣向の種切れに餘儀なくされた同じ手法であつたと見られる。

以上が過渡期の概況であつた。それは過去の文學に對しては明かに衰廢であつたが、未來のそれに對してはまた全くの混沌であつた。後の明治文學の何等徵芽らしい物もうごめいてはゐなかつたからである。

最も混濁を極めてゐたのは明治最初の四五年であつたらうと思ふが、それは恰も私が、退職した父に連れられて、美

濃の田舍から尾張の名古屋に移り、眼前に演ぜられつゝある大政維新の活劇には殆ど何等の深い感慨もなく、理解もなく、暢氣な低能兒らしく、貸本屋大惣に日參して、役にも立たぬ戲作類を飽くことなく貪讀してゐた十一歳から十四歳までに相當する。懺悔かた〴〵其頃の追憶を話して見よう。それは、取りも直さず、私の目に映じた混沌期の文學談なのだから。

明治二、三年は、すなはち私の十二、十三歳ごろだ。今もいつた通り、其頃は、親や兄の課した漢學書類は、すべて形式的に讀む眞似だけで濟まして、只戲作ばかりを讀み耽つてゐた。で、化政度から天保、弘化、嘉永までのは、もう悉く讀み盡して、安政以後、元治、慶應の新著を漁つてゐた。が、全く無定見の、無學な、幼稚な鑑賞眼にも是等末期の劣作のつまらなさ、物足らなさはつく〴〵と感ぜられた。といつて、元祿、享保のそれや天明、寬政の諸作の味は、大甘物で慣らされた私には、雲丹、からすみの格で、まだどうも舌に合はない。で、黃表紙や八文字屋や近松や浮世草子は、ほんの片端を覗いたくらゐで中止し、餘儀なく又、馬琴、三馬、一九、春水、種彥、種員らの作を何度も〳〵おさらひ式に讀返し〳〵してゐたが、さうするにつけて、もとより馬琴に心醉してゐた私は、いよ〳〵彼れの群を拔く偉大さを分明に意識したので、彼れの大作の三部までが未完のまゝで殘されたことを惜まないではゐられなかつた。「朝夷巡島記」、「俠客傳」、「美少年錄」。此うち「巡島記」と「俠客傳」とは、前者を金水が、後者を萩原廣道が中書きつぎかけたゞけに、其續きが見たくてたまらず、知る筈のない大惣の番頭に質問を掛けたり、催促をして弱らせたことが何十度あつたか知れない。今日の藝術觀からは低級作家扱ひにされても囘護のしやうのない馬琴だが、其頃の水準から見ると、彼れは西洋の古典劇に於けるシェークスピヤ、其近代劇に於けるイブセン、ストリンドベルグの他の群作家に於ける以上といつてもよかつた。蓋し德川時代の文藝の鑑賞標準は今とはまるで別だ。それを十分理解しないでは馬琴の評價は出來ない。明治以來、彼れは殆どすべての評家によつて、おそろしくわるくいはれるのが例のやうにな

り、三馬や一九や京傳や種彥や、時としては春水よりも安手に取扱れようとしてゐるが、それは一つは反動評であり、一つは彼れが餘りによく其時代の趣味をも、好尙をも、信仰をも、理想をも代表し得てゐた爲であつて、偶ま以て彼れの偉大を證據立てるに足るともいへる。一九や三馬や春水を比較的今人が喜ぶのは、主として彼等の寫實味を、すなはち生の觀察と其表現とに於ける技倆を買ふのだらうが、彼等程度の寫生なら、多分其以上をでも、馬琴をして之に專念せしめれば、容易く成し得たらうと假定することが出來る。彼れのハンディキャップは、其自負心に誤られて、餘りに多方面に腦を使つて、其力を散漫ならしめたことである。どの方面に於ても群作家を壓倒し、洽く時尙を迎へ入れて一代の代言者たらうといふ集大成者的覇氣が餘りに熾烈であつたのだ。さういふ野心を抱いたのが、取りも直さず彼れが俗作家たる證據だといへばそれまでだが、內外古今、どこに其時代の寵兒になりたがらなかつた作家があつたらう？　革新運動の先聲者と見做されて豫言者視される詩人、小說家とても、畢竟は、逸早く反動時代を豫見してそれに迎合したのだとも見られるのだから、集大成者風の作家らは、言ふまでもなく時代の迎合者だ。ホーマアだつてさうだ。シェークスピヤだつてさうだ。近松、西鶴、勿論、さうだ。絕對に時代を超越した作家が、いつ、どこにあつたらう？　維新後までも馬琴がわが小說作家の北斗視されたのに何の不思議もない。大正の諸秀才とても、維新前に生れたなら、恐らく馬琴の私淑者たるに甘んぜないわけにはいかなかつたらう。嘉永六年に「木石餘譚」六冊を公刊した齊藤湖南は、彼れが其稿を携へて著作堂に訪れ、景仰心醉してゐたアイドルに閲を乞うたのは、たしか其十五六歲の時であつた筈だ。此作は彼れが馬琴の「俠客傳」に隨喜私淑して書いたもので、構想、措辭ともに、忠實に其私淑の師を模したものだ。印刷自由の時代であつたら、彼れなどは、遙かに金水、松旭らを凌いで、曲亭以後の第一人と稱讃されたかも知れない。が氣の毒な事には、維新前には安直な文學の登龍門がなかつた。又、一體に讀書界の趣味標準が低く、馬琴によつて向上せしめられた讀み本級の小說と雖も、やはり童話系統のまゝで成長したもので、要するに、成人の消閑の具たるに過ぎ

なかつた。だから、其主眼とする所は話柄の新奇であり、脚色の巧緻であり、挿畫の鮮麗であつた。之を嚴肅な活人生の記錄として、もしくは特殊主觀の藝術的表現として敬意を表しつゝ讀む者なぞは、只の一人もなかつたのだ。一般の悦ぶ所は生の觀察の精刻よりも空想の奔放であり、描寫の如實自然よりも其趣向の無殲盡にして事件、人物のいよ〳〵いでゝいよ〳〵奇なる事であり、其詞句の如きは、和漢雅俗を巧妙に折衷して、硬軟、輕重を自在にし、而も成るべく平易に流麗に書き綴るのを理想的とした。さうしてそれら諸項に關して、馬琴は明かに第一人者であつた。構想の雄大、詞藻の富贍、學殖、識見、多才、多能、適く所として可ならざるなき手腕、共に他の群作家の追隨し得ぬ所であつた上に、更に一つの特色が彼れにはあつた。彼れの作には、前に春水に就いて言つた以上の、次ぎ來るべき時代の或精神的微光が閃めいてゐた。恐らく半無自覺でもあつたらうが、彼れは單なる集大成者たるに止まらなかつたともいへる。何となれば、相應に力の籠つた沈音（ノーパス）で豫言曲めいた一種の獨唱（ソロ）を聞かせてゐるからである。

試に「俠客傳」を又、「松染情史」を讀んで見るがいゝ。化政度以來のどの作にも見出されない一種の情調が浮動してゐる。楠氏の孤忠を思慕崇敬し、南朝の式微を慨歎し、足利の不臣を憎み憤るの情意が、到底地の作家らに在つては、望まれざる熱と力とを以て發現されてゐる。斯ういふ勤王思想は脚色の都合が生んだ偶然の產物であつたらうか？　彼れは「巡島記」に於て鋭く時政、義時、牧の方らの不臣、奸惡を剔抉してをり、又、遂に筆を著け得ずして終つたが、大阪落城の悲劇を一種の歷史小說に書かうといふ腹案があつたらしい。それは彼れの遺した反故のうちに例の大阪落城の屏風畫の敷き寫しや大阪城の圖やがいろ〳〵あつたのによつて推測される。晩年の彼れには順逆に關する或政治的又は倫理的の觀察があつたのではなかつたか？　彼れと華山の交りの親密であつたことは人の知る所であるが、蒲生君平の如きも、例の等持院で尊氏の木像を笞打つた其往きか還りかに、たしか彼れを訪れた筈だ。平田篤胤とも一應の交際はあつたらしい。「日本外史」を謄寫させて藏してゐた事などをも考へ合はせると、彼れの勤王情調は全くの偶然とも思は

れかねる。山陽のあの叙事詩的歴史に大義名分を鼓吹する感化力があつたといふのを假に事實だとすると、馬琴の歴史小說も後の活きた勤王劇の前奏曲ぐらゐの用をなしてゐたかも知れない。時尚を超越して、自己の天眞を表現する底の藝術的見識のなかつたことは是非もない弱點だが、とにかく其時代の子としては最大者であつたことは否まれないであらう。

牛の觀察の精刻、性格描寫の巧妙の如きも、若し彼れをしてそこに全力を傾けめしたなら、必ずしもスコットやリットンに多く劣るとも思はれない。勿論チューマやエインスヲオス以下ではない。それを嚴密には性格をば生產し得なかつた三馬、一九、春水以下と見るは、恐らく公平な批判であるまい。「八犬傳」に於ける蟇六一家の挿話、或は「美少年錄」に於ける朱之助の傳なぞは、優かに彼れが此方面に於ける試驗石と見ることが出來る。明治中年以後の馬琴評は反動的に過ぎてゐる。彼れの評價はもうそろ〳〵仕直されねばなるまい。

今の文學評家らは最も賤み貶しめる事なのだが、化政度には寧ろ重要視されたものは、前にいつた翻案、適用といふ一特技だ。古今の有名な物語や市井の實話を勝手に潤色したり、補充したり、別の話と組み合せたり、時、處、人名を變換して、別事件の如くに書き直したり、而もわざと原話の形跡を歷々とさせて、其翻案ぶりの巧みさを競ふといふ遊戯的態度、それは維新前後までも續いたものだ。但し、それを戯作者らの作才テストに適用するに至つたのは化政度以後を絕頂とする。綾足にはじまつた「水滸傳」の本朝化は、京傳の「忠義水滸傳」を中期として、馬琴の「八犬傳」に及び、終に其完成期に達した。といふのは、彼れのは、在來の如き單なる適用ではなく、ともかくも奪胎換骨であつたからだ。按ふに、此特技方面に於ても、馬琴は最も多產であつたと同時に多少の新機軸を出してゐる。「傾城水滸傳」や「風俗金魚傳」は感心しないが、「金比羅船」の如き、「漢楚賽擬軍談」の如き、「金瓶梅」の如きは、「田舍源氏」に比して、其翻案の自在さに於て、優るとも決して劣るものではない。「常夏草紙」、「松染情史」、「八丈綺談」、「俊傳實々記」、

「三七全傳」等の如きも、特に此點より見て彼れの技倆と識見とを見直してやるべき材料であらう。私は窃かに疑ふ、今の評家は果して彼れの是等の作を熟讀してゐるだらうかと。殊に草双紙をだ。いや、一體に德川期の小說は、半分以上草双紙なのだ。それを童話視して閑却するわけにはいかない。讀み本とても、畢竟は同じ系統のものだ。寛政、文化の草双紙を度外視して文政以後の小說を論ずるのは其遺傳を究めずして或性格を是非し、父母を知らずして其子を褒貶するやうなものだ。文學史家としての正しい態度ではなからう。

こんな處で、馬琴の辯護をするのは餘計な事のやうだが、これは主として其頃に於ける馬琴崇拜が如何に當然な事であつたかを認めて貰はう爲である。馬琴は小說の絕對權威であつた。私のやうな晩手な、無定見の少年が彼れの作に心醉して其作の中絕を惜み悲しんだのに、何の不思議もない。其頃私は、折々、馬琴といふ老作者がまだ健在してゐるといふ事を見たり聞いたりする夢を見た。

馬琴の作に次いで、讀み本級で、私が其後篇の出ないのを殘念がり情けながりしたのは、當年の「大菩薩峠」ともいふべき知足館松旭の「神稻水滸傳」、春水遺稿の「大内十杉傳」、丘亭丘山の「水滸太平記」、玉藻山人の「岩見英雄錄」などであつた。これらは、作者が死んだか、衰へたか、或は賣れ行きがわるいかで、頓挫したのであつたらう。一つは、其頃は、讀書社會の水準がますます低下するのみであつて、やつと草双紙の作者だけが、長篇物の惰力でか、其全盛期の片影を留めてゐた。が、その草双紙とても、美圖垣笑顏が書きはじめて、種員が稿をつゞけ、後には種淸によつて繼續されてゐた「兒雷也譚」、二世春水の「北雪美談」、「九尾傳」、「幻日記」、「室町源氏」、「金華七變化」、仙果の「足利絹」や「其由縁」、種員にはじまつて其仙果の二世種彥によつて書き續かれた「白縫譚」、同じ二世種彥の「妙々車」などが長篇物の代表作で、さすがに其續篇を尙ほ望まれるだけの人氣はあつたが、其内容は、殊に、最も多產な春水のの如きは、前にいつた如く、殆ど悉く講釋種であつた。例へば、「北雪美談」は大槻の加賀騷動であり、「幻日記」は由井正雪

であり、「室町源氏」は天一坊を女にしたのであり、「金華七變化」は鍋島の猫である。「白縫譚」の如きも、黒田騷動へ天草軍記を加味したもので、前髮の大若衆が主役になつてゐる趣向は「北雪美談」も「幻日記」も異曲同巧である。「白縫」と「美談」とは悪に徹する美青年を中心としてゐる點に於て馬琴の「美少年錄」と共通し、同時に「大菩薩峠」にも連絡がある。「幻日記」とても反逆兒の美青年を主人公にしてゐる。「大菩薩峠」の作者は大分の草双紙通であるらしい。

それから、仙果程度の作者でも、競つて「八犬傳」や「巡島記」や「俠客傳」や「弓張月」を草双紙式に引直すのに忙しく、種清や魯文や梅彥らの如きは河竹や瀬川の當り狂言を同じ式にと稼いだものだ。現に「八犬傳」の如きは、一は仙果と柳亭錄の手で「犬の草紙」として數十篇に、又魯文の手で「假名讀八犬傳」として、同じく數十篇に綴られてある上に、更に小形讀み本十冊ばかりに魯文が引直したのもあつた。が、此種草双紙類の出版さへも、萬延、文久以後は次第に其數量が少くなつてゐた。

四角關係の一角が、遊蕩趣味が娼妓本位から藝妓本位に變移したゝめに、動搖し、ついで他の主要な一角である浮世繪方面にも、此頃は大手腕がなくなつてしまつてゐたと既に前に言つたが、實際、草双紙の口繪、中繪が目立つて粗末になつた。第一、彫りや刷りや紙質が、迚も全盛期のそれらとは比べられない酷いもので、筆意もまたそれに準じた。そこへ持つて來て、作の内容は行き詰る。種清の如きは、どうかして畫樣に新生面を呈させようと氣を揉んだらしく、彼れが「北雪美談」の續篇を受け持つた時分のそれには、小田大炊の家來にダンブクロを穿かせて劍附き鐵炮を持たせたりしてゐる。が、到底歌川派の筆意や手法は、さういふ新時代相を寫すにはおひ／＼不向きとなつて來てゐた。其頃の歌川派の描いた洋裝男女、殊に外國人の風姿は、繪本のも、錦繪のも頗る不樣なものだつた。斯くして久しく榮え續いた四角關係の上に凋落の運命が各方面から押迫りつゝあつたのである。

讀み本の作者が殆ど全く死に絕えたり屏息したりした慶應末には、二世種彥から再び仙果へ逆戻りして草双紙作者の

主な代表者の一人であつた笠亭さへもゐなくなつたので、此方面も大きにさびれた。惰力で後篇を途切れ〳〵に出してゐたのは、たかゞ二世春水の戯作と萬亭應賀の「釋迦八相」ぐらゐのものだつたらう。がんどう返しや家體崩し、目まぐるしい昏の目翻しの政治的、社會的活劇の連續は、自然の感化で、掛け構ひのない者共の心までをも忙しくした。いかな婦幼も、もう迚も落ちついて、平假名一點張りのだら〳〵した草双紙などを拾ひ讀みしてをられる時ではなかつた。それに、一般に漢語が流行つたり英語が使はれたりして、新聞だの、雜誌だのが發行される世の中となり、一切の趣味、氣分が變つて來た。だから、機に投ずるに敏な魯文の如きは、一九、三馬系の傍訓附きの小形讀み本の様式で「西洋膝栗毛」や「安愚樂鍋」などを著して新時代の好尙に副はうと努め、次第に成功して、後には群戯作家を拔いて、其名を一代に知られるに至つた。應賀の如きも其頃頻りに其顰みに倣つたやうなスケッチや諷刺を試みたのだが、成功しなかつた。山々亭有人が條野傳平の本名で、落合芳幾らと共に「東京日々新聞」の發刊に參加したのは明治五年、二世春水の染崎延房や轉々堂主人の高畠藍泉（後の三世種彦）が「平假名繪入新聞」を出したのは同八年、魯文が横濱で「假名讀新聞」を出したのも同年、野村文夫の「團々珍聞」へ梅亭金鵞が入社して最後の人情本を書いたのは同十年。蓋し世と共に讀書社會の形勢が著しく推移して、戯作者らに職業替への餘儀なさを自覺せしめたのであつた。

此際、興味本位の出版物に更に二樣の新傾向が現れた。一は眼前の政治的活劇（事實譚）を新體の繪入讀み本に綴つて出すことであり、二は同じく主として街談巷說を、無論、勝手に潤色して、表紙繪や中繪は、草双紙式其儘を襲用しつゝ、文章を比較的新體にすると共に、傍訓附きの漢字澤山なものとして、走り讀に便ならしめて刊行することであつた。二種ともに、和紙で、前者は半紙大が通例であり、後者は草双紙大であつた。前者の代表は松村春輔の「復古夢物語」、「春雨文庫」、「近世櫻田紀聞」などである。萩原乙彦（梅暮里谷峨）なぞをも此仲間に加へ可きであらう。私が維新の大活劇に關する初知識を得たのは、主として彼れらの作に依つてゞあつた。それは多分明治八九年頃であつたらう。

傍訓附き漢字澤山の新草双紙は、三田村鳶魚君が故あつて特に取調べてをられるが、其形式、内容ともに此過渡期を代表すべき一種の出版物であつて、其數は存外夥しくあるらしい。其作者は主として第二流の舊草双紙作者らであつた。十年前後には魯文、種清、梅彦、轉々堂、彦作（久保田）、梟柳亭、勘造（岡本）（?）など。其他は今憶ひ出せない。繪は芳幾や國政や周延が專ら擔當してゐたかと思ふが、いづれも、草双紙全盛期のそれらとは似ても似附かぬ、構圖も筆致も彫りも刷りも、粗末千萬なものであつた。歌川派も役者繪專門の國周以外は、おひ〳〵生活難の脅威を感じはじめて、粗製濫造に甘んじないわけにはいかなかつたのである。後には油繪や寫眞から自得した一種の手法に一代の喝采を博し得て明治の浮世繪界に雄視した大蘇芳年なども、まだ其頃は、生存のために大跦きをして、どうしたら時代の好尙に副ひ得べきかと暗中模索式の筆意を凝らしつゝあつた。彼れが寫眞式の變な手法で血みどろの官軍や幕兵を、或は彩色繪本に、或は錦繪に、頻りに畫き散らしつゝあつたのは慶應年間の事であつた。

此際、歌川派の衰落を補充すべく、比較的清新な筆を揮つて、新刊書の挿繪を描いて、一代に歡迎されはじめた二畫家がある。それは猩々狂齋と鮮齋永濯であつた。前者は滑稽諷刺の諸著によろしく、後者は新時代相を畫くことに於て、先づ寫實的である點が歌川派を凌ぎ、且つ狩野派出だけに、上品でもあつた。明治八九年以後、芳年が急に躍進して風俗畫に於て彼れと相對峙するに至つてからはさうでもなかつたが、松村の諸著の如きは、彼れの畫で半分助けられてゐたといへる。

こんな風で、例の四角關係は、いよ〳〵ます〳〵崩壞していつた。けれども因襲の根は中々拔け切らんものである。四角關係の系統は、傍訓附きの新式草双紙へは依然として傳はり、延いて明治廿年前後にまで及んだ。私の舊惡全書の第一篇「書生氣質」の口繪にさへ、歌川國峰の筆によつて、明瞭に其殘影が留められてあつたことを憶ひ出すと慚愧に堪へない。

織田純一郎の「花柳春話」が出た明治十二年以後の事は、岩城準太郎氏の明治文學史（明治三十九年初版）にも、高須芳次郎氏の「近代文藝史論」（大正十年發行）にも、同じ人の「日本現代文學十二講」（大正十三年發行）にも、德川秋聲氏の「明治小說文章變遷史」（大正三年版）にも、田山花袋氏の「明治小說內容發達史」にも大抵要を得て敘し傳へてあるから、改めて話すにも及ぶまい。只聊か後のわが近世文學史家のために注意を呼んでおきたいのは、此過渡期代表作家中の主要者としての魯文と二世春水に關しての事である。明治廿七年に六十五歲で死んだ魯文は、既に安政年間に名を成して、ともかくも明治十八九年頃まで活動を續け、種員張の草双紙をも書く、三馬、一九式の滑稽本をも作る、馬琴風の讀み本をも間に合はせる、「安政見聞誌」のやうなものをも綴る、其上「假名讀」、「いろは」二新聞の創立者でもあり、「猫々奇聞」、「魯文珍報」、「猫洒落誌」等の主筆者でもあり、「歌舞伎新報」の最も有力な記者でもあり、劇評家でもあり、藝妓を猫、九代目を團洲、新史劇を活歷と命名した名附け親でもあつて、たとひ低級の譏りは免れないとしても、其多方面な點に於て、又其巧妙に此過渡を泳ぎ拔き得た手際に於て、優に戯作文學系の第一人者たるの資格がある。草双紙作者であつたゝめ、習慣的に通俗の秘訣を心得てゐたのでもあらうが、「太政官日誌」式の漢文讀み下し本位の七むづかしい文章が一般となつてゐた時文壇に傍訓附き、平假名本位の新聞紙を發行して、暗に福澤の漢字節減論に聲援を與へたと同時に、期せずしてゞはあるが、後の口語體新聞紙の先驅となつたなぞも、彼れの機才の一識である。「豈に夫れ浩歎すべき也」なぞと叩き附けて平氣でゐたやうな學殖ではあつたのだが、何でもかでも當意卽妙、一氣呵成に遣つてのけた其縱横の文才も決して馬鹿には出來なかつた。とにかく彼れの諸著は、其全部に渉つて、改めて一讀過されべきであらう。さうして在來の月並批判以外に出でゝ、新たに評價する必要があるであらう。齋藤綠雨は彼れの最晚年の門人の一人であつたのだが、實は私の如きも、明治九年に初めて東京へ出た當座には、人を介して彼れの弟子にならうか知らと、ふら〳〵と思つて見た事もあつた。そのくらゐ其頃は有名でもあり有勢でもあつたものだ。

けれども魯文はまだ仕合せなことに、大概の讀書人が其名ぐらゐは知つてゐる。どの明治初期文學の史にも論にも、過渡期の一代表として特筆されてゐる。氣の毒なのは染崎延房の二世春水である。初代春水の「いろは文庫」は、其實彼れの筆だと言ひ傳へられてゐるが、若しそれを事實とすると、彼れの作界に於ける活動は、天保七年頃からである。「貞操婦女八賢誌」の如きも、四篇までは初代の筆だが、五篇から八篇までは二世の作である。それから類推すると、讀み本方面に於ても、普通初代の作と見做されてゐるものが、其實は、二代の筆ではあるまいかと疑はれる。例へば、「大内十杉傳」の如き、「尼子九牛士傳」の如き、其初篇、二篇位ゐはともかくも（年代が天保中期であるところから推して）其大部分は二代の作ではないか知らん？　安政年間に出た「天竺得瓶仙桂奇錄」の如き、「千葉軍記」、「清正一代記」などは、無論二代の作かと思ふが、もう一度今の目で見直して見ねば、斷言は出來ない。滑稽物にも彼れの作が隨分ある。弘化年間の「滑稽和合人」、「溫泉土產箱根草」、「賣色安本丹」など。草双紙に至つては、種員以後の最多產の長篇作者で、成功者で、彼れの競爭者は笠亭仙果の二世種彥以外には無かつたらう。此うち、滑稽物だけを除くと、彼れの作家としての才分は、其品位もまた、魯文よりは一二段勝つてゐたといつてよい。染崎延房として「平假名繪入」に關係してからも、三面に事實めかして半分以上は空想に成つた艶話を綴つて、人氣を呼び、後の「續き物」の開祖となつた。魯文が明治八年に新聞の滑稽物に筆を執つてゐた時は月給が四十二圓だつたと高須氏の「現代文學十二講」に書いてあるが、恰も其頃染崎は「平假名繪入」へ入社した。其際彼れは何歲ぐらゐであつて、待遇はどんな風であつたか知らん。高須氏は「いろは文庫」の初篇が出たのを文政二年とし、それを彼れの代作といつてゐるが、無論これは天保七年の思ひちがへだらう。ところで、天保七年から師匠の代作をしてゐたとして、それが假に二十四五歲であつたとすると、明治八年には六十五六歲であつたらう。聞けば彼れは其十何年以後は、文筆界から退隱せしめられたらしく、書肆の主人として零落の殘年を終つたさうな。薄運な長壽者であつたらしい。少年時に彼れの諸著を愛讀したことを追憶

すると、彼れの末路が悼ましくてならぬ。末期の作者には相違ないけれど、前記の通り多方面に相應の貢獻をした當年の秀才が、文學史家を以て任ずる人達にすら殆ど全く正當には顧みられずに、魯文よりも以下に、二世種彥よりも以下に、應賀、種淸らよりも以下に扱はれるとは氣の毒な事だ。將來の文學史家は、其職分の責任上、ほんの一應だけでよいから、過去の戲作者ら――いはゞ環境に誤られてくだらぬ時好の犧牲となつた人達――の諸作を讀んでやつて下さい。時勢、環境を逆まにしたら、彼等がわれ〳〵であり、われ〳〵が彼等であつたかも知れない。

（十四年二月初旬稿、於熱海）

明治初期の新聞小說

野崎左文

大體にもかゝる標題の下に自分が多少實驗した同期の新聞小說を始め、小新聞の編輯ぶり、小說記者の生活狀態、新聞揷畫の沿革其他の雜件に就て筆を取る事となつたが、特にお斷り申して置くのは、當時の記錄や參考書が手許に存して居ない爲め、只朧氣な記憶を辿つて思ひ出す儘を書くのであるから、年月や場所人名等の誤りが多からうと思はるゝ點である。併し近來江戶文學研究などいふ事が流行し、百年以前の事にはその調査に憂身をやつす人もあるが、近い明治年間の事は閑却され勝ちで、書物として傳はつて居るものも少いやうである。明治も初年といへば今から六十餘年の昔ゆゑ、今の內にすべての記錄を止めて置くのが必要であらうのに、此の時代を研究する人は割合に少いやうに見受けられる。自分は固より其任では無いが、こんな事でも

書いて置けば或は一の根柢となつて、夫れから夫れと枝葉が延び、後日の參考となるべきものが出來上るかも知れぬと思ふのであるから、當時の操觚家にして猶健在の方々は、誤りを正し足らぬ處を補うて、此の記事を完成せられんことを切望する。

大新聞と小新聞

新聞小說の事を書くのに先だつて、日刊の新聞紙が大小の名稱を以て區別された事を云うて置く必要がある。明治七八年から十年までの間に東京にて發行されつゝあつた新聞は東京日々新聞、郵便報知新聞、朝野新聞（公文通誌改題）曙新聞（新聞雜誌改題）讀賣新聞、平假名繪入新聞（後東京繪入と改題）假名讀新聞等であつた。之等の新聞社は報知が兩國藥研堀にあつたのを除くの外は、言合せたやうに銀座の煉瓦地に集まつて居た。先づ日々新聞が銀座二丁目から尾張町なる惠比壽屋跡の堂々たる大煉瓦家屋に引移り、表口に太政官記事御用と書いた白字の竪看板を揭げ、軒先に日報社といふ花瓦斯を取付け、大祭日などには之に點火して景氣を添へて居た。朝野新聞は銀座四丁目の角今の三越支店のある處へ本社を設けたが、玆は元英人ブラックの經營にかゝる日新眞事誌社であつたのをその廢刊後買收したのである。自分は其頃近傍の西紺屋町川岸に住つて居たので、每朝同社の前に立ち、張出しの新聞――特に成島柳北先生の雜錄――を讀むのを樂みにして居たが、他の新聞は皆五號活字を用ひて居たのに、獨り朝野新聞のみは四號活字で印刷して居た事を記憶する。曙新聞は朝野社と相對した尾張町新地の角、則ち今の八十四銀行支店のある處で、明治十五六年頃には其の東南角へ東京橫濱每日新聞が移轉し來り、東北角には繪入朝野新聞社が出來て、此四ツ角を四新聞社で占領した時代もあつた。又讀賣新聞は琴平町から銀座二丁目京橋際の角へ引移り、繪入は銀座三丁目に、假名讀は出雲町にあつた。

さて之等の新聞を區別して大新聞、小新聞と呼んだのは、紙幅の大小に基いたのは勿論であるが、猶大新聞の主とす

ろ所は國家の經綸に在つて、專ら政府を反省せしむると共に、一方國民をも覺醒せしめんといふ主義の上から筆を取るのであるから、每號必ず社說を掲げて時事問題を論議し、雜報欄に至つても亦多く政治若くは農商工界の出來事を以て埋め、市井の雜事殊に花柳界、演藝界の記事の如きは新聞の品位を墮すものとして之を避ける風があつた、一二年後に報知新聞が其の紙上に劇評を載せ始めた時、報知も追々墮落し始めたのだと眉を顰めて評する人もあつた程ゆゑ其他は推して知るべしである。然るに小新聞は之に反して政治には殆ど無頓着といふ風で、——中には社說の代りに茶說といふ滑稽文を掲げる新聞もあつたが——專ら社會の出來事を報ずるを以て務めとし、就中艶種（ツヤダネ）と稱し男女間の痴情に關する記事などを此上なき好材料とする傾きがあつた、それ故花街劇場の通信にも重きをおき、假名讀新聞の如きは「猫々奇聞」といふ一欄を設け、藝妓のアラ捜しの記事を掲げて看客を歡ばせた事もあつた。そこで大新聞は知識階級を顧客とするものゆゑ社說にも雜報にも傍訓を施す事は無かつたが、小新聞は中流以下の社會を相手とする通俗本位のものであるから、記事には全部振假名を付けて居た、約言すれば大新聞は硬、小新聞は軟、前者は主人公向、後者は細君向であつた。

新聞に大小の區別があると共に、其の記者の閱歷、性行、風俗等にも亦相違があつた。大新聞記者は政治家、法律家、洋學者、漢學者、官吏から轉ぜし者、一介の書生から成上つた者等で、皆文明の先驅者を以て任じて居るから、自重して品格を墮さぬやうに心掛けてゐる風が見えて、服裝にしても洋服とか袴羽織とかいふキチンと極つた風俗が多く——成島柳北先生は着流しの時が多く、福地櫻痴先生も折々小紋縮緬の二枚重ねといふゾロリとした裝ひで出社せられた事もあつたが——中には紺飛白の腕まくりに小倉袴を高くからげ朴木齒の下駄をガタ付かせて來る、まるで芝居で見る田舍武士其儘の人もあつた。小新聞記者には戲作者とか和學者とか、若くは狂言作者とかいふ軟文學者が多かつたけれども、別に天下を望む大伴黑主もなく、筆一本を櫓櫂にして浮世の荒浪を渡つて來た、風流氣質の苦勞人ゆゑ、人附

合ひも穏かで世事に馴れた人が多數を占めて居た。隨つて其の服裝も道行振あり書生羽織あり、夏は大形の浴衣に白縮緬のへコ帶、冬は流行の粋を集めた通人好み、惡くすれば半開きの扇で額を敲き兼まじき者もあつた。若し助六の股を潜る者を覔むれば、硬派記者にも軟派記者にも其人ありと謂ふべしだ。

前に擧げた内日々、報知、朝野、曙、東京橫濱每日が大新聞で、讀賣、繪入、假名讀が小新聞である。猶小新聞としては繪入自由、自由燈、有喜世、改進、いろは、めざまし（後東京朝日と改題）今日（後都新聞と改題）繪入朝野（後中央新聞と改題）などが續々發行されたれど、是れは明治十年以後十五六年迄の間の事で、十年以前は此の讀賣、繪入、假名讀が三社鼎立して各々其特色を發揮して居たのである。當時或人は之を菅原傳授の三人兄弟に見立て、讀賣は眞率堅實で松王、假名讀は奇警洒落で梅王、繪入は溫雅艶麗で櫻丸と云うたのは適評である。それから大新聞といへば如何にも得意が廣く發行高も多いやうに思はれるが、所謂大聲は里耳に入らずで、賣れ高は却て小新聞の方が多く、日々新聞よりは讀賣の方が發行高に於ては勝を占めた時代もあつた。

新聞小說の嚆矢

小新聞は中流以下の階級を讀者とするから、その人々の好みに投ずるやう、何か目先の變つたものを掲げて所謂呼び物となすが營業上の祕訣であつた。そこへ行くと繪入新聞はよい處へ着眼したもので、每日の雜報へ繪を入れて發行すると云ふのが同社の誇りであつた。其繪は同社資本主の一人であつた落合芳幾氏が筆を把つたもので、其の順序はからである。

警察受持の探訪者が歸社して差出す原稿の内から、繪を入れるべきものを擇んで畫工が直ちに版下を描き、之を其夜の活版大組みの終りまでに急いで彫刻させるのである。當時は今の新聞の如く地方への宵出しといふ事は無かつたけれ

ども、八頁掛のロール貳臺で──壹臺で表、一臺で裏を──印刷するのである、而かも蒸氣とかいふ動力もなく、人の手で車を廻させゴト〳〵と印刷するのであるから、夜の十一時前後から刷り始めねば翌朝配達に間に合はぬ。それにしても五六時間の内に彫上げる必要上から其の版木を二つにも三つにも割り、剞劂師が手別けをして彫刻し、あとで之を繼合すといふ究策を施す事もあつたが、かゝる急拵への版畫ゆゑ頭彫り──剞劂師の腕利きが專ら人物の面部や頭髮の毛筋などを彫刻したもので之を頭彫りと稱へ、其他の胴體や背景等を彫上げるのは弟子達の仕事であつた──などは粗雜なもので、殊に版木の割り目が白い線を引いたやうに、ハツキリと紙面に顯はるるなどは不手際なものであつた。そこで版木を丁寧に彫らせるには、どうしても一二日餘裕を與へねばならぬと云ふ處から、同記者の前田夏繁氏が「金之助の話」といふ、三分の事實へ七分の潤色を加へた續き話を載せる事となり、挿畫も二三回づゝ前以て版下をゑがき、ゆる〳〵彫刻させる事が出來るやうになつた。此續き話が恐らく新聞へ小說を載せ始めた嚆矢で、其後小新聞は競うて此の繪入の續き物を掲げ──讀賣新聞のみは一見識あつて紙面に繪を入れた事が無かつた、饗庭篁村氏が繪入らずの小說を雜報の片隅に載せ始めたのも、ズツと後年の事である──後には大新聞まで之に倣うて、終には講談などいふ物まで連載して、讀者の御機嫌を取るやうになつた。

　前に掲げた新聞挿畫の事に因み、自分の失敗談とし又一つは懺悔話として白狀する事がある、それは明治十七年に今日新聞を發行した時の事であるが、同新聞は社を毎夕社と稱し、英國のイヴニングポーストに倣ひ、其日の出來事を其夕に發行して世間に報ずるといふ、進歩した考へから起つたもので、つまり今の夕刊に等しいのであつたが、此の新聞へ其日の出來事を繪入にして出し、大に敏捷な處を誇りたいと云ふのが自分の慾望であつた。ところで既に述べた通り翌朝配達の新聞でさへ版木が間に合ひ兼るのに、其日に配る新聞へ其日の事を繪入にして報ずるのは到底不可能であるが、併し豫定の行動がわかつて居るもの、例へば行幸啓とか何々の開業式とか、又は市井の年中行事等は、想像で下繪

を付け前以て版木を彫らせる事も出來たから、今一歩進んで所謂警察種と稱する喧嘩、人殺し、强盜、追剝、自殺、情死等の類にも繪を入れたいと云ふ考へから、其の部門を分つて豫めさまぐ\の繪組をつけた版木を數個彫刻させて之を貯へ、其の出來事に應ずる繪組を貯藏の版木中より選み出して之に當嵌めやうといふのが自分の工夫であつた、一例を擧ぐれば情死門では（一）書生體の男が娘と並んで堤の柳蔭に彳み居る處（二）職人體の男が蒲團の上で娼妓と相對し憂ひに沈んで居る處（三）男女が前に短刀を置き合掌して居る處の類を彫らせて置くのであるが、サァ情死がありましたと探訪者が差出す原稿を見れば、男は坊主女は尼而かも夫れがモルヒネ情死とあつては、仕入れの版木は一つも用を爲さず、偶々無理にも用ひられるのは十分一にも過ぎずして殘りの九割は廢物となつてしまつた。そこで又此の廢物の版木を利用する爲め、今度は其の繪組に合ふやうな續き物、又は遠い地方の事として揑造した話などを紙上に載せて、やつと版木は役に立たせたものゝ、其の挿畫で見ると其一回の若い主人公が二回目には急に老人になつたり、暗夜であるべき處が眞ッ晝間であつたりして、本文と齟齬する點が多く、終に大味噌を付けたのであつたが、今更思へば讀者を欺いた罪は誠に慚愧に堪へないのである。此の版木利用の續き物は僕ひとりでは無く、其頃同社員であつた故齋藤綠雨氏も、之を書いたやうに覺えて居るが、此の時代の苦心から思ひ較べて現時の細目版などに對すれば實に隔世の感がある。

新聞小說の作法

明治十年頃の小新聞主筆には戲作者の出が多かつた。先づ假名讀——後いろは新聞社長——の假名垣魯文翁は「西洋膝栗毛」や「安愚樂鍋」の戲著で名を揚げた人、繪入の高畠藍泉氏は後に二代目——其實三代目——柳亭種彥の號を繼いだ草雙紙の作者、藍泉氏が繪入新聞を退き其後を襲うた染崎延房氏は二代目爲永春水と號した人で、初代春水の「い

ろは文庫」は實は此の染崎氏の筆に成つたのだと傳へられて居る。ひとり讀賣新聞の鈴木田正雄氏のみは畠違ひの英學者で、其前日就社（讀賣の發行所）から出版された英話字典？の編纂に與つた人だと聞いて居た。主筆が多く其道の人であつたゆゑ、新聞に續き物を載せる事が流行り出すや否や、魯文藍泉等の諸氏は率先してお手の物の小説を自家の新聞に掲げ、門人又は社中の軟文學に心得ある記者にも書かせ、或は社外からの寄稿をも歡迎して、後には一新聞に必ず二種の小説を載せる事となつたが、其一つは主筆の作、他の一つは門人株の記者が受持つたもので、是れが則ち小説記者の學力試驗に値するものであつた。

さて其作り方はどうであるかと云へば、先づ一つの腹稿が定まると之を豫め三十囘とか四十囘とかいふ囘數に分ち、その囘數の下に是から書かうとする筋書のヤマ（例へば何囘では誰と誰とが船中での邂逅とか何囘では誰が山中での遭難とか）を覺書に記して置き、此の覺書に從つて前以て四五囘づゝの下繪を付け畵家に送つて挿畵を注文して置くのである。この下繪を付けるといふ仕事もやはり昔の戯作者から傳はつたもので、馬琴種彦等の草雙紙の稿本を見ても、皆作者が自筆で下繪を付けて居るが、これも單に作者の物好といふでは無く、實際其の必要があつたのだ。それは當時の畵家は繪をかく事は上手にしても、何分にも時代の研究といふ事が足らず、甚しいのには草雙紙の挿畵や俳優の舞臺上の着附などを唯一の粉本として筆を把る畵工もあつたので、時代の風俗等にとんでもない誤りが起る事がある。そこで作者はその下繪に先づ時代（天保年間とか慶應年間とか）時節（夏の夜とか冬の朝とか）場所、人物の身分年齡、時によると人物の服裝や背景の注文までを委しく朱書して送らねばならぬ事があつた、此の必要上から魯文・藍泉 … 藍泉氏は玄人の畵家――其他の人々でも大概素人畵はかけたのであつた。

それから愈々筆を下すといふ段取だが、是れも四五囘づゝ書き溜めるといふ事はなく、出來上つた挿畵の版木を机上に置き、その畵面に合ふやうに一囘づゝ其日〳〵に綴つて行くので、内勤記者が之を書く時間は約一時間に限られて居

る。併し最初の腹稿と實際筆を把る場合とは、そこに多少の相違が生じて、本文と挿畫とが併行せぬ事が起る、本文が後れた時は挿畫一個を無駄にすれば濟むものゝ、本文が進み過ぎた時は全く其挿畫が無い事となる。かゝる時の用意として豫め本文に關係なき景色畫などを彫らせて置き、之を挿入して一時を糊塗する事もあり、又は據なく「畫工病氣の爲め本



晉文翁の下繪

日の挿畫を略す」と云ふ斷り書きを出すなどの窮策を施す事もあるが、畫工は病氣どころかピチ〳〵として居るゆゑ、是れは却て作者自らの作病といふのが適當である。僕が三十年前一友人に答へた筆記の控が筐底に殘つて居た故、其の一節を左に掲げる事とする。

　現今の新聞小說受持記者は自宅に在つて其稿

を草し之を郵便に付して本社に送りさへすれば一日の課業は濟む事なれど、其頃（明治十二三年）の續き物受持記者は中々さる優長なる者にはあらで隨分眼の廻るほど忙しきものに候ひき、先づ午前十時出社して受持の續き物一回を草し了れば既に十一時過となり、府下及び地方の重立ちたる新聞に目を通して拔萃すべきものに印を付け寄書通信の類を調べ晝辨當を濟ませし時分（二時頃）そろ〳〵探訪者は歸り來り夫れ〳〵探り得たる種子を筆記して机上に差出すを一々點檢して他の記者に分配し自分も其内の重立ちたるもの四五件を書了れば早や時刻は五時と迫り印刷方より早く出し切にせよと促され漸く筆を止むれば今度は自分の書きたる原稿を校正し大組の順序付を爲し時には大組の終るまで居殘りして家に歸るのは大概夜の九時過と相成候、此間に自分が受持の續き物に入るべき挿畫は下繪をつけて三四回づゝ前に畫工方へ持たせ遣らねばならず、材料の仕込みとして讀書もせねばならず、又出社の前後あちらの開業こちらの祝宴と三日にあけず招かれる事もあり、芝居其他の興行物も一々見物する必要あつて、他より見れば氣樂な稼業と羨まるれど其身になつて見る事は中々骨の折れる職掌に御座候。

今一つ當時の續き物の狙ひ處としたのは、毎回必ず一つのヤマ――芝で云ふ見せ場――が無くてはならぬ事であつた。同じ人物が同じ場所で對話して居る事で三四回も續けるといふが如きは、その談話中に波瀾があるにもせよ、挿畫の目先が變らず讀者の厭飽を來すものとして之を避ける傾きがあつた、要するに一回中に讀者を惹付けるだけの趣向を着け、其話の漸く佳境に入らんとする處で、馬琴の次回に解分くるを聽きねかしの筆法に倣つて、讀者をして次號を樂しましめる事に注意を拂つて居た。而して其の脚色に至つては作者の思ひ〳〵で、幕末志士の傳說、舊華族のお家騷動、孝子節婦の話、兇賊强盜の物語、その他重に維新前後の事を綴つたものが多かつたが、既に大家と呼ばれし主筆の書いたものには自ら定評があるから別として、第二流の小說記者の作つた續き物が其社の呼び物となつて、夫れが爲め發行紙數の增す事にもならば、これが則ち卒業證書を受けたも同樣の手柄で、若し幸ひに其書いた物が脚本となつて舞臺に

演ぜらるゝ事でもあらば、それこそ大々的成功であつて、隨つて記者其人の僥倖といふ結果にもなるのである。

當時の小說記者をさして、一概に戲作者輩だと侮蔑の意を以て評し去る人もある。如何にも戲作者育ちの人が多かつたのには相違なかつたが、新聞記者の職掌として夫れ相應の進んだ意見の持主で、時勢の推移といふ事には最も注意を拂つて居た。故に其書く事は京傳馬琴の趣向の上に出でず、其筆致は種彥春水の模倣に過ぎなかつたかも知れぬが、銘々新しい材料を捕へ新しい思想を以て讀者を善導しやうといふのは一般の傾向で、單に勸善懲惡主義や佛家の因果應報ばかりを作物の目的としたのでは無かつた。けれども小說家に其人が乏しかつたのみでは無く、當時の讀者も亦甚だ幼稚なものであつた。それは維新の騷ぎの爲めにあらゆる藝術は破壞せられて未だ全く復舊せざる時の事とて、人心荒び果てて小說を味ふ程の餘裕もなく、否ろ夫れを玩味する程の素養ある讀者が少なかつたのである。淺薄な滑稽本や鄙猥な人情本、さては殺伐な講談風の小說等が歡迎せられたのが第一の證據で、讀者は之を以て疲れた心を慰める事に滿足し、是れ以上を感受する能力に乏しかつたのかも知れぬ。現に其頃の一例として、小說中の繼兒が繼母に虐待される處を讀んで、あまり可愛さうだから之を遣つて下さいと、若干の惠み金を其社へ持參した人があつたと云ふ、まるで嘘のやうな事實もあつたから、こんな時代に臨んで假令一大文豪が出て汗水を流した處で、それは全く緣の下の力持に終つたかも知れぬ。兎に角當時の小說は讀者の程度に準じたもの、即ち國民文藝思想の反映であつたのではあるまいか。されば當時の記者が戲作者であらうが何であらうが、殆ど絕滅せんとする小說の命脈を繫ぎ止めて、今日あるを致さしめた功績は認めてやるのが至當であるのに、昔の小說に對して戲作呼はりをする人が、今日の新聞に顯はるゝ非文學的な講談の續き物に對しては、何等の批評をした事さへ聞かぬのは不可思議千萬と云はねばならぬ。

之等小說記者の生活狀態、社會に對する勢力、又は其の逸話などを掲げるのも面白からうが、それは個人々々によつて異なる點があるから、その代表者として魯文、藍泉二氏を擧げて自分の知つて居る限りを述べて見やう。

假名垣魯文翁

その傳記は翁の死去當時僕が「假名反故」と題して綴つたのが、春陽堂發行の「列傳體小說史」に轉載されて居るから、玆では簡單に述べて置くが、元花笠魯介（文京）の門人で其魯の字と文の字とを併せ取つて魯文と號し、初めは英（ハナブサ）又は鈍亭と呼んで居たが明治六年假名垣魯文を以て通稱とした、その本姓は僕と同じく野崎で、字は能連（ヨシツラ）、幼名兼吉後に文藏と改めた。文政十二年京橋鈴屋町に生れ嘉永二年に名弘めの摺物を配つて戯作者となつたのである。其後合卷物の草雙紙又は滑稽本數十種を著述したが、明治七年橫濱每日新聞の雜報記者となり、翌年自ら假名讀新聞を橫濱に創刊し數月の後之を東京に移したのであるが、その資本主は東京麴町の畊書磯部屋外二三人で、また題號を假名讀としたのは、其頃既に發行されて居た平假名繪入の假名と讀賣の讀とを併用したのだ。自分が聞文紀（河原氏）の紹介で翁の門に入つたのは明治九年の事で、夫から同十二年頃假名讀新聞に入社して始めて師と共に机を並べ、後十五年にはいろは新聞に入り、十七年には翁と共に今日新聞の創業からその編輯に從事したので、つまり翁と同社したのは前後三囘である。僕の口から亡師の學殖等に就ては發言し得る限りでは無いが、性質は淡々とし門人



魯　文　翁

を薫陶する事などは中々懇切であつた、唯一つ翁の性癖とでもいふべきは餘り感情に走り易く時には前後の見さかひもなく興奮する事であつた、是は翁自身も承知して居たと見えて或時僕に左の通り話された事がある。

余（魯文）は戯號の下に善惡（一は白文は失文）の印を捺し來つたが之は善玉惡玉を合してその性質を表したのである、元來自分は感情に強く怒り易くもあり又悲み易くもある、例へば人が薄命にして落魄するを見る時などは自分が貧苦を嘗め來つたに思ひ較べて力の及ぶ限りは之を救助する事もあるが、若し其人が他日恩誼を忘れて反攻するでもあれば、曩の好意に反して飽まで其人を膺懲せねば止まぬのである、要するに余は愛憎極端に走り易く忽ち善となり忽ち惡となること掌を反すが如し是れ此の印章を用ひる所以である。云々。

此の性質も段々年を取るに從つて減じ、明治廿三年文壇を退いて氣樂に浮世を送るやうになつてからは、全くの好々爺として一層人から慕はるゝやうになつた。又一つ翁の爲に辯じて置きたいのは、假名讀やいろはの紙上に往々個人攻擊の記事あるを見て、一も二もなく魯文翁の筆に成るものとして、翁を呼ぶに惡德記者を以てする人もあつたが、是れも前の性質上から一旦惡しと思ひ込めば其人を紙上で追窮する事はあつたけれども、黑白の爲めに筆を左右する事などは稀であつて、却て其の社中の者に最初から收賄の目的を以て筆を弄する記者があつた爲め、翁がその寃罪を被つた事も少くない、現に門下の一記者が之が爲めに公けの制裁を受け、新聞社會から彈劾された事實もある。

翁は多年戯作に從事して居たものゝ、草雙紙的の續き物は長所ではなく世評も喧しくは無かつたが、「安愚樂鍋」や「胡瓜圖解」の如き滑稽本に至ては當時の第一人者で、殊に新聞記事では短文の雜報に妙を得て讃歎すべきものが多かつた、彼の假名讀の猫々奇聞、いろはの猫洒落誌等が知識階級の間にも愛讀されたのは是れが爲めで、一口に評すれば翁は種彥形の人ではなくて三馬式の人であつた。故齋藤綠雨氏も「日用帳」に左の通り云うて居る。

机にむかひて翁の思ひを凝らしたりと見ゆる時、出で來んは必ず惡文なり。翁は所謂即興に得たる人なりき。長き

物語などに覓めんはたゞ達者といふに過ぎざりしも、十行廿行許りなる短き雜報中には、實に企及す可からざる妙ありたり。殆ど一萬に達したりといふなる引札と共に、もと新聞紙の事なれば裂けて破れて、遷行く世の風に散り〴〵誰の手にも遺らぬは惜しからずや。

翁の嗜好としては取立てゝ云ふ程のものがないが、酒は深く嗜まず甘い物も食はず唯食道樂として濃厚な鰻、天麩羅、もゝんぢい屋の猪肉等が最も好物であつた。觀るものでは芝居、聽くものでは常磐津清元等の淨瑠璃で、若い時には自身でも哥澤に凝つた事もあつたと聞いて居る。芝居の事は最も明るく殊に河竹默阿彌翁とは舊友の關係上互に作物の上で援助し合つた事もあり自分でも二三の脚本をも作つた位で當時に於ける劇通の一人であつた。藏書も一時は澤山あつたが讀書に耽つて居る事も少なく、晩年には自ら玩佛居士と號して古佛像や佛具を蒐集して樂んで居たが、之が爲めに骨董類に對する鑑識にも段々長ずるやうになつた。餘技としては俳句が第一で、之は初めは凉窓露蔺に就て敎へを受け、又香以山人に學んだ事もあり、後には老鼠堂永機と交はり餘程永機かぶれのした句を詠む事もあつた。狂歌は三世千種庵諸持の門に入つて斜月窓諸兄と稱して居たが、諸持の主唱して居た文政調よりは可笑し味ある卽興的のものに長じて居た、又端唄の新作や都々逸なども作り、晩年には都々逸の選者となり其の選料を小遣取にして居た事もあつた。

日常の生活ぶりを說くには先づ月々の收入高から調べて掛らねばならぬから、僕の覺えて居る限りを記す事とするが、最初翁が假名讀新聞に入つた時の月俸が四拾圓、明治十三年いろはへ轉じた時が五拾圓、同十七年に今日新聞に入つた時が一躍して七拾五圓を取つて居た。こんな月收は其の金高から云へば今の腰辨にも劣つて居るが、明治十年頃の四拾圓は中流の生活費としては裕かなもので、其他に序跋や引札の文を賴まれるとか、他人の著作物を校閲するとか、又は自身で內職的の著述をする事もあるから、之等の潤筆料を合算すれば平均して月俸の倍額にはなつたのである。明

治六年に福地櫻痴居士が東京日日の社長になつた時、その俸給が百圓だと聞いて驚異の眼を光らせた人もあつたのだから、當時の物價に準じて相應の報酬であつたと云はねばならぬ。第二流小說家の俸給や畫家の畫料等は後に書く事とするが、兎も角是れだけの收入があれば、生活費から交際費には不足がなく、平常口にする飲食物もどちらかと云へば奢つた方であつた。そこで何か臨時に金が欲しい事があれば書畫會を催して懷を煖めるのが此の仲間の慣用手段で、僕が聞いた丈けでも魯文翁が書畫會風の會合を催したのは前後七八囘、其中で慶應年間山々亭有人(條野採菊)氏と組んで、淺草寺境内に在る山東京傳の机塚修理を名として催した一會のみは散々の不評判で、その頃の惡摺でも攻撃せられて金錢上の損失も免かれなかつたが、其他は大概收入を餘し得たとの事である。就中僕の知つて居る處では明治十一年七月、翁が兩國中村樓で珍猫百覽會といふのを催した時には、來會者實に二千人に垂んとし、收納金も千五百圓に及び、これから餘し得た金で新富町の新富座の南手に佛骨庵といふ草庵を新築した事もあつた。此の書畫會といふものは維新前までは――維新後も折々――文人社會で行はれたものであるが、それを知らぬ現時の人々の爲めに云へば斯うである。先づ會主は會日會場、それに補助とか後見とかして書畫大家の名――其實皆が當日出席して揮毫する事は稀であるが――を列記した摺物を製し之に自筆の扇面などを添へ、自身又は門人等と手分けをして知己の人々に配り當日の來會を請ふのである、而して之を受けた人にして出席し得ざる者でも、返禮として金壹分(廿五錢)を出すのが通例で、當日來會する人は貳分(五拾錢)以上の目錄を持參して會主に贈る事となつて居た、そこで貳分以下の客には會主から單に辨當を出す丈けだが、貳分以上の上客には別に膳札を配りこれと引換へに刺身汲物に酒一本を添へたものを呈するのであつた。また之に列席して席上揮毫をする書家畫家も、會主との交際上多くは義務的に筆を採るものゆゑ、割合に入費はかゝらず、つまり名を弘めると共に懷を肥やすといふ一擧兩得の策だから、これが流行したのも自然の勢ひで、當時の扇面亭や扇州亭は書畫會の周旋が殆ど本業となつて居たのである。まして翁は扇子を配つたでもなく、戸別訪問を

したのでもなく、自家の假名讀や魯文珍報の紙上で吹聽した迄に過ぎずして此の盛會を見るに至つたのは、全く新聞廣告の利き目であるが、又一つには魯文といふのはどんな人物か之に接近したいものだといふ好奇心から、遠い地方より遙々上京した人も尠く無かつた。

新聞紙の社會に對する勢力……無論夫れは今ほど强大なものでは無かつたにもしろ、相當の信用は受けて居たから、隨つてその記者も亦敬意を以て遇せられて居た。尤も一部の人からはナニ新聞屋がと輕侮の意を以て冷遇されたのもあつたが、それは少數の小新聞記者中に只文章が書けるといふだけで、其の素養其の人格に乏しい人があつた爲めで、決して一體がさうであつたのでは無い。魯文翁の如きは貴顯數氏からも愛せられ學者文人とも交遊して、自然と其の感化を受け、交際場裡に中以上の位置を占めて居たが、特に花柳社會に對する勢力？ は偉大なもので、新柳二橋の間で其名を言はずして單に先生だけで通つて居たのは、柳北魯文二氏に限られて居たのであつた。

翁は晩年身を遊戲文學に委ね、所謂隱居仕事として戯文を綴りて雜誌に投じ、又は引札の作文などを引受けて居たが、其頃いろは連といふのを組織して自ら連長となり一ト旗揚げんと試みた事もあつた。それは其の連中をいよりすまで四十七人を拵へ銘々得意の文筆を以て世の中へ討つて出でんといふ目論見で、連中は淸垣平文（淸水氏）、綾垣羅文（瀧澤氏）、梅垣佳文（小暮氏後竹柴金作）、神垣茂文（内田氏）、柴垣其文（竹芝瓢藏）、あら垣痴文（落語家柳亭燕枝）、彌陀垣阿文（木崎氏後德釋迦六）、歌垣和文（三世安藤廣重）、友垣以文（佐藤氏）、袖垣右文（村松氏）、霧垣夢文（和田氏）、茨垣萎文（渡邊氏）、藥垣苧文（金亭おろか）、菊垣飛文（高井氏）、山垣彌文（山本氏）、升垣斗文（青木氏）、花垣都文（山田氏）、嫁垣鼠文（川上氏）、億垣京文（佐々木氏）、其他で三十人までは出來て居た。僕も曾て蟹垣左文と名乘つて居たから連中に引入れられるのであつたかも知れぬが、其時は大阪に居て終に此の仲間には加はらなかつた。

明治廿七年十月八日……是れが翁の死去した日で享年六十六、谷中三崎町の永久寺に葬つた。曾て假名讀やいろはに

編輯長として署名して居た長男熊太郎（僕と同年同月の生れ）は父に先だつて小笠原島に客死し未亡人も五年前に歿し、今は孫の文造と其妹とが遺つて居る。數年前二世魯文の號を繼ぎたいといふ希望者があつた時、僕は遺族と相談して門標、印章、遺稿等を讓る事にしたが、繼號が沙汰止みとなつた爲め其の品々は猶自分の手に預かつて居る。

柳亭種彥氏

姓高畠氏種彥を以て通稱とす、金座役人辻某の庶子で、幕府の坊主衆の株を買うて一家を興した人、天保九年淺草七軒町組屋敷に生れたと云ひ、藍泉とは高橋波藍に就て畫を學んだ時の號であるとの事だ。僕は唯面識あるばかりで深く同氏の事を知らぬから、どう云ふ學歷があり又どうした動機で操觚者となられたかは全く不明であるが、若い時から稗史小說を好み殊に初代種彥には餘程私淑した處があつたと見えて、田舍源氏は素より本もの丶源氏物語は耽讀したやうに聞いて居る。又初代種彥の考證癖に倣うて、昔の事を詮索研究する事が好きで、風俗の變遷などは能く調べて居り、殊に元祿時代の事には精通して自ら元祿居士など丶稱へて居た事もある。初めの戲號は轉々堂で、維新後此號を以て著述した二三の草雙紙體のものもあるが、繪入新聞社に入つて主筆記者となつたのは明治八年ごろ、則ち魯文翁が假名讀を創刊した一年前の事だと記憶する。其頃の一佳話として傳へられて居るのは、後には小說、考古及び鑑定の大家と呼ばれた前田健次郎氏（夏繁又鶯園と號す）が落魄して橫濱にさすらひ、わづか許りの書畫骨董を鬻いで糊口の扶けとして居た頃、藍泉氏は豫て懇意な中で無かつたにも拘はらず、國學者夏蔭といふ名門の嗣子がかく迄不遇に陷つて居るかといふ事を聞傳へて、一の義俠心からわざ〳〵橫濱に赴いてやつと其居を搜し當て、夏繁氏を救うて繪入新聞の校正係に据ゑたのだが、驚く勿れ其時の俸給が八圓であつたと云ふ。そして夏繁氏が橫濱に居た頃は良心には疚しいながらも、少々怪しいと思ふ古書類をも商賣上據なく客に賣付けた事もあつたが、數年の後身を立て家を齋ふるに及んで、賣先のわかつて

居た處より價を償うて古書畫類を取戻し、悉く破り棄てたといふ事で、是れは人格者たる同氏としてはさもあるべき筈であると共に、又まことに賞讃すべき美談である。

藍泉氏が柳亭種彦の號を襲うたのは明治十五年一月で、披露會を日本橋吳服町の待合――待合といつても今の怪しげなる待合ではなく、書畫詩歌の會又は町内の寄合などに席を貸す業――柳屋で開いたのである。其時同氏は京橋鎗屋町の二等煉瓦家屋に住ひ、西紺屋町の拙宅と接近して居たので、折々訪問もし又續號のチラシを頼まれて自分の知己に配つた事もある。それから幾程もなく大阪の大東日報へ今の社會部長格で招聘せられて同地へ行かれたが、此時の俸給が八拾圓であつたさうである（其前讀賣新聞にも筆を把つて居られたやうだ）。一年餘の在阪で歸京した後は淺草の千束村に閑居して、やはり著述に從事して居たが、其頃に面白い一話がある。それは門人の右田寅彦、片山友彦、此花新二の三人が吉原に遊びに行きたくなつたが、揃つて懷中が淋しいので先づ師の門を敲きその顏色を見ていくらか借用しやうといふ算段で、夕暮千束の種彦氏を訪れたものゝ、さすがに夫れと言出し兼て三人が口をモグ〳〵させて居るのを見て、敵も去る者早くも察して、ドウダ吉原へ行きたいが金が足らぬといふ筋ではないか、併しおれも今持合せが無いから行きたくば手紙を附けて遣らうと、サラ〳〵と書いたのが仲之町の引手茶屋近江屋のお蓼への紹介狀で、其の文句は「この若い者三人あまり金を遣はぬやうに一晩遊ばせてやつて下さい勘定は私が引受けます」との意味であつた。三人は大に喜び此の手紙を約束手形代りにして一夜の愉快を買ひ、翌朝また揃つて師を訪問し、昨晩は有難う御座いましたお蓼さまで……と禮を述べて引取つたといふ事である。若し此話を道德家にでも聽かしむれば、師の身分として門生の遊蕩の幇助をするなどは以ての外だと、額に青筋を立てるであらうが其處にいひ知れぬ情味が籠つて居る。元來其頃の作家の仲間では餘程師弟の關係が親密で、弟子は師の爲めに動き、師は弟子の爲めに勞する事が多く、その弟子が浪 すれば、直ちに就職口を捜したり、出來る限りの援助を加へたりして、世話をして吳れるから、弟子も亦師の家庭にまで立

入つて手傳ふ事もある位で、今の官廳や會社の親分が、名を整理に藉りてドン／＼子分を誡るとは餘程趣が違つて居る。此の一事なども全く師弟の情誼から出た譯で、よしや事柄は讃めた事でないにもせよ、頗る面白く感じられる儘を記したのである。又此話を聞出した緒は、種彥氏からお琴に宛てた賴みの手紙がゆくりなく僕の手に入つたので、之を或時寅彥氏に示すとイヤ夫れは我等三人の事であつた、イデ後日の爲め恥を忍んで其の事實を證明して置かうとて、同氏が朱筆で書入れをしたものが僕の貼込帳に殘つて居たのを、數年前その貼込帳は賣却したが、今その天秘を漏らした處で亡友の名譽を毀損する程の事もあるまいと思つて、公衆の前へ持出したのである。

種彥氏は瘦ぎすな苦味走つた風丰、性質は稍や神經質の勝つた人で、其の言語から擧動まで何處にかお坊主風が殘つて居た。死去されたは明治十八年十一月十八日で、享年四十八、淺草松葉町正定寺に葬つた。實子が無くて瓶三郎（名人忌辰錄には種彥氏の通稱瓶三郎とあり去ればそれは前名でありしを養子に其名を讓ると共に自分は種彥と改めしもの歟）といふ姉の子を養子として居られたが此人も中年で遠逝し、親戚の金子家から金三といふ人をまた養子とした事もあつたが、今は其の遺族の居處等も、僕には詳かにする事が出來ぬ。

假名垣派と柳亭派

新聞小說家の先輩としては先づ指を魯文種彥の二氏に折らねばならぬ、隨つて其の門下生から成立つた小說記者が多く——二氏に關係のない一本立の人々も數名あつたが——自然その仲間が假名垣派と柳亭派との二つに分るゝ傾きがあつた。假名垣の門人としては二世花笠文京（渡邊義方）、彩霞園柳香（雜賀後廣岡豐太郎）、胡蝶園わかな（若菜貞爾）、蘭省亭花時（三浦義方）、二世一筆庵可候（富田一郎）——僕も其の一人——等で、門人ではなかつたが此派に屬する人には岡丈紀（河原英吉）、伊東橋塘（專三）、久保田彥作、淸水米洲（市次郎）等の諸氏。また柳亭の門人には倉田藍江（高畠

氏と同じお坊主仲間通稱を逸す）、柳條亭華彥（三品長三郎）、柳葉亭繁彥（中村邦彥）、柳塢亭寅彥（右田寅彥）、柳屋亭友彥（片山友三郎）、此花新二（田村某）、二世柳下亭種員（通稱不明）等があつた。

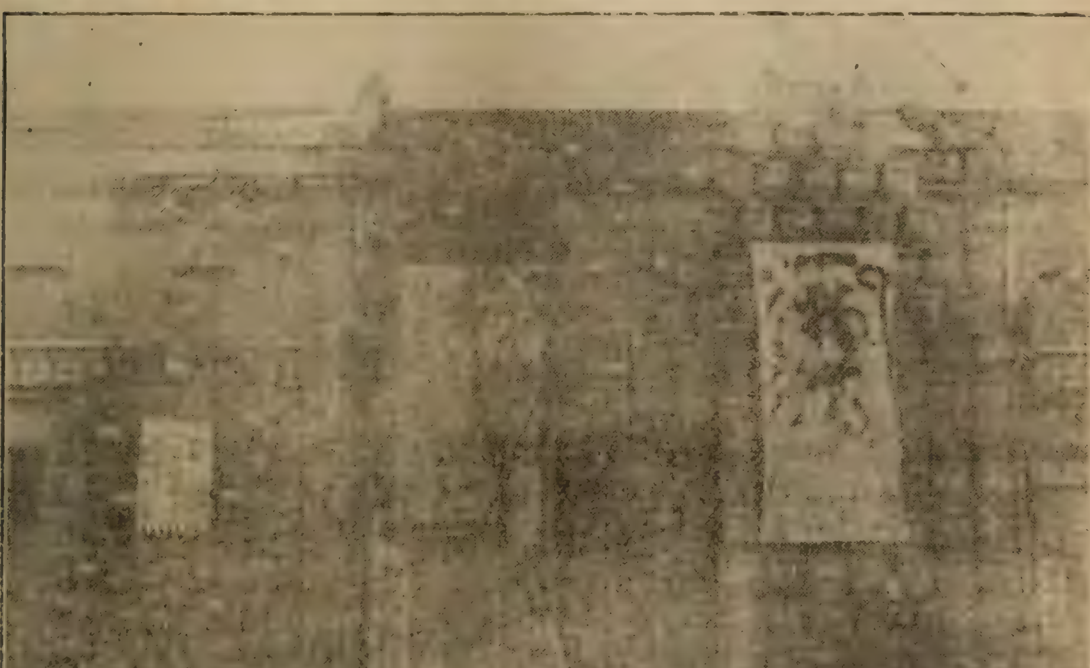
魯文種彥以外既に一家を爲して居た小說家には山々亭有人（條野傳平）、二世爲永春水（染崎延房）、萬亭應賀（服部幸三郎）、梅亭金峨（瓜生政和）、二世笠亭仙果（篠田久次郎）、爲永春江（知久泥堂）、山閑人交來（武田某）、對梅宇乙彥（森悟一郎後荻原氏）等があつた。又松村操氏も「春雨文庫」や其他の讀本を著して居たが、新聞小說を書いたのは有人、春水、春江の三氏に過ぎなかつた。別に元報知新聞の記者たりし芳川春濤（俊雄）氏がさきがけ新聞？の主筆となつて岡本起泉とかいふ人と共に新聞小說も書き草雙紙風の單行本も著して居た事がある。其他有喜世新聞の南翠外史（土屋郁之助後須藤光暉）、繪入新聞の古川魁蕾子（精一）、讀賣新聞の加藤紫芳（瓢乎）、今の渡邊霞亭（勝）四氏も亦見のがしてはならぬ小說記者の花形であつた。

そこで僕等を標準とする其頃の小說記者が、新聞社から受ける俸給がどの位であつたかといふに、概して拾二三圓から最高二拾五圓までの間であつた。自分が始めて假名讀に入つた時の給料が拾五圓……是れが格外の高給だとあつて社中の人々から苦情が出て師翁も之には困つたさうだが、其頃僕は工部八等技手（月俸二拾圓）で工作局に勤めて居たのを、其職を辭して入社したのであるから、師翁も技倆の點は兎も角前給に對しても是れだけはやらねば氣の毒だと辯解して、やつと他の社員を宥めたと云ふ事である。丁年に達したか達せぬかの一青年而かも文筆には何等の經驗なき者が此の高給？を貪つた事を思へば今更面目なく、是れにつけても師翁の好意を謝さねばならぬ、尤もその時分はまだ紙上へ續き物は載せて居なかつたが、二三年後小說が流行し出した時之を書く内勤記者の給料が先づ二拾圓見當であつた。今から思へば夫れでよく命が繋がれたものだと怪しまれる程であるが、當時は米が壹圓に一斗三四升といふ時代である、借家でも三四圓出せば可なり立派な家が借りられるし、下宿生活で月五圓といふのは奢り過ぎる程の賄料であつ

た。殊に月給以外師匠の代作とか、地方新聞から續き物を賴まれるとか、又は一旦紙上へ出た自分の小説を二度の勤として書肆へ賣付けるとか（此事は猶後に云ふ）相應の臨時收入があるから、小家族ならば優に一家の生計を支へる事が出來たのだ。

話は前後するやうだが、茲で當時の小新聞社編輯局の有様を述べて見やう。假名讀新聞社は京橋出雲町の東側に在つて、間口が二間半奥行五六間、階下左方の一室が庶務會計廣告掛の詰所――人員僅かに四名――其の右方の入口に土間があつて土間から直ちに二階に通ずる階段があつた。階下の奥もすべて土間で茲が印刷工場に充てられて居た。階上の西側即ち道路に面した方に十疊許りの疊敷の一室があつて茲が編輯局、其奥の板敷の處が植字場であつた。植字場と云へどケースが二列ばかり並んで居る丈けで頗る簡單であつたが、是れは活字が今の如く多種類あるではなく、殆ど五號、ルビ、二號の三種に限られて居て、又新聞一枚の字數も一萬字には足りなかつたゆゑ、多數の活字を貯へて置く必要が無かつた爲である、併し毎日多少文字の足りない分があるから是れは大組前に築地の活版所へ小僧を走らせて補充するのが例であつた。編輯局には粗末な机が四五脚、火鉢、煙草盆類、本箱は一個だけで、その參考書と云へば官員錄と吉原細見、市内商家の名前付や郡町村明鑑等に止まり、字彙類では字音假名遣、幼學新書、雜字類篇ぐらゐなもので、後日魯文翁藏書の圓機活法が擔ぎ込まれた時稍や心強く感じた程である。室の入口に接した板間の片隅に大火鉢と藥罐、土瓶、茶碗類があつて茲が湯呑所に宛てられ、辨當殼、蕎麥屋の蒸籠丼等が竹皮や紙屑と共に其傍に散亂して居る。編輯員は主筆魯文の外記者が二三人多いが四人、校正掛一人、外に探訪者が五六人だが、此の探訪者には詰所がなく編輯局の一隅や又は板間で立ちながら筆を取る者もあつた。又記者の四五人といふのは紙面の狹い割合には多いと思ふ人もあらうが、此の記者先生に中々精勤者が少く日曜日以外一ケ月に五日も十日も休む人がある、夫れも豫め屆て出すのでもなくスツポカシが多いゆゑ大に番狂はせを來す事が多く、又折角出社しても芝居見物とか開業式へ招かれたと

か云つて、宜しく頼むの一言を殘してサ　サと外出する人もある、そこで運の惡い廻り合せになると全紙面を殆ど一人で受持つといふ場合も尠くない。前に述べた如き間取りで固より應接所の設けもないから、外來者則ち社友、投書家は勿論魯文翁の懇意な文筆家、美術家、藝人、職人、さては興行師、料理屋待合のお神までが編輯室内へ押掛け來り、中には鮓、餅菓子などを持參して大聲で笑ひながら長談をする人もある。翁は少しも之を厭ふ氣色もなく其の談話の受け答へをし



假名讀新聞社前の積物

ながら、眼は原稿紙の上に注がれ筆持つ手は機械的に動いて居るが、僕等には夫れが耳障りとなつて迷惑に感じた事も少くなかつた。或日女將が編輯局へ來て祝儀袋へ入れた小金を差出し、これを源さんにあげて何か食(たべ)させて下さいといふので、社員中に源といふ人は無いと答ふれば、ソレでもあの源さんが一番忙しさうだからとの一言、何の事かとよく〳〵考へればそれは吾々が原稿を書き了ると、原稿々々と高く呼ぶのを給仕が聽いて駈

來りその原稿を植字場へ持つて行くのだが、是れを原公々々と其人の名を呼ぶのだと聞違へて丁寧に源さんと云つたのが誤りの元だと解つて大笑ひをした事もある。(寫眞說明、前に掲げた寫眞は假名垣新聞社が出雲町へ轉社の時諸方から贈られた酒樽炭俵の類を社前へ積上げた處である、新聞社が料理屋の開業同樣縮ビラを貼出し贈り物を積上げて景氣をつける抔は今から思へば異觀であつた。)

假名垣派柳亭派と分れたと云つても、それは唯門流の違ひで區別された迄で、兩派が互に睨み合うて軋轢を生じたやうな事はなく、個人同士では親しい交際が結ばれて居た。又これは流派の爭ひではないが、此の記者連の間に暗々裡に行はれたのは文章上の競爭であつた。例へば出處を一にする材料――各社の探訪者が一の警視廳から聞出して之を各自の本社へ報ずるもの丶類――則ち今の通信社から來るやうな種子には元が同一だから、之を紙上に掲げるには各社同文に陷るのを避ける爲め、其文の潤色には私かに骨を折つたもので、翌朝の各新聞に出た其の記事を見て、甲社のは誰の筆、乙社のは誰の書いたのだと想像して之を批評する事もあつて、つまり一般讀者に見せやうとするよりは、少數の同業者に見て貰はんが爲めに筆を取るやうな風であつた。その小說に至つても亦今の樣に公然批評家の口にかゝる事は無かつたにもせよ、懇意同士の間柄では評し合つたやうな事實もあつた。

その小說は既に言つた通り多くは草雙紙體の七五調で、外題も五字題七字題が通例で、始めは多く無名であつたのが後には誰の閱、誰の作など丶二名づゝ並べたのもあつた。そして明治十三四年頃から一旦新聞に出た小說を再び單行本にして賣出す事が流行し、盛んに之を發行した書肆は辻文、辻龜、鶴聲堂、滑稽堂及び今の春陽堂前主人が櫻田本鄕町に居た頃の事であつた。それは小說が完結すると其の作者は一旦用ひた挿畫の古版木を社から貰ひ受け、その版木と共に新聞切拔きの原稿を賣るのであつて、書肆は之へ色刷の表紙と木版の序文を添へ、本文はすべて活版にかの古版木の繪を挿入して賣出すといふ順序であつた。それで其の原稿料が古版木と共に三十回ぐらゐのもので拾二三圓、長いもの

でも二拾圓は出さなかつたが、篠人自由の渡邊文京氏の如きは新聞へ續き物を書き出す始めから、版木ぐるみ書肆へ賣る目的で、その挿畵の寸法をキチンと四六版に嵌るやうに書かせると云ふ利口な手段を取つた事もあつた。又地方新聞の續き物を引受けるのも內職の一つで、其の潤筆料は一回が三拾錢から五拾錢、それに地方には畵工もなく彫刻師にも乏しいから挿畵は社の畵家に描かせ之を彫刻した版木も添へて送るのが例で、その畵料が作者の潤筆料と略ほ同樣の三拾錢乃至五拾錢、彫刻料が一個六拾錢であつた。

是れも新聞小說家であつた前記の岡丈紀氏といふ人は、吾々の先輩でありながら餘り世間の評判にも上らず、今では其名さへ忘れられた程だから茲に一寸とお話しするが、氏は通稱河原英吉（前性川西氏）初號を琴亭文彦と呼び、晩年三世風來山人の號を繼いだ人で、曾て二三の讀本を著はし又魯文翁と合著の戲作（何々覗機關（のぞきからくり）と題したものと覺えて居る）もあつた。氏は深くは無いが英學も出來、その英學が役に立つて鐵道寮外國人附の技手となり、專ら製圖に從事して居て、其の別號を岡丈紀と云つたのも陸蒸氣の音を藉りたのである。僕も曾て子供の時代に鐵道の製圖手であつた關係上、同氏と懇意になり終に氏の口入れで假名垣に入門した譯だが、此人後には假名讀やいろはの客員格として續き物を書いて居たものゝ、頗る附の入念者で、一行書いては字引に向ひ二行書いては參考書を繰出すといふ風に、筆の運びが遲々として進まず、一回を書き了るのに一日を費す事は珍らしく無かつた。綠雨氏の「日用帳」にも

三世風來の名を襲ぎたるまゝ末冴えずして歿したる河原英吉氏は、所謂神經質も此人ほどのは罕なるべし、朝草したる新聞紙の原稿を、晝に夕に三四度改竄し、已に摺上れるにも拘はらず猶訂正すべき箇所ありとて、ならぬ相談を職工に持込む事每々なりしが、或時己が前に一の稿本を差出し、これより用ありて橫濱に赴かん間、一閱し置かれたしとあるに、兎も角もと預りて未だ二時間を經ざるに、忽ち車にて馳戾りしを忘れ物かときけば、大忘れ〳〵、先刻の原稿に言扁を書いたは、やつぱり人偏の誤りと例の次第なれ、汽車はと重ねてきけば乘りは乘つたが、氣が附い

たから引還して來た。されば其稿本の如きも、一人一閲十餘人の手を廻りて、十餘閲の果は皺くちやに歸し了りたり。

と書いた通りに、その續き物も完結を告げたのは稀で、あとは君宜しく願ふと代作を命ぜらるゝ事もあつた。風來の號を繼いだ以後は一箇の著作者として世を送る意氣込で、日本橋の木原店に一家を稱へ、紙鳶堂に因んで入口に鳶凧を額として掲げ、硯を洗つて待つて居たものゝ、著述の依頼者も少く偶々あつても例の通り草稿一枚に二三日かゝると云ふ始末ゆゑ、生計のたしにはならずして長らく貧苦と闘ひ、わづか「梅廼春通解」一冊を著したのみで、後には下谷車坂に移轉し明治廿三年頃に同處で歿した。著作の上では右の通り成功者ではなかつたが、其行ひには戲作者氣質の面白い處があつて、逸話にも富んで居たが長くなるから省いて置く。

新聞小説以外單行本として草雙紙體の新作ものが續々刊行されたのも亦此頃の事であつた。その體裁は草雙紙の假名文を漢字まじりの木版又は活版に代へたもので一枚毎にさし繪あり、口繪と表紙とは色刷、これを上中下三冊の袋入とし五編八編と續いて出版されたのもあつ[illegible]、久保田彥作氏の「鳥追阿松海上新話」、芳川春濤氏の「夜嵐阿衣花仇夢」、魯文翁の「高橋阿傳夜叉譚」、種彥氏の「岡山紀聞筆命毛」、等も皆この體裁であつた。

投書家の勢援

小新聞の創まつた頃今一つ忘れてはならぬのは投書家の勢援である。これは多少文章詩歌に心得ある者が散文體のもの、隨筆體のもの、下つては端唄都々逸の類を作つて其社へ寄稿すると及第したものが寄書欄内へ掲載される、そして段々此の投書で名を賣つた人は各社から優遇せられどうか我社へも御寄稿をと頼まれるやうになり、その新聞も亦この投書を以て讀者を歡ばせる呼び物の一つに數へて居た、僕の交はつた此の投書家連の名を思ひ出す儘に記して見れば

中坂まとき(中川貞節)、高島屋塘雨(野田千秋)、南新二(谷村要助)、爲永春江(知久泥堂)、前島和橋(九世川柳)、廣島風也坊(七世川柳)、山田穎生(孝之助別號風外)、幸堂得知(鈴木利平)、假名井安奈(神田材木屋の隱居名を忘る)、三世琴通舍(杉山孝次郎)、秋琴亭緒依(津久井吉左衛門)、會田皆眞(瀧次郎)、浮川福平(失名)、鍬廼屋一農(中村一能)、會津屋杏村(黑部利兵衛)、仲之町小せん(吉原の藝妓)、花川戸岩床(理髪店主人)。

等で——僕も初めはこの投書家の一人——後にこの投書家から新聞記者となつた人に塘雨、新二、春江、和橋、得知、風外等の諸氏がある。自分が明治十一年に之等の諸氏を歴訪し蟹に關する作文を請ひ、それを蒐めて「蟹文集」(魯文翁序)と題して出版したものがたつた一冊手許に殘つて居るから、其中の一章を拔萃して當時の文體の一斑を知らしめる事とする。

○　南　新　二

或る人の歌に「世の中は上に眼がつく横に行く蘆間の蟹のあはれはかなき」此蟲や人の眼より見れば横に行くやうなれども足のつがひ横さまに附たれば蟹の心より考ふれば竪に行くと同じ事なるべし若し向ふさまに步む時は足と足とからみ合ひて恰も千手觀音が藤八を打給ふ如くならん物各々其性を天より稟け得たるなれば性騷がしき人は縫箔屋とすべからず力弱き者は米搗にすべからず其天授を克く守り身を全うするの工夫を爲す可し是則ち身の程を知るなり忘れても錨を鑵こし便器(しびん)を飯櫃とする事なかれチヤ蟹はそつち退けで理屈が横の方へ往つて仕舞つた

此の新二氏は俳號を布川と云ひ元は高島氏と同じく幕府のお坊主衆で、茶の湯の事に精通し俳道にも遊び、殊に滑稽文に長じ黄表紙風の作には名著もあつて、狂文の狙ひ處は手柄岡持の筆致であつたらしく思はれる。戯號を南新二と呼んだのは南新堀二丁目に住つて居た故で其他一時の變名で投書された事もあるが、後にはやまと新聞記者となり輕妙の筆を振はれて居た事は猶記憶に新なるものがあらう。

さて之等の人々は紙上の交際が始まりで、後には互に往來して懇意になり、三々五々相集まつて所謂以文會友が催された事もあり——築地の某處で八犬傳の研究會が開かれたのもその頃の事——又新聞社でも年一二度の祝宴には必ず重立つた投書家を招待したものだ。自分が十二年の夏山田風外氏と共に發起人となつて、木挽町の貞陽亭（後の萬安）に投書家親睦會（會費三十錢にて茶菓辨當を呈し入浴御隨意）を開いた時には來會者六十餘名、席上書畫揮毫や課題の即吟などもあつたが、此時從兄の故馬場辰猪氏は今の金子堅太郎子同伴で出席し、辰猪氏は英佛小説の沿革やノヴエルとローマンスとの類別等に就て演説をして呉れた事もある。又同十四年以後伊東橋塘氏が朋友皆懇會といふのを三四回催し之も毎回盛會であつた。要するに當時は投書家連といふ一つの團體が出來たやうなもので、之が小新聞の後援ともなり又各自文章の鍛錬にも心掛けて居た。併し其の研究は專ら軟文方面に屬し、硬い方では明月團欒として梢に懸りだの、美人を形容するに黄絹たる幼婦などゝやつて退ける人もあつたが、こんな誤りは餘り深くは咎められず、其代り若し御簾内の加藤節だの、吉原のかど町だのと書く人でもあらば夫れこそ仲間の物笑ひとなり、投書家たる資格にも疵の附く程であつた。



風雅新聞寄章の諸彦

茲に掲げた寫眞は明治十三四年の頃、友人山田風外氏が開新社から發行して居た風雅新聞の寄書家諸氏の小影で、昔の俤を偲ぶまでに出したのであるが、この廿一名中今生殘つて居るのは在岐阜の一農氏と僕との二人のみである。又この寫眞の出た頃僕が社友諸氏の花柳界に於ける祕密を發いて其の人々を騷がせた拙作の狂詩一篇がある、罪なやうだが詩中雅號の下へ新たに通稱を書加へて左に再錄する事とした。

逆歩猫敵道人瑤韻。試素齒拔于開新社友諸先生　　愛蟹子

回顧去今七年昔。宴會始與籟君（山田風外）識。其後交際段々深。道樂傳授自君得。座上藝事最所
長。常演茶番浮酒席。樣盆兄貴（毛綱梅痴）亦色男。鼻高肌白仕打黑。踊善雨夜拳善柳。自稱新橋
一通客。六々童子（山田鐵面）粹又粹。歌吹海中多經歷。近頃私愛鈴與辰。只擇藝妓樓不擇。玩球
中島（中洲）瀟洒美少年。妓有言寄固不諾。借問君色居那邊。想非橋南必在北。蝶生（三木愛花）恐是眞猫
筋。未見娛愉快實迹。留光凡痴（志筑留光）極洒落。常令雛妓涎爲滴。頃有姉妹戀着君。好男畢竟
多艷德。招妍陰史（失名）亦通人。評判先生買娼僻。堪羨馴染處々在。芳原品川隔夜泊。恕堂子
（大澤綠陰）似末廣家。妓輩見顏心藉懌。端唄長唄共所善。一絃琴調無匹敵。淡君（太田淡洲）此頃愛阿松。
招而不來只沈默。苗子（早苗直方）踊越後獅子。逆立曲藝上手極。湘兄（三角湘江）舞阿葛籠馬。扇遣振事法
則適。聞櫻陰子（中川眞齋）物堅質。視世女子爲讐敵。待合船宿固所厭。妓樓之遊亦擯斥。有時巧
踊棚達磨。看者叩手笑啞々。塘雨兄（野出千秋）極口前旨。一言忽醫別嬪癖。殊感先生老益盛。陪筵
吾豈肩身窄。名代蕩客（田島任天）田象寺。北廓馴染悉上壁。下谷鑼猫有趣否。湯島當込或撞着。和
尚元來同樂人。忽擒忽縱心頗易。權兵之踊人抱腹。新內之節妓飛魄。竹天子（總生寛）常雖眞面。
醉出匿藝獨自樂。此人亦是北廓通。屢遊小店別有譯。呼爲豪傑固當然。家不闕二三權的。

人知魯翁猫々道人素色師。情海戴筆到處泊。湖月近邊繁々通。可察細君閨房寂。擊猫誅鯰是得意。一篇文有千金直。渫上仙史成島柳北粹中王。世間通人皆下顏。近爲養生絕和漢。先生一體口贅澤。新柳名妓悉知己。年中所費玉幾百。器用儲金器用遣。花柳之遊年功積。想有折花偸香罪。請君白狀勿敢匿。南橋散史石井太紀飲中仙。曾以振事被人識。此翁藤八至極珍。一拳勝得後忽息。演一谷陣屋段時。一人兼勤三人職。熊谷怒肩張上聲。藤方泣出相撲寒。開新社友皆黑人。見來藝道誠面白。文章詩歌固手物。助社主勤一廉役。勿道諸君醉狂人。禮讓又不案品格。此社評判追々盛。世間無敢言難癖。無猫無鯰皆喝采。新紙賣方增千百。

之に對して柳北先生からも一矢酬いるの狂作を寄せられた事もあつたが、今此の棚卸しを再びするを見て地下で苦笑する人々も多いかも知れぬ。

筆の序に記すが、この山田風外氏も亦文筆道樂の一人で、小新聞の經營に對しても功勞者であつた。氏は通稱を孝之助といひ日本橋通三丁目の毛織物問屋松葉屋の次男でありながら、商家に育つたに似ず學問が好きで和漢の書に通じ狂詩狂歌などは最も得意であつた。銀座二丁目に松葉屋の支店を設け玆で私財を抛つて風雅新聞、風鳴新誌等を發行した事もあり、明治十五六年頃繪入朝野と題する半紙摺の新聞を創刊したのも此人であつた。――日刊新聞を半紙摺にしたのは十三年の有喜世新聞に始まり社長寺家村逸雅氏の創意であつた、それは其頃半紙形四倍大の紙が始めて製せられたのを用ひ、半紙の五枚を一部とし一々小口を截ち糊付けにして配るのだから手數の掛ること夥だしい、そして一ケ月纏まれば讀者の爲めに無代で表紙をつけ一冊に製本してやるといふので、それで一ケ月の定價が三十錢[illegible]あつた――後にこの繪入朝野は柳北先生の盡力で朝野新聞社で買收し、社を銀座四丁目の角に設けて朝野社の別局と稱し、洋紙刷に改めると共に更に初號に立戻つて發行した。其時の社員には附け渡りの風外氏を始め淺野乾、磯部節、吉田松北、前島和橋

滑水柳塘の諸氏で、僕もいろはから轉じて入社し「蘭竹操一節」なども云ふ甘い續き物を書いて居た。風外氏は夫から以後不遇續きで地方新聞記者として諸方を轉々し前橋の某新聞を最後として横濱に立戻り、同地で精華といふ雜誌を發行して居たが、一昨年九月の大震の際慘死されたのは氣の毒千萬である。

前に掲げた狂詩中の詞友で現存者を覔むれば僅に三木愛花、中島玩球、志筑留光の三氏である。

新聞挿畫の沿革

小新聞の挿畫を書き始めたのが繪入新聞の落合芳幾氏であつた事は前に述べたが、引續いて筆を把つたのが歌川國松、新井年雪（後芳宗と改む）等であつた。芳幾氏の作をその下繪で見るといつも貼紙をして改描した痕跡を存し、又線書きも粗ッぽく別に綺麗な繪だとの感じも起らぬが、一旦剞劂師の手を經て刷上つた所を見れば、殆ど別人の筆かと思はれる程優美なものに出來上り、且其の畫面に一種の艶氣を含んで居たやうに見えた。元來繪入新聞の續き物には男女の戀愛關係の物語が多く、後年高畠藍泉、前田夏繁兩氏が退社し、二世爲永春水氏が之に代つて專ら續き物を書くやうになつてからは一層人情本的の文體となつたので、其生めいた文章と相俟つて、芳幾氏の挿畫は益々艶を増したやうに思はれた。唯私かにこの大家に不似だと思つたのは、故人の粉本ならばまだしも、現在者たる芳瀧兩氏等の描いた人物の姿勢などをそつくり其儘摸寫して憚らなかつた一事であつたが……併し一たび芳幾氏の手にかゝると原圖の拮屈なる筆勢も忽ち軟化して、如何にも優艶な風に變つたのは不思議であつた。されば新聞の挿畫といへば芳幾氏に限るやうに持て囃され、其頃發行された繪入人情雜誌、芳譚雜誌の繪も皆此人の筆であつた。

猩々曉齋氏は假名讀の魯文翁とは年來の舊知己で、翁の戯作本のさし繪は大概曉齋氏が書いて居る。それ等の關係から假名讀紙上や魯文珍報等へ曉齋の狂畫が出るやうになつたが、一種奇抜な筆致ゆゑ續き物のさし畫には不向で、書く

物は諷刺的の漫畫のみであつたが、之等が恐らく今のパック風狂畫の嚆矢であつたかも知れぬ。或時同氏が假名讀社へ來て編輯局の白壁へ戯れに醉筆を揮つた巨猫の圖が新聞廢刊後數年間保存されて居た事もあつた。さて是は新聞挿畫とは關係のない餘談ではあれど、同氏の逸話の一つとして僕が現在見た儘を話すのだが、或日曉齋氏が魯文翁の佛骨庵を訪うた時氏は名うての酒豪ゆゑ魯翁も先づ酒肴を出して持て成して居る處へ丁度僕も行合せた。其處へまた信州邊の製絲家だとか云ふ人が尋ねて來て携帶した立派な畫帖を取出し、是れへは東京有名な文人の揮毫を請ひたいのであるが、其の手始めに先づ先生の一筆が願ひたいと魯翁の前へ差出した。翁は之を見てそれは幸ひ茲に曉齋先生が居られるから願つたらよからうと勸めたが、其人はまだ曉齋の名も知らず且一見した處で頗る風采の上らぬ大坊主であるから其の技倆を危ぶんでか聊か躊躇氣味に見えたのを、微醺を帶びた曉齋氏はひつたくるやうに其の畫帖を手元へ引寄せ、横さまに長く展べて、傍らの手習筆を盃洗の水で洗ひ、復た墨を含ませたかと見る間に畫帖の七八葉分へ蜒々たる横線を黑々と引いて仕舞つた。其時の依賴者の迷惑さうな顏色は今も眼前に見るやうだが、曉齋先生はそんな事には委細構はず、サア是れからだ見て居なさいと、今度は小さな水筆に持替へ、ウネ〳〵した黑線の上へ數疋の蛙が種々の姿で歩いて居る處を畫き、最後に黑線の前後に頭と尻尾とを書き添へると是れが長蛇の形となつた。つまり背中の上で蛙が行列して居るのを蛇が見返つて居る圖と成つた。茲に至て依賴主も始めて其の腕前に敬服し、數回に渉つて數名の人に賴むよりは圖らず一時によい物が出來たとて大に歡び、後には之を額に仕立てゝ愛藏して居たといふ事である。

芳宗、國松等に次いで新聞の繪を書いたのは芳年門人の山崎年信である(仙齋と號す通稱信次郎)。此人は同門中非凡の筆才があつた人で、又畫道の研究にも頗る熱心であつた。同氏の机の抽斗や文庫中には新古繪畫の粉本または寫生帖などがゝ一ぱい詰つて居た外に、硝子撮影の寫眞が百枚も二百枚も貯へてあつたが、是れは自身が度々淺草公園内の寫眞屋に赴き、シャツ一枚となつて種々の姿勢を寫させたもので、下繪に取掛る時は必ずこの寫眞を取出し注文に適する姿

のものを寫生するのが例であつた。夫れ故にやいつも同氏の描く人物には肥滿なのが無くて、皆自身同樣瘦軀の人ばかりであつた。惜しい事には酒の爲めに屢々身を誤り、又芳年氏の許諾を得ずして或る粉本を持去つたとかいふ罪で、師匠から破門せられて大坂の此花新聞を經て土佐に赴き、一年ばかり高知の土陽新聞の挿畫を擔當して居たが、田舍では繪畫の研究が出來ぬとあつて都戀しくなり、又東京へ歸つて來たが其時の道中は大坂へ着した時懷中剩す所僅かに五十錢・夫れから汽車を横目で見ながら東海道をテク／＼と歩いての上京中途中で帽子を賣り帶單衣を賣り或夜は辻堂に寐たりしてヤツと東京に着した時身に纏うて居るものはシヤツとヅボン下だけであつた。殊に一番困つた事は本人自身の話したのは靜岡縣下へ入つた時或る川の出水後假橋が架つて居て橋錢壹錢といふのだが其の持合せが無い爲めに一二里ほどブラ／＼と元來し途へ立戻り、夜更けて橋番の寐込んだ頃を見すましてそつと其橋を渡つたといふ事である。こんなに貧苦に迫りながら少しでも金が手に入ると直に夫れで繪畫上の參考書を買込むといふ風で、其後僕と下宿屋に同棲のころ、僕が地方新聞社から送つて來た續き物潤筆料の郵便爲替を同氏の外出の序に受取つて來て呉れよと賴んだ事があるが、やがて十冊ばかりの書物を携へ歸りこれは誰の風俗畫これは誰の花鳥畫譜、みんなで八圓とは餘り安いから買つて來たといふに、シテ其金はと問返せば、イヤ待ち給へオヽそれは君の潤筆料を暫時借用したのであつたと平氣な處などは頗る仙人風を帶びて居て、突飛な擧動があつたに拘はらず少しも憎氣のない人であつた。又同じ頃僕が數年前から製圖の參考として持つて居た西洋の遠近法を、その原書に就て圖解の説明をした時は非常に歡んで、とう／＼原書中の圖を悉く寫し取り、夫から後は家體又は背景などを描く時は、此の遠近法の書き方に從ひ下繪を朱線だらけにして著んで居た事もあつた。そして在京中は魯文翁の高野長英の續き物の挿畫を書いた事もあるが、中頃京都の日之出新聞へ轉じてから師宣とか春章とかいふ古い處の筆意を學び、畫風は一變したものヽ却て自家の本領を失ひ、評判前日の如くならずして十九年頃同地で歿したが、其の門人には曾て萬朝報の畫家であつた藤原信一氏や二世田口年信氏などが

ある。

年信氏に次でいろは新聞の繪をかいたのは同じ芳年門下の稻野年恒氏（名は孝之加賀の人、浮世繪備考に稻野孝之を年恒門人としたのは二者同一人の間違ひである）で、此人は後に大坂朝日から大坂毎日に轉じ繪畫研究として洋行した事もあつて關西の畫壇を賑はせた一人であつたが明治四十年五月廿七日五十歳で病歿した。

又月岡芳年氏の繪を載せ始めたのもいろは新聞であつたやうに記憶するが、それは只臨時ものとしてほんの數回載せたのに過ぎなかつた。而して芳年氏の本舞臺はその翌年ごろ星亨氏主宰の下に三十間堀？で發行した自由の燈であつて、芳年氏はおれの繪で一番此の新聞を賣つて見せるといふ程の意氣込みであつた丈けに凡てが繪畫本位で、その小說は寧ろ挿畫の添へ物でもあるかのやうに感じられた。故にその版木の寸法にも制限がなく、折には三段拔き以上の極めて大きな繪を出す事もあり、人物を下段に顯はし之と對照すべき月だの遠山などを別に離して上段へ掲げたり、又附け立ての背景を廢して思ふさま餘白を殘し、故らに餘韻を生ぜしむるやうに工夫したものもあつて、畫面に變化が多く隨つて著しく人目を引いて評判も俄かに高くなつた。そして是迄は一段か一段半の長方形に限られて居た他の新聞挿畫も追々芳年風にかぶれて、版木が一體に大きくなり且その繪組にも奇拔なものが顯はるゝやうになつた。兎に角芳年氏が出て新聞挿畫が一變したといふのは事實である。

○

併し今から思ふと、有名な芳年氏もまだ當時は全く生硬の域を脫し兼て居たやうに見えた。例の强い筆癖で人物は恰も木彫人形の如く、其の衣紋は紙衣（かみこ）か糊ごわい洗濯物でも着て居るやうで、少しも嫋かな處がなく、又寫生を專らにしたにも拘はらず人物の姿勢にも、隨分無理な點があつたのを往々見受ける事があつた。されば其頃滑稽堂から發行された月百姿の錦繪にも、この缺點は顯はれて居たが、要するに同じ國芳の門下でも芳年氏は剛猛な武者繪風のものに長じ、芳幾氏は優艶な美人畫が得意であつた。そして其頃この勢ひよき芳年氏の筆癖を最も能く傳へたのが繪入自由の新

井芳宗氏である。

芳年氏と相並んで一方の旗頭と仰がれたのは鮮齋永濯氏である。氏は通稱小林秀次郎、名は德宜、幼時狩野永悳の門に入り弱冠にして大老井伊家のお抱へ畫師となつた事もあるが、夫より後諸名家の筆法を學んで一機軸を出すに至つたのである。同氏が始めて新聞續き物の挿畫に筆を取つたのは、僕も創業に與つて居た繪入朝野で、その發刊の準備中挿畫は誰に賴まうかとの問題が起つた時に、一つは歌川國松氏に、今一つは是非とも永濯氏の筆を煩はしたいといふ社中の希望であつた。其折此使に當つたのが僕で、小梅の宅を訪ひ懇々と依賴した處が、こちらの指名する剞劂師に彫らせるならば書いて見やうとの承諾を得て、其後下繪を携へて屢々永濯氏を訪問した事があつたが、其の都度取次に出たのが今の小林永興氏であつた事を、十數年後に至て永興氏から聞いて、ア、さうであつたかと坐ろに昔懷かしく思つた事もあつた。玆で又錢問題を持出すのは話が卑しくなるやうだが、其頃の挿畫の畫料が芳年永濯の第一流どころで壹枚壹圓、第二流以下になると三四拾錢で五拾錢といふのが最高の相場であつた。この一月の末京都から上京し久し振に拙宅を訪はれた歌川國松氏の直話によると、同氏が明治十三年頃有喜世新聞の挿畫を一日二個づゝ畫いた居た時の報酬が月給制度で一月拾圓か拾貳圓であつたとの事だ。又同氏の話にやはり有喜世新聞の表紙畫として、地球圖の中に諸冊二奪が立つて居るところの繪を永濯氏に賴む事となり、其使を命ぜられたのが國松氏であつたが、社主がこれでよからうと包んで出した目錄が五拾錢、それは餘り安からうと再三押問答をしても社主が聞入れぬので、とうとう國松氏が自腹を切り壹圓にして持つて往つたとの事である。

永濯氏の筆は本畫から出た丈けあつて、品もよく且叮嚀で、人物の容貌などに如何にも其人らしく、殊に背景の樹木山水等は浮世繪派の及ばぬ處があつて、一點も投やりに描いた處が無かつたし、腕はたしかに一段上であつたに拘はらず、唯芳年氏の如き奇拔な風なく又芳幾氏の如く艶麗な趣に乏しかつた爲めか、俗受けを專らとする新聞の挿畫として

は氣の毒ながら評判に上らず、稍や芳年氏の爲めに壓倒せられた氣味があつた。併し僕の敬服したのは他の畫家中には小說記者の下繪に對し、人物の甲乙の位置を轉倒したり、或は全く其の姿勢を變へたりして、下繪とは殆ど別物の圖樣にかき上げる人が多かつたのに、獨り永濯氏のみはいつも僕の下繪通りに筆を着けて少しも其趣を變へなかつた一事で、是れは同氏の筆力が自在であつた證據だと思はれる。只一度僕が性來左利きの爲めツイ間違へて左の手で楊枝を遣つて居る人物をかいた時「これは左利きになつて居るゆゑ楊枝を右の手に持換へさせました」との斷り書を添へて其繪を送られた事があつた。

尾形月耕氏（通稱田井正之助）が新聞の繪をかき始めたのも亦同じ繪入朝野の紙上であつた。同氏は師に就かず自流でやり上げた人で、最初は菊池容齋の「前賢故實」ぐらゐが手本であつたが後には諸家の流を取入れて一家を成した人である。明治十四五年頃は京橋彌左衞門町に住居し、重に陶器を描いて居たのを、風外氏と僕とが見て其筆の凡ならぬのに感じ、終に勸めて繪入朝野の繪をかいて貰ふ事になつたが、同時に其頃飜刻物の八犬傳とか新作物の讀切り本とかへ追々筆を取るやうになり、後には美術界の大家とまでなつたのだ。

されば明治初期の新聞挿畫の畫家といへば、前記の落合芳幾、月岡芳年、小林永濯、山崎年信、荒井芳宗、歌川國松、稻野年恒、橋本周延、筒井年峰、歌川國峰、後藤芳景の諸氏に止まり、後年名を揚げた右田年英、水野年方、富岡永洗、武内桂舟、梶田半古の諸氏は挿畫の沿革から云へば第二期に屬すべき人で、久保田米僊氏が國民新聞を書きはじめたのも亦この後期の時代である。

其他の思ひ出

猶前に書き洩らした事柄を思出す儘斷片的に述べて見るが。紙上へ劇評を載せ始めたのは假名讀が嚆矢で、有喜世、

さきがけ等が之に次いで始めたやうに覺えて居る。尤もそれは單に一口評に過ぎず、又書卸しの狂言になると十數日間續けて其の略筋書を載せた事もあつた。其頃富田砂燕、高須高燕などいふ見功者が六二連といふ見連を組織し、替り目毎に惣見物をして之を批評し、又昔の八文字屋に倣つて黑表紙活版摺の評判記を出版して居たが、僕もこの連中に加はつて二三度見物した事もあつた。それから新富座主守田勘彌氏が興行上の商略から重立つた各新聞記者を招待し、ハネてから茶附の茶屋——最初は築地の割烹店壽美屋——で馳走をするといふ事が行はれて、各座とも之に倣ひ、小新聞には必ず劇評が揭げられるやうになつたが、中には大分壽酒の利き目で筆先の鈍つた記者先生もあつた。又是れも當時の事だが伊東橋塘氏が或る俳優を酷評した爲め新場の子分等に散々毆打せられ筆持つ右手の指を二三本挫かれたといふ騷ぎもあつた。この新聞紙上の芝居の評は今日まで引續いて行はれ各社夫れ〳〵劇評專門の記者が居らるゝやうになつたが、最初の內は初めて芝居を見て初めて之を評する大膽な人などもあつて隨分珍無類の評判が紙上に顯はれた事も屢々ある。それが明治廿二三年頃の歌舞伎座からの招待の時わづか十四五社から見に來た記者先生の人員が實に六十五人、終にこの諸先生に六十五大通の尊稱を奉つた事もあつた。

大坂の事は深くは知らぬが、僕がまだ籍を新聞社に置かぬ投書家時代の頃（明治九年？）下坂した折には小新聞といへば只浪花新聞の一つで——渡邊治氏經營の大坂日報が發行された頃——同社員の赤荻某氏に逢つた事がある。次に下坂したのは十三年、此時は朝日新聞が隆々たる勢ひを示して居る頃で、同社員の關隘軒（德）氏と初めて會見した。又此時には津田貞氏（高知縣人にして僕の叔父とは親交があつたとか）が此花新聞の發行準備の眞ッ最中で丁度東京から若菜貞爾、山崎年信二氏も招聘に應じて來坂中で、若菜氏の紹介で今の宇田川文海氏其他の人々と一夕の會合を催したやうに記憶する。此の宇田川氏は當時關西に於ける新聞小說家の泰斗で名聲嘖々、續き物と云へば同氏の筆に限るものとされて居た。故に自社以外地方新聞の小說にも宇田川氏の名が無ければ賣れぬといふ程の評判であつたが、自社——始

めは此花後には朝日——のものは自ら脚色し自ら筆を下すにしても、他社の分は別に代作者があつて大體の骨組を作つたのを、文海氏が潤色して送るのであつた。是れは唯同氏ひとりではなく關西に於ける小說家の間には多く此の方法が行はれ、一作者の下には必ず一兩人の小說下拵へ役が附いて居た。

東京の新聞小說も明治十六七年頃から追々新氣運に向ひ、繪入自由の宮崎夢柳氏や自由の燈の小室案外堂氏などの筆に成る、自由思想鼓吹の目的で、佛國革命史などを種子とした過激な歷史的小說が紙上に連載せられ、又阪崎紫瀾氏の「汗血千里駒」（是れは初め土陽新聞に續き物として掲げられしとか）など云ふ傳記小說が行はれるやうになつた。そして同十八年に至り坪内逍遙先生がかの「小說神髓」を著して稗官者流の舊夢を打破してより以來、玆に小說界の革新を來して、露伴紅葉の兩大家をはじめ新進作家が追々と擡頭し來つて、新聞の續き物も終に全く一變した事は今の四十歲前後の人々は能く承知の事ゆゑ、老人の昔話も先づ此邊で打切つて置く事にした。（完）

明治初期

露伴學人

明治初期の文學界の談話をせよとの事ですが、自分は慶應の末年に生れたものですから、戊辰から十餘年の間の事は其當時に於て今日に記憶して居る譯は無く、又其後の事ですら、春の屋おぼろ氏が書生氣質を書いた時ぐらゐから後の

で無くては、知つて居るなどゝいふ口幅廣いことは中々以て云へないのです。然し明治初期の樣子をまるで知らぬといふ譯も有りませんし、自然と見たり聞いたり思つたりしたことが積り積つて、ボンヤリながら凡そ此樣なもので有つたらう位の事は胸中に無いことも有りませんから、或は此談が遼豕であつて、物識り先生の御笑になるであらうと思はぬでもありませんが、又他の一面には自分より若い方々に觀察上の少しのヒントを與へることにでもなれば至極滿足だと思ふ方も交つて、何の組立も筋立も無く思ひ浮んだまゝを御談し致しませう。

先づ第一に申して置きたい事は、今日でこそ小說や劇の類をば、文學だ文藝だなどゝ申しまして、其物の實際價値は兎も角も、分類上に高い價値を持たせて居りまするが、今日より數十年前は、小說なんどの類は當時の社會に於て餘り高い位置に居かれて居無かつたものだといふことです。それは支那の文學上の普通の部類的價値づけが、當時に於て是認されたゝめでして、支那に於ては、小說なんといふものは、もとより高級のものでは無く、取別け卑しい低級のものだとされて居た其影響の爲でして、我日本に於ては早く源氏物語のやうなものが上流の人の間に玩はれた歷史が有つて作り物語が然まで卑まれずに居た事が有るに拘はらず、一般の社會に於ては矢張り支那の俗と同じく低級のものとして取扱はれて居たのです。支那に於ては有名な有價値有意義の小說でも、小說の作者が其某甲の著作だといふことを秘した事ほど然樣に小說は卑しいものだとされて居たのです。勿論支那でも小說家の名稱は二千年近くも古いことでありまして、然のみ卑まれるべき譯では無ささうにありながら、實際元以後の小說は卑まれてゐたもので、彼の十二樓の作者の李笠翁なんどは、彼邦でも俗間では悅び尙ばれたに關らず餘り士君子の評を得て居るものでは無く、そして我邦の漢學先生までが其の眞似をして、李漁李漁と呼びすてにしたものです。斯樣いふ譯ですから德川期に於ても明治初期に於ても、文學の藝術といふやうな結構な稱呼を以てこれに臨む人が無いのみならず、いつも輕蔑嘲侮を以てこれに臨んで居たのであります。式亭三馬が、詩も知らず歌も勿論しらぬひのつくすたはけも戲作者の德、などゝいふ狂歌を作つ

て、佛者の所謂「卑下慢」の態度を取つて戯作者に立籠つて、そして彼のきな子女史を描出して萬葉張りの歌よみを罵つたりなんどして居るのもこれが爲で、曲亭馬琴が勸懲主義に立籠つて醒世啓蒙を以て表門の飾りとし、小說をよいものにして自分も君子人の側の方に立たがつて居るのもこれが爲だと云へば云へるのです。そんなことを云つてゐる間に明治維新となつたのですが、勿論當時は少し眼が見えたり腹があつたり才が有つたりするものは、百姓の子でも貧乏神主でも腐れ儒者でも皆世波の亂れの中に拔手を切つて見せ樣といふ氣になつて働いたのですから、卑しまれて居る小說などに筆を染め身を寄せる者は、つまり世の中の餘されものかよく〳〵野心の少いものであつたのです。そこへもつて來て、三百年の太平が終りを告げて、士分は祿高に離れ、庶民は生活の安定を大に失つたのですから、目前の活小說にゲンナリして居て、どうなるか分りかねる明日の心配を有ちながら、いくらノンキな者でも小說を讀んでゐるといふ段でも無かつたので、明治初年は怱忙と月日が立つて終つたのです。然し一日一日と世の風浪が落ついて來ると、流石に何も無しでは濟まぬので、德川末期のこぼれ菜がアチコチに小さな花を見せたのであります。小說の中で讀本（ヨミホン）といふのは先づ大將株で京傳の稻妻表紙や馬琴の弓張月系統のものでありますが、これは之を製本出版するに作者の勞苦も本屋の骨折も大きいので、殆ど復興しかねました。何にせよ半紙板の木板で大抵五冊を一トクギリにして出すのですから、なまやさしい事では無く、まして五冊きりで濟むやうなケチなものは讀ミ本の中では幅の利かぬものですから、之を書くものも出すものも二ノ足を踏んだのは無理もありません。それでもまるで出無かつたのでは無くて、神稻水滸傳といふのはたしか明治になつてから何冊か出ました。これはまた讀ミ本の中でも馬鹿げた長編で、作者が四人も五人もかゝつて、作つて居る中に死に、作つて居る中に死んだものであります。神道德次と稻葉小僧を足利時代の談にして、魔法使の牛若三郞なぞといふのを入れてあるので、イヤハヤ大變なもので、仇を討たうといふ方も强いが、討たれやうといふ方も强くて、おまけに討たれる筈の方に讀者の贔屓役者の牛若が居るので、一旦一作者が牛若を死なせて仕舞つたとこ

ろ、看客が承知しない、フクレて仕舞つた。關羽が死んで三國志が讀まれなくなる道理で本が賣れなくなつたので、何冊か過ぎてから、本屋の注文で又生返らせたなんどゝいふ珍談のある長々しい讀ミ本、百何十冊と續いてもまだ中々結末にならない。それを何でも幾冊か明治になつて續出しました。記憶は不明ですし、今更調べあげる勞を取るのも御免蒙りますが、何にせよ德川氏は倒れても讀ミ本は死な無かつたといふ丈で、何程此本が世間から記憶されて居たかといふことが分ります。然し何ぼなんでも時世が變つて居たから、ドン／＼續出するといふ譯には行かず、とう／＼未完成で未だに打つ人も打たるゝ人ももろともにまだ生きて居る圖書館の中、といふ譯です。讀ミ本は然しこればかりでは有りませぬ、明治になつてもたしか高畠藍泉だと覺えましたが、德川期の作者の名を襲いで、新規に義士の外傳を出してゐます。赤穗義士を持出したところなぞは、隨分利口な事で、德川時代には板本では表立つて義士の事を書いて居ませんから、そこへ目を付けて出したのでせう。多分これ等あたりが體裁から又性質から讀ミ本の正系を傳へたものゝ最後であらうかと思ひます。何分記憶が朦朧ですから間違つたら御免なさい。物ずきの叱正を願ふことゝしませう。

中本といふもの、卽ち三馬や一九や鯉丈の書いた浮世風呂や膝栗毛や八笑人の類のものは、讀ミ本に比べれば作るのも出板するのも容易なので、讀ミ本に比べては却つて出て居ります。しかも此方は聊か寫實に傾いてゐるものですから、時代が違へば時代が違ふで又其時代の人に親しさが有りますから、いくらか喝采を博して世人に迎へ取られたものと思はれます。膝栗毛を模して西洋膝栗毛が出來、彌次喜多が西洋で女郎買をして、ベットの下の不淨瓶の水を吞むなどいふことを書いて人々を笑はせたもので、後に末廣鐵腸の啞の旅行などの先驅をなし、今でも雜誌記者新聞記者などの好んで書く赤毛布談なんぞを、へン四五十年も後れて居る哩と云つた顏をしてゐます。此類の書は一部や二部では有りません。氣長に搜したら可なり有りませう。三馬の浮世風呂系には、あぐら鍋などゝいふ牛肉屋の二階を寫實的諷刺的に書いたものも有ます。此類のものも可なり有るやうです。鯉丈の系のもので（七偏人の稿の出來たのは何時か知り

ませんが、全然前代的です）は團々珍聞といふ雜誌に從兄弟位に筋を引いたものが、少し後になつて出て居るが、例の茶番的のをかしみは、茶番其物が餘り流行しなくなつたので自然と無くなつて終つたやうです。梅亭金鵞などいふ人がまづ鯉丈系のものを作り、假名垣魯文が一九三馬の系を遺して居ると云つたやうな調子です。

ガンチの長、卽ち爲永春水のやり出した舌たるい人情本は明治新興の人氣とは違つてゐまして、慥に德川氏顚覆江戸滅亡の兆をなしてゐたものですから、明治になつては流石に雌伏して隱れたものらしく見えます。然し助倍の筋を衝き動かして色男を羨ましがらせる筆法は、才走り人種にも薄ノロ人種にも悅ばれるものですから、西南騷動頃から、今樣丹次郎的なものが、舊體裁の本では無くて、チョク／＼見え出したかと思はれます、そして段々と變形して現はれたやうに考へられます。團々珍聞時代には古い爲永型そつくりのものも見えます。

草双紙といふ一ト品は讀ミ本を總挿繪假名書で行つた、イヤ寧ろ繪へ文を挿み込んだものですが、此方は相手が婦人幼童である爲に、讀ミ本ほどは時勢の直接影響に押潰されずに、讀ミ本よりは德川期より明治初年に引續いたものがある。これも其の長々しいのを固有の性質にして居て、合卷時代から段々發達して、一帙イヤ一ト袋二冊或は三冊のものが數十篇續くやうになつたが、其の暫らくの間存續したものは何等時代の影響を受けずに――勿論時代物語や御家騷動が中途から現世的にならう筈が無いから、舊態を存して居たのである。が、稀には時代の影響を認めることの出來るものも有つた。何の草紙だつたか忘れたが（黄金水？　桑名屋徳藏と姐妃のお百とを捏ちた物語？）所謂ダンブクロ（幕末の洋服）を着て刀を佩びて居る挿畵のあるものを目にした記憶があります。

此等の草紙は大體不可測境界へ看客を誘引して前途に如何なる事の起るかを推量することの出來ぬやうにして興味を發せしむるのを其約束として居るので、無暗に長々しくなるのを常として居た。其爲に時勢の變化にあひて（假令遇はずとも？）明治になつて幾袋を續刊したにせよ、遂に終局まで刊出するを得たものは無いと云つても可い位で、看客の

失望と本屋の失敗とを以て、雪達磨の尨大なるものが日光と時間とに依つて消失するが如くに消失した。彼の田舍源氏等が譴責されたゝめ、奇妙な事を考へ出して、釋迦の一代記を草紙に作り、其實悉達太子を光氏の代りに、イヤ光氏を悉達太子に化けさせて、恐ろしい色男臭い釋迦を作り出し、そして婦女子の尊敬と愛慕とを得させて喝采を博した應賀の作の草紙の如きは、數十篇の後に至つて時代が異つて來たので、餘り荒唐無稽でもいけぬ爲に、佛經の本文によつて佛弟子の談などを綴ると、さあ讀者の豫期と違つて來て、妙に究屈の、そして華やかなところの無いものとなつて終つたので、とう／＼お仕舞になりましたのなどは實に愛嬌のある談です。

此等の軟文學(イヤな稱です)の方面を別にして、明治にはまた一ツ別の文學世界がありました。それは漢學者の洒落た方面から來たもので、最初は德川末期の中島棕隱の鴨東四時雜詩などから起つたもので、漢詩人が自己等の生存して居る時代に親しい詩の艶つぽい人情味の有るものを作り出し、それに一寸した小序的に巧麗な記事文などを附けたのです。ところがそれ等は學問も手腕もある人が道樂的にやつたのですから、面白くもあれば器用でもあつて、中々世人の興を惹いたのであります。それから然樣いふものが段々に出來て來て、終には各地の花柳の巷のことを竹枝などで面白く記することが行はれた。一方には文章を以て江戸繁昌記のやうなものが出て來た。寺門靜軒といふと何だか輕薄才子を思はせるやうで厭味ですけれど、靜軒はソゲてあんなものを書いたにせよ、其落花賦枯樹賦などを見れば中々才筆で一概に或人々の言ふやうに見下すべき人ではありません。併し江戸繁昌記は價をなして、それから色々のものが出來ました。勿論陽臺遺編のやうに早くから漢文系の蒟蒻本などは有るのでありますが、漢學の廣布流通と共に德川末期に大に然樣いふ者が興つたのであります。ところで明治の初年からしばらくの間は此類のものが、これを作り得る人も多かつたし、解し得る人も多かつたし、半解的に解し得るにしても解し得ることを誇るやうにして居ることが流行つた傾があり、實際隅々まで解し兼ぬるにしてもまづ／＼解し得る人々が多かつたので大に行はれ、それで柳橋の事を書いたり

新橋の事を書いたり、世俗の寫實をやつたり、短評的の事を試みたりすることが大層に行はれたのであつて、後には雜誌さへ然樣いふものゝみを蒐めたもので發刊さるゝやうになつて仕舞つた。然樣なると、出來る人ばかりが作るといふのではなくて餘り出來ない人までも眞似事的に作るやうになつて、段々と實質は劣つて來た觀がありまするが、何にせよ大に流行した事で、それ等の作者は指を屈するに足るほど多く、それ等の刊行物は中々多くありました。此の時代的漢文雜著を除外して明治初期の文學を論ずることは一寸宜しくない、これ等は慥に時代の一特徵であつた事を斷つて置きたいのでありまする。此等のありさまを知つて居るのは今日まだ多少其人々が存在して居りまする。石井南橋だの、服部撫松だの、あゝいふ人達の系統を引いてゐる人では、今でも三木愛花君だの何だの、若干の人々がありませう、蓋しそれ等の諸君も今ではそんな昔日の談を持出されて悦ぶことは無いかも知れないが、詳しい明治文學史を編まうといふ人々は今に於て其頃の最大勢力であつて、そして前にも後にも稀な現象を等閑に附して置くことは些物足りないことだと思はれますので一寸此事を申添へて置きまする。

假名垣魯文と成島柳北

—明治初年の戯作戯文—

山口　剛

一

佳人の奇遇、經國美談なんどの政治小說も未出でず、まして、小說神髓も出でず、浮雲も行はれぬほどの、幾日の明治文壇には、たゞ戲作のみが跋扈した。ひとり小說ばかりでなく、論說も戲文である、詩歌も狂詩狂歌の戲體である。見るところ、皆遊戲文字の跳梁である。

假名垣魯文は、かゝる遊戲文字を操縱する妙手である。彼の「西洋道中膝栗毛」は、滑稽の妙を以て一世の喝采を博し得た。彼は序に於て戲作者の義に就て說くところがある。もとより短き戲文であつて、小說家の使命を說いて、堂々の筆陣を張つた小說神髓とひとしなみにいふべきでない。しかし、なほ、當年の戲作者の態度如何を知るに便よい。彼はいふ。戲とは虛に戈を合する事である。卽ち、戲作者は、虛談を誠實とし、妄語を眞面目とする、なほ傾城の客あしらひの如きのみと。戲作者がみづからを低くするは、江戸以來の傳統である。ひとり、この卑下の言あるをあやしむべきでない。彼はまた、先達の師、京傳、一九、馬琴、三馬の月旦をなした。その是非の標準は、彼が所謂戲作の義に徹すると徹せざるとにあつた。彼は大に馬琴を貶した、戲作の義を忘れて徒に衒學を事にしたためである。京傳を功罪半するものとした、黃表紙の滑稽を德として、骨董集の考證を排するためである。一九をば膝栗毛の著によつて、揚げもし、抑へもした、揚げたのは、虛で捏ね上げた趣向をよしとし、抑へたのは、狂言記の剽竊を背しとせざるためである。彼は三馬に於て斥くべき何ものをも認めなかつた、故に推讚して眞の戲作者であるとした。筆頭、虛中に實地を穿ち、人情世態、滑稽洒脫、人情の穴巣を捜し得たるものといひ、また、偶老實な物語を著はせしかど、文中に例の句調の粗顯れ、をかしみに落入れば、讀者決して眞事とせずといふが、その理由である。

今更めいた事ではあるが、「西洋道中膝栗毛」は、魯文が實地に於ける見聞の叙述ではなかつた。當時流行の福澤本の一つ、「西洋事情」を經とし、紙爲堂風來の飜譯物を緯とし、これを彩るに友人富田砂筵の巴里博覽會見物の實話を以てしたまでゞある。杜撰麁漏は、もとよりそのところである。これが彼をして戲作の辯を卷頭に載せしめた故よしであ

る。また、この書は、題名がすでに明に示すが如く、書中に彌次、北八三世の子孫を拉し來つて趣向立したるが如く、脚色の骨子は、ひたすら、一九の先轍を履んだ。それにも拘はらず、一九を貶するは何故であらうか。蓋、當時の滑稽に終始せずして、室町の狂言を借り來つたるを陋とした、否借り來つて知らざる眞似するを陋としたのであらう。斯くてなほ一九を模倣するは、世のもてはやすがまゝに、その罪なき趣向にたよるのを便よしとしたである。なほ往年の「滑稽富士詣」が、一九の諸作に準據したのと同樣であつたらう。されど、彼はその酒甕の、享和二年の作である事を明にする。明治三年は、享和二年を距る事、すでに六十九年の久しきを明にする。一九の趣向は妙なれど、御當世の形勢と齟齬するの甚しきを明にする。かうして、彼は古き酒甕に新しき酒を盛らうとする。酒新しければ、酒甕また新しかるべき筈であるが、そは未魯文に期待すべきでなかつた。たゞ魯文は一九の享和を明治に代へて、その人情風俗を如實に描かうとした。描き盡して微に入り細に入らうとした。所謂、うがちの妙を心掛けた。うがちの妙は、本來一九より三馬を以てまさる。これ、彼が三馬を眞の戲作者として傾倒する所以である。魯文多慾、彼は一九の妙と、三馬の奇とを集大成しようとした。後進の割前のよさは、これであると、私に思つたのであらう。

二

彼は福澤諭吉の「世界國盡」を飜案して「世界文盡」とした。「窮理圖解」を附會して、「河童平凡胡瓜圖解」とした。これは、しばらく、舊套の城に籠つて、嶄新の館に參する輩を笑ふたのである。しかし、舊弊から文明を笑ふべくば、開化からも頑固を笑ふべきは、當時の世態である。新舊矛盾撞着の甚しさは、丁髷と散切と互に嘲り合つて、日も足らないのが明治の初年である。三馬のうがちを念とする戲作者にとつては、眞に黄金時代であらう。しかしながら、魯文は、三馬の犀利と冷靜を缺いた、加之彼はあまりに文明に醉ひ、開化に浮かれ過ぎた。蓋世の流行に棹して後れる事な

きを戯作者の務としたのであらう。膝栗毛の凡例にいふ。趣向新奇を競ひ、標目未發なるを可なりとする故に、彌次北八の三世の孫等、外國廻りの滑稽をもて、御稗史の大意とす云々と。

書中に、通次郎といふがある、彌次一行の通譯である。彼は少しく西洋の事情に通じ、わづかに英語をあやつる、開化の半可通であつた。魯文は、時に、この者をもて、開化人たるみづからの傀儡たらしめた。魯文に、「安愚樂鍋」がある、これも亦戯著である、冠して牛店雜談といふ。彼は、この著を通次郎の作とし、歐洲航路船中の消閑の技に出づるとした。その一章を鼻うごめかしながら、彌次等に讀み聞かせた。彌次はいふ、成程、こいつは當時の穿ちだと。通次郎はいふ、凡そ世の中の穿なら、今時の戯作者共にあ、眞似はできめへと。魯文が通次郎をして自讃せしめたる穿とは一體どれほどのものであらうか。髮緒床、湯屋と牛肉屋との相違はあれ、明治の三馬は、果してどれほどの力倆を有するのであらうか。今、彌次に讀み聞かせたほどを引川するは、魯文の片鱗を知ると共に少しく當時の世相の一端を具體的に語らんためである。

「〇年齢は二十か、一二位の書生兩個、牛肉店の正面に袴のまゝあぐらをかき、持參のビールは疾にかたむけ、フラスコの徳利を傍へころがし、地まはりの水ツぽい酒をさしつおさへつして、牛鍋の代りは、生のから皿が二枚ばかり出て、火鉢の鍋のうちは正肉は喰ひ盡し、五分切の葱がたれ味噌と合併して、かなへに沸るみけん尺の如く、をりをり藥罐を取よせて素湯をさして沸をしづめることあり。散切「アヽたいさんどろんけん、君マア重杯たまへ、僕にやモウいかん／＼。惣髮「コレは失敬ダ、マヽマヽまづ受杯し給へ、コレコレ飯を喫するのは早イではないか、アヽ愉快／＼。「アヽゑッた／＼、最早いけやせん。家へ歸る道が知れなくなると、困迫極るはサ、コリヤ／＼と、「そんなら僕がお合をしやう、ナント英君、とてもの休業そんでへ日曜日、俗にどんたくと云ついでに之から登樓はどうだへ。「ヲウらいと人力車で飛すべし。しかし、「コスト」があやしいわへ。「イヤ會計は明日塾へと告しやア、伊勢佐仲の町茶屋なら不見識は

あるまい。「茶屋せへ君が請合なら、即刻發しやう。モウ今うつた鐘が九字だらう。「九字を去つて、エ、漂泊す奥羽の旅、イ、、、カ、サア進撃するには、モウ一杯傾けべし、ヲイヲイ、ねへさん、極熱で一合一合を一升とかざりていふ事食店の常なり早くさうして五分を云と香の物をくれョ、なま一枚といはぬ處は餘程怪しいところと見えたり「今夜は何處へ登樓しよう、▲◐へ初會で行も、うしろが見られるから◐印はどうだへ。「僕、町並は概略まし閉樓サ。「藤本樓は。「知己があるが、チト恐縮サ。「アハ、無心で迯か、三州樓は。「うら祝儀散財頗不可。「そんなら大口樓は。「今夕登樓すると三度目〳〵。「梶田は。「それも知已にならねばならん。「金久。「不可。「永喜はへ。「どうもならん。「佐の桝巳ふさがりかネ。「勿論々々。「夫じやア、いつそ小格子はどうだらう。「それも佳興だが、茶店の看板は。「うける處はたいさんあるが、ふりで二朱妓を一分奪はれるもマグネットが拙サネ。「こゝで議論は有名無實だ、まづ入廓の上、議定すべし。「チーライト、ヲイ〳〵會計だ〳〵ト勘定をきゝ、西洋どうらんから、二朱の札を互に一枚宛出して、釣をとり、くはへ楊枝であたりへ會釋もなく、飛び出しておもてへいでゝ散、甚句「ア、、、、とても願ふなアら、大きな事をねエがエ、やがて五大洲の王となアる、ウ、、、。もとをたゞせば西洋書生、やがて天下の政事とヲるウ。惣、詩、「雲か山かア呉か越か水天髣髴青一髪萬里舟を泊す天草の洋ト甚句とから歌をかけ合で唄ひながら、藏前通を高足駄がらがら歩む後から人力車の大急。車力「ハイハイ御免なさい〳〵。たのみますョ〳〵トすり違へば二人の書生は慌てゝ飛ぶ拍手に寢て居た犬の足を踏めば、「キヤン〳〵〳〵散「エ、氣をつけろ、まどろすめエ。車「ハイハイ、まつぴら御免なさい〳〵。

書生の會話は異様なる英語と、漢語との綯交ぜである。これも何の不思議があらう。當時の洋學塾は、わづかに英語を教へて、旨として漢學を授けて居たのである。日本字を全廢、羅馬字採用の建白書は、已に明治二年に出でたものゝその文は、漢文を以て草せられる程である。すべてが、矛盾の世相である、この書生等のみをいぶかる處はない。まして、最も進歩して居ると自負する書生等が、知識の象徴と信ずる英漢の語を亂發するは衒燿まさにしかあるべきである、また書生等の會話が、さながら洒落本の淺黄裏なるを咎むるなかれ。それ等皆、遙々と笈を負うて、新文明の源泉の地に

走せ参じたる遠國者でないか。時まさに江戸開府の當初の如く、今の東京は、殖民地めきて諸國者こそ幅をきかせて居るのではなかつたか。さるにても、天明の通客をして、これ等のありやうを見聞させたなら、何と評した事であらう。

三

吉原をして、光彩あらしめたのは、天明十八大通である。その吉原の通といふ特殊の文化は、かゝる物髮散切のために蹂躙せられようとする。十八大通の後裔たる東都の市民は、傍觀して居るべきであらうか。しかし、彼等にとつては一吉原は問題でなかつた。江戸そのものも、すでに存在を失つて居る時勢であるから。明治維新の變動は、つひに江戸の地をして、遠國侍の高足駄に踏みにぢらせてしまつた。されど、かゝる運命の襲來は、とくから豫知せられた。故に、深く憾みとする事なくして、却つて大にその推移をよろこび迎へた。これ畢竟三百年來馴致せられたる大勢順應の氣風の然らしむる所であらう。昨の江戸、今の東京の市民は、諸國の人々と共に、文明開化の謳歌にいそがしかつた。戲作者はいち早く、その狀況を筆にした。舊江戸は新東京の前に、悲しく跪くばかりである。たゞ婦女子のみ、江戸に戀々の情を寄せた。彼等、たゞ舊慣を守るが習はしとなつて然るか。否、草双紙の結末を見ずしてしまふを遺憾とするたしめである。故に、「白縫物語」「釋迦八相倭文庫」「室町源氏胡蝶卷」の如きは、慶應にひき續いて、その要求に應じて居た。

さきの物髮がうたつた樣に、書生の、東京に遊學するは、官員たるべき志願を果さんためである。官員となるは、廟堂に坐して國政を料理すると共に、小巷に折花攀柳の戲を期する。彼等の先輩たる官員は、もとの田舍侍、昔の淺黄裏である。彼等は、まづ江戸を屠り、吉原を陷れ、餘威を以て、柳橋京橋なんどの藝者町を陷れようとする。

これより先、天明の後、吉原は、江戸の通客を獨占する事が出來なくなつた。通客は、また新に深川を世界とし、そ

ここゝの岡場所を舞臺とした。藝者の勢力は、傾城と伍して必ずしも下らなかつた。仇吉、米八は、高尾、吉田とその名を斉しうした。江戸の市民は、丹次郎たるを光榮とした。蓋、江戸は、諸國侍に屠らるゝ前に、仇吉米八等の繊手によつて、快き最後を遂げて居た。仇吉、米八は今はない。けれど、その後輩は更に術數を以て、勝ち誇れる諸國侍を丹次郎化しようとする。策は當つた。彼等は、唯々として、その命に應じた。新東京は、官員書生の都たるべくして、實は藝者の都であつた。藝者のよく官員を生擒すれば、落籍せられて、狹斜から姿をかくす。權妻がこれである。本國に妻子を殘し來つた者の、一時の妻の義である。かうして、官員と藝者と、また權妻の三角關係は、實に明治初年の奇觀であつた。

戯作者から新聞記者に轉じたる魯文は、おのが主宰する「假名讀新聞」紙上に「猫々奇聞」の一欄を設けて、藝者種を載せた。柳北の所謂猫魔社會一部の春秋である。世間は喝采してこれを迎へた。彼は、別號を猫々道人と呼ぶに至つた。彼が縱横の筆を揮つて猫のあら探し、うがちに力むるや、聊罪滅しをするの名のもとに、猫塚の碑を樹てた。またそれに先つて、建碑の資を得るがために、猫に因める書畫骨董を陳列した珍猫百覽會を開催した。機を察するに敏なる魯文は、一代の好尙の存するところを利用したのである。

猫々奇聞欄の特設、百覽會の開催は十年である。猫塚の建碑は十一年である。かゝる狀態は、その以前より起つて、以後に及ぶ。藝者の消息は、ひとり假名讀を賑はすのみでなかつた。今事無類新書の十三年出板に、斯ういふ一節がある。

「新聞社會の筆先に曰く、ヤレ鯰、ソレ猫といふを以て四角文章となく、假名書となく、悪く唱ひながらも世上の人の聞くを樂み見るを慰むる種とはなれり」

鯰は、官員を意味し、猫は藝者を意味する事勿論。世人は何故に、斯くも、官員藝者に着目するのであらうか。新書

の筆はいふ、これなほ、わが心掛くる娘の噂話を聞きたいとおもふと同じ事であると。

「吾心に、官員になりたいと望み、わが胸の中に藝者を連れて遊びたいと思ふ者は、皆其物の事を聞けば、耳を引立て何かに氣を持たせて、其事の成否いかん、其果は何國の誰が、何とせしやと思ふ故に、以下次號に明日の發兌を待つに至るは、亦人情のやる瀬なき所にして、いと可愛らしくあどけなき事にこそあれ。」

筆者は、更に筆をつゞけて、そが外に又一つの色氣種は權妻にぞありけるといひ、こゝに一篇の權妻物語をなした。これも亦時流を語るものである。

四

猫々道人の名附親は柳北である。「猫々奇聞」の抄せられて一册子をなすや、これに序するものは柳北である。猫塚の碑文は柳北の撰である。猫をいふものは、必ず柳北を想はざるを得ない。

柳北の猫についていふ所あるは、遠く安政にある。「柳橋新誌初編」がそれである。その後十二年にして第二編の述作がある。明治六年の出板であつて、猫々奇聞に先つ事四年である。

「柳橋新誌」は、いふまでもなく、柳橋の妓風を論ずるの書、先蹤は靜軒の江戸繁昌記にあつた。彼はその第二編に於て、柳橋の盛華は往日より加はつて、その實大に衰へたる事をいふ。妄なく藝なき者が、濫轉巧衒唯利をのみ視る事をいふ。しかも、その罪の一つは客にある。客が、通の何たるを解せざるためである事をいふ。その客といふは、もとの遠國侍、今の官員であつたらう。彼はまた、明に官員の遊蕩に就ていふ所あつた。彼は陽にこれに同じて、陰にこれを排した。

文政天保以還、幕府禁網極嚴、雖麾下之士、遊則有譴、天朝矯其弊、赦小過、擧賢才、正其大綱、修其大典、如擁花

抱柳瑣末之事、釋而不問、故馴馬亭盞、有時而三顧蘇小家。これ、綱紀の紊亂を輕くいひ棄てたものである。

夫通下情解人事者、莫者遊也。貴介搢紳、寓深意于遊戯、以察閭巷之情態、則於爲治、不爲無益。且若泰西諸國、帝王同遊于民庶、若花旗聯邦、貴賤不殊等、皆是所謂文明開化者。頃日本邦日除舊弊、力新政教、可不謂美事乎。高官の遊蕩をしか解して、好意を表する、やがて、錐を嚢中にのみ潛めさせなかつた。彼の筆は雖然に一轉する。徒以酒樓之遊、娼妓之樂、爲文明開化之道者、余不肯左其祖也。卽ち、彼は、高官の態度と、當時の皮相なる文明開化とを、この遊戯文字の中に一蹴した。

柳北、姓は成島、名は惟弘、字は保民。幕府の儒員にして、詩文を善くし、また夙に英學に通じて外國奉行となつた。維新の際致仕して、野に退隱し、後歐洲に遊んで、彼の土の文物に觸るゝところがあつた。彼亦一代の奇士、眞の文明開化を解する者であつた。柳橋新誌は外遊後の筆、諷刺おのづから發せざるを得なかつたらう。彼が自傳を草するや、色を好む事甚し。酒を嗜む事亦甚しと。彼、すでに通を曉つて、頃日の遊ぶに道なき輩を視る、一語つひに、及ばざるを得なかつたらう。彼は新誌に序して、德川氏西遷之後、東京府内朱門粉壁、變爲桑茶之園不鮮、而柳橋妓輩、依然不失其業、操管絃、馳逐于風流場中、比諸幕吏兎脫鼠伏而偸生者、豈不優哉、といふ。幕士であつた彼の筆は、時に譏誚の體をなさゞるを得なかつたらう。

人の新誌を無用の書として難じた時、彼の答は斯うであつた。泰西諸國所刻新聞紙者、多是誹謗罵詈之言、而君主不罪、官吏不咎、君子不怒、小人不怨、爭而讀之、以博聞見、以知警戒焉、若吾書、則亦新聞紙而無用者耳と。柳北の譏諷は、新聞紙を得れば、なほ光彩を放つものがあらう。果然新誌述作の翌年、彼は聘せられて、朝野新聞社長となつて日々雜錄の筆を執つた。寸鐵人を殺す底のもの比々として然りといふべきであつた。けれど、不罪不咎は、新聞條例の前にはあたし事であつた。彼は筆禍を得て下獄のうき日に遭つた。爾來彼の筆は、裏に痛憤を蓄へて表に諧謔を縱にし

た。自衛の策おのづからしかあるべきである。しかも、これは江戸幕府下に於ける文人のかつてなし來つたものである。戯作者も、時に戯作の名に隠れて、此種の手段を弄したものである。江戸の手法を墨守する魯文と、先覺の意見を懐抱する柳北とは線の兩極にあるもの、しかも、滑稽の文を草する一點に於ては、相合した。一にこれ時勢である。深くあやしむを要しない。兩極相合するの事例は、當時に於ける新舊すでに然り、舊弊と開化とすでに然り。これは說明を要せぬ。また、官員書生と、江戸の通人とまた然り。これは何であるか。通の常式にやや勞れを覺えて、岡場所宿場の氣分をおもひ來つた江戸傳統の通人は、眉顰めながら、遠國育ちの彼等と一坐した。彼等は、また江戸の通人から通の型を學ぶところがあつた。東京の遊興といふ一點に於て二者は相合した。この狀態は、柳北これを叙し、魯文これを草した。しかし、柳北の文體は、漢文か、漢文崩である。魯文は一九三馬の體である。そのまゝに融合すべきではないが、底の心は互に通ずるものがある。卑俗な事象を仰々しい漢文調を以て行る時、もう滑稽感が起る。柳北の文は、巧にそれを利用したものである。まして、新聞を愛讀する書生等は、もとより漢文に慣はれた輩である。或は、浮世床などの乙な言葉に出會ふよりも樂に讀めもしたらう。風流罪過を叙するに、漢文の艶體を以てする時、更に別樣な興趣も存する。柳北の「花月新誌」の行はるゝも、當然であつた。この風潮に遲れじと、魯文は、洒落本調を棄てゝ、ともすれば熟語對句に苦しみながら、漢文調を試みたのであつた。この風潮に乘ずる故に、花月新誌を模する小冊子が簇出したのである。

新聞雜誌の流行は、明治のはじめから盛を極めた。草双紙の作者も、これを壇場とした。所謂續物の筆を執るのである。中本の作者もこれによつた。數々のうがちは、讀者の最も喜ぶところである。小魯文、小柳北の多き、誰か、一々その名を記憶し得よう。狂歌、狂詩、また都々逸の投書も多かつた。大方は、時事の諷刺である。所謂落首の體である。

落首の最も多く行はれた時を江戸にもとめるならば、天明前後であらうか。町人の勢力漸く武士を壓して、暗に民權

の發達をおもはする時である。種々の學派の勃興して、思想の自由を獲得するに近き時である。開國の思想の一脉動きそめた時である。明治維新の端この時に發すともいはうか。しかも、江戸趣味の大成はこの時にあつた。一方に黄表紙の諷刺があり、滑稽があり、一方には六々部集の熱罵がある。明治諸新聞、雑誌の紙面の外輪こゝに成るといはうか。天明の清新は化政に至つて爛熟となり、天保に至つて廢頽となる。柳北、魯文はその爛熟を繼ぎ、廢頽を承けて更に別様の清新に觸れるところがあつた。然らば、之れ等の行文は、天明と化政と天保と明治とを兼ね併するものといはう。諸體雑然たるは當然であらう。まして、文の内外の矛盾撞着は、苦笑となく、嬉笑となく、たゞ笑を以て一抹するを便とした。戯作、戯文の横行する所以である。

明治初期の政治小説及び
その時代的背景

高須芳次郎

(一)

明治初期に於ける政治小説の先驅となつたのは、故板垣伯が民權自由説を唱へた翌年（明治十二年）に出た『花柳春話』（織田純一郎譯）であらう。或はそれ以外に政治小説らしいものが出たかも知れないが、私の寡聞を以てすると、『花柳春話』が政治小説の風潮を喚起する一原因となつたやうである。が、も一歩進めて云ふならば、更に『花柳春話』が出

る前にそれを生誕せしめる社會的乃至時代的背景があつた。云ひ換へると、當時の社會には、政治小説の出現を促がすべき空氣が濃厚になつてゐたのである。この一事について諒解がない限り、當時の政治小説は、今日の私らに取つて、極縁遠いものと感ずるよりほかがない。すくなくとも、その大部分に對して、興味を減殺することを免れない。

明治初期は、新舊思想の衝突が最も激しい時代であつた。王政維新と共に王政復古の思想が一部の保守家、國粹主義者などのうちに起つた位で、その最初から新思想と舊思想、進歩的思想と退守的思想、武斷的傾向と文治的傾向、文明開化主義と尙古守成主義とが對立したのみならず、その激爭、葛藤を見た。これを政治上に徴すると、藩籍奉還や廢藩置縣や四民平等制や徴兵令などについても、贊成するものと反對するものとがあつて、隱約のうちに、もつれ合ひ、きしり合つた。それらは、今日の人たちが想像するやうにすらすらと具合よく搬ばれたのではなかつた。つまり、それは政治上、進歩主義者と保守主義者とがあつて、意見の一致を見難い場合が少なくなかつたからである。その後、續いて起つた征韓論についての大衝突、その餘波として起つた征臺事件、それらも皆進歩、保守兩主義の衝突、葛藤にもとづくのである。その傾向が最も大きく、最も烈しく、破裂したのが西南の亂である。

西南の亂は確かに政治上に向つて、一大轉機を與へた。士民の多くは、それ迄、武力によつて、政權に參與すべき地歩を占めようと考へて、何事も最後は、武力を以て解決することが出來ると妄信してゐたのが、西南役によつて、早くも迷夢を打破られた。時の政府の遣り口に慊らぬ人々は、武力でなしに平和な手段によつて、參政權を得て、その志すところを遂げようと考へた。その結果、國會開設運動に熱中するやうになつたのである。元來、この事は、明治七年、故板垣伯らが民選議院の設立を建議した頃に端を發してゐるが、一般的にその運動が旺んになつたのは、西南役の後からである。

それと共に概して急進的な政治思想が知識階級を動かすやうになつた。それに次いで漸進的政治思想も相當に勢力を

占めるやうになつた。それらはフランス、イギリス、ドイツ、アメリカなどの翻譯思想によつたもので、全く歐米の政治思想を丸呑みした形であつた。が、それらの批判を爲す餘裕は當時の人たちになかつたので、唯自由民權や自由平等を叫ぶ聲が民間の一部に高かつた。それに對して政府は漸進主義の態度、傾向を示したので、民間ではそれを手ぬるく感じ、明治十二年十二月、國會開設の請願建白をしたのである。この國會問題について、政府部内でも、急進、保守の二派を生じ、その葛藤が頂點に達して曝發したのが明治十四年の政變であつた。それと同時に大詔が煥發されて、政府は明治二十三年を期し、國會を開くべき旨を公示したのである。この公示と時代の趨勢とによつて、民衆の政治思想を代表すべき自由黨及び改進黨などが組織せられた。

ところが、自由黨が、フランスの政治思想を直譯した儘を宣傳して、過激に流れ、往々粗暴の言動を示したので、權勢維持につとめてゐた時の政府は、政黨を嫌惡し、それに向つて烈しい壓迫を加へた、そして言論、集會、結社の自由を殆ど奪つたのである。かうして當時の政黨に取つて、最も困難な時代が來た。政黨は政府の非政を攻め、政府は政黨の勢力を阻ひ、そこに激しい暗闘が續いた。心あるものは、早く憲政實現の時が來て、君民一和の旨が具體化されんことを熱望してやまなかつた。かういふ具合で、時代の傾向は政治熱の高潮を示し、民間で續々發行した新聞、雜誌は、政論のための機關であるかのやうな勢を示した。また政治を論じたパンフレットのやうなものが澤山出た。政治小說はかうした時代を背景として生れたのである。

二

明治初期の政治小說が、文學者の手にならないで、主として當時の青年政治家の手になつたわけは以上の時代的背景を考へると、自らわかる。それらの若き政治家は、一個の理想を抱き、日本の政治をもつと民本的ならしめ、新代の趨

勢に適應させようと考へた。が、言論上に加へられた烈しい壓迫は、彼等の所思を自由に披瀝せしめなかつたので、勢ひこれを政治小說の上に托しようとしたにちがひなかつた。それは藝術的動機または文學的衝動によつて製作されたものでなくて政談演說を單に小說の形でしようといふ行き方のもの、或はイギリスあたりの政治小說を翻譯して、暗に日本の政治を諷じようとしたものなどであつた。末廣鐵腸氏の『雪中梅』『花間鶯』などは前者の部に入るべきものである。また中には、國士の氣風を振作しようとして藤田鳴鶴氏の『繫思談』（リツトン原作）は後の部に入るべきものである。また中には、國士の氣風を振作しようとして出た『經國美談』の類もあつた。

當時は小說の書き方がまだ定まらぬのみならず、小說として優れた風格を示したものが出なかつたので、最初はどうしても、外國の小說を譯述するよりほかに適當の方法がなかつたやうである。織田純一郎氏が、リツトンの『アアネスト・マルトラバアス』を譯して『花柳春話』の新題名の下に公刊したのは、その邊の事情による。リツトンの作品は、スコツト、ヂスレリイなどのロマンスと共に日本に迎へられ、殊にヂスレリイはイギリス第一流の政治家で文學者を衆ねてゐたことが、日本の若き政客を動かしたと見えて、尾崎行雄氏、關直彦氏らがこの方面の翻譯をしたことがあつた。かうして政治小說の最初に出て來たのは、主として翻譯物である。そしてその譯し方は、いづれかと云ふと、生硬蕪雜の氣味を免れなかつた。『繫思談』一篇を手にしても、それがよくわかる。

『繫思談』の例言を見ると、譯文について、可なりに力を入れたやうであるが、事實は寧ろそれを裏切つてゐた。例へば、チリングリイ家の夫人カロリンについて「斯婦人其容姿は十分、其夫の心に叶ひしかど、到る處其夫の姤に遇ふといふべき程にはあらざりし。其技藝とても凡ならず聞え、ピアノに於ては、樂師も其善く習得たるを稱讚すべく、但し全く斯婦人の樂を聞かん爲め、故らに再應尋ね來る樂師のありとしも思はれざりし。」といふ風で、いかにも直譯風が倚ほ殘つて耳ざはりであつた。が、それは『繫思談』ばかりではない。一般的にさうした傾きがあつた。

政治小説に於て、最先に純粋の創作として出たのは矢野龍溪先生の『經國美談』である。この小説執筆のことについては、先生の自序中に「明治十五年春夏の交、予疾あり。臥蓐連旬、無聊に勝へず。眼、史册に倦む。卽ち和漢の小說を求めてこれを讀む。諸書脚色陳套、語氣卑下にして人意に滿たざるを憾む。後ち數日、手に任せて、枕上の書を取りこれを讀む。卷中會ま希臘、齊武勃興の事迹を記す。其事奇異、粉裝を加へずして人を悅ばしむるに足る。因て之を譯述せんことを思ふ。乃ち諸家の希臘史を索む、其書甚だ稀なり。學校用の小册子の外、唯僅に兩三部を得るのみ。プリユタルク、或はセノホン等の如き、希臘古史家の遺書にして當世に存在し、英譯に係る者に至ては絕て之を得ること能はざりき。且つ史家が齊武の事を記するや、多くは其大體に止て、當時の顚末を詳記せる者少く、人をして模糊雲烟を隔つるの想ひあらしむ。是に於てか始めて其欠漏を補述し、戱れに小體說を學ばんと欲するの念を生じたり。然れども予の意、本と正史を記するにあるが故に尋常小說の如く、擅に實事を變更し、正邪善惡を顚倒するが如きことを爲さず。唯實事中に於て少しく潤色を施すのみ。」と記してをられる。嚴に云ふと、それは政治小說と稱するよりも、歷史小說の部類に入るべきものである。が、先生は當時政界に於て少壯有爲の新人として聲名を馳せられたので、自然、小說の題名などから文學史家が政治小說の部に入れられたのであらう。

私が一昨年春、先生を訪ふた時、政治談のほかに文學談をも拜聽した。その際、私は『經國美談』について先生の意を伺ふと、先生は「あの時分は、丸で小說らしい小說がなかつた。私の『經國美談』は眞實に國士の風を皷吹しようと思つて、材をギリシヤに採り、智仁勇の各一方に長じた人物を配置して、半ば空想を以て書きあげたのだ。」と話された。が、私は多少、そこに寓意が、おぼろ氣ながら、あるやうに思ふ。篇中の事實は、ギリシヤ史上、テエベの覇業として一般に知られ、先生が智仁勇にあてはめられた人物のうちで、エパミノンダス、ペロピダスウは人傑として名高い。殊にエパミノンダスは政治、軍事兩方面にすぐれた手腕を示し、人品もまた高潔であつた。龍溪先生は、當時の人たち

に向つて「エパミノンダスを見よ。」と聲かけられたのではなかつたか。

『經國美談』は今日讀んでも可なりに興味が多い。その文學上の生命が割合に長いのは、結構がよく整うて、首尾、起伏の上に老巧なところがあると同時に文章が平明、雅醇なからであらうと思はれる。卷中、第一回にテエベの三傑を點出して、その少年時代に於ける個々の異つた俤を描き、後年、大業を爲すべき性格を暗示したところは、用意周到で、全篇の伏線となつてゐる。そして全體を通じて、人物描寫にも、特殊色彩を發揮し、力めてその性格を躍動させた點は、當時の小說中に於て、確かに一頭地を拔いてゐた。

三

『經國美談』が出てから、程なく、明治十九年、末廣鐵腸氏の『雪中梅』が出た。それは創作として一番早く現はれたものである。今日、『雪中梅』を繙いて見ると、この小說が當時、どうして非常な人氣を呼んだかと怪まれるほどである。地の文と會話とがうまく調和してゐないのみならず、描寫の點が全く物になつてをらぬ。結構も亦單調で、月並式な場面轉換を行つてゐるにすぎない。どの點から見ても政治小說として低級なものである。

一篇の結構は、青年政治家國野基とその許嫁の淑女お春との得戀を中心として、當時の政界に於ける實狀――それも皮相に失した光景を叙してゐるにすぎない。まだその筆が描くといふ程度に達してゐないのである。而もそれが非常な人氣を呼んだのは、何故であらう。それは時人が關心事とした國會のことをあて込んで記したり、まだ新しい興味を感じて珍しがられてゐた政談演說會のことを叙したり、政府の態度を非難したりしてゐるところが、一般の實感を強く刺戟したからである。

篇中、第二回には政治演說會の光景を叙してゐるが、それは確かに時人の共鳴を惹起させたであらうと察せられる。

その冒頭には「鐵道馬車ゴウ〳〵と轢り去つて和合社の乘合馬車ガラガラと馳せ來る。路狹く人多く、往來雜沓す。忽ち見る横巷の入口に高く數幌の表榜を掲ぐ。曰く、來ル二十八日不レ論ニ晴雨一、書畫雅集席上諸先生揮毫、會主蝸字園再拜。曰く今廿日（日曜日）午後一時ヨリ井生村樓ニ於テ正義社政談演説會、出席辯士某々。」を記してゐる。それから政治に興味を持つ二人の青年の會話が左の如く初まる。

「オイ中村君、今日は井生村で演説會があるぜ、往つて見ようヂヤないか「さう云へば今朝、朝野新聞に演題が出て居たのを見たが、聽く程のものはないぜ、其の上少し時間が後れたからやめやう「早く出る奴はどうせ駄目だ、丁度い丶時分だ、奥山へ往つて見るものはあるまいよ、井生村へ行くべし「仕方がない十錢散財で御突合をしやう大分人が出掛けて來るぞ、久しいこと演説が無かつたのに今日は一二人上手の名前が見えるから遊歩に出た奴は皆來るだらふ、アレ又巡査が入口の前に居るぢやアないか「政談もい丶が、巡査の劍つくを喰ふには閉口さ「自分が法律を犯しさへせにやア何も巡査の怖いことはない筈サ、ソレ二三人門口から返つて來るぜ、彼の風俗では誰が見ても書生と鑒定が付くから胡麻かさふと思ふのか横着ぢやと兩人話しながら、井生村樓の門前に到れば、方さに室内に入らんとして庭口に立つもの七八名あり。巡査は一々これを呼び留めて姓名を問ひ、書生風のものに至つては、一々其の寄留の町名番地屋號を尋ねて、之を手帳に書き留め、其の官私學校の生徒に非らざるかを反覆問質し、然らざることを辯明せしめ、始めて通行を許す。必ず學校生徒なりと思ひ、之を說諭すれども聽かず、强ひて入場するものある時は電報を最寄の警察署に掛け、其の宿所に就て之を取調べ、愈よ學校生徒に相違なき時は之を警察署に拘引して裁判所に告發し、集會條例に照して罰金を命ずる事あり。（下略）

かう云ふ風に當時の實狀を記して、讀者に實感を起させ、それに續いて、辯士の演説中に民權伸張の論を寓し、政府の壓迫的態度を非難せしめてゐる。それに於て「他日國會開設の時に至り、財産や智識の乏しきとて人民を政權の外に

擯斥するの理由なきは誠に明白である。」などの語を挿入してゐる。結局、政談演説を小說の形式でしたものであるが、時人の共鳴しさうな政治的場面や出來事を摑へて、人々に强いショックを與へ、單調をまぎらかさうとしたところが作者の氣轉で、意外の成功を收めた所以であつた。

當時の政治小說は今日の小說にくらべると、餘程、體裁を異にしてゐた。そこには馬琴流と支那流とを取り入れたところがあつた。本文の上には必ず批評を付し、時としては本文に圈點を加へた。また目次の記し方は、一回毎に必ず二行に對つて、對句式に讀者の興味を喚ばうと力めた。例せば、『雪中梅』の第一回には「老母悲レ枕示ニ遺訓一　少女揮レ淚告ニ素懷一」とある。翻譯小說『繫思談』にも「琴瑟十年遇ニ佳配一　熊羆一夜獲ニ奇兒一」といふ風に目次を記してゐる。本文の上にある批評は譯者、著者自らこれを記したり、或は諸家の賛評をあつめてゐる。今人が丸で思ひ付かぬ一趣向である。

四

さて『雪中梅』の次ぎに『花間鶯』が明治廿年頃に出てから、その評判の宜いのに促がされて、政治小說を創作するものが多少出た。その中で、喝采せられたのは、須藤南翠氏の『新粧の佳人』及び柴東海散士の『佳人の奇遇』などである。『新粧の佳人』は『雪中梅』と同系のもので、當時流行の夜會や舞踏や若くはその粉本を想像せしめる少壯政治家などを描いて、主として讀者の實感を動かさうとした作品である。『佳人の奇遇』は東海の一遊子に愛蘭の一美人幽蘭女史を配し、世界の各亡國に於ける志士を點綴して、悲痛な場面を展開した作品である。篇中に詩などを挿入して、非常に誇張した文章で書かれてゐた。さうした花やかな、寧ろ幼稚に失したところが、却て讀者に喜ばれたのである。そして作者は表面東海散士となつてゐるが、實際の作家は漢文學者高橋太華氏であるといはれてゐる。

この政治小説の流行は、明治二十一年頃になつて、丸で火の消えたやうにやんでしまつた。それに代つて、二葉亭氏や硯友社の人たちの小説が次第に文壇を占領するやうになつた。つまり、素人の小説のあとに玄人の小説が出たのである。政治小説の命脈が以上のやうに短かつたのは、いろいろの原因がある。この點について、德富蘇峰先生は明治二十年夏、早くもその欠點を指摘した。それは(一)體裁の不體裁(二)脚色はあれどもなきが如し(三)意匠の變化少し(四)畫いて穿たず(五)俗物の共進會、の五欠點である。その非難は大體に於て當つてゐた。少くとも、龍溪先生の『經國美談』の程度に達した作品が今二つ三つもあるならば、蘇峰先生も亦これ迄に非難を加へなかつたかも知れない。

が、よく考へる迄もなく、鐵腸、鳴鶴、東海散士その他、政治小説に筆を染めた人々は概して小説の上では素人である。それに對して始めから多くを求める事が出來ない。文學的價値は別として、當時の淋しい小説界に一味の新趣と生氣とを與へ、眞の文學的作品が出る迄のつなぎを付けたのを、一つの功績と見るべきである。それにしても、今日では『經國美談』以外のものは唯當年の世相を偲ぶ資料として見るよりほかがないと思ふ。時は過ぎ、趣は移る。政治小説などいふ聲は、もう久しく聞くことが出來なくなつた。私は梅に鶯を畫いた『花間鶯』の石版刷の表裝を見て、今更に感慨が深い。

大阪地方を中心として觀たる明治文化の曙光期

河井醉茗

みやさん、みやさん、おうまのまへに、ひらひらするのはなんじやいナといふ品川彌二郎子が作つた童謠トコトンヤレ節（民謠？）が、まだわれ〳〵子供等の間には盛んに唄はれてゐた。それと同時に「西郷隆盛鰯か雜魚か、たいに逐はれて逃げてゆく」といふうたも大いに流行つた。たいは谷の轉訛といふよりも、谷をもじつたものだらう。

當時は別に童謠とか民謠とか判然區別されてゐない、たゞの流行唄であつて、それがまた子供も大人も一緒にうたつた。唱歌といふものもないし、軍歌（後に云ふ）もまだ現はれないし、子供等はたゞ流行唄をうたふより外仕方なかつた。

右の二つのうたはさうでないが、その外の流行唄といふものが甚だ猥雜なもので、淫蕩どころの騷ぎでない。極めて露骨な野性なうたで、明治二十年頃までも然ういふ風潮が續いた。

トコトンヤレ節が忘れられかけた頃から十五六年頃を經て二十年前後に渉る間は流行唄の全盛時代ともいふべく、他の地方のことは親しく聞かないから分らないが、へらへら節、ちよんこ節、ひやひや節など迚も覺えきれないほどあつて、最後にしのゝめのストライキといふのが行はれたが、それは遙に後のことだ。

三味線に合せてうたふうたは又別に發達してゐた。地唄（上方唄）、江戸唄その他があつて、それは必ずしも流行に作はない、けれども流行唄も亦三味線に合せて唄はれたことも無論だ。

維新のどさくさが治まりかけたところへ西南戰爭があり、人心の昂奮がまだ鎭まらない時だつたから、反動的に淫猥な流行唄が行はれたものだらうが、元來京阪地方には人も知る通り然うした風習もあつて、町人の都會情調としては怪むに足らない。

流行唄の背景には官員を崇拜し、書生を認め、藝妓を持てはやし、歐化を謳歌し、政界を諷し、階級を打破しようとする聲さへあつた。民衆的といへば確に民衆的で、今日からみれば無知には相違なからうが、時代に對する衝動は大き

かつた。何かしらうたでも唄はなければゐられなかつた時代だ。淫蕩でもあつたらうが一歩深く考へると、それはみな破壞と發生、衝動と解放の叫びに外ならなかつたのである。

われ〳〵子供達が何のことゝも知らず流行唄をうたつてゐる間に、文化は刻々に進んで行つた。その最初にわれ〳〵を文字の世界に導いたものは新聞紙であつた。

大阪朝日の創刊はたしか明治十二年だつたかと思ふ。子供が讀んでも何の事とも分らなかつたけれど、小學校の讀本よりは面白いことが書いてあるらしい。その頃の新聞は雜報に挿畫があつた。雜報の文章ものんきなもので、今思ふと半分は戯文的の文章らしかつた。それが稍後になつて（明治十五六年以後）つゞきものといふ讀物（主に時代もの、即ち一種の歴史小說）が挿入で毎日載るやうになつてから、新聞は大した勢ひで家庭に入つていつた。私が初めて新聞に讀みついたのは明治十八年淀川の大洪水の記事からであつた。東京の新聞は殆ど見る機會がなかつた。

新聞はあつたが雜誌はなかつた。たゞ一つ「團々珍聞」といふものを覺えてゐる。菊版位の大きさで表紙も薄い紙だ。內容は文章と歌らしいものばかりで子供には見ても仕樣がなかつた。後に狂文、狂歌、川柳などが稍解し得られる頃まで「團々珍聞」は續いてゐた。雜誌の乏しい時代に珍しく地方にまで知られてゐた。

まだ郵便物を遞送するのに、脚夫が挾箱のやうなものを擔いで、街道を往復してゐた頃だから、雜誌などを知る機會もなかつたのは當然で、事實その數も極く乏しかつたらう。

小說類もまだ活版本は見られなかつた。木版本で見られたのは何ういふ機會かといふに、住吉邊から來る貸本屋があつた。琉球人のおぢいさんで頭髮を結んでゐた。そして一本の笄みたやうなものを頭髮に挿してゐた。彼は自分の身丈より高い風呂敷包みを脊負つてよく家へ入つてきた。その包みから小說繪本類のかずかずを出しては見せてくれた。馬琴といふ名を初めて覺えた。小說も可なり知つた。併し本は私が借りるのではなかつた。母が借りるのだ。母は小說が好

きで、自分が讀んで祖母さんに筋を話した、私も聞くのが好きだつたが、そのうちに假名をたどつて自分でも讀むようになつた。何しろ木版本のことだから一冊づゝ讀んでゆくとらくに讀める、さうして相當に長い小說も一冊一冊つゞけつゞけして讀んだものだ。明治の出版かと思ふ木版本も數種見たやうだが、何を讀んだか覺えてゐない。たゞその中で假名垣魯文の「胡瓜圖解」「西洋膝栗毛」など覺えてゐる。膝栗毛といふ言葉は元祖の一九のものよりも先に知つたわけで、一九の東海道は遙か後になつて活版本で見た。

見料もその頃の物價に準じて廉いものであつたらしい。一冊三厘とか五厘とかであつた。見料を拂ふのにいつも穴あき錢を渡したことなども記憶に存してゐる。

活版本の小說類が自由にわれ／＼の手にも入るようになつたのは矢張十八九年頃から後のことである。「佳人の奇遇」は有名であつたが（これは大きな字だつたから活版でなく木版だらう）矢張二十年後になつて一讀した。「經國美談」「雪中梅」「花間鶯」の類も無論さうだ。

たとへ木版にしても活版にしても、私達が早くから然ういふ文學ものに親しめた所以は、小學校の教育が現在とは餘程異つてゐて、一年からむつかしい漢字を教へたからだ。今の六年位の生徒が習ふ漢字を、私達は一年の時から教へられた。私は子供の時は物覺えがよかつたとみえ、教へられる漢字は一字も忘れなかつた。いつも先生から褒美ばかり貰つてゐた。他の子供達がなか／＼覺えないで、苦しんでゐるのに、私だけが苦なしに覺えるので他の子供にきまりがわるくなり、後には知つてる字でも、知らない顏をするやうにしてゐた。
家へ歸つて復習する時でも、お父さんに聞くと知らない字がある。大人でも知らない文字があるものかと私は思つた。

さういふ工合に早くから漢字に接したといふことが、私などの文字好きのものに讀書の機會を逸早く與へたのであつた。それで苟くも書物といふ書物は何んなものでも涉獵したのだが、家は商家のことであり、町は商家の町であり、容

易に書物は手に入らない。漸く明治二十年後になつて活字本が洪水のやうに現はれてきたので、その嬉しさつたらなかつた。

その以前から町には土屋鳳洲といふ儒者が居て、晩晴塾といふ私塾を開いてゐた。私がも少し大きかつたら通學してゐたらうが、何しろ幼い子供だつたから漢學塾へ通ふやうなこともなかつた。

私の小學校時代には唱歌といふ課目はなかつたけれど、或る時先生が「あゝ正成よ正成よ、公の逝去の此のかたは」といふ小楠公を詠ずるの詩や、「建武のむかし正成は」といふ楠公遺訓の歌などを教へてくれた。これが今日に及んで發達してきた詩の初歩、啓蒙ともいふべきものであつた。

最も詩とも新體詩ともいはなかつた。いたゞ軍歌の一種といふやうに思はれてゐた。軍歌には「われは官軍わが敵は」など、テニソン輕騎隊のうた「一里半なり一里半」など、また右の楠公のうたなど、他にも幾篇かあつて、軍隊が歩調を揃へてうたつて通るのを珍しいものとして聞いた。

それらのうたが或は軍歌集の名の下に、或は新體詩の名の下に、明治十六年頃から二十年後まで相當盛んに世に行はれたもので、その最初の集が明治十五年刊行の「新體詩鈔」（外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎合著）であつた。それにはグレー、ロングフエロー、セーキスピヤ、テニソンの詩などを初め幾篇かの英米詩人の作が譯されてゐた。日本の詩の創作もあつたが、藝術上の詩といふ自覺が判然しなかつた時代だから、疎笨、亂雜な點はあるが今日の自由詩の理想がそこに發生したことは確かだ。而して既に十五年に書物になる位だから、少くもその二三年前から氣運は動いてゐたに違ひない。

小室屈山の自由のうたなどいふ政治的の詩も既に十四五年頃に知られてゐた。和歌俳句以外、さういふ形のものがうたと稱して現れてきたのである。

その新體の詩歌は、或は分冊となり、或は合集となり、同じ詩歌が幾冊かの形を變へた書物になつて刊行された。右に擧げた詩鈔は十五年の出版だが、二十年に「明治新體詩歌選」(佐藤雄治篇)が刊行されて大部分統合されるに到るまで、可なり多くの小冊子が刊行されたらしい。今日では既に散佚して容易に得難いだらうが、私の記憶に存するものでも、その後影も形もなくなつたのが二三種ある。

うたふものとしての軍歌體の流行は、當時流行唄(まだすたりはしなかつたが)の外知ることの出來なかつたわれわれ子供達に取つて少なからぬ好影響を與へ、また新意を鼓吹した。それが今日の詩にまで、成長したのだが、その間約四十四五年を經過してゐる。文化の進展も容易ではない。

以上はまだ東京との交渉の少なかつた大阪地方にゐた當年の私が、幼少年の記憶を喚起して述べてみたに過ぎない。極く狹い範圍のことで、如何にも混沌期の混沌たるものであるが、それでも文化の過程を知る一端ともなれば幸ひである。

明治初期の大阪の新脚本

高安月郊

明治の始は大阪の芝居も舊脚本をくりかへしてゐたが、六年戎座で「誠忠譽强勇」を出した。これは櫻田の殘黨高橋が大阪天王寺で自殺した事と、十津川の吉村寅太郎の事を組み合はせたものである。しかしそれまでの狂言作者の慣用

手段と同じく、事實はほんの一端丈で、人相も其眞相に注意もせず、重な場面は丸で作つて、しかも昔の趣向を借用したのがそれ以來も多い。櫻田事件は其最後に芝居で出した。

同年角の芝居で「大汐噂聞書」を出したが、これは大鹽平八郎の事件を取つたので、主人公は三桝大五郎が勤めたが、それよりは先代市川右團次が大岡紀伊之助と名乘つて城へ贋上使に來て女の色に迷ひ化の皮を現して堀へ飛込み逃げる所へ來合はせた三好屋五郎兵衛が驚いて京土産の陶器を落とす幕切が大當りであつたといふ。同年戎座で「君臣船浪宇和島」は宇和島のお家騷動。翌年七年角で「大和錦朝日旗揚」を出したが、それも十津川事件で、芳瀧の畫で見ると、(舞臺の儘では無からうが近いものとすると)嵐璃寛の吉村が細い月代に白い元結でしめた髪後へ下げ、白鉢卷に萠黄の鎧、太刀を負ひ、「生て此世の爲と成、死して未來の神と成」とした白幟を背に、右團次の中山は紫の紐で卷いた公卿髷に白鉢卷、赤地の陣羽織、緋威しの鎧、虎の皮の太刀を佩き、片岡我童の松本謙三郎は紫の鎧に、黄の帶を前で結んで先を垂れてゐる。最後は寅太郎が中山を落とし、自分も山家に忍ぶと、其主婦は惡婆、其娘と戀、安達原の様な趣向で立ち腹切る所で終つたといふ。

同年戎座で「千石積湊大入船」は仙石騷動。八年同座で「佐賀新聞」「新聞詞錦繪」角で「早教訓開化節用」に錦織熊吉といふ男が矢場女を殺した話を脚色したのは段々同時代の物が出て來たのである。九年には戎座で「魁難波戰記」は大阪陣で、片桐の苦衷、長柄堤の別、眞田の張貫筒、木村の血判取まで叙事的につゞつたものである。三代記や近江源氏より本名を出した丈一轉したが、まだ活歴式でも無く、まして人世の眞相を穿つたものでも無い。次で「護國女太平記」を出したのは柳澤に關する誤傳を講釋に依つてつゞつたので、固より事實でも無く、吉保も、綱吉も泥をぬられたものである。

十年角で「鳴呼忠臣楠柯夢」は維新の志士が等持院の足利代々の木像の首を斬つた事をつゞつたもの。中で「娼妓誠

開化夜櫻」は吉原の妓今紫の話、先代阪東彦三郎が勤め、其情夫の兵卒小八郎は先代實川延若であつたが、髪を眞中で分けて搔上げ、黑袴のかゝつた着付、兵子帶だらりと垂れ、傘さして歸るのを、樓上より見送る女が「端書でなりと」便りをしてくれといふ臺詞が大受であつたとは、其頃端書が出始めたのである。

十一年は西南戰爭を當込んで戎座で「西南夢物語」を出した。延若の西條高教は髪を綺麗に分けて長い肥髯、大將の軍服、中村翫雀の志那津の館へ暇乞に行く所が眼目で、「薩摩の士になれいよ」と見送る幕切は海舟にでも見せたら絶倒したであらう。璃寛の貝原一作の門出は矢間重太郎よろしく。同年中で出した「近世櫻田雪紀聞」にも同じ樣な場面があつた。嵐橘三郎の蓮田市五郎の門出もそれと似かようた。翫雀の黑澤忠三郎と藝者との關係は小三金五郎を借用した。璃寛の有村次左衞門が櫻田の狙擊の跡で血で詩を題したが固より浪士を主としたものである。角で「黃門記八幡大藪」は安宅丸の一件から光國が八幡の藪に迷ひ込んで怪しの人物に宙に引き上げられる所など講釋に依り、右團次が光國を勤めたが、團十郎の鏡の間の緊張した所は無かつた。

十二年には戎座で「蝶千鳥曾我實錄」、河津の討たれる所から敵打まで、母の家へ禪師坊が尋ねて來る所丈今も出るが、わざと逢はずに返さうとして自害するなど例の趣向、しかし此時は大一座で、延若の十郎、璃寛の五郎、先代福助の禪師坊、嘉七の祐經、雀右衞門の滿江、橘三郎の朝比奈など大阪役者の重な者を並べて、大阪錦繪の樣な濃厚な色を出した。

角では「雨夜伽累譚」、累の話を長く脚色して、奥女中から田舍の女房になり、顏も變る所右團次が當てたものである。其頃から彼は每回新作を演じて、十三年は「神靈菅原實記」に道眞、「雨梅鉢金澤評定」に高田善三郎、「御文章石山實記」に顯如、「小栗外傳」に判官など、技巧より一人で他の大座に當る意氣込、型物より新物に我流を揮つた。

戎座でも其後「鳥追阿松海上話」に福助が毒婦を演じ、十三年には「柳生流伊賀水月」に伊賀の仇討、延若が荒木を

勤めた。「泉水月寫佛」は岡山騷動。「迷子札裁斷杵礎」は大岡政談で、璃寛の盜賊木鼠吉五郎が嘉七の老人を助けた報に自分もはからず死を免れて再會する筋に、大家の若旦那が唐瓜賣になる話、無實の罪に死ぬ浪人の妻の愁嘆場など交つて、默阿彌物に似かよふたが、大阪役者では江戸の色は出難かつた。中で「梅子聞書」は新聞種。「入梅時節朝日新聞」も同樣。

十四年は戎座で「小笠原諸禮忠孝」、延若の隼人に岡田、水車の立廻りが大當りであつたといふ。中で「江戸紫德川源氏」は江島事件。角で「東海道小夜中山」は中山問答。これも講釋に依つて、中山が論爭に勝ち、松平越中守が閉口する樣になつてゐた。「指紋鮮血染野晒」は圓泰二といふ學校教師が其下來の妻との私通事件、始め女から言寄るのを拒み、それで水に入るのを助けて戀になる段取は一寸心理を現はした、しかし其夫を殺したと思ひ、女の里に逃げて、其父に告訴され、自殺する結局、例の勸懲に落ちた。右團次が勤めたが、好評であつたのか、其後二度ばかり出た。十五年は「日蓮大士眞實傳」、福助の日蓮は信徒を引いて、得意の出物になつたが、固より其人の特性を表現したもので無く一代記の表面で、顏も柔和な僧であつた。佐渡では流石にやつれて、日朗との出會は眼目らしかつたが、到底意思の人で無く、法華經にすがる他力の人にされた。

戎座で出した「金華山陸奥名所」は伊達家の事件で、延若の原田甲斐に東京から歸つた中村宗十郎が板倉内膳正と片倉小十郎、しかし二人の藝風の相違はまた東西の脚本の相違を暗示した。東では活歴が大分行はれて、藝風も自然的になりつゝあつたが、西ではまで舊型を脱せず、甲斐も彈正も大差は無かつた。

十六年には戎で「弘法大師御傳記」、これも空海其人より、抽象的宗教家の輪廓。「若綠二葉松」は新聞に出たお家騷動。中でも「短夜夢朝日手枕」を出したのは、新聞物を脚色するのが流行したと見える。

作者は勝諺藏が四五年頃から戎、中の立作者になつたが、どれ丈彼の創意やら、脚色やら、分擔やら、どれ丈舊作を

手入れしたやら、どれ丈け舊趣向を借りたやら、何分今に殘つたものは極僅であるから確に斷定する事はむつかしい。十七年に河竹能進と改め、十九年に歿した。其子諺助、始め角の作者であつたが、父の改名の時、諺藏の名を受け、二十三年に歿した。作數も父より多く、創意も多かつたといふ。しかしそれも多く殘らぬのは、第一昔の狂言作者の習として、身分の主觀から着想したので無く、其時々々の間に合はせたので、永續性をもちもせず、心がけもしなかつたであらう。役者本位にしたのも、後に通用せず、長過ぎて、一場拔き出すほど集中した處も無く、兎角人より事の變轉を主としたから、其事が時代におくれると段々興味を薄くする。浮世繪が東ほど發達せず、音曲が義太夫以外種類に乏しかつたから、繪模樣に大阪の色を出した所も稀で、清元、常盤津などが東のに應用された程使はれなかつたのも不利であつた。しかもそれ等が舊作と交り、時には多く出たのは無意味で無い。舊作丈では足りなかつた時代の要求が陰然座元を支配したのであらう。舊型では安んじなかつた名優の意氣が促がしたのであらう。二十年頃に宗十郎が殊に新方面に努力して、「千種秋嵯峨月影」に仲國を勤めたのが活歷の始、更に近世史の人物を勤めて、初期より一歩現實に近ついたが、著るしい效果を結ばず、それより淨瑠璃物に典型を殘した。「天網島」は十年に延若と彼と同時に紙治を勤めたのが後の手本になつたのである。梅忠、伊左衛門などは更に其前、今の樣に當藝をくりかへすといふ事は無かつた。

要するに二十年頃までを第一期とすると、三大座幟を並べて、名優も二三はある、相對立して、それに次ぐ者も少なくなく、若手も續々華を咲かせて、新脚本を續出したのは近頃より盛であつた。第二期で展びようとして展びず、第三期で停滯の姿であるが、更に一轉機となるのはいつであらう。

默阿彌の散切物

河竹繁俊

○

「散切物」はまた「散髪劇」とも言ひならはされてゐる。

ひと口に「散切物」といへば、直に默阿彌の書いた、明石の島藏松島千太の『島衞月白浪』や、『霜夜の鐘十字の辻筮』などといふ作が浮ぶ。けれども、散切頭の鬘を掛けた人物が舞臺に現はれたもの、卽ち散切劇乃至散切物だといふことになると、その範圍は甚だ廣くなる。新派劇も社會劇も、飜譯劇すらも一種の散切物だといふことにならう。

さうなると、散切物の定義を明らかにしなければならなくなるが、慣用上から言へば、歌舞伎の俳優が、髷物（まげもの＝ちよんまげものの略？）をするに對して、散切頭の人物の出る芝居をするのを散切物、と稱してゐると見てよからう。けれども、さうなると、東京座などで今の中村歌右衞門や松本幸四郎等が、『不如歸』や『乳兄弟』などを演出したのも、散切物かといふことになる。これはどうも散切物といふ慣用意義の中には入れ兼ねる。そこで、もう一つ限定を附して、「新派劇發生以前に於ける散髪劇を散切物といふ」としたらどうであらう。その方がおだやかに思はれる。

○

玆で散切物の說明をしようとは思はなかつたが、もう前に詳しく調べた人があるかも知れないが私は不敏にして知ら

ない。漠然と散切物々々と口にしてゐたに過ぎなかつたから、書きつけて見た。

「明治の初年から新派劇の發生以前、即ち凡そ明治二十年前後迄の間に、舊狂言作者の手によつて執筆され、歌舞伎の俳優によつて演ぜられた散切髷の芝居を散切物といふ」――私は今の所そんな風に考へる。これには無論例外もある。明治三十年頃になつても、同じ方式の下に生れたものには、やはり其中に組み入れなければならぬものもあらう。例外はあること無論である。是れに就ては、尙大方の示教に俟つ。

かう見てくれば、散切物の作者としては、決してさう多くはない。默阿彌と默阿彌の高足二人、三世河竹新七と竹柴其水とあるのみである。試みに、手近の參考書によつて、主なる散切物の著作上演の年代と作者と、主演俳優とを表にして見よう。

○

明治六年十一月、守田座、「東京日新聞」默阿彌作　（浪士島越甚内。彥三郎、左團次、訥升、芝翫等。）

同　七年七月、同座、「三人片輪」默阿彌作　（赤米仙右衞門。菊五郎、左團次、芝翫等）。

同　十年四月、新富座、「女書生繁」默阿彌作　（男裝せる女書生。菊五郎、左團次、仲藏等）。

同年六月、同座、「勸善懲惡孝子譽」默阿彌作　（孝子の善吉。菊五郎、左團次、仲藏等）。

同十一年四月、春木座「廿四時海上新話」三世河竹新七作　（鳥追お松。百之助、市藏、我童等）。

同年十二年二月、新富座「人間萬事金世中」默阿彌作　（飜案劇。菊五郎、團十郎、仲藏、半四郎等）。

同年五月、同座「高橋お傳」默阿彌作　（菊五郎、宗十郎、左團次、家橘、團十郎等）。

同年九月、同座「漂流奇談」默阿彌作　（團十郎、仲藏、宗十郎、小團次等）。

同年十三年六月、同座「霜夜鐘十字辻筮」默阿彌作　（團十郎、菊五郎、左團次、宗十郎、仲藏、半四郎等）。

同年十一月、同座「木間星箱根鹿笛」默阿彌作　（菊五郎、左團次、仲藏、小團次、團十郎等）。
同十四年十一月、同座「島衛月白浪」默阿彌作　（島藏千太。菊五郎、左團次、仲藏、團十郎、半四郎等）。
同十七年四月、同座「滿二十年息子鑑」默阿彌作　（徵兵の狂言。菊五郎、左團次、團十郎、松助等）。
同十八年二月、千歲座「水天宮利生深川」默阿彌作　（筆賣幸兵衛。菊五郎、左團次、松助等）。
同十九年一月、新富座「西洋噺日本寫繪」默阿彌作　（うどんや殺し。團十郎、左團次、小團次等）。
同年五月、千歲座「戀闇鵜飼燎」默阿彌作　（藝妓小松。菊五郎、九藏、松助等）。
同二十一年四月、中村座「月梅薰朧夜」默阿彌作　（花井お梅。菊五郎、福助、松助、家橘等）。
同年十月、同座「音聞淺間幻燈畫」默阿彌作　（淺間の噴火。菊五郎、福助、家橘、松助等）。
同二十三年四月、市村座「聖世德大赦恩典」三世河竹作　（青木彌太郎。芝翫、菊五郎、左團次、松助等）。
同二十七年十月、明治座「會津產明治組重」竹柴其水作　（會津戰爭より日清戰爭まで。高助、左團次、權十郎等）。

○

上に拾ひ出した以外にも、數々ある。大切淨瑠璃には澤山にあるし、默阿彌にも三世河竹新七にも、竹柴其水にもある。が先づ、代表的と言つていゝものは、このくらゐなものではあるまいか。

かう一覽表のやうにして、扨今日まで、約半世紀の時間によつて選擇された結果、人の記憶にどれだけが存してゐるかを考へる時は、自づと散切物の價値乃至は內容を語つてゐるやうで心細い。

哀切なる親子の情愛を描くことに成功した『孝子の善吉』。變轉極まりない情景の劇的變化と探偵小說的の興味と、絢爛な詞句に富んでゐる『霜夜の鐘』。男性的な意氣を描くことに成功した『島衛』——これらの三者を除いては、目をそばだゝしむるものもなからうやうに思ふ。『筆賣幸兵衛』は散切物の部類ではあるが、主要な人物は散切でないから、

暫く仲間はづれにさせて考へたい。

散切物を書くに際して、作者はどんな心持で書いたか。又其の上演に際して、役者はどんな風に演出したか。世間はどう受け取つたであらうか。後にどんな影響を殘したらうか。さういふ問題を仔細に調べて見ることは、なか〳〵に大切なことである。然し、自分の勝手から、時間を與へられなくなつた今日、十分に意を盡し、研究をしてゐるわけに行かない。私には興味のある問題だから、他日いゝ機會にゆつくりと見ることをしたいと思つてゐる。

○

作家といつても、默阿彌がその大部分でもあるし、又最もよく努力してゐる。散切物は默阿彌に終始してゐるとさへ言へる。

默阿彌が日本に於ける散切物の第一作たる、『東京日々新聞』といふものを書いたのは、明治六年のことであつた。「ざんぱつの鬘着流し、白のしごき帶、駒下駄、書生の拵へ」といふ人物を舞臺の上へ連れて來たのが明治六年とすると、實に流行を穿つたものごあつた。社會辭彙によると、散髪の風は横濱では明治二年頃から、東京では明治五年頃からであつたが、明治八年に至つても、東京人士七割までは丁髷を所有してゐたとある。また、常磐橋御門外のある箆頭舖に「西洋風髪結床」なる招牌を掲げたのは明治四年四月のことで、東京に於ける散髪屋さんの濫觴だと記載されてもゐる。明治六年といへば、ゴクの洋風カブレの書生だけぐらゐが散髪姿であつたに相違ない。作者たる默阿彌は、明治八年の寫眞までは丁髷頭である。

默阿彌が明治十四年に一世一代の口上といふものを述べて、それは紋番附に載せられてあるが、その口上の中に「……追々老年に及び世之流行におくれ候故四五年前より退身致度と申出で候得共云々」とあるが、この文句によつても分かる通り、世の流行に遲れまいといふことが、狂言作者の一大信條であつたのである。是れは默阿彌に限つたことで

はないが、特に世の流行に遲れないやうにと、絶えず活社會の事象に注意してゐたことは事實である。それが、明治維新の大變革に際しての變り方は、實に言語に絕した非常な變轉だつたのだから、狂言作者界を代表してゐた默阿彌の眼が異樣に輝いて、如何に新代の流行に向けられたかも想察せられる。

明治も二十年頃から後には、小說にもしつかりした作が現はれたが、それまでは假名垣魯文が代表的作家といふ時代であるから、この時代は寧ろ演劇の方が一步も二步も進んでをり、大發展を遂げてゐたと言つてよからう。その意味から言つて、明治初年の社會風俗、廣義に於ける浮世の有樣は、おそらくは、默阿彌の散切物以上に、如實に詳細に反映してゐるものはなからうかと思ふ。

實によく攝取してある。默阿彌の注意力と消化力が如何に旺盛であつたかは、彼れの散切物によつて、最もよく證據立てられるとも言へる。

傳聞であるから、明確ではないが、穗積重遠博士は明治初年の民衆と法律といふやうな題目を調べる爲めには默阿彌の散切物に如くはないと公言せられたとかいふ。おそらくは相當有力な材料たることは　私も保證する。單に新代の風物のみでなく、一般民衆が感じてゐた新代に對する、不安、動搖をも寫してゐる。それはどの作によつて見ても明白に看取される。

然し、作者はそれを書くに、全然歌舞伎劇の手法によるのほかはなかつた。セリフも七五調であるし、構造樣式も悉く、歌舞伎劇の約束に従つたものであつた。

材料に對する努力や攝取は此上もなかつたが、手法が全く新代のものでなかつた。立派な現代劇の要素と材料とを、歌舞伎の鑄型に押し込んでゐたやうなものであつた。歌舞伎劇を轉化し、新時代の演劇を生むまでに到らなかつたの

は、その故である。

尤も、それには役者のせゐもあつた。よしんば作者が、全く新傾向に歩み入ることができたにしても、役者の方がどうにもならなかつたであらう。少くも、九代目團十郎が新時代の時代物——史劇たる、「活歴物」に對して示したゞけの、新演出は到底望めなかつたであらう。

○

「東京日新聞」の主人公鳥越甚内に扮したのは先代の阪東彥三郎であつたが、彼れは根本から、散切物たる新世話物に同感が持てず、次に同じ作者によつて書かれた「三人片輪」に出場することを拒否したくらゐである。

たゞ五代目菊五郎と先代左團次とがあつて、新世話物に工夫を凝らしたのであつたが、それは九世團十郎の啓蒙的な藝術とは比較にならない程度のものでつた。

であるから、作者が新傾向のものに書いて與へたにしても、舞臺上では依然として、在來の二番目と異つたものにはならなかつたであらう。然し作者が敢て新傾向の様式を續出し、次第に教育するやうなことになつたならば、日本の芝居はもつと、時代と接近したものになつてゐたであらう。川上の起した新派劇は、新派劇に對する新劇團のやうな位置におかれたかも知れなかつた。

○

理屈はいろ〳〵言つて見るが、あの時代に、あれだけのものを書いて、舞臺に持ち出させたのは、まつたく默阿彌の力である。

・默阿彌はきつと非常のアムビシヤスな心持で、散切物を書いたらうと思ふ。單に流行を追ふのが狂言作者の役目だからといふばかりの努力ではなかつたらう。日に〳〵眼前に開展せられる新代の風物を、あれだけに纏めた手際は鮮やか

なものだと思ふ。けれども、役者の技藝を十分に考慮したせゐもあらうが、第一作から數年を經た、散切物の圓熟したものに至つても、思ひきつて寫生的な樣式と手法のものにならなかつた。

努力も十分に認める。又時代世相の活寫に於ける功績も認める。けれども新代の劇として取扱はれなかつた憾みがある。歌舞伎の生んだ一つの畸形兒として、散切物は永久に散切物としての價値しか認め難い。

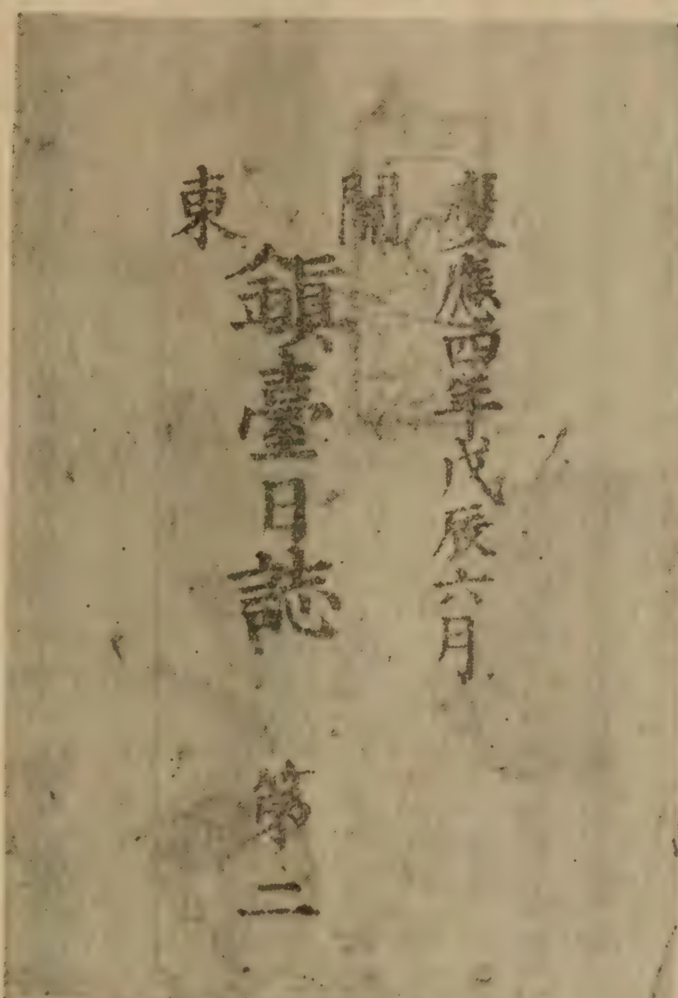
………私は結論としてさう言ひたいのである。

新聞雜誌と海外文學の飜譯

長谷川誠也

こゝに明治初期――と言つても甚だ漠然たる語であるが、維新後から、先づ憲法發布の年、又は文壇において『小説神髓』が發行された頃までをふくむものとして、さてその期間における新聞雜誌の發達、および海外文學の飜譯についてやゝまとまつたものを書かうといふのは容易の仕事でない。今から十七八年前に、私はこの方面の研究を試みようと思ひ立つて、ぼつ〳〵材料を集めかけたのであるが、他の仕事に追はれて、とてもその研究をつゞけてゆくだけの餘暇が無かつたので、いつの間にか、材料の寄せ集めすらやめてしまひ、また集めた物の大部分は、早稻田大學の圖書館へ寄贈してしまつた。だから今日、私の手元に殘つてゐる材料は、極めて僅かで、それらを元として此の題目の下に、何か書かうとするのは、種のない奇術をやるよりも困難である。それならば何も言はずに居る方が賢いのであるが、本間君から

是非ともといふ御話もあり、かつ本誌を毎號頂戴してゐる義理もあるので、默つてゐるといふわけにもゆかず、どんな物になるか自分にも分らないが、とにかく書いて見ることにした。本間君からの御話は、最初新聞雜誌だけであつたのだが、その後、海外文學の飜譯も共にといふ事になつたのである。これは、この方面を書かれる筈の横山君が、病氣のために執筆不可能といふことから、私の方へ廻された問題である。重荷に何とやら言ふこともあり、かつ又、多年の研究を續けてゐらるゝ横山君の代理を勸めるのは、恐縮千萬、迷惑千萬であるが、時日切迫、他に適當の人を尋ねる暇もないから、間に合はせでよい、と言ふ話であつたから、臆面もなくペンを取ることにした。



鎮臺日誌

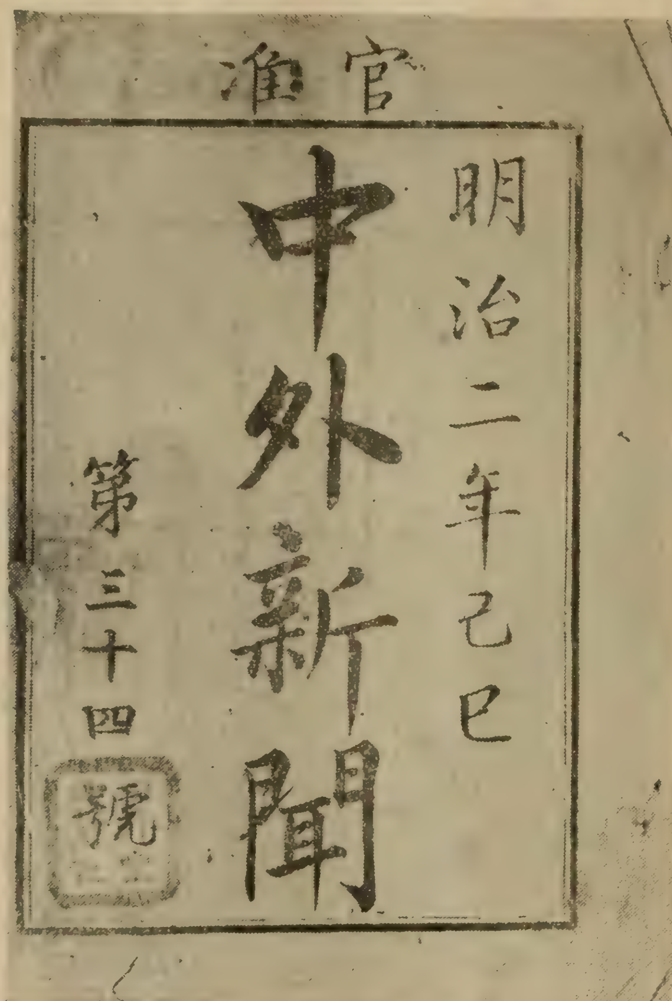
こんなわけであるから、まとまつた歴史の書けるはづもなく、また特殊の研究のあらうはずもない。なほこれらの研究としては最近大日本文明協會から出版された『明治文化發祥記念號』をはじめ、その他、部分的に、あるひは總合的に研究された良書が多い。新聞史に關しては、古いもので朝倉無聲氏の『本朝新聞史』、小池洋二郎氏の『日本新聞歴史』があり、近い頃のものでは、小野秀雄氏の『日本新聞發達史』がある。殊に小野氏の著は、この種の著述中、最も良くまとめられた物であるから、特志家は是非一讀しなければなるまい。そこで私が、こゝに書くのは、

貧弱な材料と記憶を本としてゐるから、これを讀む人々は、夕食後の雜談と思つてもらひたい。

一　新聞雜誌

今日でこそ、新聞と雜誌とは、全然とは言はないが、大に異つた物であるが、明治初期には兩者の間に區別が無かつたと言つて宜しい。『新聞雜誌』（四年五月木戸孝允の後援によつて創刊されたもの）といふ名稱のものすら有つたくらゐであるから、編輯する人の頭にも、讀者の頭にも兩者の間に何の區別の無かつたことは、推して知られる。

さて『バタビア新聞』（文久二年二月創刊）『海外新聞』（同上八月）などの外字新聞の抄譯、或は『中外新報』『六合叢誌』『香港新聞』などの支那新聞の翻刻、或は、柳河春三、箕作貞一郎等の設けた會譯社の仕事から、『もしほ草』『中外新聞』『江湖新聞』など、續々發行されて、歴史の第一章を作つた新聞雜誌が、その後どんなふうに發達したかを知る一の方法は、政府がこれに對して、どんな取締をなしたかといふ方面を、ふり返つて見ることであらうと思ふ。



中外新聞

二年二月に布告された新聞紙印行條例八項と附錄五項（開成學校で發表したもの）が　新聞紙取締に關する最初の條例である。そのうちの重な項目を揭げよう。

一、各號毎に出版の所年月日編輯人若くは出版者の姓名及び各號の號數とを載すべし

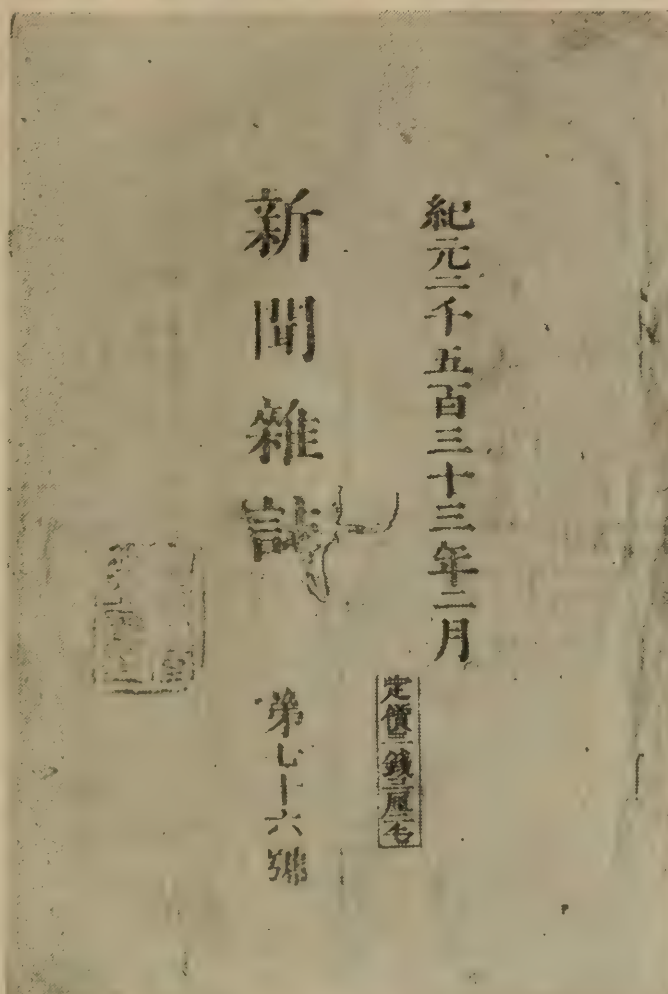
一、凡記載する事件に付て吟味すべき事有時は編輯人其辯解を爲すべし若し辯解無き者は罰金を出さしむ

一、一切天變地異物價商法政法（不許妄加批評）軍事（其說錯誤而不改者有責）火災嫁娶生死學藝游宴衣服宴食諸種官報洋書譯文海外雜話凡事無害者は皆記載すべし

一、贈答書牘或は各人作る所の文若くは雜說等其姓名を記す（只だ歌詩の內作者不詳者は此例にあらず）

一、新聞紙中人罪を誣告する事嚴禁なり

一、妄りに教法を說くことを許さず



新聞雜誌

この條例によつて、今日の新聞雜誌の體裁が定められたのである。そこで編輯人や起稿者の責任を明かにし、ことに攻

治軍事の記事について嚴重の取締をなさうとする意志の見ゆるのは、當時の政府が民間の議論に少からず苦心したことを示すものだ。教法に關する一項は外教排斥思想の殘骸である。さてこの條例の布告までは、新聞雜誌の發行は自由でまた盛んであつた。そして各紙の主張は、二の傾向に別れてゐた。その一は薩長派の脈をひいたもの、その二は佐幕黨の系統である。この佐幕黨の思想から生れたものが、盛んに新政府を攻撃したために、政府は言論の取締に苦心しなければならぬやうになつた。これは社會の一大變化に伴ふ必然の現象である。佐幕派から見れば、薩長派の行動は一々しやくに觸つたらうし、薩長側から見れば、佐幕黨の主張はじやま物であつたに相違ない。ところで、なんと言つても、實權を握つてゐたのは薩長系であつたから、佐幕系のものは常に不利の立場にあつた。福地源一郎が軍務官に引致されたのは、主張の上では勝つてゐながら、權力のために負かされた一例であらう。なほ小野氏が評してゐる通り、兩系統の新聞を比較すると、言論上では佐幕系のものが一歩進んでゐる。それだけ薩長系から見れば取締を嚴にする必要もあつたらう。そしてこの條例はその方針を示したもので、實際上では新聞の發行を困難ならしめたのである。事實、この條例が布告された後、暫くの間は、新聞雜誌の開版が甚だ少かつた。

しかし何と言つても社會は報導と新知識と新しい考へ方を要求したのであるから、三年十二月創刊の『横濱每日新聞』、五年二月の『東京日々新聞』、同じ頃の『日新眞事誌』、五年三月の『郵便報知新聞』をはじめとし、八年となつてから後は全國到る所に新聞誌が發行された。十二年六月末日の全國新聞雜誌の數は百九十二種で、內譯左の通りである（內務省圖書局の報告）

普通新聞紙六三、時事論説に屬するもの一〇、宗教教育二六、經濟六、官令法律二九、學事兵事一九、醫學工藝二六、小説小伎一三

なほ驛遞局第七次年報には『明治十年七月一日より同十一年六月三十日迄一週年年間に差立を取扱ひし內國新聞紙の數

九百六十萬六千百七個之を前年に比すれば二百四十萬三千五百五十一個の增加とす』とある。また發送の數高は東京第一、次に大阪、新潟、横濱、山口といふ順序であると。

二年の條例後、政府は新聞紙を保護したこともあるが、かう多數發行されるやうになつては、あの條例だけでは、取締がなか〳〵困難であつたから、六年十月太政官第三百五十三號をもつて新聞紙條目十八條を公布した。そのうち重な項目を掲げよう。

第十條　國體を誹り國律を議し及外法を主張宣說して國法の妨害を生ぜしむるを禁ず

第十一條　政事法律を記載することに付妄りに批評を加ふることを禁ず

第十三條　衆心を動亂し淫風を誘導するを禁ず

さらに八年六月に至つて新聞條例十六條と讒謗律八條が公布された。先づ新聞條例に比べて新令の要點を拾つて見れば、持主、社主、編輯人或は假の編輯人たる者は內國人に限ること（第四條）瑣事を除く外の記事は筆者の姓名を署すべきこと（第八條）外國新聞雜誌の反譯も同じこと（第九條）人を教唆して罪を犯さしめた者は犯す者と同罪、教唆に止るものは禁獄五日以上三年以下、罰金十圓以上五百圓以下を科すること（第十二條）政府を變壞し國家を顚覆するやうな論を載せ騷亂を煽起する者は禁獄一年以上三年に至る迄を科す（第十三條）成法を誹毀して國民法に遵ふ義を亂り及びあらはに刑事に觸れた罪犯を曲庇する論をなす者は禁獄一箇月以上一年以下罰金五圓以上百圓を科す（第十四條）これらであつて、こゝに體刑罰金といふ制裁が始まつたのである。

また有名な讒謗律たるもの丶內容は左の如くである。第一條にいふ『凡そ事實の有無を論ぜず人の榮譽を害すべきの行事を摘發公布する者之を讒毀とす人の行事を擧るに非ずして惡名を以て人に加へ公布する者之を誹謗とす、著作文書若くは畫圖肖像を用ひ展覽し若くは發賣し若くは貼示して人を讒毀し若くは誹謗する者は下の條例に從て罪を科す。』そ

の條例の要點は左の通り、

一、乘輿を犯すに渉る者、禁獄三月以上六年以下、罰金五十圓以上千圓以下。

一、皇族を犯すに渉る者、禁獄十五日以上二年半以下、罰金十五圓以上七百圓以下。

一、官吏の職務に關し讒毀する者、禁獄十日上二年以下、罰金十圓以上五百圓、誹謗する者、禁獄五日以上一年以下、罰金五圓以上三百圓以下。

一、華士族平民に對するを論ぜず讒毀する者、禁獄七日以上一年半以下、罰金五圓以上三百圓以下、誹謗する者、罰金三圓以上百圓以下。

なほ九年七月に至つて、發行禁止又は停止といふ痛い一項が追加されたのである。

かうした條例の公布されたのは、當時の言論界が、甚しく過激であつたからである。新政府に對する反感や、財政上の問題や、自由民權說や、征韓論や、民選議院論や、功利主義の議論が沸騰して、非常に大膽な文字言語が用ゐられたのであるから、政府としては、どうしてもこの位の取締をやらねばならなかつたのであらう。ことにフランスの自由思想から生じた言論には、今から見ると當然排斥しなければならぬやうな主張が、露骨に、過激に發表されてゐる。若しそれらの言論に對して何等の取締もなく、あるひは加藤弘之、津田眞道、海江田俊義等の國家主義の主張がこれと對抗しなかつたならば、國民の思想はどうなるであらうかと思はれるほど極端の意見が出てゐる。

この條例と讒謗律は、當時の新聞雜誌にとりて一大打擊であつたに相違ない。成島柳北が辟易賦と題して、

『乙亥三秋之秋既望、社主僕と机を並べて燭臺の下に集る、投書頻りに來つて編輯終らず、紙を展べ筆を握つて讒謗の律を調べ條例の文を誦す、少焉あつて汗雨脇の下より出で、横腹の邊に沾滴す、心配胸に横たはり困苦肝に銘ず、一身の置き所を失ひ萬事の茫然たるを覺ゆ、慄々乎として邪を受け風を引き、其の寢た所を起こさるゝが如

し、惴々乎として一生懸命輕業で綱渡りするが如し……』と書いてゐるのや、或は『朝野』の發行停止について『弔朝野賦』と題し、

『恭く呼掛けを受けて罪を警視に俟つ、俄に聞く内務より急に發行を停むると、本社に歸り來たつて傚で命令を傳ふ、筆の極り無きが爲めに乃ち此の禍に罹る、嗚呼哀哉、飛んだ不幸に逢へり、探訪は逃げ竄れて記者は狼狽し、會計は損耗して帳附は膽を潰す、校正は逆さに立つて配達は倒さに歩めり、投書を恨めと謂ひ編輯を譴めと謂ひ、局長を鈍しと爲し社長を惡るしと爲す、吁嗟默々たり、何の言譯けも無きこと、新聞を引裂て後悔を顯はし、至急に報知して看客に謝す、社主は天窓を垂れて疝氣に困しみ、頭痛は尻に起れり、實に溜る可らず……』

と書いてゐるのは、たゞにしやればかりではなく、當時の新聞雜誌界の迷惑した一面を告ぐるものである。同筆者が『擬蘭亭記』に『明治八年歲乙亥に在り、六月の末新聞條件の發行に會ふ、舊律を改る也、禁獄贓と定まり罰金細かに書せり、此外讒毀誹謗敎唆煽起有り、又變名假名有て遂一に禁止す、引て以て後來の定法と爲し其旨を布達す、梟首斬絞の嚴なる無しと雖ども、一見一讀亦以て我輩を恐怖せしむるに足れり、是の後や力拔け氣挫け肝膽寒慄す、筆を投じて紙を破る所以にして、以て社主の痛みを知るに足れり、俟に嘆く可き也』といつてゐるのは、この社界の感想であつたらうと思ふ。

この條例のために、刑罰を加へられた知名の記者は多かつた。末廣重恭、成島柳北、藤田茂吉、小松原英太郎、杉田定一、塚原靖、岡野孝、箕浦勝人、横瀬文彥その他數ふれば三十名近くもあらう。つぎに停止を命ぜられたものには『朝野新聞』があり、禁止されたものには『評論新聞』『草莽新聞』などの雜誌がある。しかし壓迫が强くなると、それに正比例して反抗心も强くなるのは、何時の世にも見る現象で、この條例や讒謗律も、この社會の空氣を鎭定するつもりで作られたものであるに拘らず、却つて過激の議論を刺戟したやうに思はれる。のみならず世人の注意を一層その方面に

向け、從つて新聞雜誌の勢力を强くした跡がある。もち論、それが社會に勢力を占めるやうになつたのは、この條例や讒謗律のためでなく、むしろこの社會に、先覺の士が居たからであるに相違ないが、それら名士と政府とがこの法令のために衝突することになつたのだから、一層新聞雜誌といふものが、社會一般から注意されるやうになつたのである。

新聞らしいもの丶起りは明治六年で、一方には森有禮、西村茂樹、中村正直、西周等の發行した『明六雜誌』福澤諭吉、小幡篤二郎等の『民間雜誌』(明治七年?)が、それ〴〵官學と私學とを代表しつ丶雜誌のはじめとなつてゐる。ところで當初の新聞は、報知といふことよりも、主義主張を通さうとする傾向が强かつた。それが大隈と藩閥の分裂、國會開設詔勅となり、民間の政治熱が昂進した頃から、新聞は政黨の機關となつたのである。これから後は官權派と民黨派の新聞が花々しく論戰をやつた。しかし主義主張を通さうとする傾向が主となつてゐるのは前代と變りなく、營業本位といふ方面から見れば、幼稚のものであつた。そしてこの營業本位の芽といふべきものは、十二年一月創刊の『大阪朝日』、十五年三月創刊の『時事新報』であらう。だから一方に、政黨の機關新聞が經營に難じ、他方に營業本位のものが現れた頃から、明治のジャーナリズムが一廻轉したと言つてよろしからう。

こ丶に文藝上から重要のものと見なければならぬは、所謂小新聞の發行である。當時小新聞といはれたのは、政治上の主義主張を發表する機關ではなく、專ら娛樂と市井の人や婦女子の啓蒙を目的としたもので、紙形も小さく、記事も通俗的であつた。この小新聞については、久我懋正といふ人が、『新聞穴探』(十五年三月出版)に次のやうに批評してゐる。

『小新聞は讀賣新聞を虎の門に發するを以て嚆矢とす爾後年を逐ひ其數を加ふるも世諺に本幹に勝る末枝なしと云へるが如く今に至るまで其右に出づる者なきが如し且讀賣新聞を除くの外多くは野夫鄙婦の巾着錢を得るに汲々として名敎の何物たるを知らざるに似たり故に活眼を開きて之を讀めば今日お染久松の赤繩を結了すれば明日はお半

長右衛門の痴情を演出し到底人情本の燒直したるを免れず然ども見る者をして心飛び魂馳せしめ石部金吉を遊次郎と變ずるの筆力あるは實に現世の活春畫なりと稱するも敢て誣言にあらざるべし……政府は先に春畫を禁止すと雖も此の活春畫のあらん限りは殆ど日々春畫を發兌するに異ならざればなり」

『讀賣新聞』（七年）『平假名繪入新聞』（八年）『かなよみ新聞』（八年）などが、小新聞の特色を發揮した最初のものであることは言ふまでもないが、その以前に通俗を主としてもの二三あつたことを忘れてはならぬ。殊に前島密の計畫した平假名新聞の新しい試みは、たゞにジャーナリズムの方面ばかりでなく、漢字廢止運動のさきがけとして傳へねばならぬ。

この小新聞なるものが、先に引用したやうな非難を蒙つたのは、市井の出來事や、花柳社會の事情を、面白をかしく書きたてたからで、新聞條例に挑發的の記事を禁じたのも、またそれに由つて風紀の紊亂せんことを恐れたからであらう。しかし、さう言ふ缺點はあつたにかゝはらず、この種の新聞は成功し、所謂政治新聞が經營難を感じてゐる間に、多數の讀者を招き、今でいふ民衆に娯樂と知識とを與へたのである。のみならず文藝の立場から言へば、これが德川時代と明治後半期の文藝とのつなぎとなつてゐる。それはこの方面に關係した人々が、戲作者とか國學者とかであつたからである。假名垣魯文、條野傳平、宇多川文海、前田健次郎その他十數氏の名は、後世に傳へなければなるまい。連續小說、演藝記事、挿畫等の方面は、若この種の新聞がなかつたならば、今日ほど發達しなかつたであらうと思ふ。

堅くるしい、きまじめな政治新聞の傍に、くだけた通俗的な小新聞があつたごとく、硬派の雜誌とも言ふべき『明六』や『民間』や『東京經濟』（十二年三月創刊）などの傍に軟派の雜誌があつた。この軟派のものに、戲作者の系統、しやれ氣分、遊蕩氣分、官尊民卑に對する不平不滿などが、皮肉に、諧謔的に現はれてゐる。それは、これら出版物の表題を見ても推知される。

滑稽風雅新聞　木の葉新聞　同樂相談　花月新誌　團々珍聞　引札新聞　金のなる木　うきよ新聞　袋新聞　よし余誌　寄笑新聞　珍笑新聞　鯰猫新聞　生意氣新聞　生讀新聞　我樂苦多珍報　月とスッポン　驥尾團子　娯多々々珍聞　溺濘叢話　喜樂の友　肺多々寄注心藏戯誌　面白新聞

實に思ひ切つて、をかしな名稱を付けたものだ。左に、當時評判であつた『東京新誌』(社長服部誠一、編輯長桑野鋭)の十二年六月の第百五十三號から一文を轉載する。

○湯屋二階の會議

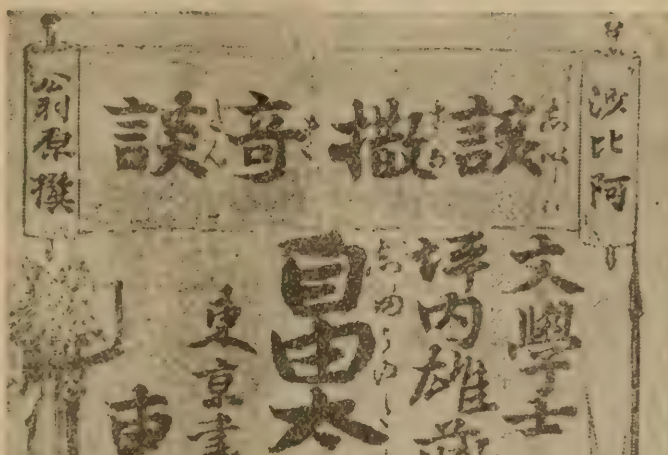
(前略)熊隊八組已に悉く來會し一浴を取り了して各々議席に就く甲先つべロり〱と舌を出して嘴を舐りながら屁劒迷然と一議案を吹鳴り出して曰く寢轉んで惟るに我が花の吾妻の大江戸も亞米利加唐人の流れ込んでより見る影もない有樣とはなれり大名は叩き潰されてお出入の屋鋪はお廢とたり旗本は總崩れと爲て仕事場の株式は取上られ金貨は皆な毛唐人に爬撈はれてペラ〱の紙ばかり飛び行き商賣は悉く多錢翁に占込れて不景氣の聲は市に盈ちペンキ塗りの建築は相應にあれども親方にばかり旨味を取られて我社は糟ばかり舐り官員め等の營繕は偶さかにあれども極吝な上に狡猾ばかり言てさつぱり儲けにならず其上近來規則とか絲瓜とか理窟張たる餘計な寢圖を吹き出たし裸で往來は相成らずの大聲を揚て歩行は相濟ぬのゝ滅法界なる小言を吐きお負けに糞尿も自由に垂れられず此勢では屁にも税を課するも知れん………

明治初期のジャーナリズムに營業本位の芽が出た頃までの大體の調子は、言論であれ、諧謔であれ、意義の深淺は別として、熱があり、また眞けんであつた。それからざつと四十年經つた今日では、その時代の産物を一つ貴重品として大切に保存しなければならぬ。明治文學化史を編まうとする具眼の史家は、これらの中に、意外に重要な種子を發見するであらう。

二　海外文學の飜譯

はしがきにも言つた通り、この方面に關しては、少しでも纏つたものを書く材料がないから、たゞ手元に殘つてゐる材料について、ほんの申分だけに少しく書いて見よう。

海外文學の反譯で、非常に廣く讀まれたものは『歐洲奇事花柳春話』である。それはリツトン卿の『アーネスト、マルトラヴアス』の譯で、譯者は丹羽純一郎、出版は明治十一年である。なほ表紙には服部誠一校閲となつてゐるが、果してどれほどこの人の筆が加はつたか分らぬ。恐らく名だけを貸したのではあるまいか。當時服部誠一といへば文壇の大家であつたから、出版者が賣らんがために、その名を借りたのではあるまいか。譯文の見本を左に掲げる



『該撒奇談』の扉

第四十一章　一日逢君々不識
十年紅涙爲雨來

ベンタドア既に衣を乾かして室に入り來れば只マルツラバース一人なるを以て胸中悴々滿面に紅を潮すマルツラバ

ースも亦心穩ならずベンタドアを顧て曰くハーバート去つて馬車を送らんことを約して去れば幾くもなくして馬車來るべし時に知らず侯は何れの所に去りしや言ふて又曰く僕唯だ望む君が身雨の爲めに害せらるゝなからんことをベンタドア曰く憂ふ勿れマルツラバース問ふて曰く僕明日龍動に行んとす君若し命ずる所あらば僕幸ひに之を奉せんベンタドァ歔然として曰く君の去る何爲れぞ其れ速なるや妾憂ふ再會の期恐らくは遠きにらあんと然れども今にして之を憂ふるも亦益なし獨り當て結ぶ所の友誼を如何んせんマルツラバース故らに右手を胸上に置て曰く友情獨り玆に在り僕の情嘗て切にして殆んど身を誤らんとせしが幸に君の一言情理を兼ね出て人間の公道を擴張せしより僕の身をして保全ならしめたり然らば則ち僕の今日あるは卽ち君の一言ありしに依る知らず何の辭を以て能く君に報ぜん

かういふ調子のものであるから、日露戰爭後に生れた人は、これを讀んでも小說とは思はない位であらうが、當時はやはり之れでなければ、讀者が承知しなかつたのである。なほこの小說は最初分冊で出版されたもので、その中に在る挿繪が甚だしく珍しい。誰れが書いたのか知らぬが、服裝、室內裝飾、習慣、家具、器具、乘物などについては餘程苦心してゐる。

シエークスピヤの反譯に關しては、坪內博士の『マクベス』の附錄に詳しい表が揭げられてあるから、その上何も言ふことは無い。たゞ手元にある『コリオレーナス』の譯『豪傑一世鏡』から譯文の見本を示さう。これには「自由の答恩愛の紲」といふ冠字があり、譯者は板倉興太郎といふ人で、卷頭には原竹外と市川團洲の序、およびシエークスピヤの小傳がある。凡例によつて見ると、一演劇改良の補助ともならんかと云ふ者で譯したもので、出版は二十一年三月であるから『該撒奇談』よりも四年後の刊行である。

哥略拉那陣屋の場

本舞臺に總て假陣營の體。上段に哥略拉那塡腓舌士の兩將酒を酌みかわし居る。下段に二三人兵士並び居る。

上「沛然と雲を叫び。轟然と風を起せし龍虎さへ今は互ひに打解けて心も親しき一間の中。哥略拉那は飲かけし
　盃やをら下に置き

(哥略拉那) 某は今夜こゝを引拂ひ。羅馬城壁の前近く。新に陣營を構ふる心得で御座る。又た貴殿には羅馬の使を兩度まで。受引かざりし某が。心底を。窩爾西の議事官に。よろしく御披露被下度し

上「思ひ入てぞ賴みけり。塡腓舌士片頰に笑み

(塡) そは賴まるゝ迄もなく。某歸りし其節には。鐵石に等しき貴殿の心底。委曲議事官等に披露致し屹度お執成仕らんこの儀は御心配あらるゝな。ソレハさうと。昨日哀訴に參たあの老人は一體何物で御座るぞ

(哥) されば御座る。あの二度目に來りし老人こそ。某が常に父よ父よと敬ひし。議事官麥尼紐士亞克立巴で御座る。羅馬の市民があの人を。吾陣營に送りしは最後の窮策にて候はん。某も外面にては。いと辛く侍遇せしかど。舊情故誼忍び難く。五臟六腑も斷つ計り。あの要求書を送りしも。羅馬を救ふ爲ならず。只だ彼の老人に花を持たせん某が微志。かゝる親密なる舊交をかくつれなく扱ひしも我に二心なき證據なれば。貴殿よろしくお察し被下

上「折ふし騷ぐ陣屋の外
　　トがや〳〵と騷々しくなる

この通り、すつかり我國の芝居に引き直さうとした苦心は認めてやらねばならぬ。

十九年十月出版の『三英雙美政海之情波』はビーコンスフヒールド作エンヂミオンの譯で、譯者は渡邊治である。此の譯は餘程深切に出來たもので、卷頭には人物案内(作中の人物と實人物との對比)解題、ビーコンスフヒールド伯傳、

オン二世傳、ビスマルク傳、パーマーストン傳、ダービー伯傳、ブランノー男傳、その他コブデン、ロスチャイルド、ホドソン鐵道王などの傳が紹介してある。なほ譯者は反譯について左の如く言つてゐる。

『從來西書を譯する法二つあり、一は譯者が自身に筆を執り、原字原文に基て譯述を爲すもの、(中略)其二は講義にして、譯者が原文を說明折衷して、その文章は兎も角、唯意味の明瞭を旨として、他人が之を筆記したるを云ふなり。(中略)予が此書を譯するに當りては自身下筆の反譯法にも又他人筆記の講義法にも依らず、幸ひ此二三年來世に行はれ初めたるショルト、ハンド卽ち速記法なるものを利用し、速記學者市東謙吉君を雇ひ、予は原文の通りの意義を酌んでは平易にこれを日本語に譯し、市東君は例に在りて逐一予が言ふ儘を筆記し、一字一句予か脣口を發するの聲音は悉く其紙面に上るなり』

卽ち逐語譯でもなく、意譯でもなく、素人にも解し易いやうに譯したといふのである。なほ速記術の見本すら揭げてある。譯文の見本として卷頭の十數行を揭げよう。

第一回　自由保守兩黨の取捨去就に
　　　　兩政治家互ひの底意を明す

折りしも夏の夕なり甍瓦を鑠す眞日中の炎威は消えて尙蒸熱く夜風を迎ふる頃しもあれ、一紳士正服に上衣着けセントジエームス街頭の倶樂部より出來り、其處なる坂の中段に至れる時、不圖一友に邂逅して言葉を掛け

卿は今まで何處に御在ありし歟、實は卿をばお尋ね申せしなり

それは何事なるか、御用もあらば承りたし

否とよこの往還の眞中にて立話しにも成るまじければ

さらば御同前、これよりホワイト會館に參り申さん(此會館は社會交際を目的とせる倶樂部なり)

シタが僕は只今同館を出たる許りなれば再び參るも思はしからず

夫れならば、いざセント、ジエームス館に赴き申さん（此館は重に外交官が賓客を招待する倶樂部なり）

これで見ても、譯者の深切は知られる。また見出しにも、對話にも、なほ馬琴流の色の拔け居らぬことも見ゆる。しかし『花柳春話』にくらべて、餘程軟かになつてゐることは覗はれよう。

以上の外に、末廣鐵腸譯『雨中花』、ヂユール、ベルネ原作、井上勤譯『政治小說佳人之血淚』、原著者不明、本多孫四郎譯『鮮血日本刀』、ジユルスウエルネ原著、三木愛華、高須墨谷譯『地底旅行』、リトン原著、磯野德三郎譯『サクソン王の名殘ハロルド物語』、ボツカース翁十日物語『想夫戀』など、外十數冊あるが、他日何等の機會に改めて紹介しようと思ふ。若し前記した三種の譯本で、當時の海外文學の反譯が、どんなものであつたかと言ふことの一斑でも傳へ得るならば、もつけの幸である。

最後に一言して置く。スコツトの『湖水の佳人』が、明治十五六頃に『春江奇緣』といふ表題で紹介されてある。譯者は今の高田、坪内、天野三博士であるが、これも出版屋のそろばんから、服部誠一譯で刊行されてゐるといふことだ。私は未だ曾つて此の本を見たことがない。坪内博士の書齋には無く、高田博士のところにも無かつたらうと思ふ。たゞ天野博士の書架にあるといふことだけは、私が同博士から直接に聞いたことであるが、つひに見せてもらふ機會がなかつた。若しも讀者諸君のうちで、此の書に關して御心當りのある方があるならば御一報を煩はしたいと思ふ。

明治文學の發達を研究するには、どうしても外國文學の感化を檢べねばならぬ。同時に外國文學の紹介に努力した人々の名と出版物とは、でき得るだけ完全に傳へたいと思ふ。譯書の蒐集は、今日すでに遲いくらゐで、もう十年も經つたならば、集めようにも不可能となりはすまいかと思ふ。

明治初期の劇壇

伊原青々園

彦三郎と團十郎

明治初年に於ける東京の名優といへば坂東彦三郎と中村芝翫（今の歌右衛門の養父）との二人であつた。芝翫の方は風采が立派で、踊が上手で、舞臺に愛嬌があつて、どちらかといへば才能よりも人氣で世間から騷がれた役者であるが、彦三郎の方は全く技倆のすぐれ人らしい。立役でも敵役でも女方でも、何でも出來て、それに藝に腹があつた。九代目團十郎が春日局を彦三郎にさして自分が家康だけを勤めて見たいと言つたくらゐ、此の人を追慕して居るのでも、えらい役者だつた事が想像される。

とにかく此の二人が東京の劇壇に對立して居たのであるが、それよりも先輩の役者に阪東龜藏と六代目團藏とが居た。龜藏は彦三郎の養父であるし、六代目團藏は大正になつて歿した團藏の養父である。二人とも古老として重んぜられて居たが、もう隱居役で、劇壇に於ける實力はなかつた。そうして團藏が明治四年に、龜藏が明治六年に死んでしまつた。もうひとり銘人小團次が居たが、これは明治になる前の慶應二年に死んで居る。それで彦三郎と芝翫とが幅を利かしたのである。明治元年には、其の彦三郎が三十七歳、芝翫が三十八歳、まさに油の乘つた時である。彦三郎と芝翫の次ぎにえらい役者といへば、九代目團十郎と五代目菊五郎とが居た。明治元年に當時河原崎權之助といつた團十郎は

三十一歳、家橘といつた菊五郎が廿六歳だつた。まだ〳〵青二歳ではあるが、二人とも名家の悴ではあるし、でなくても有望な才能をもつて居る事を世間から認められて居た。しかも兄分に當る彥三郎が明治十年に若死したし、芝翫の方は次第に昔ほどの名が無くなつたので、劇壇の覇權は團菊二人の手に歸してしまつた。それも團十郎の方が本尊で、菊五郎の方は脇立に過ぎなかつたのである。だから正確にいふと、明治初年の前半は彥三郎の天下、後半は團十郎の天下、かういふ事になるのである。

守田勘彌と新富座

俳優は前に述べた通りであるが、其の俳優を動かす興行者は何うかといふと、天保以後に於ける大策師は九代目團十郎の養父の河原崎權之助であつたが、それが明治元年九月、盜賊の爲めに斬殺されたので、守田勘彌の獨り舞臺となつた。此の勘彌は今の勘彌や三津五郎の實父であるが、自分は俳優でなくて、劇場を經營する事を專務にして居たのである。しかも敏腕家である彼れは明治の劇壇にいろ〳〵な新事業を實行した。

勘彌が大活躍は、自分の持つて居る守田座を、新富町へ移した事から始まる。

今日こそ帝都の到る處に色々な劇場が建てられて居るが、幕府時代には江戶の劇場の數を三つに限つて、其の所在地は淺草の猿若町を定め、それ以外には許さなかつたのである。しかし淺草は帝都の片隅である。見物を呼ぶには中心地の京橋區もしくは日本橋區へ劇場を移す必要がある。此の事は勘彌でない誰でも氣はついて居るが、それを實現するには此れまでの法律や慣例を破らなければならぬ。そういふ膽力と手腕とのある者は勘彌より他に無かつた。そうして明治五年に自分の守田座を淺草の猿若町から京橋の新富町へ移したのである。此の劇場は後に改稱して町の名を座名に呼んだ。大震災の前まで殘つて居た新富座が其れである。

勘彌は此の通り劇場の所在地を帝都の中心へ移したばかりで無く、劇場の面積を廣くした。猿若町にあつた劇場よりは間口が四間殖えて十八間、奥行も四間殖えて廿二間になつた。随つて舞臺や見物場が從前よりは大きくなつた。「高土間」の前へ新たに「新高」を拵へたのは此の時である。

昔は僅かに蠟燭とカンテラで舞臺を照らしたのを、新富座が始めて瓦斯をとほした。昔は右の通り燈火が暗かつたので、もう一つは火の用心の爲めに、晝間だけ興行したのを、新富座が始めて夜興行をした。昔は遊廓と共に「惡所」といはれた劇場へ内國ばかりでなく、外國の顯官や紳士を招くやうにしたのも新富座だつたし、昔は「耳學問」といはれた歌舞伎狂言に史實を穿鑿したり、西洋の文藝を飜案するやうになつたのも新富座であつた。

斯ういふ脚本や技藝の改良を企てたのは、興行者たる勘彌自身の考へばかりでなく、當時の學者や洋行歸りの智識階級によつて動かされたのであるが、一方には俳優のうちに九代目團十郎といふ進歩主義な人物があつて、勘彌と運動を共にしたから容易に實行が出來たのである。俳優は團十郎、興行者は勘彌、劇場は新富座、この三つが合體して明治の新劇が起つたのである。

こゝまで述べると、勘彌の經營した新富座を根據として團十郎の創めた謂はゆる「活歴」なるものに說き及さねばならぬが、其れは餘りに知れ渡つた事であるから略する。

河竹默阿彌

興行者としての勘彌、俳優として團十郎を揭げると同時に、脚本家として河竹默阿彌の名を舉げなくては成らぬ。明治の始めに勘彌や團十郎が少壯であつたと違ひ、默阿彌は可成に年をとつて居た。そうして殆ど同輩の人に櫻田治助と瀨川如皋とが居たが、彼等はむしろ舊時代の作者であつた。明治に入つて新富座をはじめ主なる劇場の爲めに筆を執つ

たのは默阿彌一人であつた。隨つて勘彌や團十郎の新劇運動に參加した作者は彼れであつた。團十郎が始めて有識故實に指を染めた「千代田神徳」(明治十一年)でも、劇界以外の學者たる、依田學海や福地櫻痴から材料を供給して貰つた「赤松滿祐」(明治十二年)や「金世中」(同上)でも、それを脚色したのは孰れも默阿彌である。彼れは明治十四年になつて退隱したが、それでも劇場では彼れの作を慾求して止まなかつた。

劇壇以外の改良熱

劇壇の內部では、此の通り勘彌と團十郎と默阿彌とを中心にして活動すると同時に、劇壇以外の世間は何うであつたらう。前にいつた如く、學者や洋行歸りの智識階級が直接に勘彌や團十郎を動かしたばかりでなく、頻りに演劇の改良を說きはじめた。今の西園寺公の如きも其の一人であるが、大學教授であつた外山博士だの、末松博士だの、新聞記者で政論家であつた福地櫻痴だの、漢家者で軟文學に興味をもつた依田學海だの、わたしは其ういふ人たちの名前を擧げる。

此等の人たちの唱ふる所は色々であつた。舊劇の荒唐無稽を改めよといひ、其の野卑猥褻を矯めよといひ、或ひは洋劇を模倣して女優を上場せしめよ、或は科白や背景を寫實にせよといつた。そうして其等の主張は終に演劇改良會といふ團體を生ずるやうになつた。

然しながら演劇改良は第一に勘彌自身の經濟的失敗につまづき、第二に團十郎の活歷に對する世間の反感につまづき、第三に西洋論者の非歐化主義につまづいた。明治の上半期は斯ういふ有樣で過ぎてしまつたのである。

新體詩創刱とその背景

日夏耿之介

明治文學史の回顧は、文藝復興期以來數百年間歐洲藝文思想史の縮圖の一瞥であつて、十九世紀文藝の輸入發達史の概觀である。

が、ルネイサンス以後の思想の起伏の摸寫は、極めて粗笨に反思索的に非生殖的に營まれたが、前世紀文化の移入は、猪突的に、大鵜呑みに、バラック式に行はれた。明治文明が藝術的本質と所產とに貧しかつた所以である。多くの建設時代は概してこの軌程を走ることを免れないが、わが民族性が一層然らしめたことをも見のがすことは能きない。

島崎藤村氏が二月の日々紙上に掲げた「感想」で、德川期文學を漫然と在來の分類法によつて分けたのでは十分でない。十八世紀的なる文學と十九世紀的なる文學者との區別があることを基調とする要があると云ふたのは私の宿說と全く同じであつた。われらは、十八世紀人としての蕪村と十九世紀人としての一茶とを觀たいのである。

十九世紀第一年は、恰も享和辛酉元年にあたる。本居宣長の沒した年であり、「怪談藻鹽草」の出た年である。その後、鎖國的日本は、これより程遠からぬ先き、大槻玄澤の「蘭學階梯」を生み、「萬國圖說」、「紅毛雜話」を出し、寛政己酉、司馬江漢の銅版を產し、「海國兵談」を毀ち、「露使に互市を迫られ、蘭人來り聘し、ハルマ和解成り、ついで露船北邊を窺ひ、近藤守重これを巡察したのであつたが、享和の後、漂人佐平球上を一週に及び、前野良澤亡び、露人來り寇して松前奉行設けられ、砲臺、烽火臺は出來る、英露語は官吏に學ばせられる、大槻氏の蘭書成り阿蘭陀人の對譯

辭書も出來る、高田屋が露船に捕はれる、玄澤の「蘭學凡論」が生れて間もなく改元して更に文政となり、天保、弘化、嘉永、安政、萬延、文久、元治と延びて慶應の四年が滿たずして維新となるそれ迄に、英船、米艦の來航のみでない、天地丸を修めたり、十二支砲、雷火銃を作つたり、三國條約や五國假條約を結んだ計りではない、塙檢校は死んだが大日本史は上板せられる、忠敬の實測圖や高橋作左衛門の譯本は出來上つて、シーボルトは長崎に來る、足立巣の產科醫學、榕菴の植物學や化學の提示、長英變死して萬次郎歸朝し、櫻田の變間もなく留學生は阿蘭陀國に向け出航する、次いで露、英、佛にも送られてゐる。王政の復古は鎖國を開放し、武斷封建から福澤式高等開化文明の樹立となつた。

さて、新體詩を說くもの、在來、「新體詩抄」に初まるを說いて僅かに明治二年版福澤本の「世界國盡」や同六年板の「暗誦十詞」の七五調唱歌の先驅を說いて、次いで、遠く飛んで「小學唱歌集」、「新體詩抄」の續出に及ぶを例とするが、福澤本の出現は單に兒童走卒に讀み易からしめようとて唱歌の形式をとつたにとどまり、それが軍歌の形式の素をなしたのは事實であるが、新體詩の詩感と直接何らの交涉はないばかりか、今にして思へば、軍歌唱歌として非才の徒の手にかゝつて生れたが故にかへつて大迂廻をなして、純粹の藝術品が普遍性を帶びて誕生する事に障礙となつた。この時代に、低級な民衆指導の啓蒙的使命を果すには俚耳にもたやすく入り易い軍歌童謠の類でなくては外に恰好な何ものもないではないかと云ふ反駁も起るであらうが、然し、腰を下して書いた第二義第三義のものから入らしめるよりも、寧ろ、最初から、初めの程は判つても判らずともよい、第一義の藝術品を提示することの方が國民の藝術魂を純ならしめ、正統にして高調な國民的詩歌の誕生を一路驀地に可能ならしめる捷徑である、正道である。作者は苦境に泣くであらう。大衆は手にとらずして漫罵を恣にし、「とんやれ節」や、「猫じや〳〵」や「こちやえゝ」や「どんがらがん」や「お竹さん」の猥醜と俗陋とをきはめた擲聲に弄るであらう。それでよい。少數なる具眼の人の間から、やがて卒然として藝術の白光が必ず光つてゆく。最初に示された藝術と、この擁護者とが一團となつて巧藝の先驅となり正道を步

いてゆく。その内には、模倣者が出來て末流文學の低級きはまる作品が幾何級數的に著しく增加してゆく。それに[illegible]の經路である。只、最初示されたものだけが高く、正しい、純淨な位相に置かれてあるならば、一たび過渡期の塵にまみれ、開拓時代の埃を浴びた國民の血、民族の魂も、自然に又自ずと淨まつてゆく。結果から見れば、これとあれとの收穫には夥しい甲乙が必ず生じるであらう。

過渡時代の建設期としての明治初葉は、その時代に緊要なものしか食餌として攝つてはゐなかつた。あの拙劣きまはる「新體詩抄」が、全國津々浦々までひろまつて、鮮光のごとく之れを仰ぎ新聲のごとく之れを謳ふたことは故國木田獨歩も云つてゐる。獨歩年配の人間は一度は悉く皆この新詩のひびきを快しと耳にしたに相違ない。が、井上、外山、矢田部の新派詩人よりは、漢詩、俳句、短歌の舊派詩人、歌人、俳人、並びにその鑑賞家の間に遙かに詩情豐かに表現の天巧を所有し鑑賞の眼明らかに確かなる人が多かつたのである。只、彼等は時代の人でなかつた。この新らしい拙劣に入るには餘りに古き完成に泥んでゐた。趣味の固定した形に淫して、新情趣の必然を感じなかつた。已が趣味に自足してゐる間はそれでもよいが、自ら飽き足らなくなつても未だにその古い形骸に獅嚙みついてゐた。やがて、時代の巨手によつてふるひ落されるまでは。

大沼枕山の詩技の秀拔は「新體詩抄」作者の足もとに寄りつけられぬ高所に達してゐた。成島柳北の瀟洒なる趣味識の妙致は、到底「小學唱歌集」作者のよくする處でない。鷲津毅堂、長三州、大槻盤溪、岡松甕谷、向山黃村、神波即山、菊地溪琴、森春濤、岡本黃石、小野湖山、鱸松塘の徒は、詩情に甲乙あり、鑑賞眼に兄弟の別は固よりあるが、「社會學の原理を」詠じる外山々山よりも、詩技に秀で詩感に自由であつたことは云ふまでもない。否、明治十六年十月に下獄した一人の巾幗政論家の詩

四裏幾相思ふ。吾儂獨自憐。新霜人似水。舊夢夜如年。骨共淸秋瘦。愁與輪月圓。家山有慈母。應是缺安眠。

とか、または

雲氣未呑盡。半天餘數星。四人皆在夢。燈火似烟青。

誤落人間二十歲。未飽甘酸世味新。與世沈浮虛千夢。與雲漂泊輕似塵。云々

の如き、稚き辭句の整はぬ間にも二十一歲の乙女中島湘煙の磊塊の氣だけは出てゐて、尙今居士が「勸學の歌」にまさる數等であるを見ても思ひ半ばに過ぎよう。

蓮月尼は早く明治三年に死んだが、子規が短歌の革新に志した明治三十一年、鐵幹が「天地玄黃」を出した二十年代末期までに到る國歌界が、宮內省流の造花歌と桂園くづしの乾菓子歌とで一杯になつてゐたにもせよ、蘆庵の後によるものも、八田知紀、熊谷直好の門に集るものも、松波遊山の風をしたふものも「忍ぶ草」の一冊や眞淵の歌論は讀んでもゐたし、言葉の搖曳の機微には觸れずとも、カイネティックな言葉とポウテンシャルな言葉との作歌に於ける使ひ分けの法位は自ら心得てゐた。巽軒學士が「玉の緒の歌」にまさる秀歌を漁ることはいと易かつた。

民衆詩の代表的なものであつた俳句が、元祿天明の古句の淨心をすてゝ、月並者流に弄り、徒らに宗匠を氣取り立机を忙いで俗慾な俳道に於いて滿たさうとした床屋俳諧の末流に持ちつ持たれつ、老鼠堂永機といひ春秋庵幹雄と稱する輩が下らぬ點取りに無識の閑人を呼び集へても、其角堂に江戶座の洒脫なく、松江に古白雄の放逸なく、これ亦子規が革新の期まで長き春日の閑をむさぼつてゐたのであるが、今にして當年「開化時代」の新聞雜誌を手にして見ると、全く名もなき市井の投書家の間に、これはと思はず膝をうつほどの江戶坐ぶりが時あつてないではない。

それらの作の佳品逸調になると、宗匠の作をはるかに凌ぎ、「鎌倉の大佛に詣でゝ」感ありし尙今居士の新體詩よりも詩になつてゐることは確實である。

かう見てくると「詩抄」にゝ山が小序を書いて、

新體と名こそ新に聞ゆれど
　やはり古體の大佛の法螺

と洒落れたは誠の洒落れに非ず、「西洋ノ風ニ模倣シテ一種新體ノ詩ヲ作リ出セリ」(尙今の序)といふてはゐるが、「明治ノ時代トナリテ某氏ノ爲メニ初メテ楠公内藏之助ノ忠義ハ權助ノ忠義ニ比ス可キヲ知リ……」(同上)と書いてゐる程度の「開化」思想が根底になつたもので、同じ書に巽軒が漢文の序を掲げて、「古之和歌。不足取也。何不作新體之詩乎。」と一喝してはゐるが、作例がこれでは結局空威張である。

その作例はどうかとざつと査べて見ると、凡て十九篇、内、巽軒一篇、丶山九篇、尙今九篇にして、創作は「拔刀隊の詩」、「勸學の歌」、「鎌倉の大佛に詣でゝ感あり」、「社會學の原理に題す」、「春夏秋冬の詩」の五篇で、あとは沙翁のハムレットの獨白、ロングフエロウ、キングスリイ、シヤール、ドレアン、テニスン、グレー、キヤンブル、ブルウムフヰールド等である。

グレーはよく歌はれた「墳上感懐の詩」。これがこの集を通じての佳品である。譯者は尙今居士であつた。

山にかすみいりあひの
鐘はなりつゝ野の牛は
徐に歩み歸り行く
耕へす人もうちつかれ
やうやく去りて余ひとり
たそがれ時に殘りけり

四方（よも）を望めば夕暮の
景色はいとど物寂し
唯この時に聞ゆるは
飛び來る蟲の羽の音
遠き牧場のねやにつく
羊の鈴の鳴る響

猶其外に常春藤（つた）しげき
塔にやどれるふくろふの
近よる人をすかし見て
我巣に寇をなすものと
訴へんとや月に鳴く
いとあはれにも聲すなり。

（下略）

テニスンの「輕騎隊進擊ノ詩」は丶山の譯である。

一里半なり一里半
並びて進む一里半
死地に乘り入る六百騎

將は掛れの令下す
士卒たる身の身を以て
譯を糾すは分ならず
答をなすも分ならず
これ命これに縱ひて
死ぬるの外はあらざらん
死地に乘り入る六百騎

(下略)

ロングフエロウ「玉の緒の歌」(一名人生の歌)

眠むる心は死ぬるなり
見ゆる形はおぼろなり
あすをも知らぬ我命
あはれはかなき夢ぞかし
などとあはれにいふは惡し。

(下略)

ハムレットの to be or not to be の白を倘今は

ながらふべきか但し又
ながらふべきに非るか

笑が思案のしどころぞ
運命いかにつたなきも
これに堪ふるが大丈夫か
又さにあらで海よりも
深き遣恨に手向ふて
之を晴らすがもののふか
どれも心に落ちかぬる
扨も死なんは死ぬるのは
眠ると同じ眠る間は
心痛のみか肉體の
あらゆるうきめ打捨つる
是ぞ望のはてならん
ア、しぬ、ねむる、ねむる時
萬が一ゆめみるならば
ハアこだわりが有るやうぢや。

(下略)

此等の譯詩に對し創作が更に劣つてゐるのは、この三人が詩才に非ざりし立證だ。在來「新體詩抄」と云へば井上巽軒一人の如くに代表せられてゐるが、事實、巽軒は一篇だけで、その一篇も右の「玉の緒の歌」で知る如く一番拙い、

創作では、山の

　我は官軍我敵は
　天地容れざる朝敵ぞ
　敵の大將たる者は
　古今無雙の英雄で
　之に從ふ兵（つはもの）は
　共に慓悍決死の士

（下略）

で初まる「拔刀隊」や、

　昔し唐土の朱文公
　よに博學の大人（うし）ながら
　少年易老の詩を作り
　一生涯は春の夜の
　夢の如しと嘆きけり

（下略）

が人口に膾炙してゐる。「春夏秋冬」は「句尾ノ二字ヲ以テ一句ヅ、韻ヲ踏ミタルモノナリ」と添書して

　春は物事よろこばし
　吹く風とても暖かし

庭の櫻や桃のはな
よに美しく見ゆるかな
野邊の雲雀はいと高く
雲井はるかに舞ひて鳴く
（下略）

の如く脚韻を企てたるが注目すべく、ヽ山の「社會學の原理に題す」は

新聞記者や役人と
成るは最と最と易けれど
か樣な者が多ければ
忽ち國に社會黨
尙ほ恐ろしき虛無黨の
起るは鏡に見る如し。

の調子で「詩抄」同人の詩眼の幼稚を最も明確に談つてゐる。

畢竟するに「詩抄」の史價は、巽軒が「且夫泰西之詩。隨世而變。故今之詩。用今語。用至到精緻。使人翫讀不倦。」といひ、尙今が「平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルコト少ナキヲ嘆ジ」といひ、ヽ山が、「近世に至りては長歌は全く地を拂へる有樣にて事物に感動せられたる時の鳴方皆三十一文字や川柳や僅短なる唐詩と出掛け實に平輕なる鳴方なればなり。」とある如く、在來の長歌の姿物によつて歐詩の歌口を模せんとしたところ、而して用語に卑近の語を旨としたところにある。

當時とても在來の長歌を作るものがないではなかつた。神奈川の僧辨玉の長歌が一機軸を出したことは先人も云つて

ある。(日本大文學史卷五)その外木居豊穎、日下部足穗、渡邊重春等あつたけれど時代の歌口となる本質は固よりない。「詩抄」が稚拙乍ら西洋のポエトリーの輸入を企てたことは爭ふべからざる成効である。拙くとも、歌ふ何ものをも持たぬ大衆は小躍りして之れを迎へ之れを歌つた。「詩抄」の價値はこゝにある。

「新體詩抄」がポエトリーを模したに反し、明治十四年に出た「小學唱歌集」三卷はソングを模し、西洋の樂譜に合せ、又は新樂譜を作つて眞正面から唱歌と名乘つて打つて出た。しかも、單に唱歌なりしばかりでなく、用語の古雅と形式とに泥みすぎたきらひはあつたが、然し、尚夥しく殘る當年の「風雅趣味」に一致して、その後明治の末期迄青少年男女の歌ふところとなつて、その感傷の表白の殆ど唯一のはけ口となり、感情の洗練の基礎となつた事は忘る間敷効勞で、この點、「詩抄」は二歩も三歩も「小學唱歌集」にその効をゆづつてゐる。

即ち「螢の光」はバーンズの Auld Lange Syne の曲をとり、「花鳥」はゲーテにより、才女は Annie Daurie に「菊」はトマス・ムアの The Last Rose of Summer に、「うつくしきわが子やいづこ」は Blue Bell of Scotland に、「思ひいづれば」は Scotch Melody によつたものである。しかも、浪曼底格な旋律と日本古雅な用語とが、一見調和せざるが如くにして、實は不思議な新調和を形し、その後殆ど三十年も青少人のやる瀬なきセンティメンタリズムの表白となり

庭の千草も虫のねも
枯れてさびしくなりにけり
あゝ白菊　あゝ白菊
ひとりおくれて咲きにけり。

の哀調縷々としてつづき、「遊獵」の壯快、「箏樂の都」の婉雅は近い頃までもなほ歌はれてゐた。

も一つ、明治十八年十月版湯淺半月の「十二の石塚」は單行本個人新詩集の嚆矢で五七古調の舊約イスラエル民族說

話に材をとつた、ベニヤミン族ゲラの獨子豪俠エホデがエリコ古城にエグロン王を刺す長い詩であるが、この詩集の草稿は「詩抄」の世に出た明治十五年よりもやゝ古くに成つてゐた由にて、果して然らば、新代草創の意識の上に樹てられた詩情でないにしても、この新詩材をこの長歌にものした半月の企ては新體詩史上最初に特筆せらるべき注目に價する一事件である。

半月詩と聯想せられねばならぬのは讃美歌である。新舊約聖書である。當時唯一の新趣味をこだはりなく注ぎ入れる捷徑は基督敎を外にしては何もなかつた。新思想がこゝに生れて、基督社會主義や國家社會主義こゝに胚胎し、新感情がこゝに根ざして、故植村正久のブラウニング研究や教徒の英詩研究の果がこゝに結ばれた。日常生活様式に洋風をとり入れたのも基督敎徒である。この徒の一番落付いた一番立派な收穫は若松賤子の思想感情並びに彼女の遺作飜譯及小品「忘れがたみ」、「小公子」である。

ローマ字論が起つたのは明治七年で、「かなのくわい」が設けられたのは明治十七年である。國字の問題は、ローマ字にしても假名にしても多く言語文字の生命に縁遠き、或はこれを餘りに虐使する學者、新聞記者によつて無反省に稱へられるに過ぎない故、今日なほ些かもその業績が上らぬ計りか、その惡影響として、無知無思慮な漢字制限論や假名遣ひ論まで假令その精神は了とするも餘りに粗笨の制度精神に於て出來上り、又は出來上りつゝある。明治十五年までの間にはこの方面の苦慮はまだ表面に出てゐないが、その芽萠は既に見えた。「詩抄」が平常語を使用するを使命としたのもその風潮の一餘波である。

英佛獨諸學が起り、福澤流の實利文明主義や英儒折衷の同人社や村上英俊の佛語塾や「東洋學藝雜誌」以來の帝國大學一派の獨逸主義や「萬國人名辭書」の刊行やを背景とする輸入主義が、歐詩の舶載をうながしたのであるが、完成せられたる古き徳川及徳川前の趣味が一旦悉く仆れて、新しき何の美しきものをも授けられない大衆が、古風に對する空

しき無知や反感やにそゝられて新しいが粗雜なるこの手輕な移殖品を迎へたのは當然である。

畢竟、明治十六七年までに入つて來た思想は單純幼稚な現實主義で、科學の輸入や政治組織、社會制度の改革などに資するための便宜にすぎなかつたから、主觀と客觀との深刻な鬪爭は極めて少い。徹底した物質主義が謳歌せられる傍、古風な理想主義が盛つてゐて、その間に單純な悲劇喜劇が演ぜられたことは、默阿彌劇を見てもかすかに判らう。たとへば、明治十二年書下しのざん切りもの、リツトンが小說の飜案「人間萬事金の世の中」がそれである。が、その爭ひも社會現象として大きな渦を卷くほどのものではなかつた。新渡の宗教プロテスタントとても宗教に幼稚なる國民の只憧憬する心緒に一味の淸新な空氣を注ぎ入れただけである。

すべて時代が開拓と建築と組織と統制との外態を治めることに汲々としてゐたから、かゝる時代に偉大な詩歌、詩人に出られやう筈はない。若し、堀留町の問屋の土藏の片隅に大いなる詩の呼吸をなしうる魂の卵が生れたとしても、哀しい哉、それは必ず慘風虐雨、昔からなる稚き理想主義か新しがりの幼き現實主義のため、若しくは兩者の鬪爭のため、惜らその尊き唇を永遠に鎖されてしまつたに相違ない。（大正十四年二月十日稿）

成島柳北論

木村　毅

一

成島柳北も亦、明治初期の文化史、乃至は文藝史上、重要な地位を占むる一人物ではあらうが、併し彼はどの點から

見ても、非常に卓越した所、又は非常に異常な所などのある文人墨客ではない、極めて平凡な、一市井人である。

元來、明治の文明なるものは、その政治的方面は薩長土肥の、謂はゆる風雲に乘じた連中に依つて建設せられた。之に反して官の力を借りない宗教的、文藝的、學事的方面の建設は、維新の大事業に參ずる事を後れたり、又は德川の親藩であつたゝめ、新政府に睨まれた國の氣を負ふ人士によつて建設せられた。政治的に手も足も出ない連中が、その鬱勃たる反抗の氣、もしくは旺盛な向上心をやるに政治的干渉もしくは連絡の最も少い分野に着目したのは、當然すぎる程當然な事だつたのである。

權威に對する隨從と阿諛と以外の事は知らない、無氣力な當時の佛教については暫く言はない。基督敎傳播の根源となつた熊本バンドの發祥地は、久津久光の出た鹿兒島と大隈重信の出た佐賀とに挾まれて、維新の鴻業には何等參畫する所のなかつた熊本であつた。熊本バンドを繼承してよく此の新宗教隆興第二期の中心となり、併せて泰西の學術の新らしい淵叢となつた同志社は、皇城を江戸に奪はれた跡の京都に、上州出身の新島襄を中心者とし、官軍で散々痛めつけられた會津の山下覺馬をその補佐者として、建てられたものである。

これよりさき江戸では、勤王黨にも佐幕黨にも熱のない、併し舊幕臣ではある福澤諭吉に依つて慶應義塾が興され、それより少しおくれて同じく舊幕臣なる加藤弘之等が帝國大學に地位を占めてゐた。箕作麟祥とか、西周とか、中村敬宇とか言ふ、謂はゆる明六社の同人として、明治新興の學問の基礎を築いた者も、多くは舊幕臣であつた。文藝方面の開拓者となつた春の屋おぼろは三家の一なる尾州の產であつた。

かく政治的建設者と、文事的建設者とを色分けして見る時、成島柳北の位置はどう云ふ所にあるであらうか。柳北は言ふまでもなく幕臣である。隨つて後者に列すべき一員である事は論を俟たない。併し同じ幕臣中でも、福澤や箕作や加藤が田舍藩の出身なるに比して、柳北は生えぬきの江戸ッ子である。文化文政で爛熟し、大成し切つた江戸氣分の眞

中に生ひ育つた者である。從つて他の田舍出の者と違つた都會人らしい、又市井人らしい、洗練味と小悧巧さとを持つてゐた代り、田舍者のやうな粗硬な、清新な、何物とでも結びついて逞ましく盛長して行くやうな氣魄がなかつた。

さう言ふ人間が、世に時めく機會を失つて、なつて行くさきは、洗練的方面に於ては世に拗ねた風流隱士となり、その社會批評は小さな皮肉、諷刺となることを、誰しも推想するであらう。柳北は實にその通りになつて行つた人であつた。――もし柳北の本性に、何か異常な特異點でもあれば、さうした萬人の豫測を、裏切つて行く面白い發展もあつたであらうが、さきに言つた通り、尋常な、平凡な人であつたから、環境の提供する軌道を、寸歩と雖も外る異常さを持たなかつたのである。柳北を論ずるには、視點をそこに置かねばならないと思ふ。

二

柳北の略傳は、文藝俱樂部の增刊『柳北全集』の卷末についてゐるのだが、私は家を移轉して間がないので、藏書の整理がついてゐないから、今その本が見出せない。幸ひ明治元年秋に自ら撰した『濹上隱士傳』なる自傳があるから、今それに依つて、概略をしるすと、天保丁酉二月の生れである。十八の春溫恭大君の侍講見習となり、二十歲の冬侍講となり、廿一歲の冬布衣（昔の六位）を命ぜられ、その間、或は幕朝實錄編輯の監督をなしたり、或は後鑑三百七十五卷を訂正したり、或は昭德公に讀書を授けたりしてゐるの事實に徵しても、學問は相當に出來たのであらう。後、洋學を主張した（?）ので擯斥をうけ、三年蟄居を命ぜられた。その間に英語を學んで一通り讀める位にはなつた。廿九の時に步兵頭に擢んでられた。その後の事を自分ではかう言つてゐる。

『其冬騎兵頭並に轉じ、佛蘭西騎兵傳習の事を建言し、其命をうけて、翌年より橫濱に陣營を造り、大に操練の事を管せり。營築の事、三兵の管轄、みな隱士の手にあり、佛國の敎師謝農安は至て親しかりし。三十一の夏に、騎兵頭に登

り、二千石に加俸す。その秋、騎兵奉行の事をつとむべき由、命あり。隱士筆硯に成立したれども、時運に深意ありて、陸軍一局に非常の精神を費せしかど、竟にその志の如くならざるを憤り、病に臥して職を辭しぬ。家に臥す僅三十日にて慶應戊申の早春に、外國奉行に榮轉し、從五位大隅守に叙任す。其月の末に會計の副總裁に進み、參政の班に加はれり。此時は大阪敗走の後なり。』

明治初期に大いに風流文人を以て聞えた柳北の前半生の閲歷はこれで知られやう。もし德川幕府がもつと長く續いたら、柳北はそのまゝ相當に顯要な地位を占めて、文事はその餘技とし、風流として娛しむに止まつたであらうが、維新の革命は、彼を文事に主なる風流隱士として了つたのである。これから愈々本論に入つて、文人としての彼が面目を窺はう。

三

柳北の代表的著作と言へばやはり『柳橋新誌』三卷と『京猫一斑』であらう。その中『柳橋新誌』第一卷は、德川期の著作なるが故に明治混沌期の文藝研究號なる本誌刊行の主旨から言つても暫く何も言はないことにする。それから第三卷は發賣禁止になつたので、本がなか〳〵手に入らないから、私はまだ讀んでゐない。で、今は主として柳橋新誌第二編と京猫一斑とについて語るが、私は前に柳北の一面は常識的小不平家であり、他面は常識的風流者だと言つたが、その前者の俤が柳橋新誌第二編により多く現はれ、その後者の俤が京猫一斑により多く現はれてゐるのを見る。

柳橋新誌第二編は明治六年に出た。名の示すが如く柳橋の花街の案內記と風聞記とをかねたやうなものである。劈頭にかゝる一節がある。（元は漢文だが印刷の便宜を思ふて直譯する。漢學力の乏しい私が譯すのだからさぞ誤譯が多いであらう。豫めお斷りしておく。）

『……徳川氏西遷の後、東京府内の朱門粉壁、變じて桑茶の園となるもの少なからず、而して柳橋の妓輩依然としてその業を失はず、管絃を操し、風流場中に馳逐す。諸幕吏の兎脱鼠伏して生をぬすむ者に比すれば、豈にまさらざらんや。蓋し王政一新して柳橋又一新す。而して未だ好事者のその新まれるを記する者あるを聞かず。聞く、頃日、わが柳橋新誌（第一巻のことである）を偸刻する者あり、而して風流子弟多く買つて之を讀む。余、この維新の日に方つて、かの既腐の書を讀むを慨し、柳橋新誌第二編を作る。』

これで著作の動機は明瞭であらう。

事ごとに舊江戸の制度舊慣に愛著をもつ柳北は、江戸花柳の粋であつた柳橋が、新たに志を得た薩長の士人、急に市内に數の殖えて來た書生、及び新らしい文明に荒らされ、敎坊の校書の氣風が現金主義の俗に墮するのを慨いてゐる。興味のありさうな所を少しづつ拔いてみやう。

『一書生、學校に入り、頗る英語に通ず。一夕、柳光亭上に飲し、妓と語るになかば英語を用ふ。妓曰く、郎君よく英語を識る、奴輩解せず、これ甚だ趣なし。願はくば奴に敎ふるに英語を以てせよ。書生は甚だしく得意となりて、曰く卿は才子、卿は才子、もし之を學べは數月にして必ず大家とならん。僕英語に於ては通ぜざる所なし。知らず、卿の學ぶところ何を先にせんと欲するか。妓曰く、儕輩相呼ぶに常語を用ゐては風致なきに似たり。願はくば郎君、先づ敎ふるに奴輩の名を以てせよ。書生曰く、妙々。妓お竹を問へば、曰くバンブウ、お梅を問へば、曰くプロム。お鳥を問へば、曰くバルド。お蝶を問へば曰く、シエーブル（今だつたらバツタフライと言ふであらう）。應答響くが如し。妓また美佐吉を問ふ、書生、首を俯して百考すれども得ず。又お茶羅を問ふ。書生ます〳〵困しみ、汗をその額に拭ふて曰く、今は僕、辭書を携へず、近日英語箋一部を懐いて來り、以て卿等百般の問に答へんとす。』

これはその頃大いに社會的視聽をそばだてて來た書生の生意氣さを嘲つたのである。

又かう云ふ一節がある。

『兩雛妓、混堂にゆいて歸る。手に炒豆一囊を携へ、且つ嚼し、且つ歩す。甲、乙に語つて言ふ。妹、昨日おそろ可きの事に會ふ。乙曰く何ぞや。甲曰く、昨、翁屋の客に陪し、墨陀に遊び、翠を拾ふて喜ぶ。忽ち見る斷髮の士人二個、各々大馬に騎して來る。その疾きこと風の如く、衆みな四避す。妹、狼狽、殆んど彼のために蹴らるる所とならんとし喜助翁の援によつて、僅かにまぬがる。怖るべし、怖るべし。乙曰く、怖るべき哉、聞くならく、天王橋畔、騎人、一嫗を踏殺す。眼睛迸出す。騎人烟遁して獲られず、憎むべき哉……甲曰く、方今騎人、何ぞ律なき。或は跳して騎し、或は履して騎す。傘を執つて乘る者あり、手を懐ろにして乘る者あり、奇々怪々、曲馬と一樣、且つ颺奔電馳して、稠人中を叫ばずして過ぐ。何ぞそれ無狀なるや。往日、公子の馬に乘るを觀る、整々肅々、眞士人と謂ふべし。』

これは新政府に時を得た薩長の田舍士の禮なきを、雛妓の口をかつて罵つたもの、恰も今日の成金が泥濘を跳ねとばして自働車を疾馳さするを吾等が憤慨すると同じ心持である。

又こんな一節もある。

『輦に似て輦ならず、轎に似て轎ならず、乘者は仰して踞し、推者は俯して奔る。鐵輪木轅、轣轆聲をなして來るは人力車也。一酒樓上、數妓欄によつて觀る。一妓左右を顧みて曰く、陋なるかな車や、近來この車街衢に遍滿す。東輾西轟、咄々怪事、往時遊客、みな街輿を僦ふ。街輿の物たる、便にして快、輿夫の健捷、連呼勇を賈す。その聲清亮、よく人をして遊意を勃發せしむ。眞にこれ江戶兒の氣象、この車の醜陋、殆んど乞兒が膝行の車と一轍なるに似ず……』

花街の風流を無粋の新文明の浸犯して來るを歎くもの、宛として後年の永井荷風氏の面影がある。

四

永井荷風氏で思出したが、たしかその作『歡樂』の中であつたと記憶する、主人公が初めて遊蕩を覺える際、最も參考になつた書としてこの『柳橋新誌』が擧げてあつた。それから後に中央公論だつたか女性だつたかに京都の事を書かれた中に、鞄にその『京猫一斑』の一本を容れて上洛したと云ふ一節があつた。兎に角さう云ふ書の述作出來る柳北の風流人なるを否定する者はあるまい。

元來を言ふと、非常に守舊的な、頑迷な一面があつて、惡くすると電線の下を通る時は扇で頭を掩ふて洋夷の風に汚さるる事を防いだと云ふ熊本神風連と同轍——でない迄も、少くとも漢學に凝り固まつた老儒、村學究位にはならないとも限らなかつたのを救つて、吾等をして安易に今日も彼に近づき得せしめる者はこの風流氣である。併しここでも亦彼が常識的風流人なるを見る。『京猫一斑』の一二節を引いて之を證するであらう。

『京とは何ぞや。曰く西京府なり、その舊帝都たるを以て、特に稱して京と云ふ。猫とは何ぞや、曰く歌妓なり。その猫皮に絃してこれを皷するを以て也。』の一節によつても明かなる如く、これは京都の花街のことを書いたもので、明治七年の出版である。

それには、汽車も通じてゐなかつた昔に、異鄕の花街をよくもこれだけ細描詳叙したものだと敬嘆させる丈けの記錄的內容はある。併し觀察的到拔、もしくは淸新味に到つては一向にない。

『……槪して之を論ずれば、彈は則ち緩慢澁濁、東人の耳に上らざるもの多し。舞は則ち婉柔倜雅、よく往昔白拍子の遺風を存して、東方の殺氣あるに似ず。』と言つて、東西兩京の花街の三味線と舞とを比較してゐるのだが、この位な事なら、全然、そこに知識のないものにでも想像がつく。そして柳北の花柳エッセイは大抵この程度以上に出でてゐる事は少ない。

柳北は、西京の舞妓のある事を記して、しきりに慘酷で、人情にもとつて、一點の風流情趣もないと言つて、憤慨し

てゐる。がもしこの事を、假りにオスカア・ワイルドか、或はその末輩が聞いたとしたら何うであらう。或は、その慘酷の中から一種の美――戰慄美を發見し、創造しないものとも限らない。柳北にはさうした變態的な面白さはない。

隨つて柳北が讃嘆する妓は、世間的標準と常にその規を一にする。柳橋新誌では、お幸と言ふ校書が、木阿彌なるものから五百金（當時にあつて法外の金だつたと見える）の聘を受けながら之を辭したのを一美談となしてゐるが、京猫一斑にはかゝる一節がある。

『來葉は鴨東有名の妓なり。たゞに才藝容姿、衆に超絶するのみならず、その志操氣韻また古昔の名媛節婦に愧ぢざる者か。その夫、縲紲に死す。來葉は、妙齡薙剃して尼となり、貞信と號す。性、國詩を嗜み、その詠ずる所、往々人口に膾炙す。余かつて一たび眞葛原にまみゆ。その風丰なほ往時一笑百媚の色を想像するに足れり。』

その外には、非常によく眠る女や、やたらに饒る女や、よくユーモア乃至は笑話の材料となるやうな女の話はある。併し或は世紀末の頽廢派の詩材となるがやうな毒婦、妖婦、奸婦に到つては、その趣味に合はない者と見えて、只の一人も記述してない。況んや、ユーゴーやゴーリキイやその他の人道派乃至は社會主義的文學者の材となり得るやうな材料乃至觀察に到つては、更に影だもない。――もとより決して彼にさう言ふものを求めるわけでもないが……。

彼の文章は――漢文のことはよく分らぬから何とも言へぬが、流麗ではあらう。併し或は鴨東解語の花の艷冶を叙し、東山の翠黴を賦するに當つても、よくコンヴエンショナルな辭句を並列して來ると言ふだけのものである。たゞ一つ敬服するのは、花街のテクニックや、校書の談話や、俗謠や、風俗習慣などで、到底漢文では書けさうにも思はれないものに、巧みに漢字を宛て、句に織り、辭となすの手腕で、そこに一種のユーモラスな獨得な味はひが汲まれる。尤もこれは德川末期の漢文家通有の特色で、現に柳北にこの方面の著作慾を刺戟した寺門靜軒の『江戸繁昌記』などにも見られるが、柳北のはもと民間の學者でなく、幕府の御用學者として文を綴つた人だから、一種御殿風の所があつて、

それを驅つて卑俗の事々記する不調和さが私には、より多く面白く思はれる。京猫一斑中最も有名なザコ寢の項の如きが之を證するであらう。

五

流俗に順應する事のみを知つて、それに先驅する意氣も、反逆する氣魄もなかつた柳北だが、一つ感心なのは、さすがに風流人で詩を愛しただけに、泰西の詩學に目をつけてゐた。ある序文にかゝる一節がある。

『詩賦は小技のみ。然れども全地球上、邦上森列して、而して未だかつて詩賦なきの國は非るなり。歐米諸國の如き、文明と稱するはみな詩學を有し、みな詩人あり。而して國を擧げて之を尙ぶの風、古今替らず。……（中略）頃年本邦士人、多く泰西の學を修め、物理を考究し、法律を採摘し、凡百の學科擧げざるなし、而してひとり詩賦に於ける、則ち擯斥して以て無用の物となすもの十の八九に居るは、余はなはだ怪しむ。』

しかしたゞ英語をよめたから、その存在を知つてゐた位なもので、之を移植するなどと言ふ意圖はなかつた。

柳北について論ずべきことは以上につきまいが、さきにも言つた通り、私は家を移つて間がなく、書籍の整理が一向ついてゐないので、參考書がさがし出せない。それにどんなに多くの參考書を涉獵しても、柳北を凡俗の市井人とする私の信念は恐らく覆るまいと思ふ。

最後に殘つた問題は、その凡俗の柳北がなぜ、あゝも讀書界に喧傳せられたかと言ふことであるが、之は別に不思議はない。

世の歡迎する者は必ずしも卓拔な天才のみとは限つてゐない。いな、却つて天才者ほど世に容れられない傾きさへある。

これで思ひ起すのは夏目漱石の『文學評論』の中の『ポープ論』だ。十二三年前によんだのだから充分記憶にないが、何でもポープは名文規範や金言集に採擇されてゐる句の多いこと、英國ではシエークスピヤに次ぐさうである。これのみが文人の資格を決する標準になればポープは實にシエークスピヤの次位に在る大詩人である。併しかくポープの句が人口に膾炙し、詩作が世に迎へられたのは、それが傑れてゐるためと言ふよりも、當時の常識をうまく洗練せられた言葉に盛つたためである ―― そんな風に論じてあつたやうな氣がする。

柳北の世に迎へられたのも、それと同じ理由ではあるまいか。彼は實に明治混沌期の常識以上でもなく、以外でもなく、勿論以下でもなく、實に常識の中にあつて、常識と共に動いてゐたから、それであのやうに、讀書界の寵を得たのであらう。

柳北の著作に、獨立的、個別的、作者本來的の價値をさぐらうとする者があつたら、彼は必ず失望する。併し明治混沌期の世相、人情、常識、雰圍氣などに觸れたいと思ふ人があつたら、絶好の資料を供するであらう。

明治十年前後

淡島寒月

明治十年前後の小説界について、思ひ出すまゝをお話ししてみるが、震災のため藏書も何も燒き拂つてしまつたので、詳しいことや特に年代の如きは、あまり自信をもつて言ふことが出來ない。このことは特にお斷りして置きたい。

一體小説といふ言葉は、すでにかなり新しい言葉なので、はじめは讀本(よみほん)とか草双紙とかと呼ばれてゐたものである。が、それが改まつたのは、戊申の革命以後のことである。

その頃はすべてが改まつた。言ひ換へれば、悉く舊物を捨てゝ新らしさを求め出した時代である。「膝栗毛」や「金の草鞋」よりも假名垣魯文の「西洋道中膝栗毛」や「あぐら鍋」などが持て囃されたのである。草双紙の挿繪を例にとつて言へば、例へば「金華七變化」の鍋島猫騷動の小森半之丞にトンビ合羽を着せたり、靴をはかせたりしてゐる。さういふふうにしなければ讀者に投ずることが出來なかつたのである。さうしてさま〴〵に新しさを追つたものゝ、時流には抗し難く、「釋迦八相記」(大和文庫)「室町源氏」なども、つひにはかへり見られなくなつてしまつた。

戯作者の殿としては、假名垣魯文と後に新聞記者になつた山々亭有人(條野採菊)に指を屈しなければならない。魯文は、假名讀新聞によつて目醒ましい活躍をした人で、また猫々道人とも言つたりした。藝妓を猫と言ひ出したのも魯文がはじめてである。魯文は後に假名讀新聞といふものを創設した。それは、非常に時流に投じたものであつた。つづいて前田夏繁が、香雪といふ雅號で、つづきものをやまと新聞のはじめに、盛に書き出した。

その頃は作者の外に投書家といふものがあつて、各新聞に原稿を投じてゐた。彼等のなかからも注目すべき人が出た。讀賣では中坂まときの時分に、若菜貞治(胡蝶園)といふ人が出て小説を書いたが、この人は第十二小區(いまの日本橋馬喰町)の書記をしてゐた人であつた。その外、投書家でもよいものは作者と同じやうに原稿料をとつてゐたやうに記憶する。(齋藤緑雨などもこの若菜貞治にひきたてられて報知に入つたものである。)

これらの人々によつてその當時、演藝道の復活を見たことは、忘れることの出來ない事實である。舊物に對する蔑視と、新しき物に對する憧憬とが前述のやうに烈しかつたその當時は、役者は勿論のこと、三味線を手にしてさへも、科人のやうに人々から蔑しめられたものであつた。それゆゑ、演藝に關した事柄なぞは、新聞にはちよつぴりとも書かれ

なかつた。さうした時代に、浮川福平は都々逸の新作を矢繼早に發表し、また假名垣魯文の如きは、その新聞の殆んど半頁を、大膽にも芝居の記事で埋めて、演藝を復活させようとつとめた。

そのうちにかの「雪中梅」の作者末廣鐵腸が朝日新聞に書いた。また服部誠翁がいろ〳〵なものを書いた。寛は寛はさま〴〵なもの、例へば祕傳の類、藝妓になる心得だとか地獄を買ふ田地だとかといふやうなものを書いて、一しきりははやつたものである。

讀物はこの頃になつてはずつと新しくなつてゐて、丁髷の人物にも洋傘やはやり合羽を着せなければ、人々がかへり見ないといふふうだつた。二代目左團次が舞臺でモヘルの着物をつけたり、洋傘をさしたりなどしたのもこの頃のことである。が、作は隨分澤山出たが、傑作は殆んどなかつた。その折に出たのが、坪内逍遙氏の「書生氣質」であつた。この書物はいままでの書物とはくらべものにならぬ優れたもので、さかんに賣れたものである。

版にしないものはいろ〳〵あつたが、出たものには山田美妙齋が編輯してゐた「都の花」があつた。その他に硯友社一派の「文庫」が出てゐた。

劇評では二六連の黑須左燕といふ人がゐた。この人の前には梅素玄魚といふ人がゐた。後にこの人は樂屋白粉といふものをつくつて賣り出すやうなことをしたものである。

話が前後したが成島柳北の「柳橋新誌」の第二篇は明治六年に出た。これは柳暗のことを書いたものである。その他に「東京繁昌記」も出た。新しい西歐文明をとり入れ出した東京の姿を書いたもので、馬車だとか煉瓦だとかが現はれ出した頃のことが書かれてある。これはかの寺門靜軒の「江戸繁昌記」にならつて書かれたものである。

一體に、この頃のものは、話は面白かつたが、讀んで味はひがなかつた。

×

明治十三四年の頃、西鶴の古本を得てから、私は湯島に轉居し、「都の花」が出てゐた頃、紅葉君、露伴君に私は西鶴の古本を見せた。

西鶴は俳諧師で、三十八の頃延寶八年の頃、一日に四千句吟詠したことがある。貞亨元年に二萬三千五百句を一日一夜のうちによんだ。これは才麿といふ人が一日に一萬句を江戸でよんだことに對抗したものであつた。散文を書いたのは、天和二年四十二才の時で、「一代男」がそれである。

幸ひ私は西鶴の著書があつたので、それを紅葉、露伴、中西梅花（この人は新體詩なるものを最初に創り、「梅花詩集」といふ本をあらはした記念さるべき人である。後、不幸にも狂人になつた。）内田魯庵（その頃は花の屋）石橋忍月、依田百川等の諸君に、それを見せることが出來たのである。

西鶴は私の四大恩人の一人であるが、私が西鶴を發見したことに關連してお話ししたいのは、福澤先生の本のことである。福澤先生の本によつて、十二三才の頃、私ははじめて新らしい西歐の文明を知つた。私の家は商家だつたが、舊家だつたため、草双紙、讀本、その他寛政、天明の通人たちの作つたもの、一九、京傳、三馬、馬琴、種彦、烏亭焉馬等の本が澤山にあつた。特に京傳の「骨董集」は、立派な考證學で、決して孫引きのないもので、專ら「一代男」「一代女」古俳諧等の書から直接に材料をとつて來たものであつた。この「骨董集」を讀んでゐるうちに、福澤先生の「西洋旅案内」「學問のすすめ」「かたわ娘」等によつて西洋の文明を示されたのである。（この「かたわ娘」は古い從來の風俗を嘲つたもので、それに對抗して萬亭應賀は「悧巧娘」を書いたが、私には「悧巧娘」はつまらなく、「かたわ娘」が面白かつたものである。）

新しい文明を斯くして福澤先生によつて學んだが、「骨董集を」讀んだために西鶴が讀んでみたくなり出した。が、その頃でも古本が少かつたもので、なか〳〵手には入らなかつた。私の知つてゐた酒井藤兵衛といふ古本屋には、山のや

うにつぶす古本があつたものである。何せ明治十五六年の頃は、古本をつぶしてしまふ頃だつた。私はその本屋をはじめ、小川町の「三久」濱町の「京常」駒形の「バイブル」、小林文七、「鳥吉」などから、頻りに西鶴の古本を漁り集めた。(この「鳥吉」は、芝居の本を多く扱つてゐたが、關根只誠氏がどういふ都合でか賣拂つた本を澤山私のところにもつて來てくれたものである。)中川徳基が、昔の研究はまづ地理から始めなければならぬといつて「紫の一本」、「江戸咄」、「江戸雀」、「江戸眞砂六十帖」などいふ書物や古繪圖類を集めてゐたのもこの頃であつた。

西鶴の本は澤山集まつた。それらを私は、幸田、中西、尾崎の諸君に手柄顔をして見せたものであつた。

さうして西鶴を研究し出した諸君によつて、西鶴調なるものが復活したのである。これは、山田美妙齋等によつて提唱された言文一致體の文章に對する反抗となつたものであつて、特に露伴君の文章なぞは、大に世を動かしたものであつた。

内田魯庵君の著「昨日今日」(博文館發行)の中に、この頃の私のことは書いてあるから、私の口から申すのはこれくらゐで差し控へて置きたいと思ふ。

私も愛鶴軒と言つて、讀賣新聞に投書してゐたが、あまり續けて書かなかつた。(私は世の中がめんどうになつて愛鶴軒といふ雅號なども捨ててしまつた。そして幸田君にわけを話すと、幸田君は――愛鶴軒は沒したり――と新聞に書いてくれたものである。)その後、中西君も讀賣に入社し、西鶴の句調で盛に小説を書いた。その前、饗庭篁村氏がさかんに八文字屋調で書かれ、また、幸堂得知氏等が洒落文を書かれたものである。純粹に西鶴風なものは誰も書かなかつたが、誰からともなく、西鶴が世の中に芽をふいたのである。

×

私は元來小說よりも新しい事實が好きだつた。こゝに言ふ新しいといふことは、珍しいといふことである。西鶴の本

は、嘗つて聞いたことのない珍らしいもので滿ちてゐた。赤裸々に自然を書いたからである。人間そのものを書いたからである。ただ人間そのものを書いたきりで、何とも決めてゐないところに西鶴の妙味がある。これは俳諧の力から來たものである。

私は福澤先生によつて新しい文明を知り、京傳から骨董のテエストを得、西鶴によつて人間を知ることが出來た。いま一つは、一休禪師の「一休骸骨」「一休草紙」等によつて宗教を知り始めたことである。そして無宗教を知り——無といふよりも空。即ち昨日は無、明日は空只現在に生き趣味に生きる者である——故にバラモン教からもマホメツト教からも、何からも同一の感じをもつことが出來るやうになつた。

私は江戶の追憶者として見られてゐるが、私は江戶の改革を經て來た時代に生きて來た者である。新しくなつて行きつつあつた日本文明の中で生きて來た者であつて、西歐の文明に對して、打ち克ち難い憧憬をもつてゐた者である。私は實に、漢文よりはさきに橫文字を習つた。實はごく若い頃私はあちらの文明に憧れたあまり、アメリカへ歸化したいと願つてゐたことがある。アメリカへ行くと、日本のことを皆から聞かれるだらうと思つたものだ。そこで、實は日本のことを硏究し出したのである。私の日本文學の硏究の動機の一つは、まつたくそこにあつたのである。

二十二三才の頃——明治十三四年の頃——湯島へ移り、圖書館で讀書してゐる間に、草双紙を讀み、燕石十種（八十冊）——これは達磨屋吾一が江戶橋の古本屋で寫生して、東棠（後で聞けば關根只誠氏）に贈つたものであつた。——を讀み、每日〳〵通つて寫本した。その頃石橋思案、幸田成行の諸君と知己になつたのである。私は明治二十二年頃、一切の書物から離れてしまつたが、それまでには、私の口からこんなことを申すのは口幅廣いことのやうであるが、浮世草紙の類は一萬卷は讀んでゐると思ふ。この頃「一代男」を一圓で買つたものであるが、今日では千圓はしてゐる。思へば私は安く學問をしたものである。

黒髪をあだには白くなしはせじ、わがたらちねの撫でたまひしを。といふ愚詠をしたが、今白髪となつて何の功もないことを恥ぢて居る。（談、文責在記者）

明治混沌期の政治文學

宮島新三郎

一

文學藝術は精神生活の頂上に咲く花である。從つて社會改革、政治の改造、物質文明の建設に忙はしかつた明治の初期に、文學藝術が榮えたとは、どうしても想像されない。事實殆ど文學藝術と名づけるに相應はしいものは、なかつたといつても過言ではない。精神生活の全部は、擧げて個人の日常生活、一般の社會生活をみちびく手段方便のために供された。その當時の知識階級者は、勢力の全部を實學に供して、毫も惜しむところがなかつた。又一般の民衆も花を賞で歌を詠むなどゝいふ暢氣な心持にはなれなかつた。

それ故、明治維新から十年頃までの日本は、文學上の暗黒時代であつた。勿論、全然、文學藝術がなかつた譯ではない。あるにはあつたが、明治の新時代を代表する文學藝術であると誇るに足るものではなかつた。それは、たゞ徳川のデカタン時代から餘端をつないで來た戲作の末流文學のみであつた。例へば假名垣魯文とか、萬亭應賀とか、山々亭有人とか、鶴亭秀賀とか、條野傳平（採菊散人）とか、高畠藍泉（三世柳水亭種彥）とか、染崎延房（二世爲永春水）

とか、梅亭金鵞とかの書いた戯作が、僅かに餘脈を保つてゐたにすぎない。

それが明治十一二年頃から、政治思想、わけてもフランス流の自由民權論が盛んになるにつれ、外國の革命小說、政治小說の飜案があらはれて、世間の人氣に投じ、やがては飜案にはあきたらず、青雲の志を抱いてゐる青年の血をそゝるべく所謂政治小說が出るに及んで、文學界に多少の新空氣が漂ひ出した。そして終に明治十八年にいたり、坪内逍遙博士が『小說神髓』(ブリタニカは譯してこれを "Essencials of a Novel." といふ)を公けにして、在來の文學觀を一掃し、文學上の新觀念、卽ち近代文學の根本精神たるリアリズムの觀念を明白にし、同時に、その新文學觀を基づけた小說『當世書生氣質』を明治十八年から十九年にかけてあらはした結果、こゝに始めて明治新興文學の曉鐘が打鳴らされることになつたのである。それ故に、眞の意味に於ての明治文學は、この『小說神髓』『當世書生氣質』の出た前後から建設の時期に這つたものと見て好い。しかしその時から急に趣をかへたといふのでは勿論ない。坪内先生が一度『小說神髓』を出したからといつて、急に政治小說がその姿をかくした譯ではない。この派の脈は二十三四年までもつゞいてゐる。

こゝで私は、所謂この政治小說なるものについて少しく紹介し、かたぐ\愚見を述べて見たいと思ふのである。

二

明治初年から十年頃までを物質的建設の時期、卽ち國家の經濟的基礎、社會的基礎を形づくる時代であつたとすれば、十年から二十年乃至二十三年の帝國議會開設までの時期は、より多く國家の政治的建設時代であつたといへよう。そして明治の新文學が、多少でも若芽を萠き出したのも、やはりこの時期であることを忘れてはならない。

政治上の種々なる思想や實際運動が、直接間接に文學に影響して、それに變化を與へ、色彩を施した例は、各國の文

學史にいくらもある。例へばイギリスの十八世紀は、誰も知る通り、スティール、アヂスン、及びデホー等の常識文學、スヰフトの厭世文學で有名である。そこで、その當時の英國の政治的狀態はどうであつたかといふに、Whigs（民黨）と Tories（王黨）との二大政黨が、黨勢擴張のために、反目嫉視してゐたのである。その角逐反目の醜態が、上に擧げた人々の文學的作品中には、或は正面から、或は側面から、或は勝手口からといふ風に描かれて、諷刺となり、滑稽となり、諧謔となつて現はれてゐる。若し政治的題材を取扱つた小說が政治小說であるといへるなら、それ等は明かに政治小說である。

又十九世紀の前半には、農業改革や産業革命の後を受けて、第四階級が經濟的危機に瀕し、その結果、政治的、社會的、經濟的變化を要求する所謂プロレタリアの叫びが、その當時の思想の基調となつた。文學の方面にもこの思想の影響は忽ち深刻に響いて、或は農村の疲弊をそのまゝに描き出した者もあつた、或は工場生活の悲慘と暴虐とをさながらに映して示す者もあつた。更に一歩を進めて、中には政治的革命、社會組織の變革を叫ぶ者もあつた。ディスレリー然り、キングスリー然り、ディッケンス然り、ギャスケル夫人及びジョージ・エリオット女史然りであつた。何れも社會の輿論に訴へて、同情を惹き起し、社會改造、人間心の改造、政治改造といふが如きヘロイックな理想を包含してゐた。これ等も亦一種の政治小說乃至社會小說である。

更にロシヤの一八四〇年から五六十年代、農奴解放の行はれた前後の社會狀態を見ると、政治の方面といふよりも、廣く一般社會思潮の傾向として、在來のスラヴ魂をあくまで固守して行くか、それとも西歐の新思想を受容れて、社會制度、政治並びに經濟の全般を改造するかといふ問題が喧しく論議されてゐたことが分る。所謂 Westerners（西歐派）と Slavophiles（スラヴ派）との爭である。前者を進歩黨と見れば、後者は保守黨である。西歐派が有勢になるに從つて、スラヴ派の擁護によつて成立してゐた政府は、これに激しい壓迫を加へて、言論の自由を禁じた。そこで新社會を

夢見る人々、社會改造に熱心な思想家は、自己の思想を表現すべく、文學の形式をかりることになつた。そしてこゝに政治文學といふ一種の變態文學が生ずるに至つたのである。

以上は何れも政治の思想や實際運動が、文學に變化を與へた、外國に於ける一二の例である。ところが、明治十年前後から二十年前後へかけての日本の政治思想乃至實際運動は、全く新しい文學、即ち明治新興の文學に芽を萠かせるといふ基礎的な放れ業をやつてゐる。坪内先生の『小說神髓』が明治の新興文學を確立する種子であつたとすれば、甚だお粗末ではあるが、政治文學（但し飜案小說を含む）はその土壤開拓に多少の功を奏したといへよう。ではどうしてその當時の政治の思想や運動が、明治の新文學を引き出す導火線となつたのであるか、それを究める前に、先づ吾々は簡單に政治思想の勃興に就いて述べて置かなければならない。

封建の制度が破れ、在來の階級制度が撤廢され、人材登用の途が開けたおかげで、明治維新の事業は、所謂平民士族の活動に待つところが甚大であつた。腕さへあれば、肩書も門閥も要らない、參議にも大臣にもなれる世の中であつた。現に一平民から立つて、廟堂に列し、時の天下を支配した者もあつた。この事實は、一般の人々、ことに漸く一階級を構成しかけて來た血氣に燃える靑年をして、政治熱の捕虜となさしめずには置かなかつた。木戸、大久保、伊藤、大隈、わけても維新當時の革命精神と、進取的活動力とを失ひかけて、保守に傾きつゝあつた政府に向つて、勇ましい革命の烽火をあげた大西鄕は、自由に憧れ、進步を理想し、一國將來の宰相たることを夢見てゐた靑年書生の偶像となつた。『書生々々と輕蔑するな、西鄕隆盛もとは書生』の流行唄にきけ。そんな譯で一般に官吏が今日からは想像もつかぬほど幅をきかせてゐた。先づ官途について置いてといふのが、當時の人々の下心であつた。官員崇拜、官員全盛時代とは、これ果して何を意味するか。在來の階級が打破せられたかと思ふ間もなく、そこには新しい權力階級が、その萠芽を見せかけたことに他ならぬ。かくして平等であるべき官員と市民との間には、非常な距離が生じ、支配階級と被

支配階級との心理を生み、政府對民間の離反となり、將に專制政治の二の舞が演ぜられんとした。

こゝに於てか、政治家たらんとして、政治の舞臺に登場するを禁ぜられた政客若しくは青年書生は、政治の保守的、專制的傾向の漸加に對し、進步的革命熱を以て抗した。そしてこの進步的革命熱を高めるに當つて最も都合のよかつたのは、フランス流の自由思想で、明治十年前後から踏々としてこれが輸入された。フランス流の自由思想といつても、主としてルッソーやモンテスキューのもので、就中、ルッソーの『民約論』の如きは自由思想を抱いてゐた政治家や政論家の金科玉條であつた。この書は既に明治十年頃服部某氏に依つて抄譯出版されたことがあるが、今日では明治十五年になつて出た中江兆民氏の漢譯が寧ろ有名である。スペンサーの社會平權論が、松島剛氏の手に依つて譯せられたのも、この前後である。又明治十六年には、馬場辰猪氏の『天賦人權說』が出版された。箕作麟祥が佛國民法の飜譯を出して、同じく人權論の普及につとめたのも、亦たその頃である。久しく佛國のパリーに留學してゐた西園寺公望は、歸朝後直ちに『東洋自由新聞』を發行して、自由民權說を鼓吹した。かくして自由思想、自由民權、社會平權の思想は大なる發展を見た。『新日本史』の著者竹越與三郎氏にきけば、彼の曰く、『凡そ維新以來自由思想の最高潮に達したるは、實に十三四年より十五年に至る此の時期にあり、若し百年を隔てゝ一種詩歌的の感懷を以て當時を回顧せば、殆んど小亞善、小希臘の如く見ゆるものあらん』と。彼又曰く、『社會平權の思想已に一代を震蕩す、此に於てか、其社會に歡迎せらるゝの文書は、皆な此の色澤を帶びざるなし。曰く共和政治論、曰く萬民平等論、曰く共和原理、曰く自由原論、皆な平權思想の潮流に乘つて湧出したるものにして、政府に因緣ある者が、此の如き思想の潮流を拒かんとして、ベンタムの人權宣告辨妄、若しくは同一の主意を含みたる雜書を譯述すれば、天下また之を歡迎せり。之を歡迎するは、其駁論を聽かんがためにあらずして、其の佛國人權の宣告とは何ものなるかを知らんがためなりき。一代の人心已に此の如くなれば、當時の政府が維新の轍路を脫し去り、專制に安んじて人民希望の一點だも許るす所なきや、社會

は遂に革命文學をさへ歡迎するに至れり』と。

この風潮に乘じて明治混沌期の無文學時代に外國の革命小說、卽ち政治的、社會的革命を題材としたロシヤやフランスの小說の飜案が行はれたのである。

三

それは魯文一派の戲作とは面白さの點に於て同日の談でなく、而かも彼等の胸に燃えくすぶつてゐる自由思想をいやが上にもかき立てるものであつた。それに複雜な結構といひ、表現の新しさといひ、構想の巧妙といひ、思想內容の抱負といひ、表現の新しさといひ、何一つ彼等を動かさぬものとてはなかつた。同じ自由思想、革命思想でも、論文で表現されたのと、物語の中に編み込まれてゐるのとでは、全くその訴へる力が違ふのである。そこで別に文學者といふ程でない人々が、これを飜譯して世に示すといふ結果になつた。『西洋血潮小暴風』（デューマのザ、メモアズ・オブ・エ・フィジシヤン）、『自由の凱歌』（同じくテーキング・バスチーユ）、『鬼啾々』『夢戀々』等は、何れも題材を佛國革命又はロシヤの虛無黨の叛逆に採つたローマンスである。たしかツルゲーニェフの『父と子』が『虛無黨物語』と題して飜案されたのもこの前後であると記憶する。これ等の飜譯者として多少名を知られてゐたのは宮崎夢柳・小室案外堂等で作品は『綸入自由』『綸入朝野』『自由の燈』などの新聞へ發表された。その作品はすつかり戲作者風のものに書きかへられたので、原作の趣は更になく、決して新しいとはいへなかつたが、而かも尙ほ直接外國語の讀めぬ青年には、新しい力強い感銘を與へたのであつた。

然し政治小說の飜譯もので、新しい形を取つて、卽ち戲作の域を脫してあらはれたのは、明治十一年十一月に始めてその初編を公にした丹羽（織田ともいふ）純一郎譯『歐洲奇事花柳春話』である。これは十二年四月に出た附錄を加へ

て全部五冊で完結してゐる。原作者は英のリットン卿、『ポンペイ最後の日』の作者である。原作は "Ernest Maltravers" 及び "Alice" である。筋は、大政治家、大文學者たることを理想とする主人公のアーネストが、様々な人生の惨苦をなめ、艱難を冒し、終に年來の望みを果し、身に榮冠をつけると同時に、久しく見失つてゐた戀人を、昔のまゝの貞操に於て見出し、目出度く結婚するといふのだ、極めて甘い物語である。譯文は所謂漢文直譯體で、當時の學者、新聞記者が、論文や新聞記事を書くのに用ひたと同じ文章である。けれども戯文の跡は全然なく、その漢文直譯體に却つて新味あつて、讀者に精新の印象を與へたのであらう。その人氣たるやすばらしかつたらしい。何故それ程に人氣があつたのであるかといへば、現作者その人が、英國の大政治家であり、同時に文學者であつたからだと思ふ。單に文學者であるといふだけでなく、大政治家といふことが、その當時の青雲を望んでゐた青年の血を湧かしたのであらう。しかし、成島柳北の序文を附し、『花柳春話』と題したところに、依然たる舊文明の趣味が殘つてゐる。

この『花柳春話』が一度人氣に投ずると、これに類似した種々の飜譯飜案小説が簇出した。ことにリットン、ビーコンスフィールト卿即ちディスレリーのものが多かつたやうに思ふ。先づリットンのものでは坪内先生譯『慨世志士傳』（リエーンヂー十六年頃）、某氏譯『綺想春史』（ポンペイ最後の日――十六七年頃）、藤田茂吉（鳴鶴）尾崎庸夫同譯『繫思談』上、中、（ケネルム・チリングリー――十八――二十一年）などが出て、當時の讀書界を賑はした。『慨世志士傳』『綺想春史』は暫らく措く。『繫思談』を繙くに、そこに極めて興味ある例言ありて、中に譯者の態度を論じた一節がある。曰く『稗史は文の美術に屬せるものなるが故に構案と文辭と相俟て其妙を見るべきものなること論を俟たざるに世の評家多くは其構案のみを取りて之を發表するの文辭に於ては絶て心を用ゐることなく全く原文の眞相を失ふも肯て顧みざるは東西言語文章の同じからざるにも因るべしとは雖も美術の文を譯するの本意を亡失せることと之より甚しきはなし譯者窃に茲に慨することあり相謀つて一種の譯文體を創意し語格の許さん限りは務めて原文の形貌面目を

存せんことを期しこれが爲めには瑣末に渉れる邦文の法度の如きは寧ろ之を破るも肯て顧みる所に非[illegible]叙述するに方り往々已むべからざるものあればなり』と。斯かる抱負の下に譯述されたものであるだけに、[illegible]は流石に當時の飜譯界の一奇觀である。『花柳春話』の漢文直譯體とは、全く雲泥の相異である。

リットンのものについで飜譯されたのは、ディスレリーのもので、關直彦譯の『春鶯囀』（ヴィヴィアン・グレー）などは廣く讀まれた方である。又尾崎咢堂譯著の『經世偉勳』は大政治家にして且文學者なるディスレリーの傳記であるが、これ亦た一時は人氣の中心となつた。作中に政治的要素が多少あるところから、スコットの『アイバンホー』までが鶴堂牛山良助氏に依り『梅蕾餘薫』（明治十九年）として飜譯され公けにされた。如何に政治小説がその當時の流行をつくつてゐたかは、この書の序文を見ても明瞭である。『近頃泰西の小説を譯するもの多く櫛比訪問に行はる其譯する處精妙に句々絶快の味ありて其神髓槪ね政治に關らざるもの甚だ尠し宜なり書賈の爭ふて稿を徵するもの亦た世運の刺戟に由て然るもの歟』と。何事でも政治に交渉を結びつけねば、すまされながつた當時の風潮が、遺憾なく忍ばれるではないか。

シェクスピアのハムレットが譯され、坪内先生に依つて『シーザー』が『自由の太刀名殘の切味、該撒奇談』と題されて現はれたのも政治的興味の故であつたと思ふ。『ロミオとジュリエット』さへ多分の政治的興味を加味されて當時の讀書界に飜譯されたのである。尙ほその當時にあつては、直接政治には關係ないが、一種のヘロイズムを鼓舞し、キューリオシティを呼び起すやうな種類のもの、例へば『アラビアン・ナイツの抄譯である『全世界一大奇書』を始め、フランスのジュール・ベルヌの科學小説などが、井上勤とか川島忠之助とかの手に依つて飜譯された。これは我が國に於ける冒險小説の先驅だといつてよからう。

さてこれ等の飜案飜譯小説は、何れも今日から見ると、極めて幼稚不完全なものであつた。けれども單にむづかしい

學問の窓からだけでなしに、藝術の世界、即ち感情的、情操的方面から、西洋人の思想や感情や生活狀態やを日本人に知り味はせたといふ效果、それから微妙な複雜な思想感情を我が國の文學に流入して、やがて新文學の地ならしをするに至つたといふ業蹟は、頑として動かすべからざるものである。

翻案翻譯小說について特に注意を要すべき點は、その執筆者が、二三氏を除いては、藤田鳴鶴といひ、丹羽純一郎といひ、尾崎咢堂といひ、何れも皆政治家、乃至新聞記者であつたといふことである。これはひとり翻案翻譯に限らず、次に述べようとする政治小說の作者についてもいへることである。それ故見方によれば、翻譯翻案小說や政治小說は、文學者の所產ではなくて、政治家、政論家、又は新聞記者の餘技になつたものといふことが出來る。然し見樣によつては次のやうにも解釋することが出來ると思ふ。

元々彼等は政治の方面で己が天分技倆を發揮して、その成功を收めようとしてゐたのである。けれども政治の舞臺は野心ある人々の全部を主要役者たらしめることは不可能であつた。そこで政治的野心を抱きながらも、尙ほその捌口なく徒らに憂憤憂悶の狀態にあつた。その憂憤憂悶を、或は翻譯の筆に、或は政治小說に托したのが彼等である。それ故彼等には最初から或る程度の文學的才能はあつたものと斷定される。その文學的才能に依つて、求めて得られなかつた憂憤憂悶の心境を筆に托したのが、翻譯小說、政治小說に他ならない。從つて翻譯小說、政治小說の執筆は、彼等の餘技でなく、生命を賭した事業であつた。然し翻譯にしても小說にしても、始めから彼等政治家、政論家、乃至新聞記者の興味から一步も離れたものではないのであるから、其處に自づから傾向的、概念的、問題的になる特色を生じたのは當然である。彼等は自己の所見と一緒するものを求めては翻譯し、自己の政治論、社會論を披瀝するために小說を書いた。そして端的に自己の所見を感情的に訴へることの出來るものは、翻譯よりは寧ろ小說であつたから、翻譯小說の流行と前後して、こゝに政治小說の出現を見るに至つたのである。

四

さて政治小說は明治十三四年から二十一二年頃までの文學界を占めた主要な現象であるが、今その重なものだけをあげて見ると、矢野龍溪の『經國美談』(十六——十七年)『浮城物語』(二十一年)、東海散士柴四郎の『佳人之奇遇』(十八年——二十四年)、末廣鐵腸の『雪中梅』(十九年)『花間鶯』(二十——二十一年)、須藤南翠の『綠簑談』(二十一——二十一年)、『新粧之佳人』(二十年)などである。これ等のうちで最も廣く讀まれ、大きな反響を社會に與へたものは、東海散士の『佳人之奇遇』と矢野龍溪の『經國美談』とである。尚ほ純然たる政治小說とはいへないが、藤田鳴鶴の『文明東漸史』(十七年)なども廣く讀まれたものの一つである。

『佳人之奇遇』は、亡國の怨恨と將來の希望とを、流麗な漢文直譯體で描きあらはした大長編物語で、主人公には亡國の士を選び、舞臺は世界に擴つてゐる。實際著者その人が會津の藩士で、明治維新と共に同じ亡國の悲慘をなめ味つた人であるだけに、全篇を通じて一種の傷ましいペーソスが感ぜられる。この亡國の士が主人公となつて、世界の亡國の跡を弔ひ、悲憤慷慨する有樣を描き、合せて自由に對する燃えるが如き憧憬思慕の情操を歌つたものが、この一篇である。開卷第一頁から、讀者は米國のフィラデルフィアの獨立閣に導かれる。そこでは散士自らがその塔の頂に立つて、米國獨立當時の勇ましい狀態を思慕追懷してゐる樣子が見える。それから主人公は、『春風駘蕩、朝霞煙の如き』中を輕舟に掉さして、デラウェイアの支流を下つて行く。すると下流からは美しい姫をのせた小艇が上つて來る。これは女主人公格なるアイルランドの幽蘭女史である。アイルランドの興亡も亦た東海散士にとつては感慨の種子でなければならなかつた。かくして舞臺はそれからそれへと轉囘され、或は埃國へ、或は希臘へと走馬燈の如く目まぐるしい。今日から見れば、餘程幼稚な甘いものではあるが、その當時の政治熱に浮かされてゐた青年の心を打つには充分なものであ

つたと見える。尤も所々にはさまれてゐる詩などは、今日の吾々でも思はれず口ずさんで見たいやうな氣のするものもある。

矢野龍溪の『經國美談』は『佳人之奇遇』に比較すると、その行文がずつと柔かになつてゐて、寧ろ雅文に近いことに氣づかれる。その凡例に於て、『今や我邦の文體に一定の體裁なきが故に著者は此書を草するに當て隨意自由に諸種の文體を用ひたり然れども戲れに從來の小說體の語氣を學びし處多ければ讀者之を察せよ例へば「斯る田舍の片山里に」とあるを「斯るテンシヤのヘンサンリに」と讀まれては迷惑なり「斯るヰナカのカタヤマザトに」讀むべし……總て大和詞樣に讀めば間違ひなく句調よし……』と述べてゐるのを見ても、如何にその當時漢文直譯體が隆盛であつたか、そして又龍溪が平易な文章を書くことに苦心したかゞ分らう。『經國美談』の內容はギリシヤの各邦が競ひ立つてゐた時に、テーベの名士エパミノンダスとペロピダスとが力を合せて國威をあげたといふ、歷史上の美舉を題材にしたもので、一種のヘロイズムに感動の總〆高がある。その當時にあつて如何に小說中の白眉であつたかを示すために、こゝには藤田鳴鶴が前篇の跋漢文として書いた文章の大意をかゝげて見る。日本で著はすところの稗史小說は、多くは不學無識、それ故概ね鄙俚淺陋、婦女子の觀玩にすぎない、自分は何時も之を讀む每に深く遺憾とした。抑々泰西に行はるゝ小說は多くは博識家の手になるから、立論精確、命意峻爽記、事叙述の際は片言標新、そして行文平易、政治の得失を論破し、風俗の美惡を辨斷する、從つてその書が行はれると、必ず能く廉頑立懦、極めて世教人心に補するものがある。頃日龍溪矢野君、ギリシヤの古史によつて、テーベ民政興廢記一篇をつくる。當時の形勢を記すること詳にして、列士報國の蹟を考索し、名つけて經國美談といふ。稿成るに及んで自分にこれを評せよといふ。自分は受取つて之を讀んで見るに、巧みに英雄の精神風度を寫してあるので、髣髴として千載の今日古人を見るの趣がある。而かも記事の間に政治の得失を論破し、叙情の中に風俗の美惡を辨斷してあるなり、蓋し西哲大家の小說に用ゐ[illegible]

の書を以て破天荒となす。』

尙ほこの跋によると、『經國美談』こそは、創作としての政治小說の最初のものであつたらしい。同じ作者の『浮城物語』は政治小說といはんよりも寧ろ冒險小說、後の押川春浪あたりの冒險小說の先驅とも見られるものであるが、こゝにも亦た南洋島の征服といふやうな政治的興味が多少ないでもない。この『浮城物語』は創作としては大した價値のあるものとも思へないが、それが報知新聞に連載されたといふことは、一つの文化史的意味を持つてゐる。卽ちその當時までは新聞で小說、所謂續きものをのせるといつても小新聞が極めて幼稚な讀者をつるための手段にすぎなかつた。それ故大新聞たるものが小說を掲げるなどといふことは、直ちに新聞の權威問題になつた。ところが矢野龍溪は再度報知新聞へ這入ると間もなく、同紙へ『浮城物語』を載せ始めた。このことについては、『明治文化發祥記念誌』(大正十三年十二月、大日本文明協會發行)の中で、矢野氏自身が、次のやうにのべてゐる。『今日から見れば何でもないことであるが、當時の出來事としては、それは新聞界のレコード破りであつた。卽ちそれは大新聞が紙上に小說を書いた最初の試であつたのだ。たゞし、これは我報知新聞の獨立を確保せんとする經營上の企圖から出たものであるが、從來日本の大新聞が永年把持し來つた信念を打破するものとして、カナリ斯界の注目を惹いた。「浮城物語」といふのは、比較的高級の小說ではあつたが、斯界一般の論調は、之を批難するに傾いた。果然毎日新聞は、其雜報に於て大に之を批難した。大新聞の墮落なりと云ふて、大に皮肉に嘲つた。』

然しこの計劃は大いに當つて、報知の發行紙數は俄かに激增し、他の大新聞も何時とはなしに在來の硬派的態度を捨てゝ、數年のうちには何れの新聞もが、競つて小說や講談までも出すやうになり、こゝに大新聞と小新聞との區別が徹廢されたといふのである。

末廣鐵腸の『雪中梅』と『花間鶯』になると、前の諸作品よりは又一段と技巧が進歩し、その内容も全然架空事ではないらしく、現實生活の一面をそのまゝ描き出したと思はれるところもある。皮相ではあるが、現實生活、即ち現實の政治を背景として動く人間生活の姿が、そこには描かれてゐる。然しその作品の目的が矢張り自由民權といふ政治思想の鼓吹であり、その内容が政治的要素を多分に持つたものであるところから、依然として政治小説の中に繰入れられてゐる。自由民權説の主張、各地に於ける政治宣傳演説、それに對する警察の取締り樣、檢束騷ぎ、その間にあつて、飽くまで紳士的に自由民權説を國民の頭惱に徹底させようとして、幾多の艱難困苦に出遇ふ青年政治家、この殺伐な空氣を色彩るに、『當世の女は昔風ではいかぬ、琴や三味線は大抵でいゝから充分に學問させる』といふ父の意見に從つて教育を受けた新しい女性を以てしてゐる。自由結婚の思想なども無論作者は無意識だらうが、そこに描かれてゐて、新しい問題的興味を唆るものがある。

須藤南翠の『緑簑談』や『新粧之佳人』は、『雪中梅』や『花間鶯』と略々その行き方を同じくしてゐる。『緑簑談』の素紙には、特に "Political Novel" と英字が這入つてゐる。それから凡例の中には次のやうな一節がある。『本書は始め、雨窓漫筆緑簑談と題せり、予が小時精人リーバー氏が著せる Self-Government（一名 Civil Liberty）を讀みたる折思寄せたるまゝを手帳に記して僅に秘め置きたるものなり、原書は自治論、人民の自由と譯すべきもので、專ら自治の原理を討究したるものなるが、近時地方困憊の情愈切迫して殆ど救濟すべからざるの傾向を現せしに際し、地方分權の期愈々逼るを見る、予亦此に感なき能はざれば僅底を探りて、聊か之れを補修し遂に私論を小説に假りて説くに至れり。』

この凡例が説明してゐる説り、『緑簑談』は中央集權に對する地方自治の要を説いた小説である。農村問題を取扱つた小説である。小作問題を取扱つた小説である。貧富の問題を取扱つた小説である。更に社會主義的思想を取扱つた小説であらう。かゝる政治思想・社會思想と共に、他面には、男女交際の自由、自由結婚の問題等が緯として取扱はれてゐる

る。編中、殊に吾々の興味を引くのは、田園生活の荒廢と都會生活の殷賑との比較對象である。兎に角、これは、日本で農村問題を取扱つた最初の小説、更に言ひ換へれば、日本で社會主義的思想を取扱つた最初の小説であらうと思ふ。そして農村問題を取扱つたといふこと、社會主義的思想を取扱つたといふことは、何を意味するかといふに、明治維新の改革が丁度フランス革命の如くに、ブルジョア文明を建設し、キャピリストとレーヴォアラーとの分離を齎す社會組織に基礎を與へ、二十年前後になつて、漸くその弊害があらはれて來たことを證據立てるものに他ならない。

五

さて政治小説は大體以上に述べたやうなもので、その創作たると飜譯たるとを問はず、政治の舞臺から退けられた結果、そのやり場のない憂憤憂悶の情を小説の形式をかりて、若しく飜譯の筆に托して發表したもの、或は自己の政見を宣傳せんが爲めに書いたものであるから、元々傾向的、第二義的たるを免れなかつた。勿論第一義的の文學ではなかつた。この種の文學は、政治の道具であり、傀儡であつた。唯だ文化史的見地から見て、その時代の政治的雰圍氣に包まれてゐた社會相を傳へてゐるところに、存在の意義があり、更に次代の新興文學の素地をつくり、根をすゑつけたといふところに、存在の價値があるだけである。獨立した文學的意義や價値を求めるわけにはゆかない。また性格描寫に別に見るべきものがある譯でもなく、事件の發展に、自然の推移がある譯でもなく、空想を深く掘下げて讀む人に喰入るチャームを感じさせる譯でもない。

更に又政治界の眞相を研究し、政治家の眞理を解剖し、政治を通じて人生の秘奥を表現しようとしたものでなく、ただ小説の形式をかりて、彼等自身の政論、又は社會觀を發表したにすぎなかつた。彼等は政治活動の表裡を觀察し、再現する藝術的努力を用ひずして、たゞ自己の政論なり社會觀なりを發表し、演説せんがために小説といふ形式の中に演

壇を設けたにすぎなかつた。その野心に於て一脈の經世的熱意を見ることは出來るが、藝術的自覺に至つては皆無であつた。それ故、彼等が文學者であつたといふことは、たゞ文章が書けるといふ、在來の舊觀念を元にしての話であることを忘れてはならぬ。文學の眞意義に關し、藝術そのものの本質に關する自覺が湧いて來たのは、坪内先生の『小說神髓』が出て、相當にその内容思想が玩味されるに至つた二十年後のことである。

斯く、一方に於て文學はその獨立性に自覺して、他の部門の利用に供せられることがなくなると同時に、他方は二十三年の國會開設と共に政治運動にも一段落がついて、國民の政治的興奮は沈靜し、從つて政治小說の飜譯創作が以前ほどには興味を惹かなくなつた。先づ創作の方面では『佳人奇遇』の第十卷が明治二十四年に出たのが最後の打ちきりであり、飜譯では末松謙澄の『谷間の白百合』の二十一年に出たのがとまりであらう。

さて以上の飜譯創作の政治小說を通して、明二十年代の日本國民の思想感情の背景を眺めて見ると、何となく私には、極めて大ざつぱな、ラフな、散文的な意味に於て、一脈のロマンティックな傾向か其處に漂つてゐるやうに思はれるが、間違ひだらうか。極めて實際的な政治や經濟の奥義に、より以上の生活に對する一脈の憧憬思慕の感情の漂ひ流れてゐることを、私はどうしても觀取せずにはゐられない。『經國美談』や『佳人之奇遇』に對する讃美は、極めて低い意味に於てゞはあるが、ヘロイズム、英雄崇拜の讃美とは見られないであらうか。又『花柳春話』や『全世界一大奇書』や『浮城物語』に對する興味は、キューリオシテイに對する無限の慾望と見ることは出來ないだらうか。一般に自由民權論や地方自治の主張を表現した政治小說が歡迎されたといふことは、比較的手近な政治といふ實際生活の中に、無限に求めてやまない人間の理想を具現しようとする一つの可憐な美しいロマンテイシズムの現はれではあるまいか。かう見て來ると、傾向的な、第二義的な飜譯創作の政治小說も、瑕があつたり、歪があつたり、汚點がついてゐたりしても、ロマンテイシズムの精じねりかためた器として、なか〱捨てがたく、すゞろにに愛着の念を禁じ得ない。

作者附記。右の一文は大正十三年六月十五日の『日本及日本人』に『政治思想と文學』と題して揭げたものに、今度手を加へて補修したものである。意見の大分異るところもある。矛楯と解せず、進歩と見ていたゞきたい。

明治年代合卷の外觀

鳶魚

草双紙と覺へられた渠の錦繪表紙の小本は、式亭三馬の日記に文化四年より草双紙が殘らず合卷になつたとある、其の合卷のことなのだ。明治の初の小說は孰れも此の合卷の體裁で世間に出た、其の型式は江戸の末のものを其の儘に繼承して、一編といふが上中下三冊で(二冊のもあつたが)、袋入り、大概は三編九冊讀切りになつて居た、一冊の丁數は九丁、上卷の方には色摺の口繪が這入つて居る、此の合卷が三冊續きであることは、錦繪と關係があるやうにも思はれる、錦繪は三枚續が最も多く、二枚續きは尠い。一枚繪もあつたが、それは一枚單行のはなくて、三十六景とか、十二ケ月とかいふやうな名で統括してあつた。其處で合卷の錦繪表紙といふことを考ふべき順だが、差當つて合卷の冊數は表紙の錦繪から思ひ附いて、當時盛に行はれる三枚續きに傚つたのではあるまいか、と云つて置かう。

合卷は黃表紙の一變したものであるから、一冊を通じて畫のない所はなく、挿畫の餘白に本文を細な假名で書いてある。勿論木版なのだ。我等は自分だけのことだが、外形から錦繪表紙袋入りの合卷を、木版と活版とで江戸式東京式と云つて居る。

その江戸式の方は本來假名のみで書いてあるから、振假名の旁訓はない筈である。東京式のは大體假名交りに書いたので見れば、振假名をする必要もあれば、又た振假名つきにもなつて居る。それは新聞小說の評判の好いのが合卷になる爲めに、新聞の體裁を持込むだからといふだけでなく、學問と云へば先づ漢學を第一にした時代ゆゑ、渠の眉の凝る曲亭馬琴の讀み本が頗る感服された程で、自然筆を持つ者の心持を字引臭い方へ傾け、戲作者だつた連中が多少とも學者氣取りになつた樣子がないでもない。作物よりも人間が妙に高尙がらうとしたと共に、從來の草双紙は童蒙婦女の慰み物と定められて居たのに、一度新聞に小說が連載されるやうになつては、大人君子の積りでござつた人々も、それを見るやうになつた。幾分の素養があつて漢字の趣味、漢文の嗜好から、小說の文章をも玩賞したい儕輩が、偶然にも新しい讀者になつた。此の讀者の變革は氣取りたい戲作者には誠に好い都合であつた。無理算段をしても變な熟字や、妙な套語を並べて、頗る滿悅の體であつたが、新しい讀者には艱澁な字面でも振假名の必要はない。しかし物が物だけに古いお華主の童蒙婦女は小說から離れやうとせぬ。此の方には振假名が是非なければならなかつたのである。明治初年の小說家は艱澁な文字と振假名とを併用して、讀者の幅を著しく擴張した。

さうならば活版の東京式合卷以前には振假名はなかつたか、處が有るのだ。明治四年出版の松飾徳若譚（假名垣魯文作）といふ江戸式合卷には、

元亨（げんかう）建武（けんむ）の兵亂（ひやうらん）

といふ按排に振假名が文字の下へ註のやうに入れてある。此の體裁は何時から起つて、何時まで續いたか、無論十年以後のものには見られない。

合卷の振假名は中本（滑稽物、人情本）移しなのかとも思つたが、爰に一つ考ふべきことがある。合卷の出版は總べて地本問屋組合に這入つて居る當業者がする。然るに讀み賣の版元、是は瓦版と稱する際物を主として發行するのだが、

一枚刷の讀賣や半截四枚の流行唄を出版して居た。それが嘉永以來は流行唄のみならず、あふむ石（音色本）や、讀切り講談や、講談の修羅場を模倣した青物合戰記、魚類合戰記、臺所道具合戰記、さては地震太平記までも出して居る。其の方で多數に出版して居るのは、山城河岸の東屋淸吉（東淸）、馬喰町三丁目の吉田屋小吉、土橋丸屋町の東屋傳藏（東傳）、地藏橋の松坂屋吉藏（丸吉）、八丁堀の瀧辨、中橋のうた長等を算へる、さうして流行唄が端唄や淋澤に及ぶ頃、鸚鵡石の表紙と共に錦繪表紙になつた。それは多分文久であつたらう。綴ぢてなかつた上下四枚のものが、粗末ながらも錦繪表紙になつた時には、丁數もまして一冊の體裁になつた。其の際讀み切講談も同樣に美裝したのである。無論絲で綴ぢられた。其の前の四枚物は表紙に畫はあつても墨刷で、綴ぢずに糊附けにした。それも丁數のある講談物だけは絲で綴ぢてあつたが、其の他のものは紙捻りの二處綴に過ぎぬ。講談物は錦繪表紙になつても版元を記載してないのが多い。出版者が地本問屋組合以外にある爲めであらう。讀み賣の行販する出版物は綴じてない、敢て丁數の



松飾德若譚の一面

尠い爲めのみではなく、一冊の本の體裁になるのを避けたからであらう。それは地本問屋との出版權についての議論を、逃げたものと思はれる。錦絵表紙にならないでも絲で綴ぢた冊子ならば、讀賣りの版元が出版し得られないのである。さう思はれるのは紙捻二處綴の物には大抵版元の名があつて、絲綴ぢには版元の名のないのが多いからだ、然るに錦絵表紙で本の體裁をした物が出る、(無論版元の記名はない)それと地本問屋の出版した江戸式合巻とを比較すると、上下若しくは上中下である者が、丁數こそ三四十枚にもなつて居ながら、一冊であることゝ、口繪もなく袋入でもないことゝ、幾處かに挿畫はあつても、讀みばかりの處が多いこと、戯作者の筆に成らずに、講釋師の手になつたものであること等であつた。其の上に注意を引くのは假名交りに書いて振假名が附いて居ることである。

其の絲綴ぢの讀み切講談や紙捻綴ぢ合戰物の中に、振假名を割注のやうにしたのを見掛けた。却つて錦絵表紙になつてからの講談本には見掛けない。振假名を割注のやうにした講談本は恐らく弘化嘉永の珍物だらうと思はれる、錦絵表紙の講談本は合巻よりも遙に晩年である。斯う考へて明治四年版の松飾徳若譚の割注の樣な振假名は讀賣屋の影響らしくなる。此の徳若譚は地本問屋組合員加賀屋吉兵衛の手から出て居るが、同じ魯文の作の黄金花猫目假面(明治五年)や、二世春水の新增補西國奇談(明治八年完結)や、柳水亭種清の白縫譚(明治十六年大尾)などは、持越しであるから、儘に假名書きで振假名はない。だが明治になつて新に出來た江戸式合巻は悉く假名交りの振假名つきだといつて差支へなからう。其の除外例として只だ一つ、明治十八年八月、今川橋の地本問屋澤村屋から、萬亭應賀作揚州周延畫の明良二葉草初編を出した、是だけは應賀の當り作釋迦八相記そのまゝの體裁で、生粋な江戸式合巻だつた。繼承したものでなく、明治になつて新に出版した合巻の假名書きは、此の他にあるまい。明良二葉草の賣行が妙でなかつたので、二編を嗣出せずに了つた、哀れ假字書き小説は此の澤村屋版が最後のものなのである。

明治になつての江戸式合巻の出盛りは、十二年から十四年までゞ、十五年には活版東京式合巻が出て、其の翌年より

凄しい勢で木版の江戸式合巻を驅除して往つた。我等は未だ十六年版の江戸式合巻を見ぬ、多分十六年には東京式合巻のみになつたのであらう。さうならば明治になつての江戸式合巻は前後十五年間の生命だつたのであらう。此の十五年の間に一編三册、即ち上中下に極つたたのは十二年からと覺へて居る。それと共に三編九册を讀み切りとするのが通例のやうにもなつた。それより長いものは五編十五册、或は七編二十一册に達した。其の上に續いたのを知らない。又た一編三册を讀切りとしたものは甚だ稀であつたやうに記憶する。

江戸式合巻の多數は新聞の續き物を潤色剪裁したものであつた。續き物といふのは兎に角事實を敷衍して連載したので、社會種の長い雜報なのだ。それを三編九册にするために延べ縮めしたといふよりも、引き延べるのであつたが、一體興味を心掛けてあるのを、更に小說化して分量を增殖した。渠 續き物が喜ばれた後に小說が掲載されるやうになり。此の特殊な雜報が小說と並んで新聞の興味を煽つたのである。同時に新狂言の筋を仕立てたのやら、新講談を書き直したのやらが合巻になつた。新聞の小說を其の儘に出版することは、東京式合巻になつてのことで、江戸式合巻にないことだ。

江戸式合巻の作者では假名垣魯文、花笠文京、三世種彥の高畠藍泉、柳水亭種淸、笠亭仙果、久保田彥作、泉龍亭是正、一筆庵可候、芳川春濤、岡本起仙、伊東專三などで、二世春水の染崎延房や三世谷峨の萩原乙彥の作は尠く、此の人々は稍々殘れ氣味だつたと思ふ。

さて松飾德若譚の振假名が氣になる。江戸式合巻を思ひ出す度每に、何時でも我等に考へさせる。それが緣で綴ぢた讀切講談の影響だと思はれるのは、魯文の自傳「文反古」に、嘉永年中に大道散人といふ名で、ヤンレイくどきを作り、萬延になつてスチヤラカポク〳〵、ナンダベコチヤラ〳〵といふ囃子の俗謠を作つたとある。ヤンレイくどきは心中くどき又は心中ぶしとも云ふもので、スチヤラカと共に讀み賣り本なのだ。我等は物數寄に大道散人と署名したのを搜

し初めた。然るに心中ぶしやスチヤラカを多少採收して見たけれども、作者の署名したのはない、まして御注文のは尙ほ更見當らぬ。それが偶然四枚物の繪太平記雜噺といふ安政の大地震を軍談めかしたものゝ端に、市中隱士大道散人戯作とあるのを發見した。是で自傳に心中ぶしや新俗謠を作つたといふ外に、斯うしたものまで讀み屋へ供給して居ることを慥めた。是で魯文と讀み賣りの版元との連絡は明白になる。魯文は假名交りに書いた自作小說を合卷にするに際して、綵綴ぢの講談も既に旁行に振假名をして居たが、其の已前の割注振假名を思ひ出して使用したのであらう。綵綴ぢの講談本にも割注振假名のは極めて尠い。或は彼が講談本に試みた創按を、再び合卷に試みたのかも知れぬ。講談本は行が荒いのみか、挿畫の個所が尠くない。まして讀みは讀みばかり、挿畫は見開しとか半丁とか極りが好い。畫面に書き込むことがない故に、文字も大きく旁行に振假名をしても體裁を整へられる。それとは違つて合卷は毎丁の畫圖に書き込むのであるから、細い假名でビツシリと篏めるやうでないと恰好が取れない。假名交りにしたゞけでも細密には往かぬ。まして眞字に振假名をすれば行間が廣く、白ツぽくなる、其處で割注振假名と出掛けたのであらうが、是れ又た面白くない。合卷の割注振假名も趣向倒れであつた。綵綴ぢの講談本よりも合卷の方が餘程締つては見へるものゝ、旁行振假名に一定しては、文字も行間も荒くなり、其の釣合ひから挿畫が段々精微を欠き、自然と疎雜になつて往く。錦繪表紙の講談本と合卷との差は、表紙の色刷の遍數が違ふのと、挿畫の分量の多寡と、袋入であると無いと、三冊と一册と等で、其の距離は逐々接近して來た、講談本は演者自分の執筆したのもあらうか。それでも戯作者を眞似る、まして其の多くは戯作者が聞書きしたので、中には聞書き風に書いたのもある。本の體裁が類似する前に、作者は既に共通して居た。

東京式合卷になると、活版で丁數は極りなく、一册讀切りが多く、上下とか前編後編とかもあつた。しかし三册物は無かつたやうに覺へて居る。一册物にしても活版ゆゑに分量から云へば三袋九册よりも多い。此の頃の表紙は新聞の

挿畫で鳴らした大蘇芳年が大に揮つた。江戸式合卷は漸く零落して手腕ある畫家から離れ、豐國國貞が作家の文章構想と、自分の技倆と、孰れが賣行きに效驗があるかを競ひ、往々にして喧嘩をする程に意氣込んだ昔を夢にも見られなかつた。それを東京式になつて挽回しさうな景氣を見せた。清新潤達な芳年の筆致は、百年來の浮世畫の面目を豹變させた。彫摺りも實に立派である。鮮齋永濯のもあつたが上品だけで冴へなかつた。孟齋芳虎のは武者繪が拔けない爲めだか引



蜀魂雲井一聲（松村櫻雨作）の口繪

立ちが惡く、楊州周延のは多々益す辯じるのみで力弱く、櫻齋房種のも穩當で淋しく、守川周重のも只だ乏居臭くばかりあつて生氣が乏しい。梅堂國政と來ては例に依つて例の如く、何の面白味もなかつた。やはり新聞の挿畫を擔當する人々の方が、怜悧な往き方をするので際立つて見えた。其代り芳年まがひを免かれぬ繪入自由新聞の一松齋芳宗、繪入朝野新聞の香蝶樓豊宣、それに拘らず一流を立てゝ居たのに繪入新聞の落合芳幾、開花新聞の歌川國松がある。尾形月耕は何新

聞であつたか思ひ出せないが異彩を放つて居た。東京式合巻は主として新聞畫家から賑はされたといつて宜しからう。

新聞の挿畫は毎日毎同あるのだ、江戸式合巻の紙面のやうに挿畫の分量が本文以上に多いことはなくても、まだ〳〵畫で見せもするが、合巻になると新聞へ出したのを取纏めたのでも、日毎の挿畫を悉く收載されないで、其の數は四分の一以下に減じる。特に氣張つて三四段抜きの挿畫は、當時流行兒であつた芳年が得意として澤山描いた。世間でも盛に褒めたけれども、合巻の紙幅は折角ながら喝采された畫面を收容し得られない。概して新聞の挿畫は小間畫が多かつた。合巻の挿畫よりも狹いなのが通例だつた。宇喜世新聞開花新聞が半紙刷で四段組みだつたと覺へて居る、其の紙幅へ段抜きでなく挿畫をしやうといふだから、小間畫になるのは據あるまい。芳年が大物を揮つたのは新聞が洋紙へ罫掛すやうになつて、紙幅が著しく廣くなつた後の話で、明治の十六七年頃と思ふ。それは合巻に無用な話のやうでもあるが、さうした心持から合巻の見通し、江戸合巻式では見られぬ體裁、全幅を畫ばかりにする。ゴチヤ〳〵とした書き込みがないので、サバ〳〵とした畫圖が描けたのだ。但し新聞の挿畫あつて以來、遺憾なことには、其の日〳〵のものであると、彫りを忙ぐのとで、彫刻が透々麁末になり、果ては錦繪の方へさへ差響きが來る程になつた。合巻の挿畫などは一足お先へ粗彫惡刻になつて了ふ。

東京式合巻が僅に江戸式から傳統した口繪は、巻中の挿畫が思ひ切つて減少した其の引合はせといふでもなからうが、却つて立派になつた。口繪の色刷が四五遍のものは珍しくない、巻頭の三丁は昔の通りだ、江戸式も末になつては、一丁倹約して二丁にしたのもあるのに、威張つた三丁は目覺しい。それは最初の一年内外迄で、十七年になると色刷も二三遍になり、或は一丁減じたのも見へ、墨刷、しかも手摺でないのだけのや、口繪のないのさへポツ〳〵出て來た。

是も江戸式傳來の袋入、此の袋も色刷二三遍のがあつた。墨刷と色板と二遍のが並みだと眺められて居た。孰れにも淡泊の圖按ではあつたものゝ、如何にも機轉の好い輕妙な處を見せた嬉しいものだつたのに、何時か外題だけの墨刷に

なるかと思ふと、それさへもない白紙の袋入になつて了つた。合卷もモウ末路だ。袋なしとなれば大道で賣る讀賣屋の講談本杯と同様だ。しかし此の凋落は如何にも急激に、頗る短い時間に來て、素早く合卷を滅亡させて了つた。間もなく我等は須藤南翠氏の新粧の佳人を狂喜した。石版畫表紙が如何にも奇麗に眺められ、西洋紙へ刷つた、西洋綴ぢの小說が珍しく思はれた。それより前に洋紙洋綴ぢの小說はあつたが、孰れも飜譯物であつて、頗るお高い〳〵を極めた樣子、昔の讀み本と草双紙ぐらゐ氣位を違へて居た。從つてクロース金文字の製本で納り返つて居る、當時の廣告文にも西洋綴表紙總クロス金文字入と別段に斷つてあつた。西洋綴には石版畫表紙の附くものとは思ひも寄らない處へ、新粧の佳人の美麗なのに驚いたのは、決して我等だけではなからう。それと押並べて石版畫表紙の西洋綴小說がドン〳〵出て來た。是がハイカラ合卷とでも云ふのだらう。西洋綴の新しい姿になつて木版墨刷、或は色刷、石版刷、何にせよ口繪を附けて居た。何程開化しても江戸式合卷傳來の圖按筆者をまゝに、正直に昔らしい口繪を大功さうに放さずに居たことが、今日から考へれば奇蹟のやうでもある。

合卷作者の記名を見ると、明治十一二年江戸式合卷の出盛りに、苗字と作名と連書する風を生じた。それまでは曲亭馬琴、山東京傳といつた流儀に、實際の姓名とは全く別に署記したのを、岡本起泉だとか、篠田仙果だとか、苗字と號と續けて書く、仙果は從來笠亭と冠せたのを罷めた。岡本は姓名丸出しに勘造と署したのを變じた、昔の作家は曲亭馬琴瀧澤觧とは書いても、瀧澤馬琴と自記することはせぬ。それは違例であるから、他人からは瀧澤馬琴といつても、當人は決して云ひもせず、書きもしない。儒者氣取で支那の御手數の掛つた禮法に依つて左樣は致さないと極めて居た。處が此の頃御無禮な署名式が生じた。何故に慣例を破つたか知らない。支那の禮法に拘泥するには及ばぬと云つて、此の擧を敢てしたのでもないらしい。假名垣魯文の如きは後に假名垣を苗字にしたのだから、御無禮式署名の例にはなるまい。姓名丸出しは岡本勘造より久保田彦作の方が早いかも知れぬ。しかし後には彦作を本名にしたが、最初は彦作と

いふ脚本の作名であつたかと思ふ。故に姓名丸出しの第一人は岡本だらう。御無禮式署名の原因或は苗字のなかつた戯作者が、新政府の法規で苗字が名乗れるやうになつたのが嬉しくて、嬉し紛れにやつて除けたのか、町人百姓にはなかつたが、武士には昔ながら苗字がある。それに武家出の作者は今では御同様だが、我もむかしは男山といつた氣分で、作名の上へ苗字を乘せて、飛んだ力味を見せたのでもあらうか。若しさうならば四



怨仇花盛街夕暮（香亭樂山作）の挿繪

民平等の御利益が意外な處へまで發露したのである。

合巻の外題も變革がある。孰れも丁寧に狂言の外題に倣つたものだ。勉めて三字五字七字の數を約束のやうに堅く守る。格蘭氏傳（ぐらんとしでん）倭文章（やまとぶんしやう）などは無理が無いが、豐時田秋速新雁（ふじたのあきなにはのはつかり）などになると無理も無理、作字やら當て讀みやら大騒動で、字數を合せた痕跡が見へる。藤田傳三郎の贋札事件を書いたので、雁を贋に通はせたり、藤田を豐時田と書き替へた魂膽は、宛ら當て込み狂言の外題らしい。それが又た作者の考案であ

つたのだ。外題の字數も東京式合卷を待たずに徐々に毀れ掛けて、四字六字のを幾分か見受けた。けれども容易に破壞されない。東京式にあつても明治小僧噂高松、鳴渡雷同新、淺尾岩切眞實鏡、或は自由艷舌女文章、晝夜帶加茂川染、縫綉葵補襠など、云つた外題のが多數を占めた。お芝居根性の根深いことは、是だけでも知れやう。

今度の記述では合卷の外觀だけに止めて、其の内容には及ばない。又た合卷の後身である洋綴物にも走らずに、怪しい記憶と聞及びとに依つて、合卷の成行を略說したに過ぎない。今後豫定の採收を畢つた時、始めて幾分詳しい記述が出來やうと思ふ。今はホンのお間に合はせなのである。さて最後に二世種彦の楓時故郷の錦木のことを申添へて置きたい。

楓時故郷の錦木は正本製と斷つてもあるから、萬事は御推量を願ふとして、明治十六年一月に銀座二丁目の愛善社から出版された。東京式合卷の末枯れと見るべきものである。錦繪表紙の一冊物口繪さへない。その全體は七幕九場になつて居る。それだけなら別に變つたものでもないが、淨瑠璃だけを木版和紙で五枚添付してある、我等の見聞が狹い爲めかも知れぬが、斯ういふことは他にないやうに思ふ。一方では芝居根性を離れやうとして、外題の字數をさへ慣例から免れながら、尙ほ正本製の方では新しい趣向を立てゝる。此の時小說は小說、脚本は脚本と各其の立脚地を守つて、當然分離する筈だと作者が心附いたのではあるまい。相替らず板元の御注文次第なのだが、芝居臭に鼻を掩ふらしい態度を見せたのは、學者らしい高尙ぶりな飜譯物に動かされたのであらう。或は動かされたやうな顏をしたかつたのかも知れぬ。

明治の小說を劃すべき當世書生氣質が、合卷でもなく、洋綴でもなく、雜誌とも見るべき日本紙へ刷つた分册で刊行されたことは、當時として最も新しい型式たつたのである。それ等の事は別に記述する方が便宜であらう。

似而非惡魔主義

—所謂毒婦物の考察—

本間久雄

内田魯庵氏は、その著『きのふけふ』の中で明治の初期を猿芝居時代と云はれたが、この言葉はいかにもよく當時の過渡期的滑稽な時勢相を穿つてゐる。

この猿芝居式滑稽時代に、文學らしい文學のあるわけはない。すべて大きな社會革命の渦きのたゞ中では、文學や藝術の華は咲かない。例を西洋の文藝史に取つても、無論大ざつぱな云ひ方ではあるが、ロマンチシズムの思潮の一番早く芽生えたのはフランスではあつたが、フランスには一七八九年の大革命を始めとして一八〇四年、一八一四年と引つゞいた社會革命のために、ロマンチシズムの文學の收穫は他の英獨二國に比して、最もおそく收められてゐる。社會革命の血汐を浴びないイギリスでは、巧みにフランスに芽生えたこのロマンチシズムの芽生えを移し植ゑ、それに培つてワーヅワースを始めバイロン、シェリー等、浪漫派の旺盛を齎らしたのは一八二〇年前後であつたが、フランス本國ではその芽生えの鮮かに成長したのは一八三〇年以後のことであつた。とにかく社會的變革の餘りに大きく、餘りに慘ましい時には、少くもその當時は文學藝術の隆興しないのは古今東西の歴史の證明するところである。況んや、明治維新の醱し出した猿芝居の變態的社會では、人々は舊い生活の目標を突如失つて、未だ新しい目標が樹立されないで、暗中模索の焦燥に、日を送つてゐたので、眼前のことに追はれて、文學を作ることも味ふことも出來なかつたのは寧ろ當然なこ

とであつた。幕末には、たとひ、そこにやがて來るべき社會革命の氣運が醞釀されてゐたとは云へ、表面の社會制度がまだ崩壞しなかつたので、その文學的價値はともかくにも、京傳の洒落本以下、春水の人情本、五瓶、南北等の戲曲に至るまで、夫々後代の鑑賞、研究に値する文學があつたが、明治維新以來、明治十年前後までは、如上の理由から全く文學らしい文學はなかつた。日本文學史の上から見ると、明治以來のこの十四五年間は、全くの白紙である。

しかし、文學らしい文學はなかつたにしても、何等かの意味で當時の一般民衆の慰藉となり娛樂となつた讀物のなかつた筈はない。幕末の戲作脈をそのまゝに繼承した讀本人情本、草双紙の類ひや、當時の所謂「開化」の時代を新しく取扱ふとした世相小說の類がなかつたわけではない。私の見た極く僅かな範圍だけについて云つても、松村春輔著で「開化小說」と銘打つた『春雨文庫』（十冊、明治九年版）松村櫻雨戲著『落花清談春雨日記』（十冊、明治十四年版）等は幕末の戲作脈を追つたものとして、可なり愛讀されたらしい。又、「開化」の世相を取扱つた讀ものとしては高畠藍泉の『怪化百物語』（明治五年版）萬亭應賀の『大鈍託新文鬼談』（明治五年版）等を讀んで見たが、これは、たゞその當時の世態人情を、ほんの皮相的に取扱つたゞけで、文學としての價値のないのはいふまでもなく、その文化史的資料の上から見ても服部誠一の『東京繁昌記』（明治七年版　に劣ること數等である。たゞこの兩書所載の河鍋曉齋の挿畫が異彩を放つてゐるだけである。又、この二書は、餘り多くも讀まれなかつたらしい。

多く讀まれた『春雨文庫』その他の情話文學にしても、何等か題材の點で、徳川末期のそれとは異つたものにしようとする作者の苦心が相當にあつたらしく、この點では、維新を背景として、實在してゐたさまぐ\の人物や事件の人口に膾炙してゐたものを選ぶのが、彼等としても好都合であり、讀者にも受けたらしい。『春雨文庫』の序の一節に

本文の眼目は、既往十有餘年開鎖和擴の說發り、海內鼎沸の時に當り、丹心報國の壯夫は、義を泰山の重さに較べ、命を鴻毛の

輕きに倣へ、美名を靑史に殘すあれば、奸智を逞うし一時の榮花を顧みつゝ汚名を千歳に傳ふる奸臣あり。或は貞操のために身を犧命に終り、或は孝順の不幸にして身を苦界に沈むる未通女ありし。當時見聞するところ有爲轉變の浮世ならずや。

とある。そして、この『春雨文庫』はこれらの世相を、そのまゝに書き記したものであるといふ。無論小說と銘打つほどであるから、潤色はしてあるに違ひないが、大體事實によつたことはその中の人物例へば近藤勇その他實在の人物の名前を見てもわかる。

又、この頃ひろく讀まれた『島田一郎梅雨日記』(十冊、明治十二年版)などによつても、いかにこの頃の作者が、實在の人物をモデルとしたかゞわかる。この小說は、西鄕隆盛の人格を慕ふあまり、西鄕が西南役で亡くなつてからその怨みをはらすために、西鄕の反對派の随一であつた大久保利通卿を明治十一年五月十四日に、麴町の紀尾井坂に要して暗殺してやがて處刑された島田一郎外五名の同士――島田一郎を中心として、それに貞節な藝者梅吉とその他の女性を配して、半ば事實、半ば空想の小說である。この大久保暗殺事件は當時の大きなショックであつたので、諸新聞は爭つてこの事件の當事者だちのことを連載したらしい。この『梅雨日記』もその一つで、東京新聞に連載したもの、筆者は岡本勘造である。

この小說を書いた目的としては、五篇第一卷の序で作者が次のやうに云つてゐる。

息子殿が中本を誤認るや陶朱の富を新造の小家に拵へ、娘子達の院本を誤認るや淸女に似て非なる終をとるに至る。抑も誤認の害たる斯の如し。本篇に載るところの島田等の如きも亦明治の元勳國家の柱石をなして世に邪魔なるものと誤認せしより茲に局を結ぶが如き悪逆に陷り二つとない命を捨てゝ世の物笑ひとなつて、我輩等が手にまでかゝり、兇名を殘すことゝはなりぬ。然り而してこの兇徒、無智文盲少しも理非の辨別を知らざる痴漢狂人にはあらず。然るに斯の如き誤認あるは全く偏狹に在つて天下の形勢に通ぜず、聞見狭くして我佛尊しとのみ思ふより起りし事と覺ゆるや。

かう云つて、作者は更に、この本を書いた趣旨を讀者諸氏が誤認しないで異れと云つてゐる。それからこの書の最後のところでも、「いさゝか世人の懲戒ともならんかと、かく長々しくは書き綴る」と云つてもゐる。卽ち德川期以來の勸善懲惡主義である。

これは一例であるが、この時代に、最も多く讀まれたものは、三面種を題材として、勸懲主義的立場から出來るだけ讀者に面白く讀ませようとしたものであるらしい。尙これらの作の形式は、幕末の人情本や草双紙の脉を追うたものだから、從つて挿畵も重要な條件となる。『梅雨日記』は櫻齋房種の筆で、草双紙式に每頁に畵がある。

明治十年前後に、特に多くの讀者を贏ち得たものは、鳥追お松や夜嵐お絹や高橋お傳等の所謂毒婦物である。これらの所謂毒婦は、お絹の刑せられたのは明治五年二月で、年は三十、お傳の刑せられたのは明治十二年一月で、年は二十九、お松の狂死したのは明治十年二月で、年は廿七八？であつたから、彼等の生涯は維新を境とした上に、後の二人は重に維新後に活躍したので、彼等の生活は當時の新聞の續き物として最も恰好なものであつたらしく、私の見たこれらの毒婦物は何れも一度新聞に載つたものである。この中最も早く書籍の形で出たのは『鳥追お松海上新話』で前後九册つゞき、作者は久保田彥作、挿畵畵家は陽州齋周延、假名垣魯文の校閱で、錦榮堂といふところから、明治十一年の一月に第一卷を出してゐる。次に第一卷所載の魯文の序文を掲げる。

我假名讀新聞第五百四十號客歲十二月十日を以て、始めて雜報欄内に記載せし鳥追お松の傳は間々本年一月十一日第五百六十二號に至り、闘出する事十四回、未だ結局に及ばざるも、僥倖にして千町萬町の衆目に觸れ、喝采の聲價を得たる操觚者の歡喜の餘りに思はず筆を走せたるなり。然りと雖も看官三筋を繫ぐ長物語は頗る新紙の本意に違へば、其概略を次號に揭げ、大團圓となさんと欲するを、錦榮堂の主人、遺憾とし 、乞うて其首尾を全くせんとす。原由は遙かに過去し明治元年の春よりして同十年の冬に

止る温故知新の大實錄、題して海上新話と號け、玆に三絃の緒を解くといふ。

これで、この『海上新話』の由來がわかる。これが、當時事實人氣に投じて非常に賣れたので諸新聞は爭つてかういふ毒婦的實錄物をかゝげ、同時に書籍の形ちになつて出たのもしきりに賣れたといふことである。

芳川俊雄閱、岡本勘造綴、永島孟齋畫『夜嵐阿衣花廼仇夢』は、明治十一年の六月に初號を出してゐる。出版元は金松堂で前後十六冊ある。これも芳川氏の序文によると、初めはさきがけ新聞の同年五月二十八日の紙上に發端をひらき、餘り評判がよいので、完成しないうち、すぐに書籍にしたといふのである。

高橋お傳は一番後に出た。これはその當時最も人口に膾炙したものらしく、假名垣魯文の編纂になる『高橋阿傳夜叉譚』は前後十八篇、守川周重の挿畫で、明治十二年二月初號を出してゐる。出版元はやはり金松堂である。この外に同じく十二年の二月に、芳川俊雄閱、岡本勘造綴として『其名も高橋毒婦の小傳東京奇聞』と題するものが十二冊ある。この方の挿畫畫家は櫻齋房種で出版元は島鮮堂である。お傳については、此外に河竹默阿彌が同じく十二年四月の新富座の團、菊、左のために書下した『綴合於傳假名書』と題する六幕十四場の世話物がある。これによつてもお傳がいかにその頃世間の話の種になつてゐたかゞわかる。

私は、これらの毒婦物に一通り眼を通した。一つは、これら毒婦物の作家が、如何なる態度で、その主人公を觀察したか、といふことを知りたいため、今一つは、その頃の世間がかういふ毒婦物を喝采したのは、どういふわけであらうか、どこにその原因があるか、といふことを知りたいためである。

さて、私の見たところでは、私のこの第一の興味は、見事に裏切られた。魯文の『阿傳夜叉譚』の序にもある通り、たゞ三面記事的事實談に多少の潤色を加へたものに過ぎない。而も性格についての研究もなければ、境遇に對する洞察もなく、たゞ勸善懲惡の立場から、毒婦の事件を表面的に取扱つたものに過ぎない。たゞこの中では、比較的『鳥追お

松海上新話』が、全體に簡素な筆致で、他のに比して、比較的藝術味がある上に、無論表面的ではあるが、いくらかその「時代」を彷彿させようとした點が取柄である。作者の久保田彦作とはどういふ人であるか審かにしないが、恐らく假名讀新聞社の記者だつたであらう。書かでものことだが、まだ讀まない人のために、左にこの作の梗概を書く。

お松は京橋釆女ケ原の非人定五郎の娘で、毎日母と一しよに三味線を抱へて商家の軒下や勤番長屋の窓下に立つた。彼女は天成の麗質だつたので、見る人々はその美に打たれた。折柄慶應の末諸藩の兵士が江戸に來てゐた時だつたので、兵隊の間にも彼女の美が問題になり、廓の内の或邸に屯集する徵兵隊の濱田正司といふ男は深く彼女の色香に迷ひ、金にあかせて一時は彼女を手に入れたが、お松母子から二百圓餘を騙り取られ、そのこと隊長の耳に這入つて禁足を命ぜられる。

この頃、今一人お松を慕つてゐた者があつた。それは淺草の某呉服店の番頭忠藏といふ若者で、いろ〳〵苦心した結果、漸々のことでお松と媾曳する機會を造つた。と、そこへ兼て打合せをしてゐたお松の情夫で、雪駄直しの大坂吉といふ惡漢が出刄庖丁を持つて飛び込んで來て、忠藏は折りから持つてゐた主家の金二百圓の內百圓を取られて了ふ。

しかしその恐喝の狂言がお上に知れたのでお松と大坂吉は大阪へ逃げるつもりで品川まで來たとき、仲間の密告から大阪吉はつひに捕縛され、お松のみ辛じて逃れて、六鄕の土手に來かゝつたとき、主人の金を使ひこんだゝめその申わけに縊れようとしてゐる忠藏に出會つたので、胸に一物あるお松は、忠藏を慰め、死を思ひとゞまらせ、忠藏の故鄕大阪へ連れ立つて來る途中駿州蒲原の驛で忠藏は病氣にかゝり、かて加へて路用の金を盜まれ、二人は途方に暮れてゐるところへ、隣室に泊り合せた府中の藝者屋の主人といふ男が、一時を凌ぐためにお松に藝者になることをすゝめ、お松も忠藏を離れるに折よしと承諾する。ところが、その藝者屋の主人といふのが、實は甲州無宿の作藏といふ無頼漢で、前からお松に思ひを寄せてゐて、巧みに狂言を書いてお松を海岸に連れ出し手籠にしようとしたので、お松は海の中へ飛

び込み、波のまに／＼漂つてゐるうちに神戸行の汽船に救ひ上げられ、神戸に連れてゆかれる。

お松は、身の落つくところがないまゝ、忠藏の親忠兵衛が大阪に居ることを思ひついて、そこに尋ねてゆき、忠藏と慕ひ合つた仲であること、忠藏が病死をしたと僞つて實しやかに語り、忠藏の菩提を弔ふために黑髮まで切るので忠藏夫婦も氣の毒に思つて、お松の世話しようと思つてゐるところへ、さきにお松の容色に溺れて、一時禁足を喰つたが、今は立身して大阪で重い役目をつとめてゐる濱田正司が現はれて來て、お松を連れて行つて妾とする。

その中に、一度囚へられて徒刑百日に處せられたお松の情夫大阪吉が偶然にも濱田の馬丁として住み込んで來る。お松は又この男と人目を忍ぶ仲となる。それを濱田の正妻のお安の忠僕佐吉に見とがめられたので、身の安全を謀るため毒舌をふるつて正司に讒し、お安を盜賊の汚名を着せて無實の罪に陷れ、それを庇護した佐吉をも攻め殺させて了ふ。

其後は、正司の正妻同樣になり、而も大阪吉とひそかな淫樂を恣まにしながら三年を過す。偶々正司は、私かに犯した種々の罪科が露れて役を免ぜられ、獄につながれ、やがて彼れは舌を嚙み切つて死んで了ふ。お松と大阪吉は、これ幸ひと種々の財寶を持ち出して逃げ出し、東京へと近路をいそいで津の國の摩耶山の麓へ迷ひ込む。折から出逢つた獵人は、先年お松をかどわかさうとした甲州無宿の作藏だつたので、お松を中心として大阪吉と二人の間に烈しい格鬪が演ぜられ、大阪吉は谷底深く蹴落される。お松は止むなく作藏の侘住居に伴はれ二ケ月ばかり同居してゐたが、ある日作藏と共に獵にゆき、男の油斷を見て鐵砲を放つ。一つは大阪吉の仇を報じ、一つはこの侘住居から逃れたいと思つたからである。しかし玉は外れ、怒つた作藏の刀にお松は、あはや、かゝらうとした時、大熊が出て來て、作藏を喰ひ殺し、お松も逃げるはづみに谷底へ落ちこむ。

こゝでお松は、通りかゝつた日海といふ僧に扶けられ、且つ、彼女の落ち込んだその谷間に、二ケ月前作藏に蹴落された大阪吉の死骸のあるのを見て、彼女はつくづく因果をさとり、日海の弟子になり、妾の仇をうるさく思ひ顏に燒

ごてを當てゝ醜い顏ばせとさへなる。やがて甲州なる日海の寺に連れられて來て、そこで暫く殊勝らしくしてゐたが、つひにもとの惡心をおこし、檀家から集つた金を盜まうとして見とがめられ、多くの寺男に打擲されて追ひ出される。折から、姿をかへるために顏にあてた燒ごての疵が再發して顏から濃汁が出て臭きこと云ふべくもない。かてゝ加へて、その打擲された打疵が黑紫にはれ上り「さながらまだらの犬の如く生ながらにして畜生道、世間の人には忌嫌はれ、身を寄するに所なく、」乞食同樣になつて東京の母の許に歸り、病が重つて「犬の如くに狂ひ廻つて」死ぬ。

これが『鳥追お松海上新話』の梗概である。

さて、この作における作者の態度が、どうであつたかは、上の梗概からでも、又作者が、この作の終りでお松の狂ひ死にしたことを述べたあとで「積惡のその身にむくひ來て、かゝる終りを取りしなるべし。狐の人を誑かすや一朝一夕害猶淺し。美女の獸心傾國の害あゝ恐れても恐るべし」と云つてゐるによつても、讀者は容易に推測し得るであらうから、委しくは云はない。

この作の文章は、前にも云つたやうに他の二作よりは簡潔でよい。在來の草双紙又は讀本式に、七五調で、舊いながらに相當に讀むに足る個所が多い。

漁舟の火の影は夜の波を燒くと旅中の吟も初時雨、雲の行衛も白砂に、光る濱邊の波打際、右は峨々たる漸づくり、磯馴れの松のまばらに茂り、寄せてはかへす波の花、空も曇りて朧氣に、風さへ凪ぎて薄暗く、後ろに見ゆる富士が根も雪のつもりて白々と、黑繪に寫す夜の景……

と云つたやうな調子である。かういふ地の文と會話とを、草双紙式に綯ひ交へたものである。又、「時代」の變化などをも時々匂はせてゐる。たとへば、お松が、濱田正司の妾となつてゐるうちに、穢多非人も新平民と改稱されて、華士族と結婚をすることが出來るといふ時勢となつたので、妾では滿足が出來ないで本妻となる野心をおこすところを、次

のやうに書いてゐる。

　さてお松はいかなる御世に生れ合せ、果報は棚から落ちてくると下世話の譬へと同じことにて昔が今に穢多非人と蔑如せられし身分なりしが、此頃天下に布告せられて以後穢多の稱を廢されて新平民と稱せられ、華士族、平民と婚嫁するとも更におかまひなしとの御沙汰は、其身に取つては、いと有がたく僥倖とぞ思はれたり。云々

　無論、私は、水平運動の喧しい今日からこれをとやかく云はふとするのでない。たゞその頃の時代の變化をところ〴〵に匂はせたのが面白いのである。

　とにかく『鳥追阿松』は、前にも云つたやうに比較的すぐれてゐる。しかし阿松は、右の梗概からでも推測し得るやうに別に毒婦といふべき女ではない。たゞ、穢多といふ階級に生れたゝめに、他階級からは差別的に取扱はれ、從つて彼女のすることなすことが、それほどでもないのに、毒婦扱ひにされてゐる氣の毒な女である。今日の新しい立場に立つ文學者の筆にかゝつたなら、この阿松などは、もつと階級意識の強い、新代の女として、人間らしく取扱はれたでもあらう。しかし明治十年前後の混沌期の作者に、そんなことを要求するのは、要求する方が無理であることはいふまでもない。

　毒婦といふ立場から云ふと、お絹やお傳の方がずつと深刻であるが、餘りに筋がこみ入つてゐるため、こゝに管々しく梗概を書く暇もなく、又その興味もない。この二人は二度も殺人をしてゐる。お絹は、もとある大名の妾だつたが、その大名が死んでから、ある商人に戀し、その妻君を人をして殺させ（尤もこの妻君は危いと云ふところを助けられたが）て、つひにその商人の妻君となりすましてゐるうち、そこに出入りをするある御家人と關係をして、計略を用ゐて大まいの手切金と併せて離婚をとり、その御家人と同居してゐるうちに、維新の戰爭が始り、その御家人は彰義隊に加

つて戰死し、彼女の家財は兵火のために悉く失はれる。彼女は止むを得ず藝者になつてゐるうち、曾つて大名の妾時代に、家來同樣に出入りをしてゐたある藪醫で、維新の變革と共に、財産を造り、今は金貸をしてゐる男と偶然、邂逅して、その男の妾になる。そのうち、時の賣出しの役者嵐璃寛（後の河原崎權十郎）と關係し、思ふまゝにあひゞきの出來ないところから、旦那（金貸の男）を毒殺し、露見して斬罪に處せられるのだが、毒殺使嗾の嫌疑をうけて璃寛も舞臺から拘引され、嫌疑ははれたが、毒殺を知つて隱匿した罪で彼れも亦二年間禁固を受けた。相手が人氣役者であつただけ、この事件は當時はひろく喧傳されてあつたらしい。

お松に比べて、お絹の方は、遙かに積極的であるが、お絹に比べてお傳は更に一層積極的にその毒婦型を發揮してゐる。魯文の『夜刄譚』と岡本勘造の『東京奇聞』とでは筋は大ぶ異つてゐるが、多淫で、多情で、殘忍で、剛慾で、非道な點は同じである。始めは夫の浪之介を彼れが癩病になつたのでいやになつて絞殺し、後には後藤吉藏といふ商人を金を取るために欺いてある旅宿に連れ込み、短刀を以て彼れの寢首を掻くといふ二度も殺人罪を犯してゐる。彼女の關係した男は無數であり、而も同時に數人と關係してゐる。彼女の愈々召捕れたのは吉藏殺しからであるが、彼女はそれを實際にありもしない姉の復讐のためなど云つて、種々の狂言を虛構して裁判官を手古摺らせ、三年の餘も檻倉にあつて容易に實をはかない。とにかく彼女が、わが國近代の注目すべき毒婦の第一であることを疑ふ餘地がない。

この毒婦を或ひは精神分析學的立場から、或ひは病理學的立場から、或ひは遺傳論的立場から――當時の作者にそんなことを求めるのは無論無理ではあるが――觀察したならば隨分面白い筈であるが、當時の作者らは前にも云つたやうに、單に皮相的に勸懲の具としてのみ、この女性を取扱つてゐた。

默阿彌の如きも、その『綴合於傳假名書』の中で、このお傳が愈々處刑されるときに、たづねて行つた養ひ親に向つて次のやうな悔悟の白を云はせてゐる。

「今更返らぬ事ながら、惡いことは出來ませぬもの、金がほしさに科もない七藏殿を殺したも、露見をすれば斬罪との御所刑受けねばならぬゆゑ、姉の敵と僞つて助かる心で居りましたも、おひ〳〵お上へ證據が上り、我が惡計と御見留つき、今日證據裁判で斬罪の刑受けたるは、是迄、なが〳〵お上を僞り、御苦勞掛けしと、二つには、三年此方多くの人に難義をかけしその報ひで、天の罪を蒙るお傳。こりやかうなくては成りませぬ。思へば人の邪正を糺すお上を欺き逃れようと思ひましたは、女の淺墓。すまぬことをいたしました。そればかりかは大恩ある親が世間へ顏向けの成らぬやうに致せし不孝、さぞや憎う御座いませうがこれも前世の因緣とどうぞ赦して下さりませ。

默阿彌は又、裁判官をして、悔悟したお傳に向つて「いかなる惡逆無道の者も性は必ず善にして、今日死刑の時に至り、その本善に立ちかへりしは惡逆中の譽れなるぞ」と云はせてゐる。これによつても作者がいかなる態度で、お傳を取扱つたかゞわかる。

翻つて思ふに、明治初年は、開明の時代ではあつたが、同時に血なまぐさい時代であつた。お傳やお絹のやうな毒婦は、或ひはこの血なまぐさい時代の特産物であつたかも知れない。もし大南北のやうに、人間の惡逆無道な相に興味を持つて、冷靜に人間の殘酷性そのものを抉り出すことを好む惡魔主義的作家が、この時代に一人でも居つたならば、恐らく、これらの毒婦を題材として、全人類に新しい一個の戰慄を創造するほどの徹底した惡魔主義の作品を創造したかも知れない。云ふまでもなく、大南北には、善人が何時も惡人に苦しめられる世界が描かれてゐる。惡人がつひに悔悟することなく、その惡に徹底して、惡の勝利に快哉を叫ぶ世界が描かれてゐる。例の『四谷怪談』で惡漢直助が、同じ惡漢の伊右衛門に向つて「働きかけた鰻かき、どうで仕舞は身を裂かれ」といふと伊右衛門が「首が飛んでも動いて見せるは」といふあの有名な白に具現された徹底惡の境地が大南北の至極境である。明治初年の毒婦物なども見様によつては新しい南北的人物に創造され得た筈であるが、たゞ題材の上の毒婦に止り、却つて作者によつて「性は善なり」の

生きた證明として勸懲の具に供されたことは、喜ぶべきことであつたか、悲しむべきことであつたかを私は知らない。しかし、とにもかくにも、大南北の作品を惡魔主義と云ふなら、明治初年のこれらの毒婦物はたゞ題材だけの、形たちの似而非(シユード・)惡魔主義(ダイアボリズム)の作品だといひ得るであらう。

さて、これらの毒婦物が、當時一般に愛讀されたとすると、その原因はどこにあるのか。何故にこれらの作品は一般に受



阿傳夜叉譚の挿畫

けたか。

私の見るところでは、それは、作そのものよりも寧ろ挿畫である。至るところにある挿話の血みどろなブラッデー・シーンや春畫式のエロチック・シーンが、作そのもの以上に、作の内容を説明して、讀者の腦裏に毒婦的觀念を印象させ惡魔主義的色彩を印銘させたのではなかつたらうか。

實際これらの毒婦物の挿畫の血みどろで慘忍なことは、今日の新時代の人の想像も及ばぬものがある。普通の殺人の場面などはざらにあつて改めて云ふまでも

ないが、そこには磔刑もある。梟首もある。人體解剖もある。こゝに挿入した挿畫は、小兒慘殺の圖であるが、以て一般を推すことが出來るであらう。性的場面の挿畫も、こゝに復寫することを憚るほどのオブシーン・ピクチユーア式なものがざらにある。

蓋しこれら殘酷であり卑猥である挿畫が一般に受けたのは、一つは明かにその時代そのものの影響である。たとひ維新になつたとは云へ、臺灣の役やら西南の役やら引つゞいて起る戰亂のために、まだ一般に世間が血なまぐさく、亂雜で、從つて風紀の取締りなども行き屆かなかつたので、性的方面でも、可なり猥褻に流れることが自然でもあつた。同時に、人間の本能欲からその虚が乘じて、今日の吾々が想像する以上の猥雜が行はれてゐたといふその時代そのもの〻影響である。更に言葉を換へていふと、以上の殘酷な挿畫や卑猥な挿畫やは、この血なまぐさく亂雜な時代そのものを代辨したものであるとも云へるのである。

この頃の人が殘忍卑猥を愛好した更に今一つの理由としては、幕末以來のわが國民一般の感情上の習慣性を擧げなければならない。云ふまでもなく、幕末の化政度から嘉永前後安政慶應に至るに從つて、小說に於ても芝居においてもこの殘酷と猥褻の描寫や舞臺面が旺んに人々の喝釆を博し、それが時代の不安動搖と相待つて一代の風を爲した。このことについては、嘗つて坪內逍遙博士が本誌に連載された『五十年前に觀た歌舞伎の追憶』の中で、さまぐ\な方面から委曲を盡して論ぜられたことは讀者諸氏の夙に知られるところであらう。惟ふに、明治十年前後は、この感情上の習慣性において、一般民衆が、まだ幾何も安政慶應を離れてはゐなかつたであらう。維新によつて、封建制度が滅び、歐化主義の新しい社會制度が建設され、世は「開明」になつたことは云つても、それはたゞ皮相だけのことで、一般民衆の感情の底の底を流れてゐるものはまだ〳〵幕末的のそれであつたことは想像するに難くはない。言葉を換へて云へば、一般民衆の思想感情は、まだ幕末の引つゞきであつたであらう。だからこそ、この封建期のなごりと、極端に新しい歐

化主義とが相剋してそこに、内田魯庵氏の所謂猿芝居時代が現出されたのである。しかし、心ではとにかく流石に頭では「開化」を讃美せざるを得ない時代であつたから、これらの毒婦物を取扱ふ上にも、それを毒婦そのものとして惡魔主義的に徹底することは、作者にも無論出來ず、讀者も亦それを喜ばなかつたにちがひない。言葉を換へて云ふと、其頃の讀者は頭の滿足をこれらの毒婦物の勸懲主義に求め、心の滿足をその中の挿畫の血みどろな、且つ性欲的な頽唐的場面に求めてゐたのではなかつたらうか。

それはとにかく、これらの毒婦物は、藝術として何等の風格をも持たない。所詮は猿芝居的過渡時代の特産物に過ぎない。

東儀鐵笛氏を悼む

新興劇壇の先覺東儀鐵笛氏は二月四日、腦溢血のために東京府下戸塚諏訪町の自邸で逝いた。享年五十六。

氏は宮内省樂人の家に生れ、早稻田大學文科を中途退學、宮内省に入つて樂人を勤め、その後獨逸協會學校幹事となり、明治卅九年轉じて早稻田大學幹事となり、同年、坪内逍遙博士を盟主とした文藝協會起るに及び、入りて幹部となり、その帷幕に參すの外自ら舞臺に立つてその獨特の妙技を發揮したが、大正二年文藝協會解散後は故土肥春曙氏と共に無名會を起し、その後松竹合名社に入り、後、新文藝協會をおこし、終始一貫新劇のために盡すところがあつた。病を得たのは一昨十二年十二月、若月紫蘭氏の新劇研究所における試演舞臺監督中、腦溢血にて卒倒したのに始り、昨一年は自邸にあつて靜養、病も大ぶ快方に向ひ、去る四日、夫人に扶けられて家庭内を散歩してゐる時突然病あらたまり、四日午後三時つひに逝去した。

氏の當り藝としては『ハムレツト』の墓掘り、坪内博士作『靈驗』の乞食、松居松葉氏作『太閤と淀君』の太閤秀吉等で、その枯淡なユーモラスな役柄が、全く他の追隨を許さぬものがあつた。この他にもシャイロツクの深刻な味ひやイブセンの『幽靈』の牧師その他の近代劇にも成功した役が隨分あつた。尙氏は、二十年來その蘊蓄を傾けて『日本音樂史』を執筆中であつたさうだが、これは病ひのために完結を見るに至らなかつたのは惜しいことであつた。

こゝに謹んで哀悼の意を表す。

時事消息

●詩人詩聯盟の創立　秋田雨雀、生田長江、高群逸枝、中山晋平、賀川豐彥外十六氏發起となり、東京市外杉並町高圓寺九〇三にその本部を置き、全國の詩人に寄せて、協力和合し有力なる發表機關を作らんことを計畫し、その公開狀を二月八日の讀賣紙上に發表した。なほ加盟希望者には規則書を送ると。

●佛展裸體畫の禁止問題　二月十五日より上野公園に開いたフランス現代美術展出品の裸體畫のうち、ドンゲン、サルボニイ、ゴエルム諸氏の作品七點は警視廳保安課より公開を禁止された。

●本年度のゴンクウル賞　本年度のゴンクウル賞はテイリイ・サンドル（Thierry Sandre）氏の小說「すいかつら」(La Eeeurefeuille)の得るところとなつた。

●小說家協會總會の規則改正　二月十一日の總會には會員廿八名出席、左記の會規の改正をした。新幹事六名、(芥川龍之介、菊池寛、佐々木茂索、加能作次郎、金子洋文、小川未明)を改選し、外、種々會規の改正を行つた。

●木下利玄氏逝く　歌人木下利玄氏は二月十五日鎌倉の自邸で逝去した。

●日本農民美術研究所出版部の創立　その事務所を麹町區山下町一ノ一華族會館隣に置き、「實用手工藝講座」を刊行する。

●光風會第十二回展　二月一日より上野竹の臺に開き、特別出品として黑木伯家所藏歐洲近代畫及び彫刻數十點を陳列した。

●婦人經濟聯盟　長谷川胤子、衆樹安子氏等により本鄉根津西須賀町十八に創設された。婦人問題に關する講演會、研究講座、及び機關雜誌「婦人春秋」の刊行等をその事業とする。

●斯波印度支那古美術展覽會　一月五日より同月十九日まで上野日本美術院會列品館に開催した。

●日佛藝術社　二月七日第一回展を三共ビルに開き、新着のフランス繪畫を展覽に供した。

●右田年英氏逝く　芳年の流を汲むで永く插畫界に活動した右田豐彥氏は、二月四日雜司ヶ谷の自邸で逝去した。享年六十二

●市場美術社成る　岡本一平、中川紀元の兩氏後援となり、峰岸義一氏が九段ビルに如上の新事業を開始し、裝飾美術の一切・純正美術から建築意匠まで取扱ふことゝなつた。

●雜誌界消息

●新舊時代　昨冬設立された明治文化研究會の機關雜誌として上記の月刊雜誌二月より創刊さる。

●稻人　早稻田高等學院學生の有志によつて上記の文藝雜誌二月より創刊さる。

＊　＊　＊　＊

新刊書一覽

●純正社會學(上卷)　石川功譯十二月新潮社四六版六八〇頁定價三圓五十錢、米國の社會學の泰斗、レスタア・ウォード博士のを譯出したもの「社會の發生及自發的發達史」と小見出しがついてゐる。全體が二篇に分れ、第一篇排列論（純正社會學の一般的特色その他數章を含む）第二篇發生論（血統關係、動的作因、生理學的起源其他社會動學、社會靜學その他を含む）に分れてゐる。譯筆嚴生、近代社會學の名著がかく立派な譯になつて出たことを喜ばずには居られない。

●權力への意志(上卷)　生田長江譯、十二月新潮社發行菊判四五二頁定價二圓五十錢、第一書歐洲虛無主義、第二書從來の最高價値に對する批評、第三書新しき評價の原理の三書を含む。ニイチエの中でも取り分け興味のある思想である。譯筆例によつて明快、このニイチエ全集は譯者に取つても、出版書肆に取つても、その功績が賞揚さるべき最も大きい事業である。

●歌集南京新唱　秋草道人著春陽堂十二月發行三六版一六〇頁定價一圓四十錢、作者は奈良美術に造詣深き人、この書は奈良の古美術風光書を詠ぜるもの得ることを收む。坪內逍遙博士は本書に叙して「溫其如玉」の言葉でこの歌集を總評されたが、以て全般を窺ふべき歌壇近頃の收穫である。來月の本誌で細評をする筈である。

●詩作の傍より　西條八十著新潮社一月發行新四六判三二四頁定價壹圓五拾錢西條氏が詩作の傍より得たる感想小品すべて十五篇、これに添ふるに、四篇よりなる童謠論集、及び十二篇よりなる詩に關する論集をおさめたもので、詩人西條氏を最も端的に語るものであり、散文集ではありながら、氏の詩とともに、愛誦するに價する感想小品の寶玉集である。

●木に凭りて　吉田絃二郎著新潮社二月發行新四六判二七九頁定價壹圓貳拾錢「小鳥の來る日」「草光る」の以後に書かれた氏の感想小品のすべてはここに集められてゐる。かつて本誌に寄せられた「芭蕉の墓に詣づる記」「伊賀の旅」以下すべて廿篇をおさめてゐる。例によつて、全篇悉く香高き無韻の詩であること言ふまでもない。

●明治大正詩選　詩話會編新潮社二月發行菊判四一〇頁定價貳圓八拾錢 新體詩なるものがはじめて產まれた明治の中葉より大正の現代に到るまでの詩の一大代表的選集である。選出した詩人實に八十四人、採錄の詩二百七十餘。「明治篇」に於ては湯淺半月より相馬御風に及び、三十四家「大正篇」に於ては北原白秋より金子光晴に及んで五十家。今日までに現はれた最も代表的な近代日本詩集と言ふべきである。附錄として明治大正詩壇年表、同詩書一覽を添へてゐるのは周到である。

●詭辯勘辯　正木不如丘著春陽堂一月發行四六判三九五頁定價貳圓 著者が雜誌「脈」に發表し來つたその警拔奇拔なる文章の全部をおさめてゐる。「詭辯勘辯」篇には「筆頭を掲げて狗肉を賣らん哉」以下四十篇を集め、「裸」篇には「足」以下七篇を集めてゐる。

●我が赤裸々記　野依秀一著秀文閣一月發行四六判定價壹圓九拾錢 現代の戰鬪的快人物としての野依秀一氏はあまねく人の知るところであるが、本書はその赤裸々なる自叙傳であつて、筆を幼年時代より起し、實業の世界時代の戰鬪的境涯を經て第二回入獄及び出獄後の眞宗宣傳の現在に到るまで、その波瀾極まりなき一生を、雄渾の筆をもつて叙してゐる。本書は實にこの快人物の全身像と言ふべきである。

●小說研究十六講　木村毅著新潮社一月發行四六判五〇二頁定價貳圓五拾錢 小說については未だ入門式の作法書以下にはその組織だつた研究書はこれまで殆んど現はれてゐないが、本書はこの不備を補ふて遺憾がない、本書は學としての小說の科學的研究であつて、實に坪内博士の「小說神髓」以後はじめての組織的小說研究書である。「小說と現代生活」「西洋小說發達史」「東洋小說發達史」「小說の目的」「リアリズムとロマンチシズム」「小說の基礎」「プロットの研究」「人物・性格・心理」「背景の進化とその哲學的意義」「視點及び基調の解剖」「力點の藝術的職能」 敍事詩・戲曲・小說」「長篇・中篇・短篇」「短篇小說の構成」「文體・內容と形式」「作家を中心としての小說の考察」の十六講にわかつてゐる。

●人生の幸福　正宗白鳥著新潮社一月發行新四六判二三四頁定價壹圓貳拾錢かつて中央公論に發表されて好評を涌かした「人生の幸福」一篇は、劇作家としての白鳥氏第一の傑作であるが、本書はこれに添ふるに、「農村二日の出來事」「梅雨の頃」以下二篇をおさめてゐる。戲曲家としての著者の評價はこの一卷に求むべきである。

●土の藝術を語る　白鳥省吾著聚英閣二月發行四六判二九〇頁定價壹圓六拾錢民衆詩人としての著者については、こゝに言ふまでもないが、本書は著者が現代の農村生活、その藝術に對する見聞、批評、感想の一切を集めたものであつて、ひろく現代の民衆に呼びかける新時代の文字である。「農村見聞錄」八篇、「森村に想ひ都市を頌ふ」六篇、以下十八篇をおさめてゐる。ことに「詩の王國にて」「都會文藝の崩壞」を論じ、「郷土の詩・民族の詩」「農民の生活と文學」を高調するに、著者は異情なる情熱をもつてしてゐる。

●吾等如何に生くべきか　本間久雄譯東京堂一月發行四六判二三二頁定價壹圓八拾錢近代英國の生んだ偉大なる思想家ウイリアム・モリスが晩年の名著にして、その全著作のうちでも最も代表的な論集「變化の兆」の中より、「有用の仕事と無用の勞苦」「藝術の目的」「新時代の曙」「吾等如何に生くべきか」の四長篇を選んで成つてゐる。審美的社會改革家としてのモリスは、多年モリスの研究に傾倒してゐる譯者によつて選ばれたこれらの四篇について、遺憾なく知ることが出來る。言ふまでもなく譯文は、極めて流暢明快、飜譯書といふ氣を起させない。

●蝕まれたる魂　倉田潮著一人社一月發行四六判二三九頁定價貳圓新作長篇で、著者は序して「新しき時代は來らんとしつゝある。人は誰も皆舊衣を脱ぎ新しき精神に生きやうとしてゐる。しかし誰一人として眞に舊套を新衣に更へ、古きを捨てゝ新しき魂を取る事は出來ない。人の魂は一として蝕まれてゐない物はないからである。」と言つてゐる。

●嗜欲の一皿　大月隆伏著一人社一月發行四六判定價貳圓參拾錢新進大月氏の第一創作集で、「嗜欲の一皿」「江の島」「スケート」「菊二題」等すべて九篇の短篇をおさめてゐる。新人の注目すべき收獲と言ふべきである。

●海の愛　松原至大著紅玉堂一月發行新四六判一七〇頁定價八拾五錢著者の最近三年間の收獲よりなる新詩集である。おさむるところ「朝顔」「山のある日」以下三十篇、悉く著者の眞摯なる歩みを跡づけてゐるのは喜ばしい。

●日本民謡の研究　高野辰之著春秋社十二月發行四六判一三四頁定價壹圓童謡に關する群書のうち一頭角をあらはしてゐるもので、民族に基く民謡の歴史的研究である。民族性の發露といふ視點から筆を起し、萬葉より起し現代に及んでゐる。「童謡記載の乏少」「童謡と國民性の發露」「童謡と世相」「結論」に章を分つた長篇研究である。

●現代高等國文　友枝照雄編修文館二月發行四六判二一四頁定價壹圓八拾錢高等程度の現代國文敎科書として編せられたもので、また現代の代表的名文選集である。露伴、獨歩、逍遙等にはじまり、現代にいたるまでの名家の代表的作物、すべて四十七篇を採録してゐる。

●夜行列車　澁谷榮一著草原社一月發行四六判六一頁七拾錢新進詩人澁谷氏の處女詩集である。「夜の八角金盤」「散策」「横濱震災記」「散文詩」よりなり、すべて八篇の詩をおさめてゐる。悉く一粒選りの作品ばかりで、屑がないのは喜ばしい。

●世界の民衆に　正富汪洋著新潮社一月發行菊半裁判一五八頁定價六拾錢同社の現代詩人叢書第十六編である。「私は世界の民衆に訴へて、世界の一新を計りたい思想を抱持してゐる。これはその序曲とも言ふべきものである。」と著者は序して言つてゐる。民衆詩の一異彩である。

●漢詩和譯鶯の卵　土岐善麿著アルス一月發行菊半截版一〇〇頁定價壹圓貳拾錢名漢詩約五十篇を選び、これの現代語的和譯をロォマ字につゞつたものである。漢詩のこの現代語譯は他に比が求められない程にうまいものである。

●白い家と罪　宇野千代著新潮社一月發行菊半截一五六頁定價五拾錢同社の新進作家叢書第四十二編で、かつて世評を高めた「白い家と罪」以下「或女の生活」「旅愁」等、すべて五篇をおさめてゐる。

●從妹ベット　布施延雄譯新潮社一月發行四六判七三六頁定價參圓同社の世界文藝全集の第卅一編である。本書はバルザックの「人間喜劇」のうち、「巴里生活の場景」のなかの一篇で、全作中最も傑出せるものゝ一で、十九世紀初頭の巴里生活を縱横に描きつくした恐るべき小説である。譯文も充分信頼していい。

●オブローモフ　相馬泰三譯述春陽堂一月發行四六判三三一頁定價壹圓六拾錢新たに企てられた同社の譯述叢書の一編で、生硬な、肩の凝る從來の逐字譯を避けて、流暢な大意譯の形をとり、量も適宜に按配したものである。しかも傑作の醍醐味を傳へることには異常の苦心を經て成つたもので、時代に適應した試みといふべきである。原作はゴンチャロフの傑作で、十九世紀のロシアにあらはれた驚異すべき一性格オブローモフは、苟も現代文學を語るものは一讀しなければならないものとされてゐる。

●サフオ　齋藤龍太郎譯述春陽堂一月發行四六判二八六頁定價同前同叢書の一編で、ドオデエのサフオについては今更こゝで言ふまでもない。分量も原作にくらべて大して減つてはならない。

●マイレディニコチイーン　石川欣一譯春陽堂一月發行四六判二六八頁定價貳圓十九世紀のスコットランドの諷刺家劇作家ヂエームス・バリイの有名な隨筆集である。嚴密に言ふと隨筆と小説との中間にあるといつたやうなもので、煙草を中心に、若い五人の男のさま〴〵な生活を一流の輕妙な筆で描き出してゐる。人間の喜怒哀樂が、こと〴〵く煙草の煙に包まれて輕やかに感じられて來る、さういつた愉快に輕く讀める愛すべき書である。

四月號豫告

本號の混沌期研究號に引つゞいて、胎生期研究號を編纂する管で着々計畫をすゝめてゐます。右は坪内逍遙氏が『小說眞髓』の一篇を以て、明治文壇に一新紀元を劃されて以來、幸田露伴、尾崎紅葉、二葉亭四迷、森鷗外、山田美妙諸氏相次いで出で、以て明治文壇の基礎の築かれるに至る明治二十三四年頃迄の明治文學史上最も興味ある時期の研究で、本誌五月號の論說欄全部をこれに充てることに致します。

來四月號には左の諸篇を收めます。

英國頽廢派のダンディズム(長篇論文)……………本間久雄

春(小說)……………小川未明

人間の約束(小說)……………細田源吉

黃(長篇小說)……………和田傳

■早稻田文學(每月一回一日發行)

特別號は年四回、一月、四月、七月、十月に發行し、其他は普通號とす

定價表

	定價	郵
普通號	六十五錢	一錢五厘
特別號	一圓廿錢	三
半年分(特別號とも)	五圓	郵稅共
一年分(特別號とも)	拾圓	郵稅共

〔但外國は普通號八錢郵稅・特別號十六錢〕

口外國行(半年分郵稅共 五圓四錢 / 一年分郵稅共 拾圓八錢)

▲本誌の御註文はすべて東京堂社(振替東京二七〇番へ御申込の事

▼御註文の際は必ず(早稻田文學何月號より)と御明記の事

▼郵券代用の御送金は一割増の事

▼轉居の際は誌名と新舊兩住所御通知の事

大正十四年二月廿八日印刷納本

大正十四年三月一日發行

No. 229

〔禁轉載〕

編輯兼發行者 本間久雄

印刷者 關根慶寬

印刷所 早稻田印刷株式會社

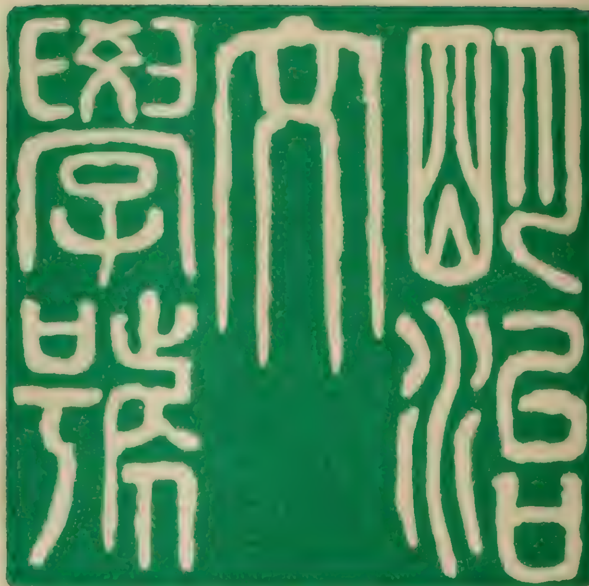
編輯所 東京市小石川區雜司ケ谷町一四四 早稻田文學社 電話牛込一九〇八

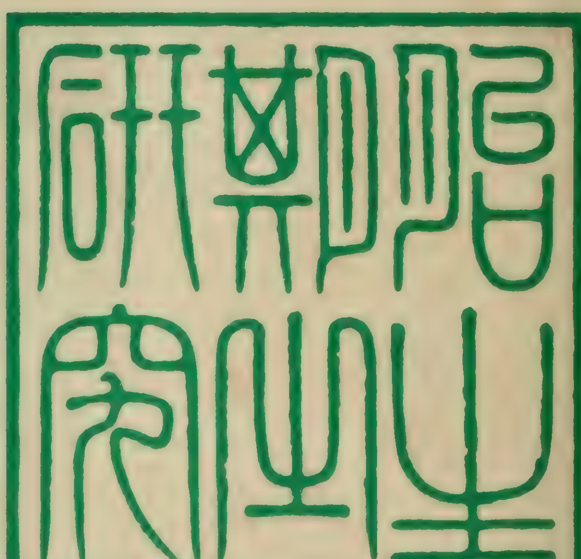
發行所 東京市神田區表神保町三番地 株式會社 東京堂 電話牛込六一〇七 振替東京二七〇番

早稻田文學

六月號

大正十四年





早稲田文學第二百三十二號目次

明治文學號

胎生期の研究



早稻田文學

六月號

第二百三十二號

明治二十年前後の二文星

露伴學人

明治二十年前後の文學界の回顧をして談話をせよと需められても、其實當時自分はまだほんの學生同樣のものであつて、特に同十九年や二十年は東京に居てのみ生活をしたのでも無いので、特に十九年あたりは其前年からして孤影孑然朋友も無く交際もせまく日を送つて居たのだから談話を交換し智識や感情をやりとりする者も無く暮したから甚だ貧弱な記憶が朦朧と遺つて居るばかりである。しかも自分は當時に於て所謂社界の實際に於て云爲されてゐるところの新聞や雜誌や、それら現世的のものを頭腦に取入れたり眼にうつしたりするよりももつと根本的なものに接觸することの方を遙に大切な事と考へて居て、走馬燈的の影像に心を取られることは好ましからぬことに思つて居たので、今回顧すると實に當時の文界事情はぼんやりとしか何事も頭腦に殘つて居ない。坪内氏が小説神髓を著はして、それまでは近松や馬琴の勸めた懲惡主義、俚俗敎育の功用を以て文學の第一條件とする信仰が鐵の如き嚴固さを以て世に臨んでゐたのに對して、新しい西洋的文學論美學論に立脚したところの、勸懲主義のみが文學を掩ふべきものでは無いといふ意見を提供されたのは、たしか二十年前數年であつたが、當時の其の反響は決して小さいものでは無かつた。其頃はまだ今のやうに文學好きといふ言葉も無ければ、まして文學を以て身を立てようの、詩を以て一生の仕事としようのといふ者も無く、文學は云はゞ餘興的餘技的のものゝやうに一切の人々から思はれてゐたので、從つて社會の論議の對象となつて居

さほどの位置は有して居らなかつた。勸懲主義や通俗教育が是認されてゐたと云つても、それは近松や馬琴が、戯曲や小說が社外の不必要物、贅物、ひよつとすると人の心術を敗り、靑年男女の爲に宣淫導慾の惡作用をするものになりはしまいかと云ふ老實者流の意見や批評に對して寧ろ自己辯護的に發したところの言說と云つてもよく、そして其の言ひまへが道理であると世間からも首肯されてゐたに過ぎぬのであると、云つても宜しい事なのであつた位である。然樣いふ狀態だつたので、坪內氏の著書が出ても、若い者達の中の誰でもが爭つて讀んだといふのでも無く、政治とか法律とか理化學や醫學とか軍人とかでで身を立てようなどゝ思つてゐる多くの靑年にはまるで無關係に看過されて、たゞ幾干か云はゞ風流氣のある、詩や文章や戯曲小說などの好きな、所謂餘裕ある連中に何樣なものかと云ふ位の事で讀まれたので、そして其を讀んだものとて別に此に對して反對意見を立てやうでも無く、熱心な贊成意見を立てやうでも無く、又社會の相當の地位に立つてゐる人が此に就て考慮を拂はうでも無く、新聞紙上に筆を執る人々の間でも兎角の論議を加へやうでも無かつたので、大抵の新聞紙などはたゞ新著の紹介位に止まつたもので、別に論議の的としたものゝあつたことを聞かず、漫然と、新らしい意見として面白い著述だ、直接利得を主とせぬ感心な書だ位の評判をした位であつたと覺える。最も好意を有したものでも、西洋に於ける文學といふものゝ社會的位置が決して低いもので無くて隨分尊崇されてゐるものだといふことから、我邦に於ても追々に文學が社會に重視されねばならないものであるといふ點から、氏の此著の如きは我邦文學を向上させる好い刺激である指針であるといふやうな意を以て、氏が此の功利的ならざる新著を稱揚したのに止まる位であつた。當時は實に火の燃えるやうな勢で靑年も少年も中年者も如何にして我邦を歐米諸國と對等のやうな盛んな國に爲さうかといふ點で熱心に勉强してゐた、其の眞劍的な氣鋭の有樣は、とても今のやうな彷徨的徘徊的なものでは無くつて、物質文明を取入れるに血眼であり、又制度改革に血眼であり、多くの所謂有爲の少壯の談論思惟の標的は政治論や功利論のほかには無かつたと云つても宜い位であつた。それであるから文學の事も段々

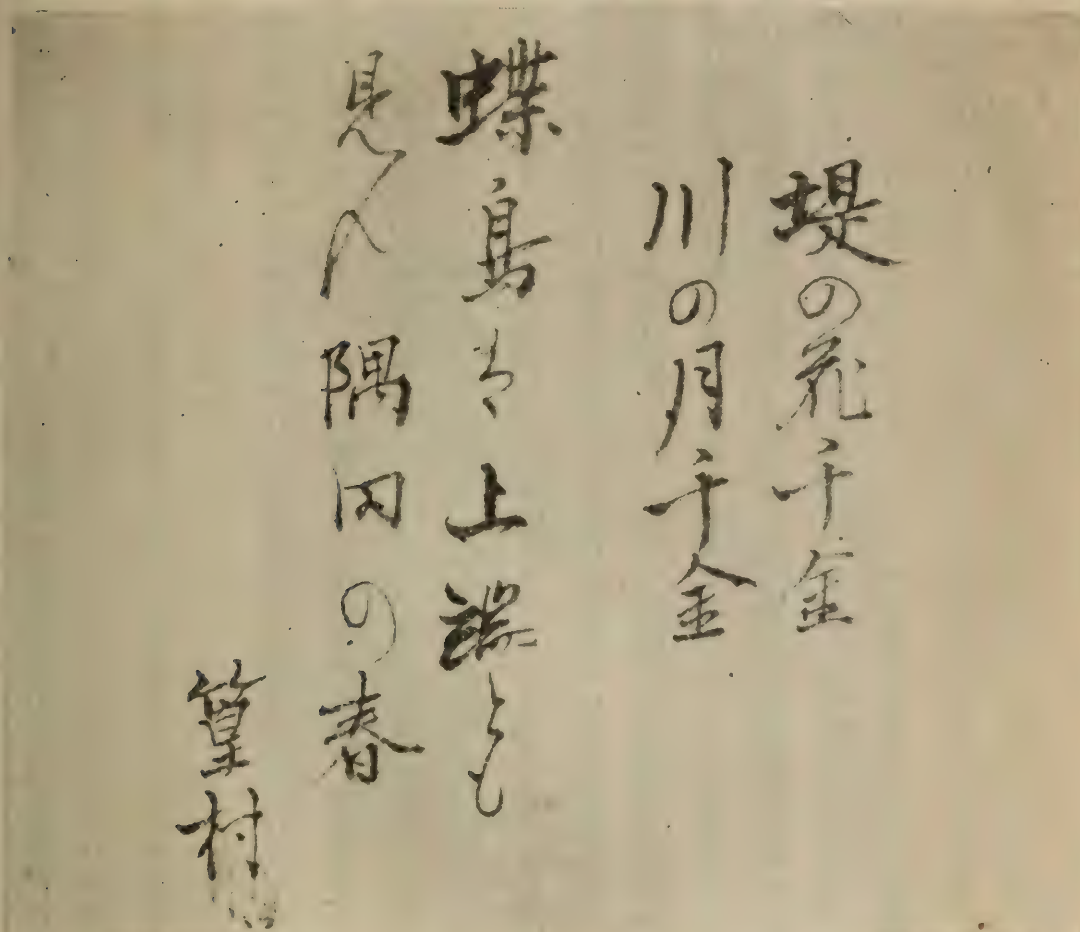
泰西の書を讀んだものゝ間で論議しはじめられたとは云へまだ〳〵耳にも心にも遠い事であつて、それは隱居的の事だ位に思はれてゐたものである。そこで新しい文學開發に熱心であつた坪内氏如きも、當時傳聞するところによれば、（非事實であるかも知れぬが）其の日夕に心を寄せるところの事が功利的で無い爲に隱居とか何とかいふ渾名を與へられたといふ噂であつた位だ。然し起るべきものは起らなくてはならぬ、神髓が出てから假令少數にせよ文學好きの人々の間には談論の材料となつたことは爭ひ難き事實で、そして其爲に刺激された文學好きを促がし出した事も爭へぬことであつた。著書以外折にふれて新聞紙上に氏の文學に關する議なども發表された。少しづゝ少しづゝ社會は文學といふものを意識し出した。此の文學を意識し出した時代が、二十年前の數年から二十何年かまでの間で、實に僅々の年數では有るが、甚だ興味の有る歳月だと思はれる。其間に於ては何と云つても坪内氏中心の觀が有る、全く氏の功績を其筆頭に置かねばならぬことは、苟も當時を朧氣にも知つてゐる者の異論の無いところで有らう。

書生氣質は氏の作物の方での烽火であつた。それが何樣いふものであつたかを論ずることは姑く擱いて、多くの人々に讀まれたことは爭へ無い。今を以て當時を論ずることは自然と酷議に陷り易い、所謂事後の論を爲せば史上の豪傑も村裡の學究の指彈に委ねらるゝものであるから、今若しこゝに人あつて書生氣質を讀んで、當時の新しい文學は此樣なもので有つたかなどゝ云ふならば、それは村裡の學究の高論といふものである。書生氣質は柳亭種彦脈に春水や金魚の情話風も交り、也有あたりの俳文氣もチョッピリ加味され、それに當代寫實のやゝ多量が地を爲して居て、そして西洋風の香料や鹽梅が施されたものであつた。そこで在來の日本的のいろ〳〵のものを知つて居たものは直ちに其の臺所を看破はしたが其の一面に於ては新らしい寫實や西洋風のゆき方に破顔するところが有つて、これは面白いと感心もし賞讃もした。また他の方には所謂餘暇を以て西洋文學を味はつた連中、これ等は大抵日本支那流の衝動的大事件描寫の興ふる快味に飽られるのを文學的興味といふやうに（無意識的にせよ）思つてゐるのが多かつた爲に、西洋風の小説でも

モット面白い立派なもの（多分スコットやリツトン、ユーゴ的を云ひしならん）がある、必らずしも書生氣質のやうなのが西洋的小說正系ぢやない、もつと立派な堂々たる西洋風のものを得たい、と云ふやうな注文が有つたやうに記憶してゐる。が、とにかくに在來文學の系統に連なつてゐた者の多數が大に氏を歡迎した事は事實であり、一般民衆が氏を悦んだ事も事實であつた。

其頃に於て、別に氏と相呼應するといふ譯でも無かつたに違ひ無いが、時代の蒸し出した新しい空氣に其の鮮やかな色彩と芳香とを具して人の注意するところとなつた二文星があつた。其一人は饗庭篁村先生で、他の一人は須藤南翠氏であつた。此の二君は其の創作の量に於ては坪内氏より多かつたし、筆は達者であり、錬熟しきつて居られたし、在來風の文學の造詣は氏にも勝るとも劣つては居なかつたらうし、又篁村先生は讀者心理を向ふに置いて物を書かれるやうな人では無くて寧ろ自ら語らんと欲するところを語り歌はんと欲するところをを歌ふ方の詩人氣質の豐かな方であつたが、南翠氏の方は新聞紙上の床几に腰掛けて年處を經た人だけに能く讀者心理を合點して、そしてそれに應じて物語の展開や結構を定めるだけの智を有してゐた人で有つたので、篁村先生は其の自然の流露に於ておのづから人を惹付ける力が有り、南翠氏は其智謀に於て社會の視聽を寄せさせ色々の人々をして其小說を耽讀せしむるだけの技倆を有して居られたので、二氏の當時に於ける勢力は實に大なるものであつた。篁村先生は讀賣新聞紙に據り、南翠氏は改進新聞に據り、其他諸先輩が有つたに關らず二氏が先づ當時の小說壇の二巨星として輝いてゐた其光に敵する星は先づ無かつたのである。篁村先生の著述は其晩年のを除いては「むら竹」二十册に收められてゐる。先生の文脈は其の當時の讀者の程度に順應して、先づは種彥風と三馬や何ぞの寫實筆致との加味を基調として、それに其よりも淵源的なる八文字屋風西鶴風等も附加されて居り、時に院本體讀ミ本體のところも出て來るといふのであつたが、たゞミ讀本體から來てゐる結構といふやうなゝのは甚だ少いで、むしろ短話的、諷刺的、諧謔的、自然的なものが多く、其の個性は隱約の間にでは

有るが、むしろ到る處に現はれてゐて、設爲裝飾の跡は少く、至つて素直に筆墨は運ばれてゐる。南翠氏のは之に反して讀ミ本的馬琴的の結構が有り段取りが有り、事件描寫に傾いて居て、篁村氏の風趣描寫に傾いて居るのと好反對を爲してゐた。其文致は餘り高いものゝ方では無いが、能く言はんとするところを言ひ、解せしめんとするところを解せしめ、人を描寫境界に誘ひ到らしめるだけの手



饗庭篁村の筆

腕は十分に有してゐられた。少々矜持の强いやうな人だつたので、文筆の人々の間には却つて不評判の氣味の人だつたが、篁村先生と天下の讀者を二分して有つてゐたといふ事實は認めぬ譯には行かぬ。日本文學の造詣はそれは到庭篁村先生の比では無かつたが、馬琴風に人を釣つて行く技倆は却つて無邪氣な篁村先生より巧で有つたことも否と云ふわけには行かぬ。南翠氏の作は甚だ多い。「ここは

れ松葉」以外單行の書も亦可なり多かつた。其の「緣簑譚」などゝいふものは當時大に行はれたもので、すべて「取りまはし」の上手な人であつたから、其頃在來の結婚法などが段々議論されて、西洋風に戀愛によつて結婚する所謂自由結婚論の芽を吹き出した時勢に乘じ、自由結婚論に左袒して一篇の談を仕組まれたのが緣簑譚であつた。今から見れば眞に隔世の感だが、當時はまだ戀愛から結婚に到達するなどゝいふことは一世から忌まれてゐたことであるが、一方段々と新らしかりが育つて來てムクムクして居たところへ、それを巧く取りまはして譚中へ織込んだや、西洋臭いもので有つたので、おまけに例の事件描寫風の行き方で興味をそゝつたゝめに、一般の讀者は大に喝采したのであつた。たゞ南翠氏は衒氣が强いとか、エラがるとかいふので人々に好かれず、追々と批評といふことが繁くなるにつけ、綠雨のやうなアラ搜しの名人に反意を持たれていろ〳〵と云はれたゝめ漸々に評判を惡くしたが、それでも日淸戰爭頃まではまだ折々小說をものして、同戰爭の頃、大阪兵の弱いといふ世評から、當時大阪朝日新聞に居た氏の作つた「優兵士」などいふ小說は柔弱の兵士も同じ日本人であるから一旦感憤するに當つては立派な精神や、行動を爲すといふ意味を以て書かれたもので、一讀して其或處には、なるほど叩きこんだ腕前であると感心した事がある。篁村先生は中年日本文學史の中德川文學史の編纂を思ひ立たれたが、これは先生に取つては有益な結果を將來せなかつた。先生は懶惰漢といふわけでは決して無い、却つて寧ろ勉强家といふべきで、其の盛んに筆を執られた頃は大抵朝早く起きて、訪客が門を敲く頃までには其日課を終られたほどであるが、人が好いと俗に云ふ質の人で、恐ろしい意志の强い人といふ質では無かつたのと、それにまた晉魏六朝の人のやうな酒を愛し趣を樂しむといふ人だつたので、餘り頑强な體質で無いのに酒を嗜まれたものだから、それにまた何樣しても詩人肌であつて、事務家肌、學究肌で無かつたので、德川文學史は出來ずに終つた、のみならず其爲に創作の方にタルミが來て、遂にそれなりになつたやうな譯であつた。篁村先生と南翠氏とのほかにも當時有名な方々があつたが、此二氏をもつて其頃の巨擘とするには誰も異論は有るまい。澁梯園塚原氏なども當時既に操觚界に在つた人だが、氏の英雄傳的小說の流行したのは遙に其後の事であつて、大分年頃の差が有るから今は省いて記しませぬ。

春廼屋主人の周圍

矢崎嵯峨の屋

日本の文學は、維新以後も馬琴種彦三馬春水流の傳統的のもの丶みで別に新機軸を出す者も無かつた。私共の樣な多少西洋の小説を原書で讀得た者は、其を常に飽足らず思つて居て、自分が文章を巧く書き得れば、必らず面白いものを書いて見せるなぞと考へて居た。斯いふ考を持て居た者は當時世の中に尠からず有た樣で有る。

其折で有る。明治十八年、春の屋の名を以て一讀三嘆當世書生氣質なる一書が、次々雜誌の樣體に出版せられた。其は西洋流の小説とも違ふ。されぱと言て馬琴種彦流のものでもない。又三馬一流の穿物とも違ふ。三馬一流の穿物を貫くに筋の通つた物語を以てしたので有る。然も其書振は全然新しい。今迄の陳腐のものとは大に違つて居る。殊に當時の讀書社會、書生の生活を種にして居るのだ。然も其生活は外より觀察したものでなく、充分其を體驗して、内より觀察して書いたもので有る。殊に其想像が非常に富膽で、三馬の樣な纖細のものでなく、縱橫無盡に書きなぐつたもので有る。其に筆端滑稽諧謔の才を賂んで、筆力も又雄健で、如何しても天才的の作で有つた。之を讀んで社會は「ワァ」と來た。「君書生氣質を讀んだか、春のや主人とは如何なる人だ」是は當時の人の邂逅第一の質問で有つた。間もなく其が誰で有るかも分つた。今でこそ大學も澤山有り、學士も非常に多いので、人も珍らしく感じないが、其當時は唯一の帝國大學、其卒業生の學士は非常に豪い者に感じられて居たのだ。其が餘り社會から重んじられても居ない軟文字の小説を書いたのだ。其一種毛色の變つて居る所、其にも社會は興味をそゝられたのでも有らう。春の屋主人の書生氣質は出版毎に益

益熱を加へて世に迎へられた。物に例へて見れば、主人の周圍には忽ち讀者の大渦が捲れた樣なものだ。斯して昨日迄學窓の瀟洒たる一靑年は、一朝にして日本中の人氣役者となつて仕つたのだ。

同窓の朋友には態々主人を訪ねて其成功を祝して舊情を溫めた者も有らう。未見の人の間には態々主人の門を叩いて其温容に接せんと努めた者も有らう。私なども窃に其風采を想像して之に接せんと思つて居た人の一人で有つた。私は幸ひ長谷川二葉亭に誘はれて主人に謁する事を得、間もなく又其門下に列して玄關の書生に住み込み、朝夕主人の敎を受る身となつたが、其當時主人の周圍には隨分樣々の人が集つて來た。足繁く來る客には、今の早稻田大學の前身早稻田專門學校の講師で川原榮氏、小川孝太郎氏、橘某氏。高田早苗氏も折々見えた。文學界の人では饗庭篁村氏、長谷川二葉亭、前田香雪氏なぞは度々來る客で、河竹默阿彌、幸堂得知、須藤南翠、齋藤綠雨、關根正直諸氏は稀に見えた人で有つた。其外學者、新聞記者、學生、書肆の主人、一々は覺えて居ない。井上圓了氏が木綿の衣服に木綿紋付の羽織で二三度訪れた姿をよく覺えて居る。其は他の學者と違つて何といふ質素の風俗の人で有らうと思つたからで、今の三上參次博士の大學生服時代の姿、其も私の記憶に殘つて居る。其は私の頭に何となく眞地目の學生らしく、如何にも普通の大學生とは違ふ樣に感じられたからだ。何しろ總てが四十年近くも前の事だから「うろ覺」で明瞭ではない。面白いお客では文學士の土子金四郎氏で、此人は洒落哲學といふ本を作つて居たが、よく私にさへ笑談を言ひかける人で有つた。

今でこそ日本文壇の重鎭、劇壇の開發者、學問の蘊蓄も深く、人格も出來上つて坪内逍遙博士で牛込余丁町に治まつて居るが、春の屋主人時代には、靑年の活氣胸に橫溢して、幼穉の日本文海を見ては、彼もしたい、之もしたい、と抱負が胸一杯で、樣々の世界の人と交際して居たから、從て春の屋主人の周圍には樣々の人が集まつて來る樣で有つた。其を私は覺えて居ない。唯玄關子としては馬鹿に忙しく立たせらるゝなと感じて居た。尤も主人は早稻田專門學校の講師をして居たので有るから、主人の不在時間には左樣訪ねて來る人の無いのは無論で有る。

長谷川二葉亭と私

長谷川二葉亭とは外國語學校の同窓で有る。語學では私の方が先輩で有つたが、寄宿舍を同ふして居た時代が有るから、遊は共にしたもので有る。私は明治十六年の夏語學校を出、其から其年の十月統計院で暫らく腰辨の身となつて居たが、十八年の暮統計院が廢止になつたので、其處に務めて居た者は一時皆休職となつて仕舞つた。其時の事で有る。長谷川がピヨツコリ私の家を訪ねて來た。之から何をする考だと聽くから、矢張何處かへ奉職する積だと答た。君は學校に居る時分小說家になると言つて居たが、彼方は如何した」「彼方は將來の問題さ、目下は胃の腑の問題だ、」と私は祖母や母や弟妹を養ふべき自分の義務を擧げ、家庭の事情を陳べて之に答へた。其頃長谷川は語學校を出て家に遊んで居た頃で有つた。「實は僕は此間春廼屋主人を訪ねて遇つて來た。君も今度一所に往つて見ないか、」左樣往つても宜が然し僕は無駄だ。何しろ家政に追はれて居るから。君は又何で訪ねたのだ、「實は僕は將來彼方面で働いて見る積だ」其處で互に志を語つた。私は自分の試作を出して見せたりした。長谷川は一二枚目を透して「之は月並の作で何等の特色が無いねへ、其に君はてにをはが手に入つて居ない」なぞと評して居た。「其樣な事を此間波多野も言つて居たよ、僕の小說は遠き將來の事だ、」と私は答へた。其で其日は長谷川も歸つて仕舞つた。私は小說の事は忘れて居た。

其頃私は尺振八先生に師事し、其門下の波多野傳三郎氏とも知合で有つた。波多野がまだ家を持たず、先生の離座敷に起臥して居た頃の事だ。先生は私の小說家になるのには不賛成で有つた。馬琴は彼でなか／＼の學者で、三馬の書いたものなぞを見ると一寸誰にでも出來さうだが、世の中を充分に知つて居なければ出來ない。眞さんなぞは學校を出た丈で如何して出來るものか」と私を戒めるので有つた。先生は、私が學校を卒業する迄、私の祖母を引取て養つて置てくれたのだ。其程私の家庭事情を知てる居るので、私の輕卒を戒めるのだ。私は近々に小說家にならうとは夢にも思つ

て居なかつたのだ。

然るに其年の秋長谷川が又私の家を訪ねて來て、僕は今日坪内へ往くが君も一所に往かないか。何も今が今小說家になれとは勸めないが、何時か一度小說家になるものなら、今遇て置ても宜ではないか」と勸めるのだ。其で私も往く氣になり、長谷川に伴られて坪内先生を訪ねた。遇て見ると實に話の面白い、陽氣な、明るみの有る人だ。春廼家とはよく名を附けたものだ。名は體を現はすとは此人の事だなぞと思つた。私が遠い將來には小說家になる考だと言た時、先生は其様な事言はないで、今直なつたら宜だらう。此樣事は若い時に限るなぞと勸めた。先生は私の淺學さの如何位かを知らない。私を謙遜からいふと考へて居るらしかつた。長谷川も傍から相槌を打つ。私の心は大分に搖ぎ出した。出來ない所は互に助け合ふさ、僕も助ける、文壇其人尠し、君方が躊躇して居ては困る。共に荊棘を刈つて進まうなぞと大分に油を懸られ、私もすつかり其氣になつて仕舞つた。老師が力を蓄へてからといふ戒の言葉は忘れられ、若い先輩が進まう進まうといふ聲のみが私を支配し始めた。其から間もなく私は坪内先生の玄關の書生となつたので有る。斯して長谷川は私を文學界に誘惑して仕舞つた。

其から後の私と二葉亭との交際は益々親しくなる斗で有た。能く世の中で同窓の親みなぞといふ事を言ふが、同窓と斗では親みは薄いもので有る。同室で起臥を共にし、生活を共にし、笑談を言合つたり、馬鹿、なぐるぞなぞを遠慮なく飛したりした仲でなくては親みは薄い。山田美妙齋も私には小學校時代の同窓だが、其爲に餘り親みを增なかつた。お互に甚だ外々しかつた。長谷川とは十七八の頃から起臥を共にして居たので親みは益々增す斗で有た。此親睦は明治十九年の秋から二十三年の春迄續いた、其間長谷川は非常に學問に親んで居た。孜々として英語を勉強して居たが、其は哲學をやる爲めだと言つて居た。始の一年位は常に文藝々々と言つて居たが、英書で哲學の本を讀出してから、社會とか、人生とか、自由とか、民權とか、言始めた。私は遇ふと其聽役だ。私には餘り興味がない、けれども其根氣と意

氣には敬服せざるを得ない。私は次第に長谷川を畏敬して、同量視する事は出來なくなつて來た。何だか仰ぎ視て容易に近附けない様な氣がして來た。私は一年間位坪内先生の處に居て自分の家に歸つて來たのだが、私の家と長谷川の家とは其距離二三丁に過ないのだから、一週間に一度位は訪ねて往たのだ、其が次第に遠ざかる様になつて來た。或時此様事が有つた。「君は何時も僕の話をウム〳〵と聽いて斗居るが、君は一體人生に對して如何様な考を持つて居るのだ。僕には如何してち分らない、分らないから苦しくつて仕様がない、よく君は平氣で平和の貌で居られるねへ、僕には其が輕薄の様にも見え、面が憎い様にも見えるよ」と斯だ。「人生なんて其様六ヶ敷い事が僕に分るものか、人生なんて心の建設に過ぎない。有と思へば有り、無と思へば無しさ、心外無別法、色卽是空、空卽是色、其様七面倒の事は僕は嫌だ」と私は答へた。長谷川は私の顔を凝と視て居たが、「ウム君は釋迦に私淑して居るのだね、其では實際問題に突當つたら如何するのだ」と問詰めて來るのだ。「實際問題に突當れば仁義五常で裁くよ、或は社會の習慣法だ」其では君は昔の人と少しも違はないねへ、新しい處は少しもないねへ、少し英書が讀めると宜のだがねへ、」と嘆息して居る。實際私の英語の力はリイダアの一が讀める位に過ぎなかつたのだ。「然し君の佛教觀は一寸面白いねへ、君は佛書を持つて居るのか、持つて居るなら僕に貸してくれたまへ、少し彼方面も研究して見やう。」

翌日私は碧巖、無盡燈論、心地觀經なぞを貸してやつた。處が驚いた事には其次長谷川を訪ねた處、彼は其佛書を大分に咀嚼して讀んで居る。私の佛書を讀だのは文章の興味から讀だのだが、長谷川のは其處から何物をか見出さうとして讀だのだから讀方が大變に違つて居る。何だか種々の點を擧けて種々の批評を降して居た。其が非常に私には興味深く感じられて、私は益々長谷を畏敬し始めた。

或時又長谷川は私を無遠慮に批評し始めた、「君は全く醜だ、豚は醜中に居て其醜を知らないが、君は其豚だ、豚の生活を續けて居るのだ」と斯だ。「君は釋迦とか孔子とか何か豪い奴に掴まつて居なければ居られないのだ、何故其を振り

棄てて鶯の如く天を翔り、眞理を捕へやうと猛進する事が出來ないのだ。成る程何物も無ければ苦しいのは苦しい、然し苦しくても其方が宜、僕は苦しいけれども自分で眞理を捕へやうと奮鬪して居る。君は平然として古人の糟を甞め、醉生夢死の生涯を送つて居る。心は別として實際生活にしても左樣だ。君は彼裏店社會、慶安婆や人力車夫を隣家に有し、魚と言へば干物や目刺、大根や豆腐斗食つて、能く彼で平然として居られるねへ、僕は違ふ、牛乳も呑む、牛肉も食ふ、鯛や比羅目も食はなくては居られない、君は全く豚の樣な人だ」と罵倒した。私は苦笑して長谷川の家を辭したが、其樣に自分は醜か知ら、自分では醜とも感じないが、全く醜かな、予は意氣知無だから」途中自問自答して見たが別に發明する處も無かつた。別に奮發心も起らなかつた。然し私の足は次第に長谷川の家へ遠のいて來た。

或時又私は久振り長谷川を訪ねた。其は慥か明治廿二年の十一月頃で有る。何かの話の端緒で長谷川は頻りにスペンサアの社會平權論を擔ぎ出して宣傳し始めた。其を私が非難した、何時も私は長谷川の宣傳を謹聽して斗居るのに、今日は其を反撃したのだから長谷川は厄詰となつて論じて來た。何でも午後の一時頃から夜の十二時頃迄論戰したが論が盡きないのに餘り遲くなるので私は辭して歸つた事が有る。

長谷川の同窓に佐波といふ男が有た。此男は私にも同窓で有るが、長谷川とは同級生で有たから私より長谷川の方がズツと親しかつた。此男がツルゲエネフのナカヌウネを譯し、其を何とかいふ漢學者が訂正したものが有た。何でも全部で七八百枚有た。其出版と賣込を長谷川に佐波が依賴した。處が何處の本屋も引受けない。小說雜誌へ載せやうとしたが、其を載せてくれる雜誌がない。餘り枚數が多いのに、譯者も訂正者も名を知られて居ないので、本屋も二の足を踏むのだ。佐波も非常に窮して、誠に訂正者に申譯が無い、せめて雜誌に載せて貰へば宜、報酬なぞは一文も要らぬと言出した。私も同情して其では博文館を聽いてやらう、と私が其を持つて博文館に行き、何でも一枚十錢の割で賣込んで仕舞つた。其は私の處女作も春迺家主人補助の名あつてさへ一枚十錢に過ぎなかつたから、名の無い人の作は仕方の

無いものだと思つたからで有つた。佐波も其で宜と言ふて私に禮を言つて其で濟んだのだが、其を五六日經つと長谷川と佐波の二人が私の處へ來て、長谷川の言ふには「君は實に不埒の奴だ、彼ツルゲエネフの名作で、然も僕等よりヅットト豪い漢學者の訂正した立派なものを僅に十錢で賣つたとは如何いふものだ。僕の浮雲さへ一枚一圓になつたぞ、僕とツルゲエネフと孰が豪いと思ふ」といふ詰問だ。私も之には喫驚した、「其は君も豪いがツルゲエネフには及ばんよ、然、飜譯だからねへ、其に佐波君が無報酬でも宜、世に出さへすれば宜と言ふたものだから、其で十錢で賣込んだのだ」例へ佐波が左樣言つたからとて、天下の名作を一枚十錢で賣込むとは不埒の至りだ、君行つて取返して來い、佐波は何といふとも僕が承知しない、」と非常の權幕で私を責めるのだ。長谷川の純理論に一理は有るが、然し最早其一部は雜誌に載つて居るので、私は其を取返すべき理由を持たない、私も斷乎として、此事は最早是で濟んで居るので居るのだからねへ、君が横合から其樣事を言はれては僕も困るねへ、佐波君如何したものだ、」と私は佐波を顧みた。佐波は難儀た樣な顏をして、「僕は宜といふのだけれど長谷川君が此通り怒つて居るのだ、僕に何でもかでも一所に來いといふのだ、君には氣の毒だよ　長谷川は益々怒つて「否是は佐波の問題ではない、君は文藝家として、ツルゲエネフの名作を一枚十錢で賣つて其で宜と思つて居るのか、君の心裡を僕が親友として問ふのだ。宜と思つて居るなら其で宜、僕は絶交だ。惡いと思つて居るなら話を附けて原稿を取返して來たまへ、」「其は宜とは思つては居ないが社會の事情誠に餘儀ない。まあ君勘弁してくれ僕も微力だから、」「其はお互に微力さ、博文館は資本家、僕等は文藝の勞働者、勞働者が資本家に踏みにじられて、其儘泣寢入になるものか、其だから戰はふといふのだ、」長谷川の此解釋は私の頭に霹靂の如く響いた。

文人を勞働者とは新しい解釋だ。私は喫驚した。が其儘には受取れない、私は文藝を神聖視して居たのだ。文藝者は神の樣な人でなければならない。勞働者なぞとは思ひもよらぬ、少くも僕等は社會の指導者だと斯思つて居たのだ。「君

は何といふも一旦定まつた事で、今更破約は出來ない。僕には其は取返せない、」斯言つたらしかつた、「君は善惡の岐路に立つて居る、よく自ら反省したまへ、僕は君に三日の猶豫を與へる、其で返事が無れば思切る」「返事が無れば絶交するといふのか」「先づ左樣だ」私は何が何だか分らない。先づ煙に捲れたといふ具合で長谷川と別れて仕舞つた。

實に惜しい朋友だ、益友だ、私を文學界に引出してくれた恩も有る。あの朋友を失ふは殘念だ、と斯思つたが、私は三日を過ぎても何の返事もしなかつた。といふのは私に解釋が附なかつたからだ。長谷川の意見に煙に捲れて仕舞つたのだ。以後約十年間長谷川とは絶交して居た。其間私は長谷川の煙に捲れて居たので、其間に私も英語を獨習し、多少の書物を讀む樣になつたが、此時始めて西洋文明に接した。否西洋文明の精神に觸れた。私の精神界に大革命が生じた。釋迦に對する憧憬、佛教流の人生觀、其は何處かへ飛んで行て仕舞つた。此世が嫌で〳〵、常に死をのみ願つて居た私は恰で生れ變つた人間になつた。始し此世が愉快で、何の心配もなくなつて、働くのが面白くなつて來た。其時久振で昔の朋友の長谷川を訪ねる心が起つた。エス基督は私を罪の重荷から救つてくれたので有つた。何でも明治四十二年頃長谷川を本鄕森川町の家に訪ねた。而して舊交を温めた。此時は長谷川に捲れた煙は私の心に散つて居たので有た。今私は古本屋をして居る。市の歸には重い荷を背負つて歸る。勞働は神聖で、喜んで死ぬ迄働く積で居る。舊友の長谷川は私の唯一の親友で有つた。

春の屋と二葉亭

春廼家と二葉亭との相識は、二葉亭が一書生として春廼屋の門を叩き、刺を通じて面會したのが基ださうで有る。二葉亭が春廼屋を訪る前には必らず家で何か研究して置く。而して其を擔ぎ出しては、先生は之に對して如何お考へだと質問するのだ。恰で生徒が教師苦しめにウムと家で研究して置いて其で教師を困らせやうとする態度と同じだ。此企に

は教師も一寸マゴックものだが、春迺屋も能く此教師の態度を現はす事が有つた。私は能く此朋友の態度と師匠の態度との會見者となつた事が有る。負け嫌ひの二葉亭は春迺屋の門下生にはなれないのだ。二葉亭は屢私に斯言つた、「坪内は非常に常識の發達した男で、小說類も澤山に讀んで居る男だが、あの人の本領が僕には分らない。あの小說神髓の根據、議論の根本となる哲學、其が僕には分らない。何か持つて居るべき筈だと思ふが其が分らない。種々突撃て見るが分らない、なあに何もないと言つて居るが、無い筈がないからねへ、」又或時斯いふ事も言た。「僕は君の樣に一も二もなく春迺屋の崇拜者にはなれない、僕は自分の地步も充分に占め、自分の本領をも示し、其を又認めて貰つて、其からでなければ春迺屋とも同行は出來ない、僕の方斗ではない。彼方の人物をも考へなくてはならない。彼方が單に當世才子といふ斗なら、此方から交際は御免被むる。然し坪内は才子は才子だが好意味の才子で手を携へて行けると思ふ、」此意味に於て二葉亭は春迺屋の交際を求めて居たのだ。他方春迺屋主人は日本文學の開拓者を以て任じ、才能有る者は何人をも包擁し扶翼して共に進まうと思つて居たのだ。此意味に於て二葉亭をも誘導し、世の中へ出さう〳〵として居たのだ。

或時斯いふ事が有つた。坪内先生が、「矢崎君私は之から長谷川の家へ往つて見やうと思ふから案内してくれんか」私は先生の伴をした。其頃長谷川は猿樂町に居たので、横手に赤煉瓦の屛が有つて、其先に土藏が有り、入口には拭込んだ格子が立つて居た。二葉亭は其土藏を書齋にして居るのだ、這入ると客間へ案內せられたが、二葉亭が出ないで先づ同人の父が出て來た。二葉亭の父樣は中々の苦勞人で、非常に如在ない人で有つたが、坪內先生に向て、「先日は失敬しました、なか〳〵盛會でした、久振で皆に遇つて愉快でした、毎度悴が出ては御厄介になります」と十年の知己の如き挨拶振だ。私は之には少からず驚かされた。坪內先生と長谷川の老父とは面識なき間柄とのみ思つて居た。其故初對面の挨拶が交はされる事とのみ思つて居たに。豈測らんや此有樣、私は不思議に感じた。即て二葉亭も出て來て雜談が始

まつたが、用件は何で有たか忘れて仕舞つた。後で先生に聴いたら國の親睦會で遇つたのだといふ。私程世の中に迂濶の者は無いのだが、長谷川も坪内先生も名古屋藩士だといふ事を始めて知つた。私は其迄二人の鄕里を知らなかつたのだ。尤も人の鄕里なぞは眼中になかつた。其樣な古くさいものは知らぬで濟んで居たのだ。然し此時興味を一寸感じた。世の中は狹い樣で廣い物、廣い樣で狹い物だ。

二葉亭は交るに甚だ七面倒の男で、尤も三十以後には其癖が減じたが、若い時は猛烈で有つた。朋友は宜が、親友となると佶度喧嘩して絕交となるのだ。今實業界で名を知られて居る藤村義苗、鳥山主計大監、彼二人は青年時代二葉亭と御神酒德利の樣に離れず親んだもので有る。二人共絕交で語も交さぬ中となつた。殆んど絕交癖といふものを持つて居て同窓は皆之を知つて居る。其故私は坪内先生と長谷川との交際には常に警戒の目を離さなかつたが、幸ひ其頃は親友ともならなかつたので無事に濟んだ。其代り私の方が絕交となつた。直情徑行からといふのでもない、純理からといふのでもない、利害得失からといふのでもない。何だか譯の分らぬ複雜したものからだ。常人を地下に起して說明せしむる外ない。世間へ出て働く樣になつてから彼癖が無くなつた。餘程之を抑へるには苦心したもので有らう。

春廼屋と二葉亭が親友になつたのは私は知らない。若親友になつたとしたら其は私の絕交中の事だ。然し恐らく親友にはならなかつたらう。彼二人の交は單に文學上のみで有らう、又其で宜のだ。日本の要する處は其丈で澤山だ。

春廼屋と私

春廼屋主人と相識になる前に私は先づ其著書の書生氣質を喜び讀んだので有る。私は馬琴を崇拜し、三馬に憧れ、春水に同情し、一九を喜んで、何でも末には小說家になる考で居た所、春廼屋主人の書生氣質に出遇つたのだ。其を夢中になつて讀んだのは無理もない事だ。其から坪內先生に始て遇つた時は私は實に嬉しかつた。續いて其近鄰に住み込ん

だ時は尙更の事で有る。私は先生に弟子にして下さいと願つた。先生は弟子にするのは不可、私は人の師となる德は無いし、師となると責任が重くなる。師弟の關係は大切のもので、君の一身迄背負なければならぬ。君も又後悔する事があると不可、唯同好の人として君を扶翼する、まあ君は兄の家の玄關に居ると思つて居たまへ、弟の樣に面倒を見るから」如何しても聽入れない。私もあきらめて先生の語に從つた。私は人生に對して非常に迂濶で、其を眞劍に考へた事が無かつた。其故師弟といふ事も眞劍に考へなかつたのだ。今にして考へて見ると弟子になる資格が無かつたのだ。唯の一書生に過ぎなかつたのだ。私は幼年にして父に別れ、家が非常に貧乏で有つた上、性質勉强好でも無つた故、國文學の素養は皆無で有つた。其が文章を書かうといふのだから、先生の面倒は大變で有つた。私の書いたものは全紙盡く眞赤になる程先生に直さるるのだ。尤も其を直す先生の筆の早さは驚くべきもので、一枚位は五六分で出來るのだ。私は其才と筆力とには唯々驚歎して居た。筆端捲風雲字に飛鳴なぞと心で讃嘆して居た。先生は眞に私を愛して下さつた。郊外散歩なぞに一所に出る、と私に好い道を歩かせて自分は惡い道を歩くのだ。先生此好い道を歩いたら宜でせう、私が其方を歩きませう、否私は靴だ、君は下駄だ、惡くても我輩は平氣だ、と斯いふ調子なのだ。先生には女性の樣な優みがある。

今の博士逍遙は立派な人格者で德の人だが、其頃の春の屋は才の人で有つた。然し天分が如何にも美しかつた。愛が勝つて居て、情が有つて、負ず嫌では有つたが、他人の思ひ遣が馬鹿に深かつた。私は馬鹿に春廼屋になついて仕舞つて、全く兄の樣に思つて遠慮無になつて仕舞つた。其頃の春廼家の家は本鄕眞砂町の炭團坂、東京第一の急なあの炭團坂上の角屋敷、崖淵に有つたのだ。裏の緣側に立つて正面を見ると、菊坂の通の谷と其上の丘陵が一目に見える、其谷通にも丘陵にも貴賤貧富取交ぜた家が、玩具箱を顚倒した樣に並んで見えるのだが其が汚い樣な奇麗な樣な世話場の背景畵の樣にも思はれて一寸乙で有る。春廼屋おぼろといふ名だから、住宅も一寸意氣な洒落た家で有らうと思ふと違

ふ、門を這入ると右側に昔の漢學塾の書生部屋の樣な一棟が七八間古びた格子窓を向けて立て居り、左は一面の黑塀の仕切、正面七八間の奥に露出の玄關が有るのだ。此書割は私には馬鹿に氣に入つて居た。明治二十年の春眞砂町二十五番地に引移つたが、是は立派な紳士の家で有つた。其代り普通平凡何の特色面白味も無いので、唯便利丈が前のに優れて居たのみだ。私は前の家に執着心が有つたが、其は口へ出しては言はなかつた。

私が春の屋の玄關子時代は、私の爲には最も愉快の時で有つた。私は七歳の時親戚の居候となり、九歳の正月寺の小坊頭となり、其四月に職人の弟子小僧となり、其秋から商家の丁稚となり、十四歳の夏父に死別れ、其九月に外國語學校の生徒となつたので、早くから食ふと食へないとの問題に觸れて居たのだ。然し春の屋の玄關子時代には其問題に直面して居なかつた。尤も家には祖母や母や妹が有つたから此問題から免れる事は出來なかつたが、直面して居ない丈は樂で有つた。其でも家族の事は忘れられぬのだから、幾分か金を取つて家に送らうと思ひ、廻らぬ筆で二三の短篇物を書いた、其を先生が面倒を見てくれる、其度に私は出來もしないに濟まない〳〵と思つて居た。私は涙無しには今でも彼時代の先生の面倒を思ひ出した事はない。然し其割には私は何の役にも立たない人間で終る樣だ。是は先生に對して申譯がない。

つい話が脫線して濟まないが、あの眞砂町の家で、書生氣質、未來の夢、妹と脊鏡なぞは作られたのだ。其頃の春廼家の著作振は實に迅速のもので、數十頁二三時間で出來上るのだ、殆んど筆の動きの止まつた事がなかつた。其が皆學校の勤の合間合間のだから驚くべしで、先生は「妻君」を國民の友へ出して後、餘り創作の筆を採らなくなつたが、其を私は今でも悲んで居る。日本が大作家を出さんとするには、作家にもつと自由を與へなくては不可、道德の名や、國家の名や、社會の名で、馬鹿に作家を束縛し過ぎる、詩三百一言以て之を蓋ば曰く思邪なしで、作案の文は奇麗なものだ、日本は馬鹿に窮屈過る國だ」

眞砂町の春廼屋塾

眞砂町の崖の家は、世話場の書割の様な景色と入口の塾部屋とで私の氣に入つて居たが、其塾部屋は三室に分れて居て、其處には主人が監督を頼まれて居た學生が住で居た、私の住んだ時は、飯田、加古、山本、青柳、長谷川といふ五人が居た。私の行く少し前に永富、丘、山崎といふ學生も居たさうだが、其は他へ轉じて稀に遊びに來るのみで有つた。此山崎といふが今の理學博士の山崎覺次郎氏、丘といふが理學博士の丘淺次郎氏、長谷川といふが長谷川如是閑君で加古といふが法學士で陸軍教授をして居た加子貞三郎氏で有る。私は退屈すると能く此塾部屋へ遊びに行た、晩餐後擊劍をやつた事が有るが、面がないので代りに坐蒲團を頭へ載いたなどの滑稽も有る。飯田といふのが一番年上で、他は皆學へ通つて居るに、此靑年丈は遊んで居るので、私が何故かと聽いたら、高等學校は卒業したが大學へ這入るのを躊躇して居るのだと言つて居た。何でも學費の問題で、他人の世話になるのが嫌だといふ様子らしかつた。加古はなか〳〵勉强の學生で、長谷川は萬ちやん〳〵と萬ちやんの名を以て呼ばれて居た。之が一番年下で十六位で有つた。其が今は文壇の飛將軍長谷川是閑氏なのだから面白い。私も今は老人になつた爲か昔の事に興味を持つ様になつた。

此塾時代私の「守錢奴」「ひとよ切」「味切無」なぞといふものが春の屋主人補助の名で出版せられた。

二葉亭の「浮雲」も慥か此塾時代の出版で有らう。左樣でないとしても、二度も三度も書直し〳〵して居たのは此時代に違ひない。始め私の文學に對する態度に遊戲分子の多かつたものだが、此塾時代に長谷川の眞劍味と坪內先生の抱負氣象に開發せられて、次第に眞面目の方に向て往つたのだ。

此塾時代に春廼家を訪づれた文壇の人々には、饗庭篁村、河竹默彌彌などが重なる人だが、其中でも篁村は屢々で有つた。

春の屋と篁村

篁村が春迺屋を訪ねると必らず酒が出る。而して其坐席が長いのだ。私も度々許されて其席に侍つたが、此酒間の談話は非常に興味深いもので有つた。時には之に二葉亭も來合せる事が有つた。篁村は如何にも品格の有る、大店の旦那らしい風采の人で有つた。如何にも物靜ながら〳〵とはしやがない富人の江戸つ子といふ風の人で有つた。醉つても騷がない、唯醉へば洒落をいふ、其が奇麗な滑稽を含む秀句となつて現はれる。其だから笑はずには居られない。然し奇麗で輕妙だから、羽目を外しては笑へない。其滑稽は輕快洒脫の妙を極めたもので有つた。近松西鶴八文字屋を賞し、三馬種彥を喜んで居たが、馬琴は餘り好まなかつた樣だ。好まないとよりは嫌ひの樣で有た。春迺屋主人は此人を遇する法を知て居た。どうせ文人の事で、口では謙遜て居しても、自惚は強いに定つて居る。君はまづいよと言へば直ぐ喧嘩になるが、お互に賞めて居ればお互に氣に入る。春迺家と篁村はお互に賞め合て居た。尤も賞めるのはお世辭ではない、お互に好處が有るのだ、其を賞め合ふのだから嬉しいのだ。其好處で自惚て居るのだ。尤も自惚を封じられると書けなくなる樣だ。自惚て居る人は馬鹿の人だが、自惚の無くなつた人は全くの馬鹿の人だ。二人はお互に氣に入つて居たらしかつた。私は酒の席で口の利ける人間ではない。天性の鈍漢で默つて見て居る斗だ。其處へ行くと二葉亭は私よりズット敏捷で、世渡も私よりもズット上手だから、酒席でも一寸々々口を利く能力を持て居た。唯私が飽々するのは此酒席で文學以外の話のない事だ。私は此酒席を心窃に迷惑に感じて居た。都々逸でも歌つたり、踊でも踊つたり、詩でも吟じたりする。もつと蠻的のもでなければ私の趣味に一致しなかつた。

然し私は決して篁村を嫌つたといふのではない、好では有つたのだ。篁村氏の手紙なぞは甚だ大好で、春迺屋主人から貰つたのを珍重して居る、唯彼人の酒の長いのには恐入つて居たのだ。

酒を呑まない篁村翁は、實に柔和な、笑ふと細い目がいとど細くなつて、其處に一種の愛敬をたゝへ、商家の旦那で然も餘り金錢に心を役されぬ。悠々とした所のある、藹然たる和氣を漲らせる底の人で有つた。此人が名題の文人とは思はれない人で有つた。酒を飮んでは面白い人で有つた。唯其酒の永いのが此人の惡癖で有つた。

春廼屋主人は能く篁村氏の文の載つて居る讀賣新聞を見ては、其妙處々々を指摘しては喜び賞めて居た、「饗庭の輕妙には迚も及ばない」と從つて私も篁村翁の文章は尊んで居た。

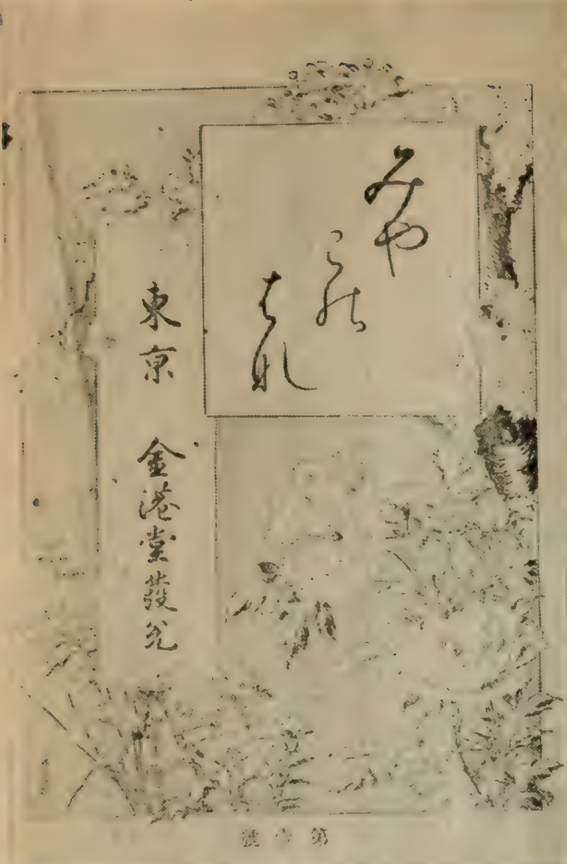
餘談

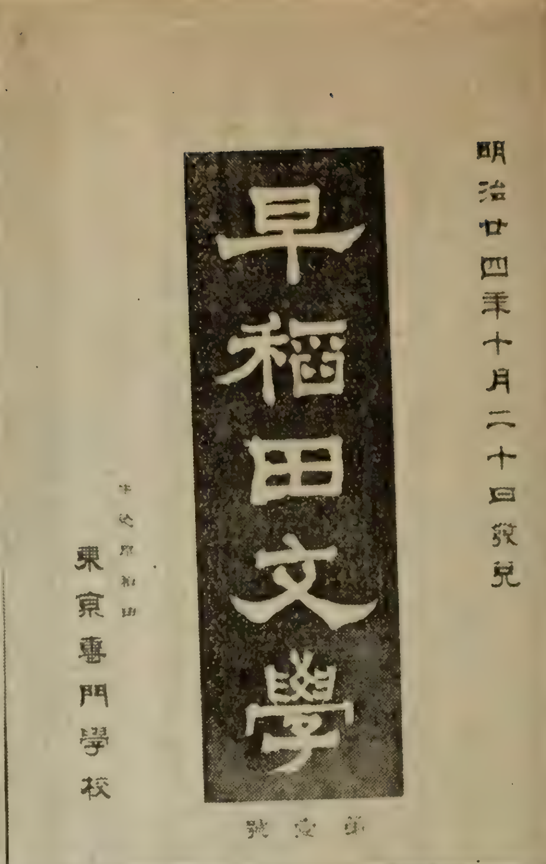
私が春廼家の食客時代、一度先生と二人で近所を散歩した序に文壽堂といふ本屋に立寄つた事が有つた。其時其處の軒下に立つて發句だか何かの本を捻つて居る青年が居た、先生を見て挨拶したが、先生が「君も其樣な本を讀むのか」「ハイ好です」と答た。其青年が去つた時、「彼も今に何か始めるのだ」と先生が言つた。如何なる男かと聽いたら、進文學社といふ私立英語學校の生徒で、川上某といふ生徒だと言ふ事で有つた。其から二三ヶ月過ぎた時硯友社の我樂多文庫が發行せられた、川上某は川上眉山人で有たので有る。私は眉山君には終に其後遇ふ機會無しに過ぎて仕舞つた。

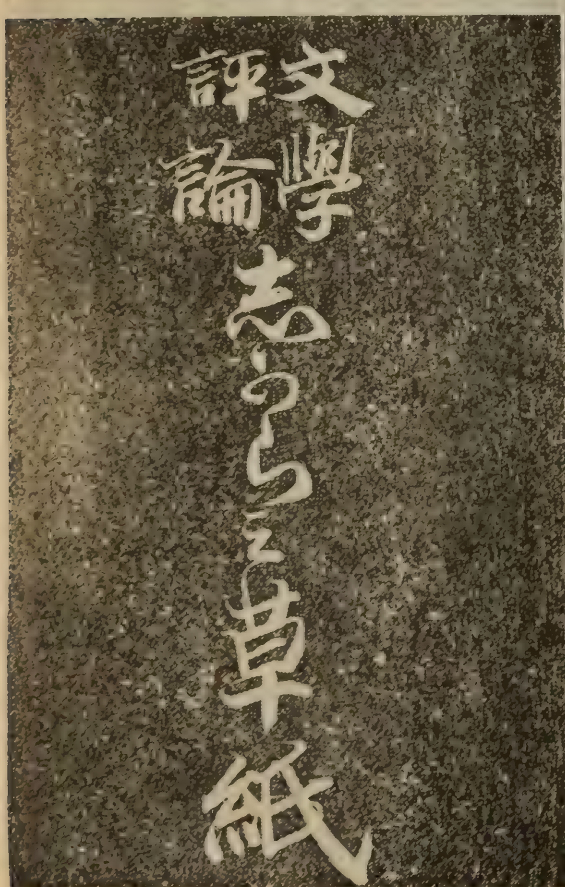
河竹默阿翁が春廼家を崖上の家に訪ねた事が有るが、之は篁村氏に伴れて來たので有つた。何でも午前十時頃から夜の八時過迄話して居た樣に記憶して居るが、春廼屋主人は其時默阿彌を非常の苦勞人で話も面白いと言つて居た。默阿彌が贔負になつた江戸の富豪に紀文其他の人が居たが、其話なぞは私も興味を以て主人から聽いたが、今は少しも覺えて居ない。默阿彌も二三度訪ねて來たが、其中に彼人も故人になつて仕舞つた。

緑雨君も一二度は訪ねて來たので有らうが、私は覺えて居ない、唯一度主人の使で、緑雨君をめざまし新聞社に訪ねた事が有る。其は何やらの本だか書付かを、齊藤といふ男に渡して來いといふ丈の事で有つた。何だか瘦せた青い顏の若い男が出て來て、私の差出した物を、あゝ左樣と受取て直濟て仕舞つた、其が緑雨君で有つた。其後緑雨君には二三度遇つた事が有る、あの人には私は少からず同情して居た。

（終）









胎生期の諸雜誌

硯友社文學運動の追憶

丸岡九華

丸岡九華氏は、紅葉、美妙等と共に硯友社を創立された方ですが、氏はその創立當時を追憶して『初蛙』と題する長篇をものされました。これは當時の文壇を知る貴重なる文獻であります。ゆく〳〵に出版されるゝ御計畫とのことですが、本誌の擧を賛し、こゝに轉載することを許されました。……………………記者

そも〳〵硯友社なる一個の團體の起つて、明治の聖代に新文學の萌芽となり、當時の文壇に一異彩を放ちたる其起元を追想するに、今よりは二昔明治十八年の二月中ばの事で東京大學及同大學豫備門の舊開成學校々舍の後をうけて、現今神田一ッ橋外高等商業學校の向側にありし時、同豫備門に尾崎德太郎、石橋助三郎、山田武太郎の三子が居つた。自分は此時豫備門を去つて舊外國語學校附屬高等商業學校に在學、外國語學校佛語科の知友に久我順之助子あり、同子と尾崎とは芝神明町に居住せし以來の小學校友達なるが、前記の二月頃ある日學校にて、此度尾崎山田石橋三人にて文章研究の爲め、雜誌を作り各自に寄稿し批評して樂みたければ、君も好な道なれば是非賛成して來てくれぬかとの話に、それは面白からうと尾崎石橋とは舊知己なり卽時賛成すると其日學校の歸途、尾崎が下宿屋神田三崎町の石野市に赴きたり。

因にいふ是より以前、明治十六年の頃自分が發起して、文友會なるものを組織し、前田太郎香緣、小澤德太郎德堂、安藤熊太郎胖水、小川竹崖なぞ、毎月一回自分が礫川の宅に集り來りて課題の漢詩文を持寄り批評添削し、それをばまた一小冊子に筆耕して會員の回覽に供せしことありしが、此折安藤の紹介にて尾崎も最初より此會に加盟せり、當時尾崎は綠山と號し芝區神明町八番地荒木氏に寄寓し、石川鴻齋氏に師事して專ら詩文を研究せり。入會後は自分共時々會合して、互に研鑽をおこたらざりしが、此

會約一年半ほどにて散會し續いて運動遊足を主旨とする凸々會なる者を組織し常に往來せしが其後此會も亦廢絶し尾崎石橋との交通も中絶せしが余は一期先に豫備門に入學し續いて尾崎石橋山田川上入學し、自分は去つて高商に移りたるより、同時に豫備門ある事暫時にして、暫く會合の機なかりしに、此度久我子の紹介により再度舊交を温むることゝなれり。

自分は一議に及ばず承諾して學校放課後久我子と同道して、神田三崎町なる尾崎が下宿屋石野市に赴けば、石橋も來合せたり。「やあよく來たね、「面白い相談だ、直に贊成するよ位にて、大安踞に膝突合す交際、「君菓子でもおごつちあどうかと客の方からの催促に、「仕方がない今日は出そうかと、尾崎は机の抽斗より蟇口探し出して、底をはたけば十錢銀貨と六七錢のばら錢、手を叩いて下女を呼べども一向に來ず、「仕方がない行て來やうと、尾崎はてく〳〵菓子買ひに行く「ちよツロには遣はれる奴さとは、石橋が主人を送る捨言葉、室はたしかに北向の四疊半、窓の下に小机を置て本箱二つに火鉢、炭斗、洋燈、壁に立かけたる握り太のステツキに肋骨の折れ出した洋傘、袴も帽も書籍も齒磨も手拭も、書籍も紙屑もごつちやに入亂れて、本函の蓋にも障子にも處嫌はずに狂歌詩都々逸を書散らして、天井裏の忠助と隣同志の爲體なり暫くして尾崎は、新聞紙に包みたるもの提げて歸り來る。客は茶を呼び包を開く。見れば大福餅二十錢がところにて、折から山田も來合せたり、摘んでは喰ひ取つては喰ひ、殘り少く平けたるとき初めて談は結社の相談に入る。

兎に角今回結社の目的は、從來數度試みたるごとき詩、俳諧、歌なぞと、一種一類に偏することなく、凡そ文筆の技に屬ずるものは一切を網羅し、小說戲文詩歌都々逸、川柳冠付けに至るまで普く同好の作を集めて、隔月に一回之を雜誌體のものに編纂して、投稿同志の回覽に供し、その編纂は山田尾崎二人にて引受け、回覽の際は批評勝手たるべしとの事に定め、さて社名雜誌名の問題となつて種々の議論もありたれど、必竟は文筆の娛樂にして友を嫌はず雅俗を併列する雜誌はやけに「がらくた文庫」と、社名は生眞面目に硯友社とせんかとの議に一決し「がらくた」を我樂多と萬葉假字

に書改めんとは尾崎の考案にて、それなれば小說欄を心織筆耕、戯文新體詩の類を千紫萬紅、狂歌川柳等を飛花落葉とする方更に面白からん、そこで雜誌が文庫なれば第一號第二號と呼ぶより、第一番第二番としてはどうか、それもよからう。横町の旭湯の笊はいろは分になつて居る。い號ろ號も面白からう、へ號と號も酒落て居る、ちよツ下らん事を言ふな尾崎がもつこ禪入れられてたまるものか。

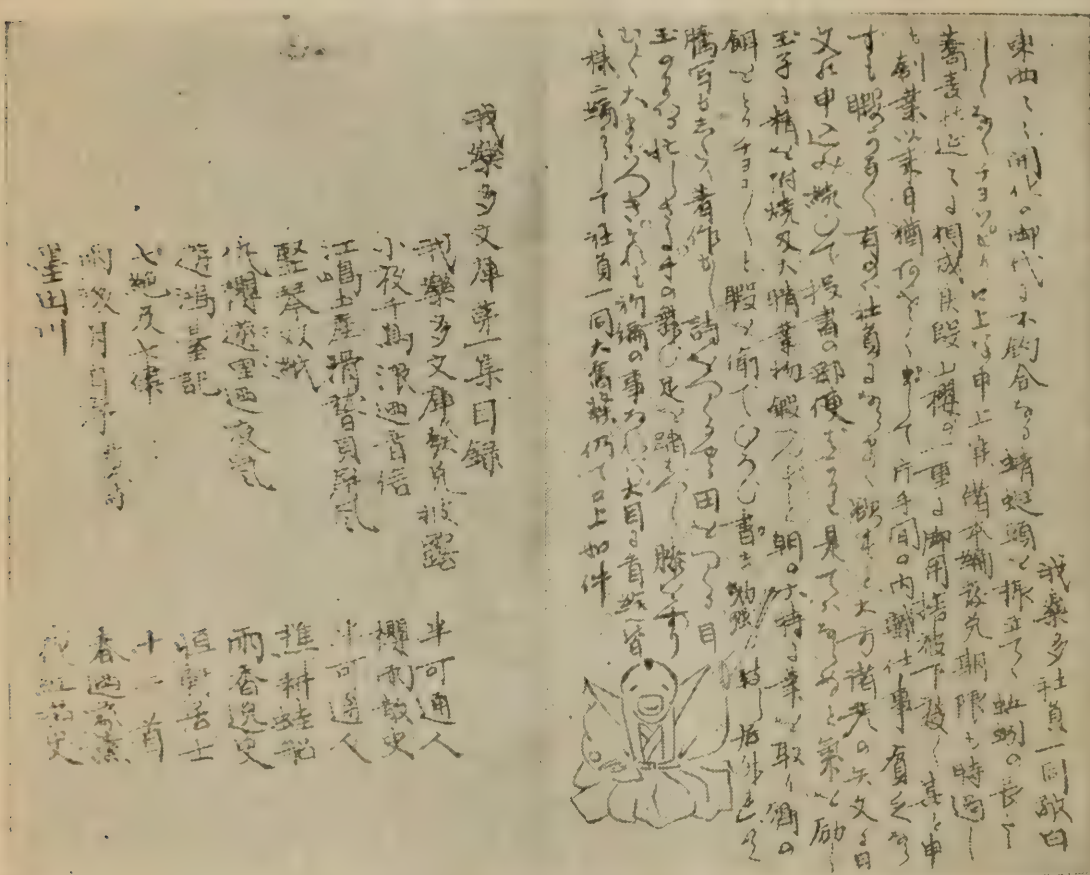
社印は鐵筆家久我子に依賴し、挿畫は大澤積翠君、(三之助と稱して當時豫備門の學生)に囑托し、是れにてひとまづ議一決然して此發起者連が當時の戯號は、半可通人、素漪夫、花紅治史、新中納言有海、枕之有明、綠山と記したるは尾崎にして、樵耕蛙船は山田武太郎、雨香と名乘るは石橋助三郎、桂堂または梅の舍薰とあるは自分のことにして、其後尾崎は紅葉山人、石橋が思案外史、山田が美妙齋美妙、自分が九華と改めたるは其後半年ばかりの後の事なり。



我樂多文庫第一號

かくていよ〱出來上りたる第一號は、半紙半切を二ツ折にしたる小本にして、六七行に認めたるもの、まづ約束の心

織筆耕には山田が竪琴草紙の初一囘（英國史中のアルフレッド大王の傳記を、純然馬琴の七五調に書下せしもの）尾崎が江の島土産貝屏風「石橋、池田（氷山と號す）と三人連れにて、江の島記行を是亦純然膝栗毛風に綴りたるもの」石橋の沖千鳥島物語（前同樣江の島記行、文體は普通の文體にて滑稽もの）等なり、待ちにまちし甲斐あつて僅に三日間の約束に三四囘の熟讀、「面白いな」「よく出來



「我樂多文庫」第一號見返及目次（紅葉筆）

たな」とは逢ふ度の挨拶、眞に寢食を忘るとはこの時の心持なりけり。初一番より第八番まで、尾崎山田二人にて筆耕せしもの、今も尾崎方に珍藏しある筈なり。今この初號に掲けたる尾崎が披露の文。山田が綴りたる祝文、幸に篋底に寫しあれば、記して當時の文體を示す。

我樂多文庫御披露

檄して曰くはチト大業、處して參るはヤヤ艶めく、則ち書て以て才子諸君に告ま

つる。それ人各樂しみあり。隣の壁から燈を盗みて、書讀むも樂なり。銅臭を喜ぶ守錢奴、一車の貨に事足るとする清貧家も、亦樂むところなからずやは、傾城の涙に家藏の雨漏を顧みず、あるは二合半の寢酒に布袍を打殺して飛だ罪つくるも亦罪障のひとつぞかし。されど隣の壁ぬかば尻を喰ふ恐れなきにあらず。銅臭きはぢゞむさし、さりとて冷飯は腹こわばりて病や起らむ、家を持たねば傾城の雨漏り處なく、無一文にては寢酒も飲めず、あゝ何とせうどうせうと、凝つては思案のいちばこそ、筆の林に閑居して、不善はなさぬ君子等の、快樂の一派和歌詩文の上品より、小說狂文詩歌俳句、四面に堅き角を取り、端歌都々一の心意氣、一切無差別書集め、我樂多文庫の名にしおく、諸彥も我も樂多き雜誌を月に編じて、而して讀書餘閑の憂晴らし、噫是れ天下無上の快樂倶にせむとの有志の君達、珠玉を空しく秘め玉はず、うらんかな〳〵とのたまへば、我も言はん買んかな〳〵。

明治十八年彌生の末つかた

柳翠花紅樓のあるじ　　牛可通人自樂

落款には自刻「自樂」の印を捺す、山田が祝文は次の如し

我樂多文庫發兌の祝辭

終日机にもたれ、大層過れど腦力を勞するわれ等の身にとりては、所謂る牛は牛連れのそれ相應の樂なからずやはとて、山鳥の尾崎のうしと石橋のうしと二人寄合て叩きせしをおしながめまづ小生に推よせて、社員とならばよかばつてん、拔天擢地ならずとも、この我樂多のわれ面白う手柄の岡持そこ退けの新店前の色づけに、出るといふのはどでごんすと言はれて見ればこつちも亦ド地は好なり御意はよし、さらば此度の血祭に、祝辭一本まゐらせむ、それ何よけむかよけむと、思へど思ひ出てはこそ、小田原征の初陣と、洒落ても其場は逃さぬと、後手よりの一番鎗、つけられるのが口惜しや、まゝよ何とか鳴海瀉、かの水月と言立てゝ手にも取られぬ出鱈目言葉、イヨ御祝と言ふばかり、是でも祝辭と見へますか、祝辭も祝辭も大祝辭、大しくじりと見へますア

樵　耕　蛙　船笑

尾崎が自刻の自築に對して、山田も御手製の矢の刻印、二人があどなすも想見すべし斯くて一冊として社員一人に付閱覽日數三日限り、卷中己が意に滿たぬところは、欄外に付箋して、傍若無人に難評する、今思へば吹出すほどの事も當時は社中皆眞面目にて、鞘放れたる傳家の寳、血を見ずんば止まざる決心、その一例として記憶するは、自分が蛙船子の新體詩を總評して、意義通せずと斷したるを、厄鬼となつた子が答辯に、右の新詩には古語多く、殊に（鳩吹く秋）（しなどの風）などの語を用ひたれば、評者は全篇を解しかねたるならんと、熱の加減も甚しからずや、自分が新體詩に用ひし（つゞれさせとて鳴く虫の）の語を難じて、山田はこの語の創造者は馬琴なれども、俗諺をかくの如く轉化するは極めて無理なりとの、當の敵の自分をのけ者にして馬琴にさへ喰つてかゝりたる其鼻柱を更にぶち折つてくれんと、此語決して馬琴の創設にあらず古歌に曰く何々、又謠曲錦木に曰く、（はた織りきり〳〵すつゞれさせとてなく虫の）とあるは如何なぞと苦しまぎれに謠曲まで擔ぎ出したる。其他蛙船子が詩に（木下闇云々）とあるを、緣山が木下闇とは夏期こそ相應しけれ、秋冬なぞの季には無理なりと云ひしを、是亦大喧嘩の種をまきて、緣山子ともあるべき人が途方もない事を批難せらるゝもの哉、古歌に曰く古語に曰く、太平記に曰く都々逸に曰くと、その引證の可笑しき程うるさき、今は一場の笑ひ話となつて殘れど、其當時は夜の目も寢ずに引證作例を探し求めて、親の敵でもねらふやうに騷ぎ立てたるものなり。

明治十九年の頃尾崎は下宿屋石野を去つて、駿河臺坊城邸内の山田方に同居す、お茶の水の土堤に向ひし北向きの武者窓の下、二人は机を並べて朝から晩まで文墨の話しばかりそれでも學校の成績さまで惡しからざりしは不思議なり、其後三四日にして尾崎はその祖父母荒木氏の宅、飯田町三丁目に引移りたり、此處は今の皇典講究所の横町にて、表に格子戸はあれど連中はいつも横手の露次口より裏木戸に廻りて、塀越しに「居るかい」と怒鳴る、内にて「居るよ」と答ふ。それを相圖に庭に廻れば書齋は三疊の一間、一尺ばかりの濡れ椽の側に机を南向きに控へて、室内は書函、陣笠、

檜笠、短冊、古摺物類、矢五六本鍮一筋、あるは具足の胴ばかりなるを壁にぶら下げ、柱に掛け、障子洋燈の火屋には虚嫌はず心覺への文字を書付け其中に大安踞かいての放談、連中三四人も落合へば一人は椽側から雨落へ片足出して居る始末、少々位雨のかゝるは一向平氣に、澁茶啜りながら、想を談じ句を評し古人を論じ今人を罵り、わい〳〵がやがや毎夜十二時近くまで、あたり近所の迷惑なぞ何とも思はず、永く忘る能ざる文壷の研鑽百年渝らざる一團の友義は、この三疊敷の一間に於て結縁成就されたるものなり。

然して我樂多文庫第一冊より八冊までの中、可笑しきものとして余が篋底に殘れる緣山が詩數首あり、此中或は文庫に掲載せざりしものもあらん、記して當時の記念とす。

力士大達得勝於梅谷慨然有作

盛者必衰是自然　昔時人能莫爭先　孤梅花碎老幽谷、大樹幹長達九天

寄墨堤某酒家少女

嬌顏併得細腰斜　年少佳人在酒家　若迄青春誇逾艷　江東又誰說櫻花

墨堤嬉春詞

橋東買醉追晴暖　十里如雲花不斷　日暮江風堤上途　落紅輕點美人傘

寄塾妓

歡會如今苦別離　嬌歌妙舞引相思　暗愁生處易腸斷　憶起殘燈酒冷時

與友人桂堂登雨降山途上吟

岐路親攀蜀道難　蒼林遮日白雲殘　一聲怪鳥空渓底　山氣吹衣七月寒

吉原雜誌

鐘聲無情離恨多　綺窓分手泣嬌娥　竹輿軌々霜堤途　輕載紅閨殘夢過

失題

多恨多情骨半銷　阿誰入夢度晴宵　斷腸門外垂楊柳　間使春風弄細腰

病後狂吟

自驚憔悴鏡中顏　身在半生半死間　若使當時終我命　今朝應踰死出山

拜見初春摺物摺物賦出放題一絶進上劇雅堂主人

於山立役面相倖　熟想此非豐國流　戯寫似顏雖獨悅　奈何最負婦人愁

紅葉は詩を石川鴻齋先生に學びしもの、最後に掲げたる劇雅堂主人とは、即ち松岡緑芽子にして、當時豫備門の同窓生にして、常に畫を以て稱せられ、この八巻中にも時々其彩筆を揮ひたり、殊に子は劇を好みて、一環三點法と名付けて、☺の如きものにて、當時俳優の似顏を作り、之を奉書摺りとして知人に配れり、紅葉が詩はその摺物に對して、贈れるものにて、其序文も亦尾崎が筆なり。書は當時蜀山人が百八一首もぢりの狂歌版本一冊を手本として學び、其後自身の工夫にて變化せり。

我樂多文庫發行後、尾崎はまだ石野方にありし時、誰だかに頼まれて、日本橋紅屋（べにや）の引札を作れり、是れ子が筆を執（と）つて以來、其文初めて刻せられ、又初めて報酬を得たるものなり、其引札は左の如し。

小間物開業御披露

花の色移ろふ小町紅は、姉さん方の薄化粧によろしく、紅梅餅に彩とる細工紅は、お坊ちやん方のお目覺にかなふ、其品はたゞこの店に限るとて、年來の御ひゐきをうけ、おろし小賣の繁昌は名に高砂の鶴とむれ居る龜井町にて、福島屋のあるじこたび小町紅、てふ名より思つき、肌も衣通りとなる白粉より、黒髪の艶ます伽羅の油、其他珠玉の根掛はあれど掛直なく、頭かけ元結の細き利にて賣弘む種々の金銀簪は、風流新形を旨とし、蝶々髷に似合ふ花かむざしの華美（はで）あれば、鍋町形には人柄よき鼈甲の中差に至るまで、すべて安直にて商ひますればこそ、開業當日より、斑紋櫛の歯のひきもきらず、おれもかうがい〳〵と、遠近よりのお運びを願

ふになん。

日本橋區龜井町
紅屋茂右衛門

開業日　九月　日

當日廉景進上仕候

紙は半紙半切の薄汚き木板摺、しかも原稿から筆耕まで一人の苦心にして、御禮にと石鹸をたつた三個、然も大天狗にて、どうだい君達にはまだこの腕はなかろう」、

發行後社中相談して、めい〳〵毎月五錢を出金して筆墨紙の費用とし、山田尾崎の二人に渡せり。當時また山田は發起して、大學派が新體詩の向ふを張つて見んと、尾崎自分と三人連合して、十九年の七月『新體詩選』なる小册子を發行す、是れ三人の作が兎にも角にも活字となり、一册の書籍となつて公に世に賣出したる初一篇にして、各壹圓五六十錢宛の原稿料を得たり。此書意外にも世の好評を博して、現今にても小供等の唱ふ（敵は幾萬ありとても、すべて烏合の勢なるぞ）の一篇は、山田が此卷にて初めて世に示したるものなり。卷中收むるところ左の如し。

書生の歌　緑山
士卒の夢　春迺舍朧
路易帝斷頭臺　同上
佛國革命歌　同上
リプ、フアン、ウインクル　同上
隅田川花見　蛙船
行軍　同上

戰景大和魂　　同　上

大川友右衛門　　同　上

以上九篇なり。然して尾崎が新體詩はこの書生の歌と鳳鳴會の爲めに作りたる隅田川の二篇あるのみにて參考の爲め玆に掲ぐ。

書生の歌

國は何處ぞ百里外　花の都にほど遠し
親き人と手を分ち　馴し親の膝を去り
たてゝはかたき志（こころざし）　岩をも徹す桑の弓
矢竹心の勇ましく　吾妻の空に遙々と
着つゝ馴にし敝衣　いつかは飾る綾錦
股（もゝ）に錐さし壁穿ち　千辛嘗てまた萬苦
粗食に堪へて肱枕　雞の群なる鶴と成（なり）
千歲に薫る功績を　立ん心を忘れじな
勉めよ君よ勵め君　將相何ぞ種あらん
諸葛も昔書生なり。

隅田川（霞か雲かの譜）

櫻はいつか散果て
　若葉は雨に色深みどり
　　涼しき木蔭したはしや

堤に人の通ひ路も
　流に櫓の音のみさえて
　　煙のうちに舟は消ゆ
折しも昇る月の影
　うつらふ浪の白鷺あたり
　　ひと聲もらす沓手鳥（ほとゝぎす）

山田は前記の新體詩選に繼いで、少年姿なる一冊を出せり、是れ子が單獨にて世に公にせし初一卷なり。尾崎は是より遙に後れて色懺悔を出し、續いて思案子は「乙女心」を自分は芳季を出す。

明治十九年十一月、社員次第に增加して、到底筆耕回覽にては間に合ざるを以て會費を拾錢として、印刷に付して社員に配付せんとの議纏り、弟九號より版本とする、當時の社員として左の人名あり。

紅葉山人	尾崎德太郎
思案外史　雨香	石橋助三郎
樵耕蛙船　美妙齋	山田武太郎
春亭九華	丸岡久之助
牡丹齋積翠	大澤三之助
狐狸窟閑人	久我順之助
香緣惜史	前田太郎
梅酒舍文江	飯田旗郎
劉雅堂緣芽	松岡

谷陰歌仙　松波正之
瓢亭木栗子　池田賢太郎
難錢子　澤田與吉
拔天生 春帆　安陪龜之助
柳圃　中村狀
煙波山人　川上狀
漣山人　巖谷季雄

壹册僅に拾七頁の小册子なれども、錢のなき社中の仕事として、初めて校正の製本のといふ面倒、出來上るまでは容易のことにあらず卷頭に紅葉が祝文あり

こゝに文字となん呼べる賤の女ありけり、山陰の櫻のごと仇めける姿と、柴人の朝な夕なすぎがてにながむるのみ知る人もなくて、憂き幾歲の春を過ごしけるを、いつか都人の香をしたひ來て、かゝる山里に老朽んよりは、とく都に行きてつま定めよかしなど、樣々に言ひすかしければ、乙女もうれしく、鶯の谷間を出る心地して、岩淸水に水鏡し、髮ども都振に取揚げ、紅葉の錦打まとひ今日は都にぞ出ける、あはれ風雅男たちの好心にさそふ水莖のあと濃やかなる文とも井出の下紐とく〳〵

籬の菊におきまとふ霜月の末つかた　紅葉山人

予はこのとき初めて紅葉山人と記せしを見れば、こは十九年の夏頃に雅號を改めたるものなり。

この一卷中には、紅葉が僞紫怒鉢卷（にせむらさきいかりのはちまき）、蛙船の嘲戒小說天狗、思案の春宵綺話花暦、香緣の雨々風々花月友。自分の新體詩などあり、僞紫怒鉢卷とは助六の筋書を脫胎した洒落本體に書なしたるもの、嘲戒小說天狗とは、當時某大家が自作の世評に慢じて、途方もなき大風呂敷を擴げたるを手きびしく罵りたるもの、思案子が作は表題通り、花月友は漢文くづしにて世路日記佳人の友と稍同樣なものなり。

拾集は缺本していま手元にあらず、玆に年末の發兌にさしかゝりて社員より會費拾錢宛取立てたるに、何がさて貧生の集合なれば、會費思ふ樣に集まらず、殊に社友文江子が每月拾錢はこたへると言ひしを、紅葉聞かぢりて自分に宛郎時左の書面をよこせり。

先達あらほどいやみ澤山な手紙さし上たに何の御返事もなきは、丸岡氏の耳朶も昨朝の寒さに霜げられたそうな、コレ丸岡氏イヤサ久じろしいかゞ致された。さいつ頃より數度の債促も參焦しに砂糖とはあまりに情あらぬことなり。年末の事なればお互に錢のないのはコレハ失敬イヤサ怒りたもふなまづ御同懸ながら、硯友社金庫の內幕まで御存じの君が、今だに○○を出してくれぬとは實に御うらめしく、每日袖をぬらし又○○○の事を思ふては○○○○をぬらし居候

飯田の大人が不相變（コレハシタリ）例の如く（イヤまたしまつた）會費の事を御不服のよし　何が扨夫ほどの境界なれば　强迫手段を以つて出せといふにあらねど　書生の身分で十錢は大金とかいはれたそうだが　コレハ少し御言葉とも不覺　かやうな嫌みは勅使松波大納言の面前にてのたまはずとも　ズット尾﨑のやかたへ御出仕ありて　胸中つゝまず語られよ　野暮に他人がましい所爲は　毛虫と共にきつい嫌いさ

ア丶丸岡氏ヨ今本社の金融の有樣は椨の葉陰に雨もりて　寒さにたへずなく梟のポロッポ〳〵（ナンノ事だかチットモわからねへ）

。。。

紅名刺の通ふは其後如何せしや　コレモ音沙汰なし　ア丶世の中のまゝならぬは　月に村雲花にはあらし　ヘテ何とせうどうしやうぞいなア

新年課題の義につき御面談申度事有之候間御來臨有之度待入候

其節文江子御同道にて不平の話談も承りたく　ア丶兎角丸画黨の理屈にはおそれる　其後は久しく君の愛嬌澤山なおかほも不見、戀しこいし川の美少年たまにはきたまへ〳〵

思案外史より君へはよろしくとも何ともいはぬ　アクチーフに逢つたら僕が達者でいると傳へてくれたまへ、この音信を聞いてニ

ヤリと笑ふ顔が見たいな

まろ　岡九花子

紅葉山人

樂屋落ちばかりにて、思ふさま悪戯たる書様。硯友社創立當時の内幕見るが如し、文中楢の木蔭梟とあるは、この頃自分の新體　中幾度となく楢の木と梟を擔ぎ出したるよりの惡洒落、紅名刺とあるは前田香緣が小指ほどの紅色名刺を作つて、獨りよがりに振撒きたるをいふ「月に村雲花には嵐」云々は、同じく香緣の樂屋落ちにて子が「花月の友」の文中是はまた毎回ともいひ度きほど「月に村雲」を繰返して、そりやまた村雲が出やがつたなぞといふ始末に、遂に香緣の通り名となつて、昨日久し振でむら雲がやつて來たよ。紙入れを掏兒にやられてネ、奴め大に凹んで居たつけ錢はたつた二十七八錢だが例の名刺がまだ四五十枚あつたとさ村雲めひどくしよげて居つたよなぞと當時社中の名物男なり、最後にあるアクチーフ云々は、是は紅葉と自分との秘事、天機は漏らす可からず。

第拾壹集は明治二十年一月の出版なり。新年の初刷なれば社中課題を撰んでこの集に掲ぐ。美妙の質屋の庫開き。自分の書生の初夢芳韮山人の赤本の筆初め、紅葉の双六の初旅、煙波山人の老人の若水、思案の花街の初烏等あり。

此卷より街談巷說の欄を設く、連中が新著の批評をかき集めたるものなり。紅葉この欄の主事たり。

明治二十年六月第拾貳號出づ、漣山人眞如の月なる小說を掲ぐ。子が我樂多紙上の處女作なり。自分こと翠窓漫筆として短篇小說を試む、また美妙が芝區のさる茶舗より依賴されし引札を掲ぐ。紅葉が小間物屋の文とひとしく引札としては美妙の處女作ならんか。

茶店開業の吉條

わが庵は、都の茶摘み午ひつじ、申とり戌亥子丑寅、宇治正眞の品物を仕入し上に猶もまた、目を皿にして葉を撰み、骨を折りて細枝を拾ひ、すてるがごとき廉價をもて、驚きまゐらすのみならず、今日夕暮端書をもて命付けさせたまひなば、翌日の朝には

時刻たがへず。必ず送りまつるべく、將又今日の朝程に命付けさせたまひなば、黄昏までには進らする規定を取りて、半日閻とまで呼べば、是を記章とみそなはし、玉露の惠みいと濃茶、煎茶にあらぬお情けもて、家内の者の身は粉茶になるとも、挽茶の引もきらぬ愛顧の程を、願ひまつると主人に代りて、湯ざましの口幅廣く言ふものから、さしも急須の口から出るまゝかきつけたるには候はず。

美妙齋主人誌

芝區半日閻

またこの號に紅葉が南山子の戲號にて北里稻本樓の名妓、白露の死を悼むの文あり、揭げて予が當時の戲文を示す。

一筆回文

明治廿歳の更衣月、北里稻本樓の白露太夫、閻王に請出されて劍の山の別莊に赴く、南山子素見數の子とともに之を大門に見送つて告げて曰く、つれない哉おいらん、此處を去つて何處へか行く、まことに人間の極樂淨土、生れながら歌舞の菩薩と崇められ、河東一中の妙音に天樂の總まくりを聞き、大盡佳客の一座に金色の惣花を降らし表には一切の野暮を成佛せしめて、更けて逢ふ夜の裏二階には、渴仰隨喜の善男子に逢ひたる。紫雲緋鹿子の三ツ布團、いつしかぬけて行く其裾をとらへんにも、腰から下は寂滅爲樂、家業夢中の樓主大事大悲の聲を擧げ、遊子とろけたる魂を中字に飛ばす。今さら何と千部の讀經も甲斐あらむや、われ即ち野暮の口から意氣過ぎて曰く、現世は川竹の流に沈むも、未來は必ずうきアがれ

蓮の葉のうてなに乘らん心にて

けさ白露は玉となりけり

拾參號は明治二十年七月の出版にして、更に古聞新報の一欄を置き、伊波傳毛の記を揭ぐ、當時は是に續きて他の珍書奇籍を登錄する積りなりしなり。月の舍圓入社す。この集中紅葉松岡緣芽に代つて梅當中村福助の初めて名代に昇りたるを祝せし文あり。こは松岡が唐紙へ墨梅を描きたるを、紅葉が贊せしものにて、いまも同人方に珍藏するならん、

文に曰く

賀中村梅蕾上名代詞

福ら雀むら竹の中村福助丈、俳名によふ梅の莟の若きより、玉莛の花形に薫りを傳へ、仙骨の手振に自然の妙をそなふ。されば柳さくらのある中に都ぞ春の錦繪は、たゞこの花のやさ姿に、洛陽の紙價お女中衆の心と共に狂はんとす。今や舞臺功なり名代へ上る。アヽ後世恐るべし。豪勢踊るべし。

明治丁亥六月吉日　　代劇雅堂　紅葉山人

明治二十年十月發兌の拾四號に、煙波山人初めて眉山人と改名し、思案が信州行を送る一文を草す。此時より以後文庫中の戯文は、いつとなしに眉山が一手專賣となりて、文庫紙上の呼物となれり。

拾五號は同年十二月の出版にして、美妙この號へ花の茨茨の花なる短篇物を掲て、是より以前に美妙は外國文の談話語と文章語との一致を、國文にも應用して見んとの意見を時々自分等に相談せしことありて、働詞の變化語尾の構成法または擬人法其他外國文に於るパンクチユエーション等を、何とか巧に應用せんと苦心經營したる結果、極めて短篇物一二を試みたるも、何分語尾の構成法不充分にして、且つは創造者自身にも書馴れ耳馴れざる爲め、「……であつた。」「……した」「……面白かつた」なぞとしては、耳に荒く響き又極めてぞんざいなる獨語の樣にも聞こへ、「……でありました」「……しました」「面白ふございました」と叮嚀に書下せば、冗語多くして甘たるく筆に力なき語勢となる、幾度か訂正考案したる結果僅に從來の地の文と言語とを七分三分につきまぜ、それに歐文の「—」「!」「?」なぞを加味して、僅に成效し得たるものがこの花の茨の一章にして、予は之を言文一致體と稱せり、兎に角從來になき文體なれば、忽ち世人の注意を促がし、殊には予が奇才を從横に振廻はしたる結果、其名は一時に煥發して、忽にして予をし

て文壇上に將旗を得せしめたり。

この四五集自分は專ら力を新體詩に用ひ、追つては之を以て名を爲さんとするの念燃るが如く勉めて創造のものに向つて筆をつけんと、苦心さながら狂せるが如きものありし、當時の作にして今より之を見れば、幼稚にして抵劣なる、自ら呆るゝの外なきも、此時代に於ては美妙にも問ひ、紅葉とも談じ、苦辛殆んど眠らざりし夜もありしなり。

本號新入社員に立花屋蕉（渡邊鄰之助）麻溪居士（喜多川金吾）香夢梅綠（松野貞三）あり。

明治二十一年二月の十六號に、眉山始めて魂膽秘事枕といへる小說を揭ぐ、予が處女作也。

此の如く初號より拾六號まで、月々に社員增加し各自の文章も上達し原稿も堆積して思案が當時の口癖にはあらねど社運いよ〳〵盛大なるに、人もわれも勇み立ちし折、誰言出せしとなくかく同好の士にのみ頒たんよりは、思ひ切つて世に發賣していかゞ、此位なればまんざら賣れぬ事もあるまじ、印刷代紙代の實費さへ收入あればそれで申分なし、原稿料などはまだ望むべき限にあらず、いへば道樂半分のめい〳〵の作を、假にも世人が錢出しても讀んで吳れれば難有きことなりと、この議まとまりていよ〳〵發賣することになり、明治二十一年の彌生、改めて其準備に取かゝれり。

さていよ〳〵發賣となれば、人の出入も從來の如く社員ばかりにもあらず、諸方への往復やら製本の取扱發送やら、とても是迄の紅葉が三疊の書齋にて濟むべきものにあらず、然るべき編輯所が第一の入用との議に、さらばと然るべき家をと問合せたる結果、神田神保町翁屋（主人の本姓は安川政次郎、愛たい道士と號して花の雲、ポマドンヌール、ハンドコロンなぞ化粧品藥種を賣る）の周旋にて、其向側の煙草屋の二階（此の煙草屋現今銀座に在る菊木商店の前身なり）を借受る相談纏り、何月何日各自机一脚を用意して、新編輯所へ集合せよとの廻狀を廻せり。

扨いよ〳〵引越の日となれば、何がさて待ちに待ちたる社中一同、一刻も早く編輯室に机控へて筆採つて見んと思ふ悅しさに買調へたる机壹脚、原稿用手文庫提げて、横手の路次よりぞろ〳〵と入り來りたるは紅葉思案、漣眉山香夢樓

麻溪、自分とも合せて都合七人臺所より二階に登りて八疊敷のひと間、壁に向ひ窓に向つてづらりと机並べて、手文庫屑籠少さけれども參考書函、煙草盆揃へて肩怒らしたる爲體、天晴いづれも當千の驍將と見えて、朝より暮方まで、暮れてより夜十二時近くまで、入替り立替り買物に出る、書籍取りに行く、活版屋と談判する、發送集金方と議論する、駄洒落る、惡戯る、臆推しをする、立廻りをする、煎餅餅菓子は勿論蕎麥を持込ませる。天どんは喰ふ、すしをあつらへるといふ始末に、肝を潰したるは煙草屋の主人、夜半近くなつても鳴の止まぬ始末に、堪りかねて周旋人安川方に馳付け泣出しそうな顏して訴へる樣は、今日お貸し申して今日此樣な事申して出まするは何共申譯もござりませんが、何ともはやお話にもなりません御混雜の御樣子で、あれでは私共商買が出來ませんで、初めは皆樣が何かお書物なさるといふ事でござりましたから、どうせ明いて居るものでございますからお約束はいたしましたが、あれでは柔術か相撲のお稽古でもなさいます樣で、實以て凄まじい次第でござりましてそれに其間には何かしきりに激しい御議論もございまして、それから組打でもなさいますのか、どしん／＼と家鳴がいたします。その響で天井裏の鼠糞や煤は落ちて店の品物の上は汚れますし掛てある帽子が落ちますやら、時計のふんどんが止まりますやらそれが濟むと一度にわあッと雷樣が落ちた樣なお笑聲で、店へお出になりましたお客樣も呆氣に取られて、二階裏をながめてお居なさいます始末で、とても商賣も何も出來た譯のものではござりません、そして實は私は生來頭痛持で、時候の變り目なぞはいつも難義いたしますに、今朝から只今まであのお賑かさで、つむりも破れる樣に存じまして、寶丹や即效紙もとんときゝめがございません樣な始末で、誠にはや今朝お約束申したばかりにすぐお斷り申しては何共恐れ入りますが、そこをどうか貴方樣からよろしい樣にお話下さいましてと、平蜘蛛のやうになつて泣くばかりの嘆願に安川も氣の毒になり、それではとてく／＼やつて來て紅葉に話すと、例の向ふ氣の紅葉忽ちむくれ返つて、ふてへ事を言ふ爺だ、承知で貸して置いて騷しいとは何だ、そりあこつちは若い者ばかりだから串戯もいへばふざけもする。ちつとやそつとどたばたする位はあたりめへぢアねへ

か。あの藥罐頭が破れるなんぞと生意氣な事をぬかしあがる。そんなけちくせへ家に居てくれたつて居るものかと、ひどくいきり返つてたんかは切つたやうなもの、此方の騷ぎのひと通りでなかつたは銘々承知之助なれば、さあ〳〵出ろ〳〵。居てくれたつてもう居ねえぞと捨せりふだけは至極えらそうなれど、實は大凹みに露次口から机と手文庫屑籠をひつかゝへて、またも飯田町の紅葉方に其晩の中に舞戻れり。

さらぬだに手狹き尾崎が書齋に、とても七人の膝を容るべき方法とてなければ、彼處此處と探したる結果、九段中阪上活版業共益社の向側に、一軒の空屋ありて、右隣は倉庫左隣は塀に仕切つた一軒建、是れこそ屈强今度こそ二階下から小言いふ老爺も居ず組打をやらうと刺違へやうと尻を持込む近所もなし、尾崎石橋の中央に位して活版屋とは向ひ合なり、是より屈强な處はなしと議一決して、店借人は石橋助三郎店受人が尾崎德太郎入口の格子戸に幅五寸長さ尺五寸程の硯友社の木札を掲げて、玄關の三疊は應接間一脚子の卓と椅子一二脚とを石橋方より持來りて體裁を飾り、新聞雜誌なぞ備えて來客の覽に供へ、其奥の六疊と臺所は、頓と用なければ玄關の障子を〆切りたる儘鼠とのら猫の遊場に任す、玄關より右手段梯子を登れば二階は三疊と六疊、此處硯友社の本城にして、編輯室ともなり倶樂部ともなり、腰推し腕相撲の道場ともなり、團子蕎麥鮨の競食場ともなり、西鶴シエキスピヤ三馬京傳デツケン金聖嘆硏究所明治文壇の檜舞臺文豪詞宗の梁山泊と自稱す「今夜君あすこへ行つて見やう。一寸乙なのが居て材料になるよ」なぞと飛た祕密會議の議場ともなつて、硯友社第二の發芽地とも云ふべきものなり。

まづ六疊敷の中央には思案方より持込たる古毛氈を敷き、机六七脚置並べて中央に火鉢ひとつ炭取壹個、積重ねたる原稿紙古雜誌の數々、壁には挿畫の原版原稿の切抜なぞ處嫌はず貼付けて、捨ても〳〵盡ぬは原稿の書屑なり。此中まづ目に付くは社員當番順の繰札にして、鴨居に無雜作に釘打付て左の如く掲げられたり。

月曜（紅葉）　火曜（漣）　水曜（思案）

木曜（九華）　金曜（眉山）　土曜（月の舍）

社員總出の時もあれば鼠一疋居らぬ、空巣の折もあり、此外平常は喜多川瓶溪宿泊して、前記當直員の外――折々來訪するは美妙、多田漁山（最初古木山人）澤田雖錢、池田氷山、安倍春帆、前田香緣の諸子、文庫編輯係左の如くに分ちたり。

小説類（社幹）　紅葉、美妙　川柳狂句　紅葉　新體詩（會計主任）　九花

都々一端唄（社幹）　思案　狂文　眉山　（庶務）　香夢樓　月の舍　漣　瓶溪

この編輯室の狀態、美しく記せば紅葉が紅子戲語の通り、露骨に物語れば煙草屋の二階を今一層はめをはづしたるもの、集るときは十八人十五人、膝も入れ難き折あれども、出拂つたる後は鼠より外に何者も居らず然も外の格子は明放しなり、玆に殘る逸話としては、其年の夏依田百川翁初めてこの編輯所を來訪せられし折、思案一人二階に素裸にて起稿中なりしに、翁は玄關より幾度となくお賴申すと案內を乞はれたるに聞として聲なく、留守かと思へば駒下駄の脫捨てあるに扨は晝寢最中かと今度は大聲にお賴み申すと呼ばれたるに此時耳に入りたる思案、是も亦例の新入社員の訪問かと机に倚りたるまゝ「えゝうるせへな、誰だか這入つて來たまへ」と怒鳴りたるに翁は眞面目に「はゝアではお二階へ參つてもよろしうござるか」と其聲の餘り勿體振つたるに少々薄氣味惡くなりたる思案急に座を立つて、二階の欄干より見下す、下よりは見上げたる刹那、翁には思案の顏は見えずして只欄干に懸りたる大睾丸、かしう玉の中乘の如し。思案はまた意外にいかめしき錦町の老先生なれば、座に歸りて浴衣引掛る間もなく、其儘べたりと座つて下つ腹に古新聞を乘せ改まつて新時候の挨拶、やがては談は文藝に移つて其日は歸られたるが、後日翁は紅葉に向つて、此年になるが二階から睾丸のお出迎ひは初めてであつたと、然も是に類似の失策は殆んど每日の出來事なりし。

かゝる有樣なれば、竹の皮剪餅袋紙屑なぞ、皆西隣の窓下へ無雜作に掃落して三尺餘の塵塚となれども、誰あつて取

捨るものなく、隣家の下座敷の窓がこの紙屑と芥屑に推つけられて夏になつても開くことが出來ず留守居の麻渓が饒談を喰ひたるも翌年の事なり。臺所は鼠恐ろしきまでに堆く猫犬の足痕班々とし、裏庭には草蓬々として都にも鄙の眺ありなど風流がる。差配人ある時紅葉に向つて、お宅では時々大勢様がお集まりになつて、夜分も遲くまでお賑やかでございますが御商買は何をなさるのでと聞くに、はい別段商買と申して唯連中七八人の道樂仕事で、この原稿紙に書きましたものを雜誌にいたして賣りますので、それが一册貳錢づゝでと言へば大屋けゞんな顔して、へゝいそれは〳〵、然し何しても御繁昌で結構でございますと、當時「何しても御繁昌で」といふ流行言葉出來て、「この節ばんは？」「麻渓が眞美人の原稿さ」「いよまみ六の大將何にても御繁昌で」などゝ言つた樣な樂屋落ちとなりたるなり。當時の狀況は前記二三の外、尙今も思出して話し合つては腹を抱へる珍談いくつとなくあれども、さまでは玆に省く、只玆に當時の美事として記したきは、紅葉思案は勿論社中の面々、一文一章を草する每に甲に問ひ乙に相談し、互に批評し添削するのみならず、出來上りたるものを朗讀すること大流行にて、讀む方も樂みなれば聞く者も悅しく、まぜつかへすもあれば駄洒落もあり、論難かうじて原稿擲り出して取組むこと珍しからず、さりながら此習慣は社中の者をして層一層句を練り想を凝らすに導きたるものにて、今も忘れず面白かりしは紅葉が美妙の夏木立を評せしとき、思案が風雅娘を評せしとき身振り抑揚可笑しさ忘れられず。且つ當時は、社中の面々世間に恐ろしきと思ふものなく、手當り次第に斬倒せ文壇の白柄組はこつちの事だといふ意氣組なれば、先輩も何もあつたものにあらず喧嘩買なら何時でも來いと、招牌かけた始末にその面白さは堪つたものにあらず、世間も亦呆氣に取られて、硯友社の名はいつか響きて我樂多文庫は兎にも角にも、大阪京都は勿論のこと、名立たる都市へは隈なく行渡る樣になりぬ。

いよ〳〵發賣となりて、明治二十一年五月發兌の分を、返り咲きて第一號とし、發行日は十日十五日の月二回、代價は壹部僅に參錢、發行兼印刷者は尾崎德太郎、編輯者は石橋助三郎、卷中の部門は舊の如く、心織筆耕、千紫萬紅、飛

花落葉、巷談巷說、森羅萬象、古聞新報、記事の種類は些も變らず、卷頭に揭げたる思案の祝辭は左の如し。

卷頭の詞

鮫橋に光らかしたる純金の目貫は、空しく煙草入れの金物に太平の腰の物を飾り、切腹複讐はたゞ劇場に其形を殘すのみ、明らけく治まる君が代の御恩澤四海に洽ねく聖世に出るてふ鳳凰は、印刷局の棟に鳴き、麒麟は輦車の前に馳せ、かゝる目出度き御世に相生の松を謠ふて、ヤアハア腹皷をうつ〳〵と暮してんはげに恐多し。何とぞして御國の爲め君の御爲前に馳せ參じ先祖重代朱塗はげ藤の强弓に、十三文一ト束きり〳〵ツと心は矢竹にはやれども、陣幕は夜具風呂敷の時節、餘義もなく劍戟に代ふるに筆鋒を以てし、文學の花々しき一合戰つかまつらんものをと、五ヶ年以前、狂文の羽檄を四方に飛ばして、同好の勇士をかり集め、始めてひとつの冊子を編み、名を我樂多のわれ面白、世にもおかしくつくりなし、人手に掛るもいたはしと、われ等自ら筆を取り、字は古篆の讀みにくゝ給は丹緑風にあどけなく、夫さへ愛翫の種となりて、次號に待戀の果敢なきを恨み

前號に逢ぬ戀の思をなやませたもふも多く、心二ツ身はひとつ、止むなくて九號より版行の雜誌となしぬ。紙數社員と共に增加し、評判よしと夕立の空、雷名轟き渡つて世間に似た山萬歲樂を唱ふ社員、御親切に異見して曰く、昔の名妓が張を學び、金錢づくで自由にならぬとは、當世でなき心中立なり。これは足下とも覺へぬオホン諸事やつがれに委せたまへと、一方ならぬ御世話に耻かしながら、番茶も出ばな鬼も十七號より、また若やぎてヘイ今板はと、一號に返り咲き、縹緻よりは腕達者と、案外の御愛顧に、社幹もちよつぴり乘が來て、淺草ならぬ深草もどき、百夜といはず千萬號の末長く、御引立あらん事を、社中一統に代りて

硯友社函入の若旦那

思　案　外　史

ウー自惚つて曰す

また此號に硯友社々則を揭ぐ、是れ社が創立以來初めて世間並に規則らしきものこしらへたるものにて、日に月に社員も增加し、投稿の規則はどうなつて居るの、入社の手續はどうするのと、入社の手續を問合せ來ること頻繁にて、そ

の小面倒にたまらなくなり爲に紅葉をつとつて一夜づけに酒落のめしたるものなり。此稿出來上りたる翌日眉山思案自分等を集めて朗讀「この規則書はどうだ、眞面目に問合せた連中はさぞ驚きやがるだらうなあ」と、リッチモンドの荒切りくわへながらの大氣焰、其社則に曰く

硯友社々則

一、本社は廣く本朝文學の發達を計るの存意に有之候へば、戀の心を種として艶なる言葉とぞなれる都々一、見るもの聞くものにつけて言出せる狂句の下品を嫌はず、天地をゆさぶり鬼神を涙ぐませるなどの不風雅は不致とも、せめては猛き無骨者のかどをまるめ男女の中をも和らぐ事を主意と致候

但し按摩同席にて讀む樣な投書は、一樹の畑一河の水といたすべく候

二、右の主意に御左担被下一臂の力を借したまはむとの篤志の方々は、男女老若貴賤を論ぜず、社員たる事御勝手に御座候

三、社員は社費として毎月金拾錢を其月の五日までに御納被下度候

四、入社したまはむとならば、社費に添へて住所姓名雅號印鑑御寄送被成下度用紙は奉書にて幅三寸長五寸

五、社員は文庫發兌毎に只об五分にて一部進呈可仕其他いろ〳〵德分になること有之候へ共詳にせば天機を漏らすの恐れ有之候まま委細は御入會の上知る人ぞ知るサネ

六、本社は小說の起草、劇場の正本、小說の反譯（潤筆は一字に付千金づゝ申受候）廣告の案文、歌句、戯文の添削批評等の御依賴に應じ可申候但し建白書の草案、起稿、其他政事向きの文書は命に替ても御斷り申上候

七、世の著作家にして其著書を本社に寄せられなば、本社は街談巷說に其批評を揭げ、倚森羅萬象に於て相當の廣告可仕候

八、全國の新聞雜誌等にて本誌を批評し其一葉また一部を本社へ寄送せらるゝの勞を賜はば、本社は引續き次號を進呈可致候諺に曰く餌ヲ釣ルレ謂フこれこの所謂にては無御座候

九、こま〳〵敷ことにつき御疑問の廉は本社へ願度今回はしやそくの間に合せと洒落て條々如件

明治二十一年五月　硯友社

また本號に廣告案文潤筆直段付あり、當時はこの直段にてたまには頼みに來る者もあるだらうと信じたりしも、情けなや錢出して頼みに來る者一人もなく、この廣告何の效能もなかりし。

廣告案文潤筆直段付　（引なし）

一、一字より百字まで　金十五錢
一、百字より二百字まで　金廿五錢
一、二百字より三百字まで　金卅五錢
一、三百字より四百字まで　金四十五錢
一、四百字より五百字まで　金五十五錢
一、五百字より千字まで　金壹圓

右は仕入向きに御座候、読向きは精々念入れ潤筆可仕候

以上　月　日

硯友社廣告案文部

何から何まで洒落のめしたるものなれども然しこの廣告料を定むる時、社中の面々額を鳩めて、それでは高いいや安いと、議論沸騰、はては座り相撲に相手を捻ぢ倒して、ぎう〳〵言はしてまでもやつと取極めたるものが、本誌發兌中この廣告料によつて唯の一人も依頼者なく一文の収入なかりしは大笑なり。且つは此廣告案文の直段付けといひ、前の社則は勿論一から十まで、何でも彼でもと巫山戯て見たく、果ては警視廳への出版屆も、「一寸乙な文句で驚かして

くれやうか」なぞと、なにかにつけて面白くて堪らぬ世の中なりしなり。

本號には社員連名調あり、飯田町側神田小石川側、本鄕側下谷側、日本橋側芝側駒場側、淺草側本所側、牛込側地方側として、合計八十五人の名を列記し、又社友として左の先輩の名を掲げたり。

土子笑面
饗庭篁村
文字三味樓
南新二
礫川喜望
痴囊子

然して社幹は前の如く美妙齋、紅葉山人、思案外史



我樂多文庫のポスタア

畫工は劇雅堂綠芽、大澤積翠、夢栖舍幻の三名なり、紙數總て六十頁附錄六頁を添て京傳の伊波傳毛記を掲け、社中よりの祝辭を掲ぐ、川上眉山が祝文左の如し。

我樂多文庫之助吉例暫のつらね

これやこなたへごめんなされう、まかり出たるそれがしは、粹道の水の榮の、初元結の花車づくり、我樂多文庫之助といふ、負るは嫌ひな色若衆、當年積つて十七歲、惚れたらござれなびくべい、風に柳の伊達模樣、大振袖をしぼり上げつらぬく露の玉襷筆のひるまきおッ取つて、今日顏見せの初舞臺、かく文庫の花道へ、揚幕さつて出て見れば、赤本黑本青表紙、さて黃表紙と申せども

いづれも似た山牛可通、魂膽てくだ夏木立、言の葉ばかり茂けれど、花も實もなき取廻し、野暮な仕打の御笑止や、まだうら若い分際で、味噌を上げるぢやなけれども、そも某の生立は、ぎやつと夕や曉から、神祇釋敎戀無常、色の達入れ情の諸分けかんで碎いてかき散らす、腕は自慢の京羽二重、まづ文壇の金鵄を取らん出世の門出に、邪魔立てをする奴原は、筆の命毛あらん限り、なぎ立て追立てまくりたて、大鵬萬里一とはたき、硯の海を通り越し紙屑籠へたゝきこむぞと、こゝ敬まつて申す。

詞友文庫の助に代つて
江戸前の息子株
眉山人のぶ

また此號に掲載する小說は、五月鯉（漣山人）風流京人形（紅葉山人）情詩人（美妙齋）にして千紫萬紅中に紅葉か春亭九花立花を學びて頗る下手の名あり一日訪ひし折桃の花活けたるを見るにためたる枝枯尾花の樣にありければそれに紙を結つけてかくなむ。

いけやうを見るにつけても馬鹿め／＼桃とは言はじ薄生たり。

是は前文にある通りある日自分の書齋に來り寐ころびながら、床に活たる桃を見てしきりににや／＼笑ひ居たるが、むゝいゝはいとむつくと起上つて半紙を一枚くれといふ。それを短冊にきつてさら／＼と書付け桃の枝に括りつけたる句かと見ればこの罵倒是で昨日からの溜飲が下つたとむしやうに笑ふ。しかも此惡戲は此場限りに止まらずして、文庫新刷後受取つて見れば此一節に自分は二度喫驚是から後は不思議に可笑しきを「やつぱり九花か桃でしやう」なぞといふ樂屋落ちさへ出來て、癪に障ることおびたゞしかりし、此樣な惡戲は後にも類多く、いつも紅葉か思案が發當人なり。次號はその年月廿五日の發兌にして、小說戲文新體詩前號の通り、當時自分は新體詩專門にして、拙劣ながら每號一篇宛掲げざることなく、小說には未だ筆をつけず、此號眉山は戲文一向に熱中して本號にも「戀」の一篇あり。子が才筆漸く煥發して、我樂多文庫に於る呼物のひとつとなれり。

（未完）

歐化主義及び國粹主義の硬文學

―政教社と民友社の人々―

高須芳次郎

一

小說、戲曲、詩歌及び文藝評論のほかは一切文學的價値がないやうに、極めて冷淡に看過せられる今日の文壇では、明治二十年前後に勃興した一種の硬文學――政論、歷史、傳記、一般時論――が丸で別世界のもの丶やうに思はれよう。が、當時の文壇では、今日のやうに偏頗な考へを持つて、政治文學、史傳文學に對するものがなかつた。廣い胸と公正な精神とを以て、一般文學に對し、割合に親切にそれを鑑賞し評價した。それであの頃の文壇は今の文壇のやうに窮屈でなかつた。單調でなかつた。倦怠してゐなかつた。概して勃々たる生氣が、どの方面にも漲つてゐたのである。

小說、戲曲、詩歌、文藝評論以外のものには、創作的價値がないと見なすやうな惡傾向は誰れが定めてしまふのであらうか。歷史にせよ、傳記にせよ、一般時論にせよ、さうした形式の下に眞に創作的生命が宿つてゐるならば、それを小說、戲曲同樣鑑賞し評價することは少しも差支えないことと思ふ。バビニが『基督傳』その他人物評論によつて文豪の地位を占めるに至つたのは內容上、創作的生命が充實してゐたからだ。が、もしそれがわが國の文壇であつたとしたらバビニの『基督傳』その他の人物評論は存外冷淡に看過されて、或は不遇を嘆つたかも知れないのである。バビニが

日本に生れなかつたことは、彼れの幸福だ。

話が少し邪徑に陷つたが、兎も角、明治二十年前後硬文學は新興の勢の下に、きびきびした態樣を以て現はれた。それは當然、時代の要求に驅られたのであるが、特に歐化的傾向が、衝動的に硬文學の新誕生を逼出したのである。あの時分の歐化風潮は、どの方面にも旺んに漲つてゐる。歐米の舶載品なら、何でも宜いやうに思はれ、歐米人種は日本人種よりも遙かに優越してゐると過信せられた。「文明開化」の語は、今日の「文化」の二字以上に時人の耳を快く刺戟しまた彼等を誘惑した。明治二十年一月の『時事新報』を見ると、寄書欄に「門飾りの改正」と題して「我國の習慣門松と唱へて嫩弱なる小松を根より切り來りてこれを飾り、又荒神松と稱して若松の幹或は心を惜氣もなく伐りて竈に飾るこれ等の習慣は山林の繁茂を妨ること少々にあらざれば、斷然西洋風の飾りに改むべし。」と云つてゐるものがある。また「かなのくわい」の廣告には、左の如き文句が出てゐる。

くわいゐんにつぐ

きたる二十九日ひるすぎ一じより、ひゞやのじんぐうけうはんにおいて、わがくわいのおほよりあひをひらくにつきおよりあひくだされたし、もつともごかぞくがたおひきつれありても、さしつかへなし、たゞしをとこはれいふくか、または、はかまはおりのこと、

矢張、これも歐化的一分流の象徵として見ることが出來る。更に明治十九年九月の『時事』寄書欄を見ると「小僧諸君に相談」と題して「今日の世の中、我々小僧等は、英語を練習せざるべからざるは勿論なるが、玆に困難なるは雇主が一二時間の暇を許さゞると教授所の月謝高價なるとなり。依て一案は同志の小僧百人同盟し、新たに教授所を設け、一日一人一錢宛の割合にて、時間は午後六時より十時迄とし、教員二名を聘すれば、教授所の雜費も間に合ひ、雇主も許可すべく、若し許さずんば、一同ストライキを起して、志を達するの一事なり。何んと小僧諸君賛成あらんことを切

望す。」と云つてゐるものがある。主人が英語學習を許さなければ、一同ストライキを起さうと意氣込んでゐる口吻は、當時の烈しい歐化風潮を裏書してゐるではないか。

凡そ當時は歐米文物が、ひどく一般の異國情調を煽り立てた時代で、英國ボオツマスのイイストマン海軍豫備校生徒を募る廣告をわが新聞に掲げ、マアヤアと云ふ伊人が「イタリヤ王國世界第一チヤリネ大曲馬獸苑」云々の廣告を出してゐる。或は東京牛乳倶樂部會員を募集したり、或は英國魔術博士と稱するヱエチノアなるものが歡迎されてゐる具合などを見たりすると、歐化色彩の濃厚であることを感ぜずにはをられない。日本人種改良、內地雜居などが問題となつたのもこの時分である。『女學雜誌』が特に「兼ねて歐米へ注文いたしたるクインウーマンスヂヨウナル、レデースブツク等取混ぜ十種到着いたし候付、向後誌上に海外女事の一欄を設け、尙外に珍奇の論說を抄譯すべし。」云々と廣告したのも、この頃のことである。かうした風潮の一面を代表して生れたのが『國民之友』である。

二

當時の雜誌界に最も淸新な空氣を注入した『國民之友』は明治二十年二月、民友社から「嗟呼國民之友生れたり。」と稱して出た。この叫びは、その頃の青年に強い衝動を與へた。『國民之友』主筆德富蘇峰氏は、最初、熊本洋學校に學び、後、京都に遊學して同志社に入り、そこで新島襄氏の許で、クリスト敎的思想の洗禮を受けたのである。そして氏は同志社を卒業すると、歸鄕して大江義塾で學生たちに英語などを敎へ、傍ら自己敎養に力めた。それから間もなく、氏は『將來の日本』と題する文稿を携へて東京に來た。その際、島田三郎、田口卯吉氏らにその文才を認めらた。『將來の日本』を出版して、一躍文壇に於ける盛名を得たのである。氏が『國民之友』の發刊を思ひ立つたのは、氏の新思想の醱酵にもよるが、一つは最も早く文壇にその才を認められたによるであらう。

當時、『女學雜誌』が "Woman's Magazine" と自稱したやうに『國民之友』は "Nation's Friend" と稱した。かう云ふ風に英語で雜誌の題名を標することは、恐らくこの二雜誌などから初められたのであらう。『國民之友』は每月二回、第一及び第三金曜に發行され、その第一號は發行部數（賣高）七千五百部に上つた。第二號は五千部、第三號は五千五百部、第四號六千部に上つた。そして第八號の如きは七千八百部に達したのである。まだ敎育が今日のやうに普及しなかつた當時に於て、平均七千部（後には一萬部）の賣高を有したことは寧ろ空前であつたらう。その標語としては、「政治、社會、經濟及び文學の評論」とか「新日本文學の一大現象」とか、「政界を照らすの燈臺なり」「改革を報ずるの曉鐘なり」とか云つた。それらの語が『國民之友』の表紙を飾つてゐたのである。

さて『國民の友』の主張は何處にあつたか。それは平民主義を鼓吹する上にあつた。元來、蘇峰氏は、ヨオロッパの新思想、殊にクリスト敎的の思想に共鳴してゐたが、その時分、政府が執つてゐた貴族的歐化政策には、寧ろ反對した。日本の文化を歐米同樣に速進するには、ひより、政府の力のみを以て爲し得べきではない。進んで國民全體の力、一般民衆の力によらねばならぬ。卽ち平民の協力に待たねばならないと云ふのが、氏の考へであつた。新文明を漸進的にわが日本に築きあげるには、當然以上の如き方針を以てすべきであるといふのが氏の意見であつたと思はれる。氏の平民主義の提唱はさうした見方から生れたのである。

そんなら平民主義とは何か。竹越與三郎氏は民友社中の一人として、その意義に言及し「平民主義とは何ぞや。社會の快樂光榮を最も多數の公衆に分配し、併せて社會の責任、義務を個人の上に分擔せしめ、社會の進歩と共に個人の品格を高めんとするもの也。獨り政府に向つて、民權を主張するのみならず、社會の組織を人權の上に措かんとするものにして、社會上に於ては社會共和の主義にして、國家主義と個人主義の調和すべき地峽也。政治上に於ては民權主義にして、各般の階級を聯結せしむるの關鎖也。個人より國民を通じて、自主自立の氣象を押し通さんとするものの也。すべ

ての事につき、自由寛容を主張し、國家を名として、異分子を殺さんとするに反對し、到底國家の進歩は將ち個人の自由發達と相吻合するものなるを主張す。平民主義は、此の如くして一個の人民を信任するが故に、其人民個々の發達、信仰、教育、力量、品格の忽にすべからざるを信じ、一方に於ては、物質的の快樂を撒布すると共に、一方に於ては、國民の精神的品格の揚らんことを計る。」云々と述べた。今日の精密な頭で考へると、それは餘りに茫漠としてゐるが、要するに個人の進歩、自由を伸暢するについて、國家と背戻しないやう、併行的ならしめんとする主義である。そして一面に於て、世界的にひろく自由に物を見やうとする傾向を帶びてゐた。

かうしてその歐化傾向は、いくらか國民的意識を伴ふた行き方の下に『國民之友』で鼓吹せられた。そしてその基調を爲したのは、文學的方面では、クリスト教的思想であつた。また文體の上から見ると清新味を帶びた歐文直譯體であつた。『文學斷片』などを見ると、蘇峰氏が、クリストの愛の福音に共鳴してゐたことがわかる。また思想上、エマアスン、ユウゴオなどにも傾倒し、文章の點では、マコオレイなどに私淑したかに思はれる。

さて氏の初期の文章は「嗟呼改革の健兒たる諸氏は、或は煩惱の夢に驚かされざる幽靜なる黄泉に於て安眠し、或は禁毀に於て顧問官となり、元老院に於て評議官となり、或は世襲の爵を給ひて貴族に列し、皆天恩の優渥なるに浴し、優游殘年を樂み、以て安息なることを得たり、然らば則ち改革彼れ自身も亦た安息することを得べき乎、曰く、否、改革よ、改革よ、汝は決して安息なることを得ざるなり。」と云ふ調子であつた。かうした直譯風の生硬な文章が、當時その新彩を有する點で若き人々の間にひどく喜ばれたのである。

三

蘇峰氏の『國民の友』に對して、別な使命の下に明治二十一年四月に生れたのは『日本人』である。それは世上の滔

々たる皮相的歐化に大きい不滿を感じ、國粹顯揚のために出たのである。『日本人』同人は政教社を組織して、二十一年三月下旬、その宣言を新聞紙上に公にした。彼等はそれに於て「當代の日本は創業の日本なり、然れば、その經營するところ、轉た錯綜湊合せりと雖も、今や眼前に切迫する最重最大の問題は、蓋し日本人民の意匠と日本國土に存在する萬般の圍外物とに恰好する宗教、敎育、美術、政治、生産の制度を撰擇し、以て日本人民が現在、未來の嚮背を裁斷するに在る哉。」と叫んだ。その同人は三宅雪嶺、志賀重昂、井上圓了、島地默雷らすべて十一氏であつた。

その初號(四月三日發行)には、志賀氏の「日本人の上途を餞す」井上氏の「日本宗敎論」などが掲げられた。そして歐化風潮に反抗して「猥りに歐米を模倣するなかれ、わが國粹はこれを保存せざるべからず。一も二もなく外邦の文物に心醉して、われの長所、美所卽ち國粹を抛棄するは甚だ不可なり。」と主張した。三宅雪嶺氏は『明治思想小史』のうちで右のことに言及して「明治二十一年、神武天皇祭に一雜誌が出て、國粹保存を唱へた。幾干もなく、保存といふの不適當なるを感じ顯彰と改めたが、既に國粹保存の名が廣く世間に傳はり、その儘に通用することに成つた。これ明かに當時の委曲を知つて出たのではないが、政府の外柔內硬に反抗し、外政內政共に國家自らの立場を考へねばならぬと云ふに思ひ及んだのである」。と云つた。

以上によると、『日本人』もやはり『國民之友』と同樣、政府の施設に慊らないで生れたのであるが、思想上一見、『國民之友』と殆ど直反對にちかい傾きを示してゐた。そしてその誕生した有力な動機が政府の軟的外交や歐化政略に大きい不滿を抱いたところにあつた。これを『國民之友』が歐米の自由、進歩の思想を民間に鼓吹するのを有力な動機として出たのにくらべると、好個の對照を爲してゐた。が、今日公平に見ると、民友社の人々を率ゐた蘇峰氏は決して國民的意識を無視してゐなかつた。唯歐米の新潮をわが國民に注ぎ込むのに急であつた丈だ。また政敎社を代表した宅雪嶺氏は歐米の新思想を無視したのではなかつた。唯國民的意識を呼びさますのに熱中した丈であつた。けれども二氏に

見る表面の傾向は、必ずしも以上の如く正解せられなかつたのである。蘇峰氏が『國民之友』第十號に「保守的反動の大勢」を論じたのは、それがためであつた。

氏はそれに於て「保守的の反動豈に偶然ならんや。必ず他にこれを激成するものなかるべからず。激成するものとは何ぞや。貴族的急進派の運動これなり。その運動は吾人が詳說する迄もなし。人若し頭を轉じて、昨日の世界を看ば、以てその何々なるものなりやを知らん。……貴族的の急進を排除すべからず。世若し舞踏會を惡んで、併せて男女の交際を惡み、驕奢を惡んで併せて自由貿易を惡み、外人の立法權に干涉するを惡んで、併せて內地雜居を惡み、貴族的社會改良を惡んで、併せて平民的社會改良を惡み、一國の富まんことを欲しては、强迫的の儉約となり、禁過主義の貿易となり、一國の强からんことを欲しては、武斷政治となり、兵隊專制國となり、國權を愛するの餘りは、他國を仇敵となし……日本てふ感情玆に增長して、世界てふ感情玆に減少し、國家てふ理想玆に發揚して、人民てふ理想玆に萎靡し、保守てふ精神玆に生じて、進步てふ精神玆に死せば、わが國は活動力を失ふたる也。」と云つた。蓋し大體に於て穩當の說である。

以上、『國民之友』に據る民友社派と『日本人』に據る政敎社派とは、わが文學の上に全く異なる影響を及ぼした。民友社は啻にわが硬文學の上に新生面を開いたに止まらなかつた。即ち史傳、時論に新味を附與したのみならず、新小說の勃興を促がした。史傳の上では民友社の諸才人が、蘇峰氏の『吉田松陰』と前後して、『グラッドストン』『武雷士』『格武電』(以上德富健次郎著)をはじめ、竹越氏著『クロンウエル』などを公にした。また竹越氏は新しい方式の下に明治の歴史に筆を染め、それを『新日本史』と稱して、上、中二卷を發表した。氏が「新日本史に題す」の一篇を見ると、氏がどんな方針の下に新しい歴史を書かうとしたかが略ぼ察せられる。

氏は理想的の歴史には五個の標準がなければならぬことを述べて(一)史上の人物をよく知るべきこと(二)人物の

心理を解剖すべきこと（三）國民特有の氣質を明かにすべきこと（四）史的現象の構造、變化、發育の順序に注意すべきこと（五）史家は謹嚴な法官たると同時に英靈、高祟の心胸を持つ詩人たるべきことなどを數へてゐる。恐らく、氏は以上のやうな點を考へて、『新日本史』を書いたものと思はれる。それは當時にあつては、文明史的特色を具へ筆勢に活氣があつた。人物評傳に於ても民友社の人々は、史的考證に齷齪しないで、縱横に人物を評し、時代を描いた。そこに新鮮な生氣があつた。この傾きは叙事、紀行の類にも及んで、一體に潑溂とした才情を反映した。

それに民友社のうちには、歐米の小說に親んだ人があつたので、日本にも新しい小說の生れ出でんことを求めた。『國民之友』が夏期附錄として新人の小說、詩歌、文學的隨筆などを揭げたことは、時人に新文學の趣味を注入すると共に、新作家の擡頭を促がすべき機緣を作つた。無論、それには廣告の仕方なども巧みで、夏期附錄が特に一般人の注意を惹くやう、新聞紙上に吹聽したのである。今日の『中央公論』のやうに主要記事の內容を廣告で說明することも亦『國民之友』が始めたのである。そして一方、社中には德富健次郞、國木田獨步、角田浩々歌客、山路愛山、矢崎嵯峨の家、宮崎湖處子、塚越停春樓、その他文學趣味に富んだ人々がゐたので、後來、『不如歸』『武藏野』などが、民友社から出版せらるゝに至つた。それらの中で、文學的著作として、殊に詩味の多い短篇として現はれたのは、湖處子の『歸省』であつた。それは故鄕に對する可憐な情緖を披瀝したもので、その「山中」の一章などは、蘇峰氏も口を極めて激賞したのである。その頃、健次郞氏も『青山白雲』などにをさめた諸篇をぼつぼつ書いてゐた。「夏の夜がたり」などは、氏のよき傾向を早く示したものである。

四

民友社の人々の文學的傾向にくらべると、政敎社の人々は、餘程ちがつた趣を示した。この派は、歐米文學よりも、

より多く支那文學に親んでゐた。三宅雪嶺、志賀矧川氏らの文章は、民友社の文章に對して、漢文直譯式とも云つて宜いほどであつた。雪嶺氏の『眞善美日本人』『僞醜惡日本人』及び矧川氏の『日本風景論』などを見ると、すべて漢文派が文章全體に漲り渡つてゐる。が、さうした豪放な雄健味のある文章が、當時一部の青年間にひどく愛讀せられた。殊にその感情を誇張したやうなところ、男性的、豪傑的な強い物の云ひ振などが、妙に私らを動かしたことを今も記憶してゐる。

それで同じく、人物評傳を出すにしても、政教社の人々は、民友社のやうにヨオロッパの人物を描かなかつた。すべて東洋の人物を撰び、『東大陸人豪傳』と題する叢書を刊行した。雪嶺氏は「冒頓」を書き、國府犀東氏は『文天祥』を書くといふ風で、東洋趣味、殊に支那趣味が濃厚に渦巻いてゐた。それについて思ひ出されるのは、『日本人』と前後して『亞細亞』といふ雜誌が出てゐたことである。それは新聞紙半截大の紙幅で、明治の雜誌中、『太陽』增刊號「十九世紀」を除くと、一番大きい雜誌であつた。執筆者のうちには、伊藤銀月、畑山呂泣氏がゐた。呂泣氏は早く亡くなつたが、短文が非常に巧みで、激越な東洋詩人的感情を抱いてゐた。

『日本人』が思想上に與へた影響は、茲に擡頭しようとした保守的風潮、國粹主義を刺戟して、日本弘道會の再興、日本國教大道社の出現を促がし、『大道叢誌』『弘道會雜誌』の誕生を見た。そしてそれが文學方面に於ける影響は、日本の古典文學を回顧せしめ、その新研究を促がしたのである。『東洋學會雜誌』『歌學』『國文』『明治會叢誌』などは、いづれもこの期に出た。また『日本新聞』が二十二年二月に創刊された。かうして日本趣味が皷吹せらるゝ結果、落合直文、小中村義象氏の『日本文學全書』及び佐々木信綱氏の『日本歌學全書』が二十三年から二十四年にかけて出た。一種の新味ある國文もこの期に出た。それには、落合直文氏らが殊によく活動したのである。

これを文學上から概觀すると、民友社、政教社の人々は大體、時論、史傳に於て、時代の傾向にふさはしい硬文學を

作つたのである。民友社は主として、ヨオロッパ風の進歩主義、平民主義に立脚し、政教社は純日本乃至東洋的國粹主義に立脚し、その思想を宣傳した。そして歴史、傳記を書くにも、民友社派は西洋風の見方、西洋風の書き方を試み、政教社派は東洋風の見方、東洋風の書き方をした。また政治、經濟、文藝などを批評する場合にもやはり、右の趣があつた。後年、正岡子規氏一派が『日本』に現はれ、山路愛山氏らが『國民』から現はれたのは偶然でない。

尙ほ終りに一言して置きたいのは、『國民之友』と『日本人』の體裁である。『國民之友』は論説（社説）特別寄書、藻鹽草、雜錄、批評、時事の諸欄を設け、『日本人』は論説、雜報、寄書、雜錄の四欄を、設けたのである。前者の藻鹽草、特別寄書には、純文學の趣味が豐かであつた。文藝批評なども二十一年夏頃から『國民之友』に出た。ロシヤ文學の風味も梗概によつて早く紹介した。一體に文學趣味が多いので、二葉亭氏の『あひゞき』なども二十一年七月に掲げられたのである。その吹聽廣告に「露國ツルゲーネフの端物小說あひゞきは、浮雲の著者二葉亭四迷君の譯にて精妙を極め、字々金玉なり。」と云つてゐるのも面白い。『日本人』は『國民之友』にくらべると、純文學の味が乏しかつた。殊に初期に於て一段乏しいが、一種の政治文學に於ては、必ずしも貧弱でなかつた。その第十八號は「彈劾號」として、志賀氏の「彈劾の權利を國會に附與するは些害なくして巨益あり」三宅氏の「彈劾の切要なる時あり」など全紙悉く同一題目で滿たし、議會開放を目睫の間に控へた緊張振を示してゐる。硬文學に於ける一種の異彩である。が、新作小說海外小說の紹介では、『國民之友』に及ばなかつた。彼の露伴氏の「一口劍」逍遙博士の「細君」思軒氏の「探偵ユウベル」透谷氏の「宿魂鏡」北邱散士（嵯峨の家）の「流轉」など、いづれも『國民之友』に出た。それを思ふと、蘆花、獨步二氏が民友社から出たのは當然すぎるほど、當然なことで、彼等の宗敎味も蘇峰氏のクリスト敎趣味にもとづいてゐるところが、いくらかあるのを認めざるを得ない。

初期の正岡子規

島田青峰

初期の正岡子規とはいふもの丶、私は居士の生前には遂に親炙する機を得なかつた者であるから、固より初期の子規などを知らう筈が無い、その意味から當時の子規を語ることは、他にいくらもその人があらうと思ふので、こゝには主として文字に殘つたものからその面影を髣髴しようとつとめた。最近出版された「子規全集」の少年時代篇は、私にとつて特に重要な資料であつた。

正岡子規の文學的生活に在つては、明治二十五年といふ年が、なり重大な意味を持つてゐるやうに思はれる。啻にこれまで厭々ながら籍は置いてゐた學校の羈絆から、潔く脫離したばかりではない。子規の藝術なり生活なりを考へる時、常に私どもの念頭に背景として描かれる根岸の生活が始まつたのも此年なら、歿前二日までその原稿を掲げた「日本新聞社」に入つたのもこの年である。子規の生活はいろ〳〵な意味に於て、この年から社會的に其歩を進めたと云つてい丶。私はこの見解の下に少しく二十五年以前の彼れを窺つて見ようと思ふ。

子規を文學者たらしめた第一の機縁——或は遺傳と呼ぶべきかも知れない——は、外祖父大原觀山翁に在つたやうに思はれる。觀山翁が松山の儒宗として一般に尊敬されてゐることは、彼れをして「後來學者となりて翁の右に出でん」といふ理想を抱かしめた所以であり、又翁が八九歲の子規を誡めた「余の幼なる時も汝程は遊ばざりき」なる一言は、長く彼れの腦裏に刻まれて忘られぬものであつたらしい。そればかりでなく、彼れが詩を作りたいといふ願望を起したのも、翁の塾生が朱字黑字相交つた詩稿を持つてゐるのに刺激された爲だと云つてゐる。子規の詩作は十二歲の時に始

まり、東京に出るまで略ゝ同程度に繼續してゐたけれども、これは單なる嗜好にとゞまつて、當時は政治家たらんとする目的だつたやうである。尤もこれは寧ろ他人が定めろといふに從つて定めた目的には相違無いが、當時の時勢と松山の風潮とは、彼れをして政談演説の眞似をする中學生たらしめたのである。

政治家たるの野心が哲學者に變つたのは、明治十八年の春だとある。たゞこの際はまだ哲學の目的と詩歌の嗜好とを反對の立場に在る如く考へてゐたので、審美學なるもの丶存在を知るに至るまで、哲學を目的とし詩歌を娯樂と稱しながら、胸中何となく落著かぬものがあつたらしい。恰も二十二年中の「筆まかせ」(當時の子規の隨筆)に「……實に馬琴を始めとし今迄の小説家は自ら小説をいやしめり。故に概ね勸善懲惡を以て其にけ口上とす。彼等は心中に於て小説をいやしみしにあらず、奈何せん之を尊くするの手段なきのみ。即ち尊きの道理を發見する能はざりしのみ」とあるのが、移してこの場合の子規の心理狀態にも當嵌まるものだらうと思ふ。

同じく二十二年の「筆まかせ」に左のやうな一節箇がある。

「國民の友に書目十種といふことをはじめ、諸名家に愛讀の書十種を書かしめたり。余淺學固より愛讀などせし事もなけれど、中にて其愛讀せし者をあぐれば八犬傳(始めの方)梅暦(初めの二回)、辰巳の園、梅墩詩鈔(今はさまでになし)、娘節用、院本(殊に仙臺萩御殿場、阿波鳴門順禮の段)、俳諧七部集、長恨歌、琵琶行、梅室家集、春艸堂詩鈔、謠曲(殊に角田川、俊寛、蟬丸等)等なり。」

後年自らこれに註して、「淺學ノ度笑フベシ」と云つてゐるが、これはいろ／＼な意味から云つて私には興味あるものである。これで見ると當時の子規の讀書なるものには、殆ど或る傾向とも云ふべきものが認められない。「俳諧七部集」のあるが如き、注意すべしと云へば云へるもの丶、それが「梅室家集」と席を同じうしてゐるところを見れば、七部集の價値よりは最も一般的な俳書としてゞはなかつたらうかと想像される。

子規自身いふところによると、「余が和歌を始めしは明治十八年井手眞棹先生の許を尋ねし時より始まり、俳句を作るは明治二十年大原其戎宗匠の許に行きしを始めとす」とある。こゝに始めといふのは恐らく正式にといふ意味――少くとも漢詩の添削を常に先輩に乞うたやうな――に於てゞあらう。それが舊派及び月並の洗禮であつたことはいふまでもあるまい。「寒山落木」を檢すれば、彼れはそれより以前、十八年に

　　朝霧の中に九段のともしかな

の如き句を作つてゐる。月並の洗禮を受けたことがよかつたか、惡かつたかは姑く措くとして、さうした洗禮が無くても、俳句に向ふべきものは、彼れのうちにあつたに相違無い。

　俳句に專らならんといふ志を子規が抱いたのはいつ頃であらうか。「寒山落木」の作句數は年を逐うて增加しつゝあるやうではあるが、「筆まかせ」などに記されたところでは、あまり俳人たるべき傾向も見えぬやうである。女流の俳句を說き、譬喩的詩歌のうちに多く俳句を擧げてある如き、絕無ではないにしても、後者は後年の自註にも「譬喩ハ多ク理窟ナリ。理窟ハ文學ニアラズ。余ハ文學ニアラザル所ヨリ俳句ニ入リタリ」とあり、未だその趣味に深く到らなかつたことが窺はれる。陸羯南翁の「子規言行錄」の序には、明治二十四年の秋訪ねて來た時に、「近ごろ俳句の研究にかゝつて少しく面白味が付いて來たから、大學をやめて專ら之をやらうと思ふ」と云つたとあるから、或はこの頃に至つて傾向が強くなつたのかも知れない。(「筆まかせ」は二十四年の記事を缺いてゐるが、「寒山落木」を見ても、當時の書簡を見ても、漸く俳句に熱心ならんとする迹は看取される。――併しそれより前に私は一應他の方面の子規を見なくてはならぬ。

　明治二十二年の五月に子規は喀血した。これはその子規と號する直接原因であり、同時に學を廢して文學に向ふ遠因だつたと云へよう。彼れはその發病前後の事情を「啼血始末」なる文中に細叙してゐる。閻魔大王の法廷に引出されて訊問される形式――晩年の「墨汁一滴」中にも同じ形式を用ゐた箇所がある――である。私の知つてゐる範圍では、子規發

病の顚末を斯の如く詳かに記したものは見當らない。それと同時に彼には又「讀書辯」なるものを草して、病の爲に讀書を廢せざる所以を說いてゐる。「子規子」とはこの兩者を併せた名である。子規なる一號は今では彼れのすべてを代表する名になつてゐるが、當時はたゞ發病を記念する意味で、恐らく書に「子規子」と名づけたほどのものだつたらうと思はれる。その頃は普通に用ゐる號だけでも十いくつあるからである。

當時の子規は、いろ〳〵なものを書いてゐる。夏目漱石氏をして「御前の如く朝から晩まで書き續けにては」と云はしめたほど書いてゐるが、前に屢ゝ出た「筆まかせ」の外は多くは紀行と雜文とである。其紀行に於てもいろ〳〵書き方の上に趣向を凝らしてあるけれども、小說と目すべきほどのものは見えない。强ひてそれらしいものを覓めれば――斷篇であり幼稚でもあるけれど――「七艸集」(二十一年)にありとしなければなるまい。併し一方「筆まかせ」の中には小說のことをいふ箇所がいくらも出て來る。二十三年一月の漱石氏の手紙にも「御前兼て御趣向の小說は已に筆を下したまひしや」とあるから、或はこの頃何か腹案があつたのかもわからない。

小說に於ける子規の嗜好は、馬琴、春水時代を過ぎてから、春廼舍、篁村、露伴の順に變遷してゐるやうである。さうして露伴氏の作品に對して最も傾倒したやうに見える。二十四年の大晦日に高濱虛子氏に與へた書簡中に「幸なるかな獨り露伴なる一詩人(小說家といひたくばそれにても宜し)あり破天荒の筆法を以て優美と宏壯を兼ねたる大著述をなせり(風流佛を最とす其他亦能く兩方を有す他人には決して無之)彼れの著述に右二分子を含有するの多きは明治第一なり否日本第一なり否世界第一同人の著他には缺點あるべし優美と宏壯の二分子を含むことに於ては世界第一の稱敢て諂諛に非ず」云々とあり、こゝに「宏壯」といふのは「高尙」と同じ意味だと斷つてゐる。子規をして小說を草するに至らしめたのは、實に主として「風流佛」の刺激によるものである。

明治三十五年九月(卽ちその歿した月)子規は「天王寺畔の蝸牛廬」なる一文をホトトギスに揭げた。惜むらくはた

ゝ一回掲げたなり、この世を去つてしまつたけれども、この時代の回想として吾々の注意を惹くものが多い。それによると、當時輩出した硯友社派の小說などは、一向眼中に無かつた彼れも、「風流佛」だけは夜店で一本を購つて讀んだらしい。その讀んだ理由として、嘗て友人の「風流佛」を讀むのを聞いた時、文章がひねくれてゐてよくわからなかつたので、「善かれ惡かれ兎に角人に解し難いやうな文章を書くものは尋常でないといふことが始終氣になつて居つた」云々と云つてゐる。その結果「風流佛の趣向も風流佛の文體も共に嶄新であつて、併も其嶄新な點が一々に頭にしみ込む程面白く感ぜられた」ので、「一つの風流佛的小說を書くことが殆ど予の目的となつて」しまつたのである。「書生氣質」が出た時には「余は理くつも何もなく只々心中に面白しと思へり」と云つて居り、明治の小說界が受けたと同じやうな刺激を與へられたのであらうが、二十二年の「筆まかせ」に已に「書生氣質は書生に向つては愉快なれども、一箇の小說としては餘り幼稚なり」と云つてあるのを見れば、露伴氏の作品に傾倒した如きものではなかつたらうと思はれる。

子規が小說を草しはじめたことは、前に擧げた虛子氏宛の書簡に見えてゐる。「小生已むを得ざる儀に立ち至り現に一小說を書きつゝあるなり」といふ、その「已むを得ざる儀の何であるかは、ちよつと私にはわからない。翌二十五年一月中の書簡には、「拙著略落成したれども未だ荒壁にて上塗最中」とある。彼れは最初この一篇を以て世に問はうとする意志があり、友人などもすゝめたらしい。「蓋し僕の出版せぬかも知れぬといふは第一出版してやらうといふ人なければそれまでなり。第二原稿の買ひ手ありとも餘り安價ならば賣らぬ積りなり。何故に賣らぬや、名譽に關する故なり。何故に名譽を重んずるや。僕答ふる所をしらず」などゝいふこと（碧梧桐氏宛書簡）も見えてゐる。

二月十九日の書簡（碧梧桐氏宛）には、小說の完成したことを報じ、併せて「これからの運命は未定に候」と斷つてゐる。これが子規の處女作たる「月の都」である。彼れがこの一篇を懷ろにして露伴氏を谷中に訪ねたのは、やはり二

月中だつたらしい。この時は已に追分の寓居を引き拂つて、上根岸（今存する子規庵ではない）へ移つてゐた。「天王寺畔の蝸牛廬」がもう少し續けられたならば、この訪問のことも恐らくつぶさに叙される筈であつたらう。この記述を缺いてゐる以上、當時碧、虚兩氏に與へた書簡によつて髣髴するより仕方が無い。少し長いけれど、左に主要な一節を引用する。

「小生露伴を訪ふ事已に二度なり數日前月の都を袖にして同氏を訪ふ生曰く僕拙著一卷あり友人皆出版を勸む僕之に應ぜんと欲す而して拙著中の趣向君の著述中より偸み來る者多し故に一應君の承諾を經且批評を乞ふ云々の挨拶あり談話二十分餘傍に客あるを以て談佳興に入らずして歸る翌日約あり同家を訪ふ在らず其翌日露伴使を以て拙著返し來る。且つ一書を添へて多少の評あり然れども盡さず生乃ち今日之を訪ふ所以なり。相逢ふて談じ去り談じ來り快窮まつて躍らんと欲す。事半は小説上なり。………貴兄等之を讀んで何とか想像し給ふ。彼一句吾一句相笑ひ相怒り負けず劣らず口角の沫を闘はせしものとや思ひ給ふらん。默々又唯々たる者は終始我なり。生は多少小説家の骨を得たり（肉は未だし）きと思ふなり。是れ生が曾て聞かんと欲せし處而して今に於て頓に悟る所あり。是れ生がいつか貴兄等に話さんと欲する所而して筆紙之を盡さず山河之を阻斷す……」

この時の露伴氏が「月の都」を評した言葉は、「覇氣强し」なる一語が別に書簡——それも碧梧桐氏に覇氣を說くに當つて——記されてあるきりで、子規自身は語つてゐない。たゞ注意すべきことは「談じ去り談じ來り快窮まつて躍らんとす」と云ひ、「生は多少小說家の骨を得たり」と稱するこの書簡の末に、「拙著はまづ。世に出る事。なかるべし（以上の一行覺えず俳句の調をなす呵々」とあることである。事實「月の都」はこの時世に現はれなかつた。羯南翁の手を經て、二三の人に稿本が讀まれたことはあるらしいが、上梓に及ばず、翌々二十七年、「小日本」編輯時代に至つて、はじめて紙上に連載されたのである。今吾々の眼に觸れる「月の都」は、この「小日本」に發表されたものであることは

いふまでもない。

私はこゝに小説としての「月の都」に就て、多くの批評を試みようとは思はない。この一篇は第一に明治二十四五年の頃に於て、露伴氏の作品に傾倒してゐた時代の作品だといふことを考慮して讀むべきである。修辭に於ても、傾向に於ても「風流佛」の影響を受けてゐることも、彼れが當時已に「風流佛」の作者に斷つてゐる位だから、わざ〳〵こゝにいふまでもなからう。後年の子規の傾向から云へば、空想に成つた「花枕」と比べて——尤も「雲中語」の評者は單に文章から云つても「花枕」よりは「月の都」をまさるとしてゐるが——著しく異色を帶びたものである。けれどもその時代及び前に擧げた如き小説觀から考へれば、當時の彼れが「月の都」のやうな作品を殘したのは、極めて當然であるとしなければなるまい。

「月の都」の文章は「風流佛」の影響として西鶴張りである外に、末尾に於て著しく謠曲張りである。(碧梧桐氏に與へた書簡にも「末二回は大方謠曲にてつゞまり居候これら第一世人には氣に入らざるべしと存候なり」と云つてゐる箇所がある)子規が謠曲が好きになつたといふことは、當時の書簡にもあつたと思ふし、前の愛讀書目の中にも二三擧げてあるが、「七艸集」中の「蕣の巻」(二十一年)「しやくられの記」中の一節(二十三年)等、謠曲張りの文章(前者は殆ど全部謠曲の形になつてゐる)を書いてゐることも見過しがたい。「月の都」一篇は、子規の一生に取つてさのみ重きをなすに足らぬにしろ、當時の彼れはこれが爲に、いろ〳〵の參考書を集めたり、わざ〳〵三保の松原を見に往つたり、非常な努力をしてゐるのである。

同じ年の五月四日、虚子氏に與へた書簡の中にかういふ言葉がある。「最後に小生の志に付て一言せん。其解釋はこゝにいはず餘日なければなり『僕は小説家となるを欲せず詩人とならんことを欲す』——「月の都」を書いた後であるがために、この一語は意味深く讀まれる。子規は曩に露伴氏を評して「詩人」なる語を用ゐ、「小説家といひたくばそれ

にても宜し」と云つてゐる。こゝにいふ「詩人」及び「小說家」の區別は、彼れ自身その說明を省いてゐるから、十分にはわからないが、極めて普通に考へて、彼れはこの志を全うしなかつたといふことは出來まい。さうしてこの志が、彼れの取るべき道として誤つたものでないことは、又何人も認むるところであらう。春廼舍氏や當時の硯友社の小說家に比して、露伴氏はより多く詩人だとすれば、子規の小說「月の都」はより多く詩だとも云ひ得るであらう。

明治二十五年の五月は子規がはじめて「かけはしの記」を「日本」に揭げた時である。が、これは前年の紀行を發表したまでゞ、初陣であるといふ以外、さほど重要な意義を齎すものではない。文章よりは寧ろ中に挿まれた句に

山々は萌黄浅葱やほとゝぎす

の如きものを見出し得るのを注意すべきである。

六月に入つて子規は又「日本」紙上に「獺祭書屋俳話」を連載し始めた。俳壇に於ける子規の事業の第一歩であり、同時に明治俳壇革新の第一聲である。譬喩を用ゐるならば、「獺祭書屋俳話」は俳壇に於ける「小說神髓」だと云へるかも知れない。「小說神髓」の著者は卽ち「書生氣質」の作者であつたやうに、獺祭書屋主人は卽ち子規子であつたのである。

明治俳壇の革新とは、一口に云へば俳句を非文學者の手から文學者の手へ還したことである。而してこの點に於て最も與つて力あるものは子規の評論であつた。若し彼れの評論が無かつたならば、假令他の文學の趨勢につれて、早晩革新さるべき運命の下にあつたにしろ、あゝ速かに新派の勃興を見なかつたらうと思ふ。俳句が床屋の店から脫出して、一躍文學界の一隅を占めるに至つたのは――その俳句と相俟つて――子規の評論に負ふところが多いとしなければならない。「獺祭書屋俳話」はその評論の振り出しで、文字通り俳話であり、必ずしも一貫した評論ではないけれども、俳壇に於ける新機運は、隨處にこれを認めることが出來る。彼れはこの一篇に於て、その文學的眼孔よりして、俳句の過

去を說き、將來を論じ、現在を示さうとしてゐるのである。「小說神髓」が明治十八年の文學論である如く、「獺祭書屋俳話」も明治二十五年の俳論であるには相違無い。けれども固陋これ事として病膏盲に入つてゐた當時の俳壇に對しては、どうしても先づ投ぜられなければならぬ第一の石だつたのである。子規がその志を漸く俳句に向け、次第に自信を加へつゝあ盲たとはいふものゝ、古人の句を評する條の如き、どうしても未だ「二十五年の子規」たることを免れない。彼れ自身もそれを認めたればこそ、明治二十九年に至つて「獺祭書屋俳話正誤」なる一篇を草して、この意見に幾多の訂正、削除を施してゐるのである。私は寧ろ子規の五を知つて五を說き、七を知つて七を語る底の態度よりして、「獺祭書屋俳話」が二十五年の子規を直截に現はしてゐる點を喜ぶものである。

一方「寒山落木」を見るに、子規の作句はこの年から特に多くなつてゐる。前半期の作句から少しく抄出すれば、

蓑一枚笠一個蓑は房州の雨にそほち笠は川越の風にされたるを床の間にうや〳〵しく飾りて

蓑笠を蓬萊にして草の庵

駒鳥鳴くや唐人町の春の暮

松山堀端

門しめに出て聞て居る蛙かな

五月雨や漁婦ぬれて行くかゝへ帶

岩かけや水にかたよる椎のはな

の如き、いづれも平淡にして趣味を具有してゐる。而してこの頃はまだ蕪村を中心とした天明の俳句の趣味に觸れてゐないことを特記しなければならぬ。

「小說家となるを欲せず詩人とならんことを欲す」と云つた子規は、斯の如くにして詩人たらんとする道を先づ俳句に

取つた。一面に於ては「俳句分類」の如き事業に手を染め、又一面に於ては友人知己の間に俳句趣味を鼓吹し、俳句と研究と相俟つて、徐ろに自己の道を開拓して行つたのである。その道を更に辿れば勢ひ「初期」以後に亙らざるを得ないから、こゝにはしばらく發足點を見るまでにとゞめて置く。

私は最初この文を草するに當つて、今まで多く世に語られてゐない時代を主とするつもりであつた。併の子細に「子規全集」第七卷を點檢するに及んで、その内容によつて當時の子規を描かうとするのは、材料が多過ぎて徒らに多岐に亙る虞れもあり、限りある紙數ではおぼつかない氣がしたので、遂に以上の如く、僅かに一角を見たに過ぎぬものとなつてしまつた。少年時代篇なるものは、在來世に現れなかつた稿本類であるだけに、子規の内外兩面の生活を知る上に於て、興味あるものが少くない。例へば當時の友人關係を書いたものゝうち、夏目漱石氏に關することなども、私の注意を惹いた一つである。往復の書簡まで寫して置いた子規の丹念にも驚くが、そのおかげで、明治二十三年中兩氏の間に文章論の往復があつたことも知ることが出來た。（自分の「活力統計表」を書いて置いた如きは、子規としては大した意味も無かつたかも知れないが、今になつて見ると得難い記錄である。明治の文學者の中で、青年時代の身長や體重がわかつてゐる人などは、あまり澤山は無からうと思ふ）

最後に補遺の意味を以て、「正岡易占」なる一文を二十三年の「筆まかせ」から拔いて置く。この占ひのことは、漱石氏の談話にちよつと見えてゐたが、恐らくこれまであまり誰も知らなかつたものに相違無い。（漱石氏は女の事が書いてあつて、それは冷かしであると云つてゐるが、この中には出て來ない。或は漱石氏の記憶違ひでゞもあらうか）

正岡易占

余竹村其十より卜筮術を傳授せるに、未だ施すべきの所なく困りゐる折から、夏目漱石、我後來の運命の程を占

ひくれよといふ。心得たりといひながら筮竹さら／＼とおしもんで虚心平氣に占ふに升䷭の師䷆に之くに遇ふ。乃ち之を判斷して曰く、

升は木、地中に生ずるの意なり、經に用見大人勿恤とあり、大人は既ち賢人君子なり。今より賢人君子を友とし德を愼みなば、積小以高大といふ樣になるの勢あり。初六に允升大吉とあり。象傳に上合志也といふ。君今學校にありて上、敎師迄皆人望を君に歸す、故に君は屢々升て第一位にあり。是れ大吉なり。六五貞吉升階とあり。傳に大得志也といふ。是れ君が大學を卒業するの時にて、卽ち君は已に文學者の堂に升る者なり。師は地中、水あるの象なり。地に水ありて後に草木生成す。此時君は已に後生を敎育するの任にあたる。故に容民畜衆といふ。能以衆正可以王矣とは君能く文壇に將として牛耳を取るの謂なり。師出以律失律凶とは君が自分の說をのべ、或は之を筆するの時にも能く道理を正し、少しにても論理に背き哲理に合はざるの議論をなすべからず。苟も誤謬あらば大に不利を來すなり。九二在師中、王三錫命とあり。君の文を書くや天下其妙を稱し、外國人といへども驚嘆することあるべし。然れども人事盛衰あり、六三に師或輿尸凶とあり。君の名聲、大は則ち大なりといへども、未だ全く天下を服すること能はず、文學世界時として君に抵抗する者あり。君も亦時としてそれがために降旗を揚ぐることあるべし。されど固より大失敗といふにもあらず。又君のほまれがそしりとなるにもあらず。いたく心配したまふな。さりながら上六に小人勿用とあり。交際あしき時は爲に君の名譽も落つることあり。宜しく朋友を選ぶべきなり。總するに初め君の學問上其の度は著しく、嶄然頭角を現はし、終には其名聲海の內外に聞え渡るに至るものなり。されど傳に毒天下而民從之とあり。或程、天下の書生、君を慕ふて歸する者多きに相違なしといへども、君の言論文章には一癖ありて天下を毒することなきにしもあらず。學者に偏見(プレジュヂス)あるは古來皆一轍にて別に咎むべきにもあらねど、其言、多少天下を毒するに至りては注意せざるべからざるものあり。君請ふ、其所論を吐くに當りて千思萬

考、主として僻見を除くことをつとめよ。

どうです、是位の易ならば上々大吉なり。君、西洋軒の晝飯に出かけやせう。安いものです。僕之を卜するに牛の羊に之くに遇ふ、本文に大人來リ迫ル、利レ有レ所レ食とあり。大人は僕の事いふまでもなし。天、君に命ず、君躊躇するなかれ。

右の易占あたるや否やは之を後日に徴せざるべからず。

（完）

（附記）この一篇、材料その他について友人柴田宵曲君に負ふところが多い。記憶にとゞめて置かねばならぬ。

現代小說家

現代の小說家おのづから黨をなし派をなせり吾人の相知れる社會批評家の茶話によりて左の部わけを作りつ

根岸派　饗庭篁村　宮崎三昧　鈴木得知　森田文藏

硯友社派　尾崎紅葉　巖漣　江見水蔭　渡邊乙羽　堀紫山人　川上眉山人　石橋思案

政治家派　矢野龍溪　織田純一郎　末廣鐵腸　久松猶堂　尾崎學堂　渡邊臺水　柴東海

學者派　依田學海　大槻如電　福地櫻痴　中根香亭　前田香雪

新聞社派　須藤南翠　三品藺溪　渡邊文京　塚原蓼洲　雜賀柳香　右田柳塢　條野採菊　伊藤橋塘　井上笠園　牛井桃水　黑岩淚香

明治廿四年早稻田文學創刊號より轉載

詩の最初より梅花透谷まで

河井醉茗

一

『明治二十三年未來の夢』といふ小冊子（坪内先生の著か、或は大井憲太郎の著かと思ふが孰れとも記憶がはつきりしない）を少年の時に一讀して、内容はむづかしくて了解することは出來なかつたが、何でも二十三年には帝國憲法といふものが發布され、國會が開かれ、内地雜居が許され、日本は一躍して新らしい國にでもなるかの如く豫想された。憲法、國會、内地雜居などいふ文字が、われ／＼少年の心を動かして、夢想といふよりも、その實現に多大の興味がつながれ、混沌、破壞、暗黑、殺伐、模倣、輕佻の外にさしたる光明も認められなかつた社會生活に、一道の曙光が射してきたやうに思はれたのは明治二十年前後の狀態であつた。

就中内地雜居といふことが、ひどく人々の好奇心を刺戟して、田舍の町に居てさへ隣近所へ英國人や米國人が住みこんでくるかのやうに思はれた。勿論無知で幼稚な想像ではあつたが、海外の文化が洪水の如く押寄せてきて、迚もうつかりしては居られないといふ緊張があつた。何でも知つて置くことは知つて置かなければならないと思ひ、讀んで置くべきことは讀んで置かなければならないと思つた。

白紙のやうな少年の情感は、新しい歐米の文學は勿論、舊い日本の文學さへ新しいものとなつて薫染されるのであつた。政治熱、實業熱といふやうなものは私達の性格なり環境なりに適應しなかつたので、それらの刺戟から昂奮された

情感は凡て文學といふ世界へ誘はれて行つた。

今でこそ詩人といふ一つの自意識が發生したけれど、その頃には詩人などいふ名稱はない。あつても詩人といへば漢詩人に限られてゐた。從つて誰しも詩人にならうなど丶いふ志は有て得なかつたらう。僅に文學者といふもの丶あること、それは戯作者などいふものより遙に眞面目な仕事をする人だといふことが、坪内逍遙の『小說神髓』などで教へられた。その頃から詩眼とか詩人とかいふ文字を使つた森鷗外すら、獨逸系統の美學上から詩人とは所謂詩人の他に小說の作家も含まれてゐるのであつた。

明治十五六年乃至二十三四年頃までの詩の過程を釋明するに當り、他の一般的文學と併せ述べたいと思ふのも、文學といふ雰圍氣の裡に詩が胎生しつ丶あつたからである。

芳賀矢一博士の『國文學史十講』に「大學の外山矢田部井上の三先生が新體詩抄を發刊されたのは明治十四年であります。之は今までの三十一字や十七文字の短い形に滿足しないで西詩の長所を輸入しようといふ企であります。新體詩抄には西詩の飜譯が重もになつて居つた樣ですが新作もありました。とにかく國歌改良の先登者であります」と述べてゐるが、或る人達の間には十四年が十五年になつてゐる。何れにしても十四五年頃であらうが、この詩の創建に就いては前に岩野泡鳴、後に日夏耿之介、かくいふ私なども再三論述してゐるから贅言を費す必要もないやうだ。併しその詩が甚だ稚拙だからといつて、彼等先驅者の詩を創めようとした意識を沒却するわけにはゆかない。表現の疎雜なことも、言葉の無選擇なことも分つてゐるが、それでも彼の人達は詩の發達を豫期してゐたのだ。今日の如く自家の所見を宣傳する機會のなかつた爲め、徒に學者の遊戯的閑文字の如く思ひ做されてゐたが、眞面目な詩の發生には相違なかつた。

「われ／＼が尊重したいのはその創造の意識だ。詩が上手だか下手だか、それは形になつてしまつてゐるのだから、云は

ばそれだけのものだ。詩を興さうとした心の働きにこそ意義があつた。何もない曠野の中央へ、詩建築用地の棒杭を立てたやうなものだ。最初の棒杭が立つたので、建築も出來た、またその改築も出來るのだ」（拙稿「詩的意識の流れてきた途」參照）と私は考へてゐる。

併し嚴格にいへば彼等には時代の意識はあつたが、詩的意識が缺けてゐた。卽ち過去のわが國になかつた全然新しい立場の詩を興すべきことは知つてゐたが、そこは作家でもなく所謂詩人でもなかつたから、表現の技巧が工夫されない。現代語を以て詩歌の領に切り込んできた大膽さは贊稱すべきであつたけれど、その感覺には新しさがなかつた。遂に矛盾と破綻に終つた。

英米の譯詩の外に創作の詩もあり、而して現代語脈の詩と、國語脈の詩とが兩立した。現代語脈の詩は今日に於てこそ現代詩として獨立してきたが、當時に於ては本質的に價値が乏しかつたから、次第に國語脈の詩に讓らざるを得なかつた。大勢はその方向に進んだ。これは或る意味に於て詩の成長を停滯させ、迂回させ、遲延させたけれど、藝術の過程は直ちに理想が實現されるものでなく、幾度も廻り道をしてはまた本道へ還つてくるのである。

國語脈の詩は最初大和田建樹などが盛んに作つた。それとても詩的才能に優れてゐるのでないから、兎もすると日本在來の和歌調今樣調を引き延ばしたやうなものにもなつた。更に進んで一工夫考へ出したのが山田美妙で、別に落合直文、新聲社の人達、宮崎湖處子など續々と新體詩人が現はれてきた。

二

坪内逍遙の『小說神髓』は明治十八年の出版で、これが抑も文學上の畫時代的の革新を促し、硯友社も同年に創設されたが、世間に認められるやうになつたのは二十一年五月『我樂多文庫』の初號を出してからである。

硯友社はいふまでもなく尾崎紅葉を初め當時の新進文士の結社であつたが、硯友社の人達も詩は度外に置かなかつた。

明治二十年頃には既に第一期の大學派が影をひそめ、文學の氣運は主として小說に向はうとしてゐたが、獨り山田美妙が韻文を提唱した。彼は詩と云はなかつたけれど無論新しい詩の意味であつた。美妙のみならず紅葉にも、その他の硯友社同人にも詩作はあつたらしい。紅葉には「日本の春」（卅二年三月『少年園』所載）といふ唱歌風の作が譜と共にあり、また「君帶吟」（年月未詳）といふ題で俳詩風の作もあり、その他山田美妙、丸岡九華の三人合著『新體詩選』（此の書は殆ど發見されず）がある。此の『新體詩選』に就いては逸話がある。「十七八歲の頃頻りに韻文を屬し、紅葉また綠山外史の號を以て新體詩を作る。而も之を世に出すに術なく、悶々之を久うせしが、一日金玉出版所を訪ねて漸く新體詩選の出版を諾されて歸るや大道磨き開くの感ありて狂喜措く所を知らず、直ちに奔りて紅葉を訪ね、之を語れば、紅葉躍然立ち上りて机上の雜書雜紙を拋ち、吾等文豪すでに稿料を得たり。須く明窓淨几に座せざるべからずと、且踊り、且書齋を整頓して、狂歡遂に淚下るに到る。而してその新體詩選の稿料實に二圓五十錢。」（四十三年『新潮』新年號「現代百文豪山田美妙」參照）と

『我樂多文庫』は後に『文庫』（「少年園の『文庫』とは別）と改題した。元より散文本位の雜誌であつたが、往々新體詩を載せた。譯詩も載せた。かうして紅葉初め硯友社の諸氏も詩は愛したのだらうが、紅葉の素質が小說に向いてゐたので、先づ小說で名を成すに至り、他の同人も努めて小說を書くやうになつた。その時、美妙だけは大いに詩に盡したのである。美妙は才人であつた。彼の藝術は新しかつたけれど、作家としての天分は無論紅葉にも及ばなかつたらし、小手先の器用といふことが先に立つて、生命の底に根ざした藝術を遺すことは出來なかつた。その代り外に向つての働きは目覺ましいものであつた。彼の仕事を數へ立てゝみても分るが、文語本位の時代に口語を唱へて所謂言文一致體の

文章を書き初めたこと（明治十九年）。婦人雜誌が二三種しかなかつた時に『いらつめ』を創刊したこと。『いらつめ』は表紙もないさつぱりした普及版のやうな婦人雜誌であつたが、矢張今日の婦人雜誌のやうに文藝以外に家事、美容、衞生などのことも載せてゐたし、文藝にはその主張とする韻文の投書が多く採用されてゐた。一木喜徳郎、岡田良平の二氏が編輯に關係してゐた。次には裸體畫を持ち出したこと。それは彼の長篇の韻文「胡蝶」を『國民之友』（二十一年）に發表するに當り渡邊省亭の裸體畫（日本畫）を挿んだので、忽ち世の物議を釀し、贊否兩樣の曲線美批判が現はれた。次に韻文にも口語を用ひようとしたこと。『都の花』の記者となつたこと。最後に辭書の編輯に着手したこと等、彼の試みは時代の行進曲を奏する役目をしたのだが、その時期に於ては珍しい才人といはねばならない。

美妙の詩の調律は七五の外に五七、八六、五五、五七五等の定型律と、稍自由な口語體とがあつた。詩の言葉も近松あたりを標準とした在來語の外に、當時の現代語を選んだ。現代語といつても第一期の大學派に見るやうな生硬蕪雜な言葉でなく、さすがに意を用ひて選んであつた。

明治二十四年出版の『新調韻文青年唱歌集』といふ詩書は、美妙の編輯で彼自身の作も大半はそれに收めてある。唱歌十篇、軍歌四篇、述懷、生活、自然、時事、身邊の詩二十一篇、季節の詩十一篇、少女詩五篇、長篇物語詩三篇、その他「いらつめ」などの投書家の詩四十一篇、以上の詩を上下二册に收めてゐる。

述懷めいた彼の人生觀には格別優れた發見はない。また現實生活を歌はうとした彼は「夏の貧家」「紙屑買」などを題材としたが、たゞ人力車夫や紙屑買の日常生活のありふれた詠嘆であつて、近代的生活意識といふやうなものゝ陰影はない。極めて平面的なものだ。たゞ日本在來の詩歌が花鳥風月の詠嘆に止まつてゐたのを、さういふ社會相を詩に歌つてみようとした處に彼の努力があり、大學派よりも一歩デモクラシイに踏み出したわけだ。

その詩の形式の上からいふと、前にも云つたやうに格調に變化ある如く、用語にも雅語、俗語、現代語を自由に選擇

した。それは比較的未熟な作に試みられてゐるので、彼の詩の中でも最も優れてゐる軍歌（と稱してゐるが軍歌は語弊があらう、抒事詩でいゝのだ）の二三篇、例へば「故郷の山」「ゐうまにあ軍歌」「蒙古襲來」などは殆ど完成してゐるけれど、得意の作かと思はれる「つぼすみれ」（戀愛の事件を主とした詩）などになると骨を折つていやみな用語を使つてゐる。いやみでも此の骨折が又美妙の生命であつたらしく、嘗て私は美妙を論じて「迚も今日の詩とは比べものにならないほど一般にはまだ日本在來の國語に囚はれてゐたから、彼も恐る恐る言文一致に近づかしめようと企てたやうな跡がある。彼の言文一致體は何分創業時代の新しい試みで未熟を免れなかつた。のみならず彼の文章には一種のいやみがあつて、言文一致と稱しながら、文を言に代へる場合、わざとらしい小細工をした、その小細工は詩に於ても聊か目障りだつたが、何分才氣があるのと、苦心が窺はれるので、新しい文藝の一威力になつた」（『詩聖』所載「日本詩史」參照）と云つたことがある。

彼がなまじつか人生觀を歌はうとしたり、自然の季節を歌はうとしたりしても、何等の魅力も暗示も省察もないが、或る事件を歌はうとする場合、相當の緊張を現はしてくるのは、矢張内に向つて燃え上る情熱肌の人ではなく、世相に後れまいとする血氣の才人であつたからだらう。才人才に役されて詩にも小説にも大成しなかつたのは明治文學史上に惜むべき逸材であつた。

兎に角第一期の大學派が凋落して、その次に詩の氣運を盛りあげてきたのは硯友社の一派であり、その中でも山田美妙に先驅者としての功勞はあつたと云へるのである。

三

落合直文の一派も硯友派と相前後して起つたといへるだらうが、實はほんの少しばかり後れて現はれたやうだ。例の

有名な「孝女白菊のうた」は明治廿一年の暮近く『少年園』や『東洋學藝雜誌』に發表された。

その一派といふのは森鷗外が主唱となつた新聲社の人達で、ＳＳＳといふ匿名で『國民之友』に「於母影」を發表した。無論鷗外も直文もそれに加はつてゐるが、その他は小金井きみ子、井上通泰などであつた。鷗外の『しがらみ草紙』は後に二十二年末から發刊されたが、その誌上にもをり〲詩が載つた。

「孝女白菊のうた」は今日でも猶ほ少女の間にうたはれるほどあつて（同氏作「櫻井の里」も一時大いに傳唱された）よく整つてゐた。技巧は流麗の二字に盡きてゐる。美妙が詩の現代化を試みようとしたにも拘はらず、その後の詩は聊か時代逆轉の氣味で、舊い國語の系統が復活され、和歌今様國文等の用語がそのまゝ七五調の詩にすがたを變へた。けれども此の日本の國語脈には現代人でも如何ともすることの出來ない情調の脈が流れてゐて、日本語の存在する限りその脈は繼續されるだらう。明治年間の詩の上に於ては新聲社の一派が率先してその脈を繼續し、つゞいてそのあとが桂月羽衣雨江などに傳はり、一方では落合直文の淺香社の創立となり、和歌の方面に於て新人與謝野一家の人達に傳はり、それが更新されて新派和歌の創造となつたのはまことに當然な徑路である。

「於母影」は人も知る如く獨逸の詩を主にした譯詩であつた。譯と云つても直譯ではない、意譯も意譯、ちやんと國語の約束を遵守した準創作の譯であつた。後になつて上田敏が更に高級的な準創作的譯詩を完成したのも此邊に起原してゐるだらう。それでわれ〲詩の愛讀者に取つて、「於母影」は譯詩としてのありがたみ、言換へれば西詩の純正な味ひを知るといふよりも、却て日本の近代詩創立の一形式としての暗示が强かつた。譯した人達の豫期には反したかも知れないが、單に西洋の詩を端的に知らうとする上からは、これも亦一つの迂廻道（まはりみち）であつた。迂廻ではあつたが原作の香氣とか、感覺とかは知ることが出來た。それに就ては「柵草紙」にＳＳＳの名を以て鷗外が「明治二十二年批評家の詩眼」の中で「於母影」の批評に答へた幾節かゞ釋明してゐる。言葉は古語でも今語でも原作の情趣を傳へることが出來たら幾

分かの功あることをいひ、「その本意は聊かまた新趣味新詩想を以て我文學界を富まさんとするに在りき」「吾黨が譯詩の法に依りて獨り西詩の意思世界と情感世界との美のみならず又た西詩の外形の美をも邦人に示し得んかと望めるを」「蓋し西洋韻語を日本韻語に譯するは、或は西洋散文を日本散文に譯するより難かるべしと雖も、その難き代りには傳へ得たる新趣味新美屑も亦必ず多からむ」といつてゐる。而して押韻法などにも相當苦心の存することを說いてゐる。

岩野泡鳴が「於母影」を考察して「然しゲーテ、ハイネ、レナウ、シエキスピア、バイロンなどを譯し、各篇すべて厭世と憂鬱と悲哀との精神を傳へたのは大いに注意すべき點だ」（『太陽』第十五卷「文藝史」參照）といひ、その思想が當時の詩人達を養成したといつたのは當中してゐる。日夏耿之介は更に布衍して「この詩叢を今までの詩集に比べると卒然として時代が一變した感がある。新らしい悲哀をもたらし、新らしい悒鬱を導き入れ、新らしき歡喜を吹き込んで、荒燥粗雜の日本青年の小汚ない足を近代詩壇の燦然たる一室に追ひ入れたのはこの詩叢の效績である」（『中央公論』四一四號「日本近代詩の成立」參照）といつたのも必ずしも過賞でない。「於母影」は長く用意されたといふほどの重大な飜譯でもなく、云はゞ詩の氣運に感激した一時的の所產であらうが、それでも青年達の胸に强い聲響の感動をのこしたのである。

譯詩ばかりでなく此の時期に於ける西洋文學の移入は、文學界の全般に影響を與へたので、先づ坪內博士の英文學、就中大々的にシエキスピアを紹介したのは劇・小說に刺戟を與へたばかりではなからう。先生は既に二十一年の『少年園』誌上で「少年の心に於ける宇宙の變遷並に危險なる宇宙」の題下に、自己を見出すことを勵まして天才は固有の能力なり滅亡すべきでないと揚言し、例の中にはシエキスピアの逸話なども引いてゐる。

逍遙、鷗外の二家ばかりでなく、二葉亭四迷、矢崎嵯峨の家を初め魯庵、花袋、思軒、拾一庵など皆歐州文學の移入に努めた。ツルゲネーフの「あひゞき」（四迷譯）が出た時は、その詩的情調の目新らしさに驚かされた。四迷は毎に

謙遜な態度で露西亞文學を最初に紹介してくれた恩人である。嵯峨の家の方は詩も作つた。彼も矢張ツルゲネーフを譯し『初戀』で名を揚げたが、その頃彼はツルゲネーフ、プーシキン、レルモントフ、ゴーゴリなどの作に親炙してゐた。嵯峨の家の詩は後に民友社派の『抒情詩』（三十年版）に纏めて載せられた。ドストエフスキイ、トルストイは無論、佛蘭西ではユーゴーその他、獨逸の作は鷗外が紹介し、かくて世界文豪の作品は相次いでわれ〳〵の眼に相映じ、文學の視野が非常に廣くなると同時に、詩も獨立し得ることが信じられるやうになつた。

四

如何に外國の文學が盛んに移入されても、日本の文學が日本の言葉で表はされる以上、日本在來の文學が解放され、啓蒙されなければ文學の功果は舉らない。その頃、外からの衝動に伴つて自分の國の文學を省察し初めた。同時に印刷機關の進歩、新聞雜誌の頻發、古書の覆刻等が大いに文運の隆興を助長した。

「明治二十二年帝國憲法が發布されて日本は法治國として國家の基礎を確立した。一先づ人心の安定を得た、文化的施設は着々として積極的に築き上げられて行つた。就中新聞雜誌の發刊、東京を中心として交通機關の發達、さういふことが思想上に及ぼした影響はなか〳〵廣かつた。

萬葉集の略解でも、源氏物語の湖月抄でも古今集でも、八代集でも、芭蕉でも、蕪村でも、或は三馬でも一九でも、近松でも、西鶴でも、皆活字本によつて讀めることができるやうになつた。江戸時代の稗史小說又は重もなる隨筆類は大抵飜刻された。かうして居ながら一般の文藝的修養が出來たばかりでなく、此時期に於て讀書界の擴大されたことは空前であらう。」（拙稿「日本詩史」參照）

博文館の全書類が先づ日本の國文學中、純粹に代表すべきものを網羅したが、われ〳〵詩に近いものを求むる者に好

資料を與へたのは西鶴と近松であつた。西鶴ものゝ活字本になつて現はれたのは二十三四年頃で『一代女』『五人女』『文反古』その他が單行本となつてゐる。丸善、叢書閣、三日文房などの發行で、缺字の個所もあるが、大抵は原文のまゝで刊行されてゐる。西鶴の文章は初心者には讀みづらかつたが、一つは好奇心に惹かれて讀んだ。西鶴は日本特有の散文詩（西洋の所謂散文詩の形式論は別として）ともみるべく、普通の散文よりは詩に近いやうな氣がして愛讀した。近松も猶更さうであつて、馬琴の七五調はたゞ表面の文字を七五に整へただけで飽き足らなかつたが、近松の丸本を讀むようになつて、更に詩らしい情感をさぐり得た。近松の活字本は既に明治十五年に武藏屋（丸善）から四六形の單行本（頁だけは各册に連續させて）になつてゐた。一時中絶してまた二十三四年に涉り、殆ど同じ體裁（一册七錢）で時代物世話物が數十册刊行された。

何うといふものか近松の模倣者はなかつたけれど、西鶴の文體や文意を眞似ることが流行した。率先して西鶴張の文章を書いたのは硯友社の人達だが、別に幸田露伴が西鶴調で『風流佛』その他二三篇の小說を書いたが、『風流佛』はそれらを代表して殆ど完璧の名文であり、背景が明治であつたから讀みつきやすかつた。

紅葉露伴は力作に競爭し、他の新進作家もわれ劣らじと創作を發表して、二十三四年の文學は小說全盛であつたが、その間にも無論詩の同好者は增してゆき、潛かに作つてゐる者もあつたに相違ない。馬場孤蝶、星野天知、島崎藤村、戶川秋骨等は明治學院時代、上田敏、大町桂月、武島羽衣、塩木巖翼等は高等學校時代、而して岩野泡鳴の如きは二十一年から詩を作つてゐたやうだし、私も亦二十二三年頃から詩の眞似ごとはしてゐた。二十四年には『青年唱歌集』に載せられた。

當時の主なる文學雜誌には作者の有名と無名を問はず詩を散見するのであるが、二十年創刊の『國民之友』、二十一年創刊の『少年園』と『女學雜誌』などが詩を歡迎した方で、『國民之友』では宮崎湖處子が詩を多く發表した。此の湖處

子を初め國木田獨歩、田山花袋、松岡國男等六氏の合集『抒情詩』が後に發刊されたが、それらの人々を假りに民友派と名づけるなら、民友派の詩風は前に云つたＳＳＳの新聲社派に次いで起つたものだ。

湖處子の『歸省』は（二十四年）、小說には違ひないけれど、ウオツヅウオースと陶淵明との思想を等分にしたやうなもので、矢張一種の散文詩系統のものだ。木に竹を接いだやうな感じもあるが、その代り目新しい。また挿入してある詩が純情愛すべき青春の聲と響があつて、つまり「於母影」などの感化が創作となつて現はれたわけだ。

『國民之友』は今日でいへば中央公論格の雜誌だが、少年雜誌で詩を歡迎したのは『少年園』であつた。明治二十一年天長節の創刊、山縣悌三郎の創意で起つた。少年雜誌と云つても今日のそれとは大いに異つて、歐米の少年ものを參酌したらしい。科學と文藝の記事が主で、眞面目で又教育的であつた。當時一流の文士は大抵筆を執つた。その雜誌に投書が多く集まるので別に『少年文庫』といふ機關雜誌を發行したが、二十八年に『文庫』と改題し、私も記者の一員に加はつた。『文庫』は私の詩の搖籃地でもあり幾多の詩人を淵成したことは周知の通りだ。最初二十二三年頃の記者に山縣五十雄（悌三郎氏の令弟號は鑑湖）と高瀨文淵が居て大いに詩を鼓吹した。五十雄には英詩の譯が若干ある。

『女學雜誌』から『文學界』が獨立して詩を革新したのは二十六年以後の話だが、『女學雜誌』時代から詩を迎へた。磯貝雲峰、岩野泡鳴、緒方流水などの詩が掲げられた。婦人雜誌にしては進んでゐたので、前に云つた『いらつめ』と對立すべきである。他にも『國のもとゐ』『文明の母』(『女鑑』も出てゐた筈）續いて『日本の女學』などあつたが『女學雜誌』の清新には及ばなかつた。

五

明治二十四年には中西梅花の『新體梅花詩集』北村透谷の『蓬萊曲』が刊行された。此の兩者は何處か共通してゐる

やうな點もあり、共通してゐないやうな點もある。二人とも詩を有つてゐたのは勿論だが、近代人らしい行爲と、自決の宿命に終つたことゝは共通してゐる。

梅花の詩は美妙のゆきかたに似て、美妙よりも正直であつた。彗星の如くあらはれ彗星の如く消えたので、彼の詩才は充分に伸ばし得なかつたけれど、人間としての梅花は確かに近代的變質者であり、天才の面影があり、苦しみながらも詩に生きようとして、遂にいのちを生かすことが出來なかつた。

梅花詩集には露伴鷗外蘇峰などの序もあつて、相當その才分は認められてゐたのだらうが、彼の神經は餘りに痛ましく狂ほしかつた。恐らく詩を作るにも堪へられなかつたらう、かなしい宿命だ。

梅花の狂熱は肉體の病的に作つた苦悶であつたが、透谷のは必ずしも然うでない。透谷の情熱は主智的内省より發した詩人の絕叫であつた。

透谷は二十二年に「楚囚の詩」を初めて發表し、二十六年より『文學界』の同人となつて詩及び評論を發表してゐたが、翌二十七年五月、二十七歲で死んだ。遺るところ『透谷全集』一卷あるのみ。

創作よりも評論が多かつた。詩作は寧ろ當時の誰よりも少ない方だらうが、本質的に詩人と稱して差支ないのだ。最もその詩作の何れをみても藝術的價値に優れてゐないのは、彼が時代の先覺者として理智批判に勝れてゐたから、殊に見劣りがするのだらう。或はまたその點に彼の苦悶があつたかも知れない。否、必ずあつたらうと思ふ。あれだけ明晰な頭腦で人生に交涉する藝術を理解しながら、優れた作品を成し遂げかねたこと、成し遂げる意識と自信はあるらしかつたが、創作は評論の如く容易くは出來なかつた。その爲に苦悶のあつたことは確かだらうが、それのみが必ずしも彼の死を自決した原因とは斷定しかねる。

透谷の詩と評論に就いては、曾て『日本詩史』で稍詳しく述べて置いたから、此處にはその中の『蓬萊曲』に關する

一節だけを引いて置かう。「劇的脚色はあつても、人物個々の科白は自由な詩の形式に出來てゐる。全篇凡そ千八百行、蓬萊の一曲は稚氣ある未成品であるが、彼が所謂情熱の發露、內部生命の表現に於て實に意義ある試みであつた。明治の詩史を語る者は先づ透谷を逸してはならず、透谷を語る者は蓬萊曲を忘れてはなるまい。」

詩の最初は第一期大學派に起り、硯友派、新聲社派、民友派相次いで起り、梅花透谷出でしも未成のまゝに去つて二十六七年となり、第二期の大學派（晩翠雨江羽衣等）起ると同時に、『文學界』一派が擡頭し、その間二十七八年戰爭の爲め一層情感の激越を醞釀して詩歌の隆興を來し、三十年には島崎藤村の『若菜集』現はれて、透谷の遺志を繼ぎ劃時代的の革新を成し遂げたことになるのである。

須藤南翠傳

須藤眞金

伊豫宇和島伊達藩の御目付役御軍使兼役たる須藤但馬は屢々江戸御留守詰を仰付かつて、江戸と宇和島との間を往來することが頻繁な身であつた、それが嘉永六年丑六月に江戸近海へ異國船が渡來し出してからと云ふものは、特にその身が忙がしくなつた。

尊王攘夷の叫びは南豫の小藩にも異樣な動搖を齎らした。但馬は藩命を帶びて九州に渡り薩州鹿兒島並に長崎、筑前福岡等の各藩に使して來たりなぞした。

やがて安政五年午十一月となつた。それは但馬にとつて二つの歡びの記念の月であつた。外に於て奥年寄役を仰付かると共に、内に次男を儲け得たことである。但馬には女子は澤山あつたが男子は一人しか無かつた。さうして娘たちも夫々嫁けて孫の顏が次第に殖ゑつゝある頃に、ゆくりなくも生れ出た男の子をどんなに喜んだらう。

それが南翠の誕生であつた。もつとも幼名は孟と呼ばれ、後に光暉と改名したのである。斯くて幼時の南翠は七歳にして初めて字を習ひ、八歳にして初めて讀書し、九歳にして射を習ひ、十年にして劍馬を修める、と云つた調子の當時の紋切型に篏め込まれて成長した。その間父但馬は依然として常に江戸と宇和島間を往來し、南翠は多く江戸に置かれてあつた。

麻布龍土の藩邸を吾もの顏にのさばつて、謠をうなつたり、馬から落ちたりしてゐる裡に、世の中は明治と變り、父但馬の職名も宇和島藩大參事と改まつて、位なんか貰つて喜んだのも束の間、忽ち明治三年十一月に猶御改革に付役免と相心得候樣被申付候、と云ふ事になつて了つた。南翠十三歳の小供心にも、之れはウカ〳〵して居られない、と云ふ自覺の芽が一寸萌した。

その裡に再從兄の入江邑次郎（今の穗積陳重男）が藩から拔擢されて、藩費を以て大學南校に入學す可く意氣揚々として上京して來たのを迎へるに及んで自覺の芽が今度は大いに萌した。

乃ち南翠亦同じ樣に藩費で勉强す可く宇和島へ歸つて藩校たる明倫館に學んだが、當時思潮の動搖甚だしく、科目また時勢の變遷に應じて轉換極まり無く、或は漢書を廢して皇典之れに代り、或は皇典衰へて飜譯書盛へ、更に英書に進み、再び國史を挽起する等、就學者をして奔命に疲れしむる樣な狀態だつたので、南翠もやがて奔命に疲れて松山師範學校に轉ず。

『苟しくも先生ともあらう者が、ドテラを着て街をうろつくとは不謹愼……』と云ふ非難の聲をモツケの幸ひにして、伊

豫八幡濱小學校をオンデて行つた青年南翠は、直ちに東京へ走り、名も土屋郁之助と僞つて放浪生活に入つたのであつた。

それは南翠にとつて最も自然な行動だつたのである。生れる前後の父の心持ちを考へても、生れ出た家庭を見ても、受けた教育を調べても、凡てが南翠をして東京の放浪兒たらしむ可く條件づけてゐたのである。

放浪時代は南翠にとつて闇黑時代であり、苦衷時代であり、試練時代であつた。

明治十年、二十歳の南翠は園直樹氏を說いて新平民學校の設立を企畫したが事成らず、翌十一年一月濱町に有喜世新聞起るや探訪社員に聘はれ、社長寺家村氏に見出されて編輯に引上げられ、馬琴や春水を張つた文章で、『つゞきもの』を書いて相當にかけるに至る。取り分け「夜嵐お絹」「新粟おみな」「茨木お瀧」等を描いた毒婦傳は當時の重大事件だつた高橋おでんに感應して人氣を高めた。然しそれ等には名を現はさず、只初めか終りかに、土屋南翠がつたなき筆のすさびもて、と云ふ風な文句を挾んで僅かに筆者をほのめかしたものであつた。

明治十六年有喜世新聞發行禁止の厄に會ふて、開花新聞の發刊を見る。それに「千代田及傷」「黃金花籠」等を連載して初めて南翠の名世に現はる。共に中島座にて我當(今の仁左衞門)時藏(死んだ歌六)等に依て興行されて評判をとる。續いて「春色日本魂」「癡人の夢」「新粧之佳人」等を著し大いに人氣を博す。

坪内逍遙、二葉亭四迷、現はるゝに及んで南翠いさゝか狼狽し、馬琴、春水張りを放擲し、「照日葵」、「綠簑談」等の政治小說、民權小說を物し、更に人氣を擴大す。

開花新聞は改進黨の機關紙となつて改進新聞と改題す。翠南の人氣は改進新聞に負ふ所多く改進新聞は南翠の小說に依て賣る所多く、改進新聞の社運と共に南翠の文名は隆々として天下を蔽ふた。然かも南翠は高山林次郎氏に從へば、リツトン卿の小なるものであつて、其時と共に推移し文體思想を改易したるの點に於て、其歷史小說、罪惡小說、世說

小說、冒險小說の作者なることに於て、其脚本作者となりたることあるの點に於て、また其俗間に多數の愛讀者を有したるの點に於て、酷だリツトンに似たるものであつた。

即ち「黃金花籠」は馬琴を講談調で行つた當時の新しい試みであり、「雛黃鶺」は爲永春水調を採り、「照日葵」は矢野龍溪の「經國美談」に暗示を得、「綠簑談」は尾崎行雄の民權小說の影響を受け、また「唐松操」は大審院長玉乃世履氏の自殺にまつはる政治的暗鬪を取扱ひ、坎坷山人の名に隱れては、教育界の腐敗を發いた「濁世」を發表して、新聞社を發行禁止の怖れに戰慄せしめた。要するに南翠はその作風に於ても常に流浪の民であつたのだ。

明治二十一年頃より、今まで新聞紙上で發表してたものが次第に單行本となる樣になつた。そうして築地一丁目三番地に小粹な住居を新築し、放浪生活の足を洗つて、鹿爪らしく新世帶の主となつた。翌二十二年には雜誌新小說が創刊され每號執筆をした。またこの年から南翠著作集「こぼれ松葉」が月に二冊宛刊行される樣になつた。更にこの年に於て長男眞金を自費出版す。之れはたぐひ稀なる傑作なれど一般のうけるところとならず。

明治二十五年大阪朝日新聞社に招聘されて大阪に移住す。御目見得に「女禮者」を大朝に連載したが關西の讀者には餘りむかず、續いて「五月闇」「現世相」等をものして矢張り同じ結果に歸す。

鴈次郎の爲めに脚本「竹中半兵衞」を、團十郎の爲めに同「英一蝶」を書いたが、團十郎は上演せず、鴈次郎かへつて「英一蝶」を演じて當りを取る。脚本は「江戸自慢男一疋」を併せて三つしか書かず。

大阪に移住してから、イヤキがさしたのか、それとも面倒臭くなつたのか、南翠冬眠狀態に入る。舊稿が單行本になる事と、雜誌に時たま短篇を書くこととが著作年表の賑やかしなのである。

明治三十五年腦溢血にて死損なつてから酒と煙草を全廢し、同時に餘り頭を使ふことを控える事にしたので更に筆を執らず。

明治三十八年大阪朝日新聞社内に改革行はれ、南翠はその一派の人達の多くと共に馘首されて、再び東京に歸つて放浪生活を爲す、今度は病妻及び一男二女を抱へての流浪である。差當り東京朝日新聞に賣り付けたのが「一間一髮」であつた。云はゞ「一間一髮」は歸り處女作であつた。續いて東京朝日、福岡日々、其他横濱、仙臺等の諸新聞に「つゞきもの」を載せる傍ら、金尾文淵堂の依賴にかゝる高僧傳叢書の制作に腐心した。之れには局面轉回の血路として南翠は大いに血心を濺いだ。そうして先づ「愚禿親鸞」を創作し、更に「空海」「法然上人」「蓮如上人」等の諸作を爲した。署名も須藤光暉の本名を以てした。

明治四十一年妻文子と別れ、大正四年長女肇子をその婚家に於て失つてより南翠の宗教的信念は益々燃ゆるに至つた。そうしてその信仰心は「大僧正天海」に凝つた。

文藝倶樂部に載せた「家光の初戀」が宗十郎に依つて帝劇の舞臺にかけられた事は、枯野の様な南翠の晩年を彩る一點の紅花であつた。それは確か大正三年の初春興行だつた。

『講談倶樂部に丈けは載せないで下さい。估券に關はりますよ』と云つて、よく文淵堂の主人が意見をしてゐた。

『でも卷頭に載せて呉れるのと大きな廣告をして呉れるんでね』南翠はいつも恁う云つて淋しく笑つてゐた。

酒と煙草を廢めてから徐々に肥り出して來た南翠は大正六七年頃から腎臓を患ひ、糖尿病となり、動脈硬化症に罹つた。その病軀を押して土居剛吉郎氏からの「土居通夫傳」の編纂を引受けて、屢々大阪の土居邸へ通ふようになつたのである。大正八年の夏遂に病重つて永らく床に就く身となつた。然し凉風の立つ頃には殆ど回復したので、また大阪の土居邸へ赴いた。そうして再び病を發せしめた。次女珠子が看病に赴いたが病は暮まで續いて暮には全く重態に陷つた然しそれもまた喰ひ止める事が出來て、九年の春早々蘆屋の土居家別莊へ轉地する程になつた。そうして、もう之れなら東京へ歸つて差支無からうと云ふ程に回復した。それで兎に角東京へ歸る足溜りとして、また小手調べとして病軀を

蘆屋から大阪まで汽車で運搬して見た。ところがそれが悪かつた。かくて三度重態に陥つて竟に大正九年二月四日六十三歳を一期として、流人南翠は旅に逝いたのであつた。

須藤南翠著作年表

須藤眞金藏書及ビ高木文氏調書ニ據ル

題名	所載	年月	發行所
千代田刄傷	開花新聞	明治十六年四月	
結城合戰花鍬形	改進新聞單行本	同十八年二月 同年十一月	
癡人之夢	單行本	同二十年一月	
新粧之佳人	單行本	同　年五月	正文堂
雛黄鶴	同	同二十一年一月	同
うつし繪	同	同　年五月	同
緑簑談	同	同　年同月	同
殺人犯	同	同　年六月	同
照日葵	單行本	明治二十一年七月	春陽堂
朧月夜	新小説	同二十二年一月	同好會
心中	華錦	同　年四月	
唐松操	單行本	同　年六月	文昌堂
隱君子	こぼれ松葉	同　年八月	春，陽堂
みなし見	同	同　年九月	同
金香露	小説萃錦	同　年十月	
旭章旗	こぼれ松葉	同　年十二月	春陽堂
冬木立	新小説	同　年同月	同好會

男裡子口衣	同	同二十三年一月	同
新編破魔弓	國民の友	明　年一月	
悶雨	國民の友 第二國民小説	同　年一月 同二十四年十一月	民友社
滿春露	こぼれ松葉	同二十三年二月	春陽堂
行路難	同	同　年四月	同
雛遊び	同	同　年五月	同
萬春樂	同	同　年七月	同
女探	都の花	同　年十一月	
鎌倉武士	新作十二番	同　年	
千人斬	都の花	同二十四年四月	
臥待月	聚芳十種	同　年同月	春陽堂
江戸自慢男一疋	單行本（脚本）	明治二十四年五月	金港堂
あら海寶一	單行本	同二十五年九月	春陽堂
非文人	改進新聞 單行本『文學狂』ト改題	同　年十一月 同二十六年五月	圖書出版株式會社
土佐日記千曳磐	單行本	同二十五年	
黄衣香	同	同　年	
試金石	同	同二十六年二月	金櫻堂
江戸小町	同	同　年三月	弘文館
五月闇	大阪朝日新聞	同　年六月	
現世，相	同	同　年九月	
常陸帶	小説百家選	同二十七年六月	春陽堂
かたみの松風	大阪朝日新聞	明治二十七年十月	
蟠桃海鶴	文藝倶樂部	同二十八年一月	

五月闇	文藝倶樂部	明治二十八年二月	
優兵士	大阪朝日新聞	同年四月	
	單行本『當世息子』ト改題	同二十九年十一月	駸々堂
吾妻錦繪	太陽	同二十八年三月	
夢魂	大阪朝日新聞	同年九月	
ぬれぎぬ	同	同年同月	
黄金窟	同	同二十九年一月	
今樣水鏡	文藝倶樂部	同年二月	
蘆のかりね	新小說	明治三十年一月	春陽堂
英一蝶(脚本)	新作文庫	同年六月	青木嵩山堂
甘露	新小說	同年八月	春陽堂
ぬれぎぬ	春陽文庫	同年十月	同
玉簪	明治小說文庫	同三十一年一月	
髪結松	單行本	同三十三年十一月	駸々堂
大探險	同	同三十五年二月	
間一髪	東京朝日新聞	同三十八年二月	
	單行本	同年十二月	金尾文淵堂
闇のうつゝ	東京朝日新聞	同三十九年十二月	
	單行本	大正二年二月	樋口隆文館
鏡中蛇	趣味	明治三十九年十月	
狂瀾	東京朝日新聞	明治四十年三月	
行春	文藝倶樂部	同年六月	
わくら葉	女鑑	同年十月	
ゆるさぬ關	東京朝日新聞	同年十二月	
山扇	日本及日本人	同四十一年一月	政教社
復木淵	單行本	同年三月	如山堂

舊皇ノ梅	女鑑	同年同月	
新代議士	同	同年七月	
愚禿親鸞	單行本	同四十二年十一月	金尾文淵堂
空海	同	同四十三年八月	同
法然上人	單行本	明治四十四年一月	金尾文淵堂
連如上人	同	同四十五年二月	同
愛妻	淑女畫報	同年四月	
明治天皇御傳	單行本	大正元年九月	金尾文淵堂
日かげ者	日本の婦人	同二年三月	
浮木舟	單行本	同年十二月	
山本權兵衛	文藝倶樂部	同三年二月	
石山合戰	單行	同年六月	新潮社
平和の犧牲	文藝倶樂部	同四年三月	
大炊殿橋	講談倶樂部	同年十月	
赤坂溜池	講談倶樂部	大正五年八月	
大僧正天海	單行本	同年九月	富山房
生肉一臠	講談倶樂部	同六年四月	
坪内五郎左	同	同年八月	
名殘の花	史談文藝	同六年十月	
祝言を前に	面白倶樂部	同七年一月	
達人と妙手	同	同年同月	
寫眞三人女	講談倶樂部	同年七月	
新妻	單行本	同年八月	樋口隆文館
討入の前夜	ポケット	同年九月	

手束弓	ポケット	大正七年十月	
復讐菖蒲刀	演藝講談界	同八年一月	
お菊の怨靈	講談倶樂部	同年同月	
秋江夫人	單行本	同年同月	樋口隆文館
崎雄傳	講談倶樂部	同年二月	
一番鎗	ポケット	同年三月	
橋本平左衛門	同	同年八月	
多田加助	同	同九年二月	

今日新聞の三ヶ年間

野崎左文

明治十七年の秋の頃だと記憶するが、夕刻我師假名垣魯文翁から急使が來て卽刻自宅まで來て貰ひたいとの事であつた。是より先僕が曾て「いろは新聞」に師翁と共に筆を把つて居た頃親友の山田風外氏が「繪入朝野新聞」を朝野社に譲り改めて第一號以下をその別局から發行する事になつたが、適當な記者が無いから僕に入社して吳れまいかとの相談を持込まれた、で此事を魯文翁に話した處が今出て行かれては困るとの返答であつたが、風外氏からは差當り續き物を書く記者がなく、又新聞の編輯に經驗のある人もないのに、發行日が二三日間に迫つて居るゆゑ、魯文翁へは成島先生よりあとで話を付けて貰ふ事にして、是非とも入社して吳れよと迫られたので、終に意を決して同社へ轉ずる事を承諾

した。然るに十分の諒解を得ずして「いろは」を辭した一擧がいたく師翁の機嫌を損じ、師を振捨てゝ他に奔るやうな恩誼を知らぬ者は破門するとの激烈な一書を送り、又本もとの朝野社へも左文を直ちに退社せしめよといふ強迫めいた書を送られたので、柳北先生も困りながら僕の爲めに仲裁の勞を取られ、又岡丈記、三世琴通舍（風外氏の兄で僕の狂歌の友）兩氏も仲に入つて懇々と詫びた爲めにやつと師翁の怒りも解け、師弟の緣を繋ぎ止めて其儘「繪入朝野」に腰を据えて居た。併しこの衝突があつた爲めに自然と假名垣家の敷居が高く、無沙汰がちに過して居たが、二年ぶりに師からの手紙を受取つたので、何事であらうかと案じながら早速俥を飛ばして新富町の翁の家をおとづれた。

其時翁の話は斯うであつた――元報知新聞の社主小西義敬氏が銀行事業に失敗し沈淪して居るのを氣の毒に思ひ、その友人益田克德、高梨哲四郎、角田眞平其他の諸氏が資金を持寄り、小西氏を扶ける目的で一の小新聞を發行させる事になつた、そこで小西氏を社長とし自分（魯翁）に編輯一切を擔任して吳れよとの事であるが、自分も追々年を取つて昔の元氣が衰へたから足下等二三若手の人に助力して貰ひたい、特に足下を招いたのは先年は行掛り上一度他社へ手放した事があるから其酬いとして今度は我が手元に復歸して働いて貰ひたい爲めだとの事であつた。そこで僕は立どころに快諾したが、當時は小新聞にも「讀賣」「東京繪入」「改進」「繪入自由」「自由燈」「繪入朝野」等の數種が互に競爭して居る頃だから、第一に豊かな資本を擁し且何か一の特徴を備へた新聞でなければ發展する見込みがないが其邊のお考へはと反問すると、翁の云ふには資本には先づ心配はない、又今度發行しやうとするのは益田氏の提案で、其日の事を其日に報道する夕刊の新聞で、題號を「今日新聞」社名を每夕社とする事になつて居る。歐米には夕刊新聞は澤山あるとの事だが、我邦では新しい試みゆゑ屹度世人に歡迎せられて賣れる事は受合ひだと翁は中々乘り氣であつた。成程英佛には夕刻發行する新聞紙の多い事は僕も既に聞いて居たが、それは通信や交通機關の備つた國に於て出來る事で、植字にしてもアルハベット廿六字と、數千の漢字へルビを振るのとでは其の遲速は較べ物にならぬのであらうのにと、聊

か惑ふ所があつたが、既に入社を承諾した以上は所謂騎虎の勢ひで、宜しいやつて見せうと玆で翁との相談が纏まり、翌日は翁と共に小西氏と柳橋の某亭で會合した。其時小西氏は自分は印刷の方は屹度間に合はせて見るから、編輯を遲くも午後一時までに締切る事を兩君で堅く實行して呉れよとの事であつた。それから諸般の準備に取掛り、記者には永井〓(小石)淸水市次郎(米洲)砂川某氏等を聘し、畫は尾形月耕、浴合芳幾の兩氏(芳幾氏は東京繪入の外他の新聞の筆を取らぬのを魯翁との交誼上無落款で描く事を打諾されたが後に歌川國峰氏が之に代つた)を煩はす事とし、魯翁が主筆僕がその助役、翁の長男熊太郎が探訪長、今いふ營業部長としては投資者を代表して丘襄二氏が其任に就き、初號を京橋彌左衞門町の本社から發行したのは九月ので末あつたと思ふ。(後に印刷を報知社に賴む都合上本社をその附近の兩國村松町へ移した。)

それから廣告の一手段として同年千歲座(?)で團十郞、芝翫、左團次の一座が村井長庵の狂言を演じた時、每夕社から作者河竹默阿彌氏へ引幕を贈り、同氏に賴んでその狂言中千太郞と小夜衣との道行の場へ、丸に今日と染拔いた半纒姿の新聞賣子——いづれも子役——十數人が出て、是れは今度發行になりました其日の事を其日に知らせる今日新聞云々と、舞臺で效能を述べるといふ一くさりを書加へて貰ひ、今日新聞〳〵と呼びながら鈴を鳴らして兩花道へ引込む時其日の新聞百枚あまりを見物に蒔いて行かせた事もあつた。芝居が新紙を利用すると反對に、新聞が芝居を廣告に利用したのは是れが初めてゞあつたかも知れぬ。

其日の事件を其夕に報道するのは新聞中の新聞であるから、大に世上の喝采を得るであらうとの當初の希望は、殆ど理想に過ぎずして實際は中々困難であつた。その第一は種子の蒐集で、警察種と稱する市井の出來事は概して午後に多くして午前に少なく、夜中に起る事件は强竊盜とか出火等の類である。尤も人殺しとか情死とかいふのも重に夜中の出來事ではあるが、翌日の午前中にはまだ警察でもその原因とか周圍の關係などの取調べが行屆かず、單に場所と人名とを

知り得るぐらゐのものだから、其の詳報を掲ぐる所の翌朝發行の新聞に較べると僅かに端緒を報じたと云ふに止まり甚だ不完全な記事で紙面を埋めねばならぬ事を餘儀なくせられた。第二は交通機關に乏しい事で、當時は一般に鐵道馬車も通つて居なかつたので、縱令その端緒を聞出したにしても、探訪者が實地に赴いて調査しやうとするには時間が許さなかつた。折には二人曳の俥を飛ばした事もあつたが、毎日〳〵幾件かの出來事に悉く此の方法を行ふのは社の經濟も之を許さぬといふ事情もあつた、第三は印刷機械の不備で、無論今の輪轉機などは夢にも見ることは得なかつた、只不完全――それでも當時では最新式――なロールでゴト〳〵と印刷するのであるから、一萬枚刷上げるのには四時間以上はかゝるのであつた。そこで編輯部からは營業部に向つて印刷を敏速にせよと促し、營業部からは反對に編輯を手早くしてその締切時間を繰上げよと迫つて來るのであつた、是れが爲め僕は休日の外最初の一年間は編輯局に泊り込みで早朝から筆を把り他の記者も皆早出で働いて居たが獨り魯翁のみは從來の習慣上其日出社してからでなくては其日の續き物の筆は下さぬので、植字方から續き物の原稿は前日に渡して貰ひたいとの請求が度々あつたが魯翁はヨシ〳〵と答へながら終に之を實行するには至らなかつた。挿畫に就ての失敗談は本誌三月の混沌期研究號にも述べて置いたが、今一つ吾々の豫想に反したのは配達の遲れがちな事であつた。各賣捌所へは俥で新聞を届けるにしても、本社直配達に屬する分は午後五時半頃までに配達人を招集し、此の人々が各自受持の區域内へ徒歩で配達するのであつたが、夏はまだしも冬の午後五時半はモウ暗い夜に入つて居る、それが遠い郡部などへ行き着く頃には早い處では戸を締めて寐て居る家もあるので、已むを得ず門の受函へ新聞を投込んで置くのである、されば折角の夕刊も其家では翌朝配達の他新聞と同時に見られる結果となる。又近い市内へ配達するものでも朝とは違つて夕刻は忙しい家が多いので直ちに手に把つて讀まるゝ事は少かつたやうである。元來當時の小新聞讀者は記事の早いのよりは寧ろ興味本意で、何でも面白い事が讀みたいといふ傾きであつたから、報道は早いにしても唯端緒のみを掲ける短い記事では讀事は滿足しなかつた。たつた一

度兩國で大角力のあつた時その勝負附――中入前の勝負しか載せる事は出來なかつたが――を發行した時に多くの讀者に歡ばれたが是れは角力の勸進元から勝負附の賣子の營業を妨げるものだとの故障が出て終に中止するに至つた。こんな風で――無論吾々の力の足りなかつたのも其の一原因であつたらうが――各機關の不備と資本の不足等の爲めに當初の見込は稍や外れてその期待は裏切られた、つまり計畫はよかつたにもせよまだ時勢に副はぬといふ結論に到着した。それでもたいした損失を蒙らず日々八九千臺を發行して三年間は營業を繼續した（後に持主が變つて都新聞と改題し普通の朝刊に改まつた）。

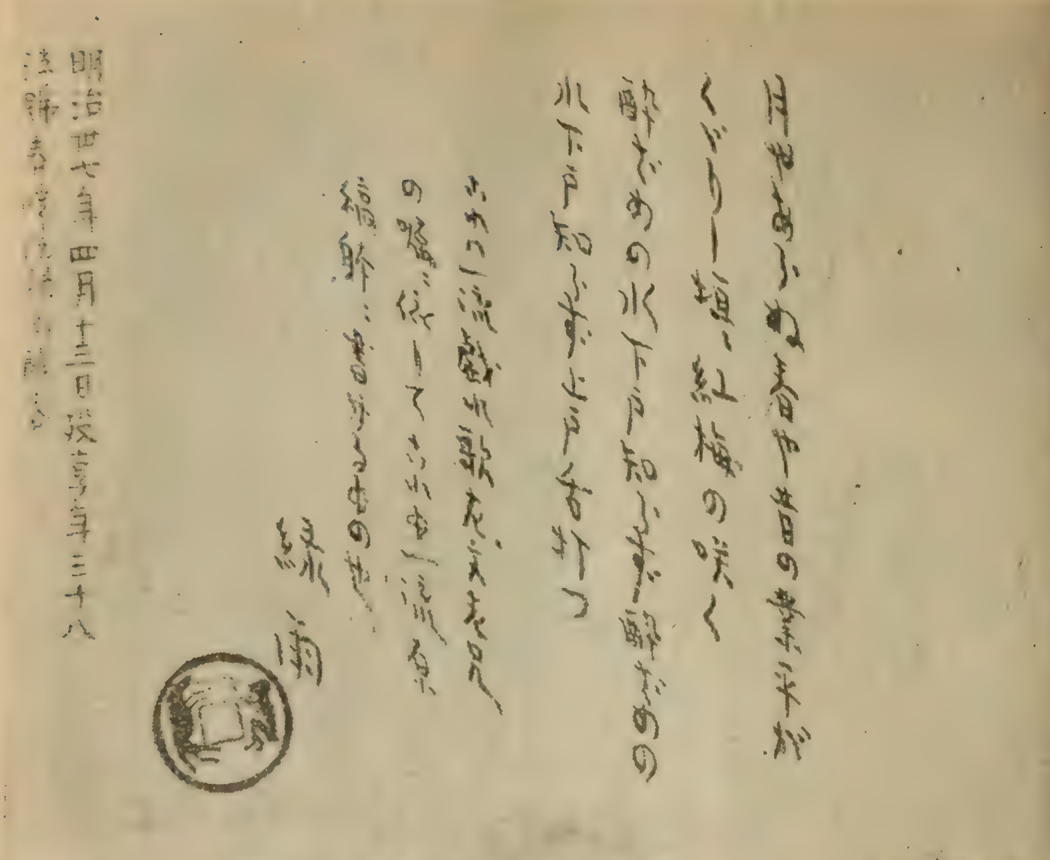
翌十八年の夏（？）或日魯翁は僕等に向つて、此程向島の永機宗匠の紹介で一少年を入門させる事にした、まだ年は若いが熱心な文學志望者で、前途の見込みもあるから、見習記者として我社に入れる事を只今社長へ頼んで置いた、近日連れて來るから引立てゝやつて下さいとの事で、それから凡そ一週間もして魯翁は果してその少年を同伴して來たが年齡は十七八歲で長面瘦軀、始終白ハンケチで口邊を蔽ひ沈默寡言偶々話をする時でも低聲で要領の多くを語らず、その擧動も沈着でどう見ても大家に育つた內氣のお坊チヤンといふ風があつた、聞けば名は齋藤賢、雅號を江東綠と呼び曾て慰み半分戲作めいたものを書いた事もあるとの答であつたが、是れが後の綠雨醒客またの名正直正太夫が新聞記者としての初目見えであつた。魯翁の門に入つた事は綠雨氏自身も『日用帳』に左の通り記して居る。

歲十七八の比なれば猶學校に通へりしと覺ゆ、われは永機翁の紹介により魯文翁に面したり、駒寧錢に擬したる印一つ贈られしを用ひこそせざれ今も藏せり。いかなる事を書きしか全く忘れたれど、携へ行きしわが一文に名を眞猿と署し、芳譚と稱する雜誌に出されたり。

是れは後に聞いたのであるが、綠雨氏の父君は名を利光といひ伊勢津の舊藩主藤堂家老侯のお抱へ醫で本所綠町に住し氏はその長男である、その家へは僕も五六度訪問したが綠町三丁目南側の長屋門のある舊式家屋であつたが、醫者

の玄關といふ諺に反して藥取りの來て居た事は一度もなかつた、されば父君は藤堂家より俸給を得て居て、一般患者を診察する開業醫ではなかつたかも知れぬ。又父君は和歌俳句を嗜み、俳句は藤堂家へ出入する永機宗匠に就て學んで居たからその緣故で綠雨氏も一時其角堂の門に遊び、また其の紹介で魯翁を便つて來たのであつた。

綠雨氏の入社當時は地方新聞の拔萃とか、芝居寄席の案內、緣日表などいふ記者としては初步の記事を受持ち又校正の一部をも手傳つて居たが字音の假名遣ひには少からず苦心の體であつた、そこで夫れは四聲によつて別るゝ事を話した處が詩學には疎い氏が急に『詩韻含英』を購ひ來り（其時の同書は今僕の手元に藏して居る）韻字の暗誦に勉强して一東の韻はコウ、ソウ、トウだといふ風に根本から研究してかゝつたので、覺えも早くして校正の專任者よりも間違ひが少ないやうになつた。又日々の緣日案內を揭けるにも每月末に翌月中のこと例へば五十の日は何の稻荷、寅の日は何の毘沙門といふが如き一覽表を自分で作り、此表から其日々々の緣日を書拔くといふ風に萬事に綿密で注意が深かゝつた、そして數月後には記者としての豫備學を卒へて所謂艶種の筆をも把るやうになつたが、中々書くことが巧みで魯翁も之を讀んで其の手腕を認めて居た併し少年時代にあまり其作を讃め立てると慢心する事もあるからとて、面と向つて批評することを避けて居た。其頃魯翁はよくいろ〳〵な寫本を社へ携へて來て吾々に筆寫させたものだ、現に僕も此の役目を命ぜられ「伊波傳毛の記」だの「蜘蛛の糸巻」の類は度々謄寫した事があるが、或日魯翁が齋藤さんこれを——其書は黃表紙の評判記「花の折紙」であつたと思ふ——寫して下さいと差出した時にはひどく面喰つて、私は字が下手だからと辭退したのをとう〳〵押付けられ、數十日間の後に出來上つたのを見ると苦心慘憺たる痕跡歷々、中々珍なものであつた。元來氏は筆跡の拙い方で、いつも眞筆（しんかき）の先の切れたのを用ひ、棊盤目の原稿罫紙の上で習字をしたのに過してぎないのだから、普通の手紙でも皆原稿風の細字ばかり書いて居たのが、此の黑表紙體の評判記を筆寫したのは、氏とは空前絕後の仕事であつて、此の寫本若し現代に傳はらば齋藤綠雨の手寫として得難き珍本となつたであらうのに、



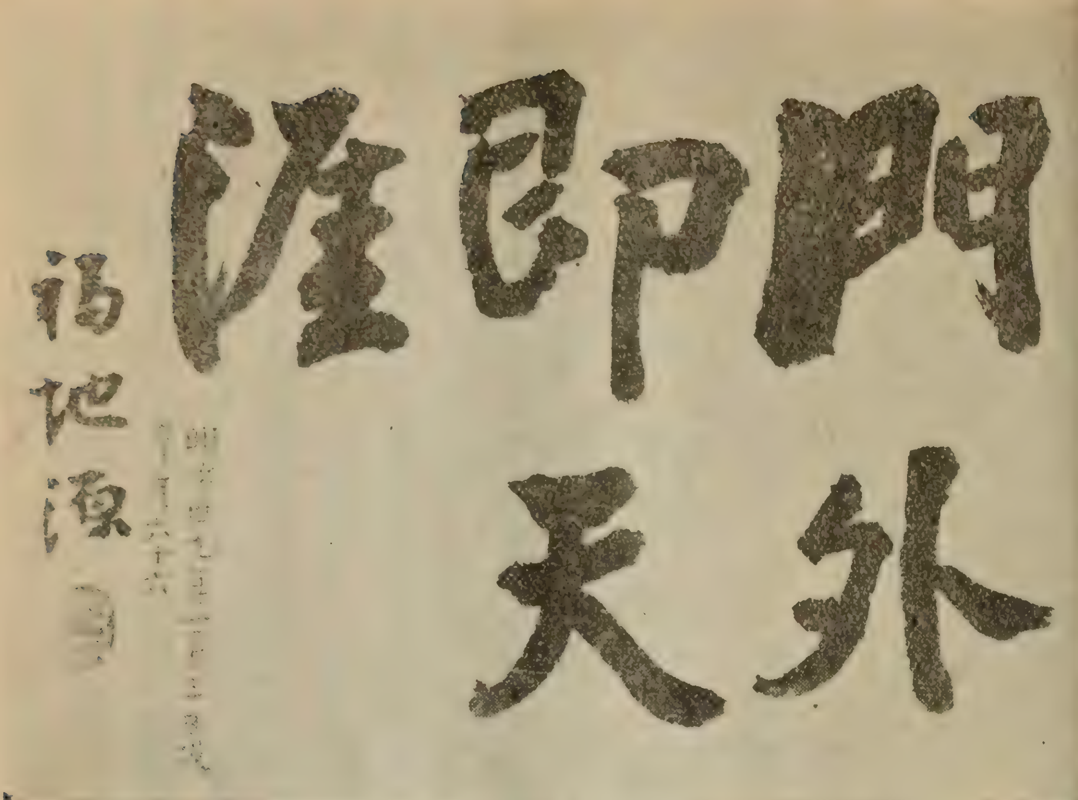
緑雨氏筆蹟（判取帳より）

假名垣家にも傳はらず行方不明となつたのは惜い事である。

緑雨氏の伎倆を認め其才を愛したのは魯翁よりも社長の小西義敬氏の方が深かつた。小西氏は舊幕時代の淺草の名主の一人で、昔は財産も豐かな上に中々の勢力家であつたとの事である。そして當時の風習上青二才では幅が利かぬとあつて、若い時から月代を灰汁で磨いてテラ〳〵と光らせて居たとの事で、散髪後も赤禿の跡がありありと存して居た、反齒は笛を習つた爲めで、笛は素人放れのした上手だとの評判であつたが僕は一度も聞いた事は無かつた。所謂生ッ粹の江戸ッ子しかもそれが通人肌で、能と芝居に精通し俳優では團十郎、宗十郎を最屓にし又遊藝人にも知己が多かつた、報知社長時代には芝居は大小各座とも看ざる事なく（報知新聞へ劇評を掲げ始めたのも小西氏が口授して芳川春濤氏が筆を執つたのだとの事である）又花柳界に豪遊して大分驕奢を極めたさう

が、今日新聞の社長となつた頃は銀行事業の失敗後だから已に榮華の夢から覺めて餘程質素な生活振りとなつて居た。けれども猶金の餘光で昔の大盡のなごりを留め劇界や花柳界で社長さま〱と歎待せられ、自分でも是れが誇りたさに人を誘うて度々柳橋へ足を向け通人の遊び振りを見せて居たが、多くの場合其の同伴者は綠雨氏であつた。僕も二三度は同行したが綠雨氏の酒樓に於ける態度は酒を飲んで騷ぐのでもなく肴を荒すのでもなく、キチンと坐つてニヤ〱と笑ひながら例のハンケチで口を蔽ひ老妓等との對話ぶりを傍聽するといふ全くウブの坊チヤン風で、今から思ふと後年著した『かくれんぼ』の主人公そつくりであつた、それが一年後にはガラリと變つて大分遊びが巧者になり、或夜などは新橋板新道の藝者屋吉田屋(?)の長火鉢の側に脂下つて居たのを、胡蝶園氏と僕とが發見して其後屢々冷かした事もあつた。つまり小西氏の誘引が最初の導火となつて一時は遊びの熱も高まり、多くもあらぬ父君の財産をも減らした樣子で、後には大分窮迫して自宅から通ふ俥も廢し、服裝なども見違へる程粗末になつて居たが、無いが異見の總仕舞ひで、この遊蕩も長くは續かなかつた。要するに世間知らずの氏は小西氏の爲めに活社會に引出されて一足飛びに紳士的の境遇に入り、又小西氏の感化を受けて江戸趣味に引込まれ、窮した時でも猶足袋と駒下駄とは新しき物を用ひ、帶は必ず角帶を締めるといふ風で、音曲でも義太夫が嫌ひで哥澤、淸元、常磐津に興味を持ち、食物も江戸料理のうまい物屋をあさつて自ら食道樂を以て任じ、麥酒が好だが饂飩は病人の食ふ物だと斥けて居た抔は其の一例である。此間に氏は天稟の鋭い觀察力を以て社會の裏面を洞察し、之が材料となつて後の寫實的小說ともなり又皮肉な批評ともなつたのであらう。されば後年文豪として名を成したのは天才に據るのは勿論だが、書籍の上より得たる知識よりも實地の觀察が多く役に立つたのではあるまいか、シテ見ると小西氏のお蔭を蒙つた事も亦少なくないと言はねばならぬ。

「今日新聞」に初めて續き物を書いた事に就ては綠雨氏自身も「今は一般に小說と呼慣れたれど、以前はいづれの新聞社にても單に續き物と稱へしなり、己れの初めて之に筆執りしは明治十九年一月、住處にちなみて江東みどりと號し、



櫻痴居士筆蹟 （判取帳より）

善悪押繪羽子板といふ今日新聞に出したるときの事なり」と語つてゐる。それがどんな趣向であつたかは僕の記憶に存しないが、其後四五日の續き物に或る待合の事を書いたのは、座敷の形容から其の營業振りをも細微に穿つた上に、七五調を離れた一種の文體で魯翁も大層これを讃めて居た、今から思ふと之が趣向に重きを置かずして人事の自然を描寫せんとする氏が短篇小説としての最初の試みであつたかも知れぬ。

僕は十九年の末「今日新聞」を辭し、岡崎高厚氏の經營に係る「浪華新聞」（明治九年ごろ大坂で發行した浪花新聞は花の字、此の浪華新聞は華の字を用ひて居た、そして同紙上に始めて嵯峨の屋おむろ氏の言文一致體の小說を掲げた事がある）に坂崎紫瀾氏と共に聘せられて大坂に赴いたから、廿三年に「國會新聞」に入り再び緑雨氏と同社する迄の間は氏の身邊に就て何事も知るを得なかつた。

是れも十八年の事であるが、僕が「今日」紙上で明治の小傑即ち政治家、法律家、軍師、教育家、商法家

著述家、新聞記者、學者、醫師、畫家等を現在の人に指名することを懸賞投票で募つた事がある。その政治家には伊藤博文氏、法律家には鳩山和夫氏、軍師には榎本武陽氏、醫師には佐藤進氏、其他は忘れたが大多數を以て新聞記者に指名されたのは櫻痴居士福地源一郎氏であつた。そこで此の十傑の肖像を石版畫の附錄とし各自の小傳を紙上に掲げる必要上から、或る朝魯翁と小西氏との紹介狀を持つて居士を下谷茅町の自邸に訪問した。居士は維新當時は淺草寺境内寐釋迦堂の魯翁の家の附近に住ひ、夢の屋又は福地鬼外と號して戲作などに從事した事もあつて、魯翁とは其頃から舊友であつたので、翁の紹介のお蔭で午前中は面會謝絶といふ掟を破つて僕を快く引見された、尤も其の以前毎年四季に新聞社の懇親會が行はれた時には、僕も二三度出席して居士其他の大家の顏は見知つては居るものゝ、此の先生達の談話を遙か末席で謹聽するのみで中々盃を交換する迄に至らなかつたから、居士と膝を突合せて話をするのは此時が初めてゞあつた。さて來意を述べて閲歷のお話を承はりそれを私が書取つて參りたいと云ふと、居士は笑つて我輩の傳記は半日や一日で述べ盡されるものでは無い、幸ひ一兩日は夜分閑だから自分が書いて送つてやらうと約せられ、それから新聞記者としての責任抱負などの說を聞いて辭し去つた翌々日、約に違はず自筆の自傳を郵便で送り越されたが、其の用紙は美濃十二行罫紙で紙數十六枚、處々塗抹したところもあつて如何にも一夜で書き流したものらしく見えたが、其割に字體も鮮明で今更ながら居士の健筆なるに驚かされた。其の自傳は

福地源一郎又の名萬世字は命甫、天保十二年三月廿三日を以て長崎本石灰町に生る、福地苟庵の末子なり幼名を八十吉と云へり翁は原長府の藩士なり壯年の頃故ありて鄕里を去り京坂江戸の間に遊學し頗る經史百家の書に博かりしかども青雲の志を遂ぐること能はず、由て醫業を學び長崎に來りて其業を修めたり。福地嘉昌翁時に長崎に居を移し一見その奇才を賞し遂に養ひて嗣とし娶するに其女を以てす（即ち源一郎の母なり）苟庵翁數子を擧げたれども皆女子なりしに晩年に至りて初めて男子を得たり、八十吉と名づけ之を鍾愛したりと雖も家庭の教育最も嚴なり、五歲の時より讀書習字を授け七歲にて外師長川東洲翁に就て學ばしめたり、東洲翁

も亦之を教ふる他に異なり、斯く内外の教育を得たるが爲に奇童などゝ云はれたりき、十歳にして初めて郷の童子試（素讀吟味）を受け十三歳にして試業（學問吟味）を受け倶に甲科に擧げられ其後郷試を受くる每に甲科を得ざること無し、蓋し長崎の地たる當時文事は豐かなりと雖も概ね書畫詩賦の末技に止まり眞に漢學を修むる者は太だ罕なるに由るなり。

と云ふに始まり、十八年の春伊藤參議が特派全權大使となつて清國に赴いた時之は隨行して北京天津を歴遊した事で筆を止めて居るが、この傳記の終りに

世間にては福地を才子と思ひ大に畏るれども其實は才子に非ずして不才子の方なり敏捷と云ふよりも寧ろ遲鈍の方なり○權謀術數に富むと云ふも實は至て不得手なり性質淡泊にして隱微は嫌ひなり但し勘辨強き男なり○學問は迚も學者の地位には立つこと能はず漢學も一ト通りなり英學も同斷なり文章なども三十歳頃までは詩文も少々出來たれども今は一切之を廢したり唯文は達意を旨とせり今日の流行文章は實は福地が書き始めたるものと云ふべし、其の文章は之を西洋文より得來れるなり○或る小傳には福地は後漢書が大好きと見えたれど實は大嫌ひなり支那の史類にては五代史が好きなり、英文の史類にてはギッボンの羅馬衰亡史を讀むを好めり一體の文はマコーレーを見本とすと云ふ怪しきものなり○樂みは讀書と談話なり談話は相手を嫌はず何の話にても面白し書も其通りなり故に學問は博く雜駁なり其中にて稍や心を委ねたるは經濟學と外交學なるべし、談話の最も好物は子供の時の話なり偶々竹馬の友に逢へばつまらぬ子供の時の話に時の移知るならず故に一旦交りを結びたる上は人と中違へをなしたる事なし○怒る事は最も稀なり腹が立てばジッと我慢して居れば其儘直るなり蓋し年少の時には敏捷にて記憶よく喜怒の甚しき男なりしが三十歳頃より凡て其の性質を一變したるは艱難の經歷を得たるが故なるべし○議論には是非利害を明析しながら一身を處するの上に於て常に誤る所あるは福地の短所なり是れ所謂人情にからまるが故なり現に今日の廟堂貴顯は其の知已なれば何分これに背くに忍びず僕は情誼の爲には自說を枉ぐる事もありと云へり○薰陶はその長ずる所にや日報社にて福地の薰陶を得て立身したる人々多く、末松謙澄、久保田貫一、池上三郎、海内果（死）など皆その人なり○書も甚だ學びたるに非ず長崎にて幼年の頃手習ひしたる迄なり但し父が書を善くしたるが故に或は遺傳せるものにや○平家を語ることは名人なり聞いて面白くない丈けの事なり。

と附記して居るのは飾りなく其の心事を打明けたもので、居士の抱負を知る上に於て興味ある告白である。其後僕は十九年以後に於ける居士の傳記を補綴せん事を思ひ立つた事もあつたが、少しばかり書き始めた儘例の疎懶の癖で終に中止して仕舞つた。それから數年の後即ち居士が日報社長の印綬を讓つて新聞界から退隱し、歌舞伎座の作者となつて築地二丁目に居られた頃久し振に訪問して、先年自傳を贈られた事を謝し且その傳記を補綴しかゝつた事をも話した時、居士は微笑して成程そんな事もあつたやうに覺えるが、自分は既に得意の時代を去つて今は失意の境遇に沈んで居るら、我輩の傳記は明治十八年までを以てやめて置て貰ひたい、併し老後の思ひ出として心中に籌策して居る事もあるから其の發展までは身上話をする事は御免だと答へられた、されば居士も何事か期する所があつたらしいのに其意を果さずして逝かれたのは甚だ殘念な事である。

坪内逍遙先生が『小說神髓』を公けにされたのも亦十八年の事であつた。同書は綠雨氏から借りて僕も每夕社で通讀し、引續いて發行された『書生氣質』も綠雨氏は出版の都度之を懷にして出社し吾々にも見せて居た。そこで此の『小說神髓』に於て著者が從來の勸懲主義を排斥し、小說は須らく心理的なるべしと疾呼された聲が當時の新聞小說家——即ち舊派とでも名づくべき人々——の耳にどう響いたかといふ點は、深く研究すべき問題で、唯一個の私見を以て憶斷すべきでは無いが、當時を追想して見ると是れは空谷の跫音には相違なかつたが、舊派の人々が悉く其音に目覺めて直ちに其の指導に從ひ新しき道に一步を踏出したといふ程の影響は與へなかつたやうである。例せば魯翁の如きはそれは理論に過ぎずしてまだ現代の讀者には不向であらう。何となれば日本の小說は其の仕組を第一とし看る人に感興を與へるのが主眼だから、趣向の上に多少架空を交へるのは當然で寧ろ是れが作者の働きと云ふべきである、尤も此の文明の世に神佛の奇瑞を說いたり妖怪變化を出すやうな事は避くべきであるが、事實らしい嘘を交へて面白く讀ませ知らず識らずの間に讀者を感化し之を善導するので無ければ小說の價値はない、『神髓』の著者が只管人事自然の狀態を描寫するの

が小説の主腦だと云はれたのは西洋小説を見ての議論であらうが、夫れは人の姿を寫眞に取れと云ふやうなもので、寫眞は其人そつくりを寫すのだが眼で觀ての面白さは綿綸の綺麗なのには及ばぬでは無いか、小說は即ち寫眞以上に潤色した綿綸であるから、そこに多少の綺空事を附け加へるのが取りも直さず作者の技巧である。故に人物の性情にしても芝居でする善人は白面惡人は赤面といふが如く、一見して讀者の解り易いやうに成る可く誇大に且抽象的に書き顯はすのが好いと思ふと云ふやうな說であつたと――うろ覺えながら――記憶する。中には議論は議論として餘り新奇に奔り過ぎたものだと、自分が世に後れて居るのには心付かずに尙早論を唱へた人もあつたらしい、而して僕が知る所の範圍內では綠雨氏は慥かに『神髓』隨喜者の一人、其他では須藤南翠氏ぐらゐなもので、同氏は逍遙先生の所論に對して自家の意見を「改進新聞」紙上に揭げた事もあり、又其後の著作に徵しても大分寫實に傾いた新しいものがあつた。

さうかうする內に、硯友社から『我樂多文庫』が出で、金港堂からは『都の花』が發行されるといふ氣運に向ひ、新進作家が續々と名乘を揭げて討つて出で、從來の新聞小說家の多くは自然と人後に落ちて、茲に全く新陳代謝が行はれ小說界が一變したのは僕が在坂中の現象で、當時の實況は知る人も多い事ゆえ此邊で筆を擱く。

〔追記〕僕に判取帳なるものが二冊ある、それは文學上の先輩又は風流上の交友諸氏の筆跡と印影とを集めたもので故人となつたのには其の歿年月と享年とを書入れて置くのである、前に揭載した綠雨氏と櫻痴居士の筆跡は即ち此の判取帳から抄出したのだ。

大阪に於ける文學隆興の第一期

河井酔茗

明治文學胎生期の文學的現象は、東京が中心であつたに違ひないが、併しわれ〳〵の如きはその時期に於て大阪地方に居て、中央文壇の影響を受けると同時に、地方的文化にも參與してゐる。それも亦胎生期の一現象として見免すことは出來ない。

私は本誌の明治文學混沌期研究號で、大阪地方の明治文化曙光期を述べた關係上、それに續いて起つた大阪の文運隆興の推移を極めて簡單に述べて置きたい。

曙光期にも述べた通り十五六年以前の大阪には、獨立した文學はなかつた。大阪を中心として獨立した文學の起つたのは、明治年間に二度しかない。第一期は明治廿四五六年頃、第二期は三十一二三年頃である。第一期に出た人達は殆ど大阪で終始し、第二期に出た人達は大半東京に移つて、現文壇の人となつてゐる。即ち第二期には中村吉藏、高須芳次郎、西村眞次、高安月郊、薄田泣菫、與謝野晶子等の諸氏がその主なるものだが、私もまた仲間の一人であつた。その時期には語るべきことも多いが、胎生期の研究號には先づ第一期の現象だけを述べて、第二期のことは他日に讓らう。

隆盛期に先ち二十年頃の大阪で發行された小さな雜誌がある。新聞以外の定期刊行物が大阪にあつたのは珍しいので、一つは『ちゑのあけぼの』と云つた。十九年の冬に初號を出した、純然たる子供もので初めは四頁（四六二倍大）、週刊で定價一部五厘、後に八頁になり一錢になつた。發行所は江戸堀の福生社だが持主の署名に福永文之助とある、福永は

後に銀座の警醒社の主人であつたやうに思はれる。同じ人であつたらうと思はれるわけは、同誌の根本が基督教主義であり、子供雜誌に英語の手引などを載せてあることだ。多分宣傳の意志があつて、それを表面に現はさず子供雜誌の形で現はしたのだらう。面白い記事と大きい繪と少年の作文とがあつて親切な編輯ぶりだつた。それが二十二年頃にはなくなつて、『文之友』といふ投書專門の同じやうな體裁の雜誌が心齋橋筋から出てゐた。東京の『頴才新誌』に似て投書家は主に關西の少年、今は伊丹に居て醫學上の著述に名ある香涯田中博士もその頃から盛んに投書してゐた。

十六年に戎座で「若綠二葉松」が演ぜられたと月郊氏の記事が本誌にあつたが、してみるとその頃から新聞の續きものが重きをなしかけてゐたのだ。關西に於ける繪入つゞきものゝ勢力といふものは、普通の記事以上であつたので、新聞の讀者は續き物で左右された。就中面白さうな續き物は必ず芝居になり、當時の花形片岡我童（仁左衛門）の才氣、雁次郎の情味と相俟つて、京阪士女の胸を躍らせたものである。

渡邊霞亭、宇田川文海などの新進が新聞界に現はれ出したのもその頃だが、まだ文學として獨立するまでには行かなかつた。そのうち東京で出版される活字の稗史小說を盛んに取次いだ駸々堂から『百千鳥』といふ月刊小說雜誌が出た。體裁だけは『新著百種』に似てゐたが內容は低級だつた。外には天王寺の一致倶樂部から發刊した『一致倶樂部』があつて、多少文學に緣のある記事も載つたが要するに雜駁な雜誌であつた。

大阪の文化は東京の文化に刺戟されて起るのが常で、從つてその間に多少の時日がある。廿二三年には既に紅葉、露伴が現はれ、明治文學の基調が成立したのであるが、大阪では稍後れて二十五六年に盛んになつた。

從來新聞のつゞき物にばかり筆を執つてゐた連中が、獨立した機關を持ち、各自に創作を發表するやうになつた。その代表的に小說雜誌は『なにはがた』であつたらう（二十四年か五年）。主として大阪朝日の系統に屬する文進文士が執筆したやうだ。大抵短篇の讀切ものので、東京の作家を模倣したものたが、模倣は矢張り模倣であつて、その中には記憶

に殘るやうな傑作も出なかつた。熱心と若々しさはあつたが技倆が足りなかつた。主なる執筆者は渡邊霞亭、西村天囚、加藤紫芳、熊谷濂、岡野半牧、加藤眠柳、武田仰天子、武富瓦全、中川霞城、野崎左文、山田芝廼園、槇野半醉、堺枯川、木崎好尙、久松澱江、小田淸雄、磯野秋渚、本吉欠伸、關如來、須藤南翠等で、此の一團は浪華文學會といふものを組織し、その名の下に協同した。右の中には作家も評論家もゐた。天囚、秋渚、好尙などその方面で知られ、秋渚は『柵草紙』にも評論など出してゐた。仰天子、濂、欠伸などの作品には新進らしい意氣があつたやうだ。

また『なにはがた』の一派は二十六年に『浪花文學』を發行して、小說以外の評論を掲げ大いに東都文壇に對抗の氣勢を示した。併し雜誌は永くつゞかなかつた。

堺枯川の大阪時代は恰も此の時期に當り、小說紀行俳句評論等、大いにその文才を發揮してゐるが、まだその主義は現はれてゐなかつた。小說家の本吉欠伸は氏の令弟である。(『改造』本年三月號參照)

山田芝廼園も當時に於て文學には熱注したと見え、獨力で『葦分船』といふ文學雜誌を出してゐた。全文六號活字三段組といふ洒落れた體裁で、西鶴氣取りの創作などもあつた。『柵草紙』の鷗外に喰つてかゝり論戰したことなどもある。この『葦分船』には當時矢張り放浪時代に在つた德田秋聲が小說を書いた。氏はその頃郡役所へ勤めてゐたが可なり不遇な生活をしてゐたらしい。その點は小學敎師などしてゐた堺枯川と似てゐる。

『大阪文藝』の發行も『なにはがた』と同時代で、これは大阪毎日系統の文士の機關であつた。『なにはがた』は四六形の日本綴で優美な册子風であつたが、『大阪文藝』は菊版の普通雜誌型であつた。素より小說が主だが評論隨筆の類も並び載せられた。その顏觸は菊地幽芳、宇田川文海、近藤南州、相島双翠、佐藤千歲、木內愛溪、渡邊台水、久保田小塊などが主なる人達であつた。幽芳も未だ小說の手初めであつたから格別優れた作もなかつた。外國文學を紹介した愛溪の筆力には見るべきものがあつたやうだ。

此の一派はまた後になつて『此花草紙』(二十六年)を發刊した。堂々たる雜誌だつたけれど、二三號で廢刊したやうだ。

雜誌以外の出版物も相當にあつて、積文館、寶文館(岡島)、嵩山堂、文華堂(吉田)等の書店から源氏湖月抄、萬葉集略解その他國文學漢文學の飜刻が出版され、吉田文華堂から『小說文範』(江戶時代小說家の名句を抜萃したもので其積や一九が多い)が出たのは異彩であつた。

以上は大阪の文學だが、此の時期には獨り大阪ばかりでなく、全國的に然ういふ氣運がみなぎつてゐたので、今なら同人雜誌とか個人雜誌とかいふ處だらうが、當時の所謂地方雜誌も相當にあり、それ〴〵各地方の文學を鼓吹したやうだ。大阪近くでは京都の『同志社文學』(これは有力な文學雜誌の一つだが高安月郊も多く執筆してゐた)、熊本の九州文學』、山口の『文藝』、千葉の『東洋文學』、神戶の『同胞交際新聞』『文舞臺』(つまらない私の小說などが載つた)等まだ〳〵あつたやうに思ふ。大阪にもまだ『一點紅』『小文壇』などがあつた。

當時私は堺に居た。而して新舊の文學書を涉獵してゐたのだが、純文學の外に『新日本の青年』や『將來の日本』に刺戟されて『國民之友』『日本人』なども讀んでゐた。『文學界』などは堺中で私と今一人しか取つてゐなかつた。その一人は無論晶子さんだらうが、その時にはまだ知らなかつた。友人はあつたけれど皆子供あがりだつたが、『いらつめ』の投稿家で三阪水銹といふ人があり、その仲間の二三人が文學を語り得るのだつた。會つてみると年齡も少し上で、小學校の先生達であつた。水銹は後に小說も書き、大阪の文壇では知られてゐた。私は別に還境の淋しさから書面上の交際といふことを主張して天下に同志を求めた。五六の人と文通を初めたが近江の金子幽花子と名乘る人が、新體詩も和歌も書も上手であつた。私の最初の文友で永く文通してゐたがとう〳〵その人には逢はずに了つた。最も今でも生きて居れば逢へるのだ。さういふ風で私も詩歌小說等の眞似事はしてゐたが先づ一個の生意氣な文學青年だつたのだらう。

幽芳は後に家庭小說で一家を成し、霞亭は歷史小說で一家を成し、天囚は文學博士になり、秋濤は學者になり兒に角關西土着の人として功果を收めてゐるが、つゞき物作家で終つた人や、新聞記者になつて了つた人や全然方角ちがひへ奔つた人や、大部分は明治文學の圈外へ逸出してしまつた。而して此の胎生期は過ぎ去つたのである。

大阪及び各地方に起つた胎生期の文學現象は、二十七八年戰役にきれいに一掃された形であつた。東京ではその文學線が低いながらも波を描いて居たが、地方に於ては殆ど水平線にまで下つたのである。それがまた三十年代の東都文壇の新氣運に動かされ、再び三十一年頃から波線を高め初めたのが大阪に於ける文學現象の實際であつた。



イタリイのボッカチョの『デカメロン』の一節を譯した『想夫戀』は明治十九年に出てゐる。伊國文學士ボッカス翁原著佛國學士ア・サバチエールド・ガストル氏譯、同畫師チョロジウー・ピコー氏插畫、日本臥牛樓尙重譯補述菊亭靜先生校定と銘を打つてある。尙文のところ〴〵には、鐵窓高瀨眞卿、蜻州笹島吉太郎、狂天田島象二三氏の評がついてゐる。臨池書院の發行であ。。當時の飜譯文學を知るには絕好の書であらう。

明治時代の閨秀作家

馬場孤蝶

上

明治文壇への女作家の出現は大凡何時時分であつたらうか、手許には今何等の書類もないのだから、何とも云ひやうはないのだが、無論男の作家の出現よりは少し遲いことは確であつて、何うしても二十二年位から後のことだとは云つてよからうかと思はれる。

年代は勿論確ではないが、木村曙女史などが早い方ではなかつたらうか。此の人は木村莊太、同莊五、同莊八君などの姉さんのやうに聞いて居る。尾崎紅葉君の門下ではなかつたらうかと思ふのだが、何ういふ作物があつたのか、今一向に記憶がない。唯讀賣新聞などでその人に關する消息を讀んだことだけは、朧氣ながら覺えて居る。此の人は若くして死んだらしい。莊五君などは覺えて居らぬやうだ。

その次ぎには、田邊花圃女史即ち今の三宅龍子君の名を聞いた。同君の『藪鶯』が坪内大人の推薦的序文つきで發售されたのは、これもはつきり何時だかは記憶に止まつて居らぬが、二十四年頃ででもあつたらうかと思ふ。

その次ぎには、小金井きみ子、若松賤子――前者は故鷗外大人の令妹で、醫學博士小金井良精氏の夫人、後者は、當時基督敎會の名士で敎育家であつた巖本善治氏の夫人――の兩君ぐらゐな順にならうかと思ふけれども、世間では此の

兩君に就ては、明治二十八年秋の文藝俱樂部の『閨秀小説號』なるものが出るまでは、餘り多くは知らなかつたらうと思ふ。兩君のものは大抵飜譯物であつたやうに思ふ。何か創作があつたかも知れぬが、僕などの記憶には止まつてゐない。前者の筆になつたものは『しがらみ草紙』に現はれ、後者のものは『女學雜誌』に現はれたと思ふ。

田澤稻舟女史の名を吾々が聞いたのは何時頃であつたらうか。大抵明治二十六七年頃であらう。山田美妙齋氏に結婚しないうちに既に幾分の文名はあつたのではなからうかと思ふ。前記の『閨秀小説號』であつたと思ふのだが、稻舟女史の『白薔薇』とか何とかいふ作が出てゐた。今はその梗概さへ記憶しないが、唯そのなかに、男が女に對して魔睡劑を用ゐる條下があつたので、女作家としては、可なり大膽なことを書いたものだといふので、當時の人々の噂に上ぼつたことだけは記憶してゐる。けれども、小說そのものは、當時の標準から見ても、餘り藝術的に完備したものではなかつたやうに覺えて居る。無論そんなにくわしい寫實的なものでもなかつた。

稻舟女史はもうその時は、美妙氏とは別れて居つたのではなからうかと思ふ。此の人は、秋田か何處かのお醫者の娘さんであつたといふ話であつた。自殺したのは、その『白薔薇』とか何とかいふ小說が出てから間もなくであつたらうと思ふ。

當時の世評では、美妙が稻舟女史との別れ方が無情であつたといふのであつて、これが爲めに、美妙の人氣はすつかり落ちてしまつた。大橋乙羽の話では、美妙齋のものを載せると承知しないぞといつたやうな脅迫狀が博文館あたりへは盛んに舞ひ込んだので、雜誌へ美妙氏のものを載せるわけにいかなかつたといふのであつた。

當時の『早稻田文學』には――ほかの雜誌も無論さうであつたが――美妙の不德なるものを大に攻擊した短評のやうなものが出た。平田禿木がそれに對して、『わけ知りの坪内さんもいらつしやることだし、さうまで美妙をやつつけなくつてもよからうぢやないか』といふやうなことを『文學界』の月評欄へ書いたところが、早速翌月號で、『文學界のやつつ等

はけしからんことをいふ。あゝいふ不德が見のがせるか。あれを何とも思はぬやうでは、文學界派の者どもの道念の存在が疑はしい』といつた意味のお叱りを蒙むつて、一同大に閉口した。

今ならば、大抵のことでは、貴君がたの方から叱られはしまいと思つて、安心してゐるのだが、本間さん何んなものです。

それから少しあとになつてからだと思ふのだが、川上眉山君から、山田氏のおつかさんといふのは、なか〳〵行儀作法のことなどのやかましい人で、山田氏の朝寢などにも小言をいふのださうだといふ話を聞いた。山田氏と田澤女史との絕緣は實際已むを得なかつたのであらう。

僕等は事情を——唯世間話で聞いただけで——直接何も知らなかつたので、何もいへなかつただけであつたのだ。

北田薄氷女史の作も前記の『閨秀小說號』に出て居つたと思ふ。此の人は日本橋の辯護士北田正董氏の娘さんで、紅葉門下であつたと聞いて居つた。後に畵家梶田半古氏に嫁したのも、紅葉氏などの媒酌ではなかつたかと思ふ。

大塚楠緒子——文學博士大塚保治氏夫人——の作も何か『閨秀小說號』に出て居つたらうかと思ふ。此の人は明治女學校へ通つて、透谷、藤村、秋骨などの人々の講義を聞いたのではないかと思ふ。

北田女史は餘り作を遺さずに夭折したけれども、大塚女史の方は割合にあとまで生きて居つたためもあるのだらうが、可なりな量の作品を遺して居ると思ふ。大塚女史の逝いたのは、或は大正へ入つてからではなかつたらうか。明治四十一二の年頃、一度夏目漱石君のところの新年會で見かけたことがある。

『閨秀小說號』では、若松賤子女史の『小公子』が大分評判であつた。小金井女史のものも可なり長い飜譯ものであつたやうに思ふ。

中

以上、まことに取り留めもない話で、こんなことなら、今日多念に當時の新聞、雜誌などを調らべられる人々の方が、よつほど確なことを書かれることゝ思ふのだが、僕としてはこんなこと位しきや知らないのだから、しかたがない。

樋口一葉女史以外の古い女作家のことで、僕の今端的に思ひ出せるのはこんなものであるのだが、一葉女史のことになれば、可なり詳細に書き得る。それは、女史はなかなかくはしい日記を遺して居るのだから、女史のこと――殊に作家となつてからのこと――を書くには、あの日記を抜き書きさへすればいゝからなのだ。

此頃の何處かの雜誌に『文學人國記』といふやうなものが出て居つて、それには樋口一葉は甲州の人だと書いてあつた。けれども、樋口女史は明治五年に麹町區山下町で生れたのみならず、一度も甲州へは行つたことがなかつたらうと思はれる。

樋口女史の父母は甲州の鹽山から一里程山の方へ入つた大藤村の人であつたが、侍になる積りで、夫婦一緒に安政年間に江戸へ出て、お父さんの方は旗本菊池家、お母さんの方は同じく稻葉家といふのへ奉公して、間もなく與力の株を買つて、八丁堀衆に加はり、幕臣となり、維新後東京府の役人となつて、前記の山下町の官舍に居て、其所で一葉女史が生れたのだと聞いて居る。だから、齋藤綠雨が全集の卷頭に序したやうに一葉女史は東京の人なりと云ふ方が宜しからうと思ふ。昔は三代住まはなければ江戸ッ子ではないと云つたさうなんだが、東京になつてからは、二代位で東京ッ子でよからうではないか。

第一『人國記』などゝ云つて、唯生れた場所ばかりで、同じ日本の人間を一樣に分類することが何の意味があるのであらうか、現に僕などは土佐人といふことになつて居るのだが、土佐で生れたには相違ないにしても、土佐を出たのは

十歳の時で、東京の生活の方は何うしても四十年以上になる。その四十年の方へは何等の考慮も拂つてくれずに、十歳までしきや暮らして居らなかつた土地の方ばかりを重い關係に見られるのは、ヘンなものであると思ふ。さういふ例は外にも幾らもある。戸川秋骨君なども肥後人となつて居るのだが、これは、父祖からして定府で、唯維新後一寸藩地へ引き籠つて、其所で秋骨君が生れ、その後直きに東京へ定住してしまつたのだから、殆ど東京人と云つてい丶位である。

さて、話を戻して、一葉女史のことをいふこととするが、女史は若い時分に父を失ひ、兄を失つて、戸主になつた。それは女史の十八の時であるといふのだ。教育といふのは、それまでに、小學校――池の端仲町文海小學校――揚げ出しの筋向う位の池に面したところにあつた私立小學校であつたと思ふ――をば先づ卒業したと云つて宜しいのであらう。

日記に據ると、明治十九年八月に、小石川安藤坂の歌人中島歌子の門に入つた。だから、一葉女史の教育は國文教育を受けたと云つてい丶のである。今全集に入つてゐる女史の日記は、二十四年の四月十一日から始まつてゐる。さうすると、それは一葉女史の二十歳の時であるのだが、それにしては、雅語の驅使などいかにも自由で、可なりに馴れた文體である。教育の具合も無論ちがひはするが、今の二十歳位な女などにあれだけの文章――雅文――の書ける人は全く絶無であらう。當時でも何うであつらうか、兎に角所謂眞の才媛であつたにちがひない。

それまでに、一葉女史は文化、文政からしての徳川期の和かい文學、當時の新聞、筆行本などとで小説といふやうな讀書は可なりやつて居つたのであらう。

生活の爲めといふ意味もあり、また學問的の仕事に就くといふ意味もあつたのであらうが、一葉女史はその時分から小説を書き習ひはじめようと思ひ立つた。野々宮きく子といふ友達が、半井桃水氏を知つて居つて、紹介してくれたので、一葉女史が四月十五日に始めて、桃水氏を芝佐久間町の寓居に訪問して、入門したことは、日記にくわしく書いてある。その時は、女史は書いて持つて行つた小説一回分を批正を請ふため置いて來た。

同じ月の二十一日のところには、桃水氏に見て貰らうために、前の小説の續稿を五回書いたとある。此の小説は今全集のなかに收められて居る題のない小説らしいのである。二十二日には、その小説を持つて半井氏のところへ行つたところが、半井氏から左の如く云はれたといふのだ――

『先の日の小説の一回新聞にのせんには少し長文なるが上に、餘り和文めかしき所多かり、今少し俗調にと敎へ給ふ』

一葉女史の筆になれるものは、始の方のもの、卽ち、『おほつごもり』――二十七年十一月頃の作――以前のものは、小說でも隨筆でも皆此の和文めかしきところ卽ち雅文調が勝つて居ることは人の知るところである。殊に、『朧月夜』、『五月雨』、『經机』といふやうな作は、著しく雅文脈のものである。日記でさへ、二十七年位までのところには、雅文調が强くなつて居るやうに思ふ。

四月二十五日には、桃水氏から小說のことで相談があるから、表神保町の俵屋といふ下宿屋へ來てくれといふ手紙が來たので、一葉女史は二十六日の午前に、震災前まで南明俱樂部のあつたところの裏あたりの下宿屋に桃水氏を訪問した。日記に洽集館とあるのは、南明俱樂部になる前の勸工場である。後にその勸工場は燒けて、その跡へ南明俱樂部が建つたのだと思ふ。

五月十二日に桃水氏は麴町區平河町へ轉居したので、一葉女史は翌十三日に桃水氏を訪うて居る。

さういふ風にして、半井氏との交際が親密になつて、二十五年の二月四日には、雪の日に半井氏を平河町に訪うて、長く談話した。明治二十六年の一月頃になつて書いた『雪の日』――『文學界』所載――はその時の氣分を材にして書いたものらしく思はるゝ。

同じ月の十三、十四日のところには、一葉女史が小說を書いたことが出て居る。これは多分、女史の作ではじめて活版になつた『闇櫻』のことであらう。

三月七日には、一葉女史は半井氏々訪問して、半井氏等の同人雜誌『武藏野』創刊の前景氣の話などを聞いてゐる。このあたりの記述の調子は今から見ると、如何にも古風で、當時の文學者――謂はば舊派の人々――の口調などがよく出てゐて、甚だ面白いと思ふ。

一葉女史の日記の二十四、五年頃のところには、圖書館へ通つたことが度々出て居る。その時分は、上野より外に公開の圖書館はなかつたのだ。一葉女史は圖書館へ通つて勉强をしてゐたのだ。圖書館へ女はめつたに行かない時分であつたのだ。

三月二十八日にも小說を書いてゐる。これは半井氏の紹介で、當時あつた『改進新聞』といふのへ出さうといふのであつたらしい。これは『玉だすき』で、淺香のぬま子といふ名で出たものださうだ。

六月頃になると、半井氏との交際に關し、知人間で飛んでもない噂が始まつたので師中島氏とも相談の上で、一葉女史は桃水氏との交際を絕つてしまつた。此の時分には、半井氏が左の如く云つて――

『君が小說のことよ、さま〴〵に案じもしつれど、到底繪入の新聞などには向き難くや侍らん、さるつてなやう〳〵に見付けて、尾崎紅葉に君を引合せんとす、かれに依りて讀賣などにも筆とられなばとく多かるべし、又月々極めての收入なくば經濟のことなど心配多からんとて、是をもよく〳〵計らはんとす……』

さういふ風に一葉女史を紅葉氏に紹介する筈になつてゐたのだが、右の絕交のために、一葉女史の方から紹介を斷はり、又外のつてからも尾崎氏へ行くのは、半井氏に對して義理が惡い譯であつたのだから、そのまゝになつてしまつて、一葉女史は紅葉氏には逢はずにしまつたのであるが、此の時尾崎氏に逢つて居つたらば、一葉女史はもつと早く文名が出たらうと思はれる。

下ノ一

更に又日記を參照すると、一葉女史は九月十五日に小說『うもれ木』を脫稿して、田邊龍子氏のもとまで持つて行つた。これは、龍子氏の紹介で小さい本にしようといふ積りで本町三丁目の金港堂へ送らうといふのであつた。此の小說は陶器畫工の妹を主人公にしたものであるのだが、日記の二十四年の九月分あたりのところを見ると、花瓶の圖樣を書き留めたものがある、一葉女史の二番目の兄さん虎之助氏——現存の人——が陶器畫工であつたので、それから聞いて書きとめたものに違ひないと思ふのだが、『うもれ木』のなかにはその圖樣及び燒きつけ方がすつかり使つてある。脫稿したのは二十四日頃らしい。これは『經机』なんであらう。

同じ月の二十三日に甲州の『甲陽日報』といふのへ小說を書いてやることにしたといふ記入がある。

十月二日のところに左の如くある。

『田邊君よりはがき來る。うもれ木一と先都の花にのせ度よし金港堂より申來りたるよし、原稿料は一葉二十五錢とのこと、異存ありや否やとなり、直ちに承知の返事を出す』

日記には何も書いてないやうであるが、大凡十月ぢう位に小說をもう一つ書いたらしく思はるゝ。これは二十六年になつて『都の花』に出た『朧月夜』である。

十月から暮へかけて、金のことでひどく頭を惱ませて、原稿料のとゞくのを鶴首して待つてゐる有りさまが、日記の諸所で窺はれる。殊に十二月二十七、八日あたりの、『朧月夜』の原稿料を受け取るあたりが甚だ面白い。其所の記述には後年の『濁り江』の材料になつたかと思はれる一節がある。それは稻葉こう子の貧居を訪うた記述である。『濁り江』の源七佗住居のくだりと併せ讀むべきものであらう。

二十九、三十兩日は『必死と小說に從事す』とあり、二十六年の一月二十日のところには『小說雪の日したゝめ終る』とある。

一葉女史のその後の生活は所謂る生活難に對する惱みであつて、直接文學に關することは餘り日記には表はれ居らぬやうである。

二十六年七月になつてからは、一葉女史の一家は小あきないを始めることに相談をきめて、十五日から家さがしをやりだした。方々見て廻はつた末に、十七日に至つて、大音寺前――下谷區龍泉寺町三百六十八番地といふのに家を見つけた、それは、日記によれば、間口二間、奥行六間ばかり、雜作はなかつたが、店は六疊で、五疊と三疊の座敷があり、敷金は參圓で、家賃は月壹圓五拾錢であつたといふのだが、今日の相場からいふと、全く嘘のやうな話である。場末であつたにしても、何しろ安いものであつたと云はなければなるまい。

樋口家の人々がその家へ引き移つたのは、同じ月の二十日である。龍泉寺町が吉原遊廓の裏手であることはこゝにいふまではなからうと思うのだが、念の爲めにこゝに附記して置く。商なひでは、荒物及び小兒のおもちや、駄菓子といふやうなものであつたので、一葉女史自身神田多町(たちやうと讀んで頂きたし)へ買ひ出しに行つた。

日記のこの邊の記述によると、當時の細民の生活狀態、物價等の一斑が窺ひ得られて如何にも面白い。

樋口家の人々は二十七年四月一杯まで龍泉寺町に住まつてゐたのであるが、その時分の作物は二十六年十一月頃に出來た『雰の音』――『文學界』への寄稿――と二十七年の二月の十八、十九日に四回分二十枚ばかり書いたといふ『花ごもり』――同上――だけであつたやうだ。尤も此の『花ごもり』の讀稿は龍泉寺町に居る間書いたらしく思はれるのだが、それが何時のことだか、日記では分らない。

樋口家の人々の本鄉丸山福山町四番地へ引き移つたのは、二十七年五月一日であつた。『家は本鄉丸山福山町とて、阿

部邸の山にそひて、さゝやかなる池の上にたてたるがありけり、守喜といひしうなぎやの離れ座敷なりしとて、さのみ古くもあらず、家賃は月三圓也、たかけれどもこゝとさだむ。』とある。六疊二間に四疊半があつて、池があり、庭があつて、月三圓、それでも少し高いのであつたといふ時代なんだから、當時の物價の大體は窺ひ得られやうと思ふ。

此の家が一葉女史終焉の家である。しかし、家そのものは、明治四十三年の秋隣りの山の崕が崩れてこわれてしまつたので、今は存在して居らぬ。

一葉女史が福山町へ越してから、最初に書いたのは、小説『やみ夜』らしい。これも『文學界』へ出たものであるが書き始めは何時であつたのか、日記にはない。唯七月十九日のところに『小説やみ夜の續稿いまだまとまらず、編輯の期近づきぬれば心あわたゞし、此夜馬場孤蝶子のもとにふみつかはし、明日の編輯を明後日までのばし給はらずやと頼む』とあるのみである。二十二日のところには『今朝やみ夜の續稿郵送』とある。

二十七年七月二十三日以後の日記がないのであるから、何時だか分らないが、とにかく十月頃に『おほつごもり』を書いたらしい。一葉女史の文體も考想もこの作で急に一轉機を來たし、要するに、驚くべきほどうまくなつたのであるが、これは次第に筆が熟してさうなつて來たのが主因であるには違ひないのだが、一つは、その夏頃から一葉女史が西鶴の好色本などを可なり丁寧に讀み始めたことは、それ等の文體等の變化に餘程の影響のあつたことだと云つてもよからうと思ふ。

一葉女史の傑作『たけくらべ』が何時起稿されたものだか、日記が前記の通りないのだから、確なことは分らないのだが、二十七年の十一月か、十二月に起稿したには違ひないのだ。あの作は人の知る通り、材を　音寺前あたりの子どもの生活に取つたもので、吉原の裏手といふ極めて特殊な場所の人生を描寫した點に於て、記憶すべきものであるのだが、あゝいふものを書いてみようといふ考は、大音寺前居住の時代に起つたものとは推定し得られやうと思はるゝに拘

らず、それに關することは日記のなかにもなければ何等の記錄も樋口家には遺つて居ない。尤も、一葉女史は作に關する思ひつきとが材料といふやうなものを手帳とか紙ぎれとかいふものに、心覺えに書きとめて置くといふのではなかつたやうであるのだから『たけくらべ』に就ても日記のなかにそれに關して書いたところがない以上、外に記錄がないのは敢て怪しむに足らざることとである。但し、『たけくらべ』のなかの或る章句などに就ては、その材料が大音寺前時代の日記のなかにあることは、誰でも氣づくことであらうと思ふ。

唯、あの作の始の方三枚ばかりのところの下書きが樋口家に遺つて居る。そのことに就ては、眞筆版『たけくらべ』の末の方へ僕が書いて置いたが、題は『雛鷄』といふやうになつて居つたかと思ふ。文章はさうあの作の始めと違つては居らぬ。

『たけくらべ』は『文學界』の一月號位から十月か、十一月號位まで〻完結したと思つて居る。『文藝倶樂部』へ出たのは、その翌年の一月頃である。

下ノ二

二十八年になつての一葉女史の作は、『太陽』へ出た『ゆく雲』であるが、これに就ては日記のなかに何も記載はないけれども、三月頃に書いたものであらうと思ふ。

『濁り江』は同年の九月の『文藝倶樂部』へ出たのだが、日記六月十日のところに、『小說著作に從事す、全篇十五回七十五枚ばかりのものを作らんとす、いまだ筆おもふまゝに動かで………』とあるのだが、これが或は『濁り江』になつたのではなからうか。これは、福山町の一葉女史の住居の近邊は銘酒屋の巢窟であつたので、さういふ家に居た女の一人をモデルにして、あのあたりの人間の生活を描寫したものである。

その次ぎの作は『十三夜』で、これと『闇夜』——此の方は二度の勤——とが、『文藝俱樂部』の『閨秀小說號』へ出たのであつた。その時には、既に『濁り江』で讀書界の注意を可なり喚起して居つたので、『十三夜』が出ると、一葉女史の名は可なり擧つたのだと思ふ。

二十八年ぢうでの作では、此の外に『軒もる月』——四月頃の作か——と『うつせみ』——八月頃の作か——とがあるのだが、どちらかゞ、齋藤綠雨が讀賣に載つて居た『門三味線』を急に中止したので、一葉女史がそのあとを埋めるために大急ぎで徹夜で書いたのであつたと思ふ。『うつせみ』は、一葉女史の住居の隣りへ狂女が引越して來て、時々女史の家へなども飛び込んで來たさうであつたが、それからヒントを得て書いたものであつた。

一葉女史が博文館の通俗百科全書のなかの『女子書簡文』を書いたのは二十九年の始め頃であつたらうと思はるゝ。日記の七月の十二日のところに『此ほど博文館の義けん小說中に隨筆やうのもの書けり、いとあわたゞしうてみぐるしかりしが』とあるのだが、此の隨筆やうのものといふのは、全集の隨筆中に入つて居る『ほとゝぎす』であらう。三陸地方に大海濡があつたので、その救恤のために、博文館が『文藝俱樂部』の義捐小說號なるものを出したのであつたやうに記憶して居る。同じ隨筆の『そゞろごと』は、二十八年の十月頃の作らしいのだが、これは『文學界』の連中で『若紫』とかいつた特別號のやうなものを出したので、それへ載つたのであつた。

書き漏らしたが、『われから』は二十八年の十二月頃の作らしいのだが、これは『文藝俱樂部』へ出た。あの作は、島田三郎氏の最初の夫人——その夫人とは一葉女史は中島歌子氏のところで同門であつた——のことからヒントを得たものであらうと思ふ。『わかれ道』も同じ頃の作である。これは翌年の『國民之友』へ出た。この作は『たけくらべ』と同じく材を大音寺前に得たものだと聞く。傘屋の小僧はその當時實在してゐたといふ話である。

斯ういふ風で、二十九年へ入つてからは、一葉女史の筆を取つたのは、斷片の『うらむらさき』と、前記の『女子書

簡文』だけであつたやうである。

その年の四月頃から、一葉の病が進みはじめて、八月になつてますく重くなり、遂に十一月二十三日になつて遠逝してしまつた。

丸山福山町へ引き移つてからの一葉女史の日記は『水の上日記』といふ名になつて居る。家の前も後も池であつたので、それが爲めに日記にさういふ名をつけたのであつた。この日記の二十七年の末あたりから終りへかけてが、實に面白い讀み物である。僕の見るところでは、あの部分には、一葉女史の勘違ひが隨分多く表はれて居るやうであるのだが、人生記錄としては、さういふところが非常に面白いと思ふ。終りの方の齋藤綠雨との交渉なども如何にも面白い。

綠雨も一葉の死後あの日記を見るまでは、一葉女史によつてあゝいふ風に綠雨自身が書かれて居やうとは思つて居らなかつたらしいのである。明治三十六年の秋頃、一葉女史のあの日記を公にしやうかといふ話が起つて、その時は、齋藤が鷗外氏に主として相談したのであつたが、その時、『めざまし草』の連中へ一葉女史を加盟させようとする鷗外氏側の運動に對して綠雨がその裏へ廻つて、一々ぶちこわして居る經緯が日記では餘りに明になつて居るので、日記を鷗外氏に見せるのは少しきまりが惡るいと、綠雨は苦笑して居た。

一葉女史の日記は、その後綠雨が預つて居つて、三十七年の三月、醫者から絕望狀態であることを告げられると、僕を呼びに來て、僕が本所橫網の綠雨の寓居へ駈けつけると、綠雨は、自分の命が旦夕に迫つて居ることを告げてから、樋口家へ返して吳れと云つて、日記を僕に渡したのであつた。

一葉女史が死んでからは、もうやがて三十年にならうとして居る。綠雨が死んでからも二十年を少し越えて居る。考へてみれば可なり古いことだ。その後でも、文壇では可なり多くの人々が死んで居る。僕などは、平凡無能のお蔭か、はたまたその祟りか、何うにか今まで生き延びて來た。氣の利いた化物なら、もうとつくに引つ込む筈であるのだが、

未だにまご〱して居るなどは汗顔の外はない。だが、しかし、世のなかゞ新しくなつたり、古くなつたりするので、僕等のやうな立廻りうすのろな者は、引込みがつかなくなつてしまつたやうな氣もするのである。

拙稿は、一葉女史の日記を使つて、女史の實生活の方を示めしたいのであつたが、筆を取つて見ると、それをやり出すと、なか〱四十枚や五十枚の原稿では何うにもなりさうもないので、その方は思ひ切つてこんなものを書いて、責を塞ぐことにした。

最後にいふ、本稿の『中』に、一葉女史が『改進新聞』へ書いた小說を『たまだすき』として置いたが、これは間違ひで、『別れ霜』である。『たま襷』は『武藏野』へでも出たものではあるまいかと思ふ。

一葉女史のことを調べられる方は、全集中にある日記と、全集の末にある僕の跋と、それから眞筆版『たけくらべ』の後について居る諸家一葉觀その他を一讀されんことを切望する。

文壇博覽會

或人近ごろ文壇の正倉院に遊びしとて列品の目錄を寄せられたり重に輕文學壇の列品なるべし

（氣形）西鶴の脫毛　舶來のペダン鳥　通人氣鳥　生ざ鳥　盲蛇　人眞似猿　シツタカ鰤　無腸公子　大口魚　等

（器財）ネタ箕　ヒガ箕　ソネ箕　螺大小品々　馬琴の斷絃　白うと緘の小具足　杓子定規　生木にて作りたる類品々　笑の中の針　小さき錨數百

（食物）手前味噌　から饅頭　豆腐のニガリ　輕燒　世間水　向ふ水　じや水

（珍寶）小刀細工の藻屑　歐米大家の像（鳥羽繪多し）　テニハのみにて綴れる論文　爲哉乎也のみにて綴れる小說　魂入れざる涅佛　天狗の羽

案ずるにこは參考室を見おとしての報道ならんかし

早稻田文學創刊號より轉載

文學界の生れた頃

島崎藤村

明治の若い文學が何から出發したか、いつからその黎明期が始まつたかといふやうなことは、だん／＼私には言へなくなつた。

○

明治文學の黎明期――あの時代のことを振返つて見ると、いろ／＼な著作が私の記憶に上つて來る。しかし、さういふかず／＼の著作が當時を記念するものとして私の記憶に殘つて居ても、それ以上には最早働きかけないとすると、私はそれらの著作によつて夜明けの時の氣分に歸つて行けない。

○

そこが歷史的な考證家と私と違ふところかと思ふ。考證家は表面にあらはれただけの事實でも成るべくそれを精しく捉えようとする。私は違ふ。私は自分の心に何度となく活き返り活き返りするものを求める。さういふものこそ、自分の生れて來た時代の源であつたと考へる。そして、さういふものを通して、何度となく夜明けの時の氣分に歸つて行かうとする。

○

自分もその空氣の中に働いて居て、働いたまゝの感じを傳へることが出來たなら。

まだそこいらは薄暗く夜も明けきらない深い霧の中に鷄の鳴聲を聞きつけたにも譬へて見たいのは、坪内逍遙の『書生氣質』と『小説神髓』とであつた。『書生氣質』の作者は當時の新時代の相を捉えるに巧みな人であつたといへ、あの作にはまだ過去の影響が多かつたと思ふ。私などは少年の眠りからさめきらないで、半分夢のやうにあの鷄の聲を聞いた。徳富蘇峰の『將來の日本』もあの時代のはじめには多くの人に感化を與へた著作であつたと思ふ。あれも私の聞きつけた鷄の聲の一つだ。私は寢ぼけまなこをこすり〱夜明の近いことを知つたといふまでゞ、深い朝霧の中には何程の鳴聲が遠近に起つて居たと言つて見ることも出來ない。

○

私はまだ明治學院の學窓に居た。いつの間にか時代の空が白んで來た。いつ明けるともなく夜が明けかかつて來て、長谷川二葉亭の『浮雲』、山田美妙齋の『胡蝶』、森鷗外の『舞姫』、尾崎紅葉の『色懺悔』、幸田露伴の『風流佛』といふ風に、つぎ〱にいろ〱な作品のあらはれた時は、殆んど應接にいとまのないくらゐであつた。民友社、政教社、早稻田文學社、硯友社、日本評論社、女學雜誌社、經濟雜誌社それから『しがらみ草紙』の發行所なぞが創設されたのも私の學生時代だ。私はもう新時代の早い朝の空氣の中に自分を見つけたと言つてもよかつた。

○

何を見ても眼がさめるやうであつた。あそこに山があつた、あそこに森があつた、と言つて見る早い朝の心持は、丁度それまで埋もれて居た近松や西鶴の翻刻本に接した時の心持にも似て居たらう。私はあの明治學院の舊い寄宿舍の階段のところで、當時の新聞紙界に一新生面を開いた國民新聞の第一號を手にした時のことを覺えて居る。

○

上田敏の『海潮音』がずつと後になつて詩壇への新聲であつたならば、『國民の友』の夏季附錄に載つたS・S・S社中の『おもかげ』は譯詩の先縱を成すものであらう。あれは主として森鷗外によつて企てられた西詩の翻譯であつた。

○

明治文學の黎明期に於ける大きな仕事の一つとして考ふべきことは、所謂言文一致なる文體の發見であらう。過去の制約からの文章の解放であらう。山田美妙はそれを詩にまで試みようとした最初の人だ。

○

世界主義もしくは歐羅巴主義と、その反動とは、あの時代に判然とした對抗の形をとつた。その代表的なものを擧げるなら、前者は德富蘇峰などによつて唱へられた平民主義によつて。後者は三宅雪嶺、志賀矧川、辰已小次郎などによつて唱へられた日本主義もしくは國粹保存主義によつて。

○

大西祝は私の青年時代に敬愛した少壯な學者の一人であつた。『國民の友』に寄せたその『批評論』は批評といふものを高い位置に引きあげて見せて吳れた。私達が夏期學校の講演で聽いた『希臘道德より基督教道德に移る變遷』も耳を傾けさせた。

○

婦人の覺醒もあの時代に伴つて起つて來た。當時の早いフエミニズムはまだ單純な形ながらに巖本善治の主宰した『女學雜誌』などに溢れて居た。

○

創作家としての長谷川二葉亭は何と言つても好い出發をした人であつたと思ふ。『浮雲』二卷は全く新しい世界を開、

て見せて呉れたものだつた。ツルゲネエフの短篇『あひゞき』と『めぐりあひ』との譯は私達に取つての一つの驚きでもあつた。

○

齋藤綠雨の『油地獄』に物を觀る眼の鋭さのあつたことも忘れがたい。

○

私は學窓を出て、間もなく北村透谷を知つた。早熟な彼は二十四歳で既に『蓬萊曲』の劇詩を書き、『厭世詩家と女性』の最初の論文を『女學雜誌』に寄せるやうな人であつた。私は漸く二十一歳の青年であつたが、北村透谷と相知るやうになつたのは私の生涯の中での最も幸福な記憶の一つである。

○

時代の空は明るくなつて來たが、私の心はまだ暗かつた。私は友人等と共にもつと別の夜明けを待つて居た。自分等の內部に登つて來るやうな新しい太陽を望んで居た。

○

明治二十六年の正月、星野天知兄弟、平田禿木、戸川秋骨、北村透谷、それに私を合はせて、六人のものが『文學界』に集まつた。馬場孤蝶はすこし後れて私達の仲間に加はつた。私達は全く先輩の力を賴ることなしに出發しようとした。當時の私達は勇んで朝の道を踏出して行く青年の群にも譬へられやうか。

○

私達の『文學界』は北村透谷の亡くなつた頃までをおほよそ第一期とする。高踏派、厭世派、哀觀主義の文學などの名は私達が出發すると間もなく浴びせかけられた嘲罵で、私達はまた激しい反抗の心でその嘲罵をこらへた。『人生に相

渉るとは何ぞや』、『内部生命論』、その他の北村透谷の論文はさうした勢に激せられて生れて來た。私達の雜誌は頑執と盲排との弊を打破するやうな聲で充たされた。これから自己の道を開拓しようとするもの丶長所をも短所をもそこへさらけ出したやうなものだつた。

○

激しい精神の動搖が續いた。私達が出發して一年半ばかりしか經たないうちに、私達は早い時代の犧牲者として倒れて行つたやうな一人の友人を自分等の周圍に見出した。『文學界』同人の結びつきといふ上から言へば、北村透谷は『情熱』、『一夕觀』、『萬物の聲』、その他『雙蝶の別れ』の詩なぞを告別の言葉として、その生涯の序幕の舞臺の上で悲壯な最後を遂げたやうな人だつた。新しい散文の世界を私に暗示して呉れた人が長谷川二葉亭であるなら、新しい詩の世界を暗示して呉れた人は北村透谷である。明治文學の黎明期とは言つても、その動いた印象は到底こゝに盡せない。それから、こゝには故人も現存の文學者も、先輩も友人も同じやうに書いてしまつて、敬稱も親しい呼び方も一切省いたことをお斷りして置かう。

落合直文の國文詩歌に於ける新運動

金子薰園

明治十七年と云へば、我が落合先生が大學古典科在學中、兵に徵された年である。それは春であつた。其の入營の近

別會が同窓の友人等に依つて兩國の青柳樓と云ふ旗亭に開かれた。萩野由之、關根正直二氏が幹事であつた。その席上で先生が詠んだ歌は

　　たちわかれ明日はいなばの白兎うさもつらさも神にまかせて

と云ふのである。當時の歌壇は、高崎正風、税所敦子、黒田清綱等所謂宮内省御歌所派の時代であつた。先生の歌はもう此の時分から、此の時代の歌風から離れた特殊の色を見せてゐた。たま〳〵此の即詠の一首に徵してみても、後年の落合調なるもの丶萠芽を見せてゐるではないか。

　先生の兵營生活は明治十七年の春から二十年の春に亘つた。陸軍醫務局附の看護卒となつて衞戍病院に勤務した。比較的閑散な位地にあつたので、先生は此の間に異常な努力で國語國文の研究に當られた。古典科在學の人々と同じ位の力を此の間に養はれたと云ふ。此の頃の先生がいかに強壯で、意氣の旺盛であつたかが伺はれる。此の兵營生活の末期明治十九年の頃に、後年の『孝女白菊の歌』の生まれる一の前提とも云ふべき今樣風の作があつた。

　　煉瓦の垣もうちくづれ
　　庭にはあまた蟲の聲
　　昔にも似ぬありさまに
　　ハンカチーフもぬれにけり
　　　　○
　　軒端をわたる風の音
　　ガラスにうつる月の影
　　寒さにわれも寢られぬを

ひとりや人も明すらむ

今樣の型を破つて、自由な天地が此の一作に表はれてゐるではないか。私は敢て此の作を佳いとは言はぬ、舊套に安んずることが出來なかつた先生の意氣を壯としなければならぬ。

明治二十年春除隊後は、皇典講究所、補充中學校（今の第四中學校の前身）等に教鞭を執られた。私事に亘つて濟まぬが、二十二年春私が同中學校に入學した頃は先生はもう居られなかつた。後から聞いて殘念に思つた。

先生の本姓は鮎貝氏、初め名を盛光と云はれた。落合直亮翁の愛嬢の婿がねとなられて落合姓を冒されてからも盛光を名のつて居られた。直文と改名されたのは、除隊後である。先生が此の「落合直文」の名を署して、作を發表された私の最初の記憶は、『孝女白菊の歌』からである。これは井上巽軒博士の『孝女白菊之詩』を七五調に和譯されたもので明治二十一年春四月箱根萬翠樓で稿を脫し、翌月『東洋學會雜誌』に發表され、年内十七の雜誌に轉載された。これ先生の出世作で、先生の名と此の作とは人文の至れる極み喧傳された。

阿蘇の山里秋ふけて
眺さびしき夕まぐれ
いづこの寺の鐘ならむ
諸行無常と告げわたる

から起して、門に出でて獵に行きて歸らざる父を待つ、「年は十四の春あさ」き少女白菊を點す、少女、父を慕ひて山深く分け入り、ゆきくれて讀經の聲をしるべにたづねし草庵の灯影に、法師と對坐して物語りするくだりがある、法師、身の上を聞いて泣く。少女、そこに一夜を宿りて、夢に父が谷に落ちて千尋の底、荊棘の生ひ繁る中に餘命を保つて居るさまをありありと見て、覺むる。やがて巖根こゞしき山坂を辿つて行く。山賊に會つてその巢窟に拉し去られ、小

琴を彈ずるくだりがある。小女の身の危い時、最前の法師此の山寨に斬り入つて、少女を救ふ。法師と共に逃れゆく路に山賊の襲ひ來るにあひ、わかれ〳〵になりて少女はひとり山路をさまよひゆく。たま〳〵柴刈る翁に助けられてその翁の庵に二三年を送つた。そこの里の長に見染められて、妻とならねばならぬハメになつて、深夜その庵を逃れ出る。とある流れに身を投げようとした時、またかの法師（兄であつた）に救はれ、連れ立つて、山麓の鄕家に歸ると、父は歸つて居た。夢のやうな此の再會に父子相抱いて泣く。兄は勘氣を受けてゐる身であつたが許されて、歡び泣く。こゝに父の物語りするくだりがあつて全篇が終つてゐる。そこがよく描けてゐると思ふから、左に引用する。

　われあやまちて谷におち
のぼらむすべもあらざれば
木の實を拾ひ水のみて
ながき月日をおくりにき。
ある日のあしたおきいでて
峰のあたりを見あぐれは
ながくかゝれる藤かづら
上にましらの啼き叫ぶ。
啼くなる聲のなにとなく
心ありけにきこゆれば
神のたすけと攀ぢのぼり
はじめて峰にのぼりえつ。

うれしとあたりを見渡せば
さきのましらはあともなく
木立のしげき山かげに
蟬の聲のみきこゆなり。
うき世のならひといひながら
うき世の常とはいひながら
人になさけのうせはてて
獸にのこるぞあはれなる。
父のことばをききゐたる
二人の心やいかならむ
うれしと兄のたち舞へば
たのしと妹もうたふなり。
千代に八千代といひいひて
共によろこぶをりしもあれ
うしろの山の松が枝に
夕日かゝりて鶴ぞなく。

今様歌といへば七五四行に限られてゐた。先生が此の七五調を自由に驅使して、此の長篇の大作を發表されたことは確かに當時の驚異であつたに違ひない。後に鹽井雨江學士が、スコットの長詩『湖上の美人』の譯歌を此の『白菊の歌』

の形式に據つて發表したことや、同氏及武島羽衣氏の作詩や、更に又島崎藤村氏の『若菜集』の諸作の如き、何れか此の先生の『白菊の歌』の影響を受けて、生れ出たものでないものがあらう。今の詩を作る人、此の『白菊の歌』を説くを憚るが如き傾向のあるのはどういふわけであらうか。此の『白菊の歌』以後、七五調を以て詩を作つた人は、皆先生の恩澤にあづかつたものと言つて、差支なからうと思ふ。

翌二十二年夏、『國民の友』の夏期附錄に森鷗外氏等の新聲社の人々の譯詩集『於母影』が呼び物となつたが、先生はその中に「笛の音」といふ詩篇を公けにした。これは獨逸の詩人シェッフェルの作を鷗外氏が譯讀したのを我が長詩に直したものである。『國民の友』は德富蘇峰氏の主宰で、一月と八月に當時の代表的文人の傑作をその附錄にした。文人でこゝへ出るのを非常に名譽にしたのは丁度一時の『中央公論』のやうな勢ひであつた。文藝愛好の讀者は、此の附錄の出る二期を待ちに待つたものである。

『笛の音』は「少年の巻」「姫の巻」「別後の巻」に分れて、所載譯詩集『於母影』の中で、一番評判がよかつた。集の作品には一々署名してなかつたから、『笛の音』の作者を物色して先生であることを知つた時、當時の詩を愛する人々は、いかに滿身の血を沸かしたことであらう。今その一節を左に引いて見よう。

君をはじめて見てし時
そのうれしさやいかなりし
むすぶおもひもとけそめて
笛の聲とはなりにけり。
おもふおもひのあればこそ
夜すがらかくはふきすさべ

あはれと君もききねかし
こころこめたる笛のこゑ。
君をはじめて見し時は
やよひ二日のことなりき
君があたりゆ風ふきて
こゝろのかすみはらひけり。
おぼろ月夜のかげはれて
さやけき光のそのうちに
見ゆるかつらのその花は
うれしや君が名なりけり。

かういふ風で、一聯又一聯、やうやく佳境に入つて行く。『孝女白菊の歌』の後、僅かに一年を閲するのみで、精進の跡の著しいのは驚くばかりである。原作の妙味が、その情新な調べに傳はり、詩中の嚠喨たる笛の音がその調べになつて、こゝろも澄みわたりゆくのである。後年『抒情詩』に據つた人々の中で特に松岡(今の柳田氏)國男氏の詩のしらべは先生の此の『笛の音』に髣髴してゐる。若く詩を作る人、詩を愛する人々の間に愛誦措く能はざらしめたのは實に此の詩篇であつた。

先生は當時第一高等中學校、國學院等に教鞭を執られて、その新しい、活氣ある講義振りは青年學生の間に非常な評判であつた。漢文や國文の講義といふと、字句の穿鑿のみに止まつて、聽者を開發し、目ざまさせるやうな活氣を與へるものはなかつた。國文の講義を、好箇の睡眠劑ぐらゐに心得てゐた學生等は、先生の元氣な講義振りに心から驚かされ

て、國文といふ學科に新しい興味を持つやうになつた。

『笛の音』の發表された年の十月、主として先生の係はつた國語傳習所が創立された。國語國文を研究しようといふ若い人々は爭うてこれに入つた。『日本文學全書』二十四篇刊行の企は、此の國語傳習所が出來てから、教科書の不足なのが動機となつて起つたのである。教授をはじめて見ると、どうも書籍が足りない、同一の書籍を十部と揃へることは容易でなかつた。一冊の書籍を何人（なんにん）もで見るといふ有樣だつたので、少なからず不便を感じた。そこで明治二十三年春早早、話が具體的に進んで、愈々博文館から出版することになつて、先生と小中村（後の池邊氏）義象、萩野由之二氏が編者と定まつた。さうして、その五月に第一編を刊行する運びになつた。此の刊行がどの位ゐ、我が學界に貢獻したかは、想像するに難くない。出來早々異常な賣行きて、忽ち幾回かの版を重ぬるに至つたのは、編者も發行者も豫期しない所であつた。

西洋崇拜に人心の傾き切つた當時、本書が刊行されたのは、國粹の貴いことに世人を目ざまさせる大なる動機となつたのである。本書の賣れ行きは本當に飛ぶやうであつた。博文館がこれから頭をあげ出して大書肆となる素を作つたといふのを想うてみても、大した勢ひであつたことが想望される。

本書の編纂は前記三氏が、それ〴〵分擔して任に當り、親しく校訂の勞を執つたのである。編者の名は各書のはじめに三人竝記（へいき）されてあるが、初めに出てゐる名の主がその書の校訂者であることを思へば、その校訂者は直ちに分るのであつた。

先生が本書全二十四冊中で校訂された書名をしらべて見ると、第一編では『徒然草』を、第二編では『更科日記』を第三編では『十六夜日記』『辨内侍日記』を、第四編では『とりかへばや物語』を第五編では『和泉式部日記』を、第六編では『濱松中納言物語』を、第八編では『源氏物語』桐壺より須磨までを、第十一編では同鈴蟲より早蕨までを、第

十三編では『榮華物語』月の宴よりいはかけまでを、第十七編では『太平記』十四巻より二十四巻までを、第十九編では『鴉鷺合戰物語』を、第二十三編では『大鏡』といふやうな順序である。『日本文學全書』は先生主唱の下に完成したもので、他の二氏は先生を補助したといふ姿であつた。明治二十五年の春完成するや、先生は更に『續日本文學全書』刊行を企てられたが、何ういふものか實現されなかつた。『しがらみ草紙』の創刊は『日本文學全書』の出た年（明治二十三年）の二月で、森鷗外氏が主として之に係はつた。かの『國民の友』所載の『於母影』の原稿料が五拾圓入つて來たので、これを資金として『しがらみ草紙』が發行されたといふ。同誌に掲載された先生の作は、大部分歌で、『悲哀』『甲斐絹』など小説の習作めいたものも出てゐる。

先生が新國文といふ一體を散文に試みて、擬古文卽ち國文といふ陳腐の境地から超越して新樣の文章を書かれた事は注目に値ひする。『十二郎を祭る文』『弦月旗』『妹辰子を祭る文』など特に喧傳された。鹽井雨江、大町桂月、武島羽衣三氏等が、美文といふ名の下に發表された小品散文は、先生の此の新國文の影響を受けたものである。

先生の所謂新國文は骨が漢文で、衣が國文である。だから、かの擬古文のやうに纎弱なものでない、力がある、引きしまつたところがある、耳遠い古語などを使はずに國文脈のいゝところを作の中に加味して行くと言つたやうな風で、先生の此の新しい試みとも言ふべき新樣の文章は、世間から聲を大きくして迎へられた。

明治二十三、四年は、先生の活動時代で、順風揚帆といふやうな勢ひで、いろ／＼の新しい事業が企てられ、亦成されて行つたのである。若々しく、元氣で、ぐん／＼仕事をして行かれた面影が見えるやうである。

明治二十四年の十一月に『新撰歌典』が博文館から發行された。併しこの書の中で先生の手の入つた處はその一部分に過ぎないで、他は増田于信、萩野由之、小中村義象三氏に依つて成されたのである。內幕の事を暴露してみれば、同書の中の歌の歷史は増田氏で、歌の作法は萩野氏、作例の選が小中村氏、類語を集めたのが先生といふ順序である。さ

すがに本書で一番光つてゐる處は「類語」である。可也豐富に類語が收められてある、先生の才氣を想はせる新しい語も中に少なからずまじつてゐる。歌一首滿足に作らないと自ら言つてゐた萩野氏が歌の作法を書いてゐるのは、いさゝか滑稽の感がある。作法は當然先生が書かなければならなかつたのである。

私は當時中學在學中で、先生の新味のある文や歌を讀んで胸を躍らしてゐた時代である。此の『新撰歌典』も無論讀んだには違ひないが、何の印象もないのを想うてみても、當時の私の幼稚の頭腦にも感動のなかつたことが、はつきりと言ふことが出來るのである。

先生の歌の生涯は大略三期に分つことが出來ようと思ふ。第一期は村雨日記の歌から初まつて、明治二十三四年まで第二期はそれから三十一二年まで、第三期はそれから永眠の年まで――ざつとかう分類してみたい。そして、こゝにはその第一期の歌風について述べてみたいのである。

『村雨日記』は先生が伊勢の神宮皇學館の業を卒へて東上した時の紀行である。文は歌の詞書のやうなすがたで、歌が此の日記の首腦をなしてゐる。無論此の前にも多くの詠作があつたと思はれるが、今、世に傳はつてゐるのはこれを最初として見て、先生の歌を考察しなければならぬのである。

先生の此の時代の歌風は當時の歌から未だ幾歩も出て居らぬが、さすがに後年の清新味は、此の中にもう芽ざしてゐるのを認める。先づその最初の歌を取つてみても

今よりは隅田川原の月を見て神路の山の秋をしのばむ

と云ふ一首の、何物にも囚はれてゐないのびやかさが看取せられるのではないか。これは出發に臨み、太神宮に詣つる道で詠まれたものである。

三日月をけふ見そめけり望の夜の月はいづこの里に眺めむ

曳く人に舟をまかせてゐながらに堤づたひの蟲をきくかな　（二首、曳船にのりて）

こころあらば綱手ゆるめよ松蟲の啼ける堤に今かかりけり

松風の音ばかりだにさびしきを雨もふりきぬ小夜の中山

夕風にひとつ落ちくる松かさの音さへさびし小夜の中山

など、當時の歌壇に在つては、新味のある歌ひぶりであつたに違ひない。後の落合調と言はれる先生獨特の持味もも、う此の時分から見えてゐるではないか。終りの「松かさ」の歌は確かに私の言ふ所の事を證據立てゝゐる。更に又

おくれゐて聞きこそわぶれ都へといそぐみ空のはつ雁のこゑ

鐘の音のひびきは空に消えゆけどさびしさのこる秋の夕ぐれ

秋の夜のふけゆくままに岩はしる水のひびきの空に澄みぬる

里ちかくなりにけらしな箱根山杉の木の間にけぶり立つ見ゆ

御楯（みたて）ともならましものをそのかみに生れぬ身こそくやしかりけれ　（鎌倉宮に詣でて）

これ等の諸作に見ても、舊套に安んじえなかつた、先生當年の意氣をしのぶことが出來る。

『村雨日記』の歌は、概して素直に、穩かに、こだはりがなく、歌はうとする事を歌つてゐると云ふ趣がある。それでゐて、決して平凡でない、先生の特殊の主觀が、もつそろ〳〵光りかけてゐた。

先生は當時二十二三歳の一青年であつた、さうして其の歌を見ると、或る程度の圓熟さを示してゐる。歌を作る技倆は確かにその時代の一人前の歌人に比して遜色がなかつたのである。此のうら若さで、歌に於ける此の確かさを持つてゐた先生は既に普通の器（うつは）ではなかつたのである。

『村雨日記』以後に左の如き諸作がある。

駒とめてかへりみすればほとゝぎす一こゑ啼きぬ妹が家のあたり
一つもて君を祝はむ一つもて親をいははむ二もとある松　（門松）
緋縅のよろひをつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ山ざくら花
近江の海夕ぎりふかしかりがねのきこゆるかたや堅田なるらむ
父君の杖にやきらむ一もとをわれにはゆるせ庭のわか竹
おのづから梢はなるゝ桐の葉のけさ目に見えて秋は來にけり

など先生一代の歌の中で名歌に屬するものが此の第一期に出來てゐる。此の中で特に有名なのは「門松」と「櫻」の歌である。二つ共一寸同じ行き方をしてゐるが、歌柄から言ふと、「門松」の方が上である。此の方には少しのあて氣味もなく、よく先生の性情があらはして居る。「霧」と「立秋」の歌も私は好きである。殊に「霧」の歌がいゝ。「門松」や「櫻」のやうに、ぱつとしてゐないで、しんみりした言ひ方に私の心は牽かれる。「立秋」の桐の一葉を捉へて閃くやうな秋の氣をその飜る葉うらに見せてゐるのも、先生の非凡の手腕を想はせるものがある。題材は決して新しくないが、それをかうまでに光らせた技倆に服する。

『村雨日記』の歌と、その以後のこれらの詠作と比較すると、そこに大いなる經庭がある、『村雨日記』の歌にも觀方や歌ひ方の新しさ自由さは既に見えてゐたが、その以後の諸作を生むべき準備であつたに過ぎない。新しく進まうとはしてゐても、古歌に深く泥んだ境地から蟬脫するになほ多少の危惧の念がないでもなかつた。しかも其の以後の作では、さうした掛念がだん／＼取れて來て、獨歩の域に入つて來たのを認める。

先生の一家の調子が定つて、所謂新派和歌の運動をはじぬられたのは、此の第一期末から第二期にかけてである。先生が淺香社を結んで新人をその門下に集めたのもその頃である。先生の令弟の鮎貝槐園氏や與謝野寬氏が社中の先進で

此の新運動には先生の意を承けて目ざましい活動をされた。槐園氏は運動半ばにして朝鮮に赴かれ、別な事業に携はるやうになつたので、歌の方面に消息を絶つたのは殘念である。同氏はつゞいて朝鮮に居住し、今は大部の朝鮮史の編纂に從事して居られる。新派和歌の第一頁に筆を染むる人は與謝野氏の先輩である槐園氏を逸してはならぬ事を附記して置きたい。

明治過渡期の筆禍文藝

齋藤昌三

幸か不幸か、明治初期には、筆禍を求めた文藝らしい文藝がなかつた。最も未だ文藝的生命のある作も創作し得ない幼稚な時代であつたことも原因してゐるが、政治的にも混沌期であつたので、勢ひ取締方針も不完全であつたことは、一方に不幸でもあり、一方には僥倖でもあつたのである。であるから、その頃の筆禍物に就いて見ても判る通り、その多くは一見眼に觸れ易い綺畵――諷刺畵の類や、口にし易い俗謠、漢詩の程度で、それ以上は取締る者自身の頭も亦混沌時代であ、たのであるが、根本の法文も成つてゐなかつたし、令達機關も普及されてゐなかつたのであつた。それが十七年に初めて官報が完成し、二十二年に憲法が制定されてから、明治そのものは初めて元服して、玆に一人前に近い男に成つて來たのであつた。

そんな次第であるから、文壇に於ても、偶然のやうに、右の十七年の翌年に、逍遙博士の『小說神髓』が突如と出現して、初めて文壇的曉光を認めて、茲に舊文藝とのくつきりした境界を築いたのは、前の官報の制定と偶合的大運動であつた。それ許りではなく憲法發布の年をスタートとして、二十二三年以來文藝雜誌も亦擡頭し、美妙、二葉亭の言文一致創成から、紅葉、露伴の輩出となつたのも亦面白い偶合であつた。

以上を概括して見ると、官報發行と小說神髓の發表迄は、政治的にも文藝的にも德川末期の惰勢時代の連續で、低級な繪入新聞や、洒落本類似の物語や、悲憤慷慨的な飜譯の政治小說と云つたもののみの、眞に明治の混沌期で、殆んど兒戲的な作を一般讀者が推奬してゐたのであるから、今から見れば禁止されたとて大して惜しいものもなかつたが、文藝以外の言論では文壇的の關係者でも、筆禍事件に累せられぬ者はなかつた時代で、福地櫻痴を初め、塚本澁柿、末廣鐵腸、成島柳北、藤田茂吉、田口卯吉、等の法網に觸れた事は一再に止らなかつた。殊に櫻痴は明治元年の最初の犧牲者であつた。

自分は假りにこの明治二十年前後迄を文藝混沌時代とし、二十二三年より日淸戰役迄を新文藝の創成期とし、この創成期がやがて四十二三年以降の眞の文藝を產む、準備時代であつたのであらうと思つてゐる。この混沌時代の文藝品で筆禍を求めた物は、明治初年から十六七年にかけて、政府はその反對する新聞や言論に極端な壓迫を加へた頃だつたし何分政治家自身が、堂々吉原に豪遊する時代であつたので、各繪入新聞紙は勿論、東京新繁昌記、東京新誌等は好んで閨房を描き、痴情を寫し、劣慾を挑發し、世を擧げて肉慾世界と化したかの觀もあつた頃だつたので純なる意味での文藝上の筆禍は殆どなかつたし、又顧られなかつたのであるが、これ等の內で多少知られた筆禍物を二三擧げて見れば、八年頃に有た『柳橋新誌』第三編がある。これは例の戲文體の漢詩類で、所謂肉慾的なものであるが、この頃でも禁止された位であるから、徹底的に露骨なものであつたことが思はれる。

その次は十四年四月の『東京新誌』である。これは新聞條例で風俗壞亂に問はれた嚆矢で、桑野鋭翁の『手無娘』の一文でやられたのは著名な話であるが、十七年頃に出た『今淨海夢物語』といふ四六版の、小說體に描寫した妙的連な筆禍物もあつた。これは鳶魚さんの話であるが、岩崎彌太郎の一代記を淸盛に擬して作つたもので、岩崎では黄金の力で當局を動かして、發賣禁止として貰つたといふ話であつて、市場の物は家人を八方に出して買收に努めたが、何分岩崎家で買込むといふので、僞版がどし〳〵と出て、結局手の下しやうがなかつたといふ珍事があつた。憲法發布前のものでは先づこんなもので、憲法發布後では、これは文藝物ではないが例の外骨が『頓智協會雜誌』第二十八號を、二十二年二月に發行して、その誌上に「研法發布の囈語」と題し、忽ち不敬罪に處せられた事件は著名であつた。

二十四年には春陽堂から出た『夢の道鏡花水月』といふのがやられ、同じ年に金港堂から出て居た文學雜誌「都の花」の第六十三號が『淫婆』といふ、名からして風俗壞亂な作で禁止された。然しこの號には主筆の美妙の作『大恥辱』といふ題の作があつて、これが前號にも次號にも續き、その題名が怪しいとでも思はれるのか、それをも混同して居るらしく、現に上野の圖書館ではこの作も封印してある。二十五年には「讀賣新聞」で『緣源氏』(漣山人)や『晒井』が禁止され、翌二十六年には單行本で『八重櫻』といふ、幕末の世話物的な作がやられたこともあつた。

越えて二十七年には『張嬢』が禁止された。この作は政治的にも國際的にも關係した作で、明治文藝準備期の最後の筆禍ものでもあつた。一名を「朝鮮宮中物語」とも云ひかの閔妃事件を寫したので、當時の韓國の內情を知る上にも面白い物語である。その材料は井上角五郎から出たもので、井上は當時朝鮮の官報を編輯してゐたので、それを手塚猛昌(後に帝劇の專務をした)が拾ひ出して、更に福地櫻痴に潤色さして出したものである。今その頃の櫻痴の序文の一節を拔いて見よう。

手塚猛昌氏突然余が寓居に來り、一手稿を出して云く、予は今一奇書を得たり、實に一大材料なり。先生乞ふ一閲せよと。蓋し

昂然頗る得色あり。乃ち取て之を閲すれば、朝鮮今代三十余年來の眞相を寫出し、其祕密を現はしたる手稿なり。其事情を嚴明し事實を確知せるや、一讀して其一大有力者の手に就れるを知るに至れり。余驚て其誰が手稿たるを問ふ。君笑つて曰く、是れ井上角五郎君の手稿にして、余が借得て來る所なりと。(中略)未だ是の如き好材料を見たる事なし、足下若し余をして之に據りて筆を立つるを得せしめば、一部の朝鮮今代史を、演義の體を假りて寫出さんは、敢て難きに非ざるなり。氏膝を撃て曰く、予が先生に請はんと欲する所は實に此に在り、願くは先生急に筆を下して、此手稿を潤飾せよ。曰く諾。乃ち机に憑りて筆を執り、二旬にして此編を稿了り、手塚氏に還附し、刊行に關して井上君の承諾を乞はしむるに、氏難色あり。余笑て告て曰く、井上君は眞個の好漢なり、宏度を以て世に知らるゝの名士なり、豈に足下の志と余が文字とを、併せて空くするの人ならんや、請ふ往て之を乞へと仍て此事を序して卷首に附す。

この作は結局井上の雜色通り、韓國併合以前の事として、國際關係もあり、外交上の事情も加味されて禁止になつたが兎に角文藝上で對外關係の話題に上つた作は、後の『巴里』とこの『張嬪』位であらう。

かくて日清戰役となり、その終局を境として、全然新面目の文藝壇は開拓せられ、風葉子、魯庵翁の筆禍が新文壇の話題を作り始めたのであつた。

新聞小説の發育期

半井桃水

新聞小説發育期(?)に關する事を書いて見たいと思ひましたが、何分的確な材料を得る事が、意外に困難でありますから、此には唯自分の記憶をたどり、追懷のまゝを略記する事に止めます。

明治十六七年頃までは、各社新聞何れも社説議論を專らにしたもので、東京日日の福地源一郎氏、郵便報知の藤田茂吉氏、矢野文雄氏、曙新聞の末廣鐵腸氏、朝野新聞の成島柳北氏、横濱毎日の沼間守一氏等、何れも自由民權論、國會開設促進論を高唱し、椽大の筆を提げて、論戰に鎬を削り、社會記事や小説などを尊重するものは、殆んど絶無でありました、殊に明治八年頃平假名繪入新聞に、前田香雪氏が虚實混同の「金之助話」といふものを連載し、その後また薩人澤本彦右衛門が、西南戰爭で悲壯を戰死を遂げた物語を載せた事を覺えて居ます、而して後者は潤色され、明治十一年三月、新富座で上演されました、是が新聞もの、劇に用ひられた始めであつたと思ひます。

以上政論を專らにするものゝみ大新聞と呼び、小説講談社會記事を專らにするものを、小新聞と呼びました、大新聞は振假名を用ひず、小新聞總振假名つきでありました。

大新聞中でも、最も過激の議論をして、絶えず筆禍を買つた曙新聞は、遂に廢刊する事となり、其の代りに起つたの

が、時事新報であつたかと記憶します、夫から所謂小新聞に屬する開花新聞は、明治十六年頃改進新聞と改題しました其の頃東京繪入新聞が創刊されて、爲永眞水氏（染崎延房）などが、人情噺の續物で人氣をわかし、假名垣魯文氏にいろは新聞を創始して、花柳界のあらさがしなどを、面白おかしく書列ね、繪入自由新聞には、櫻田百枝氏が馬琴物の文體で、飜譯小說を記載して居り、都新聞の前身であつた今日新聞には、小西茂敎氏が假名垣魯文氏を聘して、日本最初の夕刊を發行し、後には齋藤綠雨氏も入社したと思ひます。

私は明治十一年西京新聞に入り、大阪で魁新聞が創刊される時から入社して、初めて小說に筆を染めました、當時新聞續物の執筆者で、私どもの先輩と認めて居たのは、假名垣一派、卽ち魯文氏を始め、柳塘、橋塘、胡蝶園、一筆庵等の諸氏と、高畠藍泉、爲永眞水、條野採菊、古川傀儡子、三品蘭溪の諸氏でなりました。

私は明治十四年魁新聞が廢刊してから同十八年まで中絕しましたが、其の後官吏生活の餘暇、常に匿名をもつて、都下二三の新聞小說を書き、廿一年東京朝日新聞創刊以來、また桃水の名をもつて執筆する事になりました。

明治十八年頃は、須藤南翠氏雜賀豐太郎氏などが、改進新聞の小說を擔任し、同十九年頃の讀賣新聞には、加藤瓢乎氏が、鍛鐵坊の主人といふ飜譯物を連載しました、續いて饗庭篁村、尾崎紅葉、幸田露伴の諸氏入社して、絕えず短篇小說を記載した外、音調高洋箏一曲はバルメ作鷗外竹二共譯佐久間象山之傳は古癖主人、竹の舍閑、操くらべ、婦女の鑑は曙女史、綠絲色紅白は猿名文內、三啞居士譯、玉を懷いて罪あり、鷗外竹二共譯、初一念、一心居士、擬博多、竹の舍等が連載され、警察新聞明治十九年改題のやまとには第一號より大蘇芳年の繪入りで三遊亭圓朝の人情噺を載せたのが、新聞に講談類の記載される始めでありました、此の人情噺を連載するには、やまとの編輯幹部諸氏、晝飯後の休憩時間に、圓朝を招いて噺を聽き、それを一々筆記して、發表したといふ事であります。

事實談に多少の潤飾を加へて連載された所謂新聞の續物から、次第に小說と化したので、當年の讀者は、往々小說を

事實と誤り、小說中に同情すべき人物でも書かれると、新聞社または作者の許へ、住所の問合はせをする向も、尠からぬのでありました。

新聞小說が漸次勢ひを得て、新聞の販賣高に大影響を及ぼし、小說の評判を聽いて、廣告依賴者に增減を生ずる程の有樣となつたのも、明治二十年前後からで、讀賣には硯友派の文學小說、やまとには條野採菊氏外講談派へ私も二三篇書きました）飜譯物には黑岩淚香羽山菊醉の諸氏が健筆を揮ひ、郵便報知の附錄報知叢談には、森田思軒村井弦齋の諸氏あり、日日新聞には塚原澁柿園氏歷史小說を書き、中央新聞には川上眉山、廣津柳浪、江見水蔭の諸氏事實を基礎として小說に筆を競ひ、水蔭氏が小石川警察署前の殺人事件を書いて、同署から取消しを申込まれたのも、此の頃の事であると思ひます。

めざましの後身東京朝日では渡邊朝霞氏（後の霞亭君）と私が小說を受持ち、齋藤綠雨氏も稀には書きました、其の後宮崎三昧、饗庭篁村、村上浪六、嵯峨の屋おむろ、幸野得知、武田仰天子の諸氏が入社されましたが、嵯峨の屋氏浪六氏は久しからずして去り、篁村氏は小說より寧ろ劇評擔任の方でありました。

夫から朝日と姉妹新聞の國會が出來て、こゝには石橋忍月幸田露伴齋藤綠雨の諸氏が、健筆を揮はれる事になりました。

小說勃興の明治二十年以後は、少し毛色の變つた處で、矢野龍溪氏の浮城物語、柴四郎氏の佳人の奇遇、末廣鐵腸依田學海西村天囚諸氏の小說も出版されましたが、今の坪內博士の春の屋おぼろ氏の書生氣質は當時最も新らしいものとして持囃され、少し遲れて山田美妙齋氏の言文一致が單行本として現はれた時は、讀書界を驚倒させました。

前に記した通り、明治二十一二年までは、森鷗外氏の飜譯ものですら、芝居の外題じみて、振假名なしには讀みにくい程のもので、文體もくだ〱しく、舊套を脫し得ないやうに思はれましたが、其の後紅葉露伴諸氏の短篇が行はれる

やうになつてから、馬琴種彥京傳式の小說は段々蔭が薄くなり、大小新聞の區別呼稱も、いつか廢されて了ひました。都の花、新小說其外小說專門の雜誌が出て、新進作家の男女となく輩出する事になつたのは、矢張り二十年以後であつたと記憶します、樋口一葉女史なども其の中の一人でしたが、女史は改進新聞に一度筆を執つたばかり、其の餘は雜誌でありました。

以上は東京に於ける、明治十四五年から同二十五六年に至る十年間、新聞小說趨勢の大要でありまして、十七八年以降は、地方でも有力の新聞紙は、大抵東京から小說家を招聘して、紙上を賑はして居りました。

大阪では大小新聞の區別呼稱に餘り用ひられなかつたと思ひますが、若し強て區別すれば、大阪日報、大阪新報、立憲政黨新聞は大新聞に屬し、朝日新聞魁新聞此花新聞は小新聞に屬するものでありました、その中新聞小說家としては明治十一二年から筆を執つて居た、宇田川文海、岡野半牧氏などが、ともかくも長老で、東京から魁新聞新聞に最初招聘されたのは、假名垣一派の若菜胡蝶園氏で、間もなく宇田川氏同樣朝日に移り、魁新聞が廢刊の已むを得ざる運命に立至つたお蔭で朝日新聞はめつきり勢力を得、其の後は加藤瓢乎須藤南翠渡邊霞亭中川霞城の諸氏が小說を擔任し、東京から絕えず寄稿したのは私でありました。其の中大阪每日が起り、菊池幽芳氏等が麗筆を揮はれる事になりました。

私は明治二十一年から三十三年間、東京朝日新聞に在つて徹頭徹尾小說を受持ちましたが、其の間社長の村上龍平氏から判で捺したやうに、會ふ每注意されましたのは、大家になつて下さるな、成るだけ骨を折らないやうにといふ、此の二つの辭であつた事を此に附記して稿を畢はります。

「小說神髓」「書生氣質」解題

神代種亮

小引

此稿は、近く予の刊行せむとする小冊子を以て公にすべき坪內逍遙著書目錄稿本の一部を抄出したるものに若干の引用文を添加せるものなり。

「作者曰く」「作者直話」は殆んど作者の手に成れるものにして、且つ淨書の後親しく其校閱を經たるものなり。

此解題を發表するに際し、作者坪內先生が幾十回に亙りて應答補訂の煩を厭ひたまはざりしを謝す。

「小說神髓」解題

上下二冊。半紙本。上卷四十三紙(序文、目次共)、下卷五十一紙(目次、附言共)。本文淸朝四號活字旁訓附。句點無し。扉に「文學士坪內雄藏著」、卷首に「文學士坪內逍遙述」とあり。

此稿は、下卷末尾の附言に據れば明治十七年中に屬すれども、作者の直話に據れば草稿は其の前年に成れるものにして、大學に在學中、雜記帳に書きつけ置きしものとなり。上篇は明治十八年三月東京稗史出版社より刊行されたた

るも、幾も無く同社失敗せし爲め組版は終りたれども中絶となり、翌十九年五月上下二冊更めて松月堂より出版されたるものにして、作者の日記明治十八年(作者二十七歳)二月十一日の條下に『此日より小說神髓を綴り始む。』とあり。(作者自註。綴り始むとは起稿の意にあらず、寫し直すの意。) 同年三月七日の條下に『中尾直治來る。小說神髓の豫約を爲す。』とあり。(作者自註。中尾は東京稗史出版社主にして、前年三遊亭圓朝の「怪談牡丹燈籠」その他を出版せり。原稿は全部を渡したり。) 又同年七月二十日の條下に『金玉社へ行く。小說神髓の原稿を復す。時事新報へ投書せんとするなり。』とあり。(作者自註。金玉社は印刷所なり。書生氣質と同時に出版せんとせしものが中絶となりし爲め、全部を一日も早く世に公にせんとして斯る企を爲したるなり。但し果して投書したるか否か記憶せず。) 又翌十九年三月三十日の條下に『中絶せし小說神髓前週より世に出づ。中々に迷惑也』とあり。(作者自註。世に出づとは世に出づることとなれりの意。) 又同年四月十四日の條下に『此頃小說神髓發刊終る。』とあり。明治十九年刊行の上卷の首に「松月堂發兌」とあり、本文の柱に「東京稗史出版社」とありて二者一致せざるは、作者の日記に言へるが如き事情ありしに由るものなり。又松月堂版は上下を分賣せざりしものの如く、奥附にも附言にも「明治十九年五月」とあれば、表向きの發賣は五月なりしものならむ。本文末尾に「拾遺論」云々とあれども、特に「本書の拾遺」として發表されたるもの無し。

同作者の「開卷悲憤慨世士傳」(明治十八年二月、晚青堂發行) の序に言へる所は「小說神髓」中の「小說の主眼は專らに人情にある事」と旨趣を一にす。

『原稿料は二十圓なりしかと記憶す。大學在學中に月額八圓の給費を受け居り、それだけにて食費紙筆代に不足なかりし事より推すに、二十圓は此種のものの原稿料としては相當の額なりしが如し。』(作者直話) 當年の東京正米相場は一石六圓五十三錢なり。

異本　明治四十年六月博文館發行「太陽增刊號明治名著集」に收載。

「一讀三歎 當世書生氣質」解題

作者の日記に據れば、起稿は明治十八年四月九日なり。同日記四月二十三日の條下に『中尾に會ふて書生氣質の豫約を爲す。』とあり。同五月十七日の條下に『中尾失敗し芝區三田臺裏町に移轉。書生氣質破約となる。間野に讓る。』とあり。（作者自註。晩青堂間野秀俊氏は長谷川如是閑氏の嚴父山本金助氏と共に淺草花屋敷を創設せし人にして、同時に素人出版業を創めしなり。）『原稿料は日記に記載なく又記憶もなけれど、一册何程といふ約束なりし。』（作者直話）又同日記五月二十日の條下に『東京金玉社（麴町區飯田町三丁目十九番地）田口高朗來る。書生氣質印刷を託す。』とあり。同五月二十四日の條下に『中尾直治來り、書生氣質版權讓受を爲す。間野と出版を相談す。』とあり。同五月三十一日の條下に『晩青堂出版豫算を爲す。』とあり。同年六月二十四日の條下に『書生氣質第一號出版。』とあり。又翌十九年三月十七日の條下に『出校（註。東京專門學校へ）。進文學舍行。此日逆上頗る酷し。此夜長谷川（註。二葉亭四迷）來訪。大に美術及び小說を論じ、小說の文章論に及ぶ。同子が書生形氣の批評尤も妙也。此夜、一事を爲し得ずして寢に就く。蓋し逆上の爲の故なり。』とあり。後年作者「書生氣質」を呼んで「予の舊惡前書」と謂へり。他日著作集刊行の場合にも之を編入せざるべしとなり。

初版本　全十七册。半紙本。晩青堂出版。第一號の發行は明治十八年六月にして、第十七號は翌十九年一月なり。各號版權免許の年月は再版本の末尾にあり。第九號までは一回分が一號にして、其の以下には二回分を一號とせるもあり。奧附には孰れも「出版人間野秀俊」「發兌元晩青堂」とあり。一册の紙數は五枚乃至十一枚にして、總紙數は本文百七十一葉なり。定價各七錢。印刷部數は不明なれども、種々の點より推考するに一千部なりしならむか。

『廣告の事は記憶なし。當時は餘り廣告はせざりき。繪艸紙屋の店頭にぶら下げてありしことは明に記憶す。』(作者直話)

表紙は共紙にして二度刷なり。『式亭三馬の善玉惡玉を摹して一讀三歎の四字を配したるは作者の案にして、下繪を書きたりと記憶す。』(作者直話)右肩に「春のやおぼろ先生戯著」とあり。此書の他、同じ作者の「新磨妹と背鏡」「内地雜居未來の夢」「京わらんべ」「朗蘭夫人傳」同異本「交際之女王」の七書即ち(明治十八年六月より二十年十二月迄の間に著譯せるもの)の表紙には何れも「先生」の文字あり。『先生の文字は作者の關せざるところ。』『書卸しの長篇小説を分冊して刊行せることは當時にありては異例なりき。』(作者直話)

口繪は第一號と第九號との卷首にありて木版彩色摺なり。共に梅蝶樓國峰の畫くところ。挿繪は墨摺にして各號に一葉づゝあり。署名には、國峰、葛飾、桂舟、長(長原孝太郎)とあり。

本文は清朝四號活字にして振假名附なり。組方の特色凡そ次の如し。

(一)『。』句讀點は一種にして、行中に入れずして行側に出せり。『、』は歐文を音寫する場合の語間にのみ用ゐあり。

(二)『○』節を更むる場合、對話中に語勢の一轉する場合、又は伏字に之を用ゐあり。

(三)『「」』引用文の首、對話の次に續けて地の文を出す場合に之を用ゐあり。引用文を別行一字下げにせる箇所もあり、『「」』にて區別せる箇所もあり。

(四)『( )』對話は行を更めず、人名の略稱を之にて圍めり。但し隣室の對話を描寫する如き場合には別行一字下げとせり。又、篇中の人物が朗讀する文章は別行一字下げとして、之に對話を挾む場合には行を更めあり。歐文の原語を音寫して挿入せる場合にも此符にて區別しあり。

（五）『（　）』本文中の歐語に譯語を附する場合、譯語に原語を添ふる場合、本文に註を附する場合、對話を略して描寫に代ふる場合等に之を用ゐあり。其例、

Marriage has many pains but celibacy has no pleasures〔女房持には苦勞多く獨身者には樂なし〕

賞る心はいつしか戀ふる心とうちとくる。〔アドミレイション、メルツ、インツウ、ラブ〕

今年春の二月といふ月〔すなはち粲爾が飛鳥山にて田之次に逢ひたる年也〕

（十）イ、エサ。爰に至つて。プロが僕に惚てゐる證據が現然あらはれたといふ譯は。今まで抗攏のお秀にさへ話さないといふシクレツト〔祕密の事〕を。皆んな僕にはなしたがネ。其大略は〔折から廊下を。ゴロンバタン。ゴロンバタン。ゴロンバタン。バタン。バタン。サラ〱〱。障子を開て入りくる兒鳥〕

（六）對話中に於ける人物の態度を描寫せる句は六號活字にて二行に組込みあり。

（七）歐文式の記號は使用無し。但し第十五回以下には對話中に『……』を用ゐあり。

（八）對話中に六號活字にて『引』とあるは舊來の使用法に同じ。但し歐語の音寫には『ー』を用ゐたるもあり。

（九）欄外に註あり。其例、

守山が言葉中或ひは僕といひあるひは我輩といふは何我輩といふ言葉をいひなれぬ故としるべし。

「イー。ブロツクス。イー。ストンス」とは汝木石にひとしき輩ヨといふ事にてシエイクスピヤといふ英國の狂言作者の臺帳のうちにある臺詞なり。

第一號卷首にある「はしがき」は「小說神髓」との關係を明かにするものにして、又後の異本に之を闕くものもあるを以て左に轉載す。

一讀三歎 當世書生氣質はしがき

英の句レイク翁亞リボン翁などは批評家の尤物株なり古今の小說家の著作を評して勝手放題なる小言をいひまた非評もいはれたりき然はあれ作の翁達にお說の樣なる完全なる稗史を著てよと乞ひたらんには予には不能と逡巡して稗史は著で頭を搔べし是他なし小說の才と小說の眼と相異るが爲なるのみ眼ある者必ず才あるにあらず才ある者未だ必ずしも眼あらざるなり予輓近小說神髓と云る書を著して大風呂敷をひろげぬ今本編を綴るにあたりて理論の半分をも實際にはほと〳〵行ひ得ざるからに江湖に對して我ながらお恥しき次第になん但し全篇の趣向の如



『當世書生氣質』表紙

きは専傍觀の心得にて寫眞を旨としてものせしから勸懲主眼の方〻には或はお氣に入らざるべし予は敢て此書の中より模範となるべき人物をば求めたまへと乞ふにあらず他の行見て我風なほし前の人車の覆るを見て降坂なら降車たまへと暗に讀者に乞ふのみなり作者は勸懲を主とせざれども此を訓誨の料にすると此を奬勸の資にするとは讀者輩の心にあり飴は味ひいと美き一種の食物に外ならねど用ひやうにて孝行息子が親を養ふ良藥にもなり盜跖が窃盜のすてきな材料にもなりしと聞く作者の皿大の眼を開きて學生社界の是非を批評し此書の中に納めたれば讀者輩は地球大の智惠の袋の口を開きて是非を分別して陋劣を去り高尙きを取る實際の用に供へたまはば美術の名ありて微術といふべき予が未熟なる稗史の中にも人の氣格を高うすとふ自然の効用のなからずやはあなかしこ心して讀ませたまへ

十八年の五月といふ月漸々に散りてゆく庭前の八重櫻に落殘る月の下に　春のやおぼろしるす

第九號卷首に附せる一文は、後の洋型異本に全く之を闕けるを以て併せて此に轉載す。

緒言にかふるに。嘗て自由の燈に投じて。某が批評に答へたる文をもつてす。

はじめ隱居が件の小冊子を公にするや。褒貶の評四方に起る。或は曰く。陋猥卑俗文學士の著作に似ず。と或は曰く。學者はおほむね思想に乏し。政治を談ずるの必要を餘所にして。如斯クダラヌ戯述をなす。實に贅旡の極といふべし。寧ろ政治小說を飜譯するの有益なるに如ず。ト或は曰く。件の小冊子に載する所は。三四年以前の書生の情態にして。方今の書生何ぞ斯の如く遊蕩にして惰弱なら

ん。ト或は曰く。本篇に載る所は。悉皆作者自身の經歷なるべし。文學士の履歷果して斯の如き歟。誠に恐ろ感心なり。ト其他是非の批評こもぐ〵いでたり。要するに隱居を以て無要の事に貴重の時間を費し。益なきの戲れをなすものといふに過ぎず。隱居これらの批判を聽くや。一たびは世に稗史眼の無きに驚き。一たびは美術の衰へたるを憾み。一たびは小說家の迷惑を感じぬ。請ふ一々に次を逐ふて。其然る所以を說明せん。

(第一)拙著書生形氣を以て卑俗なりと譏れる批評は。小說の何物たるをしらざるもの丶言なり。下等の情態を寫し。卑俗の言語を用ふるは。元來稗官の得意とする所。よしや。如何程に情態言語に卑俗陋野なる性質ありとも。其精神だに野卑ならずば。之を陋猥と罵るべからず。英のヂッケンスはいふも更なり。近來の小說家の著述にも。下流の樣を寫せしもの頗る多かり。中には密賣女の情態を寫したる者もあり。巾着切の內幕を穿ちたる者もありて。脚色もをさ〳〵近俗にして。且文句さへも卑しげなるあり。但し其意匠の存ずる所は。專ら情態を寫すにありて。彼の爲永派の作者の如く。一向淫靡なる時好に媚び荒みて。野卑をかたるにあらず。是れ東西の小說作者が下流の情態を描くに當りて。異なる所以の一點なりかし。拙著書生形氣の如きも。其の行文は花なく。其脚色は淺劣なれども。主意の眞成に存ずる所は。全く此の意味に外ならざるなり。能く小說の主意を解して後に評判を賜らんには。隱居は滿足して之を受けん。さらずば甘心する能はざるなり。

(第二)の評言は。小說を以て「ユウスフル、アート」(實用技)と同視し。美術を以て專らに政事家の機械となさまくする。實用專門家の妄言なり。是蓋し小說の眞味をしらざるものなり。佛のユーゴの稗史を讀み。英のヂスレリイの小說を閱して之に心醉せる者の言なり。所謂模型主義の小說論者な

り。カフラの生へた勸懲主義のみ。政事といふ字は形容辭にして。特別小說の名たるを悟らで。一向小說を政事に求むる實用主義の人々なるのみ。隱居は此人々の爲に。答辯するを厭ふにあらねど。貴重の新紙を埋めんこと最心なき業に似たれど。暫く之を他日に讓る。論者もし小說の主意を知らんと欲せば。乞ふ其疑ひのある所を表示せよ。億百萬言の答辯と雖も敢て辭せざる所になん。

(第三)は。時代違ひなりといへる批評なるが。是又昔風の讀者の言なり。其故は何となれば。隱居は表題に當世の二字を冠らしたれど。話譚は明治十四五年の事に起せり。故に書生の情態の如きも。はじめ十二三回の其間は。おほむね既往に屬する者多く。末篇にいたるに及ばゞ自然情態の變遷して。更に局面の新なるを見ん。讀んで結局にいたらずして。已に善惡の批評を賜ふ。讀者の眼の鋭きこと。彼の離婁の明にも優れり。誠におそろ感心なるかな。

(第四)は。本篇の話譚をもて。悉皆作者の經歷より成れる者なりといふ評判是なり。是また。小說家の何物たるを知らざるが故の妄言なり。昔し英のデホウは。遠く龍動の外に客となりて。尙能く想像の筆を弄して。龍動大火災の情況を寫しいだし。眞に逼るといふ好評を博しぬ。京傳が章臺に入浸りて。娼婦の內幕を穿ちしが如きは。是京傳がジニヤス(天才)にあらざるの證なり。知らず論者は。自家が實驗せざる事實は。決して穿ちがたきものとや思へる。ヂツケンス翁は。巾着切の態度を寫して。其妙ほと〳〵眞に逼れり。論者はすなはち翁をもて。掏賊の實驗ある人とするや。嗚呼なるかな〳〵。隱居元來非才にして。デホウの達筆。ヂツケンスの英才に比ぶべうもあらねど。さりとて感覺の存する限は。一を見て二を察し。三を聞て五を悟るの力はこれあり。況んや久しく學生となりて。書生社會に浮沈せしをや。耳に觸れし所。目に見たる所。積つて想像の材料となりしは。敢て怪むに

足らざるなり。豈自家の實驗を俟て後に之を知らむや。ハテサテ馬鹿な事を。

春の屋隱居朧述

之に據りて當年の批評界を窺ふを得べく、又作者の用意如何を觀るを得べし。作者が論難と創作とを同時に併せ進めたるものなることも之に依りて明かなり。

作者曰く『當時饗庭篁村「ハテサテ馬鹿な事を。」の結句を「これは氣に入つた。」と語りたることあり。自由の燈は自由黨の機關新聞にして、大蘇芳年の挿繪問題にて評判なりき。』又曰く『第一に引用せし批評は時事新報に載れるものを指す。文學士ともあらうものが藝妓なぞを主人公にしたる戯作を書くとは云々との評なりと記憶す。』

第一回、第三回、第六回、第七回の末に「作者曰く」あり。孰れも洋裝異本に闕如せるものなるを以て左に轉載す。

作者曰く須河の言語は如何なる地方の言語なるかを不審をいだく人もあるべしこは何處の方言と定まりたるものにあらず書生社會に行はるゝ駁雜なる轉訛方語と思ふべし蓋し書生中には上方の生にありながら態々土佐方言などを眞似る者ありて一概に何處の方言とも定めがたければなり（第一回末尾）

作者曰く本篇中に寫しいだせる書生の如きは概ね書生界の上流を占るものなり故に其語らふ所もやゝ高尚なる所ありて今日市中を渡りあるくガラクタ書生とは大に異なり勿論左樣の書生輩は官立大學の學生に多く私塾の生徒には稀なるものなり私塾の書生輩の情態の如きは陋猥にして野卑殆ど寫しいだすに忍びざるものあり故に余は故意に上流の風儀を寫しぬ活眼家幸に咎むる勿れ（第三回末尾）

作者曰くさきに第三號の紙尾に於て「本篇中に寫しいだせる書生の如きは概ね書生界の上流を占るものなり（中略）私塾の書生輩の情態の如きは陋猥にして野卑云々」と記したりしは專ら第三號〔編者註。第三回〕に關し

たる註釋なりしが其文宜しきを得ざりしから。さながら全部に關係せる註釋のやうに思れしと歟聞にき。作者が作の註釋を添へしは彼の守山と小町田とが相語らへる事の趣やゝ高尙に渡る所ありて世人が常に聽く所の書生の內幕話に異なる由あり故に活眼家に怪まれんかと些と分解を添へたるなりしが本篇〔第五號をいふ〕中の書生の如きは決して上流の書生にもあらねば看客其積にて讀みたまへ。最も最下等の書生の如きは尙これよりも甚しきものありそを作者はわざと寫さず之を看客の推察に任しぬ。作者が目して最下等となすは卑屈卑劣なる者をいふなり。苟も自由の志ある者は其行ひに些瑕ありともまづ〳〵中流に置かまく思へり。看客もまた此意をもて此書中の人物を檢査し上中下の位附を定むべきなり。今や學に東京に遊ぶもの其數幾萬人。上中下の割合は大概匹敵すと想像せらる。作者の微意は其三分の二を化して上に加へまく望むに他なし。本書中の人物に玉すくなく瓦多きは即ち此比例を示すものなり。書生は悉く卑劣陋野なるにあらず。地方の父兄誤つて瑕なきの玉に瓦礫の寃名を負はしむるなかれ。（第六回末尾）

作者いはく。本篇は全編の脚色に必要なるがために。餘儀なく描きいでしことなるから。情態の盡さゞる者最も多かり。はじめ友人痴蜂子によりて。花柳の景況を問ひたゞして。もて想像の助とはなせしが。百聞も一見にしかずとやら。耳學的の力をもて。其情態を盡さんこと。元來無理なる事にしあれば。一向趣向を主眼として。たゞ皮相をのみ寫しいでつ。脫稿の後痴蜂子に示して。多少の改删をなさまくせしに。痴蜂子故ありて。ちかき地方にたちいでしまゝ。いまだ歸らず。是非なく原のまゝにて印刷せり。看官作者が苦心を察して。其想像の到らざるを痛く咎むるなかれと云爾。（第七回末尾）

之に據りて當年の風俗を解するの便となすを得べく、又讀者の程度をも察するを得べし。「痴蜂子」に關しては他日作者に質す所あらむ。

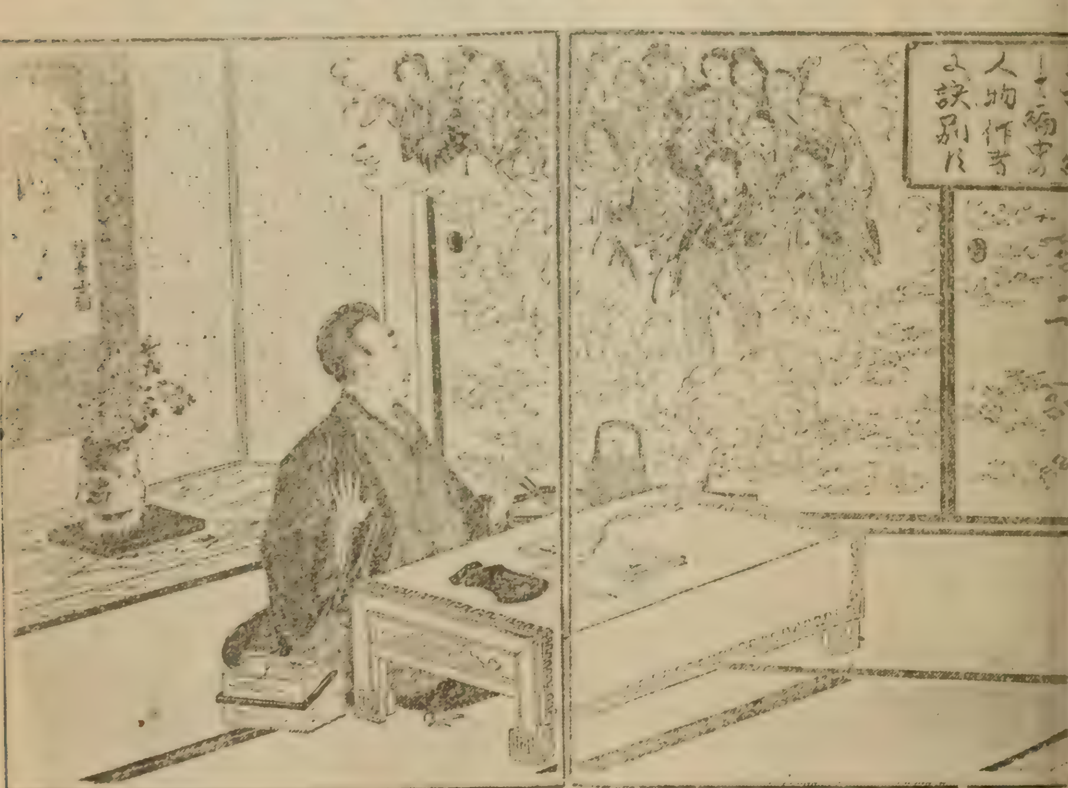
第十七號の末には一再會を約して編中の人物作者に訣別す」の挿繪あり。最後に次の如き卷末言あり。兩者共に洋型異本に倣くところ。

因云作者のはじめ此篇を綴るや。談話を引延して明治十八九年に及ぼし充分情態の細微を穿ちて。兼ては變遷をも示さばやと思ひ。已に第九號の附言に於ては。其意をあから樣に讀者に傳へて。立派に約束までなしたりしが。紙數存外に不足にして。作者の本意通り綴る能はず。殊には當編の眼目といへば。兄妹再會といふ事にありて。書生の氣質といふ事にあらねば。其の表題には背くに似たれど。作者は專らに意匠を凝らして。前者に都合のよき趣向を設けつ。爲に當今の書生の氣質を漏なく描きいだす手順にあらず。作者も遺憾なりと思ひしぞかし。就中最も殘をしきは作者が本來の目的なりける。書生の變遷を寫し得ざりし事なり。書生の變遷とは何をかいふ。曰く其習癖其行爲の變遷なり。譬ばはじめ輕躁なりし人も。年經て沈着になる事なり。書生の頃放蕩なりし者が。却ッて老實なる實際家となるあり。或は卒業して用にたゝざる人あり。或ひは淺學にして用ひらるゝ事あり。其の變轉は萬態千狀一々此ところに言ひがたけれども。寫さば面白さは限なからむ。譬ば當編の小町田の如きは。一個の見すぼらしき神經質なる。未練の少年に過ぎざれども。若し五六年の經歴を積みなば。如何に變りゆくか知るべからず。世には神童などいふ例もありて。天稟英智なるも稀にはあれども。それらは常例の外の者にて。主實稗史家（Realist）の好むところにあらず。兎にも角にも憾多きは此の理を寫し得で止むことにぞある。作者幸ひに暇間を得なば。再び管城子をやとひいれて他日

續當世書生形氣　一篇

を綴らんとす。件の緒篇には。小町田守山。任那倉瀨。お常田の次。吉住兒島等の後談をもあらはし。別に新人物をいださんとす。新人物は主にして書生なり。舊人物は客にして紳士なるべし。故に此續編の如きは。書生形氣兼。紳士形氣を以て見るべし。作者已に多少の腹稿あれども。目下他の著述にかゝづらひたるをもて。暫く其起稿を猶豫するのみ。四方の讀者。もし幸ひに拙著の題目を忘れたまはずば。他日續篇のいでけん折。いくらか舊知交の消息をば。聞たまふが如き感あるべし。

かく書終りたる折。原稿を取去らんと。先刻よりして一枚々々數へて待居たりし書肆の小僧。につたり打笑みていひけるやう先生第九號の口絵の一件はどうなりましたか(朧)ナンじやロ絵と



『書生氣質』挿繪

は。(小僧)ヘン。此繪は全篇の骨子なり後回に至りて明詳なりツ。あの人殺の譯はちつとも詳でございませんね。(朧)エ。ナニ。あれは。なんじや。あれは愛嬌に添たばかしで。所謂讀者をして驚かしむるの法じや。西洋の滑稽本なんぞにやア。屢〻あゝいふ洒落があるテ文章の滑稽や。脚色の滑稽は。巳に陳腐じやによつて。わしが新趣向で應唱を用ひたのじや。ナレトあの事が立消になつて。眞地目で見て居つた讀者諸君を驚かした手際は妙であらうな。小僧は返事もせず緣側にたちいで。

(小僧)ヘン隱居めイ。負惜みをいやアがらア。

是れ亦作者の用意を知るの一材料たり。謂ふ所の「目下他の著述」は「新磨妹と背鏡」なること、其の第一號が明治十八年十二月に出版され居るに依りて明かなり。

第四回第一節の終に在る左の句は洋型異本に闕く所なるを以て左に掲ぐ。

近きころ某がいはれし言葉に官員は娼妓と一般一トたび官員となりたる時には足をぬくこといと〳〵難し。其故はいかにといふに。官員となれば如何程にても金を貸すものが多かるから。自然に借財が殖え行く譯なり。而して免職となる時には。四方八方の高利貸が皆催促に來る事故いやでもおうでも官員をば止める譯にはゆかぬといはれき。けに然事もありけんかし。浩爾が泰然驚く色なく。借金の淵に日を暮るも。其融通のさすがにも。尚おこなはるゝ故なるらし。

此の數行を刪り潰しあるは。作者の談話に據れば、發行者が官吏侮辱に依る發行禁止を警戒するに出でたるものにて、又第九回第十一節の「人は情慾の動物なり。」云々とありて人々氣質を異にするを說明せる一節にして洋型異本に省かれあり。に在る左の句

上見れば及ばぬ事の多いといふ。むかしの謎かはしらざれども。お釜大の高帽子や。高麗人よろしくてふ麥藁帽子で。ジット頭を制へつけて。自ら卑屈を表明せる。○○さんや書生連が。とんだ處で足るを知りて。三拾圓で甘心なし。若くは五六圓で滿足するとは。さて〳〵色々なる人心。其情欲に高下はあれども。の「官員」を「○○」とせるも同一の理由に本づくものなり。但し作者の許諾を得たるものとなり。又「龍○主義を主張」「龍○に溺る」「龍○を周旋」(洋型異本には「龍○」を「(何)」と改めあり)の「○」も發行者の需めに應じたるもの。本解題中、活字の項に述べたる「伏字」は是等を指したるなり。

合本 明治十九年三月、同じく晩青堂より發行されたるものにして、上下二冊ものなり。表紙の別表紙なること、卷末に半峰居士(高田早苗氏)の「當世書生氣質の批評」(讀賣新聞所載)の一文を附載せること、初版本の版權免許月日を奧附に記せること等が初版本との相違なり。半峰居士の批評文は、洋型異本に全文を附載せざるものもあるを以て別欄に轉載す。「書生氣質」に對する當時の批評中にて最も有力なるものたるのみならず、當時の批評界を代表するものとして、批評史の一材料たり。

別製本(初版)洋裝四六版にして、明治十九年八月、晩青堂發行なり。初版本より「缺文」「割註」「作者曰く」「第九回第一節」等は除かれあり。字句に少許の改刪あり。半峰居士の批評は全文を附しあり。活字は清朝四號にて組替へたるものなり。註は欄外に在り。口繪(一葉、木版彩色摺)竝に挿繪(墨摺、十一葉)は新たに年恒(可雅賤人)の畫けるところ。表紙は黑クロースにして、輪郭竝に模樣は空押しなり。背文字は隷書金文字なり。三方は模樣染めを施しあり。定價一圓二十五錢。奧附には「出版人間野秀俊」「發兌元晩青堂木村銈二郎」とあり。

別製本(再版)明治十九年十二月、晩青堂發行。背クロースなれども文字なく、表紙は洋紙石版摺にして、四邊に沿うて輪郭あり、墨ぼかしの小判型の中に隷書白字にて書名を印せる等が此の版の初版本との相違なり。

別製本（異版） 四六判にして、奥附に「明治二十年五月六日譲受御届」「同年六月出版」「定價一圓二十五錢」「出版人木村莊二郎」「發兌元晩青堂」とあり。「譲受」の文字あるは出版人の名義を變更せるに由る。表紙は青クロース、紙表紙に金色の輪郭ありて、書名は小判型に隷書白抜きなれども、別製本の再版本とは異なり。口繪並に挿繪は同一木版を用ゐたるものなり。扉より前に赤刷にて、出版圖書の廣告を四葉挿入せるは異例なり。活字は清朝四號なれども全く組替へたるもの。本文には加筆の痕甚だ多し。半峰居士の批評文は「其四」を削りて附載したり。此れの再版本は編者の未だ見聞せざる所。

菊版本 大川屋の發行なり。表紙は石版刷にして、色紙と短册との中に著者名及び書名をあらはせり。本文は清朝四號活字にて組直したるものなれども、挿繪は別製本の版木を用ゐたるものなり。高田氏の批評文の「其四」が略されあること別製本異版に同じけれども、本文は却つて別製本初版に近き箇所あり。註は本文中に組込みあり。此の本は奥附甚だ曖昧にして、「明治十九年三月廿八日合本御届」「明治十九年八月日別製本御届」「明治二十年五月六日譲受御届」とありて、其の次に此の版の初版年月日を明記せずして、再版以後の年月日を入れあり。明治二十五年十一月に九版を發行せるを以て觀るも相當に弘まり居るべきに、此の本が讀書界に餘り聞えざるは發行者が所謂赤本屋系統なるが爲ならむか。

覆刻本 明治三十年六月博文館發行「太陽十週年記念號」中にあり。

（各異本の本文の異同に關する詳細は玆に略す。）

作者餘談 坪内先生の談話を抄記せる備忘錄の中より「書生氣質」に關する部分を併記す。力めて誤記なからむ事を期したりと雖も、未だ校閲を經ざるものなるを以て編者の私記として看過されむことを希ふ。

『書生氣質の下繪が殘つて居つたとは全く驚いた。いよ〳〵舊惡露顯に及んだ次第で。實は書生氣質を書き始めて

から、四人ほどやつて來た人がある。私は「來る者は拒まず」流だが、此方から尋ねて行くなんといふ事はしない方で、みんな向うからやつて來た人である。長原君も向うから見えた。あの頃長原君は神田孝平さんの書生どころをして居られたが、書生氣質の五號までの挿繪を見て「あれではいかん。もつと新らしいものでなくてはいかん。私に書かせて下さい。」といふ話で、それは何よりだと思つて喜んで此方から賴んだ。私は大へん面白い繪だと思つて居つた。ところが、長原君にはお氣の毒であつたが、新らし過ぎて、どうも世間受けがしなかつた。あの頃は矢張り浮世繪流の挿繪でないと新聞でも喜ばれなかつたやうな有樣で、殘念であつたけれども二枚だけで中止して貰つた次第である。』

『その次に見えたのは二亭である。日記には明治十九年一月二十五日の條下に「長谷川辰之助來る。大に美術を論ず。」とあるのが最初だが、それが始めての時かどうか、兎に角向うからやつて來た事は間違ひない。私は大學で落第をした時に、こりや眞面目に成らねばいかんと思うた。二番目に二葉亭に逢つてから段々眞面目に物を考へるやうに成つた。』

『それから綠雨もやつて來た。しば〳〵やつて來た。もう一人饗庭篁村も押しかけて來た。篁村は見えるとお酒で、それでいつでも座が長くて夜に成つた。』

『あの頃の大學生にはウブイ、アドケナイ、上品な所があつた。私立學校の書生とはそこが大へんな違ひで、そのウブイ、アドケナイところを兎も角も寫した積りである。魯文の書いた書生などとは丸きり違つて居る。大學生の中には三十分の休時間に一ツ橋から上野まで俥を揚げながら往つて還つたといふやうな人が居つた。ずつと後に、明治二十六七年頃であつたか、東京大學の同窓の集まりがあつて、會場は蓬萊亭だつたかと思ふが、伊井蓉峰が書生氣質をやつた事がある。三宅（雄次郎）君も高田君も來て居つた。其の時に私は、伊井がやつて居るのが全く見

るに見られんので、仕舞まで顏を背けてばかりゐた事がある。ウブイ、上品な味がちつとも出てゐなかつた。』

『モデルは或程度まで有る。三人を集めて一人にしたり、二人を一人にしたりしたのも有る。小町田粲爾を高田君だと世間で云つて居るらしいが、「田」がどちらにも附いて居るので、そんな事に見られるのだらう。任那は山田一郎で、此れは立派にモデルである。山田は廣島の人で、山陽氣取りで、非常に健筆家であつた。須河のモデルになつた人は亡くなつた。桐山を三宅君だといふ話を聞いたが、あんな頭の男が三人居つた。それを一つにしたのが桐山である。あの老成人は岡山兼吉と關直彥君を一つに集めて拵へたので、岡山は生きて居れば田君位には成つて居る男であつた。それからよく食ひよくしやべる男は、あれは或男と私とを一つにしたやうなもので。』

借金くらべ

ヒガシ		
大關	貳千圓	中江秋信
關脇	壹千五百圓	野良倉雄太
小結	壹千圓	強岡次郎
前頭	七百六拾圓	臍栗朝泰
前頭	四百圓	永歌修
同	三百七拾圓	圖留花根藏
同	三百五拾圓	厚川連世
同	三百圓	根津町溺

『第六回の中に在る借金番附は、あの通りの實例があつた。中には醫學博士になつた人も居る。』

當世書生氣質の批評

半峰居士

其一

支那人の批評は讃美を主とし、西洋人の批評は刺衝を專らとす。されば支那人の著述は具眼者の評語を得て九鼎大呂より重しと爲すも、西洋人の著述は批評者の刺衝に勝へずして空しく蠹魚の餌食となるもの尠からず。而して今熟々考ふるに支那人の讃美主義は往々流れて諂諛となるのみならず、毫も批評の實効を現はさず、其略なるものは常に艶麗の文字を並べて著者を賞揚したるに過ぎずして、其詳なる者は人の識易からざる妙所を穿ち、人の看るに易からざる要點を露はすに止り、所謂コンメンタリー即ち註釋に過ぎざるなり。批評の要は切磋に在り、批評の要は琢磨に在り、西洋の批評家叢々其尖鋭なる毛穎を弄して少壯の著述家をして綿々絶ゆるの期なき怨恨を懷かしむるが如き其だ酷なるに似たりと雖も、能く批評家の職分を盡したるものと謂つ可し。

惟みるに西洋の文學駸々として日々に進み、能く世の中の進步に伴ふて敢て後れざる所以のものは、批評家其職分を盡して怠らず、揚ぐ可きを揚げ抑ゆ可きを抑へ、毫も假借する所なきが爲めなり。東洋の文學逡巡退步の色を現はし萎靡として振はざる所以のものは、批評家其職分を怠り、徒に諂諛の文字を臚列して其實を塞ぐが爲めなり。嗚呼批評家の責任重ふして大ならず哉。且つ彼の文學なるものは實學と異にして、世の中の步と共に上進すべきものにあらず。文學は情を基とし、實學道理を基とす。道理は經驗を積んで益々發達する、情に道理爲に制せられ經驗の爲めに遮られ、彼其發達を遲鈍にするもなり。故に西洋に在りては「蒲マル」「烏アッジン」再び出で支那にありても韓柳歐蘇李杜の匹復た見るを得べからざるり。慈オンソン嘗て美ルトンを疑ふて思らく、詩頗る巧みと雖ども後世に生れて以て、先蹤の大作に則るを得たるが蒲、烏と匹敵すべからずと。麻コウレェ大に之を駁し、其實驗の世に生れ、而かも天賦の詩才を存するが故に美ルト技倆彌々顯著なりといへり。斯の如く文學は社會蒙昧の時りては隆盛を極め、其進步に隨ひて漸く衰頽に赴くの傾向ものなれば、須らく之を維持して甚だしく衰頽せしめざる便なきを得ず。これ批評家の因て起る所以にして、批評のを得ざる所以なり。

批評家の責任斯の如く、それ重く批評の事斯の如くそれり。故に批評家を以て自ら任ずるものは其心を公明にしての事に從はざる可らず。然而して批評家の批評の事に從事に當りてや、其困難辛酸は決して尠々に非ず。批評家は實者の述作を批評して其怨恨を買ふのみならず、身躬ら公衆めに批評せられて其罵詈惡口の目的とならざるべからず。



『書生氣質』の下繪　春のやおぼろ氏筆

は批評家の公明正大の筆を揮ふて己れの著作を批難するを看て
して曰く、彼れ何人ぞ敢て乃公の大著を非難するや、彼れ能く我
を批難するを得ば必ずや、我が著作に優る可き一大著述を爲すた
ふ刮目して其技倆を觀る可きなり、彼れ若し自ら著作するい技倆
叨りに他人の著述を批難するが如きあらば、僭越の罪決して免る
べからずと。世間公衆は即ち批評家が著作を賞揚すると刺衝する
ひて説を異にし、若し賞揚讃美する時は曰く、此批評家は彼の著
平生の交際水魚啻ならず故に其賞揚讃美するも亦宜なりと。又曰
評家は彼の著述家より暗に依頼を受けたり隱に苞苴を收めたり、
の言ふ所信ずるに足る可らずと。今又批評家他人の著作を刺衝し
する時は曰く、彼の批評家は著述家に舊怨あり著述者の技倆を妬
り、故に其批評や斯の如く不公平にして殘酷なるも宜ならずやと
世の中に職業多しと雖も、批評家の如き困難にして難澁なる職業
れあるべからず。半峰居士及び居士が同社の諸兄はこの業の斯の
難にして且難澁なるを識つて而して自ら當らむとす、豈に勇なら
はんや、豈酔狂ならずと謂はんや。

半峰居士は今や批評の手始めとして、彼の博學洽聞風流洒落を
を以て有名なる春の屋おぼろ先生が嘗て物せられし、當世書生氣質
判せんとす、而して居士が之を批判するに當りて豫め大方の諸君
ぼろ先生とに御斷を申さゞる可らざることあり、大方の諸君子よ
居士はおぼろ先生と莫逆刎頸の交あるものに候ぞや。半峰居士はい
先生と莫逆刎頸の交あれども、然れども居士はいまだ先生より書生
を讃美し給はれといふ依頼を受けたる事なく、又暗々裏に先生居士
を訪ふて苞苴を懷中より出し居士に給はりたる事もなし。されば先



長原孝太郎氏筆の挿畫

書生氣質を批評し、揭ぐべきを揚げ抑ゆべきを抑へて、批評家の職務
完ふせんと欲するなり。おぼろ先生よ、居士は敢て先生の御依賴を受
ず、甚だ餘計のお世話に類すれども、我文學の爲めに先生の高著書生
質を借用して妄評を試みんと欲するなり。惟みるに居士は敢て批評家
以て自ら居るものにあらずして、而して先生は小說家を以て自ら任ず
の人なり、批評家を以て自ら居ざるの人、小說家を以て自ら任ずる人
著述を評す。先生の迷惑實に想ふべしと雖も、居士が既に前段に說明
たるが如く、天下に批評家あらずんば文學終に滅せん。先生にして文
の滅亡を憂ふるとせんか、居士をして郭隗の故轍を踐ましむるは素
當然の事なりとす。且や先生博識にして洽聞なる、居士が自ら小說を
まざるに叨りに高著を批判するを以て、僭越なりとするが如きことあ
ざるべし。先生も夙に識らるゝが如く、批評家と小說家とは自ら其職
を異にするものなり。看よ蔴コウレイ、慈オンソンの徒、文章に巧み
りと雖も敢て詩賦に長じたるにあらず。然かも古昔の大作を評して其
を得たり。波ズリツト、區レイクの輩、文章尙且巧妙ならず、然かも
クスピヤーの院本を細評して大に喝采を博したり。其他白エフレー、
アライル、傳クウエンシー等專ら批評の事に從ひ、文壇に大名を博し
るもの一々枚擧に遑あらず。彼の六二連、水魚連、見連等の連中は
演劇の見巧者にして、自笑、其笑の風を慕ひ能く梨園子弟の技藝を
す。然れどもこれらの輩自ら紅粉を粧ひ、舞臺に登り、菊五然、團
として舞踏を演ずる能はず。由是觀之、批評者著述家と自ら區域を
すること昭乎として明らかならずや。

以上の議論はおぼろ先生の博識卓見なる、夙に認識せらるゝや必
と雖も、世間著述者の多きは或は誤見を懷くもの無きを保せざれば、
を厭はずして敍し侍りぬ。之を要するに批評の事は頗る重大にして、



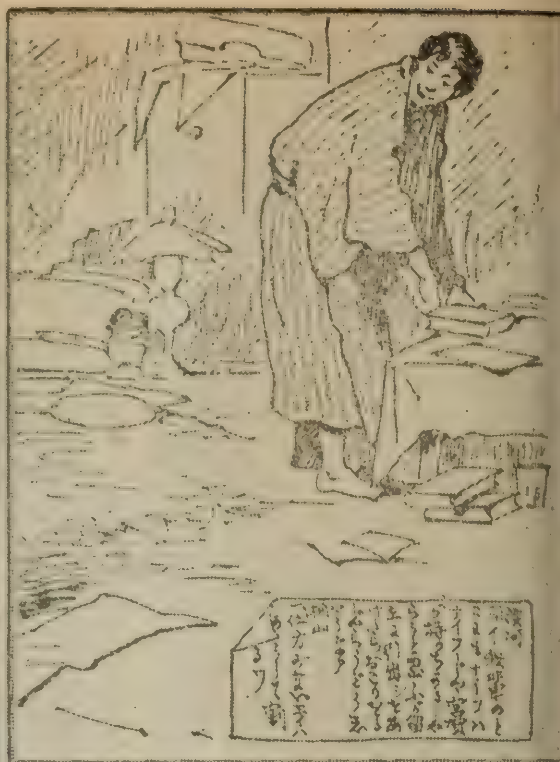
『書生氣質』の下繪——春のやおぼろ氏筆

しておぼろ先生の著作尋常一樣のものにあらず。故に居士が初陣に
批評せんと欲するは所謂蝋に燈心にして、少しく持て餘すことなき
證する能はずと雖も、居士は我文學の爲め進んで堅を侵さんと欲す。
方諸君子並におぼろ先生にして居士の僭越を尤むれ莫くんば幸甚な

其　二

大方の諸君子とおぼろ先生とは、能く居士の前段に開陳したる言
れ、居士をして獨立不羈の批評を爲すを得せしめ給ふべければ、い
是より禿筆を揮ふて書生氣質の批評を爲すべきなり。居士思ふに近
說の著作汗牛充棟啻ならずと雖も、我書生氣質の如き、社會の褒貶
りたるものは多く他にある可らず。是れ將た何の爲めなるか。著者
力强健なるが爲めならざるなきを得んや。熟ら考ふるに、我日本社
讀者は素と冷淡なり、我日本社會の小說の讀者は素と盲聾なり。こ
淡なる且つ盲聾なる讀者にして、書生氣質を褒貶して喋々措かざる
のものは、著者の筆力强健にして能く社會の冷淡者を熱中せしめ、
者の耳目を撥破したるに由らずんばあらず。然れども當世書生氣質
瑕瑾なしといふ可らず。書生氣質は所謂大醇にして小疵なるものな
世の書生氣質を評判する者異口同音に唱道して曰らく、文章巧之
も意匠鄙野に近く、毫も慷慨悲壯の風なしと。又曰く、書生氣質は
の短所を寫して長所を寫さず、且つ藝娼妓の情態を說くに在りて、
に害なしといふ可らずと。其の他是といひ彼といひ、觀察する所同
らず、評する所亦隨て異なる所ありと雖も、要するに其結構尋常と
して鄙なるが如く、陋なるが如きを怪しむの言ならざるはなし。嗚
間小說を讀むの人何ぞ小說を觀るの眼を備へざるの甚しきや。書生
の鄙なるが如く陋なるが如きは其傑作なる所以なり。書生氣質に慷慨
壯の風なきは其著者の高手なる所以なり。居士は世間の批評家が目





長原孝太郎氏筆の挿畫

以て堂々たる文學士の著述たるに似ずとなすの理由を假りて、堂々た
文學士坪内雄藏氏の著述たる所以の證明を爲さんと欲す。
眼を西洋の稗史小說にさらし給へる諸君子は、彼の稗史といひ小說
唱ふるものゝ種類決して一二に止まらず、著者異なれば趣も亦異にし
意匠脚色千態萬狀の稗史小說を夙に知了せらるゝなるべし。而して今
君子にして假りにこの千態萬狀の稗史小說を大別し給はゞ、編述の目
社會道德を誘掖するにあるものと、其目的社會の情態を寫し若くは之を
誡するにあるものとの二大區別をなし給ふ可きなり。抑も彼の稗史小
にして其目的社會の道德を誘掖するにあらしめば、篇中に設くる所の
の主人公なるもの及び主人公と交り、編中に現はるゝ所の諸人物は概
仁義忠孝の人なるを要し、其行爲は須らく勇壯にして其言語は須らく
潑なるを要すべきなり。蓋し此類の小說は其主眼とする所、標準とす
に足る可き人物を篇中に設け、讀者をして其行爲に則らしむるに在る
以てなり。
諸君子よ諸君子に曾て蘇國の「字オルタア」「須コツト」が著せる字
バリー小說の諸書を讀まれたることあらむ。諸君子は彼の愛バンホオ
リズマン我イマナリング健ニルウオルス呂ブロイ等の諸書を繙て、加
なる感覺を起し給へる 嗚呼之を男にしては愛バンホオの士人が勇敢
して純忠なる、之を女にしては少女禮ベツカが貞烈にして艷麗なる、
チヤルドの勇猛豪邁、佐ラデンの慓悍勇武、呂ブロイの義俠、羅レイ
機敏、一として則る可からざるは無く、一として標準たるに足らざる
のなく、所謂頑夫も廉に懦夫をして志を立てしむる處のものなり。大
の諸君子は固より、曲亭馬琴の大著八犬傳を讀まれたらん。犬江犬川
始めとし犬塚犬田に至るまで八人の主人公、一人として仁義忠孝の美
を具へざるものあることなく、一人として讀者の標準たらざるものあ

ことなし。夫れ須コツト及び馬琴の徒は、小說家の第一種類に屬すべきものにして、其條大の筆能く當時と後世とを感化し得て以て讀者をして、淸廉純正の美風を發せしめ功德の偉大なる千部の經卷に優るものありと雖も、然かも小說家たらんものは必ず須コツト馬琴の風を學び、之と其目的を同ふせざる可からずと爲すは偏見の甚しきものたるを免る可らず。看よ布ヒールヂング、須モオレツトは英國小說家の鼻祖と稱せらるゝも以、須コツト、李ツトンの徒と其風を同じふせず。一九、三馬は我國小說の大家なるを以て、曲亭と其流を同じふせざるなり。彼の布ヒールヂング、須モオレツト、一九、三馬の徒は諷世嘲俗を以て其主眼とし、其天性のウキツトとヒユーモルとを以て悉く義理人情を說き以て、須コツトと曲亭との如く封建の德と封建の情とに依り結構を爲すを屑とせざるなり。之を要するに須コツト、曲亭の小說は時代狂言の如く、布ヒールヂング、須モオレツトの小說は世俗狂言の如し。彼の須コツトの小說に心醉して布ヒールヂング、須モオレツトの眞味を解し得ざるものは彼の團十の技藝にのみこれ偏して菊五を以て、役者視せざるものと何の擇ぶ所あらんや。

且つ夫れ小說の變遷上よりして之を觀るに、彼の第一種の小說即ち洋人の所謂「阿イヂヤル能ベル（標準小說）」と稱するものは、第二種の小說即ち居士の私に稱して「曾シヤル能ベル（社會小說）」と稱するものに比すれば劣等の位地を充すものゝ如し。彼の標準小說なるものは固と中古の羅オマンスより出でたるのなり。羅オマンスとは我國の兒童が愛讀する宮本武勇傳と稱する書の如く、中古封建の時代に當り武人勇士の壯快の事

蹟を編述し之に脚色を加へたるものにして、意匠淺薄見るに
る可きもの鮮なし。然れども中古封建の時世は人心尙武に傾
るが故にこの種の書大に行はれたり。漸く進んで近世に至り
遐リー、布キールヂング始めて英國に起り、有名なる社會
[illegible]登ム、慈オンスを著はし、小說の體始めて成れり。惟ふに
オルタア須コツトの如きは幼にして好古の癖あり、長ずるに
んで空前絕後の大名を博したるも、其の人實に空前絕後に
後世其の風を慕へるもの其神髓を傳承する能はず。偶ま之を
倣したるものゝ如き、羅オマンスの俗見を蟬脫する能はざる
々これなり。之に反して彼の社會小說を以て芳名を博したる
の其數枚擧に遑あらず。術ケンス、佐カレイ、慈オルヂ委
ツトの如き須らく例證となして可なるべし。要するに標準小
は[illegible]體素とやゝ幼稚にして時勢に反對するが故に、須コツト
外これに依りて功を奏せるものなく、社會小說複密高尙にし
時勢に適合するが故に人多く之に因りて大名を博し得たり。其
君子若し居士の言を疑はば李ツトン侯の著述に就て見よ。其
十卷の著作中加クストンの評判特に嘖々たるに非ずや。又術
ンス翁の著作に就て見よ、肥イクウイツクの傳他に超えて評
較著なるにあらずや。惟ふに標準小說にのみ心醉して、社會
說の却て之に過ぐるもののあるを識らざるの人は、未だ小說の
味を解し得ざるの人なりと斷言して可なり。坪內雄藏先生と
[illegible]　春の屋おぼろ大人の物せられたる當世書生氣質は所謂
會小說なるものなり。社會小說の粹なるものなり。能く奴イ
ンスの輕妙と佐カレイの精密とを混和したるものなり。書生
質は固より愛バンホーの如くならず、素より八犬傳の如くな

ずと雖も、加クストン肥クウキックに似て而かも繁雑に過ぎず梅暦辰巳の園の艶麗を奪ふて而かも淫佚ならず、膝栗毛浮世風呂の諧謔に則りて而かも野鄙ならざるなり。今我國の小説を愛讀する者を見るに、關羽、張飛、魯智深、李逵なきの書を小説視せざるものあり、犬塚信乃犬田小文吾なきの書を小説視せざる者あり、濱路、雛衣なきの書も亦小説視せざるものあり、甚きに至ては編中政治上の主義を包含せず、政治上の議論を載せざれば小説視せざる者あるなり。斯の如く幼稚なる斯の如く識見なき讀者をして當世書生氣質を讀ましむるは、豈勿體なき次第ならずや 豈猫に小判、アイノに八百善を謂はざるを得んや。

且夫れおぼろ大人の著述中、特に其大膽なるを賞揚せざる可からざるの點ありて存するなり。何ぞや。曰く、其主公なきの小説を作りたること是れなり。昔時英國の佐カレイに字アニテイ布エヤーと稱する小説を著し滿天下を嘲罵したるに當て、別に題して A Novel Without A Hero（主人公なき小説）といひ、大に世間の喝采を博したりき。顧ふにおぼろ大人蓋し之に倣へる歟。書生氣質の編中一人の主人公を設け給はず、彼の小町田粲爾と稱する少年は編中の主人公なるが如き、地位を占むると雖も 素とこれヒポコンデリヤ（心經疾）の一少年たるに過ぎず。其不完全にして主人公たる能はざる點に至りては、彼の佐カレイの著述中に現はれたる志ヤアプ夫人と相讓らず。おぼろ大人の之を以て主人公と爲すに意なきや識るべきなり。吁嗟乎おぼろ大人は小說文壇に初陣さして、現はれたる若武者にありながら、其謀略老將佐カレイさ相讓らず。書生氣質を目して意

匠野鄙なりとし、慷慨悲壯の風なしとして嘲弄する論者は、
も如何なる野暮なるぞや、抑も如何なる盲目なるぞや。

其三（上）

一揚一抑は固より批評家の特權内にあり。扨居士は前段に
て數千言を臚列し、當世書生氣質を批評して且つ口を極めて
を贊美したれば、其著者たる春の屋の隱居先生は定めし其高
らざる鼻を高ふし且之をうごめかして、我れ知己を得たりと
び手の舞ひ足の踏む所を識らざる程に喜び勇み給ふ可けれ
半峰居士も中々人悪るなれば、褒めた切りには措かぬ積に御
候なり。吾半峰居士は批評家なれば、役目に對し候ても惡く
はざるを得ざる次第に御座候也。

俯して考へ仰て惟るに、當世書生氣質の瑕瑾一にして足ら
うち疵あり、きり疵あり、鐵砲疵に似たる刀疵あり。今一々
を暴露して大方の諸君子に示すあらば、彼の江戸のおやぢに
當を受けたりと稱する與三郎其人の如く、徳川の四天王に
者ありと識られたる、榊原康政も斯やあらむと思ぼさるゝ
居士の保護する所ながら、今盡く其瑕瑾を擧げて諸君子に示
奉らんも餘り由しなき事に似たれば、其最も忽かせに爲す可
らざる者に就て論駁を試み此一段を終らんとす。

當世書生氣質の第一瑕瑾は其人物にあり。書生氣質に就て
士の最も 滿足を唱ふる點は、人物の構造宜しきを得ざる
あり。君見ずや、書生氣質の中に現はれたる數箇の人物平々凡
たるに非ずんば、必ず奇癖あるを。凡そ一部の小説中に二三
五の平々凡々たる人を出すは蓋し止むを得ざるの事なりと

平々凡々の人書生氣質の中にあるは固より恕すべし、其主要の地位を占むるの人物一人として奇癖あらざるもの無く、且つ勢力頗る薄くして幽靈の如くなるに至りては、居士頤を脫して作者の拙劣を大笑せざる可らざるなり。惟みるに、春の屋おぼろ又名坪內雄藏ぬしは、小說家兼文學士におわせば、定めし泰西諸名家の批評をも讀まれたらん。彼の御存知の麻コオレエが陀アブレエ夫人の小說を批評したる時如何なる說を爲したりや。其人物に奇癖あらざる無きが故に、これを目して小說家の第二流に在る者と謂はざるを得ずと斷言したるにあらずや。夫れ小說家が篇中の人物を構造するに當りてや、これに附するに一奇癖を以てする時は其擧動を叙するに當て頗る容易なるが故に、往々易きに泥みてこの弊に陷ることあり。豈愼しまずして可ならんや。

斯の如く論ずる時は、春の屋大人必ず嘴を尖らして謂はん、咄汝の言皆非なり、汝識らずや衛ケンス、佐カレエ、李ツトンの徒皆な奇人を其篇中に出すをと。居士冷笑して更に之に對へて謂はんとす、春の屋大人の言實に是なり、佐カレエ、李ツトン奇人を出せりと雖も、篇中の人物悉く奇と凡とを免かるゝ能はざらしめたること無く、其奇人の如きも其奇癖の外に數多微妙の氣質を備へ、おぼろ大人の奇人の如く若し其奇癖を除く時は木偶一般となることあらざるなり。人物ー奇癖＝木偶といふが如きことはあらざるなりと。居士また更に思を凝らして西洋小說の人物と東洋小說の人物とを比較するに、啻に西洋小說の人物は庬密にして、東洋小說の人物粗雜なるのみならず、東洋小說の人物は一々作者の口上に依りて、其如何なる性質なるや

を現はし、西洋小說の人物は自己の擧動に由りて其性質を示
の差あるを發見したり。若しこの區別にして果して之ありと
ば、おぼろ大人未だ東洋小說家の臭氣を脫せずと謂はざるを
ず。蓋し小說中の人物をして完全ならしめんと欲せば、之を
て賢なるが如く剛なるが如く柔なるが如く、冷淡なるが如く
心なるが如くならしめ、恰も、人情の解し難く、人心の測り
きが如くならしめざる可らず。先づ之を爲して而して之に附
るに各人物特有の性質を以てせば始めて、宜きを得可きなり
おぼろ先生も既に識らるゝが如く、彼の謝クスピヤー院本の
物中に最上の地位を占むる波ムレツトは、狂なるが如く狂な
ざるが如く、永く心理學者の問題となれるに非ずや。米國有
の小說家奈サニエル蒲ナソオンの如きは、他の小說家と自ら
義を異にし、人物の心事を解剖して讀者に示すと雖も、然も
生氣質中の人物の如く、只に癖のみにして心なきものを作
ざるなり。南無春の屋おぼろ大人、居士は大人に請求す、大
若し次ぎに小說を作り給はゞ、奇癖と平凡とのみを合併せず
少しく庬雜緻密の Powerful character を作り出し、麻氏の
謂第二流より第一流に進步して、我日本のデモ小說のみな
ず、歐米諸國古今の稗史家を壓倒し給はんことを。大人の小
田は架空癖にして人物ならず、大人の桐山、腕力癖にして人
ならず、大人の須河は卑劣癖にして人物ならず、其他は大概
々凡々なるのみ。大人の人物は其性質に密緻と勢力を缺くと
ふは敢て居士の私論にあらず、遠からずして天下の公論とな
んとするなり。

其三（下）

當世書生氣質の第二の瑕瑾は、愁嘆と詼謔との權衡宜しきを得ざるにあり。居士熟ら書生氣質廿章十七編を通讀するに、其中詼謔の分子頗る多く、能く人の頤を解くの妙有るも、人情切迫して愁嘆極りなき悲哀的の分子に至りては、曉天の星の稀れなるが如き憾なき能はず。書生氣質は頗る Humour と Wit との元素を含蓄すると雖も、Pathos に於て大に足らざる所あり。能く Comedy の趣を備ふるも Tragedy の分子を含むこと尠し。斯く云はばおぼろ大人は定めし憤怒の形相を現して對へ給はん、半峰居士は自ら小説の批評家を以て居りながら、何ぞ偏見の甚しきや。觀よ居士が平生嘖々賞賛して措かざる所の浮世風呂、膝栗毛等の諸小説を觀よや。卷中何れの所にか悲哀の元素ありや、何れの所にか愁嘆の分子ありや。之を讀むもの啻に臍沸き頤脱るゝの快を覺ゆるのみにして、毫も痛苦と悲哀とを感ぜざるなり。然而して天下の廣き、讀者の多き、誰れか一九と三馬とを嘲笑する者あらんや、嗚呼おぼろ大人にして若し斯の如き言を爲し、書生氣質と浮世風呂、膝栗毛に比して以て悲哀的の元素無き責任を免かれんと爲し給ふことあらば、居士謹んで鄙言を足下に呈し、其妄を辨ぜざるを得ざるなり。居士考ふるに、彼の浮世風呂、膝栗毛等の小説は A novel without plan 卽ち趣向なき小説とも稱す可きもの、是れ蓋し趣向なき小説とは趣向全く之無くして、支離滅裂見るに足らずといふには非ず、彼の通常の小説の如く、甲男と乙女との離合集散を說き、惡漢と善漢との勝敗榮辱を記し、篇中に出したる人物の顛末を讀者に報道するといふが如き、勞を執らざる小說を
いふなり。今假りに演劇の語を借りて之を言はんか、浮世風
膝栗毛等の小説は所謂淨瑠璃所作事とも謂ふ可きものにし
Comedy（喜體演劇）若くは Tragedy（憂體演劇）の部類に屬
可き者に非ざるや明らかなり。春の屋おぼろ大人の書生氣質
浮世風呂、浮世床の如く、單に湯屋結髮床の噂話を記るせる
のに非ず、又膝栗毛の如く東海道五十三次の旅日記にもあら
るなり。若し書生氣質にして旅日記噂話の如く趣向なきもの
らしめば卽ち止まん、若し然らずと爲すあらば、居士は斷じ
愁嘆元素の鮮少にして且つ薄弱なるを尤めんと欲するなり。

おぼろ大人と讀者諸君とは能く居士のいふ事を聞け。彼の
ヤールス術ケンスが肥イクウキツク傳を著すに當てや、其の
向を主とするに非ざるが故に、毫も愁嘆の元素を交へずと雖
氏の著作に至りては則ち然らず、其詼謔の天才を專らにする
拘らずこれに交ふるに悲哀の元素を以てし、讀者をして或は
を抱へ或は腸を斷たしめたり。又謝クスピヤーの院本を述作
るや未だ嘗て此悲喜相交ふるの原則に背きたる事はあらず、
理學者の恒に唱ふるが如く悲喜憂樂は素と相關の者なれば
甚しければ喜も亦甚しく、憂甚しければ樂も亦甚し故に、交
用ひて以て相對さしむれば小説始めて活動し、魂飛び魄散に
舞ひ足踏むを悟らざるの快味を覺ゆるに至る可きなり。且春
書生氣質中愁嘆の眞材料ありて、而しておぼろ大人之を利用
給はず、抑も如何なる故に候ぞや。居士惟ふに、彼の小町田
田の次の情話は、用ひて以て愁苦悲哀の材料と爲すに足るべ
用ひて以て讀者をして斷腸の思を發せしむるに足るべき也。

ほ　先生の趣向こゝに出でず、輕々筆を着けて子供の色事の如く爲し給へるは豈遺憾千萬ならずや。是れ蓋しおぼろ先生の、情事を解せざるに因るか、將又た、筆力の勁健ならざるに因る歟。

書生氣質の瑕瑾は以上述べたるものに止まらざること、居士が前段に於て讀者諸君に豫告したるが如しと雖も、餘り長きは御退屈と編輯局の心配も無理ならず、居士も亦自ら御退屈の氣味なきにしもあらざれば、好加減にして御免を蒙らんと欲するなり。嗚呼おぼろ先生は幸福の人なる哉、若し讀者諸君にして退屈せず、半峰居士にして御退屈を爲さずんば、其惡る口と出放題とは究極する所を識らず。おぼろ大人をして恰も稚アルス一世が長久議院の閉期を俟てると、同一の感想を懷かしむるに至る可きを。この一段を終るに臨んで、居士が豫め論ぜんと欲したる箇條を叙列して讀者の判斷を乞はんと欲するなり。

第一。書生氣質の詼謔は隨分面白く、眞正の　Wit　及び　Humour　たるに協ふもの尠しと爲さゞるも。俗にいふ地口口調即ち Pun の部類に屬す可きもの亦尠からず。大に五月蠅を覺ゆ。地口は我國の發句師も頗る厭ふ所にして、西洋の修辭家亦甚だ之を重んぜず。Pun is the lowest form（地には詼諧の最下等なり）といふ語あるに由りて徵すべし。

第二。書生氣質の中、英語を交へられたるは、時節がら頗る好き御考案なるのみならず、書生の談話なれば餘り角立たずと雖も、少しく屢ばなるに過ぎて五月蠅し。西洋の學者が希臘羅甸を引用するに傚ひて、止を得ざる場合にのみ用ひ給ふならば、反て味ひ深からん。

以上、其他は劍山と大達との勝負の如く、預り置く者也。

其　　四

居士は角力行司の辭を假りて前段を終りたれば、又是に角力司の辭を假りて此段を始めんと欲す。曰く番數も段々と御覽入れたる間、此角力一番にて、否段數も段々と御覽に入れた間此の一段にて、今般の批評を終らんと欲するなりと。

扨居士は前段に於て喋々喃々書生氣質の瑕瑾を擧げ、殆んど之をして奈落の底に擠墮せしめたるが如き姿あるも、今又醒沈思默考すれば、書生氣質は決して通常一様の小說に非ずと言せざるを得ざる也。居士が前段に於て書生氣質を嘲罵したは、東洋の小說に比較して之を嘲罵したるに非ざるなり、西の小說に比較して之を嘲罵したるなり。西洋平凡の小說に比して嘲罵したるにあらず、古今獨步の大作高著に比較して之嘲罵したるなり。今若し當世書生氣質を我國從來の小說に比せんか、三馬、一九、京傳春水の著作と遠く相讓らざるや固り論なけん。居士竊かに惟ふ　書生氣質は明治一新以後唯一小說なりと。書生氣質の疵瑕多き恰も與三郎の如しと雖も、地芝居の與三郎にあらず、市川才牛九代の後胤堀越團州の相る與三郎たるに相違なきなり。書生氣質の疵瑕多き恰かも庶の如しと雖も、德川家康四天王たる榊原小平太たるに相違なり。書生氣質は實に小說たるに愧ぢざるの著作と謂ふ可し雖然我春の屋大人の技量は未だ俄に書生氣質を以て、推窮すを得ざるものあり。今其所以を說明する前に當り、大人の背

自叙せられたる言を引用して以て殿軍の材料と爲さんと欲す。大人書生氣質第九號に叙して曰く、（編者曰、略之、參照別項）

嗚呼春の屋大人は何ぞんで牽强附會の言を爲すや。讀者諸君よ居士は前段にも御斷を申せし如く、春の屋大人と莫逆刎頸の交あるものに候へば、能く春の屋大人の履歴を存じ居り候ぞや。讀者諸君よ、大方の諸君子よ、春の屋大人は如何に高慢の顔を爲すも、此間まで書生たりしに相違なく候ぞや。春の屋大人の書生の情態内幕を御存知なる事、京傳が靑樓の內幕に通曉したるに優るも決して劣らざるは居士が保證する所なり。既に其内幕に通曉す、之を穿つの難からざる固より論を俟たざるなり。然れども春の屋大人にして自己の經驗を其儘に寫されんか大人は日記家にして小說家にあらず。大人素と小說家なるが故に、己れの實驗を利用して一部の小說を編むに至れり。然らば則ち居士が、大人の技量未だ俄に書生氣質を以て推窮する能はずといふも、豈宜ならずや。若し夫れ大人にして居士の言を以て當れりと爲さず、悔しさつらさ遣る方なしと思ひ給はゞ、別に第二の著作を爲して敢て實驗の力を假らざるも、椽大の筆能く巧妙の小說を述作するを難んぜざるの證明と爲し給へと云爾。

半峰居士云く。書生氣質全編の中、かげぼうしの緣切を始めとし、新奇の妙案頗る多しと雖も、今盡く之を揭げて讀者を煩はさず。

大正十四年六月二十四日は「書生氣質」第一號發兌の滿四十年記念日に當る。此小篇を作者坪內先生の机下に呈して、大患後意氣益々壯なる先生の健康を祝す。尙本稿竝に坪內先生の諸著作に就きて江湖博雅の垂教を冀ふ。

東京市本鄕區林町二四二番地
神代種亮

明治二十年代の文壇

巖谷小波

硯友社創立當時の事は、私よりも社中の先輩丸岡九華君がよく知つて居るから、同君によろしく願ふ事にして、私はむしろそれから後の、明治二十一、二年頃から三十年迄の事を、記憶をたどつて書いて見やう。

さても硯友社の我樂多文庫の廻覽雜誌から印刷雜誌に、會員雜誌から公刊雜誌に進んだ頃、私はまだ杉浦先生の塾に居て、一方獨逸學協會學校に通つて居つたが、尾崎紅葉君に勸められて、その初號から筆を執る事になつた。それが私の處女作「五月鯉」（後に初紅葉）であつたが、同時に誌上に併んで出たのは、紅葉君の「京人形」と、美妙君の「情詩人」なるものであつた。

然るに美妙君は、其頃已に一方には、女學雜誌や「いらつめ」に筆を執つて、賣り出しの花形役者に成つて居たので、兎角我樂多文庫の方には怠り勝になつて來た。紅葉君はまたそれに引かへ、已に他から依賴のあつたのも斷つて、忠實に牙城を守つて、社中の結束に勉めて居た。此邊から兩者の間が疎隔されて、遂に紅葉君から美妙君へ絕交狀を送る樣な事になつてしまつた。

こんな風だから、私は美妙君とは遂に親しく交るに至らず、その代り紅葉君とは、學窓も全く異つて居たに拘らず、ますく睦み合ふ樣になつたのである。現にその頃、一方根岸派と稱する、饗庭篁村、須藤南翠、森田思軒なんど云ふ諸君が、春陽堂を根據として出した「小說華錦」から、私に寄稿の勸誘が來た時、紅葉君に相談したら、「まだ他所へは

書かん方がいゝよ」と云はれたので、私も斷つてしまつた事があるのだ。「小說華錦」は今の新小說の前身なのである。

所謂る根岸派とは、篁村、思軒、三昧、南翠、得知、露伴なんど云ふ、我々よりは先輩の諸君の團體を指したので、其住居から來た名稱だつたので、之に對して我が硯友社派は、紅葉君の住居から推して、別に牛門派とも云はれて居た。牛門派と云へば、坪内先生こそ牛込の余丁町だから、やはり牛門派であるべきだが、これには後藤宙外、島村抱月、水谷不倒など云ふ門弟諸君を幕僚として、之を更に早稻田黨と云つたものだ。

するとまた一方に、森鷗外君の一派があつた。それは同君が駒込千駄木町に居て、「しがらみ草紙」を機關とし、これには落合直文、三木竹二など云ふ諸君が一所になつて、別に千朶木組とでも云ふ一派をなして居た。早稻田から「早稻田文學」が出て、この「しがらみ草紙」との間に、有名な沒理想論の花を咲かせたのもその頃である。此間に立つて、何の派にも屬せず、批評や、文藝論をして居た人に、內田不知庵(魯庵)、石橋忍月、正直正太夫(齋藤綠雨)、高瀨文淵などの諸君があつた。かう云ふ人々の舞臺には雜誌では「女學雜誌」や、「國民の友」や、新聞では、「國會」や「讀賣新聞」が用ゐられて居た。又小杉天外君は、綠雨君によつて初めて紹介されたかと思ふ。

又新聞を根據として、打つて出た面々に、國民新聞の宮崎湖處子、松原二十三階堂の諸君、また報知新聞からは、森田思軒君の四天王とも云ふべき村井弦齋、原抱一庵、遲塚麗水、村上浪六の四君があつた。

また我々の「我樂多文庫」は、その後「文庫」となり、「江戶紫」と改つたが、その時分にはもう江見水蔭、廣津柳浪の二君も、硯友社の同人になつて居た。鏡花、風葉、秋聲、春葉の諸君は、漸く紅葉門下になつた當時位である。

尤も江見君は、その以前から博文館の「日本の女學」などに寄稿し、また廣津君は同じ博文館から出て居た、「吾妻錦」と云ふ小說雜誌の編輯を、暫時やつて居た事もあるが、此頃は硯友社の別働隊として、前者は「小櫻縅」、後者は「小文學」など云ふ小形の文學雜誌を出した事もある。この小櫻縅の誌上で、初めて田山花袋君の創作が紹介されたのであ

つた。

また其當時、大橋乙羽と云ふ人があつた。同君は石橋思案君の所へ來て、それから硯友社に入つた人だが、初は渡邊を名乘り、一時高橋とも云ひ、遂に博文館の養子になつて、大橋姓になつたのである。博文館に入つてからは編輯局を主宰して、文藝倶樂部や明治小說文庫の編輯に當つて居たが、惜しい事に折角歐米漫遊してかへると、間もなく病を得て死んでしまつた。

それより少し前に、金港堂からは「都の花」と云ふのが出て居て、これは藤本荷陽と云ふ人が編輯して居た。

然し、文士の出世舞臺とも云ふべきは、むしろ國民の友の夏季附錄であつたらう。美妙君が「胡蝶」をかいて、裸體畫問題で文壇を賑はしたのもそれである。露伴君が一口劍を出したのもそれである、坪内先生が「細君」を書いたのもそれである。私なぞもその驥尾について「すみれ日記」と云ふのを書いた事があるが、その時分同誌の記者として、作者を依賴してまはつて居たのが、國木田獨步君だつたのである。

然し、それは要するに雜誌の附錄に過ぎなかつたが、これよりもより注意を引いて、大袈裟に云へば作家の登龍門と云ふ所を承つたのは例の「新著百種」であつた。これは坪内先生の友人で、理學士吉岡哲太郎と云ふ人の經營して居た、吉岡書店から出たもので、その產婆役をつとめたのも、やはり坪内先生であつた。そして、その第一に出たのが紅葉君の「色懺悔」次いで露伴君の「風流沸。」これが非常な評判で此の二君は一躍大看板に進み、やがて共に讀賣新聞——當時唯一の文學新聞——に迎へられて、紅君が「伽羅枕、」露君が「髭男」を書く時分には、これを文壇の菊五郎・團十郎に比した位である。そして、紅君より一步先に出た美妙君は、此時はやくも兩君のために、大分追ひ投かれた觀があつた。

此兩君は、偶然にも共に元祿文學の謳歌者であつたが、これに對抗と云ふほどでないにしても一方浪六君の「三ヶ月」

「女之助」なんど云ふ侠客小説が、一種の讀者の血を沸かせて居た。

また長谷川二葉亭君の如きは、全く何の派に屬するでもなし、(强いて云へば坪内直系?)而もあの「浮雲」以來、優に一方の重鎭たる觀があり、矢崎嵯峨の屋君も、例の「初戀」で頓に名を成して居た。

更に福地櫻痴君が、東京日々新聞を舞臺にして、一流の諷刺小説を書きつゞけ、饗庭篁村翁が、「讀賣新聞」に連載して、獨得の滑稽小説を發表し、共に重きをなして居た事も、逸すべからざる事實である。

尙私は、明治廿五年から廿七年まで、京都の日出新聞に居た關係から、大阪の文士とも交際したが、其頃の大阪には、私と殆んど同時に赴任して行つた、大阪朝日の須藤南翠君をはじめ、西村天囚、高安月郊、渡邊霞亭、本吉欠伸、堺枯川、宇田川文海、木崎好尙など諸君が居て「浪花文學」と云ふものを出し、又山田芝廼園、水藤露石、武富瓦全なんど云ふ諸君が、「蘆分船」と云ふ小冊子を出して、盛んに文藝の批評などをして居た。今の人氣役者菊地幽芳君が、まだ其頃は認められて居なかつたと思ふ。

尙閨秀作家としては、まづ指を樋口一葉女史に屈すべきだが、それより前に今の三宅博士夫人の田邊花圃女史、小金井博士夫人の喜美子女史、岩本善次氏夫人の若松しづ子女史(岩本梶子)後に梶田半古畫伯の夫人になつた、北田薄氷女史など、已に名聞を博して居た。又その他に、田澤稲舟と云ふ女作家も居た。この人は山田美妙君と同棲して居た事もあるが、其後ローマンスの犠牲になつて、松島の五大堂から身を投げて死んだが、美妙君の失脚したのは、その椿事があつたからだとも云ふ。

以上は當時の文壇に付ての、私の記憶を列記したに過ぎないが、更に參考として紹介したいのは、當時の流行とも見らるべき、各種の見立なるものである。これは雑誌や新聞の投書欄に、時々餘興的に出たものであるが、元より皮相の觀もあり、依怙の嫌がないでもないが、又以つて當時の文壇の狀勢を推見する事も出來ると思ふ。幸ひ私の古いスクラ

ツクブツクに、それが殘つて居るから、抄錄して見る。但し此等が何年何月何誌に載つて居たかは不明だが、要するに明治廿三四年頃の物である。

(其一)　凌雲閣登壇人　(未來の天狗木葉武者)

エレベエタア休止中螺旋階にて登りし人

頂上十二階まで

春のや主人(坪内)　饗庭篁村　南翠外史(須藤)　森鷗外
森田思軒　依田學海　三昧道人(宮崎)　前田香雪

十一階まで

霞亭主人(渡邊)　桂華山人(?)　右田寅彦　探菊散人(條野)
幸堂得知　南新二　笠園主人(?)　塚原苔園(澁柿)

十階まで

桃水痴叟(半井)　一筆庵主人(可候)　廣岡柳香　三品蘭溪
渡邊文京　若菜貞爾　麗水(遲塚)　村井弦齋

八階まで

仰天子(武田)　藤蔭隱士(藤本)　片山文彦　根本凌波
芝廼舍洗園(?)

エレベエタアにて一分間に登りし人

頂上十二階まで

梅花道人（中西）　紅葉山人　露伴子　美妙齋主人（山田）
十一階まで
嵯峨の屋おむろ（矢崎）　二葉亭主人（長谷川）　漣山人（巖谷）　湖處子（宮崎）
十階まで
柳浪子（廣津）　江見水蔭　乙羽庵主人（大橋）　抱一庵主人（原）
春亭九華（丸岡）　岡田虚心亭
同五階目通過中
煙亭柴山（堀）　花友情仙（？）　眉山人（川上）　漢山人（多田）
柳山人（堀本）　廂溪居士（喜多川）
開業以前建築中より登壇したる人
末松青萍　福地櫻痴　矢野龍溪　末廣鐵腸
同事務員
涙香小史（黒岩）　織田純一郎
同客員
朝比奈知泉　德富蘇峰　中江兆民
奥山閣より凌雲閣を睨む人
正直正太夫　綠雨醒客（共に齋藤同人也）
凌雲閣の建築に驚く人

假名垣魯文　前島和橋

上野山より凌雲閣を見る人

忍月居士（石橋）　不知庵主人（内田魯庵）　謫天情仙（野口寧齋）

凌雲閣建築發企人

井原西鶴

督工人

安藤白笑　江島共磧　梅嶺翁

設計人

岩瀬京傳　菊池三馬　瀧澤馬琴　十返舎一九

凌雲閣株主一覽表（嘘八百株）

五百株　金港堂
百株　春陽堂
八十株　吉岡書店
二十株　金櫻堂
五十株　博文館
三十株　駸々堂
二十株　共隆社
年八朱利の提灯株保護　各新聞社

(註) 玆に凌雲閣とは、淺草のそれを指したもので、當時丁度それの出來上つた頃なので、これを文壇になぞらへたのであらう。
(其二) 休止中螺旋階で登つた人とは、つまり從來からの作家を指すので、之に對して、エレベエタアで登つた者とは、即ち二三の作品によつて、一時に聲名を擧げたものを云ふのである。それにしても遲塚麗水君の如きは、前者に加へるのはどうしたものか。
(其三) 其他礎業中の登壇者とか、事務員とか、客員とかは、純文學者以外を云ひ、奥山閣から睨む人とか、上野山から見る人とかはつまり批評家を指したのであるが正太夫と綠雨とを、別人と思つて並べた所に立案者の迂濶さも思はれて面白い。
(其四) また之を見て驚く人に、普文、和橋の人々を入れたのは、一寸穿つた所もある。
(其五) 發企、督工、設計の人々に、德川文學の諸名家を並べたのは、又以つて當時の文壇に於ける、作品の傾向を覗はせるに足らう。
(其六) 若しそれ株主に至つては、即ち當時の出版界を偲ばせるもの、これも輕々には看過されまい。

(其二) 明治文學界八犬士 (倣讀賣新聞政界八犬士)

第一期の人々		色ナラバ	草木ナラバ
一、犬江親兵衛	山田美妙	綠	豐後梅
二、犬川莊助	饗庭篁村	青	女郎花
三、犬村大角	依田學海	黃	水仙
四、犬坂毛野	須藤南翠	赤	合歡花
五、犬山道節	森鷗外	黑	紫苑
六、犬飼現八	森田思軒	紫	猿猴杉

七、犬塚信乃　尾崎紅葉　緋芙蓉
八、犬田小文吾　幸田露伴　栗カリン
九、大法師　坪内逍遙　白タコ

第二期の人々

一、漣山人　二、仰天子　三、抱一庵　四、柳浪子
五、浪六　六、乙羽庵　七、眉山人　八、水蔭
九、ナシ

番外

延崎照文──矢野龍溪　杉倉武者助──宮崎三昧
金碗七郎──福地櫻痴　文五兵衛──幸堂得知

（神田明神生投）

（註）これこそ眞の見立なるもので、直覺で判斷する他はないが犬士以外の、大法師に坪内先生を托した所に一寸見遁がしならぬ點もある。

（其二）第二期には、大法師に當るべき人の無い事も一寸面白い見所でないか。龍溪、三昧、櫻痴、得知の諸君と、犬士以外の人物に見立てたので、其頃の諸家の立場も思はれるであらう。

（その三）當世作者忠臣藏見立

由良之助──春の屋　九太夫──不知庵
判官──南翠　定九郎──正太夫

若狭之助―鷗外　　石堂―嵯峨のや
師直―忍月　　本藏―學海
かほよ―柳浪　　山名―梅花
直義―湖處子　　判内―得知
勘平―紅葉　　小林―思軒
おかる―美妙　　力彌―漣
小浪―乙羽　　不破―水蔭
千崎―眉山　　原―思案
才兵衛―南新二　　平右衛門―露伴
大鷲―九華　　矢間―漁山
竹森―紫山　　となせ―三昧
お石―香雪　　おその―採菊
咿唔―夢助　　義平―篁村

（註）此等の見立に梅花とあるのは、中西梅花道人と云つて、讀賣新聞に居た韻文家の事だが、此人はその後狂死した程天才肌の詩人であつた。

（其四）花籠三幅對

鷗外漁史	露伴子	三昧道人	紅葉山人
市川團十郎	市川九藏	市川右團次	尾上菊五郎
禽語樓小さん	神田伯山	放牛舍桃林	邑井一

漣山人
澤村源之助
邑井貞吉

正直正太夫
中村勘五郎
五明樓玉輔

學海居士
中村芝翫
桃川如燕

探菊散人
中村雀右衛門
春錦亭柳櫻

南翠外史
中村福助
小金井蘆洲

(註) これは當時の俳優と、落語家、講談師とに配したものだが、これから推して、又それ等の社會の樣子も覗はれるだらう。

(其の五) 衆議院議員小說家見立

渡邊洪基—森鷗外
島田三郎—山田美妙
黑田綱彥—宮崎三昧
角田眞平—石橋思案
栗谷品三—幸堂得知
山田泰造—渡邊霞亭
鈴木昌司—南新二
高田早苗—巖谷漣

星亨—坪內逍遙
曾禰荒助—尾崎紅葉
藤田茂吉—廣津柳浪
鳩山和夫—依田學海
村上龍平—右田寅彥
長谷川泰—村井弦齋
加藤政之助—渡部乙羽
田中正造—村上浪六

尾崎行雄——長谷川二葉亭	青山朗——西村天囚
大東義徹——須藤南翠	原亮三郎——半井桃水
柴四郎——矢崎嵯峨の屋	稲垣示——黒岩涙香
犬養毅——原抱一庵	井上角五郎——正直正太夫
大岡育造——宮崎湖處子	關直彦——川上眉山
片岡健吉——江見水蔭	林有造——饗庭篁村
末松謙澄——森田思軒	佐々友房——宇田川文海
山田武甫——條野採菊	河島醇——石橋忍月
河野廣中——幸田露伴	三崎龜之助——田邊龍子
丸山名政——若松賤子	山田東次——小金井きみ子

（註）これも前と同じく、當時の政界の一片が覗はれる。然し、その果して適當して居る否やは、今から容易に判斷しかれる。當社中に、田邊、若松、小金井の三女史の入つて居るのに、樋口一葉女史の見えないのも面白い。それは前の三女史の方が、一歩先に文名を傳したからで、此他に木村曙女史、梶田薄氷女史なども居るが、前者は夙く逝き、後者は後れて出たので、此の選者の日に映らなかつたのだらう。

（其の六）硯海の秀才 水滸の好漢 文武豪傑くらべ

呼保義宋江　春のや朧	青面獸楊志　三昧道人
智多星呉用　學海居士	急先鋒索超　不知庵

大刀關勝　饗庭篁村
霹靂火秦明　忍月居士
小李廣花榮　美妙齋
撲天鵰李應　鐵腸居士
花和尚魯知深　幸田露伴
双槍將董平　抱一庵
棄命三郎石秀　麗水生
雙尾蝎解寶　湖處子
豹子頭林冲　嵯峨のや
小旋風柴進　藤蔭
行孝武朽　紅葉
金槍手徐寧　探菊
黑旋風李逵　正太夫
混江龍李俊　香雪
浪裏口跳張順　水蔭
兩頭蛇解珍　殘花

赤髪鬼劉唐　梅花道人
九紋龍史進　漣山人
挿翅虎雷横　春亭九華
阮小二　思案外史
阮小五　漁山人
阮小七　紫山人
玉麒麟盧俊義　思軒
入雲龍公孫勝　南翠
双鞭將呼延灼　鷗外
美髯公朱同　眉山人
沒羽箭張清　浪六
神行太保戴宗　櫻痴
沒遮攔穆弘　二十三階堂
船火兒張横　涙香
病關索楊雄　弦齋
浪子燕青　乙羽

(其六)文壇女性見立(抄)

女教師　鷗外
藝妓　紅葉

女壯士　正太夫　女役者　水蔭
女義太夫　忍月　仲居　思案
女髪結　不知庵　比丘尼　露伴
後室　春のや　女宣教師　嵯峨のや
若後家　仰天子　女官　學海
踊の師匠　眉山　權妻　美妙
姉御　浪六　花嫁　乙羽
芝居茶屋のお神　得知　町家の女房　柳浪
船宿の內儀　南新二　待合の女將　篁村

（註）前者の殆んど無意味なるに比して、後者は確にうなづかれる點が多い。最後に擧げるのは花見立である。これは前記の其二と重複して居る樣だが、此方がやゝ適切だと思ふから序ながら此所に列べておく。

（其七）小說家の花見立

鷗外――梅　春の屋――菊　美妙――桃　紅葉――櫻　篁村――萩
南翠――薔薇　露伴――蓮　柳浪――海棠　學海――李　思軒――牽牛花
正太夫――水仙　忍月――牡丹　漣――藤　抱一庵――桔梗　思案――躑躅
浪六――菖蒲　水蔭――山茶花

（註）露伴君も蓮とは、やゝもするとお經臭い所があつたからで、學海翁と李とは、その漢學者たる爲めであらう。

明治廿二三年の文壇

これは坪内逍遙博士の『小羊漫言』（明治廿六年、有斐閣發行）の中から、轉載したものであります。當時の文壇を知る最もよい文献であると信じます。轉載を御許し下さつた博士に感謝の意を表したいと思ひます。（記者）

坪内逍遙

明治二十二年文學上の出來事月表

こゝに文學といふは重に小説をいふ也小説に文學の全稱を冠らすこと不當なるに似たれど今の小説は新文學の骨髓にして大に在來の和漢文に異なる所あり吾人は未來の日本文學の要素が多く此部門より作らるべきを信ず故に此杜撰あり。

一月『國民の友』の初刷に端物(はもの)小説三種を附錄とす美妙齋主人の『蝴蝶』、春のや主人の『細君』、思軒居士の『探偵ユーベル』（飜譯）皆悲哀的(トラジカル)なり讀者或は是を奇とすされども譯(わけ)ありしにあらず『國民の友(とも)』に小説の附錄を添ふる事これが始なり○『新小説』といふ小説雜誌思軒居士、竹のや主人、南翠外史等を主筆として發兌せられ『都の花』と並び行はる彼には素性の明かならぬ若年の上手多く此には有名の老成家多し○此頃より册子小説減り端物小説殖え大概は雜誌を舞臺とす○文章彫琢の必要人も言ひ當人も感ず隨ッて糊口の爲に書く人減り名の爲

に書く人殖ゆ。

二月　前年美妙齋主人、思軒居士、などが論ぜし韻文論またチョト波だつ忍月居士、鷗外漁史、池袋清風其他二三の新聞紙これにあづかる鷗外漁史の論を讀みて「へーそれでは西洋の詩にも平仄のやうなものがありますか」とはじめて驚くもの澤山あり。

三月　『我樂多文庫』改良して『文庫』となる文壇の梁山泊惣出、西鶴の羽ばたきソロ〳〵世間にひびく。

四月　向島に小説家の小集あり老成家（新聞に關係したる）二三十人集る曙女史万綠中に一點紅を現ず○『國民の友』大家玩讀書目十種といふものを掲げ當代名家の略傳として價値あり。

五月　此頃『女學雜誌』頻りに文學を論じて「美即ち善」の説を主張す極實派の反動漸く起らんとす。

六月　之より先『新著百種』といふ一冊讀切の端物小説毎月のやうに出づ紅葉山人の『色懺悔』つゞいて竹のや主人の『掘出しもの』出づ○學海居士の作『文覺勸進帳』といふ脚本多少の改刪を經て梨園に上る居士の脚本今までにいくらもありしが公に首府の檜舞臺に登りしはこれが始なり又學者の作が芝居となりしもこれが始めなり。

七月　竹のや主人が前かど新聞紙へ掲げし小説及び續き物『むら竹』といふ題號にて此月より陸續出づ南翠外史の『こぼれ松葉』出づ同じ由來の物也これより竹のや主人の妙廣く知らる。

八月　『國民の友』の夏期附錄にS. S. S. 社中作の『おもかげ』といふ韻文（飜譯）竹のや主人の『良夜』（小說）思軒居士の『消夏漫筆』、北邙散士の『流轉』（小說）掲げらる○時に政事上に於ては條約改正論の熱度極點に近づく文學界には何の影響も無し。

九月　『女學雜誌』大に小說及び小說家を論ず○西鶴文次第に流行し言文一致少しく下火となる。

十　月　○漢洋三體の文を調和するの必要衆の感ずる所となる又時の文學の花多くして實の少なきに心づく○高田早苗、岡島覺三、森田思軒等盡力して演劇協會を再興す土方宮内大臣會長たり其の發會に學者の作はじめて公に講談師落語家の口に上る○是より先裸美人の繪坊間の繪草紙屋に一ツさがり二ツさがり遂に澤山さがる道德家慨き美術家呆れ兵士喜んで買ひ書生ソット買ふ而して其由來を『國民の友』の初刷に歸する者あり吾人嘗てゾラの佛國に出たるをば佛國の腐敗に歸せしものあるを聞けり未だ佛國の腐敗のゾラに由來するを說くものを聞かず○『文學評論しがらみ草紙』といふ新誌ω.ω.ω.(新聲社)より出づ鷗外漁史落合直文等これにあづかる。

十一月　此頃元祿文、殊に西鶴熱頂上に達す隨て文章の巧拙を評する者四方にあらはれ文派の分類をなす文章の宗門を作り篁村宗思軒宗德富宗等の名此間に定まる。

十二月　之より先三昧道人飄然關西に去りてかしこの文學を御せしが此月『新著百種』中へ『松花錄』の作あり襲に出たる露伴子の『風流佛』と共に古風にして嶄新雙つながら文章の珠を聯ぬ○北邙散士『しがらみ草紙』中には慨然小說家の責任を說く。

以上洩れたる事定めし多かるべし爰には只思ひ出づるまゝを掲ぐ若し文學界全體に影響せる事又は全體に影響せざるも其反動と思はるゝことあらば願はくは記して寄せたまへ。

明治二十二年文學界(重に小說界)の風潮

昨日の叢譚に二十二年に於ける小說界出來事の月表を掲げしが漏れたる事多ければ爰に思ひつくまゝの評論を加ふべし先づ言ふべきは昨年の文學論の傾きなり他の振を見て我を直うし史傳を讀みて身にひきくらぶるは皆人のする事なれど社會全體に係る事となれば兎角他事として囘顧ぬ向もあり斯くして進まば　個人は過ちを再びせねど社會は過ちを

繰返すこと無しとせず我人身の程を思はずしてこゝに昨年を回顧るは聊かさる向の注意を喚ばんとてなり扨昨年中の文學界（小說界）の經歷を見るに理想上より言へば不滿足の事多けれど比較的に言へば喜ばしき進步を見たりといふべし實際上其上の進步を望むことは叶はざりしなり當年文學の木鐸となる意識して又は意識せずに輿論を導かんと力めしは重に『國民の友』『新小說』『都の花』『文庫』『女學雜誌』等なるべし就中『國民の友』の初刷に三種の端物小說を載せたるは一時の談柄となりぬ「裸蝴蝶」の噂高かりしを見ても世の注意を惹きしは知らる且件の端物以來世間の小說が總て端物形となり前年の如く冊子の小說を出すこと稀になりぬしかれば斯短くなりしは『國民の友』の影響かといふに是には自ら別の理由あり他なし此以前より文章推敲の必要を感ずる者又之を說く者交々出で暗に糊口の爲に書く俄文客を抑えたり『國民の友』の推敲論（粲水漁夫）の如きは其殿なりきしかるに大手腕あるにあらずば長篇を推敲せんこと難ければ漸く名を重んずるの餘り小說次第に短くなれりさりながら此現象には尙外に理由あり一ツは社會が骨の無き長物にあきたると一ツは小說雜誌流行して作の短かきを貴びしが故なり此點に於ては『都の花』及び『新小說』が模範を與へたりといふべし以上理由はさまざ〳〵なれど統括していふ時は世人の目漸く肥えて文章の姸醜（よしあし）に心附きしと著者が其名を大切に思ひはじめしとに因る、これより文章の彫琢盛なり此年中に出し高田早苗の『美辭學』今村長善の『文章哲學』は恰も時に適ひたる著作なり。

文章の彫琢盛なると共に浮華虛飾の弊相伴ひて來れり心ある人は早くも看破して眉を顰め民友記者が「文學の目的は人を樂ましむるにあるか」と論じて文學の定義に主觀客觀の別あるを述て文士の任ずる所更に高かるべきなりと言ひしは明言なり讀者に悅ばるゝは文學の受性をいへるのみ玩ばるゝが文客の本意にはあらずされど民友記者の言も何等の反響を文學界に聞かざりき斯くて四月に至り長谷川辰之助が『文學の本色及び平民と文學の關係』といふドブロリウボフの論を譯して浮文を誡めしも同じ着眼より出しならん是また何の反響をも聞かざりき六月に及び內田不知庵『詩文の本應

と題して詩文の妙は風姿にあらずして風情にあり徒に彫琢を事とせば六朝の浮華となり明代の輕佻とならんと論じ後又『文學の粉飾』と題して其漏れたるを補へり是亦時弊を痛むの文なり其他民友記者の『愛の特質』を説いて我邦の小説家に望む』といふ論文も源は同じ不滿足の泉なるべし扨年末に至り北邙散士の『小説家責任論』いで眞理の發揮人生の説明及び社會の説明をせぬは小説にあらずと説き宇宙主義を唱へたる是また時弊を哀むの餘か扨此間女學雜誌が嚴然『善美唯一主義』を主張し屢〻小説家を誡めたる其の論の遺行こそ異なれこれも時弊の反動なり夫れ傳導師は斯くの如く多かりしが昨年の暮果つるまでは廣く當局者に向つて感銘を與へたりとは思はれず。

兎角する間に文章術の進歩驚く可きものありき言文一致は次第に成長して家を成し且自づから數派を作れり一は山田美砂齋を祖として歐文の原素多く一は尋常の談話を體として俗に近し思案、柳浪、漣などの文體は是なり二葉亭と鷗外とは前の二派とも異なりて又相同じからず而して其門徒に乏し其外二葉亭の體より出て更に一派をなせるが如き嵯峨のやの一體あり細別せば限なしされど去年中最も盛なりし言文一致派は第二派即ち文庫派のものなりき扨言文一致の技倆右の如く上達せしと共に他の文體の技倆も上達し森田派の翻譯體紅葉派の折衷文ますます精致に近づき加ふるに淡島に西鶴を噴出する等の事ありしかば文章を重んずるの傾きと文學界の反動とが相合して言文一致熱大に弛み『讀賣』の竹のやが文章の小道具を嘲倒 るや輿論大に在來文に向ひ冬季に及び蝸牛露伴天外より飄落して『風流佛』を出すや西鶴熱白熱度に達せり隨つて『むら竹』の陸續出づるや竹のやの信仰者俄に八方に湧出し篁村宗の名嘖々たり蓋し輿論の日大に文章に肥えたりしなり併ながら此間翻譯文の本家及び言文一致の本家は敢て衰へたりしにあらず又其信仰者を失へりしにあらず思軒の『探偵ユーベル』『伊太利の囚人』若くは湖處子の『故郷』『此家』及び『行樂』の如き又は美妙齋の『いちご姫』の如きは文を好む者尙其技を賞して讀めり只當時の輿望に合はざりしのみ之と同時に新體韻語に關する議論文

月に至り池袋淸風の『新體詩批評』といふ長文出たり彼れは所謂『博士派の新體詩』を刺り且和歌に押韻の難かるべきを說けり三月に至り忍川居士の譯詩しば〳〵出づそは無韻にして無調なりしかば論者多くは之を非とし『日本』『讀賣』等の新聞に非難の聲きこえ遂に鷗外漁史の『獨逸文學の隆運』と題する短編の詩論出たり西詩に平仄あるを公示せるもの恐らく漁史がはじめなるべし扨六月に及び森三溪の『日本詩文論』出で支考、許六、芭蕉等の和詩を引き押韻の難からざるを說く八月『國民の友』の夏期附錄にS. S. S.の新體譯詩あり譯詩の法丹精を盡せりといふべし然れども褒貶双つながら高くは聞えざりき思ふに多數の人は精讀せざりしならん此のほかにも二三の先覺が工風を凝らせし跡見えたれども總て世の中を搖がすに及ばざりき要するに新體韻語に關する意見は小數の肺肝に蟠まれるのみにて未た大方の同感を得ざりき喩へば水を盛れる藥罐の火にかざされて久しからざるが如し沸々の音尙微なりと雖も程なく騰昻する時あるべし但し此熱騰せる水によりて靈妙の詩想を融化するの日は未だ豫め期する能はず素絹未だ成らざるの日は繪の巧拙を語る可きにあらず嗚呼我新詩人は二重の困難に當る者なり「詩式（フォーム）を定むる」と「妙想を生む」との二ツなり吾人は本年に於ける韻語の前途を刮目 て看んとす。

以上言へる如く文學に對する輿論の傾きは文學と文章とを同視するにありき其證の一二を言へば冬季に及び『女學雜誌』に近體文章三家として德富、森田、饗庭の三氏を擧げ後又近體文十家を擧ぐ『東西新聞』に小說八宗として重に文章を論じたる若くは『小文學』『文庫』等の雜誌に見えたる批評の專ら文章を褒貶したるなど何れも文章を主とせるなり扨又元祿文の行はるゝと同時に元祿物の價高まり貸本屋、古本屋、利益を得、飜刻熱また少しきざせしが甚だしきには至らざりき。

明治二十二年の著作家

昨年中の小説家は從前の作家に比して數十歩を進めたりしや明かなりされど所謂進歩とは文章の上にして觀念の上にあらず觀念の上より言へば當年の小説は依然として「局部小説」なり即ち或社會の人物、或社會の事件或る一種の情操等を描くに力を盡して全局（即ち人間の運命）に留意せしもの殆ど無かりき然るも一體に文學の理想は技量と共に高上となり四五年以前には專ら脚色に泥みし向も今は人間の性情に留意し人柄を描くを大切とせり是實に著明なる進歩なり併しながら倩ら當年の悲哀小説を見るに先づ泣いて後に立案せしものは殆ど無く立案して後に泣きしもの多きが如し作家の目に涙あつて後に悲哀の人物の成りしにあらで悲哀の人物を作りて後に作家強ひて涙を絞りしかと思はる春のやの『細居』の如き其一例なり美妙齋の「蝴蝶」も巧なる丈に同じ非難をまぬがれず。

當年春のやは筆を絶つて退隱し年の暮まで何事をもせず又二葉亭は『浮雲』を中斷して雲間に隱れたりされば此二人は當年の小説界に殆ど關係する所なかりき此間雄飛せるは美妙齋を筆頭とせる『都の花』の諸家、思軒、竹のや、南翠を主筆とせる『新小説』の諸家、紅葉山人を筆頭とせる『文庫』兼『新著百種』の諸家『お八重』及び『露子姫』を著はし且常に批評に從事せし忍月居士『風流佛』を著して忽ち英名を知られたる露伴子、關西を席卷せし三昧道人、獨り脚本壇を占領して優然たりし學海居士、專ら小説の飜譯に從事し時に文學を評論せし鷗外漁史等其尤なるものなり其他そこばくあれどひとり特別の社會（新聞社等）にのみ力ありしは除くさて以上の諸家何れも特質あり長所ありて素より優劣を定めがたく將た巧拙を論ずるの要なし只一言公平に言へば前にいふ缺點は多少諸家（飜譯文は除く）共にまぬがれざりし所かと覺ゆ蓋し昨日の叢談中に言ひし文章彫琢熱の八方にひろがるや勢の至るところ安然たる大家と雖もいくらか傳染せし所無きを保せず一呵して十編立どころに成るといふ竹のや主人だに彼の『良夜』と『堀出しもの』とには稿を更へしかと思はるゝ節あり吾人はド、クヰンシーが六十度下書せしことと又はマコーレーが一句半章を綴るに數十卷を參考せしことを知るものなり決して彫琢を非(わる)しとは言はず只彫琢の重に文章體裁等の上にばかり用ひられしを憾むのみさ

ればこそ當年程題號、文體、趣向、人物、(編中の)表裝及び體裁に工風の費されしこと近頃に稀なり尤も作家自身は或は心附かずにせしもあらんされど傍より見ればしか見ゆるなり喩へば『色懺悔』の題號已に奇にして文體、趣向、人物(二人尼)亦大に奇なり又竹のや主人の自傳體巳に奇にして例に似ぬ眞地目更に奇なり其他『いちご姫』の着想頗る奇にして『風流佛』また眞に奇想なり或は題號の奇なるあり或は體裁の奇なるありおしなべて皆珍らし吾人素より珍らしきものに飢ゑたり豈文學の嶄新を喜ばしく思はざらん只其珍らしかりし割合に讀者を感銘する所深からざりしを憾むのみ案ずるに趣向文體等は小說の肉なり肉に入る力六分ならば魂に入る力四分となるべし慾には魂に七分と思ふのみ只それだけの事なり併し斯くあること一方より見れば文學製造時代(過日我國遂にシエークスピヤ無からんやといふ議論にていひし)の自然なり作家の庸劣なるが故にはあらじ。

必竟昨年の小說は概して小感情的（センチメンタル）のものにて廿五六歲以下の心に面白かりしものなり然らざれば "Not inspired, but made" なりされば『風流佛』に於て一種の光明を認めたるの外人間の運命を語れるが如き作殆んど嘗て見當らざりき是或ひは讀む者の目の至らざるが故か其が中に北邙散士の『流轉』は流俗を脫したる高潔の觀念を包みしや明けし只想像の火よく此の觀念を燃やして炎々たらしめしや否やを疑ふ扨小說家のみならずおしなべて言はんに昨年は一個人競爭の時代なりき岡目より見る時は互に奇巧を鬪はせし跡掩ふ可らずされば人々の批評を試みるや言ひ合せたらんやうに文壇を戰國に譬へけるも故あり但し當時の戰は南北朝の戰にもあらず朝敵征伐にもあらずむしろ生存競爭の戰ひなりき作家皆思ひ〳〵に據り守る所ありしならんしかも斯文の爲に是非せずしておのが嗜好によりて是非せるもの多かりしに似たり批評家の中にも此傾き多少見えき批評が主か、奇論が主か、文章が主か、譏るが主か、將た戯るゝが主か分別しがたきもありき併しながら此等みな文學製造時代(i. e. 新案提出時代、材料採集時代、美醜ふきわけ時代、素絹製作時代、筆ならし時代)の止むを得ざる勢なり只願くは今年は素絹の製造を止めて徐ろに繪の事に取かゝり作家は造化の觀察に

入念し批評家は過日言ひし如く大詩人を作る下ごしらへに社會を老成とならしむべし今の諸家の伎倆は已にラム、フホンティン、たるに耻しからじ此上は『ハムレット』『失樂園』又は『フハウスト』の如き大觀念を入るゝ頭腦こそほしけれ。

明治二十三年上半期文學界の風潮

ことしの春の例にならひて七月までの風潮を批判せんとてふりかへり見るに目ざましき事の多からぬぞ本意なき去年は文運の淀みなく進みし時なり尠くとも小說界にては糊口の爲にものするもの減じて名の爲にものするもの增し杜撰粗漏の文章藏れて琢磨せる文章あらはれ加ふるに元祿文學の新空氣文界を爽かにし森鷗外、落合直文、井上通泰、內田不知庵、幸田露伴　末兼湖處子等の輩出して文壇を風靡せし時なり去年の暮に身まかりし文學狂はいかに今一年を死にとむながりけん末の進步の兆いちじるしかりし故なり然るに年明けて後は初春の莟のきをひ目さむる計りなりしに似ず花早く失せて秋風立たぬうちに四方山の若葉の病葉のやうに凋みゆきたる此魂祭に彼魂あくがれ來しならば神ぞ（紅葉君より借用）呆れて開いたる口をえ閉がざりしならん。

かくなれるを世人は政事といふ外道の所爲なりといへれどいかゞあらんいでや上皮のみを見ればこそ今年は大小說、大詩篇、大著述、大覺悟、大觀念の世とも見えしがそは楷子の新しく高樓にかけられたるを見て一躍りせば登り果つべきものと思ひはやりたる類なり登るは楷子を一つ〳〵踏むなりと知らば今年の一休は楷子を製り終へて登り試みる前に識人の腰まさぐりて靑葉蔭に先づ一服する時なるべし下手の考は休むに似たれど上手の休むは考ふるにおなじシエークスピヤの昔を聞くに彼れの腕節は彼の『ソンネット』を綴りし時已に大かた成りぬとおぼし是廿八九歲の頃なりし乎それより『ハムレット』出でしまでは十餘年經たりきとすれば廿八九より四十までは彼れが修行の時なりき學者の說に彼の

胸に『ハムレット』の趣向浮びしはたしかに三十幾歳の時にて其成りしより尠くとも五六年以前なりし證據ありと案ずるに『ハムレット』はシェークスピヤの卒業論文か『ハムレット』の後には『ハムレット』幾篇もありと見ゆれど其前に無きを思へば其徐に腕を養ひしこと知るべし此春もいひしが去年は製作の時代にて譬へば素を作る時なりしかば假に彼の詩仙の成立にくらべば廿八九歳の頃に當るべし詩仙の天稟なるだに修行に十年を費やしきとせば此一二年の中に大觀念の傑れたる作を見んこと難かるべきは勿論ならずや今年は明治文學子がはじめて修業門に入りし時なり。

そも修業といはゞ精進して怠るまじきなりシェークスピヤは、情に溺れて世間を知らざるロメオの哀しきを寫せしより知に溺れて人間を知らざるハムレットの憫れなるをものせしまで其間幾星霜を經たれど彼れ一年も休まざりき其證は彼の專ら時代物をものせしは此間なりと聞ゆればなり然るに明治文學子の修業はこれと異なりて此大切なる時代に隱れて修行せぬやうに見ゆる人の次第に增しいよ／＼多からんとせるはいと訝し人は之を見て文學さびれたりといひあへり併しながら浮屠は山籠りして修行すといへればこれもさる類なるべくや兎に角に物書く人の藏れたればとて文學の衰へたるにはあらじ元より出版と著述の多寡とを標準にしていへば文壇の寂れたること爭ふべからずと雖も目を瞑ぎて深く氣運をトへば去年の文運の前へ進みしと同じく今年も前へ進めること明かなり先づ文學の內界に於て進み次に其外界に於て進めり內界とは文士の着想の前年よりも進めるをいひ外界とは文章の去年より時に適ひたるをいふ。

文章の事は別にいはんと思へば省き爰には內界の進めること辯ずべし去年の暮までは其道の人の外は著作を評するに大かたは文章の妍醜をも　上下し又は漠然と人情を寫したり否寫さずなどのゝじるのみにて評の作者の觀念に及べるを聞かざりしにはあらねど爰にいふ意味のものにあらざりしなり今は趨勢大に改まり普通の讀者だに稍や眼あるは文章とはいはで着眼といふこれいちじるき進歩なり素より如何なるが善き着想といふかは其人々の心々にて同じからず或は勸懲主義が味方が得たりと誤りて鬨聲を擧げたるもあるべく或は文章のうるはしきに慊らぬ心より非を此點に求めたるもあ

るべしそれは何れにもせよ目の稍や形無きものも向へること實なり『江湖』『朝野』等の新聞紙並に『女學雜誌』等が人情小說を巧織と罵り規模の大なるを作れといひ今の作者は痴情のみを愛とするか何ぞ愛國の愛、愛民の愛をかゝぬなど叱りたる若しくは龍溪居士が今の小說の偏れるを歎きて『浮城物語』を著したるなど其いふ所の當否は暫く措き總て着想を論ぜしものなること明けし其他批評專門の人々の聲もます〳〵此方角に向つて高くなりぬ鷗外漁史が『しがらみ草紙』にて此春のはじめ去年の『詩眼』を評したるが如きは恰も時に適ひたる（漁史の繪畫論の中より借る）ものにて先づ本街道を開きしものなり或は忍月居士が罪過論を反覆して作者を警め或は不知庵主人が觀念論を叮嚀にして末技者流を提醒したるなど元より今年にはじまれるならねどさすがに一層を加へたるに似たりされば露伴子の作を評して觀念高しといひ湖處子の作を批して思念純潔なりなどいふ聲の普通の讀者の間にも間々聞ゆるに至りしこと一つは批評家諸氏の反響を傳へたるに過ぎざるべしと雖も斯かる反響の成立つに至りしは抑々また時の進みたるに因るなり乞ふ讀者と共に批評家の勞を謝し明治文學の前途を祝せん。

夫の政事の爲に文學衰へたりといふが如きは形を見て魂を見ず今の文學界の內證を知らざる物ゝ言なり客氣の新作者出ざるは實にや政事の影響ならん戯れに小說をものする事の廢れたるこれも同じ源ならん又主大小說主義の霹靂は多少卵中の言文一致をおのゝかしめて殺し國文學の疾風は多少巢籠の俗文を吹拂ひしことあるべし併しながら斯くの如き作者はたとひ生るゝとも巢立たず巢立つとも高くとばじよし暫くは羽搏つとも明治文學の雲に沖るは所詮燕雀の少さき翼には賴るまじければ其の退縮を見て文學退縮みせりと思はんは彼のサムソンの頤髯をきざみて彼れの怪力を失はしめたりと思はんにひとし、まこと政事の文學界に及ぼしたる影響を知らんとならば已に家を成し門を成せる作者に就て其痕跡を尋ぬるを當然とす人は謂ふ今年は物かゝぬ作者の多くなりたると共になべての作者も怠りがちなりと前は事實なれど後は誣なり後の誣を辨ずる前に先づ前の事實に就いて彼等作者が政事のさはがしき爲めに筆を收めし跡あるか政事の紛

雜なかりしならば彼等は引つゞきて著述すべかりしかを否か見るべし。

本年になりて殆ど半隱れ去年の目ざましきに似ずと見ゆるは竹のや主人南翠外史並に美妙齋主人の三人なり彼等皆前年に於ては八方に馳騁せる將星なりしなり言文一致の盛えしは美妙齋の力なり篁村宗の譽は竹のやの文章より揚り想像豐富の評は外史の作出づる毎に嘖々たりき元より今とても將星の名は依然たりといへど光はやうやく目ざましからず蝕せられたるよりはむしろ自ら韜まんとするものゝ如し今年となりて竹のや主人の作は『朝日新聞』に見えたる『小町娘』と時々の劇評旅日記の外には『勝鬨』の一篇あるのみまだ其他にも端物はありしかとおぼゆれど爰には廣く知られぬはさし措く又美妙齋主人を見るに『醉沈香』を去年の作として除けば『都の花』に出たるは『いちご姫』の後段を團圓せるものゝみなり後『改進新聞』に助力して『文壇叢話』と『人よし男』との作ありしが其他は取出いふべき程のものにあらず殊にいちじるきに南翠外史の退隱なり『有喜世新聞』の昔より『開花』『改進』と三代を經て雄渾自在の健筆をふるひ數年の間殆ど二月とは休まざりし作者が今年となりては『殘燈』の作一ツのみにて(『破魔弓』は去年の作として除く)久しく黑幕の中に藏れ(よし黑幕の中にて臺張の丹精ありしにもせよ)此ごろ又浮世にいでゝ『新世帶』を結ぶこととなりしまでに他の作無かりしは怪むべし二豎に腦まされたりとて斯くて休む人にあらざるをや或はいふ外史病中匿名にて淨瑠理體の小說を『改進新聞』に出だしきと予もこれを知れるなり只何故に外史があらぬ名を揭げしか、又いふ竹のやは專ら近松の著書を調べて其傳と論とをものせんとし美妙齋は思想を練りて之を韻語にあらはさんとすと是また實事なるべし只何故に元の如く隨感隨艸の筆を用ひざるに至りしか眼ある者は其理を察るに苦まざるべきをこれをも政事の影響といふべしや。

人皆其然らざるを知るべし政事上の紛雜なきも彼等は暫く引籠りて工夫すべき時に臨みしなり其他二葉亭の二葉のまゝなる、嵯峨のやの時賴と共に世を厭ひたる、春のやの返咲きして又忽ち凋みたる、これを政事の影響とすべしや爰にい

はすとても前年よりの消息を知れる人々は知るべからん以上大人を除くの外は別に異なれる狀を見ず。蝸牛の角は故の如く蠻觸の大なるを載せ梅花の匂ひは新に文園の風情を添ふ。學海の波は舊に依りて洋々。思軒の月はむかしながらに射し入れり況してや綠雨の爽かにそゝぎ紅葉のます〳〵錦を懸け岩底の清水潺湲として淸く萩のやの露玲瓏として珠を散らし。湖處侯に遠く小金井塵を見ず加るに鷖鷗の嚠喨かにしてしばらくも文海を去ることなく長閑に中流に來往して細かに漁翁の意を認むるあるをや若し此間に立ちて不知庵の夕勤の鈴の音に觀念を凝し忍ぶが岡の月の影を罪過無うして詠めんには誰か文學を衰へたりといはんや見よ『新小說』は休めりといへども『報知新聞』新に我黨に同盟して龍溪居士の閑雅の筆妥にまた光彩を放つ『都の花』の艶あせたりといふこと勿れ『江戸紫』の色やうやく方に濃か也徒らに『江湖』の流星を惜むこと勿れ『國民』の明星なほ輝けり我社不敏なりと雖もまた常に時に先んじ文運を導かんと力めて休まず百年一日の如し見ずや文學のチャムピオン雲の如し文學さびれんや寂れたりといはんや。

時事消息

●小川未明選集の刊行　今般小川未明氏の全作中よりその粹を選び、小石川小日向臺町文化學會より全六卷をなす同上の選集が刊行される。

●詩人協會成る　中野秀人、高橋新吉、佐藤惣之助、その他二十五氏によつて「詩人協會」が成立され、事務所を小石川林町四十抒情詩社に置き、機關詩として「抒情詩」を發行す。

●佛蘭西現代大家美術展　中央美術社主催で四月廿一日から一週間三越にて開催された。

●錦章堂新作展　淸方、百穗、靈仙、晃甫諸氏の小品三浦常山氏の作陶を五月一日より三日間湯島魚十前で展列した。

●日露藝術協會　その第一回講座を四月十九日神田青年會館で開き、富士辰馬、村山知義、茂森唯士三氏出講。

●日佛藝術社小展　フランス現代作家の水彩、デッサン、版畫五十餘點を四月十九日より廿日まで三共ビル六階にて開いた。

●富本憲吉氏近作陶器展　五月九日より三日間竹早町野島邸にて開かれた。

●支那將來品展　笹川潔氏が滯支七年間に集めた支那古陶書畫百點を五月一日より五日間三共ビル六階に展觀。

●木喰五行上人影佛展覽會　各地に於ける上人の代表的作品及びその文獻史料を四月廿八日より五月二日まで東京帝國大學佛教青年會館に展覽。

●國民文藝賞　大正十三年度國民文藝會推獎は土方與志氏に決定、五月九日同賞を贈つた。

●岡村柿紅氏逝く　劇作家柿紅岡村久壽治氏は五月六日芝車町の自邸に逝いた。享年四十八。告別式は十一日自邸にて營んだ。

新刊書一覽

●綺堂戯曲集第六卷　岡本綺堂著春陽堂四月發行四六判四二三頁定價二圓三十錢　本書第六卷には、「家康入國」「城山の月」「箕輪の心中」「阿蘭陀船」等すべて八篇を收めてゐる。すべて幾回となく上演せられて好評を博したものである。

●珠を拋つ　加藤武雄著新潮社三月發行四六判五〇八頁定價二圓二十錢通俗小說の一典型として推賞するに値する作品である。それ〳〵性格を異にする六人の青年男女の戀愛と運命とを骨子として、現代社會の活圖をくりひろげたもので、戀愛小說にしてまた同時に一個の社會小說である。

●錢屋五兵衛父子　中村吉藏著春秋社三月發行菊半截判三一九頁定價一圓五十錢卷頭の「錢屋五兵衛父子」は四幕の史劇で、「伊井大老の死」「大鹽平八郎」等とともに、中村氏の全作中その代表的傑作として既に定評のあるものであり、最近文藝座によりて帝劇に上演せられ、異常なる好評を博したものである。添ふるに「牛と鬪ふ男」「原始時代」「パラックの陸」「終點」「無籍者」の一幕物五種をもつてしてゐる。

●平將門　眞山青果著新潮社三月發行四六判一九二頁定價一圓　反叛時代の將門を描いたもので、同名の二部作の第一部をなすものである。多感なる小馬小次郎が時代と環境とに追はれて、つひに賊子となるまでの經路が雄大なるスケエルをもつて描かれてゐる。近日稀出の傑作として發表當時世をあげて驚嘆した傑作である。添ふるに「西鶴置土產」の一篇をもつてしてゐる。

●群盲　中村武羅夫著新潮社二月發行四六判四六六頁定價二圓三十錢　本書は上下二卷をなす。一青年と一少女との數奇なる戀愛が骨子になつてゐるが、勞働者と資本家との激烈な階級爭鬪がその背景をなして活寫されてゐる何人も異常な興味をもつて讀むことの出來る長篇小說である。

●阿蘭陀の花　永見徳太郎著四紅社三月發行四六判三二三頁定價二圓五十錢　著者はこの奔放なる想像力とその芳高きエキゾティズムとよりしてユニイクな地位を占めてゐる劇作家である。「和[illegible]」はかつて本誌に載せられて世評を動かした三幕の史劇である。その他「大江山」「妖婦蔚田稻」「紅毛[illegible]幕の曲」外三篇を收めてゐる。戯曲界の一異彩である。

●芭蕉全集　石原健生編芦山堂三月發行四六判三一二頁定價二圓芭蕉の全作を收めたもので、「句集」、文集」、「紀行集」、「日記」、「句評」、「書簡」に分たれて編まれてゐる。

●プエルハアレン詩集　金子光晴譯新潮社三月發行四六半截判三五八頁定價一圓同社の泰西名詩選集第九編である。エミイル・プエルハアレンの作中から傑れたものを選ぶこと四十篇、もつてプエルハアレンの面目を知るに充分である。信頼していい譯本である。

●斑猫　深尾須磨子著新潮社三月發行菊半截判一四八頁定價六十錢同社の現代詩人叢書の第十七編である。その奔放な、自由な詩形に焔のやうな情熱を盛り、女性の新しき表現を見せて、現代の群詩人のなかに一頭地を拔いてゐるものは、ひとりこの著者であらう。著者自ら會心の作を選んだもので、「眞紅の爆烈」釦「五月の女」「斑猫」「貞操の帽子」に章を分ち、おさむるところの詩すべて五十二篇最近の詩壇に於いて、見逃してはならない一收獲である。

●筑波の白百合　福田正夫著新潮社三月發行菊半截判二八六頁定價一圓著者の長篇敍事詩の第四作である。白百合の如き純潔の少女の戀と、その落ちてゆく人生の陷穽の深みを優麗な文字をもつて唄ひ出した哀切な物語である。

●田園・工場・仕事場　中山啓譯述新潮社三月發行新四六判二〇八頁定價一圓二十錢本書はクロポトキンの無政府主義の經濟學的根據をなすものであり、その代表作「パンの略取」の序曲をなすものであり、クロポトキン研究には見逃してならない書物である。「工業の地方分散」「農業の可能性」「小工業的村落」「精神勞働と肉體勞働」「結論」に章を分つてゐる。譯述の平易にして明快であることは喜ばしい。

●權力への意志下卷　生田長江譯新潮社三月發行四六判九四二頁定價二圓五十錢第三書「新しき評價の原理」には「認識としての權力への意志」「自然に於ける權力への意志」「社會及び個體に於ける權力への意志」「藝術に於ける權力への意志」に章を分つて論及されてゐる。第四書「訓練及び教養」に於ては階級制度に對するニイチエ一流の批評を聞くことが出來る。全書中現代に最も興味あるものはこの第四書であらう。

●愛と直觀の唯一線　中谷空極著超人社發行四六判三二三頁定價壹圓五拾錢著者は土佐高知市外の一農夫であり、あらゆる形而上學を一蹴し去る新自由思索家である。この書におさめられた短篇小說は、いづれも一ヒユウマン・ドキユメントとして、近代意識に目醒めた純眞生活憧憬者にとつて力強き伴侶であることを特記したい。

●カルメン　田中純編

●サロメ　廣津和郎編文藝日本社四月發行菊半截判一九七頁定價壹圓貳拾錢同社の世界文藝映畫傑作集第一編及び第二編である。本叢書の刊行は現代民衆藝術の最上の榮冠を荷なふところの映畫藝術の進展運動に參與するところ多大であることを信ずる。本文の外に解說として、原作と映畫との比較研究、及び同一原作にして多種の映畫を有するものはそれぞれについて細述をなす等、他に見ない特色をもつてゐる。カルメン、及びサロメについては、こゝに言ふを要しないであらう。

●純粹美學原論　小笠原秀實著弘道閣四月
發行菊判二七〇頁定價貳圓八拾錢　純粹具象的
經驗より筆を起し、先驗的考察より具象的考察
價値の系統と具象的考察を細論し、純粹具
活動の系統を論じた後、藝術的活動の分析に
於いては全書の大半をあげてこれにあて、
斷なる論理と異常なる情熱をもつてのぞん
ゐる。しかして本書の特色は、あらゆる獨
と拘束とを離れて、ただひとすじに、思ふ
とそのものゝ必然をたよりに書かれたとい
ことの上にある。最近の美學界に注目すべ
一の收獲たるを失はない。

●ダンテイ・ロゼツテイの研究　小日向定
次郎著文献書院四月發行　四六判三六六頁定價
貳圓六拾錢　「詩人ダンテイ・ロゼツテイの
影」「地上の愛より天上の愛へ」「愛の犧牲よ
天上の契りへ」「愴の呪詛より地獄の惱みへ
の四篇に分つて、ラファエル前派の運動よ
筆を起してゐる。前後五年を費してなつた
面目なる研究書であり、その考證の如き
も信頼するに値する。特にその詩の評釋は
緻である。

●隨筆瞳人閑語　日夏耿之介著高陽社三月
發行四六判二七五頁定價一圓著作が詩作の
得らたる研究、考證、隨筆等を集めたもの
學者文人としてのこの著者の一側面を遺憾
く見せたものである。けだし近時簇出した
筆文學中にあつて異彩を放つものでなければ
ならない。「獄中文學考」「焚書史話」「秋詞
歎」「黄眠瞳人語」等すべて廿八篇をおさめて
ゐる。

●郷土會記錄　柳田國男編大岡山書店四月發行四六判二六四頁定價貳圓五十錢新渡戶博士、有馬賴寧、小田內通敏、尾佐竹猛等の諸氏によりて組織されてゐた各地方の研究團體である同會の總記錄である。「黑川能の話」「信州延德沖水災の話」「櫃島幡次氏の新部落」等すべて廿篇、興味深い他に得がたい記事が多い。

●朝の散步　土岐善麿著アルス四月發行四六判定價貳圓　著者のはじめての郊外生活一年の收獲である。「失つた一切の家財のかはりにきよい空氣と、あきらかな日光とをふんだんに惠まれ」た悅はしい半農生活の種々相が、詩人の筆で大らかに描き出され、唄ひ出されてゐる。とくに都會生活者に對しては、異常な魅力をもつてのぞむであらう。敢へて都會生活者にすゝめる。

●梟の樹　山村靑二著、弘道閣四月發行四六判二三五頁定價壹圓參拾錢「梟の樹はこの矛盾の寓話である。」最もあからさまな姿に於いて矛盾の根元に觸れ、このことよりして人間として進むべき態度を明かにしようとしたものである。實際の世界に生きてゆくことの矛盾が、これに依つて解決の根據を得るならば、著者の希望は滿たされる」と著者は言つてゐる。「神」「眞理と報酬」「フェーニックス」「名聲、その他」「富と藝術と天才」藝術家と猫その他すべて十七篇をおさめてゐる。

●藝術の永遠性　眞輪操一著東華書院二月發行四六判一八頁定價八拾錢藝術の永遠性といふ藝術上の大問題に關する眞面目な研究である。文學を一個の社會現象として見、それが他の精神文化と如何なる關係にあるかといふ立場からの考察を忘れてゐないところに本書の一の特色がある。

●安政小唄　久米正雄著新潮社四月發行四六判二六六頁定價壹圓五拾錢　著者の初期の代表作として推さるる安政の大震を背景とした新世話物三幕「安政小唄」及び近作になる長篇田園劇四幕『歸去來』の二篇に添ふるに、初期の作になる一幕物三種「幸運」「別鑓」「秋立つ日」をもつてしてゐる。

●踊り熊　島村民藏著東光閣四月發行四六判定價貳圓五拾錢劇文學の權威であり併せて兒童教育論者でもあり、同時に作者をも兼ねてゐる著者の兒童劇の新集である。おさむるところ、「ナイチンゲール」「二つの壺」「日臨上人」「ヂョーヂと斧」以下すべて廿數篇。ひろく一般の家庭にすゝめるに相應しい。

●抱月隨筆集　宮島新三郞編人文社四月發行四六判二八二頁定價壹圓八拾錢島村抱月の隨筆及び書簡のうちから、最も端的に著者を語つてゐる興味深きもの約三十篇を拔いてなつてゐる。本書の細評は本誌四號の相馬御風氏の文章について見られたい。文學を談ずるものの免してはならない書物であることを附言して置きたい。

●東洋思想十六講　高須芳次郞著新潮社四月發行五四二頁定價貳圓五拾錢第一講「東洋文化及び東洋思想」に於いてまづ東洋思想の特殊性、その源流その史的概觀を明快に解說することより筆を起し、孔子の思想、老子の哲學、莊子及び列子、孟子及び荀子の論[illegible]政治、墨子の哲理、韓非子のマキヤベリズム等を經て、輓近支那印度思想にまで及んでゐる。すべて十六講、著者の三年間の苦心になれるもの、平易にして要領を得たる好箇の東洋文藝思想史である。

●日本詩集　詩話會編新潮社四月發行四六判三五四頁定價壹圓八拾錢本書は大正十三年度の集である。最も要領よくまとめられた大正十三年度詩壇の足跡をなす。五十五氏の代表作をおさめてゐる。

●詩集鶯色の月　梶浦正之著曙光社四月發行四六判一〇七頁定價壹圓貳拾錢新進梶浦氏の第一詩集である。「君は情緖と叡智の護摩を焚く美の修道者である、君の詩集は私に修道者の戒律を敎へる。」とヨネ・ノグチ氏は序して言つてゐる。

●小野の小町　山本勇夫著一人社四月發行四六判二七三頁定價壹圓九拾錢美人小野の小町を主人公とした長篇小說である。異常な意氣込をもつて書かれたといふことが、まづ氣づかれて嬉しい。

●こころさけぶ　細田源吉著惡風館五月發行四六判三一三頁定價貳圓堂々五百枚の長篇小說である。第一長篇作『罪に立つ』によつて長篇作家としての手腕を鮮に示した後をうけて、本書はその圓熟境を遺憾なく見せてゐる。手記體の形式をとつたことも著者としては始めての試みである。全篇悉く現代人が魂の底から叫び出す聲をなしてゐる。

七月號豫告

六月號は御覽の通りの充實した內容にて讀者諸氏に見えることゝなりましたが、何分にも此期は、明治文學の黎明期であるだけ、頗る複雜多樣に亙つて居りますので、七月號も引つゞいてその論說欄の全部を

「胎生期研究號」續篇

とすることに致しました。此號には坪內逍遙博士、內田魯庵氏、三田村鳶魚氏、長谷川天溪氏、伊原敏郎氏、神代種亮氏、生方敏郞氏、木村毅氏、其他の諸家が執筆して下さることになつて居ります。尙、創作欄には新進三家の力作を收める筈になつて居ります。

■早稻田文學（每月一回一日發行）

定價及郵稅

每號定價を六十五錢とす。
隨時特別號を發行することゝし、該定價はその都度これを定む。
每號の郵稅は內地一錢五厘外國行八錢。特別號の郵稅はその都度これを定む。

▲本誌の御註文はすべて東京堂（振替東京二七〇番）へ御申込の事
▼御註文の際は必ず（早稻田文學何月號より）と御明記の事
▼郵券代用の御送金は一割增の事
▼轉居の際は姓名と新舊兩住所御通知の事

大正十四年五月廿五日印刷納本
大正十四年六月一日發行

No. 232

〔禁轉載〕

編輯兼發行者　本間久雄
印刷者　關根慶寬
印刷所　早稻田印刷株式會社

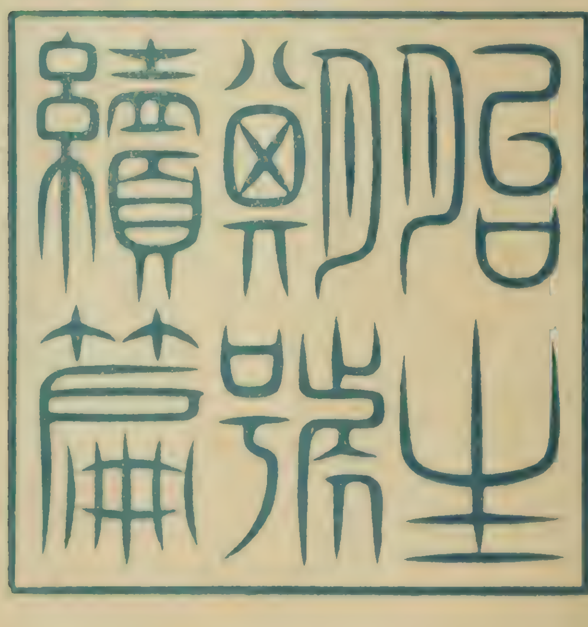
編輯所　東京市小石川區雜司ヶ谷町一四四　早稻田文學社　電話牛込一九〇八

發行所　東京市神田區長神保町三番地　東京堂　電話牛込六一〇七　振替東京二七〇〇番

Office at Los Ang eh Cal. U.S.A. At Second class Mail Matter

早稻田文學





大正十四年

七月號

早稻田文學第二百三十三號目次

明治文學號

『胎生期の研究』續篇

文藝時評

時事消息及新刊書一覧



早稻田文學

七月號

第二百三十三號

回憶漫談

逍遙

私がはじめて東京へ出て來て、帝國大學の前々身の開成學校へ入學したのは明治九年の九月だ。東京大學を卒業したのが同十六年の六月で、處女譯ではなかつたが、公然と名を署したものを世に出したのは『自由の太刀』（該撒奇談）が初めで、それは多分同年の十一月頃であつたらう。

私の過去四十餘年間の著述生活は、自分の氣持の變遷から見て、少くも四期か五期かに區劃し得られるのだが、その第一期は東大在學中の明治十五六年から同廿二年五月の大久保居住までゝある。それはちやうど本誌の所謂明治文學の胎生期に相當する。さうしてそれは、私としては、常に多少の慚愧なしには回憶しかねる無自覺な、甚だ不見識な、浮ツ調子の氣持で駄作ばかりしてゐた時代である。『書生氣質』や『小説神髓』は此間に書いた。廿二年以後、自分の氣持が一變してからは、此第一期の作を回憶することが一種の苦痛となつてゐた。で、成るべくそれを忘れるやうにノヽと力めてゐたと見えて、つい此間も神代種亮君が『書生氣質』に種々の異つた刊行本のあることを調べられた上、内容にも新舊の差のあることを見出だして、いつ、何故に添削したかと質問されたが、私には更に何の記憶もないと答へて、ひどく笑はれた。それほど、第一期の著譯は、四十餘年後の自分には縁遠いものとなつてゐる。

東大在學當時の私は、同窓の故有賀長雄氏が「無主義的（アンプリンシプルド）」と評し、同じく同窓の故穗積八束氏が——數十年後に會つ

た時――「あの頃の君は始終醉つてゐる人のやうだつた」と評した通りの極樂とんぼであつた。廿三四歳になつても尙たかゞ十八九歳の氣持で、浮ッ調子でゐた。其頃の雜誌では、「花月雜誌」や「東京新誌」が最も學生間に愛讀されたものだが、私は寧ろ「團々珍聞」や「魯文珍報」や「歌舞伎新報」の常得意で、少しでも餘裕があると、新富座へ出かける、寄席へ行く。藝術慾は相應にあつたが、どういふ主張も主義もなかつた。西洋小說に對する好尙は、主として同窓の親友であつた高田半峰君の誘掖によつて呼び起された。

田舍育ちの私だが、幼時から化政度の戲作に親炙してゐたので、江戸藝術や江戸情調の面白味は、出京の間際から、都會生れの人達に劣らない程度に解つてゐた。それが一層寄席藝や歌舞伎に心醉せしめた所以でもあつた。心醉したといつても、寄宿舍生活には窮屈な門限があり、給費以外には何等の仕送りとても國元からは來ぬ寒書生の事とて、たかが日曜か半ドンを其享樂に向けたに過ぎない。觀劇の棒組は、大抵半峰君であつたが、寄席へは折々一人で往つた。六錢二厘五毛もあれば、座蒲團を借りた上に、茶まで買へたからであつた。主として晝席で、講談は白梅亭、落語は兩國の立花亭。だから、圓朝の續き話なぞは、つひぞ三日とつゞけて聽いたことはなかつた。「鹽原多助」も、「牡丹燈籠」も、本になつてから、はじめて其顚末を知つた。

其時分――明治十三四年頃――の東大で、西洋の純文學に多少批判的の興味を持つてゐた學生は、存外尠かつたものだ。私の知つてゐた範圍で、最も廣く小說を嗜讀してゐたのは半峰君の親友の故丹乙馬氏であり、半峰君自身であり、故岡倉覺三君、田中正平君なぞであつたらう。故和田垣君なぞも純文學好きであつたのだが、其時分には親しくはなかつた。嚴寒期の小使部屋の爐邊は寄宿舍中の一等暖い處なので、そこへ學生が折々寄り集るのが例であつたが、そこで高田と岡倉とが小說論に華を咲かすことが時々あつた。チューマと馬琴、スコットとリットンの優劣論なぞは、今尙かすかに耳元に殘つてゐる。その頃私は無言の傍聽者たるに過ぎなかつた。

前にもいつた通り、私は齢よりもずつと晩手で、子供げな男であつた。高田、市島、天野、有賀なぞの諸同窓よりも齢は一歳の兄だつたが、柄も、學問も、智慧も明かに劣弟であつたから、私は彼等に對して「オイ、高田君、オイ君」と呼ぶのが例であつたが、高田は私を「オイ、坪内」とか、「坪さん」とか呼んでゐた。親友は呼び附けが當然なのだが私はまだ高田、市島等を呼び附けにするだけの資格がなかつたのだ。もつとも、高田君以外は、私をいつも「坪さん」と呼んでゐた。これは一面は子供扱ひの稱呼でもあつたらしく、多少親愛の意味を含んだものでもあつたらしい。私には前後七年間の寄宿舍生活中、曾て一人の敵もなく、喧嘩口論をしたこともなかつた。それほどに私は稚氣と暢氣と無主義とで終始してゐた。

敵が無かつたといへば、私には、本當の意味では、一生涯、只一人の師匠も無かつたといつてよい。幼少の頃には、私が十人目の末ッ子でもあり、恰も其頃父母が隱退後で、餘暇があつたりした故でもあつたか、隨分いろ／＼な藝を習はせようとしたのだが、なまけ者で我儘な私は、何一つ氣を入れて學んだ事はなく、悉く中途で止め、少しも裨益する所がなかつたし、大學に入つてからとても、通り一遍の聽講をしてゐただけで、どの教師からも是れぞといふ感銘を受けたこともなかつた。外國文學に對する好尚は、今もいつた通り、主として半峰君の誘發にもとづいて助長された。同君の感化は、在學當時の私には、種々の點で、著大であつた。君は、恰も親身の兄貴のやうな態度で、深切に又無介意にいろ／＼の注意を與へてくれたからだ。按ふに、當年の君と後年の二葉亭とが私に最も多く感化を與へた人であつたらう。二葉亭は、あとで話すが、決して敎へるやうに口を利いたことはなかつた。極めて注意深く、禮儀正しく、しかし言ふだけのことは十分に言つてのけるといふ態度で、いはば、弟のやうな口吻で、いろ／＼と文學上の意見や人生觀や倫理觀を洩らしてくれた。で、半峰君によつては、積極的に啓導されたといつてよく、二葉亭によつては、暗示され誘發され、反省せしめられたといつて當然であつたらう。此二君の外に、——所謂胎生期に——私を裨益してくれた人

があつたとすると、それは卒業後に知り合ひになつた饗庭篁村君だ。君は私の作や行爲に關して、醉ふと、得意の諷刺を連發して、私をして其作の拙劣を、又其虛榮や自惚や輕薄を自省させてくれた。それから常に私を奬勵鼓舞したりしてくれた友人は市島春城君であつた。

つい、話がそれた。在學當時の話へ戻る。

文學部といつても、當時のは政治、經濟が主で、西洋歷史、哲學史、國文、漢文等で時間が大部分充たされ、英文學はたかゞ六時間位ゐであつたらう。英文學はホートンといふ紳士的教授の受持で、チョーサーやスペンサーやミルトン、シェークスピヤを主として講じた。學殖は豐富らしかつたが、講義振は純然たる學究だつた上に、眠たい、低い調子でボツリ〳〵、而も私にはやつと六七分通りしか解らない英語で講じたのだから、課目には同情を持ちながら、なまけ者の私たぞは餘り裨益する所がなかつた。シェークスピヤの「ハムレット」の試驗に王妃ガーツルードのキャラクターの解剖を命ぜられて、初めての時には其意味が解りかね、「性格を評せよ」といふのだからと、主として道義評をして、わるい點を附けられ、それに懲りて、圖書館を漁り、はじめて西洋小說の評論を讀み出した。勿論、これも最初は半峰君の指導に負うたものだ。東大の圖書館も其頃のは甚だ貧弱で、シェークスピヤの註釋は、ロルフとやつと出はじめてゐたクラレンドン版ぐらゐのもの、小說もチューマ、スコット、リットン、ヂッケンスなぞが主位であり、單行本の文學論や美術論は英書では皆無、修辭書もベインなぞが第一であつたらう。さういふ有樣であつたから、私は性格解剖法の參考としては、主として近着の外國雜誌の文學評論の部を、或は英文學史類を手當り放題に拔き讀みして、解つた限りを抄譯したり何かした。後に『小說神髓』として捏ち上げた材料の大概は此間の捃摭で、それをともかくも組織立てはしたもの丶出所が全く別々なのだから、後に二葉亭に其根柢を叩かれた時に、「何も無い」と答へないわけにいかなかつたほどに、それは薄弱な基礎の上に築かれた小說論であつた。

リットンやスコットやヂッケンスを半峰君に勸められて、辿り讀みながら、おひ／＼讀み耽るやうになつたのも其時分からである。『湖上の佳人（レデイ・オブ・ザ・レーキ）』を『春江奇緣』（出版の題名は『春窓綺話』）と命題して、同君と共に服部撫松式に譯したのも、九代目團十郎に心醉して彼れの假聲で『文章軌範』や『源氏物語』の下讀みをしたのも、『小說神髓』の第一稿を起したのも、天麩羅屋「松月」へ高田、市島、香坂、石渡らの諸同窓と共に、――其仲間の誰れかの懷に少しでも餘裕がある時には――一週に二三度も出かけて、追込みの席上で、憲法論や貨幣論や小說論の大混戰で左右前後の客を呆れさせ、それが募つて、めい／＼があッちこッちに借金を拵へたのも、其結果、時の副總理の濱尾新氏に呼び附けられて叱られたのも其頃であつた。此風吹き烏的生活が祟りをなして十五年の卒業試驗に落第し、これではならんわいとやゝ眞面目になりかけた時分の試譯が二種あつた。其一が『該撒奇談』であり、其二がスコットの『ブライド・オブ・ランマームーア』一部分の譯である。後者は、在學中の出版であつたので、故橘顯三氏（靜二氏の父）の名を借りて、『春風情話』といふ題名で世に出した。

明治十五年の秋以後は寄宿舍を出て、猿樂町に下宿生活をはじめ、同時に本郷元町の進文學社の英語教師となつて生活費を稼ぎ、鴻臚學舍といふ得體の解らん名稱の招牌を下宿屋に掲げて、そこでも英語の譯解を教へた。生徒は四五人もあつたらうか？　翌十六年一月には、故あつて、幾人もの若い學生を監督する身となつたので、本郷元町の駄々ッ廣い長屋建ての家に移り、下婢を傭ひ、八九人の學生をあづかり、夜學を開いて其人達を教へると同時に、進文學社の生徒中の希望者をも參加させた。これは一つは、自分の生活資を得る爲でもあつた。けれども迚もそれだけでは學資其他が不足するので、此頃から大分勤勉家になり、進文學社の時間をも增し、頻に著譯をもし出した。大學の課目にも比較的よい點を得た。もつとも二度目だからでもあつた。『該撒奇談』を譯し了つて、出版の約をしたのは此年の六月で、すなはち東大卒業と殆ど同時であつた。

卒業と同時に、半峰君の手引で早稻田の東京專門學校の講師となり、元町から小石川の初音町（今の山川男爵の長屋）へ移り、其十二月には、叉更に、小石川表町の廢寺院で、當時故吳文聰氏の所有となつてゐた滅法大きな家へ移つた。それは、預りの塾生や寄寓の友人が殖えたり何かした結果であつた。其後また眞砂町十八番地に移り、更に同廿五番地に移り、廿二年の初夏に牛込余丁町の現住所の隣地へ移つて、第二期の著述生活に入つた。

『小說神髓』は、前にもいつた通り、これといふ一定の基礎書もなく、寄せ木細工式に捏ち上げた藝術論であつた。もつとも、その發刊以前に中江篤介氏の譯に成つた『維氏美學』といふものがあつたが、私があれを讀んだのは『書生氣質』を五六號出してからで、長原孝太郎君から借覽したのが最初であつた。私が『神髓』發刊以前に觸目してゐた文藝に關した邦文の物では、外山、井上、矢田部諸氏の新體詩論とか、菊池大麓氏の『修辭及華文』とか、フェノロサの『美術論』の譯とか、岡倉覺三氏の「書は美術なり」などいふ論位ゐであつたやうに思ふ。岡倉氏の出してゐた何とかいふ雜誌へ「書は美術にあらず」といふ拙い論文を投書して沒書にされたことを微かに記えてゐる。

『小說神髓』は馬琴の餘りに偏した勸懲主義を非難するのを其根本義として書いたものには違ひないが、幼時以來深く薰染してゐた曲亭臭味は、實際はまだ決してぬけ切るどころでなかつた。で、それが歴然と作意にも文致にも殘存してゐた。就中、文致の如きは、徹頭徹尾、論文も、叙事文も、形容文も、すべて七五か八六の而も拙劣な馬琴調崩しであつたのは、畢竟、あの頃の私としては、他に持合せの表現様式が無かつたからではあるが、曲亭排斥の發頭人としては頗る滑稽な矛盾であつた。處女作を『書生氣質』と命題したのは、無論、自笑、其磧に馬琴以上の感興を覺えはじめてゐたゝめではあつたが、何分にも先入の化政度文脈が幅つてゐて、元祿句調を取入れる餘地がなく、自覺が加はるにつれて、我れながら氣障な文體だ、いやだなと思ひながら、どうしても蟬脫が出來ず、あれから後何年も、十何年の後までも、ひどく苦しんだ。小說の筆を抛つたのは、二葉亭の新作に驚かされて、深く前非を自識したからでもあつたが、

一つは、到底、こんな堪らない樣式では、何を書いたとて物にはならぬと煩悶したからであつた。

『書生氣質』は、要するに、暢氣な、なまけ學生のいたづら書きに過ぎない。明治十三四年の寄宿舍生活中にも、時々同窓の遠足記などを駄洒落まじりで書き綴つてゐたが、いはゞ、それを多少筋立てゝ小說にしたやうなものなのだ。胎生期の主な作のやうに言はれると、くすぐつたくて、慚羞に堪へない。『小說神髓』の主張とあの作意とが矛盾するのもつまり、作の方が多少先きに出來、論の方はやゝ後れて取纏められもし、仕上げられもしたからであり、二つには、私の勸懲主義の攻擊は十分徹底したものでなかつたからである。其證據は『神髓』の論旨中にも暗示されてゐるが、『妹と脊鏡』の作意にも見えてゐる。つまり、仁義忠孝の象徵のやうな人物はいけない、說教其物のやうな作意はいけないぐらゐの處に彷徨してゐた論旨なのである。

といふわけで、『書生氣質』も、『小說神髓』も、學藝的には、全く無價値の著述なのだが、時代が幼稚であつた爲に、多少の反響があつて、明治十八年の七月以後には、期せずして幾多の雅友を得た。長原孝太郎君が『書生氣質』の挿繪を畫いてやらうといつて、突然に來訪されたのが七月であり、後の正太夫の綠雨が小說家協會といふやうなものを組織したいといつて、月々二度ぐらゐづゝ來るやうになつた其初めが其八月であり、長谷川二葉亭が初めて來たのが十九年の一月初め頃であり、竹のや（故饗庭篁村君）や關根正直君に知り合ひになつたのも、同じ一月の末であつた。今もさうだが、私は出不精ではないが、他家を訪問することは至つて嫌ひな方であつた。來訪者は、どんな無緣の人をも歡んで迎へたが、先方へ出向いていつた例は、其時分としては、正直君の家大人只誠翁に或示教を乞ふために折々訪問したのと親友一二人の家へ招かれて往つた外、極めて稀れであつた。まして面識でない人を訪ねるなどは、後に早稻田の文學科を創立したり、「早稻田文學」を發行したりした行き懸り上、或人を講師として聘する禮儀上、もしくは投稿を乞ふ爲に、止むを得ず出掛けたぐらゐのものだ。それは出不精といふよりも、癖といふよりも、寧ろ暇が乏しかつた爲でも

あつた。早稻田の專門學校と進文學社の外に、同人社をも敎へ、成立學舍の女子部などをも敎へてゐたからであつた。

嵯峨のや君が前號で書かれたのでも、ほゞ想像される如く、隨分いろ〳〵の、面識の無い人が交る〳〵來訪した。で著譯する暇といつては、早朝か夜間かの外無かつた。平日の晝間は學校の勤務と其準備に費し、日曜のそれは大抵來訪客の應接に暮した。さういふ多忙の間に書くのだから、もとより碌なもの、出來よう筈はないのに、二葉亭に驚かされるまでは、まるきり藝術的良心なんぞの持ち合せの無かつた私だ。濫作や濫譯や濫評論を咄嗟の興に任せて書きなぐつて、少しも恥ぢる氣にもならずにゐた。德富蘇峰君が二葉亭の『浮雲』を感讀して、だれだかに「春のやは達者だがわる達者で、譬へば湯屋で古手拭ひを絞るやうに書く。二葉亭は、それに比べると酷く遲筆らしい。しかしそれは一滴一滴滴らす香水だ」と言つたと其當時聞いたが、いかにも適評で、おこりたかつたがおこれなかつた。漸く自覺の境に入りかけてゐたからである。

二葉亭との交際は『浮雲』の出版以後更に一層密になつたが、其前とても、隨分しば〳〵會談した。廿年以後に於ては、多分私以外の友人、少くも現存の人々には、打明けては話さなかつたらうと推想される家庭の內事にまで關係せないわけにはいかないほどの間となつたが、前號に嵯峨のや君が言はれた如く、彼れと私との交りは、或はまだ眞の親友程度には達してゐなかつたかも知れない。といふのは、隨分しば〳〵文學上や人生上の議論はしたが、曾て二人が顏を赤めて、人身攻擊がゝつた爭論をしたことはなかつた。いや、最晩年には、仔細があつて比較的疎濶にはなつたが、尙假にも「絕交」などいふことを口にしたことはなかつた。これは、一つは、二葉亭が、あゝいふ新人肌であつたにも拘らず初め漢學塾で敎育を受けたといふ關係もあり、時代の習俗――舊道德――の影響もあり、生れ附きが義理堅く、言葉遣ひなぞも、私に對しては丁寧で、同窓の友人連に對して物言ふやうではなかつたからでもあつたらう。とにかく、私と彼れとは喧嘩せずに濟んだ。中ごろ疎遠になつたのは、主として私が大久保に移つたからであつたが、他の理由は、彼れ

が文學から離れて、故高橋健三氏の下に官報局の編輯員となり、官吏生活に入つたからでもあつた。

はじめて逢つた頃の二葉亭は作家としては後の自然主義作家のそれに近い徹底的寫實を主張し、文體は外國小說の體を其儘に口語式に書かうとし、就中、翻譯の場合には、夫婦間の言葉遣ひを同等にして、夫が妻を「お前」と呼へば、妻も夫を「お前」と呼ぶやうに譯すべきだと主張してをり、現に『浮雲』を書いた前に、例の『父と子』の幾ページかを其式で譯して來て(「虛無黨氣質」と題して)見せたことがあつた。それを私が大阪の日野商店へ世話したことがあつた。舊日記抄を見ると、其前金三十圓を二葉亭に渡したといふことが書いてある。それは十九年四月四日の記事だ。あの原稿を日野商店はどうしたか知らん。無論、殘稿を催促しても來ず、其第一稿とても、遂に世に出ずに埋れてしまつた。

要するに、所謂胎生期は、私に取つては、餘り憶ひ出したくもない不愉快な時代だ。落第によつて、漸く先づ眞面目に成りかけ、二葉亭との交際によつて自反自省を促され、更に一層眞面目に成つたにつれて、わが過去生活の無自覺や不見識や輕薄や虛榮や自惚が堪らなくいやになり、悉く筆を執る氣がなくなつたが、生活上、全く絕筆するわけにもゆかず、只獨り心の中で煩悶してゐた時代なのだ。廿三年の大久保への移住は、私に取つては、一生中の重大な心機囘轉期であつた。

二葉亭の事に就いても、私自身の事に就いても、廿一二年頃の文壇に就いても、囘憶すれば話すべき事が隨分あるが病後の故か、昨今の不順に中てられて、根ツから氣力が無く、興が乘らないから、今はこれだけで御免を蒙つておく。いづれ他日を期して此餘談を試みよう。(十四年六月十二日)

明治文學初期の追憶

市島春城

私の東京に出たのは明治八年であるが、それまでは小説に馴れたことが無つた、其頃東京の書生社會では馬琴の小説——八犬傳や弓張月や、美少年錄などを讀むことが流行で、まだ其頃は貸本屋が江戸時代の型で方々にあつた、自分番町の親戚の家に寄食したゐたが、親戚の子弟が毎日麹町の貸本屋から八犬傳を三册五册と借りて讀んでゐるので、自分も初めて馬琴の作に親しみ始めて、八犬傳を全部讀み通し、追々其他の大部の小説にも及んだ、七五調の文章が其頃大變におもしろく思はれたもので、八犬傳中のサワリ文句は、多く書生間に諳記され、信乃濱路別れの一節などを諳誦が出來ないと、友人間に何となく片身が狹く感ぜられた。西洋の語學を習つてゐる一方、舊派の小説に耽けつたなどは、妙な事だが、此頃は新體の小説はまだあまり無かつたやうである。

それから明治九年に開成學校の豫備門に入り、寄宿舍で坪内雄藏君と交つた。君は當時大の馬琴通で、馬琴のあらゆるものを讀過してゐたのみでなく、馬琴脈の文章を縱横に書いた、何んといふ標題であつたか忘れたが、馬琴の顰に倣つて南朝畑の材料で一册の小説を書いて示されたのを見ると、馬琴ソックリで例の七五調で、おもしろきかけ言葉もあり、サワリもあり殺し文句もあるので、自分などはエライものだと驚いた。坪内君は馬琴ばかりでなく、三馬でも春水・も一九でもあらゆる作家に通じて、詼謔の文はなか／＼得意であつた。それはヅット後に書いた「馬骨人言」などで何人も會得したであらうが、大學時代に書いた詼謔文字で自分の記憶にあるのは、五六人の同窓が連れ立つて、鴻之臺へ徒

歩で住返した其の紀行を膝栗毛風に書いたことがあつた。ある時坪内君に示された小説目錄、それは讀み本洒落本人情本草双紙の類まで千種以上も收めたものであつたが、何んの目錄かと聞いたら、鄕里にある時名古屋の大惣（貸本屋）から借覽した書名の大略を書き記したのであると聞き、その涉獵の廣ろいのに一驚を喫した。坪内君は其頃既に一ト廉の小説家であつたのだ。

自分は大學の文科に入つたが、志す所は政治にあつたので、文學とは無交渉であつた。随つて文學に就て何も云ふ資格が無い。唯だ親しい友に坪内君のごとき人があつて、學窓時代から今日に至るまで、四十數年の間交情が連續してゐるために、此友人から文學上の薫陶を受けたことが少なくない。時より往來して話題となるのは文學談で、自分からワカラヌ事を問ふたこともあつたが、坪内君はいつも深切に一時間も二時間も其の薀蓄を傾けて諄々として說き聞かされたので、興味を感じて時の移るを忘るゝのが常であつた。コンナ偶然の往復で自分の受けた文學上の薫陶も少なくないが、まして毎年例として熱海に坪内君と落合つては、一週間位毎日五六時間にわたり、坪内君の文學論を聞くのが定例で、新らしい各國の文學思潮なども例の巧みな說き方で深切に話して吳れられた。殊に劇に關しては古今東西に通じて該博な講說があつた。考へてみると坪内君には多くの門人があるが、自分は恐らく尤も深切に且つ尤も多量に教育を受けた門人であらう。自分は文學趣味が缺けてゐるものか、性來の魯鈍は薫陶を受けた割合に、一向開發する所がない。しかし多少にても文學に就て理解のあるのは、坪内君のお蔭である。坪内君は内々自分を劇趣味の歸依者にしたい下地もあつたらしく特に熱心に劇に關して講說されたが、どう云ふものか自分に劇の趣味が起つて來ないので、坪内君もいつぞや君は何んでも趣味に通ずる人だが、劇丈は取除かねと云はれたこともある。亦、君に劇の趣味があると俺れも助かるが、など云はれたこともあつた。如何にも坪内君の期待に背かないで劇趣味があつたら、折角參加した文藝協會にもモー少し手腕が揮へたであらう。しかし坪内君は自分に對しては特別の同情がある。いつぞや大隈老侯か雑誌を起さ

るゝに付自分に擔任せよとあつた時などは、坪内君は早稻田文學を人に委して以來連續的に雜誌に執筆することを思ひ止まつてゐられたのだが、此事あるを聞き、君がやるなら、俺れも努力して助筆すると云はれた、此雜誌は遂に自分が擔當せずに了つたが、坪内君の同情は眞に感謝に堪へない。

私は坪内君と右いふ樣な間柄であるから、坪内君の作などを是非する能力も資格もゝつてゐない。唯だ大學同窓時代の事を追憶して見るのに、自分の觀察が誤つてゐるも知れんが、多少の說がある。それは何かといふと、前にも云つた通り坪内君は學窓時代に既に立派な舊派の小說家であつた。少なくとも非常の素養があつた。その素養が結局坪内君を大家となしたのであるけれども、西洋風の小說に推し移るには或は却つて累をなしたかの樣にも考へらるゝ。どうも一ッの型式に熟してゐる人はそれ捕へられて他に轉ずる場合には困難を感ずるものである。坪内君に若し舊派の小說の筆が無かつたとして、西洋小說に早くから沒頭したら、初めからモット新らしい小說が書けたであらうと思はれる。坪内君の書生氣質は有名なものであるけれども、舊派の筆致や趣向が隨處に散見するのも共素養の然らしめたものであるまいか。高田君があの小說に對しての批評は、今想ひ出すが、半分書きかけて何年であつたか、正月の二日か三日に共に靜岡へ旅行したことがある。高田君は批評の後半を靜岡の酒樓で書き畢つたことを思ひ起すが、昨今讀んで見ると、高田君の批評は坪内君の病根によく言及してゐて、高田君の小說眼が一段高い樣に思はれる。全體高田君は坪内君と同窓であるが、西洋小說の翫讀は高田君の方が少しく早かつたし、又相當に見解もあつた樣に思ふ。此頃の早大出の若い文學者達は當時の高田君の批評を讀んで、意外の感に打たれ、高田サンもなか〳〵エラカッタのですナ――と云つたものもあるが、高田君も文學者たらんことを志したらば恐らく人後に落なかつたであらう。但し創作家となるよりも批評家の方であつたらう。今日の高田君は教育家經營家であるけれども、學窓時代は文學の天分をあらはしてゐたものである。高田君は坪内君のごとき小說の筆を動かす能力は無つたが、英文を縱横に書き相當文學的に書き得た人であつた。多分日本

風の文章に素養が少なかつた爲めに、英文には却つて達したものであらう。近日三宅雪嶺君が其個人雜誌「我觀」に吾等同窓のことを書いておる内に、高田君のことに迨んで其本領は文學であるか、政治であるか疑はしいと云ふてゐるが全く同感である。兎に角同窓時代を振り返つて思ふと、高田君は西洋小説に於て坪内君よりも一日の長があつたやうに思ふ。勿論其事に專であると否とで、追々懸隔を生ずるのは當然の事で、坪内君は間もなく高田君を駕するに至つたが高田君の文學的才能は充分認めざるを得ないのである。

明治の九年十年の頃に帝大でボツ／＼西洋小説に讀み耽ることが行はれ初めたが、しかし此の趣味家は甚だ少なかつた。先輩には金子堅太郎君が此方面の隱れもない人であつた。洋行中小説ばかり讀んでゐたと云ふことが同君に對する非難であつたなど西洋文學はまだ理解されなかつた。大學の豫備門に入つて本科まで進まず退學した丹乙馬といふ人などは、大の小説の愛讀家で、英文も達者にかき、時々日本人を驚かす樣な新思想を吐たので、吾々も奇怪に感じた位幼穉であつた。此頃讀まれた西洋小説はスコツトが大流行で、リツトンやサカレーなども愛讀された樣に思ふ。吾々の先輩で芳非山人と號した西松次郎といふ理學畑の人も此趣味家で、卒業後新聞紙上得意の筆を揮つたことは隱れもない事であるが、しかし大學から專門の作家を出したのは坪内逍遙君丈であらう。

今から考へると一笑を催すほどであるが、當時は文學に理解がなく、帝大を卒業した文學士坪内雄藏が春廼舍朧の名を以つて小説界に現はれ出たのを驚異の目を以つて見、時事新報のごとき比較的新思想に理解のあつたものですら、苟くも文學士たるものが野卑な小説家となるなどは以つての外の事だと攻撃を加へたことがある。此時分は假名垣魯文が戲作の文權を握つてゐて、小説家たらんものは其門に趨り束修を納めて門下生となり、魯か文の一字を頂戴しなければ世に立て無かつた位であるから、時事新報が小説家を輕蔑したのも無理は無かつた。坪内君はコンナ情實に捕はれずに、巍然獨立獨歩でやつてのけたのは流石に一見識であつた。

漢文で無ければ文學でない樣に思はれた時代には戯作者は一概に擯斥を受けた。當時は西洋の所謂る文學なるもの丶一端も世に理解されてゐなかつた。それを闡明して世の妄を啓いたものは坪内君の小說神髓であつた。今では此の著にあるなどのことは誰れも知つてゐるけれども、當時に於ては尤も時宜を得た著述で、小說が重んぜらる丶に至つた動機は、此の著の出版から發したと云ふも譌言であるまい。坪内君當時の傑作は書生氣質にあらず、寧ろ小說神髓にありと私は思ふ。坪内君は作家としてもエライに相違ないが、それよりも君は文壇の敎育家として尤もエライと平素自分は思つてゐる。君は文學の各方面に先鞭を着け、それを開拓し、且つその將來に起るべきものを指摘もし敎へもしてゐる。乃ち歌曲に就ても、劇に就ても、皆な君が唱首で、君が開拓したものであるが、文壇敎育の第一步は卽ち小說神髓である。此著述の稿も早く大學にある頃ノートに書きつけたものを書き直したものであつたやうに覺へる。まだ外に學窓時代に書いたもので、自己の名を署するを忌み、服部誠一の名で出したもの、友人橘健三の名で出したものなどもあつた。此等の書名は自分は確かと記憶がない。春廼屋作とない爲めに、多くは閑却されてゐるかも知れん。

坪内君とは長い交りであるから、龍岡町の僑居時代から大久保余丁町に移つてからの事をよく知つてゐるが、文學上に關係あることは多く憶ひ出し得ない。「內地雜居未來の夢」が書かれた時などは、自分から麁末な材料を提供したことなどを思ひ出す。その標題を私に書けとあつたが、それを斷つたことをも思ひ出す。龍岡町時代は何となく君も戯作者風であつたやうに思はる丶。君は「朧ろ月夜にしく物ぞなき」といふ古歌から春廼屋朧と名を命じたので、其の家に訪ねて見ると、掛物でも額でも此の和歌に因んだものが掲げてあり、日用の箸函にも月下に櫻が散つてゐる圖が蒔繪で出來てゐて、如何にも氣取つたものであつた。併し君は昔しの戯作者とは大いにその品を異にした、と云ふのは學殖も非常の相違があるからでもあつたが、君は名家の子弟を家に預つてその監督やら敎育やらを擔任してゐた。且つ早稲田大

學の前身東京専門學校に追々日勤することになり文學の教授をやる身でもあつたので、嚴正身を持さねばならず、事

君の半面は堅苦しい先生であつた。

　早稻田中學の起つた頃は、君の大久保余丁町に住居時代だが、君は其の教頭にならざるを得無かつた。君が後年私に語る所に據ると、實に心にも無いことであつたが、高田君や君が早稻田大學の經營に盡力してゐるのに、自分のみ何もしないとあつては氣が咎めるので、切めてはと教頭となつたが、教頭の受持で倫理の一科を十年も講じたことは自分に取つて此上ないつらひことであつたと聞いて同情に堪へなかつた。あれ丈の文學者を其の作に專らならしめず、アタラ大切な時間を中等教育の爲めに割かしたのは如何にも勿體ないと感じた。勿論倫理の研究か君の修養や人格に益する所があつたかも知れん。その得た所と失つた所とを較べて差引損得どんなものであつたか、ソンナコトは今爰には問題外であるが、何れにしても坪内君の經歷中の大事件であつたに相違ない。此事を閑却して君の文藝を論じ、又君の人格を評するものがあらば、それは甚だ不備の評たるを免かれまい。

　次に紅葉山人に就ての追憶に移るが、此の思ひ出もなか〱簡短でない。山人とは隨分長い間の交りであつた。私が最初山人の「色懺悔」を讀んだのは、郷里で新潟新聞を主宰してゐた頃であつたかと思ふ。此の小説を讀むで山人の垢ぬけした筆致に少からず感興を覺へた。こゝにチョット餘談に移るが、此色懺悔を版にした版元は吉岡哲太郎といふ人で、コノ人は曾つて同窓であつた。氣の利いた才子肌であつたが、山氣があつたと見へて、小說出版を企てたと聞くと間もなく此手から色懺悔が出版されたのでおもしろく感じた。露伴君の「風流佛」も矢張此人に依つて出版されたことを考へると、なか〱着眼がよかつたのである。けれども餘り長續はしなかつたかと思ふ。それは兎も角話しは戻つて山人と懇意となつたのは、私が高田君に代つて讀賣新聞の主筆となつてからであるやうに記憶する。此頃山人は讀賣

上にその艶麗の小説を連載してゐた。社へ日々來るでもなかつたが、時には原稿をみづから社へ持つて來たこともあつた。社で書く樣なことは滅多に無つた。實はそんなに無雜作に出來る文章でなく、坪内君が一瀉千里と筆を走らすのとは違つて、山人は一語〳〵嚙んで出すやうな苦吟の餘りに出來るものであつた。山人の風格は軀瘦せ、幹高く、色黑く眸明かに、顏に苦が味が漲り、擧止輕快、言語はキビ〳〵してゐて、相對すると何となく愉快を覺へしむる物があつた。生粹の江戸ッ兒といふ風格は自然に備つてゐた。自分は社で交はつたばかりでは無く、山人の住した牛込の横寺町の居へは幾十回か足を運んだ。自分が讀賣を去つてからも山人との交りは永く續いて其の終焉に迨んだ。自分は前にも云ふた通り文學に趣味があつたのではなく、趣味は寧ろ政治にあつたのだけれども、文學者と交はるこ　を好んだ。山人は食物に頗る趣味があり茶菓には別してやかまし屋であつたが、下戸であつた。その下戸の山人を上戸の自分が隨分度々連れ出して方々飲み回はつたものである。山谷の八百膳へ出かけた時膳部にあつた野菜の胡麻合を丁寧に解剖して、これ丈の中に七八種のものが混じてゐるなと云ふて手帳に書きつけたり、或鳥屋へ出かけて女中にテパの注文をして女中が解し兼ねたので、料理番を呼出して通がつたこともある。山人は食通であると共に寫眞道樂もあつて有名な料理屋の臺所を寫眞に取りたいと言ひ出し、一二ケ所試みた事もあつたが、臺所はドコも暗いので不成功であつた樣に覺へる。ナカ〳〵の凝り性で趣味も甚だ廣かつた、自分が多少江戸趣味を解するのは山人に得た所が少なくない樣に思ふ。

山人が筆を苟くもしなかつた一例は「隣の女」を書いた時、篇中に尺八の事が出てくる。山人は尺八の吹き方に心得が無いので、その研究に向島に居る知人佐藤某を泊りがけに訪ふたことがある。それが爲め讀賣紙上に二日ばかり續稿が途切れた。其際山人から私に寄せた手紙が今も手元に保存されてゐる。當時の讀賣社長本野盛亨氏（本野一郎氏の父）が編輯局へやつて來て、紅葉の時々ナマケルには困るといふて、小説の續稿の途切れる事をしきりに攻撃するのであつた。自分は山人の爲めに辯疏して、尺八の吹方がわからんため向島に出かけて已むなく途切れたのだといふても社長は

ナカ〳〵承知しない。全體あれの小說の途切れるのは今度に限らず度々ある。アノ男の樣にスラ〳〵書けるものが何故に時々停頓するのかと詰るのを、私が制して、スラ〳〵讀めてもスラ〳〵書くのではない。山人の小說は一字一句も苟くもしない、なか〳〵毎日稿を續けるのは容易なことでない、コレを御覽なさいと、山人の原稿を校正方から取寄せて社長に示した。此原稿には數ケ所の貼り紙があつて、中には一ケ所に三枚も四枚も重ねて貼り紙をした所もある。私は一枚一枚剝ぎ取つて社長に讀んで聞かせた。段々剝いて原作に戻つた時、自分の云ふには一番初めの筆でも此通玲瓏珠の如き文章であるが、初度の貼紙での直しを讀み較べるといくらかよい、二度の直しは更らに一段よい、最後のは最もよいことが斯く歴々とわかるでありませうといふた時、社長も始めて成る程とうなづいだ。私はスカサズ實は小說といふても長い詩である。アナタも漢詩を作らるゝが推敲に隨分苦心されるであらう。紅葉などの大家は名譽の爲めにもナグリ書することは出來ないので、尺八の吹き方を知らないからといふて書けぬ譯もないが、大事を取つて吹き方までも研究するのだと說明した所が、社長も漸やく文學者の苦心の容易でないことを悟つたらしく、其後は餘り小言を云はなかつた。此事を後日山人に語つた時山人はひどく喜んで私を德とした。此の「隣の女」に就て更らに憶ひ出ることがある。あれには頗る際どい處まで筆が進んでゐる。その際前島密男から一封の書狀が到達した。その手紙は極めて簡單で「隣の女危險迫る、請ふ隣の猫氣となす勿れ、注意〳〵」と三くだり計り書いてあつた。此時分は新聞に對する取締が馬鹿に嚴重で、小說も風俗壞亂でやられることが頻繁であつたので、前島男はそれを注意されたのであつた。

山人が、「金色夜叉」を書いた時、貫一の死處に苦心しわざ〳〵鹽原まで出かけて、實地を探檢して死處を定めた。これは誰れも知つてゐる事實だから委しく語るまでもない。此事につき曾つて坪內君と語り合つたことがある。西洋あたりの例に倣へは貫一の死處に一碑を樹て、それを鹽原の一名所とするもおもしろいではないか。幾分か資を投じて經劃しようかと相談したことがあつた。無論山人歿後の事で、山人のための紀念の意味もあつたのである。が、此事を終に

果さなかつた譯は、鹽原の某寺の住職が略々類似の事を考へ、鹽原の宣傳者奥三郎兵衛（藍田と號す）尾崎紅葉兩人の鹽原に關する事蹟を刻して碑を建てる企があると聞いた。そして撰文は私の友人松平康國氏の手に成つたことは事實であるから、自分共はこれが爲建碑を見合はしたが、此寺の住職が其後他界したとかで、終に沙汰止みとなつた。思へば吾等はコンナ他人の經劃に顧慮せず、初思を貫ぬけばよかつたのだ。

坪内逍遙君と紅葉山人は互ひによく知り合つてもゐた。交はりも深かつた。勿論兩人の間に疎隔があらう筈は無かつた。併し兩頭領の末流の間には動もすると相軋つて反目する樣な事があつた。私は當時秘かにこれを憂へた。と云ふのはいつも末派の疎隔反目から兩雄の爭の端を發し、兎もすると意外の事を惹き起すことがあるからだ。或る時牛込の吉能に東京専門學校の幹部の寄合があつて、高田坪内兩君と自分も其席にゐた。其の日偶々階下に山人の卒へる硯友社の集會があると聞いて、自分は秘かに案じた。得難い此機會を利用して兩者の反目を解きたいものだと、ワザト坪内君には精しい事情を語らず、突然坪内君を誘ふて階下の一室を明けて見ると、山人を初席にして硯友社の面々二十人計りが兩側に居並んでゐた。席が狹くて吾々の割込む所も無つた。坪内君は何んの意味で此席に伴はれたかも理解してゐないので一寸面喰つた樣であつたが、末席に坐して例の當意即妙の詼諧を弄して滿座に挨拶をされたので、一同は覺へず噴き出して拍手した。坪内君の此態度と雅量とは末流の頭腦に蟠まる誤解を一掃し去つて、それからは甚だ釋然たるものがあつた樣である。

山人が食通であつたことは前にも云つたが、日本橋の中華亭の料理が氣に適つて、臨終の病中もコヽから料理を取寄せたと聞いたが、この中華亭に就て語るべき一笑話がある。此の亭のお福と云ふ娘が大の紅葉崇拜で、山人の小説と云へば、ナンデモ精讀してゐる、私の亡友山田一郎といふが此事を知つて、或る時ニセ紅葉を連れて此のお福に一杯喰はせたことがあつた。山田の知る人で靜岡縣の或る年若の醫師が俳句をやる所から思ひつき、伴ふて中華亭に到り、今日

は尾崎紅葉君を同伴したから、短冊でも書いて貰らへとお福を喜ばせた。ニセ物と知らないお福はひどく喜んで酒席を斡旋し揮毫を請ふたりした。コンナ事があつてから數日を經て私が行くと、お福は先日紅葉先生が山田さんと共にお出になりましたとニコ〳〵して云ふから、自分は一寸不審に思ふた。山田は尾崎を知らない筈だが、どうして連れ合つて來たかしらと、お福に紅葉さんはドンナ樣子の人であつたかと聞くと、色の青白い、丈の低い、鼻下に髭のある人だといふから、私は噴出した。お前それは僞物だよ、紅葉は色が黑く丈が高く髭がない。お前は山田にハメられたのだといふたら、お福はくやしがるから、私が慰めて近日本物を連れて來るといふて終に其約を果した。山人が中華亭の料理を愛するの端はこれから發してゐるのだ。

山人は下戸で二三杯呑むと必らず其席に横臥するのが例であつた。或る時柳橋で三四の妓を招き、二三杯傾け例の如く横臥し、半睡半醒の境に入り、妓等の勝手に話し合ふことが銘々愛讀の小說に關してゐるので、山人もそれとなしに耳を傾けると、甲乙丙互ひに好む所を擧げて、その優劣を戰つたが、皆三文小說ばかりで、一世に名の高い紅葉の小說に就ては一語も及ばなかつた。勿論そこに寢てゐる客が大小說家であるなどは彼等の夢にも知らなかつたことである。山人はあの時はおかしかつたと後に語つたが、中華亭とは全然逆の話しであるので、思ひ出した。

山人は不起の病を抱へて私の鄕國越後を經て佐渡へ渡つたことがある、「烟霞療養」と題する續きものが讀賣に出たのは其時の作である。山人は佐渡の小木に暫らく滯在して日夕左右に侍した或る妓の爲めに三絃の匣に字を題してやつたり別に臨んでは未刊の小說の稿本を贈つたりした、此稿本を贈つた時山人は特に注意して、お前が或る場合に金に困るやうなことが起つたら、これを東京の本屋に賣れば相當の金になる、麁末にせず仕舞つて置け。決して人に欺かれて取られてはならぬと堅く言ひつけたといふことが、山人の歿後に知れた。山人は自身の口から此ことを誰れにも話さなかつたらしくいつぞや紅葉祭のあつた時、私は追懷談の一節として語つたことがあるが、硯友社の面々も皆初耳だといふ

た。此の未刊の原稿は何んであつたらうか、自分はそれを知りたく、佐渡の知人に問合はせたこともあつたが、それは惜むらくは火災に焼けて今は無く、其女は或る寺の大黒となつてゐると聞いた。

いつであつたか時は忘れたが、私が幹事で一ッ橋時代の帝大の同窓會を東臺の櫻雲臺（後に梅川樓）に開いたことがあつた。此際紅葉君は私を助けていろ〳〵周旋されたが、餘興に伊井蓉峰に「書生氣質」をやらせてはドウカ、幸に櫻雲臺には舞臺もある。蓉峰とは懇意だから、寄附的にやらせる、別に報酬は要らぬとあるから、喜んで山人に任かせた。伊井も快諾して門人數名を伴ふて登場し、確か西瓜を割るあたりをやつたが、これは意外であつた。面白からうと期したのが全く裏切られて全然失敗に歸した。何分吾々時代の大學生の氣合は可なり違つてもゐて、墮落書生の伊井の肚に入り兼ねたのも無理はなく、兎角明治十年頃の大學生の風を寫し出すことが出來なかつた。座中には此の書生氣質の作中の人物も甲乙丙丁居並んでゐた。確か西瓜割りの本尊三宅雪嶺君は舞臺に接近して見てゐた。此小説の作者坪内君も席にゐた。銘々のことを時代違ひの書生から成り上つた俳優の演ずるのだから、いろ〳〵のアラが現はれて、十分も經つか經たぬに、皆な〳〵退屈を生じて、早く止めよ、アレよりもお互ひがやる方がましだなどいふものもあつて、蓉峰には氣の毒であつた。山人に關係のあることではないが、思ひ出るまゝこゝに書いておく。

山人に就てまだ思ひ出せばいろ〳〵の事があるが、餘りに長くなるから、一二雜事を錄して他の項に移るとしよう。

山人は多趣味であつたが、印癖もあつて、しきりに自用の印を作つた。足立疇村氏の作が尤も氣に入つて、此人の作が多かつた。不起の病に罹り覺悟をした時なども其意味の印を疇村氏に刻させた。其印文は確か「化及我」の三字であつた樣に記憶する。山人は時々私の家に來て、私の讀みふるしの隨筆を持ち去り、それを飜案して小説の種にしたことが一再ならずある。今は精確に記憶しないが、「破茶碗」といふ短篇小説は或る支那の隨筆から飜案したのであり、亦愼夏漫筆といふ漢文に書いた日本人の隨筆に或る幕府の役人が木蘇の旅宿にやどり、その家に鶉の籠に入れて飼つてあるの

を見て私かに望をかけ、何んとかして無心を云はんと、わざと多くの茶代を贈つて主人を喜ばせたのが却つて仇となり主人は茶代に酬ゆる馳走の材料に窮し、鶉を屠つて膳部に供へ、客人の大失望を買つたといふ一話が山人の興味をそそり、短篇小說となつたが、標題は今思ひ出せぬ。山人は私が長い間日誌を書き續けてゐるのを知つて、しきりに褒めるから私は山人に自分などの日誌は何んの役にも立たぬが、君の樣な文人こそ日誌を書くべきだと勸めたことがあつた、山人もそれから日誌を書き初めた樣である。不起の病に罹つても日誌を書いた事は誰も知る通りだが、山人の歿後日誌が出版されたのを見ると、ある年の元日の記事に私と佐藤某とが、山人の横寺町の二階の書齋で、長時間酒を呑んで山人を困らせた。其時の記には吾等兩人を新年の惡客と罵つてゐる。日誌を書くことを勸めたお蔭でトンデもない罵倒を受けた譯である。山人は江戶兒氣質の卒直で、日誌には何んでも赤裸々に書く流儀で、人から物を贈られても氣に喰はんと何んだコンナもの人を馬鹿にしてゐると罵倒して憚らない。そこに山人の面目が現はれてゐるのだが、此日誌を公刊する際に、斯樣な記事は多く取り去られたから、いくらか膩が抜けた感じもする。

自分の多少知つてゐた文人は今は多く故人となつてゐる。服部誠一といふ人などは故人となつて餘ほど久しいことである。此人は撫松と號し、東京繁昌記の著者として知られてゐる。新橋近く銀座の通りの角に九春社といふ社があつてそこから「東京新誌」といふ雜誌を發行し、一時は盛んに行はれ、可なり號を積んだものである。服部は此雜誌に漢文體の戲作を掲げた。此時分はまだ支那小說脈の文章が喜ばれた。服部の文は艶麗でしきりに綺語を弄した、成島柳北のに較べると、文品は下つたけれども、それが却つて俗に投じた。隨分思ひ切つて淫褻の事を書いたものであつた。私は此頃九春社に看板をかけて友人と共に內外政黨事情といふ隔日發刊の新聞を起してそれに從事してゐた。服部と同じ編輯局に机を並べてゐたから、服部の原稿を書くのを常に見てゐた。如何にも達者なものであつた。漢文には無論上り點

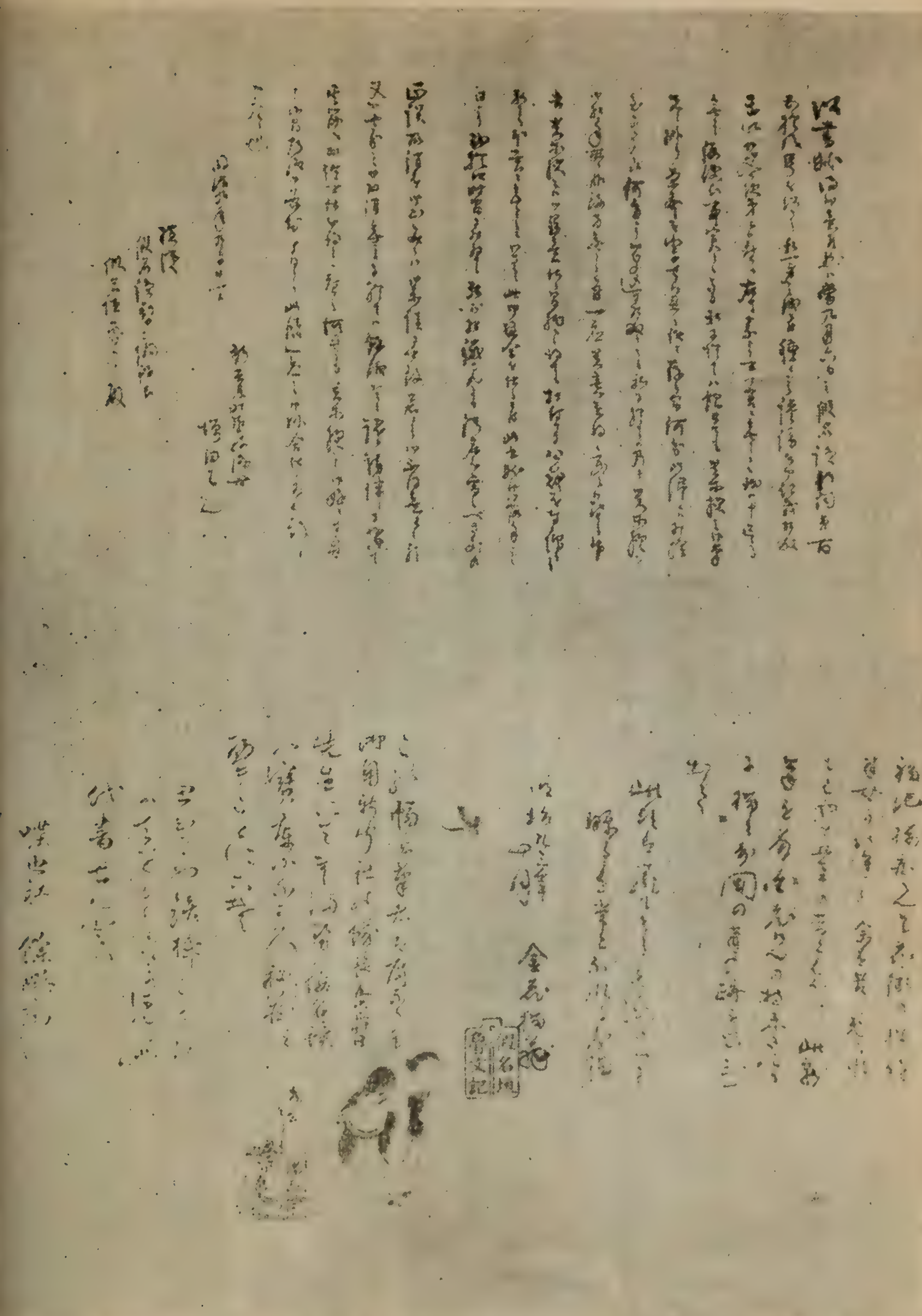
をつけたが、書き〳〵上り點をつけてゆく。それが迅速で如何にも慣れたものであつた。アンナ綺語を弄する撫松其人は意氣な洒落れた人でもあるかのやうに人は想像するでもあらうが、顔には痘痕があり、辯舌は東北訛りのヅゥ〳〵で文章と打つて變つた人であつた。江戸の歴史を書きたいといふて材料を蒐めたと聞いたこともあつたが、遂に果さなかつたやうである。

森田思軒にも多少の交りがあつた。此人は慶應義塾出身で、年は若かつたが、漢文を達者に書いた。矢野龍溪翁が「經國美談」を著した時、精細な評を漢文に書いて、早く漢文の力を認められた。後には反譯殊に西洋小説の反譯に筆を専にして頗る自得の色があつた。早稻田大學の前身東京專門學校時代に、雜誌であつたか講義錄であつたか、思軒氏に譯筆を煩したことがあつた。其頃何かの用で朝早く岡倉覺三氏を根岸邊の宅にたづねると、氏は朝であるのに、杯盤を運ばせて、主客對酌するといふノンキな事であつた。そこへ一客の入り來たつたのを見ると思軒氏であつて、氏は主客に挨拶もせず上席に坐り込んで、それから挨拶をすると云ふやうな倨傲の態度で、私の席にあるのを見て、學校へ上げるべき草稿は既に書いてあるけれども、今日の樣な雨天に金玉の文を濡しては困るからワザト控へてゐますといふを聽き私は此男氣が狂つてゐないかと思つた位で、如何にも自負滿々たる人でした。

櫻痴居士福地源一郎氏が銀座街頭に太政官御用日報社の看板を掲げ、東京日々新聞記者として名聲を馳せたのは、私共の帝大にゐた頃であります。此人の文章は老熟して氣格が高かつた。其の毎日の社說は大學生と雖も爭ふて讀み、敬意を拂つた位である。後には官權新聞とあれば文章がよくとも輕蔑の念を以つて讀んだものだが、福地の頃は官權新聞にまだ權威があつた。これには吾曹子の文品も與つて力があつたやうであります。私などは今になつて考へると何となく恥かしい樣な氣もしますが、吾曹先生の謦咳に接し一たび議論を戰はして見たいと思つた。實は崇拜の念もあつたのであります。然る所議論を戰かはす機會が生じた。その頃、私は亡友岡山兼吉、山田一郎の兩氏と共に元老院に向つて

官吏學生の政談演說を禁ずることを不可として建議をしたことがあります。大學生の身分でコンな事をやつたのは、大學では前例のないことでありました。田中稻城氏が何か建議をしたことがありましたが、それは政治に關係したことではありませんでした。此建議に對し福地氏は贊成が出來ぬと云つたと聞きましたので、當時日報社に橘村居士の號で西洋小說を反譯してゐた關直彦氏は吾々の同窓でまだ在學中であつたのですから、此人を仏　て福地氏に面會することゝなり、三人連れ立つて日報社の樓上で顏を合せたのが初對面でありました。福地氏は此頃四十年輩でもあつたであらうか、贅澤づくめの日本服で袴はつけず俳優でもあるかの如き身なりであつたが、流石に議論は老儈で行き詰まると逃げることが巧妙でした。併し書生輩何かあらんの調子で吾々を輕んずる風が見えて癪に障つたが、いつまでたつても議論が盡きません。紹介者の關君が社長はまだ社說を書き畢らんからと水を指したので、それを機會に別れました。コンナ事がありましてから後、十年も會する機會が無かつたが、榮枯盛衰の變は儘ならぬ世の中の常で、一時飛ぶ鳥を落すほどの櫻痴居士も、劇場の經營などに失敗して哀れな境遇に陷り、全く筆を新聞に絕ち、戲作者として糊口する樣のことになつた。私が居士に再會したのは、此頃でありました。私は讀賣新聞の編輯を主宰しておりましたが、ある日の編輯會議で居士の作を揭げたいとあつて、私は居士を訪問した。居士は築地であつたかと思ふが裏通りの小屋、殆んど膝を容るゝ計りの家を出張所とし、日々通つてこゝに筆を把つてゐた。刺を通じて面會して見ると、六疊程の一室に机と筆硯と僅かばかりの書物があるのみで、婢僕も見えず、如何にも孤寂蕭然たる有樣で、日報社樓上に會つた時とは全く異つて、意氣も頗る衰えて見へた。私は讀賣新聞の爲めに一作を願ひたいと請求に及ぶと、書きますが私の原稿料は高いかも知れませんが、それでよろしければ、と云ふて机上の原稿紙を出して示し、これが一枚一圓ですといふ。當時としては高い原稿料であつたが、略々覺悟を極めて行つたのだから、云はるゝ通り諾した。それから數十日間讀賣に連載したのが「豐島の嵐」であつた。

幸田露伴氏の「風流佛」を私が讀んだのは、まだ氏と交りの無かつた頃であつた。私が郷里でしきりに政治運動をやつてゐた時分、此小説を携へ數時間人力車で片田舍を乘り回はつた其折に、車上に讀んで、其の筆致の妙にひどく感服した。此の小說も吾等の同窓吉岡哲太郎の出版したものであつたと思ふ。私は其後郷里を去つて讀賣新聞に入社しましたが、或る時私の一向知らない人が、編輯所へやつてきて、頗る磊落な調子で、私の傍らに傲然アグラをかき、社員と高い聲で談話を始めた。その應答が如何にも奇矯であつたので、自然露伴氏であることが知れた。ナンデモ此頃露伴氏は戯れに知人に書狀を寄せて自己の死亡を通知したことでもあつたらしく、社員は氏にカラカツて死んだ人が來た、幽靈ではあるまいかなどいふて皆々笑つたことを思ひ起すのである。露伴氏は或る時代に讀賣に筆を執つたこともあり、此頃も社友であつたと思ふ。それからヅツト後、私が早稻田大學の圖書館の館長であつた頃、いろ〳〵の名家を招請して趣味談を聽聞したことがあります、其頃露伴氏をも招き、氏の得意の釣の話しを聽聞した。氏は釣に就ても該博の考證家で、古今東西にわたり釣の趣味家をいろ〳〵擧げられ、釣に關する稀覯の書籍に就ての談もあつた。今でも記憶に存するのは支那の唐代の詩人陸龜蒙が釣の達人であつたといふことは、釣の書物で稀本、「何羨錄」と「釣客傳」で、これが一番よい本であることなどは其時に聞き得たことである。それから後、私が國書刊行會で新群書類從を編纂する時に、狂歌の部と外に一二の部門を露伴君に賴みたいと思つて氏を向島の居に尋ねたが、氏は快諾されて、此部門の編纂が間もなく出來た。氏の精力の絶倫であるのに驚いたのは、幾千の狂歌を寫字生などの手を藉りずに、悉く自筆で書かれたことであつた。堆い原稿の手元に達した時は實に驚ろいた。露伴氏の凝り性は周知の事實であるが、嘗つて多くの一枚摺りの御和讃を幾百種と集められたことがある。丁度私が向島に氏を訪ねた頃、此の蒐集に力を致してゐられた時で、自然談は此事に涉つた。氏のいふには和讃を多く集めて見たら、いろ〳〵句法などの異なるものもあらうと研究的にやつて見たが、案外同調のものが多いので失望した。アンナ紙屑のやうのものは、價は無い程のものだが、捜し出

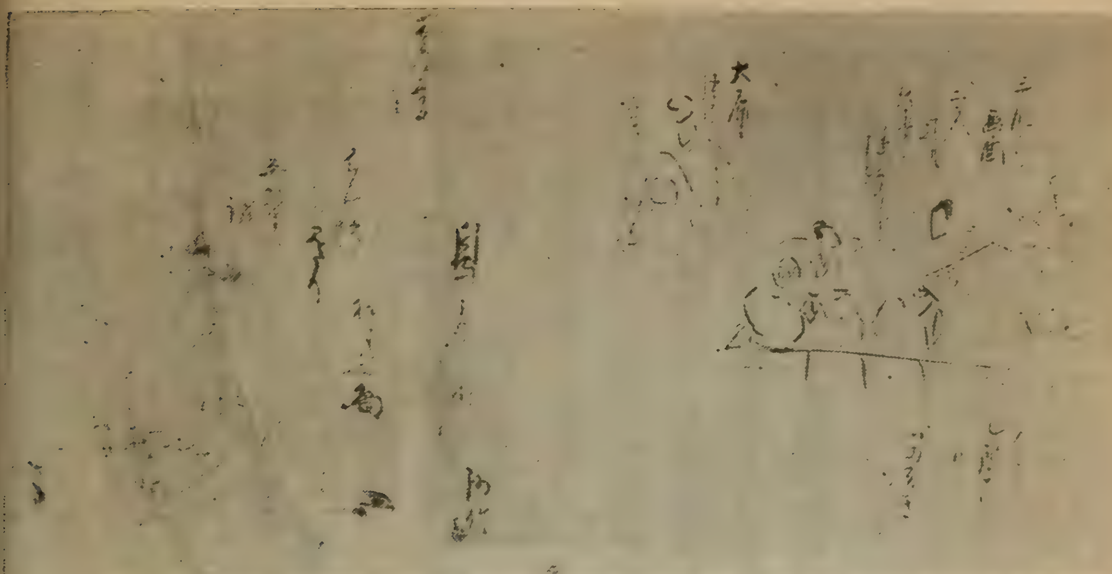


櫻痴居士の芳原の狎妓に代りて答文の繪入新聞に正誤を申込みたる文(上圖)正誤文に對し成島柳北が居士を愚弄したる狂歌並に答文の狂歌(下圖)市島春城氏藏

すのに骨が折れたと一笑された。

以上の外森鷗外氏や饗庭篁村氏や川上眉山氏其他に就て語るべき追憶が無いでもないが、愚談で多くの紙面を塞ぐのも心ない業だから此邊で斷落とするが、此の追憶の序に反故筐を取り出して、明治文學に多少縁故のある反故を探して見ると、偶然殘つてゐるものが十五點ほどある、中にはツマラないものもあるが、併し皆な自筆である。早稻田文學社から強て其の目錄をと請はるゝから、左に之を揭げておく。

一　谷干城子の「佳人奇遇」の小序
一　假名垣魯文宛野崎左文氏の詫證文
一　坪内逍遙氏の下繪一枚
一　坪内逍遙氏の「役行者」の初稿
　　一旦活版に附して版を毀ち出版せざりし初稿也
一　福地櫻痴居士の芳原の狎妓に代はり魯文の綸入新聞に正誤を申込みたる正誤文一通
一　右正誤文に對し成島柳北氏が福地を愚弄したる狂歌並に魯文の狂歌
一　假名垣魯文の猫に題したる狂歌（猫の圖あり）
一　假名垣魯文の狂歌稿本一冊
一　尾崎紅葉氏の草稿と書簡數通
一　河竹默阿彌翁の繪看版畵稿
一　小野梓氏の政治小說（大隈老侯の政治經歷）



河竹默阿彌下繪（右）魯文の猫に題せる狂歌（左）市島春城氏藏

一　森鷗外氏の一ツ橋同窓會幹事に充てたる狂詩長篇

一　川上眉山氏書柬

一　饗庭篁村氏の書簡數通

一　河鍋曉齋の松浦武四郎宛證文

松浦武四郎より天滿宮へ奉納の額面を曉齋に書かしむるに付期日迄に約を果ゝば狩野大家の屛風其他の品を禮に與へる、若し期日に至り成らざる時は、曉齋の名を以つて他の畫家に書かせる、それにて苦しからずといふ請書也。

一　福池櫻痴居士の俳諧評論

角田竹冷氏一派の俳諧に對し櫻痴居士が晩年負けぬ氣で縱横素人評を下したもので竹冷氏に宛たる頗る長文の書簡也、紅葉の句も多く引かれあり。（畢）

山田美妙のこと

石橋思案

元來、私は過去を言ふことは嫌なんでして、これまで、未來のことばかりを考へてまゐりました。その私が、たうとう過去の歷史を語らなければならないことになつてしまひました。

山田美妙のことについて、記憶を辿つておはなしをしてみませう。――明治十八年二月のことです。神田の水道橋近くの皀莢坂の上に、坊城子爵邸の昔風の長屋がありまして、其の一つに山田は住んでをりました。そこへ尾崎と私が行きまして、その時はじめて、三人で「我樂多」をはじめることにはなしがきまつたのでした。餘談ですが、その坂の近くで、馬琴が其の遊印（乾坤一閑亭）を拾つたといふ話があります。「我樂多」といふ名前は、私がつけたものでした。その日、三人は、武者窓のついた薄暗い部屋で、天下を取つたやうな氣焰をあげたものでした。時に尾崎は私と同じ十九歲、山田は十七歲でした。

私と尾崎がどうして友達になつたかと申すと、私の小學友達に久我龜石といふ人がゐて、ともに其頃お茶の水にあつた高等師範附屬の小學校にゐました。その友人を通して、尾崎を知るやうになつたのです。山田と尾崎とは三田英學校の同窓で、尾崎が山田を私を紹介したのです。

さて、その二月から廻覽雜誌を出すことにしました。はじめは十二三人の會員でしたが、たちまち百人以上にもなりましたので、翌年十一月には、印刷にして出すことにしました。

その當時私は飯田町三丁目に住つて居て、近くの中坂中途で、丁度、馬琴の住つて居た近所に、家賃大枚六圓の二階家を借り受けました。私が借受人、尾崎が店請人でして、そこにはじめて硯友社の看板を出しました。

その頃三人は、一ツ橋の大學豫備門にゐました。山田は色の白い美少年で、どうしたわけか、長靴が非常に好きでして、それには皆が驚きました。其の長靴姿で運動場の芝生の上に横たはりながら、バイロンの詩集を愛讀してをつたものです。

其の頃同君は既に、デッキンスのピクヰック、ペーパアなどを愛讀して居て、其のユーモアの妙を唱へてゐたのを、記憶してゐます。

さて三人が固く結んで、いよ〳〵これからだといふ時、明治十九年か二十年の頃です、原亮三郎といふ人の金港堂から、「都の花」が出ることになりました。その本屋が山田を抱き込んでしまひました。山田は、どうしたといふのか、「都の花」の方へ行くことについて、私や尾崎にたゞの一言のことわりもしなかつたものでした。是れが實に、尾崎と山田との絶交の因をなしたものです。尾崎はたいへん腹をたてまして、京山が馬琴に對して書いた「伊和傳毛の記」のやうなものを、書いたものです。尾崎は明治三十六年十月卅日に死にましたが、死ぬまで兩人は絶交のまゝでした。

さて、「都の花」は、私たちのものなどにくらべて、はるかに堂々とした、すばらしいものでした。山田は其の卷頭に「花車」を發表し、大に世評を高めました。この作品は、苦學生で車を曳く男を書いたもので、その頃の人氣はすばらしかつたものです。

山田の言文一致のはなしに移りますが、その言文一致といふものは、非常にあくの強いもので、當時緑雨の如きは其の癖を眞似て評論の妙を極め、讀者の頤を解いたものでした。でも私は、新しく事を起すにはこれくらゐ色彩を鮮かにしなければ、駄目だと思つてをりました。事實、美妙は非常な眞面目をもつてそれにあたつてゐました。其の他日本

の文章にパンクチュエーションや、キャピタル、レタアを應用したのは、山田が急先鋒の一人であつたらうと思ひます。

それからかの有名な「胡蝶」を出して、裸體畫問題を惹起しました。これには渡邊省亭の挿畫が入つてゐました。當時は「裸胡蝶」などと言はれて、一時に評論壇を賑はしたものでした。山田の全盛期は、まあこの時代だつたと言つてよろしいでせう。

そのうちに、面白いことには、山田は、ラムネに色をつけることをやりはじめました。赤や青の色をつけて賣り出したのです。ところがそれですつかり失敗してしまつて、家財をすつてしまひました。それからまた、當時、フィリッピンの獨立運動の首領アギナルドが來朝したことがありますが、山田は彼にすつかり共鳴して、其の一味と交通したものです。そのため刑事が來るやら何やらして、かなり騒いだものです。山田は大に革命兒を氣取つてゐたらしく思はれます。



國民の友第卅七號附錄『藻鹽草』所載
美妙作『胡蝶』の挿畫

晩年は、しかし、非常に寂しいものであつたやうです。晩年の仕事はといへば、日本橋通り二丁目の青木嵩山堂から出した大辭典の編纂です。これはたしか完成はしませんでしたが、惜しいことだと思ひます。それにはたしか繪が入つ

てゐたと思ひます。日本の辭書に挿繪を入れることと、說明を言文一致體ですることとが、山田の抱負だつたやうに思はれますが、私はその辭書を持つてゐませんので、はつきりしたことは言へません。

經濟的にも、世間的にも、その晩年は寂しいものでした。學海指針社の山縣悌三郎といふ人が、住ひも近くであり、彼に同情して、何かと世話をしてをつたやうです。死んだのは四十三年十月廿四日で、染井の墓地に葬りましたが、葬式の如きも、會葬者も少く、非常に寂しいものでした。一體山田に友達が出來なかつたのは、あまりに覇氣が强かつたからのやうにも思はれます。男の子が一人（旭彥氏）で、いまは王子にをられます。

が、何と言つても美妙の失脚は、田澤稻舟女史との關係が因をなしてゐたと思ひます。世間では、稻舟女史が山田に捨てられて、松島の五大堂で投身したといふやうなことが信ぜられてゐるやうですが、それはちがつてゐます。女史の家は醫者でしたもので、女史は平生よく催眠藥をとる習慣になつてゐましたが、さうしてゐるうちにその分量がだんだんと增して、つひにモヒの中毒を起し、そのため死くなつたといふのが、事實ではなかつたかと思ひます。

これを世間が非常に攻擊したもので、山田の其の時は實に四面楚歌の有樣でした。今日だつたらどうでせう？　社會道德も違つて來ましたね。

元來、前にも申しましたが山田は非常な美少年でした。したがつて對女性の關係はもつとあつてもよかりさうなものでしたが、私の耳にしたのは、その外に一つあつたきりでした。それは淺草觀音の裏にあつた薄茶をやつてゐた店、今ならさしあたりバアとでもいふところでせうが、そこに關係の深い女性があつたやうでしたが、それは稻舟女史の前のことでした。

人間の運命はわからないものです。尾崎があの華々しい晩年とその盛大だつた葬式にくらべて、山田のそれを思ひますと、まつたく悼ましいくらゐです。

しかし、たうとう言文一致の世の中になつてしまつたぢやありませんか。いま山田がゐたら、さぞ喜ぶことであらうと思ひます。

で、言文一致の創設者は美妙だといふことになつてゐますが、山田は喉頭癌で死ぬ前に、私に向つて、世間では私が言文一致をはじめたやうに言つてゐるが、それはまちがひだ。創設者は長谷川二葉亭で、自分は單にそれをひろめたのに過ぎないのだ。此の誤りをたゞしてくれと、くれ〴〵も言つてをりました。

實は私は、山田が晩年病氣になつてからは近しく接してゐましたが、前にも申しましたやうないきさつから、全盛時代にはあまり交際は深くはありませんでした。それゆゑ、山田がどういふ趣味をもつてゐたかといふやうなことになると、何も申せないのです。

最後に山田の家庭のことについて申せば、山田の父親は、一時何縣かの警部長を勤めてゐた人だつたと記憶してゐます。祖母といふのが大の疳癪持ちでして、いつか私が久しぶりに山田の家を訪ねた時、いきなり私に向つて、「武（山田のこと）は死にました」などと言ふのです。その實、ちよつとした風邪だつたのでした。尾崎も一時その家に同居してゐたことがありましたが、間もなく逃け出してしまつたのも、此の人の疳癪にゐたたまらなかつたのでしたらう。くわしいことは知りませんが、概して、山田の家庭生活も、どちらかと言へば不幸なものだつたやうに思ひます。

まあこれくらゐのことしか、私にはお話し出來ません。（談）

胎生期に現はれた東都の新脚本

渥美清太郎

明治十五年

前年の十一月、二世河竹新七は「島衛月白浪」を名殘に、默阿彌と改名して劇界を引退する。東京一の大劇場たる新富座は、負債のために開ける事が出來ない。團十郎菊五郎までが據なしに春木座へ出勤する。春早々美貌の女形、岩井半四郎が死んでしまふ。この年の東京劇壇の淋しさ心細さといつたらなかつた。新人團十郎でさへ、今までの活歷氣分を捨てゝ、「大藏卿」や「吃又」や「先代萩」に凝るといふ有樣だから、問題になるやうな新らしい狂言も出なかつた。「釣狐」「三題噺魚屋茶碗」「望月」「切籠形京都紅染」（大丸屋騷動）「張扇子朝鮮軍記」「黑白論織分博多」（黑田騷動）「僞甲當世簪」（朝鮮事件當込みの世話物）の七種が、この年の新狂言の總計である。さうして、この七種が七種とも、全部、昨年引退した筈の默阿彌の作だから驚く。どうしても隱居が出馬して働かなければ、見世の締りが附かなかつたと見える。金作改め三世河竹新七や、進三改め竹柴其水なぞは、あまり活動しなかつた。この七種の中經は、「釣狐」が例の團十郎好みの謠い狂言擬ひの所作で、苦心の割には受けず、「三題噺」の蜆の次郎吉は、好評ではあつたが舊作の增補物であり、その他は何れも大した評判でなく、結局今年の戯曲界は、非常の不況であつた次第。

芝居以外には、戸田鐵耕といふ人の「薫來風英政軍記」といふ創作脚本が出版されてゐる。世界を英國にとりながら

チョボを使ふといふ在來の形式を踏襲した、今日から見れば變なものであるが、當時の新らし物好きには受けたらしい默阿彌が校閲し、清親が挿繪を描いてゐる。

明治十六年

默阿彌大活躍の年である。隱退前よりも遙かにすぐれた力作を澤山發表してゐる。卽ち「芽出柳翠緑松前」（松前屋五郎兵衞）「石魂錄春高麗菊」（馬琴の石魂錄）「金看板俠客本店」（金看板甚五郎）「新皿屋敷月雨暈」（魚屋宗五郎）「今文覺助命刺繡」（不動の文次）「千種花音頭新唄」（實錄の貢）「茨木」等の外に、在來の物を改訂增補した「是著荷奇代良藥」（忘れ草）「柳櫻東錦繪」（市原野）「花菖蒲慶安實記」（金井半兵衞の切腹）「增補天竺德兵衞」（累澱鐵砲腹）等も書いてゐる。この中「新皿屋敷月雨暈」は默阿彌が傑作中の一二に推される脚本であるし、「千種花音頭新唄」は記錄破りの興行的成功を得たものである。その他、失敗の作といふのは一つもない。默阿彌は慥かに隱退後の方が、明治初年頃を比べると、はるかに筆に油が乘つて來て、しかも枯れた筆致、練れた味はひが見える。

三世河竹新七も、今年は相當に書いた。「浪乘船江島新語」は、歌舞伎新報の小說を脚色した江島事件の最初の脚本であり「橋供養梵字文覺」は院本から脫化した活歴に近い文覺で好評を博し、「墨川噂高樓」は八犬傳の對牛樓、「一濱千鳥眞砂白浪」は實錄の石川五右衞門で、何れも相當に好評を得、再演三演されてゐる。その外、新七にしても、また其水にしても、師默阿彌の作には必ず助筆してゐるし、また默阿彌が弟子の作を一幕助ける事もあるから、表面に現はれただけでは、作者の努力を否定する事も出來ない。

その外、市川右團次が春木座に據つて、「菅原實記」「累」「石山軍記」等、東京人には珍らしい狂言を演じ、大入をしめたが、これ等はいづれも勝諺藏の作で、右團次が大阪で手心のある舊作であつた。

明治十七年

今度は三世河竹新七が活躍した年である。彼は市村座と春木座を根城にして氣勢を擧げ、殊に最近は團十郎の寵を得てゐたので、團十郎へ書きおろした脚本も相當にあつた。「鎭西八郎英傑譚」（琉球の爲朝）「東叡山農夫願書」（佐倉宗吾）「種瓢眞書太閤記」（藤吉の婚禮）等は團十郎中心で、脚本としても中々巧く、評判も滅切りよくなつて來た。宗吾の狂言だけは團十郎が氣を入れなかつたので不評に終つたが、脚本はさう惡くない。その他、「中將姬當麻緣記」「音鈴川享保政談」（鈴川源十郎）「邯鄲諸國譚」（種彥作のうち紀州の卷）「上州織俠客大縞」（國定忠次）「高野山刈萱實記」（實錄の刈萱）「新舞臺越後立讀」（越後騷動）等がある。何れも材料を講談や小說に仰いだところが、默阿彌と行き方が變り、特徵はあるが、また筋に囚はれてダラ〳〵長い缺點もある。

默阿彌は、菊五郎物として「浮世清玄廓夜櫻」「滿二十年息子鑑」團十郎物として「二代源氏器身換」「北條九代名家功」の四種を書いただけである。「浮世清玄」は普通の清玄を世話に碎いたものであるが、流石に茶番氣分を脫して、何ともいへない寂びた味がある。「滿二十年」は徵兵令改正を當込んで、まんまと失敗した作であるが、座方から無理に賴まれて書いたらしい斯種の脚本は、失敗した所に默阿彌らしい面目もある。「二代源氏」は例の仲光、「北條九代」は高時天狗舞で、共に團十郎に依つて仕活かされた活歷物であるが、これと「浮世清玄」とを比較して見ると、俳優の特質に應じて筆致を自在に替へ得る默阿彌の巧さが窺へる。

芝居以外では、歌舞伎新報に「支那製名畫一軸」といふ、時事問題を世話に直した脚本が連載された。完結しなかつたし、また作者の誰かも忘れたが、純默阿彌式の巧みな構想と、臺詞の旨さとは今だに覺えてゐる。

「神經闇開化怪談」といふ創作脚本が六月に發行された。一竿齋寶州といふ人の作で、單行本としての體裁は中々凝

つてゐるが、内容は默阿彌の「箱根鹿笛」をどうかしたやうなもので、別段斯ういふ所はない、まづいものである。

明治十八年

この年はまた默阿彌が冴え返つて、各座を殆んど脊負つて立つ程の働きを見せた。團十郎に「老樹曠紅葉直垂」(實盛白髮染) 左團次團十郎に「千歳曾我源氏礎」(碁盤忠信と山伏攝待) 菊五郎に「水天宮利生深川」(筆幸)「女化稻荷月朧夜」(世話の葛の葉)「四千兩小判梅葉」(御金藏破り) の外、別に所作物として「柳櫻青樓噺」(男しやべり)「船辨慶」「水鳥記熟柿生醉」等を發表した。何れも現今上演の絶えないものばかりだ。

これに對して河竹新七は、「花見時瓢太閤記」一篇を書いたのみであつた。前の眞書太閤記が受けたので、引續き毛利責を中心に脚色したのであつたが、この方は割合に成績が善くなかつた。

芝居以外では、歌舞伎新報に「貧福兩面二題合」といふ新脚本が出た。これは、默阿彌門下の四人の作者が、各一幕宛を受持ち、一人二箇の課題の下に、順次脚色して行つたもので、土臺趣向が無理だつたから、全體から見ると支離滅烈で、思ひ切つて無茶に出來上つたが、一幕づゝ讀んで比較して見ると、それ〴〵の個性がハッキリ現はれて、ちよつと面白くもある。これは後に中島座で上演した。

この時分の中島座は、故中村壽三郎を頭に、今の仁左衞門や故歌六、故段四郎、故工左衞門、故紫若、故市藏、今の幸藏といふ當時の若手が集まつて、休みなしに勉強芝居を開けてゐたもので、狂言はいつも通し物の、お家騷動と極まつてゐた。それも新作ではなく、大抵は諺藏種の、大阪から移入したものであつたが、作者には四世櫻田治助といふ人がゐて、稀には「名末世千代田松」(松平外記)「新説黄金廼花籠」(伊東道庵) などの面白い新作を發表してゐた。大阪と同じ事で、材料はいつも新聞の續き物であつた。

明治十九年

この年も不相變默阿彌が一手で戲曲界を占領してゐたと云つてい〻。一月には團十郎左團次へ「西洋噺日本寫繪」(圓朝の英國孝子傳)三月には菊五郎へ「盲長屋梅加賀鳶」(加賀鳶と道玄)五月には團十郎左團次へ「夢物語廬生容畵」(長英と華山)同時に菊五郎へ「戀闇鵜飼燎」(藝者小松)十一月には菊五郎へ「月白刄梵字彫物」(梵字の德次郎)十二月には團十郎へ「孝源氏陸奧日記」(伊勢三郎)を書き卸してゐる。實に健筆と云はざるを得ない。しかもまだこの外に、六種の所作事さへ作つてゐるのである。そして、一二種を除いた外は、何れも稀れといふ様な興行成績さへ得てゐるのである。

右のうち「西洋噺」は圓朝の人情噺をその儘仕組んだものではあるが、さて脚本を讀んだだけでも、高座を離れた特別の旨味はある。本年の作の中では、これと「月白刄」とが、實に默阿彌の洗ひ上げた筆の味、世話狂言の妙趣を窺ふに恰好な脚本である。「鵜飼燎」は歌舞伎新報に依賴されて、明治十五年に初篇を出し、のち本年に入つてから稿を續けた、讀む脚本なのであるが、雜誌で受けるといふので千歳座から賴まれ、未完中を急に上演脚本に直したのであつた。併し土臺が讀者本位に出來てゐたため、いくら訂正したところで當時の觀衆に向く上演物にはならず、それに讀物としても大した傑作ではなかつたので、見事に失敗してしまつた。

當時演劇改良會が設立され、世間は改良々々でやかましくなり、また實際劇界革新の機運は動いてゐるが、改良會に對して寧ろ冷やかな眼を向けてゐた默阿彌が、おれの改良は斯ういふ遣り方だといふ抱負で「孝源氏」を發表したのだといふ。成る程當時依田學海氏なぞが主張した改良の趣旨と比較して見れば、默阿彌の主義にも、その時代としては立派な一種の權威がある。

同じやうな意味で、古河新水も創作の筆をとり始めた。古河新水といふのは、新富座の興行師、守田勘彌のことである。勘彌は、默阿彌と同じ心持から、また自己の政策上から、作家たる事を思ひ立ち、手始めとして十二月狂言に、伏見義民傳を脚色した「文珠智惠義民功」を發表したのである。默阿彌の校閲があつたとはいへ、脚本は相當に價値のあるものであつた。純素人から出發した人の處女作としては、巧過ぎる程であつた。

一方、河竹新七は市村座に據り、俳優の關係から古典劇の補綴に急がしく、創作としては「浮世又平譽助劍」のみであつた。これは三馬の草双紙を脚色したもので、圖拔けて甘過ぎたところから不評ではあつたが、それも改良流行の祟りで、今日から見ればさう捨てたものでもない。

明治二十年

一體にパッとしない年であつた。默阿彌は「歌徳恵山吹」（太田道灌）「關原神葵葉」（關ヶ原合戰）「五十三驛扇宿附」（權八と岡崎の猫）「因幡小僧雨夜噺」（蟒才次郎）の四脚本の外、所作物として「勢獅子牡丹花笠」「紅葉狩」「西東懸取組」を書いてゐる。「紅葉狩」は勿論絶えず行はれ、その外、再演されたものもあるが、何となく氣の重い作ばかり、特筆したいものもない。

勘彌の古河新水は、更に筆硯を新たにして「堪忍袋縫哉糸柳」（碁盤割り）「三府五港寫幻燈」（ノルマントンの沈沒）の二作を發表し、可なりな好結果を得てゐる。新水の作には、默阿彌の指導を受けてゐながら、どこか興行師守田勘彌らしい奔放な筆致があつて、相應に異彩を放つてゐる。

五月の市村座には、「筑紫潟松千代咲」といふ、烈女千代咲の狂言が上場されてゐる。新七が手を入れたとはいへ、原作は川尻寶岑氏である。劇場以外の、素人の作が初めて上場されたのである。よし、作は舊套を脱し得ぬ甘いお家騷動物

であつたとはいへ、狂言作者以外の人の作が演じられたのはこれが嚆矢であつた。劇界動揺の波紋が窺へると同時に、作者連の感じた職業的恐脅も想像される。

新七は只の一つも作つてゐない。

一月、「吉野拾遺名歌譽」二冊が、鳳文館から出版された。依田學海氏が、兼ねての主義主張を具體的に表はした脚本として、多大の抱負が籠つてゐた。教訓主義、辭句嚴正、史實正確といつた點では、全く立派なものであつたが、内容形式は、在來の戯曲と何等異つてはゐなかつた。

次手に云つて置く。脚本の出版は、この五六年來、相當盛んになつてゐた。これまでは繪畫本位の、草双紙が餘喘を保つてゐたが、それも胎生期に入つては遂に消滅し、代つて脚本の出版となつた。脚本が、門外不出といふ無言の規約はいつか破られて、正本そのまゝの活字になり、愛好者の意を迎へてゐた。默阿彌物など今までも大分出てゐる。いづれも四六版型で、體裁も臺帳を模してある。

「熱海土產雁皮章」といふ脚本が、この年の歌舞伎新報に連載された。作者は久保田彦作で、内容は神經病の怪談である。これは明治二十三年に至つて歌舞伎座に上演され、今の鴈治郎が主役を勤めた。

明治二十一年

一月早々、新築開場の市村座で、又ぞろ川尻寶岑氏の「新開場梅田神垣」が出た。井上正鐵の傳記で、團十郎の希望で座でも據なく上場したのではあるが、兎に角既に二回まで劇場以外の人の作が上演されたのである。

默阿彌は、團十郎のために、澁い「會稽源氏雪白旗」(浮島ヶ原の對面)と、甘い「油坊主闇夜墨染」とを書き、菊五郎に當てゝ、「音聞淺間幻燈畫」(盤梯山破裂を當込んだ淺間の噴火)と「僞博多獨鈷菊菱」(修業者覺全と源氏車の三吉)

と「月梅薫朧夜」（花井お梅）とを作つたが、花井お梅を除く外は大した評判にはならなかつた。花井お梅は當時の三面記事種といひ、脚色に默阿彌獨得の巧さと枯れた技巧があつて、所謂ざんぎり物の中での白眉である。

新七は「籠釣瓶花街醉醒」（佐野次郎左衛門）と「武藏鐙譽大久保」（川勝丹波守）とを書いたが、前者の方が好評であつたのは勿論である。

竹柴其水も本年から、名を署した作物を發表し始めた。本年は「千石船帆影白濱」（仙石騷動）と「土佐半紙初荷艦」（中濱萬次郎）とであつた。兩者とも初陣にしては好評を得た。勘彌の古河新水も、「名大島功譽强弓」といふ一幕物を書いた。馬琴の弓張月から嵐の件だけを抄出したので、團十郎の演出が巧かつたから、これを割合に譽められた。

其水も斯うして一人前になつたが、まだ默阿彌門下の若手で、腕利きでゐながら重用されず、自烈たがつてゐる連中が大勢ゐた。さういふ人達は、當時唯一の演劇專問雜誌、歌舞伎新報へ、時々創作を發表したものである。本年にはそれが三つあつた。竹柴賢次の「三題噺夜學作文」（孝之進お松殺し）。竹柴瓢藏の「築地河岸春朧夜」（毒婦お秋）。竹柴蝶三の「戀大和乳人封切」（新作梅川忠兵衛）がそれだつた。この中では「築地河岸」が一番巧かつたが、中途で立消えになつてしまつた。

明治二十二年

本年は芝居興行の數も少なかつたが、脚本の方も霜枯れといふ景氣であつた。默阿彌も僅かに「柳生荒木譽奉書」（奉書仕合ひ）といふ、名題からして詰らなさうな講釋種を一幕と、外に淨瑠璃物を二つ書いたばかり。新七も「仇名草由緣八房」（八犬傳の富山）「木原山箕笠隱家」（弓張月の木原山）「蔦摸樣血染御書」（大川友右衛門）の三種で、「血染御書」は日本の芝居始まつて以來といふ、火事の實演が利いて評判になつたが、外の二種はドッとしなかつた。其水には「那智

瀧祈誓文覺」(文覺勸進帳)があつたが、元來これは川尻寶岑氏の作で、以前出版されてゐたものを、其水が上演向きに改作したので、依田學海翁と劇場との間に、大分面倒な問題を惹起したが、劇場側は强硬に頑張つてゐた。

この時分、本郷の春木座は、以前の中島座と同じ意氣で、駒之助を中心に、故段四郎、故傳九郎、故梅太郎、故勘五郎といふ顔觸れへ、後には故家橘も入り、作者には前に佐橋富三郎、後には勝諺藏が大阪から來て、新作をドシ〳〵出した。大抵は圓朝の人情噺や、小說を脚色したものであつた。圓朝の「鹽原多助」「牡丹燈籠」「粟田口」「安中草三」「荻江の一節」など、菊五郎のそれより先駈けで上演したものである。前年、璃玨が來た時などは、坪内博士の「書生氣質」を舞臺にかけた位である。「谷間の姫百合」や「雪中梅」も爰で芝居になつた。座主の溝口權三郎に覇氣のあつた爲もあるが、一體に活氣が滿ちてゐた。

歌舞伎新報の創作掲載は段々盛んになつて來た。今年は、竹柴其水の「七時鐘身延雪夜」(讃岐の椎六)。河竹新七の「唐人髷今國性爺」(梅暮里谷峨の草双紙を脚色)。河竹新七の「千泉易悟道策前」(利休と新左衛門)。久保田彥作の「夏仕立双子單地」(新作おなつ清十郎)。竹柴昇三の「信濃奇談辨天娘」(明星太郎)等が出た中で、「千宗易」と「辨天娘」が纏まつた力作で評判になつた。別に默阿彌も、丁度歌舞伎新報が千號に達したので、祝ひがてら、すべて千の字づくしの「千社札天狗古宮」といふ讀物脚本を執筆連載を始めたが、新報社員に禮を缺く仕打があつたとか云ふので、默阿彌は怒つて中止してしまつた。

年末には歌舞伎座が出來て、劇界が動搖をしはじめ、それが脚本創作の方にも、影響を及ぼしさうになつて來た。

明治二十三年

今年は其水が割合に活躍した年である。「富山城雪解清水」(佐々成政)「神明惠和合取組」(め組の喧嘩)。「皐月晴上野朝

風」(上野戰爭)。の三種を出してゐる。尤もめ組の喧嘩なぞは、單に其水が名儀人だけで、眼目の所は默阿彌や新七が書いたのであるが、兎に角三つとも大當りであつた。

新七は「前太平記擬玉殿」(七人將門)と「聖世德大赦恩典」(青木彌太郎)とを出したが、前者は短かい中に左團次が二役働けるやうになつてゐる。新七としては珍らしく纏まつた時代物。後者も評はよかつたが、これは明治十二年頃の舊作で、東京でこそ初上演であつたが、大阪では既に封切りの濟んだものであつた。

歌舞伎座が出來ると同時に、全く芝居國に經驗のない新らしい作家が一人殖えて、團十郎の爲に書き出した。即ち福地櫻痴である。今年は、「相馬平氏二代譚」(近松の關八州繫馬を改作)「實錄忠臣藏」の二種であつた。作としては不評であつたが、櫻痴の主義は相當に强かつた。

默阿彌は、「二つ家」「戾り橋」「柱建」の三淨瑠璃を書いたのみであつた。彼は本當に隱居の身分になり得たのだ。

無名氏の「七人家老善惡鏡」(岩山彈正)。香雪散人の「四十七字花春雨」(書替へ忠臣藏)。竹柴信三の「楠二代吉野夕榮(泣き男)の三脚本が歌舞伎新報に載つたが、別に大した物でもなかつた。「四十七字」なぞは稍南北氣分の作だつた。

明治二十四年

この年、一番健筆であつたのは櫻痴である。「武勇譽出世景淸」(近松の出世景淸を改作)「春日局」「舞扇恨廼刃」(トスカの飜案)「志渡浦海女珠取」「太閤軍記朝鮮卷」「雪月花三景」の六作を出した。善かれ惡かれ、この時代の櫻痴の勢ひは凄まじかつた。脚本は直に出版されて、興行中に販賣する景氣であつた。團十郎も又忠實に、その作を仕活かした。一方竹柴組は、新七が「黃金花陸奧朝夷」(朝夷巡島記)「伏見街地震夜話」(蛇の目鮨の淸藏)「復讐談高田馬場」(堀部安兵衞)の三種、其水は「御所模樣秋葵葉」(七卿落)の一種。默阿彌は後見格で、「愛宕館芝浦八景」と「風船乘評判高樓」の二淨瑠璃を執筆したのみであつた。

四月には、一竿齋寶洲の「女將門七人化粧」といふ新脚本が出版されたが素人が獨りよがりの駄作で問題にもならなかつた。

段々變つて來た。六月には中村座へ、川上音次郎、藤澤淺次郎の書生芝居が旗擧げした。「板垣退助遭難實記」「佐賀暴動記」「經國美談」といふやうな脚本が現はれて、大入滿員といふ次第であつた。吾妻座へは伊井蓉峰が楯籠つて、依田學海氏の「政黨美談淑女の操」を演じるやうになつた。男優に交つて兎に角千歳米坡が女優で出た。

それから二年經つと、默阿彌も死んだ。この十年間は、東京の劇壇にとつても、慥かに胎生期と名けらるべき期間であつたらう。



明治混沌期の通俗雜誌『團團珍聞』の表紙本誌三月號所載長谷川天溪氏の『明治混沌期の新聞雜誌』參照。

「花街膝栗毛」其他

――名もなき古書ども――

生方敏郎

大正十年の初秋の一夜、山吹町通りを散歩して古本屋の前にたたずみ、いろ〳〵見る中に「花街ひざ栗毛、初篇」とある四六版位の大きさの和綴本が面白相なので、十五錢ばかりで買つて來た。三册續きの物らしいが、初篇一册だけしかない。僅々二十五枚（頁付ではなく一枚毎に日本の數字が記してある）にすぎぬか、仲々盡きざるの興味がある。

出版年月は明治十六年五月一日で、奥付に印刷の日は無い。たゞし

明治十六年四月二十八日御屆

同　　年五月　一　日出版

とある。今なら印刷納本とでもある可きところを「御屆」とのみある。

○

奥付に印刷所は記してない。印刷は何處でやらうと構はない、印刷所又は印刷人はまだ此頃政府で眼中に於いてゐなかつたものと見える。それが何うして印刷人を矢釜しく屆けさせる樣に成つたのであるか、其間に何等かの行きさつが有つたものか、そんな事を考へてみると興味は益々湧いて來る。

社會主義の宣傳など壯んに成つては、政府も勢ひ印刷人印刷所を監督せねばならなく成つたであらう。印刷人の名を

奥付に付ける様に成つたのは何時ごろからの事か？

○

印刷人のみならず、版元の町所さへも奥付にはない。ただ單に

發兌所　　九春社

とあるのみである。

それにも拘らず、著者には非常に重きを置いたものと見え、矢尾彌一郎といふ名の肩へ福井縣平民と族籍までも記してあり、又現住所も明記してある。

今とはまるきり反對である。

現代では發行者に重きを置いてゐる。たとへば風俗壞亂の廉を以て罪に問はれる時、發行者が主犯である。即ち淫書刊行罪として罰金を課せられ、時には體刑もあるかも知れぬ。

而して執筆者はたゞ淫書刊行幇助罪といふ名目の下に罪にはなるが、刑は發行者より輕いか同罪くらゐのものであらう。法律の事は專門家でないから、詳しい事は知らぬが、政府が著者より發行者に重きをおいてゐることは明かだ。

何だか此頃の形勢では、政府ばかりでなく一般社會も讀書界も著者より發行所に重きを置いてゐはしないか、と思はれる場合さへ度々見受ける。

文學書と限らず、何んな著書でも、小さい書肆から出た大家の本と大きい書店から出た無名家の本と、何れが世間に信用あるか、一寸問題に成り相だ。

殊に飜譯などは、殆んど發行元次第といふ形だ。それ故、發行元でも譯者に重きを置かなく成つた。それは大正五六年以降の大勢だ。

批評家だけは確かに著者よりも版元に氣兼ねしてゐる。

○

だが、私は今は現代を批評しやうとしてゐるのではなかつた。今は明治文學に就いて書いてゐるところなのだ。

○

この本の終ひに二頁ばかり廣告が付いてゐる。それが又面白い。初めには法律書がある。英國私犯法と云ふもので著者は東京專門學校法律學講師代言人法學士といふ長い肩書のある山田喜之助と云ふんだ。此山田喜之助といふ人は前一等檢査官小野梓の率ゐた鷗渡會と稱する政治研究會の一員で、高田早苗大野爲之等と一味徒黨だつた。

又、自由官權兩黨人物論と云ふ本の廣告もある。

この「花街ひざ栗毛」の緒言にも

開け往く世の難有さ昨日まで糞桶擔ひし田舍人自由と叫び民權と呼ぶも山家の瀬戸に鳴く雉子てふ鳥や樹の上に聲も惜まで鳴き立つる夏の夕べの蜩しより幾層劣る白痴言云々

とあるより考ふれば、明治十六年頃は如何に自由民權が流行したかが分る。正に自由官權兩黨人物輪なんかんといふ本が出版さる可き時勢だつたのだらう。

又服部誠一序、桑野鋭譯述英國情史蝶舞奇緣といふのもある。原書はリツトン邊か、それともビーコンスフィールド伯ででもあるか、兎に角飜譯物だ。

又東都仙洞佾譚などいふ廣告もある。その廣告文の一節に「開卷先ヅ柳橋品川等ノ情景ヲ寫シ次に吉原新橋等ノ佾譚ヲ記シテ深ク其内情ヲ穿ツ（中略）風流無限ノ著ナルベシ」とある。

今日なら「カフェーの女と丸ビルの女」とでもいふ書名の廣告があり相なところに右の如きものがある。

違ふといへば違ひ、似たりと云へば似た樣なのは、浮世の姿だ。

○

最後に各地賣捌所として日本中の主なる本屋の名が記してある。これはずつと後年までやつたことだ。何時頃からこんなことが止めに成つて東京堂等五六の大取次店が出現して來たか、こんな事は古い本屋の老番頭さんに聞いたら面白からう。

この賣捌所は東京だけでも三十六軒ある。苗字で出てゐるのが多く屋號のあるのが少いから私などにはよくも分らぬが、この中で我々が知つて居り又は現存するものは極めて少く、六番目に丸屋善七とあるのは多分先代か先々代の丸善だらう。十三番目に金港堂がある。今の若い人たちは知るまいが、もう二十年前くらゐには可也有名な版元だつた。十九番目に吉川半七あり二十五番目に大倉孫兵衛がある。その他内田彌兵衛とあるは内田老鶴圃なりや否や、又須原屋鐵二とあるは淺草の須原屋なりや、磯部太良兵衛は磯部甲陽堂か。

大正の大書肆はまだ此時分殆んど生れてゐなかつた。

○

餘談は措いて、さあ之からが愈よ本論だ。

だが、その前に、もう一つ装釘のことを一言したい。

装釘は前にも一言した通り和綴である。表紙は布目の厚紙で赤と青とのこぼれ松葉の散らし模樣があり、表題は別に赤い紙に刷つて貼り付けたものだ。裏表紙は矢張布目白地の厚紙だが模樣は何もない。それを赤い絹糸で綴ぢた物だ。

二十五枚しかなくて定價二十五錢とは此當時の物價と考へ合せてずゐぶん高價だ。

挿繪が六枚あるが、尾形月耕の筆だ。月耕は後には可也有名に成り一方の大家と成つたが、此頃は何歳くらゐであつたらう。恐らくまだ貧乏畫家であつたらうと思ふ。

扉に本書の主人公逸齋夢中の肖像がある。散髪の毛は長く縞の着物に黒の羽織、右手に白扇を開いて持つてゐる。眼鏡はかけてゐない。當時の青年の像らしい。そして之がまた作者自身の像であるらしい。

肖像畫の上から五號位の活字で逸齋夢中の傳が漢文で組んである。それはその後の三頁にわたつてゐる。

夢中諱豐、字兵六、本姓阿保丹珍氏、稱二助平一、逸齋其號也としておどけて書いてあるが、この傳には嘘と本當と搗き交ぜて作者の生涯が書かれてあるらしく思はれる。溟痴六念（明治六年なる可し）父沒し、七念憤然起レ志東京に出奔し道樂仲間を拵へ常に女郎を買つて以て樂む。

既而自以爲下レ學二三絃一無中以發二育浮氣一、因學二常盤津清本儀太夫新内都々逸浮節等一

清元を清本に義太夫を儀太夫に誤つてゐるのは、作者の酒落でなしにマジメで誤つたものらしい。本文の中にも誤字や假名ちがひが屢ある、作者にはあまり學問はないが、世事には可也通じてゐる。

歎曰三絃一小技耳、非二無賴漢之業一也、乃修二萬橘之屁羅々々、圓遊之素手手古、談志之釜掘等一稍極二瀛奧一

この時分、東京の寄席に何が流行つたかが此一節から伺はれる。萬橘のへら〳〵圓遊のステテコ談志の釜掘。作者が何とも思はず書いて置いたことが、宛らの文明史だ。

作者の愛讀書はと云へば至二稗史小說一如二江戶紫、楊黃之横櫛一皆暗二記之一、最好讀二小三金五之娘節用一、且長二阿保多羅經一

とあるのを見れば此頃通俗に讀まれた小說も分る、又作者があほだら經に長ずとあるのを見ると、さうした諷刺味の勝つた滑稽文學を好んでゐた人といふ事も分る。

○

さて、それから序だ。

花街膝栗毛初篇自序

貴顯紳士の街區（區は衢の誤字）を來往する衛士の前後を警めざるなしと雖ども志士論客の自由を熱望する政體の不美（不備の誤字）を說かざるなしと雖ども戎器囊に收まり官海波靜かなり亦太平の祥瑞と云わ（云はの誤字）ざるを得ず商戸不景氣に苦しみ士族營業法に難むにも拘らず馬骨孫輿に乘り別嬪品切れと爲る。亦た開明の餘德に出づるもの歟。

この書き出しで見ると、一見當世を謳歌してゐるが如くで、實はトゲだらけである。何處の馬の骨か知れぬ奴らどもが玉の輿に乘り廻し、新橋柳橋の別品さんが大繁昌だといふのだ。當時の勤王成金たる薩長の奴等どもが、世に時めいて豪奢を事とし、下々の不景氣も苦しみも知らぬ顔にいい氣持に成つてゐる、といふのだ。

作者は奥附に福井縣士族とあるより察すれば明治の薩長政府に少なからぬ反感を持つてゐたことが分る。福井縣は松平春嶽侯の舊領地だ。春嶽は德川幕府の親藩主で、前には總裁職をも勤めた人だ。その時分の落首に

一ぜんで置けばよいのに二ぜん目を
　さうざい食でくらゐ過ぎたり

春嶽は按摩のやうな名をつけて
　上を揉んだり下を揉んだり

などと惡口されたが井伊大老横死の後は執政安藤對馬守を斥け春嶽が天下を切り廻した時代もあつたのだ。それだからこそ惡口も言はれたのだ。

花街膝栗毛の作者は其藩士である。然るに今や幕府は倒され福井藩などは見る影もない。ただ獨り盛んなのは薩長二

藩の者共のみだ。

本書の書かれた明治十六年の日本の狀態はと云へば

木戸は死し西郷は亡び大久保は刺され、最近に大隈は政府を追はれ、殘るところは伊藤山縣の如き長州の小僧どもと大西郷と死を共にせざりし薩摩藩の生煮え連が、政府の要路に立ち幅を利かしてゐるのである。關東北陸奥羽の人士の新政府に對する反感思ひやる可しだ。

廣野廣中等の福島事件を魁として越後の高田事件群馬の暴動加波山事件と反亂は相次いで起つた。そして此後にも暴動と反亂が各地につづいた。

此書の出たのは此時代に於いてである。この頃の執筆者は新潮の月評に自作の不評なるを悲んだり文藝春秋に冷かされてくさ〳〵したりするほど、藝術家氣分に成つてはゐられなかつたのである。

○

而かも著者の序は次の如くつづく

長からぬ僅かの生命を的にかけ齷齪と當途のなきことを爲すより太平の御世に出放題を吐き散らし氣隨氣まゝの樂あそび浮世を茶にし自由にやつて退けらるゝが、是れぞ文明の餘徳かと云々

浮世を茶にし出放題を吐きちらすのが、これ文明の餘徳はいいぢやないか。此作者より、もつとずつとずつと〳〵學者で位置も高かつた幕臣成島柳北の態度が、大小高卑の差こそあれ、よく此作者と一脈相通ずるものがある。

柳北も浮世を茶にした。この著者が新宿や芳原や根津の女郎屋を幼い筆で描く如くに、柳北も亦た柳橋新誌を書き京猫一斑を書いた。

然り、幕府の遺臣柳北は、薩長の勤王成金ぶりに顔をしかめつつ、浮世を茶にすることが聖代の餘

徳文明の有りがたいところと感じたからである。

此心は、彼等と一脈相通ずるの士でなくては分るまい。

前號木村毅君の柳北論の如きが草せられるのも、無理はない。

木村君は云ふ。柳北は市井の俗人のみと。

柳北恐らく默して微笑せん。否恐らくは苦笑して默然たらん。

柳北決して木村君の結論に甘ずるには非ず、ただし、恁く言ふ人には恁く答へるの他に道なきを如何せんやだ。

進んで雲井龍雄の如く無謀なる謀叛を企畫する心なく、また退いて勝安房の如く新政府に媚び伯爵をかち得るの心なし。故に唯酒と女とに隱る。風流とのみ思ひ玉ふな。痴癡とのみ笑ひ玉ふな。浮世を茶にする事は、木村君が考へられる程に氣樂なるものに非ず。

すでに幕府の倒れるのを見、向島に閑居して花月を友とす。

人の來つて征韓論破裂し、南洲薩南に歸農すと告ぐ。柳北恐らく微笑して言はん。

「さうかい。」と暫くして「時に家の庭の萩も昨日あたりから咲きはじめた樣だよ」

人の來りて西鄕城山に死すと告げば如何ん。

柳北恐らく微笑して、また云はん。

「さうかい」

暫くして前なる老妓を顧みて

「三の糸をもう少しゆるめて御覽よ」

大久保が殺されたとて、また我に於いて何かあらん。

○

話が大變横道に外れてしまつた。

ところで、此花街ひざ栗毛の著者は柳北と比較に成らぬものである。何も歟も下だ。豪くない。從つて身輕であり、氣輕である。

お前の小説は下手だぞ、と云はれて、「なに下手なものか」と言ひ返し得る位にまだ身輕である。

自分の仕事を一ぺんでも默殺されゝば、「なぜ俺を默殺するか」と言つて怒り出し得る程度にまで身輕である。

だから、彼は柳北と異り、彼に向つてあらかじめ「市井の俗人」との札を貼る瓢輕者の爲めに、欄外に漢文にて自ら批評が加へてある。曰く

序二述太平一之中。自含二慷慨之氣一。仙史亦一个憂國士歟。

もう恁うして置けば大丈夫。

○

著者は自らお斷りした通りの一个憂國の志士だけれど、小説の主人公は途方もない遊冶郎、十六の年に親元を逃け出し色修業のため都に登る。まづ最初に引つかゝつたのは新宿である。

文章は曲亭馬琴以來の例の七五調だ。しかも下手くそな七五調だ。初めに生れと素姓を叙し、次に親宿の夜の光景を叙すること一頁にして樓丁卽ち妓夫と主人公夢中との對話と成る。

それから先き、やりて出で藝妓來り最後に娼妓との口說と成ること、すべて在來の酒落本と同じ。叙述の形式手法に於いては、酒落本以外一つも新しい點はない。たゞ何處までも人物も景も德川式でなく明治式だといふことだ。たとへば夢中の唄ふ歌にしても

お江戸は廣い四里四方
君様お寝所は赤阪假皇居

皇居災上して、一時赤阪離宮に天皇陛下のゐらせられた時分の唄と見える。

月耕の挿繪の新宿の張り店は、まだ昔のまゝらしく、軒下には天水桶など積んである。素見客の様子、一人は職人と見えて頬被りに顔を深く包み、帶を尻の上にしめて烟草入れをさしてゐる。その隣りに立つてゐるのは手拭を吹流しに冠り黒い襟のかゝつた半纏を着てゐる。向ふむきで一人立小便してゐる者もある。妓夫は道まで出て客を引いてゐる。

話は洒落本のやうな單なる粋な通な花街の寫生や穿ちでなしに、一寸ひざ栗毛めいた滑稽味が加はる。いかにも初會の客にありさうな經驗。一人寝こかされて夜が明ける。

新宿を出て、四谷見附より糀町に入り、さまぐ\失策ありて、半蔵御門より竹橋に出で大蔵省民部省の前をすぎ常盤橋のほとりにて、宿引の網にかゝる。

四谷見附あたりの光景（月耕の挿繪）は今と殆んどちがはない。

行きぐ\て常盤橋を渡つたところで、宿引の網に懸り、日本橋邊の宿屋へ連れ込まれた。そして番頭に誘惑され、下地は好きな女郎買にと番頭と俥をつらねて、吉原へ行く。俥夫の懸聲ゴンセイぐ\ぐ\。變なかけ聲もあつたものだ。併し當世書生氣質の中にも矢張俥夫の懸聲をゴッサイぐ\ぐ\としてあるのを見れば、本當にこんな懸聲を出したものと見える。正に風俗史の一頁だ。

茶屋がゝりにて去る中店へ案内され、そこにて一騒ぎする。供をして來た宿屋の番頭が

「旦那、一疋猫を牛捕りませう」

など〻云ふ言葉がある。魯文や柳北らの流行らせた藝者の異名が、丁度流行つてゐて、こんな小著の中に其反影を止め

てゐるのも面白い。

この時呼ばうとして懸けた藝者の名前は、お高、おりえ、お爲、などまだ純默たる東京藝者の名前であるのも頼母しい。現今では榮龍玉蝶雛勇といふ如き、女義太夫語りめいた大阪藝者風の名前が何處の里にも流行してゐるが、この時代はまだ純江戸風が殘されてゐたことが、これら藝者の名で見ても分る。

つく〴〵驚かされるのは當時と今との物價の相違だ。此茶屋は作者が保利屋と命名したほどの暴利屋で、こゝに夢中を案内した宿屋の番頭と馴れ合つてゐて、勘定書を普通の相場の四倍に付けて出したといふのであるが、日本橋から吉原まで二人乘つた車代の立換へ金五十錢などは可笑しいくらゐのものだ。それでも夢中は憤慨して、「三分二朱たあ、あんたる高へこんだんべえ、一里にも足りねえ所だ、已あ一貫か一貫五百でよかんべえと思つた」

即ち十錢か十五錢が相場だつたのであらう。昔の小説や講談にある物の値段は餘り正確でないから、之もあんまり當にはならぬが、澤山も違うまい。他の描寫などは可也リアリスティックにやつてある。

吉原で殆んど一文無しになる迄捲き上げられ、夢中は其日終日あちこちぶらつき廻り、夕刻神田萬世橋に來かゝる。

神田邊へ來りし頃は、早や玉兎の西に跳りて、萬世橋(よろづよばし)のたもとに輝く瓦斯燈も、月の光に遮られ、夢中の胸の結ぼれて、たゝまる感慨は愈々増し、犬の遠吠へ按摩(あんま)の笛、夜鷹蕎麥(よたかそば)の鈴(りん)の音も、無情に聞こえて心を痛む。

まだ日が暮れたばかりだつたといふのに、此淋しい光景は何うだらう。神田の眞中で按摩の笛の音、犬の遠吠は、實に隔世の感があるではないか。

これからまた妙な男と一緒に成つて、根津へ遊びに行く事に成る。このところに又月耕の挿繪がある。夢中とその敵娼艶柳(たをやぎ)と寢ころがつてゐる圖だが、この女の風俗と云つたら實に古風だ。その髪の結び方は何といふのか私は見た事も

ない。そしてステキに長い笄をさし又長い玉の小さい簪をさしてゐる。

夢中は短い普通の烟管をくはへ、敵娼は長烟管を持つてゐる。多分朱羅宇の煙管だらう。又女の言葉も一寸變つてゐる。例へば

「お寢衣を着換へさせてあげ升から、此方へお出でなはい」

なさいと云ふ場合に毎もなはいと云ふ。おくんなさいをおくんなはいと云ふ。

此處でも夜が更けると、あんま針の聲と犬の遠吠が聞こえて來る。根津權現の近傍で、今なら電車の音の枕に通ふところだ。

この時には夢中の方が、勘定をしずに連の男を置き放しで、朝早く逃げてしまう。

それから古着屋を見付け着てゐる着物を脫いで二圓五十錢に賣り拂ひ、淺草雷門前の雁鍋で食事をすませ、觀音さまに參詣し、すぐ奧山をぶらつく。

奧山に到り見れば、流石は東京の盛り場だけに見世物小屋は軒を並べ、彼地でも此方でも「入ラハイ〱」「狸の足藝狢の手踊り、木戸錢わづか天保一枚、評判〱」などとやつてゐる。中には文久二ツと云ふ見世物もある。

天保錢や文久錢と云つても、今の讀者には見た事もない人々が多からう。これらは日淸戰爭時分まで通用してゐた貨幣で、天保は八厘文久は一厘五毛であつた。

又、こんな口上もある。

これは北海道の七ふしぎ、えて物と化物の組打、子守とどもりの喧嘩、ゐん寵と頓間の掛合談し、兄きと狸の騙つくら、ひつぱりとふんばりの大議論、お武家ととぼけの臑押、寢惚けとすぼけの智慧競べ、中錢無しの一錢五厘、評判〱〱」

全然此通りでない迄も、大抵こんな調子で客を呼んだものらしい。

見世物の入場料が八厘又は三厘、又は一錢五厘といふのだ。之を今の活動寫眞館の五十錢とか一圓とか云ふのと較べると、凡そ物價の差額も分るわけだ。

又少し來ると矢場があり、女が呼んでゐる。その言葉も古風で面白い。

「御樣子のいゝ旦那。一ぷく召上つて入らつしやいな」

夢中が惡口を吐いて素通りすると、女は曰く

「オヤ、いけ好かない於丹珍（おたんちん）ダヨウ」

○

花街ひざ栗毛の初編は之で終つてゐる。そして私の手に入れたのは此一册だけである。誰も知る通り、この頃まで行はれた小說には京傳馬琴一派の英雄譚風、紛飾澤山形容澤山の誇張した書きぶり、ローマンチイツクといはうか。それと三馬一九などの滑稽もの、及び洒落本それらは寫實風の書きぶりだ。之は勿論ひざ栗毛と銘打つ位だから作者も一九張りで行つたものだらう。

それに作者は學者でもなし、當時流行してゐた一九の膝栗毛と例の小三金五郎くらゐしか他に多くの文學書を讀んでゐた人でもなからう。作中の主人公は東京近在の者らしい言葉付きでもあるが、又時々作者のお國訛りも出る。文學的に取り立てゝ云ふほどの價値あるものではないが、作者が生中文士でなかつただけに、却つて當時の東京を作らず飾らず僞らず、其まゝ描いてゐるので、文化史として少なからぬ價値を持つてゐる如くに思はれる。

○

一九の膝栗毛は左迄優れたものと云ふ事は出來なからう。併しその後世への影響は割合に長くつゞいた。

私の見た僅かばかりの明治初年の小說の中から數へても、魯文の「三府膝栗毛」がある。それは閻留七といふ男と面（めん）

次郎といふ男との旅行記だ。又末廣鐵腸の「啞の旅行」といふのも同様だ。之は主人公の名は忘れたが、洋行中の失策談を小説に綴つたもので、一寸面白い。

末廣鐵腸が洋行したのは、その前の政治小説「雪中梅」で一儲けした其金で行つたといふ事に成つてゐる。如何によく雪中梅が賣れたと云つても、まだあの時代の事がから、洋行費の造れるほど賣れたのでもあるまいし・大方本屋か鐵腸かの宣傳であらうといふ人もあるが、兎に角表面世間への觸れ出しは、さういふ事に成つてゐる。明治二十二三年頃の事だらう。それ故啞の旅行の出版はそれ以後の事に屬する。明治二十四五年頃かと思ふ。

私が「啞の旅行」を讀んだのはまだ餘りに子供の時分で、父の本をそつと見たのだから發行年月迄は覺えてゐないが滑稽文學として面白い物だつた事だけは記憶してゐる。（五月十五日）



『少年園』は明治廿一年十一月に第一號を出してゐる。初號には東海散史柴四郎、朝比奈知泉、饗庭篁村、伊澤修二氏等が執筆してゐる。六月號本誌河井醉茗氏の文章參照

飜譯文學雜考

木村毅

一

飜譯の一半の目的は、海外の文獻を national Possesion（國民的所有）にすると言ふ事にあると共に、他半の目的は、なるべく原語から直接に逐字譯すると言ふことになくてはならない。

この兩目的は一見相矛盾するやうではあるが、併し傑れた飜譯に於ては、ふしぎにもそれが渾然と融和し、統一されてゐる。日本に於ける海外文獻の飜譯事業は、本誌の謂はゆる胎成期（小說神髓刊行の明治十八年前後より三十年前後まで）に於て、漸く完備して來た。その功積者については、左に坪内博士の『文學その折々』の一節を摘錄して說明に換えやう。

『美文を飜譯して、髣髴原著の現れ來たれるかと思はしむる譯者は、吾人之れをたゝへて如來と名づくべし。明治文壇幸ひにして已に三如來を得たり。英文如來を森田思軒氏とし、獨文如來を森鷗外氏とし、魯文如來を長谷川四迷氏とす輓近内田不知庵、原抱一庵の諸氏、また大に飜譯に力を盡くせり。文界遠からずして二三の新如來を加ふべし。』

この論者自身の逍遙博士が英文如來として加はる事は勿論である。

併し吾等はこの攻究に入るに先立つて、一應、日本に於ける西歐文獻移植の經路を歷史的に大觀しておく事の便宜な

ろを思ふものである。

二

日本に於ける西歐文献の最初の飜譯は、恐らく文祿慶長當時、天草の切支丹學校で刊行せられた『イソップ物語』や『コンテンプツ・ムンデ』(トマス・アケンピスの「基督に倣ひて」の飜譯)などである。

やがて天草の亂後切支丹は禁壓せられて、海外との交易が途絶すると共に、その飜譯も亦一切中斷せられて了つた。たゞオランダ人との交易のみが許されてゐたので、今から三百年程前に和蘭書の馬術に關するものが、今村明恒博士の遠祖によつて譯されてゐるさうである。私はその本を見た事がないから詳しい事は知らないが、何でも既にビールの文字に麥酒の譯字を宛てゝあると言ふ。

それから徳川末期から王政維新までに出た譯書には兵法や砲術の書が多い。福澤諭吉や箕作麟祥の如きも亦さうした戰術書の譯みしたもので、今も時々その古本を見かける。

明治初期には譯書の範圍も廣くなり、前記戰術書の譯者によりて、英米獨佛の政治書や憲法の書の譯出が盛んに行はれた事が著しく目につく。それについては『泰西通鑑』『佛蘭西革命史』の如き史書、開化の標語の下に西歐の物質的文明を紹介した化學書、機械の書の如きが比較的多く要求されてゐた。

文藝書の現はれ初めたのは先づ明治十年以降と言つてよからう。尤も明治四年に中村正直の『西國立志編』、明治六年に『イソップ物語』など出てゐるには居るけれど。

『西國立志編』は完全に近い逐字原語譯と言へる。その感化を蒙る事の深かつた増田藤之助氏がその飜譯ぶりについては、明治三十九年頃の文章世界に論じてゐられた事を記憶する。

このやうな道德訓に近いものは逐字的譯法を試みても比較的理解され易いが、風俗習慣の異る小說や劇はなか〳〵さう行かない。そこで西洋小說最初の飜譯なるリットンの『アーネスト・マルトラバース』は『花柳春話』なる題を附され今なら『接吻して下さい。』とでも直譯すべき句が『乞ふ、卿が朱唇を一嘗せしめよ』と云ふ風に譯されねばならず、第二の譯書なるスコットの『ランマア・ムーア』は『春風柳話』なる題を附されて、挿繪には芝居の照手姫でも見るやうな花粋の、艦飾の美人を掲げねばならなかつた。これこは原作を忠實に紹介すると言ふよりも、海外文藝を n tional possesion に早くせしめたいと云ふ譯者の用意であり、又さうしなければ海外事情に通じない一般讀者には分らないので他面讀書界の要求でもあつたのである。

三

普通逐字譯の元祖としては森田思軒が擧げられるが、その先驅とも見なさるべきものゝ一つはテレマックの飜譯なる『鐵烈奇談』である。明治十六年頃の出版。多くの明治文學史はこの書の存在を完全に見落してゐるが、柳田泉君によつて發見され、彼が原文と對照してみた結果、殆んど逐字譯に近いことが分つた。

その一つは坪内逍遙博士の最初のシェークスピヤ譯なる『自由太刀風餘鋒』（原名・ジユリヤス・シーザー）である。これは院本風に綴つたものであるか、中の對話が如何に逐語的に正確巧妙を極めてゐるかは、これ又同じく創刊當時の文章世界記者が、原文と譯文を對照して批評してゐた。恐らくこれは田山花袋前田晁兩氏共纂の『評釋新古文範』の中に入つて居る事と思ふ。

森田思軒の譯文は後からは數々の非難も聞く。ユーゴーのものを英譯から重譯したのが多いため、世は彼をユーゴーの譯者として尊重した。

併し古い所では既に高山樗牛が『門末の聲は思軒を目してユーゴーの紹介者となすけれど、吾等は佛文を解せざる思軒が如何にしてユーゴーの紹介者であり得るのかを怪しむ』と言ふ意味の事を言つてゐる。又太陽の増刊『明治文藝史』の筆者（恐らく長谷川天溪氏）も『思軒は舊派文學の殿將たるに留まつた』と言つて、多くその價値を見てゐない。——併し私をして言はしむれば、それは少しく酷に過ぎるやうである。生前、餘りに彼が推重され過ぎた結果の反動である。

全く生前に於ける思軒の飜譯者としての地位名聲は非常なものであつた。その證據の一端とも見るべきは、思軒が若松賤子の『小公子』の譯を激稱したのに對し、多くの批評家が『飜譯王思軒の折紙がついた名譯』として認容してゐる一時でも知れる。（第二版の小公子卷末附錄に收められた諸家の批評を參照せよ）——尤もさうまで言ふのは過褒である。だからこの讃者と斥者との中間說を取つた位な所に、丁度思軒の受くるにふさはしい評價が生れて來はすまいかと思ふ。田山花袋氏の批評が比較的に公平である。

『ビーコンスフィルドやリツトンの飜譯から更に一轉化を試みさせたのは、思軒の功と所謂はねばならぬ。それから、其時まで譯語譯法などの非常に亂雜であつたのを一新したのも此人の功だ。かれは漢學に通じてゐて、比較的譯字譯法に詳しかつた』（小說作法）

思軒の譯したものとして名高いのはユーゴーの『クロオド・ギュウ』『死刑囚最後の日』『バグジヤガル』『隨見錄』『探偵ユーベル』（以上思軒全集）、『誓使者』、『十五少年』などである。外にホウソン、エッヂオース、スーヴエストルその他の短篇の譯もある。

文章の上から見て、その思軒調の最も圓熟したのは『十五少年』であらう。この事は武田櫻桃氏も亦『古今名家文選』の中で論じてゐた。

併しそれは初め少年世界に掲載せられたのだから、どこかくに譯しこなした跡がある。眞に飜譯の苦心を見るべきはやはりユ！ゴーのものであらう。どの篇であつた冒頭に、譯語は一字一句苦心して、正確なことには幾分の自信をもつて書いたのがあつた。

四

とは言ふもの丶思軒の飜譯は、今日から見ると歷史的價値以外に餘り多くのものを持たない。それに比して二葉亭の譯は何と言ふすばらしい光彩を放つて、今日までも生き輝くことであらう。二葉亭のものは、その選んだ原作からして文藝愛好家の必讀を要する名篇である上、思軒の大部分が重譯なのに比して原語直接譯であり、而も言文一致である。その意味から二葉亭の譯は鷗外のそれよりも遙かに高く評價されねばならぬ。

その『あひゞき』(ツルゲエネフ原作)が國民の友に出たのは明治二十一年である。それだ當時の進んだ讀者に如何に異常な感激を與へたかは獨步も說き(欺かざるの記)、蘆花も說いて(黑い眼と茶色の眼)ゐる。その他當時の靑年文人(今日の花袋藤村の年輩の人)も一樣に新らしい感激に打たれた事を語つてゐる。獨步の如きは殊に非常に影響を受けたもので、彼の愛用しておかなかつた『四顧し、傾聽し、默想す』のもとの句はこの『あひゞき』の中にあるのである。

その樣に進んだ頭腦の讀者は一樣にこの名譯に魅せられたけれど、一般讀書界にはそのよさが分らなかつた。(今日から考へると、何といふ驚異、何といふ不思議であらう)そこで石橋忍月はわざく其の詳しい批評をし、解說を附し、註釋を加へて、鑑賞の手引きをしたと言ふ。(尤も私はそれを讀んだ事はない。)

要するに二葉亭は明治文壇隨一の作家でもあり、飜譯家でもあり、又「人」でもあつた。二葉亭の作を讀破しない人が文藝愛好者の中にあるとは考へられない。隨つてそれに就いては普く知れ渡つてゐる事と思ふから、これ以上無用の

賞辭を加へて彼が譯壇の功積を述べることを止めよう。

五

鷗外の譯はその謂はゆる文語體のものは完璧に近い。が『みなわ集』當時の言文一致のものは二葉亭に劣ること數等である。但し大陸文學の紹介者としての彼の功積は明治文壇隨一である。

ある人が獨和對譯の書を編纂するので、鷗外にその諸譯書中、最も正確な、最もよい一節の指示を乞ふた所、『埋木』を出して來て、この何處でも節錄せよと言つたと言ふゴシツプを昔の雜誌で讀んだ記憶がある。眞僞は疑はしいが、いかにも鷗外らしい自負と傲慢さとのある話である。又彼自らも『二人の舊友』（？）なる創作で、當時自分の譯がいかに識者から精嚴を以て推服せられたかを描いた。

思軒の文が『十五少年』に最高潮期を劃する如く、鷗外の文は、その文章體のものは、原作はあまりいゝ作でない『卽興詩人』（アンデルセン原作）を頂點とした。この書が又いかに當時の文學青年に感激を與へたかは言ふまでもない。中には殆んど暗記するまでに到つたものもある。（富山房發行、長田幹彥譯アンデルセン童話序を見よ）それは實に讀書界からの無條件的賞讚であつた。

但し、中にたつた一人この譯書にケチを付けた批評家がゐる。それは當時萬朝報の新刊紹介欄を擔當してゐた堺利彥氏である。氏はこの文章を、生硬な讀みづらい肩の凝るものだとくさした。所が、鷗外崇拜者達は承知しない。すぐいきり立つて堺氏の無理解に嘲罵を加へたので、堺氏は再び駁擊を加へて、自分は讀者の立場から批評して、あの書が分りにくいものだと言つたのであると書いてゐる。（この論爭、及び一切の卽興詩人に對する批評は舊版第二版の卷末に附錄として收まつてゐる）私は鷗外の譯文を殆んど暗誦する位にまで愛讀した一人であると共に、又堺氏の言にも一理あ

ろを認めざるを得ない者である。

鷗外の言文一致の飜譯は後に大正になつてゲエテの『フアウスト』などに到つて圓熟の頂點を劃した。が、鷗外の飜譯壇に寄與した貢獻についても又詳述する必要はあるまい。

六

坪内博士の飜譯家としての事業が本當に實りを結んだのは、後に完成した『シエークスピア全集』及びイブセン、シヨウ、ハンキン等の劇の譯に於てゞある。當時の博士には飜譯として完成したものはない。が早稻田文學に連載せられた『マクベス評註』及び國學院大學と東京專門學校文學科講義錄に連載せられて、後に單行本となつた『英詩文評釋』が、外國文藝わけても英國文藝の理解鑑賞に資する事の多かつたのは言ふまでもない。逍遙の英文學に鷗外のドイツ文學！——と、かう當時の文壇では言はれたものである。

坪内博士は『マクベス』譯書の附錄に於て日本に於けるシエークスピヤ飜譯に對する態度の四變遷を述べ、第一期を日本化式時代（私の言葉を以て言へば極端なる national possesion を目標とする時代）第二期を奴隷的に原義を重んじながら、やはり國文の連想に壓迫されて結果は甚だしい日本化となつた時代、第三期を口語體時代、第四期を口語に多少の工夫を加へて明治大正の特殊的社會連想の附帶を防がうとする時代——と分つて居られるが、これはひとりシエークスピヤの飜譯のみでなく、全體の文藝ものゝ飜譯に對しても廣く言はるゝ事であらう。

譯壇に於ける坪内博士の功績と共に見のがしてはならないのは、增田藤之助氏の貢獻である。氏にもさう大して纏まつた譯書はないが、日本に於ける謂はゆる直譯式な、生硬な譯法を排して、逐語的正確さを保たすと共に、日本文としても完全なものにしやうとされた努力は異常なものがあり、それが間接に影響して文藝飜譯壇の弊風の大いに改まつた

のは注目すべき事である。

英語の普及については辭書の井上、文典の齋藤、神田など外に功積者がいろ〳〵あらうが、少くとも英文學を文法的に修辭學的に正しく移植する土臺石を据えた功積者は增田氏でなくてはならない。氏の主宰された『日本英學新誌』の古本が今日珍重せられて、篤學者に喜ばれてゐる理由の一つは右の點にある。併し氏の努力は結晶して後に丸善發行の『英和辭典』となつた。文藝飜譯の際、適當な譯語の搜索に役立つことこの辭典の如きは他にない。杉森孝次郎氏が洋行の際携へられた唯一の日本の書はこれであり、坪內博士も常に座右から手放された事がないと云ふ事は、今ではこの書を權威づける噂として傳說として誰れ知らぬ者もない。絕版になつてから數年になるので、今ではこの辭書を所持する者は、それを一つの書齋の誇とし、所持せぬ者は血眼になつて古本屋を搜してゐる有樣である。

坪內博士は『英文評釋緖言』で、夙に增田氏の主宰さるゝ『日本英學新誌』の譯法の正確な事を認めて居られるが、後に增田氏は坪內博士の女房役となつて、早稻田大學英文科の重鎭と仰がれた。その譯壇に致せるの功はたとへ間接であつたとするも、看過してはならない。

七

坪內博士が新如來の候補として數へた二人者のうち、抱一庵については、今日多くを言ふ必要を見ぬ。高山樗牛はその誤譯の甚だしい點を冷笑してゐるが、選んだ書物も『闇中政治家』にせよ、『聖人か盜賊か』にせよ文藝的價値の大したものではない。たゞ英語が多少讀めたがために、半ケ通を振り舞はしてはゐるものゝ、その批評の如きも今日から見れば齒の浮くやうなものが多い。

それに比して內田魯庵氏は、さすがに識見の高きを見る。（今日、氏が坪內博士と並稱されて文壇の元勳の如く推重さ

れてゐるのは、決して所以が無くはない。

吾等は『國民の友』に連載せられたドストーエフスキの『損辱』（虐げられたる人々）の梗慨批評を一讀しただけでも、旣にあの頃から氏の海外文藝に對する理解鑑賞が如何に精到で且つ正確なるかに畏服する者である。

氏が譯者としての功積を不朽に輝やかしむるものは『罪と罰』の飜譯であらう。

聞く所によると明治廿何年かに、この英譯は丸善に三冊だけ來たのださうである。その一冊は森田思軒に、一冊は坪内博士に、そして殘る一冊は内田氏に依つて購はれた。坪内博士は早く人に貸し失ひ、思軒も何かの理由によつて通讀せず、内田氏も亦最初の頃は記述のくどさに辟易して幾度か投出された。

が、内田氏はある夏(?)避暑旅行をされた時に持參して、我慢しながら讀んで行くと、遂に興にひき入れられ、日が暮れるとランプをつける間も手放すのが惜しくて、夕日の明りをたよつて緣側に出でゝ讀み、女中が食事を運んで來たのも覺えないでゐられたと言ふ。

その飜譯の第一冊は明治二十六年に出たが、分ると分らぬとに論なく、文壇は等しく驚異して迎へた。丁度探偵小說の流行してゐた時だつたので、依田學海を初めとし、批評家の中にはこれを探偵小說として讀んだものも少くなかつた。

坪内博士はさすがに英國文學に精神せらるゝだけに、之を現代のマクベスと稱した評家の言を援引し、公平な鑑賞眼を示されたが、言說多く、譯文の上に及んで、作の眞精神に徹してゐない。と言ふのはこの譯書は二葉亭などに依つて開拓された言文一致を用ゐ、そして日常の俗語を混用する事は更に遙かに多きを加へたので、それがたま〳〵當時紛亂を極めた日本文體の結果はどこに落ちつくかを考慮してゐられた博士の興を引いたと見える。

だが、紙背に徹する底の眼光を以てこれを再讀三讀したものもないではなかつた。北村透谷の如きがその一人である

彼がこの譯書に對する批評は、あの時勢にしてこの言あるかと、吾等を驚嘆せしむるに充分である。藤村氏の『春』に於ては透谷をモデルとした青木が『内田さんの譯した罪と罰の中に、ラスコルニコフが考へることをしてゐると言ふ所がある。昔に於てもあゝ言ふゑらい言葉を吐いた人があるかと思ふと驚く』と言ふ意味の事を語る一節がある。それを思ふ時、後に藤村氏が『罪と罰』から巧みに換骨脱胎した『破戒』を書いたのにも、一味の因縁のつながる事を感ずる

内田氏の『罪と罰』は惜しい事に完成しなかつた。後に大正になつてから改譯されたがそれも前半だけで、後半は出てゐない。氏の飜譯家としての事業の完成を語るものには、『復活』『二人畫工』その他トルストイ、モウパッサン、ヴオルテール、エッヂオース等の短篇がある。

八

胎成期の飜譯について、私はその概略を語り終つたやうに思ふ。日清戰爭後になると馬場孤蝶、戸川秋骨、上田敏等文學界派の少壯文人達が譯壇にも活躍して來るのであるが、この研究に於ては、そこまで究める必要はあるまい。

たゞ、上記の論述で洩れたものゝ中、興味ありさうな一二を拾へば、先づ山田美妙の『ハムレット』の口語譯を擧げねばなるまい。これは明治二十一年『いらつめ』なる婦人雜誌に揭げられたものである。美妙は言文一致の創始者としても、『都の花』なる雜誌の編輯者としても、又目新らしい技巧を凝らす作家としても、異常な才氣を見せたが、飜譯に於ても決して凡手ではない。『子規隨筆集』を讀んだ者は　彼れ子規が同時の大學受驗者の中に、英語で書かないでもよい答案を、英語で認めたすばらしく英語のよく出來る受驗生のあつた事、及びそれが山田美妙であつた事を書いた一條を記憶するであらう。今試みにハムレット口語譯の一筋を原文と對照して揭げれば次の如くである。

Ber. Who's there ?

Fra. Nay, answer me; stand, and unfold yourself.

Bor. Long live the king !

Fra. Bernardo ?

Ber. He.

Fra. you come most carefully upon your hour.

Ber. Tis now struck twelve; get thee to bed, Franci-co•

Fra. For this relief much thanks: 'tis bitter cold, And J am sick at heart.

Bei. Have. you had quict guard ?

Fra. Not a mouse stirring,

Bor. Well good night.

If you do meet Horatio and Marcellus,

The rivals o: my Watch, bid them make haste.

Fra. I think I hear them. Stand, ho ! vhós there.

バアナード　其處成るは何者か?

フランシスコ　左樣言ふものから先づ名のれ。姿をとく見せい。

バ　聖體萬歲。

フ　はゝ。バアナードどの。

バ　如何にも左様。

フ　さて貴殿の謹深き。定の刻限ちつとも違へず……。

バ　今十二時も打ちました。貴殿はもはやおやすみなされ。

フ　有難うムり升。何とまあ、この寒さは。拙者などは眞底ほと〳〵病氣にもなりさうです。

バ　それは左様と、今夜の御番。異變はありませんでしたか。

フ　あゝいや、鼠も噪ぎませんで。

バ　左様ならば、御機嫌よう。……もしや途で朋輩のホラシオとマアセラス二人に御逢ひなされたなら、急いで來いと仰られて。

フ　しかし、あすこにあの足音。ほうい駐まれ。何者だ。

惜しい事にこれは完結しない所か、第一幕だに終つてゐない。併し坪内博士の『マクベス』の附錄の表にも洩れてゐる珍篇である。數年前に出た本誌の『シエーフスピヤ三百年祭記念號』に楠山正雄氏が紹介されて人の注目をひいた。

その他民友社には才人が多く、西歐文藝の移植にも少なからぬ貢献をなしてゐるが、中でも德富蘆花氏の『老武者』(ゴオゴリのターラス・ブルバ)や國木田獨歩の『糸くづ』(モウパッサン)宮崎湖處子氏のものなど、或は長編を壓縮して手際よく紹介した點に於て、或は短篇を殆んど逐語的に飜譯した點に於て、それ〴〵の價値を有する。

田山花袋氏の『コサック』は内田不知庵氏の『罪を罰』が出たのと同じ明治二十六年に出てゐる。米國版の縮譯からの重譯であるが、一脈清新の情味を文壇に投じた事は爭はれない。翌二十七年には鹽井雨江の『湖上の美人』(スコット

の完譯が出てゐる。たしか今様長歌と云うやうな割註がどこかに附してあつたと記憶するが、早くから喧傳され、移植された英文學でありながら、長編もので嚴正な完譯の出たのは或はこの作が最初ではあるまいか。

話が少し前後するが二葉亭の『あひゞき』の出た明治二十一年博文館發行の『大和錦』なる雜誌に某法學士譯のツルゲエネフの『その前夜』があつたが固有名詞の發音から推しても、ロシャ原語からの直接譯らしかつた。

　それから同じ年に末松靑萍譯の『谷間の姫百合』が出てゐる。多くの明治文學史の中にはこれを政治小說のやうに記述してゐるものを見受けるが、決してさうではない。政治家の譯したものではあつても、內容は純然たる家庭小說で、女流作家バーサ・クレイの『ドラ・ゾオン』を譯したものである。譯は嚴正な逐字譯とは言へないまでも、（原作が非常に重複の多い蕪雜な美文だから、到底逐字譯は出來るものでない）かなり忠實に原意を追ふてはある。人名などが日本化されてゐるとは言つてもドラが寅子となつてゐる程度で、恣に改刪したやうな跡は見えない。再版の卷頭に皇后職（?）か何かそんな役にゐる人が皇后陛下の御覽に入れた所、大變興がられたと言ふやうな事を書いた手紙の複製版が付してあつたと思ふが、さうだとすれば、この作は或は照憲皇后の臺覽を得た唯一の西洋小說であるかも知れない。菊地幽芳の『乳姉妹』は、原作からしたか、この飜譯からしたかは知らないが、兎も角もこの作の飜案なるは疑ひを容れぬ。

　なほ中江兆民の『理學鉤玄』『理學沿革史』（理學とは哲學のことである）尺新八のスペンサアの『教育論』なども明治廿年前後に出でゝ居り、切支丹方面の重要文獻『フランシスコ・ザヴイエ書翰集』『鮮血遺書』などの譯は廿年後日清戰爭までの間に出てゐることを附記しやう。

　之を概括して思ふに、明治大正の文壇を通じて飜譯が重要なる意義を帶びた事この期の如きはあるまい。當時に於ては飜譯は直ちに文壇の脈管に生血を通はす酸素吸入の如きものであつた。だから又飜譯がこの期の如く尊重せられた事はなく、飜譯のみを以て優に文壇の大家となり得た。思軒の如き、抱一庵の如きがそれである。

　さう考へて來ると、明治文藝胎成期に於ける飜譯の考察はなか〱輕視するを許さないものがある。例により大部分の參考書は手許になく、うろ覺えで書くのだから、記憶の間違ひは大方の是正を乞はなければならない。

書生氣質の發行方法其他

三田村鳶魚

書生氣質の發行方法

今日では硯友社の我樂多文庫、金港堂の都の花、春陽堂の新小說などが、明治になつての小說雜誌の古い處として覺られて居るやうであるが、それ等は廿年以後の發行なのだから、我等の如きも其の讀者の一人であつた、しかし小說のみの雜誌は其の前からある、半紙へ活字で刷つた繪入と體裁は殆ど一樣、定價四五錢といふ處、人情雜誌、繪入人情群芳新誌などゝ、四五種もあつた中に、芳譚雜誌（明治十一年七月一日創刊）が一番先きも出たし、勢力もあつた。是等の雜誌に依つて當時の新作小說が發表された、孰れも分載されるので幾號かに續く。

同じ體裁で書庫の虫干などゝいふ雜誌は、著名な古い小說を分載續刊した、咸唐題庫（かんからだいこ）は三國志水滸傳西遊記を分載して居た。一月に三同發行する雜誌が一册十枚內外たのだから、幾年たつて完了するのか、隨分氣の永い話であつた。

芳譚雜誌の類が衰へた後に花を咲かせたのは、若林玵造の速記物だ、最初のは半紙半裁で、益田孝氏が口述した飜譯小說夜と朝だつたが、引續いて圓朝物の牡丹燈籠や榛名の梅が出た、速記も當時は傍聽筆記といひ、和らげては言葉の寫眞ともいつて、不思議なものの一つにされて居た。小說雜誌の傳統ではあつても、口述筆記といふ珍しいもの、それに新活字（淸朝）を用ゐたのも新しかつた。表紙も淡彩であり、色摺口繪もある、數年前の小說雜誌とは見違へる程に

淸新な感があつた。

逍遙先生の書生氣質も妹と背鏡も、淸朝活字で半紙を摺り、分册で發行した。現在では分册本書生氣質は殆と見掛けない、合本洋裝の改版本さへ尠いが、小說雜誌の傳統され、速記物を立派にした淸朝活字を採用したことが、當時にあつて新しい發行方法であつたやうに思ふ、

黨人の小說

政治小說、矢野龍溪氏の經國美談が早いだらう、けれども飜譯系統の物だから別だ。藤田鳴鶴氏の文明東漸史は渡邊華山高野長英のことを書いたのではあるが、それよりも濟民偉業祿の方が馬琴張りで小說らしい。珍なのは尾崎咢堂氏の新日本であらう、慥二册出た筈だ。分量の多いのでは末廣鐵腸氏で、雪中梅花間鶯に續いて十數種もあらう。其の中で盛に賣れたのは二十三年未來記である。賣れた方からは東海散士（柴四朗）の佳人の奇遇が第一であらう。宮崎夢柳氏に經國濟民高峰の荒鷲等數種あるが、この人は虛無黨小說鬼啾々が最も讀まれた。加藤政之助氏に春窓綺話があるが創作ではない、但し爲永流を漢文口調で往かうとした處があつたやうに記憶する。

爲永流を漢文口調といへば、悲風慘雨世路日記は若い人達の間に大變行はれたものだが、あれよりは春窓綺話の方が穩だつたと思ふ、佳人の奇遇の漢文崩しも系統調べにすると世路日記の筋目だから面白い。

小室案外堂

自由の燈（後の燈新聞）に才筆を揮ひ、單行した自由艶舌女文章の著者小室信介は、案外堂主人と署して幾つかの小說を書いて居る、此の人は宮崎夢柳のやうな筆だけの男でなく、働けもする人だつたと聞いて居る。丹後宮津藩士小笠

原某の二男に生れ、早く京都へ出て、宮原節菴の門に入り、兼ねて同志社に學んだ、やがて歸國して天橋義塾を開き、青年子弟を薫陶して居た。

後に貴族院議員に勅撰された小室信夫は、宮津に近い岩瀧村の絹屋で、中島錫胤等と尊王運動に奔走し、殊に長州の連中には相應に資金を投じた。神鞭知常は小室の番頭、古澤滋は小室の書記であつたのを見ても、小室が人材を引附けて居たのが知れよう。小室は信介の人柄を喜んで、長女幸子の婿にした、此の幸子には今の男爵新田忠純を迎へる筈であつたのに、新田家では不幸にも嫡子を失ひ、忠純氏を小室家に與える譯に往かなくなつた、それで信介の案外堂が見立てられ、他姓を冒すことになつたのである。

小室は官命で洋行する時に古澤滋を連れて往つた、さうして議會制度を調べさせ、歸朝して板垣後藤を說き、副島江藤と前四參議の民撰議院設立建白となつた。國會開設運動の張本人は實に小室信夫である、大阪の立憲政黨新聞の如き古澤滋及び愛聟信介の參加したのも決して偶然ではない。信夫の案外堂が大阪を去つて自由黨の新聞に執筆したのも養父からの貴緣もあり、殊に案外堂が信夫よりも急進論者であつたからだ。けれども亦た古澤滋と同樣な徑路を攀るべき內情を持つても居た。

案外堂は新田忠純男の身替りに聟入した譯で、新田の姉は侯爵井上馨夫人なのだ。明治の十六七年であつたか、井上外務卿は案外堂を霞ケ關の屬官にして了つた、案外堂は黨人として押通せずに節を變した、其處には彼の抱負がないでもなかつたらしい。彼が死に至るまで三四年の短い日子ではあつたけれども、頻と支那朝鮮へ往來して居た、當時の黨人氣質からは政府に降參したと見做しもすれば、無節操とも云はれた。彼は辯舌も文筆も人に過ぎたものがあつたのに在野の志士として名聲を博し得なかつた。

彼は三十二三で沒した。刊行された東洋民權百家傳九册は、讀者の血を湧かせ、何だか專制政府を睨み附けたやうな

氣分であつたが、それも幾年ならずして忘れられ、自由艷舌女文章も書名さへ知つた者もない。彼の第一遊猗記を讀んだ者は若し彼に尙ほ若干の壽命を與へたなら、多少の事功を殘しもしたらうにと思はずには居られぬ。

新舊小說の見別け

新小說は饗庭篁村須藤南翠を看板にして發行したのだが、篁村は畑違ひでも、南翠は戲作者の群から出た人である。あの時分までは戲作者側の作物が多かつた、數の尠い新作家の著書は一々世間の注目を惹いた。我等などは文章や構想から新舊作家の物を見別けるよりも、モット明白に簡單に分類した。それは出て來る人物の衣類持ち物を疎略に書いたのが新作家、詳細綿密に描いたのが舊作家として、何時も見別けて居た。

新しい方でも舊作者を眞似る氣味があり、古い方でも戲作放れをする積りがあつて、兩方加減したらしいが、何としても衣類持ち物の記述になると、江戸の傳來に暗い新作者は勉強しても知識が足らない。洒落本から人情本まで長い間の通がり知つた振りの癖は、到底舊作者の振り切れないことで、奮發して見ても省筆し得なかつたであらう。

それから多少間はあつたが二葉亭氏の浮雲が出た時、新しがつて讀んだ者が自失した。アツケないじやないかと誰も云つた。中に息の詰るやうな窮屈な小說だと云つた人もある。舊作者の手斧走り、粗大な小說に慣れた眼からは、一向に局面の變化のない、一つ所に停滯したやうな、捗の往かないのに倦みもしたのであらう。後日は格別、當時の小說好きといふ連中からは不評でもあり、賣行も妙でなかつたらしい。

紅葉山人の文選

其處へ往くと新著百種の第一册に紅葉山人の色懺悔が出た。是はお芝居だつたから大分賣れもしたし、古い讀者も不

足を云はなかつた。それでも人情本や臭草紙の連續としては決して手近い物ではない。

新著百種は從前の小說雜誌と云つて、一册で讀切になる小說を月々續刊した、第二册が饗庭篁村氏の堀出し物、第三册が幸田露伴氏の風流佛と十餘册を出して居る。此の新著百種の口繪は墨刷ではあつたが、浮世繪でなく省亭丹陵永濯などの筆だつた。其の後に小說の挿畫が段々と浮世繪から離れたやうに記憶する。尾崎君は省亭氏の外に半古氏松洲氏の筆に待つて、孰れの著書の挿畫にも浮世繪風のはなかつたのを見ると、此の好みが或る新作家の好尙に出たものなのであつたらう。讀者の側に在つた我等などは、浮世繪殊に歌川流の畵に感悅して居るのが舊作家であつて、新作家の文學者は高尙優美な繪でなければ滿足しないのだと思つた。それは戲作者といふのと、文學者といふのとの差で、各自の見識も態度も大懸隔があつた。作家各個が構え込むからばかりでなく、讀者の方で新作家の尊敬すべきを認め、截然たる區別を以て戲作者とは待遇を違へて居た。

芳年の後半生から浮世繪が一變し、年方を經て再變し、此の一派は歌川流でなくなつたらしいが、當時のみならず、大分後までも本畵浮世繪の差格は戲作者と文學者との違ひのやうに目立つて見えた。それ故に浮世繪を挿畵とした小說は高尙らしくない氣がした。

春陽堂から新作十二番といふ、本文も色摺にした表紙口繪も悉く木板日本紙刷の短篇小說が續刊された時、其の鮮麗なことだけでなく、加何にも立派に見えたのは、芳幾や國政のやうな畵風から離れた爲めだと思つた。其の中へ紅葉山人は此ぬしといふのを書いたが、見返しへ文選の好色賦の處を半片見せてあつた。

我等が初めて讀賣新聞社で紅葉山人に逢つたのは、二十七八年戰役後、中井錦城君に引合せられたのであつた。其の後は折々橫寺町を訪問して、色々な話を聞き、頗る啓蒙された。其の時分度々尾崎君の坐右に和刻の六臣註文選があるのを見掛け、此ぬしの見返しの趣向を思ひ出しては何時も獨合點をしたが、當時紅葉山人の作物は大概讀賣紙上へ發表

した。それは我等の愛讀したものだけに、渠の人の文字の用法、別けて振假名で讀ませる往き方、巧に古訓を活殺して俗語に漢字を嵌めた手際は、振假名と文字と對照して、只だ字義だけで往かずに、訓譯で往くから、其の嵌りが好いばかりでなく、其の扱ひ方にも我等などの興味を惹くことが多かつた。

尾崎君は門下の誰彼に文章のために太平記を湛讀せよと敎へたことは、我等も聞き及んで居るが、誰にも文選を薦めた事を聞かない。けれども自身では精讀したらしい、昔から文選爛れて秀才出づといふ、尾崎君のは慥に其の流儀ではない、唐本の文選では往けない。是非和刻の六臣註文選でなければならぬ。文選の日本板は註のないのも、李善註のもあるが、王朝以來の古訓を玩味するには六臣註に限る、尾崎君が古訓を上手に取扱つたのは、他所から得たのでなく、和刻の六臣註文選なのを疑はぬ。

今日は喪失して了つたが、我等は感心した餘りに日々の讀賣新聞の同君の文章に朱線を加へて、文選傳來の古訓を標識して置いたものだ。回顧すれば眞に隔世の感がある。尾崎君の文章を賞揚する人はあつても、渠のルビを一誦三歎する者がない。

覺束ない記憶を辿れば書くことは澤山ありさうだけれども、自分が氣乘りがしないのみか、それを續けた長いものになつては、讀む方が更に迷惑だらうと思つて止める。

明治批評史緒論

本間久雄

明治における文學批評の端緒は、云ふまでもなく坪内逍遙博士の明治十八年に公けにされた『小說神髓』にある。實にこの書によつて、その頃の明治の文壇は、文學の如何なるものであるか、藝術の如何なるものであるかを知つたのである。從つて明治の批評史を檢攻するためにはまづ第一に『小說神髓』の提唱した新文學觀を見なければならない。しかし、その準備として、こゝではまづ『小說神髓』の出るまでのその頃の社會が、文學や藝術を、いかやうに見て居つたかを一瞥しようと思ふ。

その頃の社會では、文學や藝術をそれ自らとして、獨立した意義を持つたものとして硏究したり鑑賞したりすることは恐らく殆んどなかつたやうに思はれる。文學や藝術をやはり德川期以來の考へ方である儒敎の所謂六藝と解釋してゐたやうに思はれる。嘗て太宰春臺はその『文論』で「夫子の所謂文者何也。曰。先王之道之謂ㇾ文。文也者。非ㇾ他也。六藝之謂也。孔子以ㇾ文爲ㇾ道。且以爲ㇾ敎。此其所㆘以聲名洋㆓溢乎中國㆒。施㆓及蠻貊㆒。而萬世與日月合㆗其明㆖也」と云ひ又「夫君子之道。以ㇾ文爲ㇾ至。學而時習ㇾ之。小可㆓以修ㇾ身。大可㆔以治㆓天下國家㆒。」と云つたが、明治になつてからも、文學と云ふものは、一般の人々には、春臺式に小は以て身を修め、大は以て天下國家を修むべきものとして考へられてゐたらしい。言葉を換へて云ふと、極端な功利觀である。文學を文學そのものとして、藝術を藝術そのものとして、こ

れ自らの立場に立つて攻究するといふやうなことのなかつたのも當然のことである。明治九年に第一號を出した中村敬宇氏主宰の「同人社文學雜誌」などを見ても、名は「文學」であるが、それが「經書」又は「學問」といふほどのひろい意味であることがその内容を一見したものには容易に上肯けるのである。

かういふ時代であつたから、小は身を修め、大は國を治めるといふやうな經書以外の文學即ち小說、詩歌等の文學甚だしく輕んぜられてゐたのに無理はない。これについては幸田露伴博士も、本誌三月の「混沌期硏究號」の中で、その當時の小說について、次のやうに云つて居られる。

「先づ第一に申して置きたいことは、今日でこそ、小說や劇の類をば、文學だ文藝だなどゝ申しまして、其物の實際價値は、ともかくも、分類上に高い價値を持たせて居りまするが、今日より數十年前は、小說なんどの類は當時の社會に於て餘り高い位置に居かれてゐなかつたものだといふことです。それは支那の文學上の普通の部類的價値づけが、當時に於て是認されたためでして、支那に於ては、小說なんといふものは、もとより高級のものでは無く、取分け卑しい低級のものだとされてゐた其影響のためでして、我日本に於ては早く源氏物語のやうなものが上流の人の間に玩れた歷史があつて、作り物語がさまで卑まれずに居た事があるに拘はらず、一般の社會に於ては矢張り支那の俗と同じく低級なものとして取扱れてゐたのです。（中略）かういふわけですから德川期においても明治初期に於ても、文學の藝術のといふやうな結構な稱呼を以てこれに臨む人がないのみならず、いつも輕蔑嘲侮を以てこれに臨んでゐたのであります。」

かういふ文學輕侮の時代であつたから、小說の作品を眞面目に鑑賞したり眞摯に批評したりするといふことのなかつたのは怪しむに足りない。小說を作るものは、露伴博士も云つて居られる通り式亭三馬の所謂「詩も知らず歌も勿論しらぬひのつくすたはけも戲作者の德」といふやうな戲作者的態度で作り、これを讀むものも亦、たゞ閑つぶしの娛樂的なあそびの態度で讀んで居つたに過ぎなかつた。だから創作するものの側においても、鑑賞するものの側においても、

共に何等の確乎たる藝術觀などの持ち合せてゐるわけはなかつたのである。『小說神髓』の出現は、この意味で、實にエポック・メエキングな出來事であつた。

私は『小說神髓』以後以下、學說としての文學論と、作品批評の實際との兩方面から、明治の批評史を檢攷しようと思ふ。

さて本論に入るに先ち、今一つこゝに特記して置きたいことは、故有賀長雄博士の『文學論』である。これは文學叢等第一册として明治十八年三月、(丁度『小說神髓』上卷の出版と同じ年の同じ月丸善商社書店から刊行されたものである。此書の論じてあるところは、創作の實際や作品鑑賞の實際には、恐らく何等の寄與あるところもなかつたではあらうが、在來の支那式な考へ方を更に哲學的に解釋して、その方に徹底した點で、とにかく當時にあつては注目さるべき文學論であつたに相違ない。蓋しこの書は、今日では、恐らく容易に手に入れがたい珍書の一つであらうから、讀者諸氏のために、その論旨の要點をこゝに紹介して置かうと思ふ。

まづ第一に注意すべきは論者が、その當時の歐化主義の風潮に慨するものがあつて、この書を公けにしたといふ事である。謂へらく、維新以來、我國では一切の範を歐米に仰いだので、天下は靡然としてこれに嚮ひ、そのために聖門の學教は、人の忽棄するところとなり、舊來の文明は世の蔑斥するところとなり、君臣半權の論や父子等權の說や、夫婦同權の辯などが相應じて出て、人心は、東西の文化の間に躊躇して去就に迷つてゐる。これは如何にすべきであるか。

「支那の文明にして、到底立つの地無きものなること明瞭なるがゆゑに之を蔑斥すれば卽ち可なり。その未だ明瞭ならざるに臨て、たゞ一朝一夕の事變を見て急突に決するは不可なり。支那三千年の文化果して大失策なる乎。君臣父子夫婦兄弟朋友の道、果して黄色人種の幻夢なる乎。日本舊來の文明は、西洋傳來の開化と、氷炭相容れざるもの乎

若し必ずしも兩立し難きに非ずとせば、何をか支那の文明に取り、何をか西洋の開化に採らむや。」

論者はかう云つてゐる。以てその立場を窺ふべきである。

さて論者は、上のやうな疑問を提出して、自らこれに答へてゐる。謂へらく、西洋の開化は理學に基いて開化である、しかし、國の文化は、單に理學のみに因つて極處に至らしめることは出來ない。理學上の發明は、これを善い道に用ゐることも出來るし、又、惡しき道に用ゐることも出來る。譬へば、巖石を裂て新道を開くために爆裂藥を用ゐるのは善いことであるが、ロシヤの虛無黨のやうに人を殺すために、それを用ゐるのは惡いことである。だから、理學の外に人をして善を爲し、惡を去らしめるものがなくてはならない。「國の文明をして極處に到らしめむと欲せば、理學上の發明の外に、天下を經綸して互に惡を去り、善をなさしむる所以の者無かるべからず、概して謂へば綱紀これなり」と。

かやうに考へて、次に論者は、西洋において綱紀を正さむがために用ゐる法の正當でないことを論じてゐる。蓋し、西洋文化の基礎となつてゐる理學の神髓は「形象劃定せるものを分解するにありといへども、綱紀はこの分解に因つて正すに由無きもの」であるからである。

それならば、何によつて綱紀を正すことが出來るか。

論者はかく論を轉じて謂へらく、それは保合の法によること以外に不可能であると。保合とは、論者に從へば「シンセンス」の譯で、在來總合と譯されてゐるものを改譯したものだといふ。

「保合は分解（アナリシス）に反して現に定形ある人性を取つて剖析せず、將來應に有るべきの趨向を察して構綴するの法これなり應有（ポシブル）の趨向とは、未だ必ずしも定形を得ずと雖も、後に劃定せる形象を得て外に表れむと難きに非ざる趨向を云ふ。是の如き趨向は、其類其數に定限なきものなり。其中に就て善く調和會通して人世の規矩と爲るに足るもの丶みを採擇し構綴して、結紀整頓せる一體の規矩と爲すこと、之を保合に因て綱紀を正すと謂ふ」

論者はかう云つてゐる。そして例へば祖先を敬するといふことや、君に忠なりといふことや、父に孝なりといふことや、夫に貞なりといふことや、兄に悌なりといふことや、友に信なりといふことや、又、不敬、不忠、不孝、不悌、不信なりといふことなど、皆人類應有の趣向である。その中で、忠孝、貞、悌、信を採擇して保合し、不忠、不孝、不悌不信を排除するといふのは支那の綱紀の建立法である。この意味で支那三千年の文化は最も重大視さるべきものであると論者は論じてゐる。そして更に次のやうに論じてゐる。

「かく保合する人之を聖人といふ。保合して得たる所、之を文といふ。而して其保合するに臨んでは、人類に比すれば高貴遠大なる者、卽ち天を以て模範と爲すこと、自然の勢なり。「觀二乎天文一以察二時變一觀二乎人文一以化二成天下一」とは豈この謂ならざるを得んや。文は文采なり、文章なり、和語を以ていへば「あや」なり。君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友一一其趣を異にしながら、常に調和して家を成し、社を成し、鄕をなし、國を成すの俗、粲然として觀るべきものあること、恰も日月星辰寒暑陰陽一一其趣を異にしながら、曾て錯列を紊さず、大變を誤らざるの美なるが如くなるを云ふなり。其形容を言へば文なり。其離れがたく、違ひがたきを言へば道なり。文と道と同體異觀のみ。さればこそ堯の治道を稱して「煥乎其有二文章一」と曰ひ、文王沒して道尙ほ亡びざることを思ひて「天之未レ喪二斯文一也。匡人其如レ予何一」と曰へり。文明といふも、其字義を以て推すときは、人文著明といふことに外ならざるなり。吳徵曲く「文明者、文采著明、在レ人五典之敍、五禮之秩、粲然有レ文、而各安二其所一」と、文の意義深しと云ふべし。

これによつても、論者がいかに文といふものを解してゐるかを推し測ることが出來る。尙、論者は、更に進んで保合の美であること、保合が、美であるが故に大であること、保合が大であるが故に誠であること、保合が誠であるが故に利であることを細說した後に人の性命は、大和を文章に現すに在ることを論じ、更に、結論を下して、論者が、この書の冒頭で述べた疑問に自分答へてゐる。

曰く、支那三千年の文化、一大失策に非ず。其能く大國を長久に維持することを得る所以の者、全く文章の保合に因ると。曰く君臣父子夫婦の道、黄色人種の妄夢に非ず。自由平權の説、白皙人種の無文なるに因ると。曰く日本舊來の文明、西洋傳來の開化と氷炭相容れざる者に非ず、斯道の大なる、却て理學を取て其文采の著明を加へむとす。是を以て東西接合の地たる日本と吉凶を倶にせんとする者は、其漢魏に惰唐に、宋に、明に得たる文章美を繼ぎ、理學の精を西洋に受けて兩者を保合し、以て此に古今無比、東西未曾有の一大隆盛の基を開かざるべからずと。保合の學之を文學と曰ふ。」

これによつて、有賀博士の文學論の如何なるものであるかを知り得るであらう。

私は今、この『文學論』を文學論として批評しようとは思はない。「保合の學を文學といふ」といふその文學の概念が今日の吾々のいふ文學とは餘りに異つてゐるからである。

しかし、この『文學論』は、文化史的に見て可なりに興味のあるものであることは爭はれない。即ち一つは、その當時の歐化主義思潮に對する反逆である點に於て、一つは支那哲學を西洋思想に對立して、その價値を力説した點に於て一つは支那思想を根抵としてこれに西洋の理學を調和させようとした點に於て、そして最後には在來の儒教式文學觀を最も徹底させてこれに哲學の衣を着せた點に於て、――これらの諸點に於て、今日から見て、有賀博士のこの『文學論』は、とにかく相當に興味あるものゝ一つであることは爭はれない。(未完)

明治初期の『東京日日』に現れた文藝記事について（承前）

松原至大

六年二月六日のには

此度浪花より俳優若女形中村歌六、同立役中村時藏の二名上りて、村山座へ出勤せりと。右歌六なる者は二十六歳、容貌岩井半四郎に亞ぐと云へり。

とある。八日のには井上文雄翁の門人松登三草子と云ふ人が、師の道をついで、二月二十三日に坂本町一丁目の井上方で歌會を催すと云ふことが載せてある。十七日のには

十二日姉小路家令跡見攝齋の娘花蹊なる者、皇太后御前へ親しく召され、書畫等を御覽ありて、種々の恩賜を被れりと。又同日間宮八十子も等しく召され、詠歌等を尊覽に呈せしと也。實に婦女子の冥加と云ふべし。此日花蹊の皇后へ奉りし歌。

春の來て谷の鶯今日よりは雲井に近く名のり初めけり

とある。八十子は明治五年二月に他界した水戸の國學者間宮永好氏の夫人で、『松のしづえ』、『和歌玉石集』などの著がある。

續いて二月十九日の紙上には、新しく許可された芝居が、次ぎのやうに出てゐる。

第五大區十一小區猿若町一丁目九番地借　河原崎權之助

右第二大區芝新堀町へ一座許可

第三大區四小區富士見町一丁目四番地借　長岡仁兵衛
第五大區十一小區猿若町一丁目二十五番地借　市川團之助後家みね
第三大區五小區牛込津久土町七番地借　江原利根吉
同所白銀町九番地借　水野孫兵衛
右四名合併にて第三大區四ッ谷荒木町へ一座許可
第四大區四小區本郷春木町三丁目二番地主　奥田富藏
右第四大區本郷春木町二丁目へ一座許可
第五大區十一小區猿若町一丁目六番地借　澤村田之助
第六大區十五小區本所小梅村四十二番地　羽賀茂七
右二名合併にて第六大區深川富岡門前仲町へ一座許可

右の中で新堀町のは河原崎座と云つて、權之助が六代目權之助の遺志をついで再興したものである。濱松町の酒屋で西神常七と云ふ人が金をだした。春木町のは本郷座の前身春木座であることは云ふをまたないが、後の二つは何んと云つたのか、確かなことがわからない。田村成義氏の『續々歌舞伎年代記』を見たが、どうもはつきりしてゐない。深川のは薩摩座の櫓をもつて願ひ出て、後に澤村座と云つたのではないかと思ふ。それならば田之助の養子百之助が座元で澤村一門で八月四日から開場されたものである。大方の御教示にあづかりたいと思ふ。餘事ながら、右の記事に記された第何區大區何小區と云ふ區制も、私たちには眼新しい。

二月二十一日のには、坂本町一丁目の井上文雄翁の宅で開かれる歌會のことがまた出てゐる。二月二十五日からは、日報會社の本局が、淺草御門外瓦町十六番地に移つて、社務が擴張された。岸田吟香、高畠藍泉の二氏が入社したのはその時分である。小野秀雄氏の『日本新聞發達史』によると、吟香氏が入社してから、急に編輯がとゝのつて賣れ高が

増した。その後大略百號毎に千枚づゝ増加して、七年の五月に銀座二丁目の新築に移つた時は八千枚以上になつてゐたとある。

三月二日の紙面からは普通の五號活字が使はれて、兩面刷りとなつた。定價も百四十文から、一錢六厘に改められてゐる。

三月四日のには、來る十六日に東兩國の中村屋で高林二峰氏の書畫會が、二峰氏の息子の高林五峰氏が會主となつて開かれることが廣告されてゐる。『都下の諸先生及び清期人盡く揮毫す』とある。高林二峰は書家として聞えた人で、名は信好、他界したのは明治三十年ださうである。五峰氏はどこかに居られるのであらう。それから村田先生、山田先生同譯『西洋家作雛形』全四册の廣告がある。發兌所は日本橋通二丁目の山城屋佐兵衛で、次ぎのやうに説明してある。

此書原本は昨春祝融氏の爲に、府下建築の製を一變せんとするの日、英人某村田先生へ贈れる書にして、造家の方法は勿論、住居人の健康及び經濟の仕方より諸職人の心得に至るまで反覆叮嚀、加ふるに細圖を以つてし、田夫野人も亦解し易からしむ。特に匠家の模範となし、新撰家作に便ずるのみならず。一家を有ちて家族の安全を思ふ者は貴賤を問はず、毎戸缺くべからざるものか。諸君子幸に此書を見て、健康永壽を謀り給へ。

三月七日の廣告欄には

發會　四月一日

當日諸君子御來駕奉冀候

於東兩國中村樓上

會主　永海、永湖　永郁

と云ふのがある。云ふまでもなく佐竹畫伯一門の畫會であるが、其簡單な案内文は一門の人たちが如何に有名であつたか

ゝわかる。私が記すまでもなく、永海は會津の人、文晁の高弟で、雲筆をもつて彦根侯に仕ふ。梅九、愛雪、問村、成堂と號して、明治七年十二月七十二歳で他界した。上野山内の覺如院の杉戸に揮毫した時、御馳走の酒に醉つて、まだ乾かない杉戸に大きな足跡をつけたので、院主が眞赤になつて怒ると、翁は平氣で杉戸を水で洗つて補筆したと云ふ逸話が殘つてゐる。永湖は永海翁の養嗣子で、最初は沖一蛾について學んで、後に永海翁の門に入つた。今の永陸氏の養父である。南北を併せた畫法に通じて、東京御所の御用品や、秋田市寺町にある覺本寺の涅槃像、千葉縣松戸町の松戸神社にある倭媛の大額などは、翁の有名な作である。他界したのは明治四十一年七月で、七十五歳であつた。永邨翁は福島の人、馬弓碧潭、蒲生羅漢の門から永海翁の門に入つて、山水をよくした。大震災の前年に八十歳で亡くなつた。

三月十八日の投書欄には東京西阪人と云ふ人の『廢漢字論』がのつてゐる。趣旨は『煩勞無益の漢字を擱き、國字確定の文典を以て、教授せば、力を省いて功多く、且國内の言語も一齊して參差なることなく、頑愚文旨の徒も朝旨を奉載することを得て、眞成開化の國とならんこと豈樂しからずや。』と云ふのである。記者はそれを評して

某氏の論今日紛々辯論あるところ也。今漢字を廢す、須く漢語も廢すべきか。漢字に原胎するの字を假借す。既に假て我有とす漢語亦この際限あるべし。この論の如きも書するに假名字を以てして、その足らざる所にして足る所を證せば、益々妙なるべし敢て問ふ。

と云つてゐる。

三月二十一日の廣告欄には、作樂戸先生譯述の圖入『西洋英傑傳』全六册、發行所は馬喰町二丁目英蘭堂島村利助と云ふのがある。

四月二日には、無盡藏渡邊先生譯、諸名家狂畫入りと云ふ『通俗伊蘇普物語』全四册、同原書英文二册があつて、廣告文にかう記してある。

この通俗伊蘇普物語はギリシャの賢人イソップ先生の論話譬言を、婦幼などにもわかり易きやう至つて面白く、俗文にて書き取られたる冊子にして、その原書は歐羅巴諸州の今日に至れる開化を促 たる教訓の一書なり。冀くば諸君子一たびこの書を讀み西洋智賢の話調を識り、わが鄙陋の話體を改め、子弟を薫陶したまはゞ、後日成器の真質を幼時に長じ給ふべしと。日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛　敬白。

無盡藏渡邊先生と云ふのはどんな人なのか、寡聞の私にはわからなかつた。渡邊國武氏のことではなからうかと思つてしらべてみたが、ちがふやうである。帝國圖書館には、明治九年十月二十日に上梓された阿部弘國譯の『漢譯伊蘇普物語』（青山崇山堂發行、定價二十五錢）と云ふのはあるが、この本はない。

イソップ物語が初めてわが國に紹介されたのは今から二百六十六年前、萬治二年の板で繪入りの假名草紙『伊曾保物語』であると云はれてゐる。上卷二十條、中卷四十條、下卷三十四條からなり、作者はわかつてゐない。これがわが國に輸入された西洋文學の最初の譯本だとされてゐる。明治になつてから間もなく中村敬宇氏の譯が上梓されたと云ふことであるから、この無盡藏先生の著はそれにつぐものではなからうかと思ふ。内田魯庵氏にでも伺ひたいと思ふ。

四月四日のには、柴田昌吉、子安峻の二氏共譯になる英國法律博士阿日耳維氏の附音挿圖『英和字彙』全一册（定價金十五圓、發行所南鍋町一丁目月將堂大岩清助、日本橋通二丁目崇山房小林新兵衛）がある。原書は英國の正音を附し名物圖三百有餘を載せたものであるが、更にその語數と圖を増し、意義の解し難いのには文例を集めてその用法を示し語數大略五萬五千、葉數千五百、圖五百、從來世に行はるゝ英和字書の比にあらずとしてある。子安峻氏は舊幕時代に横濱で、輸入されてくる外國圖書の檢閲官をしてゐた人で、明治三年には横濱毎日新聞を創刊した。これがわが國で最初の日刊新聞である。その廣告にならんで、三十間堀二丁目六の越前屋德根吉介と云ふのが、飜譯書類の貸本を始めることが載つてゐる。

四月十四日のには、谷文中氏の名で、文晁翁の追善書畫小集を五月二十六日に、東兩國の中村樓で催すとある。文中氏は谷家の三代目で、明治九年十一月二十八日に五十四で他界した。文晁翁が亡くなつたのは天保十二年の十二月であるが、文晁の衣鉢をうけた養子の文一氏は文政元年三月に三十二で、養父よりも早く他界してゐる。その跡をついだのは、文晁翁の實子で文二氏と云ひ、文中氏はその子である。

四月十六日のには、本町三丁目瑞穂屋卯三郎發行の『平文字書』は、五月一日から十二圓に値上げする廣告がある。同じく十九日には日本橋通二丁目の山城屋から、箕作麟祥氏の『英國新史』の下帙が出たことが載つてゐる。四月二十九日のには、投書の欄の愛國志士識として

頃日歐洲人の一話を得たり。曰く余日本に來りて在留する茲に年あり。往々和文を學び、略その一班を解し、今日その新聞紙を閲するに、日本人の奇を好み、本を忘る、その輕薄なること夥し。就中堂々たる神州なりとして、この國を尊びたる者も、今日その國教をして益明且大ならしめんことに注意せずして、動もすればわが耶蘇教を信奉し、これを國教となさんと欲するものあり。或は言靈の國と自稱せしものも、その言語をして一定の法を立てずして、却つてわが文典に拘泥して、歐洲の文字を以つて其まゝ國用に供せんとして、復洋書を日本の國語に譯して、讀本を制するの意あらざるものあり（後略）

と論じてある。一歐洲人にかこつけたやうなところもあるが、とにかく當時の西洋かぶれの樣が想見されるであらう。

四月三十日のには、依田百川翁が次ぎのやうに謂ふ所の賣文業の廣告を出してゐる。

新聞告示その外議論の類、思慮の欲する處を文章に綴らんとせば、來訪せられよ。和文漢文に限らず、望みに隨ふべし。

當時の翁の住所は八丁堀北島町一丁目四十四番地で、年を數へてゐると、四十一歳であつた。

五月五日のには、あの皇居炎上の記事が載つてゐる。四月午前一時のことで、紅葉山局の女官下婢部屋の前にあつた柴小屋の中の灰が原因となつて、皇城一圓が炎燒したのであつた。五月七日のには、淺草御藏前南元町二十五番地の梅

若六郎氏宅で十一日から勸進能を催すことが廣告してある。この梅若六郎氏は、明治の能樂界の大恩人である。先代六郎の養子で、名を氏實と云ひ、六郎を名乘つて後に實と云つた。王政維新前は西丸御奧詰であつたが、維新後一門が離散して、自分は駿河に隱退してゐたが、苦心して再擧をはかり、明治四年になつて今の青山子爵家から舞臺を讓りうけて、藏前に居を定め、その年の十一月二十六日に始めて舞臺開きをした。その後天覽にあづかり、今日は盛名をもりかへしたのであつた。他界したのは明治四十二年、八十二歳であつた。

五月十二日のには、次ぎの二書の廣告がある。

和譯英語聯珠（右書はウエブストル氏大字書より、語數大凡六萬餘言を譯出し、原語譯字に至るまで本邦の假名を以つて悉く其音訓を附し、實に學者の進歩を扶くる要書なれば、此學を勉强する諸君座右に備へて、其便なること果して知るべし。蠣殼町三丁目　活字鑄造捌立所　精文書館）

近代月表（此書は弘化甲辰外國通好の端を開きし年に起り、慶應丁卯徳川氏政權を返上せし年に至るまで、變革を通觀するために輯錄したる者にして、時勢を知らんと欲する者一日も座右を離すべからざる書なり。横山町三丁目　太田金右衞門）

二書共に編者の名が記してない。

五月十五日の社會部欄に

淺草金龍山内の寫眞師北庭つくば其術の妙なる能く人の知るところ、今般闇夜に寫すべき器械を取り寄せ、之を以つて其術をなすに、白日に寫せるものと毫も讓れるところなし。出寫來賓其意の如くなり。蓋し風雨を論ぜずと。實に一の發明と云ふべきなり。

とある。十六日のには、梅若の勸進能が道具に手間どつた爲め、二十一日からに延期されたとある。十八日のには、『雨窓紀門』全二冊の廣告がある。

この書は去る戊辰北海戰鬪の始終を詳明に記載せし實錄にして、その形情目前に在る如し。實に後來編史の料ともなるべき書な

り。淺草茅町二丁目須原屋伊八發兌。

また『評論新聞』と云ふのが廣告されたのもこの日のことである。『東京日日新聞は江湖上の事實を早く衆人に報ずる處にして、世に益あるや大なり、我社の新聞は方今の事情を評論する處に　…』とある。これは一つの政治雜誌とも云ふべきもので、その年の一月に發行されてゐた。征韓論を勇敢に主張してゐたのを見れば、西郷系の人たちによつて出されてゐたことが知れる。

五月十九日のには、文中氏の名で文晁追福書畫會の廣告がまた出てゐる。同じく二十七日には、第五大區九小區に小學校を建築するについて、猿若町の俳優たちが次ぎの通りに寄附したとある。

十四圓宛（權之助、芝翫、菊五郎、彦三郎　五圓宛、訥升、三津五郎、又三郎）三圓宛（半四郎、門之助）二圓五十錢（家橘）

二圓（權之助門弟中）

五月三十一日のには麴町九丁目常仙寺内の松見斧次郎と云ふ人が、ドイツ書類の飜譯に應ずるとある。

六月八日には『公聞追加』として、最近歸朝した官費留學生某氏の學業試驗を行つたところ成績が頗る惡く、また官費留學の某氏と私費留學の某三氏からは、學業が未熟でとても試驗に應じられないとの願書が出たと云ふことが、文部省から正院へ屆けられたと記されてゐる。その氏名も明かに載せられてゐるが、皆まだ現存してゐる人たちのやうに思はれるので、こゝに記すことは遠慮する。

報告欄には小林病翁と云ふ人の編んだ『小學國史』全十二冊（日本橋川瀨石町村上勘兵衞發兌）がある。六月十二日には、田中耕造譯述、青木先孝校訂『傘破崙政略』全一冊（日本橋通一丁目北畠茂兵衞）がある。田中耕造氏は昌平校を出て、福地、中江の諸氏にフランス語を學んだ人。警視廳に入つて明治十二年には川路大警視といつしよに渡佛した。十五年には府會議員となり、自由新聞にも關係があつて、他界したのは十六年十一月で、年は僅か三十三であつた。出版局と云ふものが政府に設けられた恩人とされてゐる。それから杉本孝輔藏板の『英和通語』全一冊（寶弘所日本橋通

二丁目小林新兵衛）が次ぎの通りに廣告されてゐる。

この書はロンドン、パーテルスの著述せるモーデン・コンベルエションと云ふ書の中なる佛語字を悉く除き、更に和語を加へしものにして、苟も通辯に意を用ゐる者の珍重すべき書なり。

また村上豐祖と云ふ人が會主となつて、今戸八幡境内花園で十八日に書畫合作小集（席費一朱、呈粗茗菓）のあることが載せてある。

六月十七日には、西京土佐家、有職衣紋古實家と云ふ肩書をつけた土佐源好と云ふ人が、淺草寺中に新店を開いて『かの土佐の又平にならひて、大津繪その外くさぐさ畫を賣るとあり、また『土佐家秘藏の畫卷物ちんかし』としてある。それに列んで、繪入讀本『通俗和聖東傳』全部四十卷、毎月二册宛出板となる。長沼熊太郎の飜譯で、爲永春水の和解である。

この書は亞米壘加の大祖ときこえし和聖東が全傳にして、いまだ少年なりし頃より才智發明の物語、又成長に及んでは身を難澁の中に擲ち、屢々苦中の苦を喫して、終に亞米壘加國に居て共和政事の基本を開きし彼が一世の美談をば、一事も漏らさず飜譯せしを、爲永氏が例の筆にて普通の繪入讀本振りの體さいに和解しつ。婦幼の目にも讀み易からしむ。看官今此第一卷より結局の卷に至るまで、間もなく時なく出版なすを。宜しく愛翫ならんことを乞ふ。神田須田町　梅巖堂、鍛冶町　中外堂。

六月二十七日のには、協力舍藏板『校正王化一覽』（日本橋通一丁目須原屋茂兵衛）と、深澤菱譚著並書の『文明開化往來』初編全二卷（本石町二丁目角、椀屋喜兵衛）の廣告がある。菱譚は卷菱湖の養子となつた人で、明治十九年まで生きてゐた。それから兩國米澤町二丁目角佃煮見世池田家で、飜譯書を安く貸すと云ふのがある。

七月三日のには、星子長著として、須田町梅巖堂の『各國群雄傳』と云ふ西洋の英雄傳が廣告されゐる。同じく四日のには、假名垣魯文氏の繪入首書『世界都路』の後四卷が、椀屋喜兵衛から近刊されると云ふ豫告がある。深澤菱譚先生書としてある。魯文氏のことは知つてゐる人が多いから略すが、この時は四十五歳であつた。（未完）

明治前期の國語國文界の見取圖

窪　田　空　穗

明治前期、初年から二十二三年、五六年といふ頃までの國語界、國文界のことを調べて見る上で、其時代を親しく見、又は近い事として聞いてゐられる先輩からお話を伺ひたいと思つて、第一に福井久藏氏にその事を請つた。氏は大部分は聞いた事であるがと斷られて、調べて見るべき題目を、年代順にして話して下さつた。いはゞ見取圖を示して下さつたのだ。

これはそのまゝに紹介すべき性質のものではないが、私にとつてはかなり興味のあるお話だつたといふことをたのみとして、聞書のまゝを紹介することゝする。

明治の前半期の國文學界を調べて見る上では、暫く和歌と、國語國文の方とは別にした方が便利である。この二つはその發達の上でやゝ趣を異にしてゐるからである。

先づ和歌の方を觀ると、大體は、初年からの皇室の庇護にはじまり、二十五年、落合直文が淺香社を設けて新しい歌の運動を始めたまでを一期とするべきである。

第一には、教部省の設けられたことである。これは文部省と相並んだもので、後の神道局とも見るべきものである。職員の名稱からいつても、宣教博士、宣教小博士などといつてゐる。職員になつたものは、當時の職員錄を見るとわ

かるが、いづれも國學者である。維新の精神がさうした形によつて殘されたので、かの神祇伯を置かれたのと同じ意味であらう。この教部省の設けられたのは明治二年である。そして十年に廢止となつた。

同じ明治二年に、歌道御用掛といふ新しい職が出來た。これは宮中に於ける和歌に關する御用を務める職である。それに任ぜられたのは、いはゆる七卿の一人である三條西季知卿であつた。卿は當時は侍從職であつた。これはまさしく御歌所の前身であるが、當時は單に宮中だけのもので、又侍從職の兼職といふ程度の手輕なものであつた。これは高崎正風氏の談である。

新年の御歌會始に、民間からの詠進を許すやうになつたのは、明治五年である。

御歌所が今のやうに獨立して宮内省へ屬したものとなつたのは、明治十年である。主任（當昨はさう呼んだ）は、同じ季知卿で、卿が明治十四年に薨じたので、高崎正風氏が代つたのである。正風氏は當時は侍從番長であつた。

ついでに、季知卿には惠仁壽の蔭と題した歌集がある。正風氏の進講筆記の出來たのは明治十六年である。

次ぎに、この期にもかなり多くの歌集が出てゐる。そして年代によつておのづから特色がある。

明治元年から二年へかけて、勤王家の詩歌集が出てゐる。六七册ある。

明治十年前後まで、明教に關した歌の選集が多く出てゐる。七八種までである。明治十年頃から、歌の題として開化新題が詠まれ出した。これは從來はなかつたもので、開化の代となつてあらはれて來たものを題として詠む謂ひである。汽車、電車、軍艦といつた類である。汽乘車を歌語に譯して「むしけ車」といつたなどは有名なもので、後々までもよく話柄とされた。この類の歌を集めたものに新題歌集といふのがある。

新題歌集が出來る一方には、詠史歌集が盛んに出てゐる。歴史上の人物を題として詠んだ歌の集である。これが六七種までである。

一方には又、さうした傾向から離れて、明治三十六歌仙集といふ、先縱を追つた歌集が出てゐる。これは正續とある。同じく明治七年である。

この三十六歌仙集の系統のもので、明治十七年に出た東京十四大家集といふものがある。

前にいつた教部省の廢止となつた明治十年は、和歌の上でも、傾向の相反した多くの歌集の出た年だといふ點で注意される。

佐々木弘綱氏によつて千代田歌集の編まれたのは明治二十三年である。

明治二十五年、落合直文氏によつて淺香社の設けられてから、歌界は面目を變へ出して來た。歌界としてはここに一線を引いて、あとは明治の後期とするべきであらう。

更に、當時の代表的な歌人について觀ると、共通した一つの事柄がある。それは歌人にして舊公卿大名などの庇護を蒙つたものはいづれも社會的勢力を得たが、然らざるものは實力を持つてゐてもその割には聞えずに終つてゐるといふことである。同時に又、それら歌人を庇護した公卿大名は、自身でも歌人であつて、その數が割合に多かつたといふことである。

今その代表的なものいふと、歌人の渡忠秋(わたのたゞあき)は三條西季知卿の庇護を、鈴木重胤は舊伊豫宇和島の藩主伊達宗城と、舊肥前平戸の藩主松浦詮との庇護を受けてゐる。重胤は佐渡奉行を勤めてゐたので、それでなくても相應の地位を占めてゐたとはいへる。近藤芳樹は毛利家の庇護を、八田知紀は島津家の庇護を受けてゐる。知紀は島津家だけではなく、九州一圓の大名の庇護も受けてゐた。言ひかへると九州は和歌の上では悉く八田門下だつたのである。久しく御歌所長を勤めた高崎正風氏も、この八田門下の一人である。その點から觀ると、當時の御歌所の歌人も、政治上に於ける薩長の勢力によつて庇護されたものと云へよう。

ついでに、舊大名に立派な歌集を殘してゐるものの多いことも注意される。

次ぎに、この、權家の庇護を受けずに獨立してゐて、その爲に割合に聞えずに終つた歌人をいふと、大阪に敷田年治がある。伊勢に生川正香がゐる。この人は國語學の造詣も深かつた。山口に近藤淸がゐる。この人は地方史に精通もしてゐた。

以上は和歌の方面であるが、轉じて國語國文學といふ方面を觀ると、この方面は歐化主義といふ大勢のもとに壓倒されて、大體としていふと渾沌とした、幼稚な狀態にとどまつてゐた。明治二十六年、上田萬年氏がドイツから歸つて、芳賀矢一氏らと協力して新學風を起したことが、初めてその方面に礎を据ゑたことにならう。

明治の前期の歐化主義が何んなものであつたかといふことを語る一つの好い例を聞いてゐる。中村敬宇氏が明治四五年、五六年の頃西國立志篇を譯した時である。人がその譯書と漢籍との交換を申込んだ。それは立志篇二部の代りとして淵鑑類函に佩文韻府を添へようといふのである。如何に新しい譯書が貴く見えたことであらう。今から聞くと不思議な感がするが、その頃はちやうど流行として婦人の斷髮を法令で禁じた頃だといふので、當時としてはむしろ當然なことだつたかも知れぬ。大勢の思はれることである。

今、重立つた事件を年代順にいふと、前島密氏が漢字廢止の建議を文部省にしたのは、明治二年五月である。

明治五年、文部省では、漢字制限の意味で、三千字字引といふものを拵へてゐる。時の文部卿は大木喬任であつた。

その年、田中芽簾氏が文法の本を拵へた。これは文法書としては初めてのものである。

それに續いて、一方の企として、大槻如電、小澤圭治郎、久保吉人の三氏が協力して文法書を拵へた。活語指掌、語彙別記がそれである。

同じ明治五年に、大學令によつて大學が出來た。

明治十一年に、小中村清矩氏が大學の講師となつた。

明治十二年に、古事類苑が出來た。同じ十二年に、東京中學校が出來た。本郷壹岐坂の舊榊原邸である。正則と變則とに分たれてゐて、正則は英語を學ぶもの、變則は學ばないものであつた。澤柳政太郎氏、上田萬年氏らはその中學の生徒である。上田氏はその中學に二年ほどゐて直ちに大學へ移つたやうに聞いてゐる。時代を語つてゐるものである。

明治十五年には注意すべき事が二つある。その一つは、皇典講究所が新たに設けられたことである。その設けられるに至つたのは有栖川宮熾仁親王の令旨によつてである。皇室の思召で、さういふ性質のものが必要とされたのであらう。

今一つは、大學に新たに古典講習科が設けられたことである。時の大學總理は加藤弘之氏で、古典科の教授は小中村清矩講師は久米幹文氏などであつた。此古典科は、ひとり國文はかりではなく、漢文科も並べ置かれたものである。

この古典科は、二回だけ學生募集をした。第一回は新設された十五年で、卒業は十九年、第二回は十九年募集、二十三年卒業であつた。

第一回の卒業生は、荻野由之、池邊義象、關根正直、今泉定介、市村讃二などの諸氏である。赤堀又次郎氏もさうかと思ふ。落合直文氏は、中途で兵役に盡すことになつたので卒業はしなかつた。

入學當時のことについて荻野由之氏から聞いた話がある。當時の國文學界を窺はせるものである。荻野氏は入學以前既に重野安繹と共に私塾を開いて學生を教へてゐた人であるが、入學試驗には徒然草を讀まされると聞いて慌てた。氏の鄕里の佐渡には當時徒然草がなかつたので、書生時代には見たことさへなかつたのである。本は搜しもとめたが、讀めないので、小中村清矩氏のもとに習ひに行つた。ところが小中村氏の講義は精細に過ぎて、當時の氏にはやはりわからず何もならなかつたといふのである。

この古典講習科の出身者が後の國文學界の中心となつたのである。

ついでは、第二回の卒業生では、佐々木信綱氏が思ひ出される。

明治十九年、第一回の古典講習科學生の世に出た年に、大八洲學會が新たに設けられた。場所は麴町區飯田町で、講師は久米幹文、本居豐穎、小杉榲村などの諸氏である。

この十九年には、文部大臣に森有禮氏がなつた。この大臣は二十三まで續いた。新大臣は新たに兵式體操を課したが國語は中學でもまだ課さなかつた。それに當時は國語とは呼ばず和文といつてゐた。これが國語となり、中學にも課されたのは後のことである。

明治二十年には、英人のチャンバーレン氏が文部省の囑托を受けて、小文典を編んだ。この文典編纂は、明治十二年に福羽美靜氏が學士會院に建議して可決されたことで、これはその結果である。小文典は百二三十頁ほどのものである。チャンバーレン氏は今もスヰスに健在だとか聞く。

この明治二十年頃が歐化主義の頂上であつた。政治上では條約改正、領事裁判撤廢が高唱され、時の外務大臣井上馨氏が、その方便として歐風の舞踏會が鹿鳴館で、行つた時代である。反動は際やかに來て、今度は國家主義が高唱される時代となつた。

明治二十三年、井上毅氏が文部大臣となつた。國家主義を標榜して、國語古典の研究をも奬勵した。

國學院の出來たのはこの年である。

落合、小中村、萩野など、少壯の國學者の優遇され出したのも此頃からである。萩野氏は歴史に、小中村氏は制度に、落合は國文にと、おのおの特色を發揮して行つた。

この三氏が協力して、日本文學全書を博文館から刊行し、國文研究の流布を計つたのも此年である。佐々木弘綱、信

綱氏の、父子協力の歌學全書の刊行も同じ年で、これはその年末から始まつたと思ふ。

師範學校の改革のあつたのも此年である。從來高等師範學校は全國に六校あつた。東京、大阪、熊本、廣島、新潟、仙臺である。それを東京の一校だけにして、五校は廢した。東京の校長は久保田讓氏であつた。後、小林圭治郎氏となつた。續いて、海外留學から歸つた新進の伊澤修二氏となつた。大和田建樹氏など、當時の高等師範の教師であつた。

ついでに、日本及日本人の前身である三宅雪嶺氏の『日本人』の創刊されたのは、この反動期である。また德富蘇峰氏の『國民之友』の創刊もそれと遠くない頃であつたと思ふ。

明治二十六年、言語學研究の爲ドイツへ留學してゐた上田萬年氏が歸朝した。氏は當時の新智識であると共に、一方では時の大學總長であつた外山正一氏から信任されてゐた。歸朝されると共に、芳賀矢一氏らと協力して、學風の改革を企てた。

それは高等師範の教員養成所に於て第一に試みられた。場所は現在獨逸協會となつてゐる所である。講師と課目は、上田萬年氏が言語學、芳賀矢一氏が國文學史、赤堀又次郎氏が語學史、菊地壽人氏が文法、和田萬吉氏が修辭學であつた。自分もその講義を聽いた一人であるが、當時としては學風が極めて清新で、國學院とは甚しく趣を異にしたものであつた。この上田氏の提唱が、國文學界へ一線を引き、時代を劃したものであらうと思ふ。

「風流佛」その他とその時代

千葉龜雄

明治廿一二年から廿五六年の記憶を辿つて見る。この頃は、少年としての自分の生活にも、隨分目まぐろしい變化を見た頃だ。田舍から仙臺へ出て行つて、新聞社の活版小僧になつて、厄介になつて居た家から、また外の家の厄介になり、そこで一寸ばかり小學校へ出して貰つた時代だ。が、境遇はどう變つても、何か讀んで見たいと云ふ慾望はいつも忘れなかつた。その頃、自分が讀み得た出版物はどんなものであつたか。「山田長政動興記」、「義經再興記」など云うのが、四六版の馬糞表紙で、二三十錢の定價だつたろう。それは自分が厄介になつた家に下宿して居た二師團の曹長をして居る人の藏書だつた。それから、その頃非常に讀まれた「慷慨家列傳」の假どち製の三册本もあつたまだ。田舍に居る中に、「慘風悲雨世路日記」を讀んだ。これも一世を風靡したとも云へるような變な戀愛小說であつた。今から見れば、恐ろしく幼稚な、たわいの無いものだが、センチメンタルな漢文直譯體が、ひどく當時の青年を感傷さしたものだ。小學校の敎師と女生徒の戀を描いたものだ。それから、ジュウヌ・ベルヌの「月世界旅行」や、またたしか「五十日間海底旅行」とか飜譯小說なども讀んだ。それから、「揚牙兒奇談」と云つた面白い探偵冒險小說を讀んだ。これはもちろん飜譯だが、今に誰の原著かわからない。それから、井上勤譯、「アラビヤ夜話」が、博文館から十二錢で出たのを、友達から借りて讀んだ興味は、今でも忘れられない。けれども、自分はその頃の、日本の正統文壇がどんな風に

なつて居たか、そんな事は少しもわからなかつた。第一、そうしたものに觸れる機會が無かつた。

ところがその活版小僧の一少年が、この時代文壇で、始めて知つた作家と作物が、實に幸田露伴であつたのだ。と、云ふのは、自分が親戚筋であるために、活版小僧として世話になつて居たその家に、もう一人の文學好きの兵隊さんが居た。兵隊さんと云つても、たしか曹長か何かだつたろう。語學が達者な、文學に相當觀賞眼のある三十前後の人だつた。この人が、「都の花」をとつて居た外に、この頃の、一流の作物は大てい讀んで居た。美妙、紅葉などの名がよく出たが、その中で何と云つて聞かして呉れたかは忘れて了つたが、その人は、幸田露伴と云う作家のものだけは馬鹿に推讃した。いや、紅葉の「色懺悔」の一章に、朱か何かで點線をひいて、文章はこう作らにやならんと褒めちぎつて居たこともあつたが、それよりも、露伴と云う作家の超脫思想は、殆んど現代に獨歩するものだと丁寧に解說して呉れた。そして、まあこれを見本へと、「露團々」を貸して呉れた。讀んでは見た。何か獲たものはあつたらしい氣が、それも今は覺えて居ない。が、涙香の飜譯小說を、唯一な讀み物として讀んで居た少年には、これは妙なものだと思つたような記憶がある。何か魂を別な世界へ惹いて行かれたようなすがすがしい、淨明な刺戟を與へられたことは記憶する。それから讀んだのが、三錢か四錢で古本屋で買つた柳浪の「殘菊」と、紅葉の「二人比丘尼色懺悔」であつたらしい。紅葉の文章には、たしかに敬服したが、それでも露伴の、すつきりした、空靈な氣分から見ては、俗なものだと、解らず乍らもそれでは滿たされなかつた。

「露團々」を讀み始めとして、それから「一口劍」「風流佛」を讀んだ。またその曹長さんから、一葉末集」を借りて讀んだ。それには「對髑髏」だの村上喜劍を書いた何とか云うのだの、四五篇が集められて居たように思う。後で解つた話だが、その頃の批評家には、露伴は可なり苦手だつたらしい。今から見ると、何でもない理想小說なのだが、露伴一流の博學、殊に佛經の知識を振りまわしたあの獨特な作風と、妙に悟りすました人生哲學觀が、充分に嚙みこなせな

くて、幽玄で、凡人には窺知されぬなどと、うまく逃げた批評もあつたようだ。それに今でも想ひ出すのは、露伴の作物の名題が、妙に三字で出來て居るものが多い。「一口劒」、「風流佛」、「對髑髏」、「みれん」、「微塵藏」、「露團々」、「ひけ男」、「さゝ舟」その他、そんなことも、當時評判になつて居た。尤とも、「白眼達磨」だの、「きくの濱松」の、「二日物語」の、「磯打つ浪」のと云うものも、後では段々と出て來たのであるが。

その後自分は、外の作家の作物も隨分讀んだが、露伴のものも大抵は讀んだ。そして露伴は、その當時において、紅葉の牛門派に對し、根岸派の一人と云はれ、紅葉と露伴と對照させられた。しかし根岸派は、根岸に居る同人の一團を指すので、寫實派を正統とする作風で出來た牛門派と意義が違う。牛門派一名横寺町派は、紅葉を覇主としたその一黨であるが、根岸派は、篁村、思軒、得知、露伴と、その傾向から、主題から、第一、その文藝を表現する様式部面からが違う。思軒は飜譯であり、得知は喜劇であり、篁村は八文字屋風の寫實小説である。そして、篁村と露伴が、後で向島に來るようになつて、名實共に、根岸派は無くなつた。つまり露伴は、どこに居ようと露伴である。派も無く、黨も無い。彼の作風がそれである。だから、露伴は、決して弟子をとらず、とつても自分の作風を强ゐない。結局自分の自己は、他人に傳へ得ぬものだと云ふ思惟が、彼をもてこうした態度を採らせるのだと、その頃の樂屋雀がやかましく囀つて居たのを聞いたことがある。たしかにそうであらう。

で、自分は露伴の文壇に乘り出した時分から、現代までの露伴までを總括して、彼は確かに明治の文壇において、興味ある地位に立つ作家だと云へると思う。彼はその盛時において、紅葉と天下を二分した。それにかゝわらず、かれは以ふゆる文壇の中へ入らずに、超然として文壇の外に立つて居た。鷗外、紅葉、四迷、美妙、その他、意識すると、しないに係はらず、彼等は絶えず文壇の批評を氣にし、現代の批判から離れまいと意識して居たらしい。それなのに露伴だけは、批判が何だらうと、時代の傾向が何だらうと、いつも埒外に立つて居た。少しも時代傾向に動かされない。時代

は寫實派全盛である。それなのに彼一人は「五重の塔」のように、理想を唯一の護符として、どこまでも現實寫生に背中を向ける。そこで、寫實派が、自然主義の强襲によつて、次第に足場を失なつた刹那にも、露伴は、依然として、大作「そら打つ浪」に、彼一流の、「意志」の體現たる太つ腹な人間を描いて平氣で居た。時代の潮流に浮き沈んでこそ、そこに勃興もあれば、衰頽もある。始めから潮流外に傍觀して居る露伴には、盛もなければ衰もない。彼は「空打つ浪」を中途にして、小說に筆を絕つたけれども、それは彼の感興の消亡であつて、彼の作風の衰頽であるとは云へない。たゞし彼理想小說の立ち場から離れて、談理小說、もしくは寫實小說の方面へ移つたならば、それは全く場違ひである。しかし彼は、四五年前どう氣迷つたものか、かつて或る小說雜誌に、そうした短篇を載せた事がある。それは自然主義全盛の藝術傾向に公憤して、作中の人物に、それを攻擊さしたものであつたが、その談理の舊式であることを、現代藝術に關するあまりに保守的な見解において、むしろ彼の署名を怪しませるものであつた。

けれども、それは今ま始まつた話では無い。露伴氏の作物を、その初期のものから讀んで來る、彼が氏一流の人生哲理の談理から離れて、一度、足を現實に移した刹那その現實の時代と人生を眺める視度の、何と幼稚で、その哲理と何と不調和なものであるか、氏はどの該博な知識と、深奧な人間觀察と、氏はど微妙な人間心理の介剖力を持つてして、何と作物に現はれた現代人の、淺薄で、皮相であることか。それは、氏の作物において、殆んど決定的な缺陷であると云つてもよい。たとへば現代人が淺薄であつても、作家がそれを批判するに、淺薄であつてよいと云ふ理法は無いからだ。

たとへば氏の「風流佛」だ。それは露伴氏の出世作として、氏の最もすぐれた作品として紀念されるものだ。けれども、自分から見れば、これは隨分くだらない作物だ。と、云ふのは、油と水をまぜたような不化合の作物だからだ。な

ろほど藝術と戀愛を至上妙境に昇華させようとする作家の觀念、その樣式と脚色においては、あり觸れた筋ではあるが、しかし、たしかに此一派の高靈なものを持つて居る。そして、それが、この作の前半においては、たしかに、氏唯一の微妙な心境がユニイクに現はれて居る。けれども、後半において、現實世相とそれを調和しようとした時にそれは全然失敗した。ことに、結末の一章の如きは、書き出しなどとは、とても同人と思へぬほどの幻滅を見せて居る。けれどもそれは氏にとつて當然の失敗だ。なぜなら、氏は、どこまでも理想小說の作家だ。觀念小說の作家だ。その作中の人物を、現實から掘出すことに興味がない。たゞ氏の頭腦中樞から自由に創造して、それにいろいろの觀念を與へる。「意志の堅剛」と云うものを經にし、「機會がそれを刺戟する」と云う構圖と觀念がそれを緯とする。そうしたレッテルが、「一口劍」と、「五重の塔」に貼り付けられる。現世を達觀した悟りの女と云う觀念を、まづ先に腦膜に思ひ浮べて、そこにお妙の「對髑髏」が生れる。封建時代の烈士氣質と云う觀念から、喜劍や「ひげ男」が生れる。要するに氏の作物では、觀念が先づ生れ、つぎに氏が想像するやうな、時代性と性格が與へられ、それに或る小說的氣分と、小說的環境が與へられて、そこに氏の作物が生れるのだ。事實に卽して現實を眺めようとするのでは無い。また事實に卽して、人生洗條を求めようとするのでも無い。逆に、氏自身が、想像の人生を創り出し、それを藝術の世界に當て篏めようと云うのだから、のつそり十兵衞とか、一口劍の正藏とか、それがどこからどこまでも、氏自身の創造である限りは、何等の矛盾もなく、ユニイクな人格として、作られた環境に入り込んで行く。が、それが一たび、氏の創れぬもの、卽ち、在るがまゝの現實に足を向けたが最後、その間の交渉と協和はもうとてもつかなくなる。それに、氏のそうした觀念創造に馴らされた眼は、現實を眺めるに當つても、魚類の一種が持つと云ふ白膜のように、何か、直接の凝視を遮きる、一膜の遮障となる。氏の現實世界觀の幼稚と淺薄がそこから生れる。

或はそうであろう。この現代觀の幼稚さは決して露伴だけのものでは無い。明治廿年代の凡ての作物に現はれる文明

觀、明治世相觀は、藝術においても、思想においても、すべてそうした淺薄で、幼稚なものであつたと、けれども、自分はそれに安々と同意し得ない。なるほど同時代を中心とした作物、「花間鶯」の種類を擧げればそうは云へるかも知れぬ。けれども、明治廿一年に現はれた、二葉亭四迷の「浮雲」に對してはどうか。或は廿二年の嵯峨の屋の「初戀」や、春の屋の「細君」に對してはどうか。その他そう云う例は澤山擧げられる。

けれども、それがまた露伴たるものを、そして露伴の制作をして、明治文學を區劃さしたことにもなるのだ。露伴の理想小說は、少なくとも、日本にあつて前人の無いものであつた。それは露伴によつて、始めて創始されたのだ。彼が現實に背いて、理想の觀念に一向すればするほど、なを、彼の理想小說は完成されたのだ。で、「風流佛」は、筋の混雜と、古くさゝと、殊に、現代相の批判の淺薄において、それが憖ひに明治時代という現代を捉へようとしたゞけに、後代からは却つて露伴も案外つまらぬと思はせるかも知れない。もちろん、部分的な靈高な描寫と、想像的妙境は除外してゞある。たゞ氏にとつて全部のユニイリなもの、卽ち、「一口劍」とか、「五重の塔」とかそうゆうものこそは、一つのクラシックとして、後代にも紀念されてよいものでは無いか。

次に、露伴の作物を當時に名高からしめたものは、氏の文章である。技巧である。殊に、その動的な、淸新で、簡潔で緊張しきつた男性的な句法である。一方また、滑らかな變化性を持つ技巧と、勇渾と自由が、時代をして、飽くない禮讃を呼ばしめたのである。が、この點では、まだ初期のものは、隨分不熟な氣障なものが有ると思う。氏はその頃西鶴と其磧を手本にしたと云はれるが、さすがに氏の獨自は、或る點まで、そこからさへも超脫して居る。それにかゝわらず、妙に、讀むリズムに囚はれて、云はなくてもよい無駄を挿む。この朗讀的に鮮らた感じを與へようとするような、馬琴以來の無理なリズム意識は、紅葉や、眉山にも、可たり多く加味しては居るが、物が物たけに、露伴には、殊

に多く含まれて居る。自然の表現でなしに文章の爲の表現だと云うような、不愉快な作爲が可なりある。それから、もう一つは、ロマンチックなものに必ず副生する形容の誇張である。これも、物象の科學的凝視を缺いたその場の文藝には、あまり珍らしいものではないが、それでも氏の雄辯で豊な語彙の亂舞は、殊にうるさく、時には馬鹿々々しいまでの反感をそゝる。

と、苦情は云つて見るものゝ、やはり氏の文章は明治の文章としてはたしかに劃時代的なものがあつた。水際立つて男性的な、また豊富自由な語彙と技巧と表現とを持つて居た。そして、氏は、張りつめた男性的な緊張をもつて居たが、女性を描くところの、屈曲した、微妙な彈力性においては、あまり得意で無い。そこで、氏の女性は、どうしても生きた女性ではない。極端に想像化された。作られた性格としての、作爲の女性がそこに出て來る。

も一つ、氏が藝術的良心の強い作家であることが當時においても評判となつたものだ。たとへば、「一口劍」における刀の鍛法を見るがよい。あの目まぐろしい術語の術列を見るがよい。その他、「五重の塔」でも、何でも、聞く所、氏は一つの制作をするとなると、その作中に現はれる內容の事實に對して、極端に研究をする。劍の鍛法、五重の塔の建築においても、氏はその爲に、この道の達人から、隨分長く研究を積んだと云はれる。氏が藝術を出たらめ目にしない良心は、そこでも感謝すべきものがあるのだが、一つは氏の知識を求めて飽かない凝性にもよるのだろう。惜い事、進んで、現代世相を、それほどに、忠實に凝視したならばと、餘計な事も思う。

それはともかく、氏の作物の傾向は、明らかに氏の人格を語るものである。氏の作中の人物は、いつも、環境に忍從せずに、環境に反逆する。意志と、白眼との、反抗兒たるべきものであつた。こゝで作物卽作家である。寫實全盛時代の文壇に忍從せず、雷同せずひとり超然として、須强彌山上に、超離俗の高塔をきづき、その理想の窓から、現實を俯視する反抗兒露伴がそこに生れた。一たび馬琴で斷絶したロマシチンズムと、云うよりも、理想小說は、明治に入つ

て、獨り露伴によつて創造され、また露伴以後その後を絕たれた。一體理想小說は、單に理の實質によつて價値をきめられるものである故に、それは、寫實小說よりも、非常に難儀な創造である。然るに露伴が、この理想小說を提けて、來るべき世界の大勢文藝であるべき、寫實及現實派の小說に反抗し、後にその地位を保證し得たと云ふことは、たしかに彼の理想小說が、それだけの價値を保證されるものであるからで無ければならない。

要するにわれ等が、明治廿三四年頃に「風流佛」や、「一口劍」や、「五重塔」によつて、その當時の他の文學に見られない、一つの違つた傾向を見た事は事實だ。それはわれ等を現實から遊離する、美くしい幻想と誇張の世界であり、また、現實に求められない超絕的意志力が、神と人間の間として現はれた、美妙なロマンスの世界でもあつた。それは自分ばかりでなく、恐らく、あの時代人の等しく感じた禮讃であつたであらう。もちろん自分は、今日それを讀んでも、あの當時の感激などは、どうしても再現されぬ。たゞ當時の感激を腦裏にくりかへして、その殘影を僅かになつかしみ享樂する位ゐのものである。それほど藝術の水平線は高上したのであるが、それはそれで良いのである。若い芽は、古い木の切株から生えつゝある。で、たとへ露伴氏の作物が、現代で讀んで、それがロマンチックであり、理想小說であることから、その脚色があまりに技巧的人爲的で、單純過ぎる作物と想はれるにしても、それは明治廿二三年代において、早くもこれ等の作物を生み出したところの、露伴氏の獨創と、時代的の高い價値において、いさゝかも、傷けられる事なくして濟むものである。

硯友社の文學運動（承前）

丸岡九華

參號は同じく二十一年六月二十五日の發行にして、小說類は前と同じ、此篇より盛に新著の批評を初む、然して此批評欄に筆を取るものは、多く紅葉思案の二人にして、社外の新著に向つては思案最も多く、然も子が思ひ切つての冷笑・熱罵、他人の事ながら氣の毒な程にて、其一例を擧げんに、此頃鐵筆將軍と名乘る人、初めて（明治の細君）なる新著を寄せて、社の批評を頼みこせしに、思案は鉛筆將軍なる變名にて左の如き酷評を試みたり。

明治の細君七不思議、鉛筆將軍

第一御尊影を卷首へ掲られし事

隨分是迄傳記詩集などへ肖像を挿みし書籍見當り候へ共日本の小說へ著者御自身の御肖像を掲げられし御自惚の程誠に不思議の一に候

第二求婚の廣告を小說に應用せられし事

是亦至極の不思議に候猶一層の不思議に候は何故此廣告を御尊影の裏面へは御掲載不被爲哉チト御尊影とかけ離れし段何は不思議に有之候

第三御尊名大安賣之事

鐵筆將軍と申す御尊名序文に七ヶ所本文に二十七ヶ所尤も餘り多數に付取落しも多分に可有之併し僅々百八十二頁の小說にしか

もでつかい活字の小説中に總計締て三十四ヶ所著者の姓名を挿入の御手際不思議と申しても無理には無之此處古今獨歩に可有之と乍憚奉存候

第四明らさまに他書（否）雜誌を流用せられし事（あり體に申せば剽）殊に百五十八頁の御斷り書き（小さな活字にて）などの處はいらつめと申す雜誌の三號に似寄の品有之……サツカレーの二の舞……なぞはそつくり其儘此處健筆雄偉の鐵筆將軍に不似合の大不出來是亦不思議の一に有之候

鉛筆將軍曰す此外之三不思議は餘に御氣の毒と存じ御遠慮申上候流石は鉛筆將軍の御注意至れり盡せりを知るべしヘヘンイヤアーに鐵筆將軍……鐵筆將軍……鐵筆將軍……モ一つ鐵筆將軍、オマケに鐵筆將軍、同同同同、同同同同、同同同同、同同同同、同同同同、同同同同、（ア、うるさい）の御口調に似て居るぢアないかア、不思議

批評と言はんより素天邊から冷笑熱罵、おもちやにしてくれと進呈したやうなもの其著者たる者是を見ては、いかに虫のよき男も癪に障らずには居られず扨こそ鐵筆將軍といへる男も此評を見て長々しき辯解書を寄せ、泣かん計に悲憤を訴たる、思案がまた其手紙朗讀して（ウツお出なすつたネ、へンちあアんと心得てらア、鐵筆將軍め）なぞと、對話澤山の身振假聲、樂屋に飛んだ花を咲かせて、いよ／＼「文壇の白柄組」と呼ばれたるも當時無理ならぬ事なり。

本號に新入社員拾五名の披露あり。

第四號は同年七月廿五日の發行、本號には思案大學を退きて專心一意文庫の編輯に從事する旨の廣告あり、こは文庫發賣以來、尾崎石橋二人共に大學に在學して、學生の儘文庫編輯人發行人の署名せしが、此事いつか學生係の耳に觸れて、假に文學雜誌にてもあれ世に發賣するものに署名すること、學生として穩當ならずと、二人にその事を止めたるより、此時漸く文學を以て處世の方針と定たる二人は、熟考の末思案子は斷然退學と決心し、紅葉劇雅堂の二子は表面硯友社を退社す云々の廣告を出して、學校に對する申譯的の處置を爲したり。

第五號は同年八月十日の出版にて、此號より自分は創めて散浮く花なる小說を掲ぐ、また此號に左の廣告あり。

情詩人、美妙齋先月末より劇性のリウマチス病に罹り今回執筆いたし兼候に付散浮く花を御覽に入れ申候

當時美妙はさして病氣とも聞及ばず、勿論中阪の本城へも近頃頓と顏を出さず、自分等も訪問せしことなかりしに、この廣告を見て紅葉に「山田はそんなに病氣なのか」と問ひしに「なアにいらつめの編輯や新聞雜誌の賴みが多いものだから原稿をさつぱり送つてくれん、それであの廣告を出したのさ、社の方ぢアお錢にならんからねへ」と、いつになく不平な語氣。

此兩三ケ月は硯友社に取つても、また社中の美妙紅葉思案子が身の上に取りても、一大變化を生じたる時にて、特筆大書すべき時なりしなり、先第一に思案子が、兎にも角にも大學の文科まで進み、今二三年にして學位をも受得らるゝ身を以て斷然校を去つてこの文庫の爲めに一身を捧げ、文學を以て終生の業となさんと決心せしを初めとして、續いて尾崎も石橋同樣大學を退き、同じく文學を以て獻身的の事業とし、續いて眉山も亦同主義を以て大學を退きたるに、硯友社創立以來、何事にも協力せし山田美妙は、此頃に至つて漸く年來の知己たる紅葉思案自分等と遠ざかつて、遂には全然社を退き文庫とは緣切りの姿となりたるのみならず、紅葉思案二子を初め社中の面々とは私交上まで斷絕するに至りたる、悲喜交も至りたるの時なり。そも〳〵美妙が紅葉思案自分等と、かくまで親密なりし間柄をも振捨て、何事措きても原稿だけは送付すべき義務ある硯友社へ、かくも疎遠になりたる一大原因は、當時子は言文一致體の創立者として、雜誌に新聞に賣出しの花形なれば、世間子を尊重歡迎する社中甲乙の比にあらず、子も亦其風潮に驅されて、所謂る出世の門出に舊友を捨るの忍びがたきを忍びたる物なるべし。自分をして忌憚なく此間の事情を述べしむれば、美妙は最初より所謂覇氣勃々、名を成すに於て何人よりも性急なりしなり、文を練り想を凝らして未來に成効を期するよりも、直に進んで先發第一に新文壇の金魔を握らんとするは結社當時より唯一の希望たりしなり、この慾望、この名譽心は子

をして言文一致の創造を爲さしめたる刺戟と動機とを與へたれども、又爲めに友を捨て情を忘れたるの不德に陷らしめたるも亦是が爲なり。予が當時の事業として、其働き振を同窓者紅葉思案眉山漣諸子の行動とを比較せば、美妙が己れの機關雜誌として、當時最も世人の注意を引ける女學生に向つて「いらつ女」なる月刊雜誌を發行したる、文學者としてよりは營業者としての行爲に近く、我先に名を爲し利を得んと焦心せる形跡は斷じて蔽ふ可からず。現に文庫の投稿は廢しても都の花へは寄稿を休みたることなき、其斬まくり主義に於て當時社中の誰彼子に及ぶ可きものなし。之に反して社中の者は、只僅に我樂多文庫を本城として、斷じて他雜誌を顧る者なく專心文を錬り想を凝らし、半錢の報酬を願はず一竹の名を望まずして勵みたる、彼美妙子に對して遂に玆に一大障壁を築き、文壇上の絶交とまでなりたるなり、自ら許すに文壇の先進を以てし、世間尊むに斯道の大家を以てし、其文は言文一致といへる斬新の標幟を建て才名一時に輝きて人之に報する原かりせは、何人も得意の念に驅られざるものなく、さらぬだに舊故知人には普通人情として疎遠がちなるべきに、ましてや其文に對しては半錢の報酬も爲さゞるのみか、時には之を捕へて友達づくの我面白に罵倒し逢ふて語るも絶て半席の敬意も表せざる連中とは、自ら疎せざるも近つかさるは自然の數なり。また當時美妙が新著夏木立の批評を、紅葉が文庫に掲けたるに、例の我面白の筆鋒にて思ふさまに罵りたる、此一事兩人の間に一の深溝を造りて、之を啣みたる美妙は尾崎と交通を斷つに至りたりと說く者あれども、是れ決して美妙をして硯友社を去らしめたる唯一の原因にあらず、文を論じ作を評する毎時の事にて、熱罵冷笑決して夏木立の場合のみにあらず美妙子と雖も豈是のみを以て定舊交を捨つる者ならんや、兎に角予が一度硯友社を去つてより、社中折にふれて交通せしは自分と眉山のみにて、それすら年一度か二度訪問するに止まりて、遂には起居を詳にせざるに至りぬ。

第六號は同年八月廿五日の發刊、本號に自分は初めて狂風狂花の長詩を掲く

第七號は九月十日の發行、狂風狂花の續稿掲載あり。

また此卷中に街談巷說中、美妙が近作夏木立を、紅葉が評せし一篇あり、即ち前段に述べし尾崎山田の疎遠となりし近因なりとの噂さへありしものにて、自分は斷じて此事なきを證せんが爲め、玆に一節を抄錄すべし。

卅一頁「馬あじあ」獨語の條に『まアどうしたらよからうなア』とあるは、何ぼ獨語でも乙女らしくなし、なアといふが頗る耳にたつなア、あれを『エ、どうしたらよからう』としたらよからうなア（ホイ失敬）

卅二頁「馬あじあ」くやしがりの條下（をつな條下だの）『おい、齒、おい、爪、おいこれ、手』とあるは、鍛冶屋さんが土手を急ぐやうだ、ナットこゝにも『えゝ殘念じやないかいなア』とある是もいやだ（イヤなら勝手にしやれ）

卅六頁に親子對面の條下に、親父が曰く『さアおれの顏ならこんな顏だ』とはまことにとぼけたる老爺さんかな、今親子が一世の別れ、悲しいわいのと取付いてあとは正體なくばかりといふ場合に、こんな顏だもよく出來た……

此の如く最初から眞面目の批評にはあらざるも、さりとて其諷刺たる美妙が名を傷けんとする惡意ありての業にあらざるは何人も見る處にして、年來机を並べ文を論じ想を論じたる二人が、かばかりの事は介意すべきにあらず、美妙も亦是を咎むる程雅量なき人には非ざりしなり。かの十號に社の喜多川麻溪が、眞美人なる一小冊を出版せしとき、紅葉は左の如き惡戲の惡評を試みたり。

十二頁この處に一頁の挿畫あり、繪も彫も實に麁末極ること言ふばかりなく、舶來の蠟燐寸でさへもう少し念入の繪が張つてあるに、苟くも日本小說の改頁を企てる硯友社員にして、こんな物をへし込まれるはそも／＼如何なる御了簡なるや。

繪は美人の衣裳なり、言を寄す麻溪子子供に襤褸を着せて置くは親父の耻辱でござるに。

十六頁に娘が震慄の體を序して『足がちつとも前へ出ない、張子の龜の子、出るのは首と胴震ひ』とは滅法な形容、眞美人を形容するに……形容するに事を缺て張子の龜の子とは情なし、美人は美人らしゝ形容し、下女は下女らしく形容せではなるまいと考る、讀んで張子に至るときは人々絕倒して、胸裏に畏い恐ろしいこの時の娘の心持はどうであつたかといふ想像が浮みません何にしろ張子の龜の子は素的に恐れ入つた。

かくの如く、文庫紙上の批評といふは、眞面目に新著の巧を論ずるより、之を捕へて思ふさまおもちやにする、出來るだけ洒落のめす、といふ風にて是が文庫の呼物のひとつとなり、其後他の雜誌も續々此戲評の顰にならひたるものにて、紅葉思案に初まり漣山之を繼ぎ、明治二十二年の末文庫の廢刊に至るまで引續き此風を革めず。さすれば最初より社中の樣子を知り拔きたる美妙が、いかに手酷く自著夏木立をからかはれたりとて、それを根にして袂を分つごときは萬々なき處なり。

八號九號は九月の出版にして、小說類すべて前號とおなじ。

十號となつて表紙を改む、この號には紅葉「紅子戲語」の初回を揭ぐ、中阪本營に社中總集合の狀況を實寫したるもの、實際の狀況は今一層賑やかに人數も多く、臆推し組打ちも目ざましきものと思へば當らずといへど遠からず。

拾壹號は明治二十一年十一月十日の出版にして、香夢櫻綠「作者身の上話」と題して、サア、ウオルタア、スコットの傳を譯載――眉山は例の俳文枕の賦を揭ぐ。

第十二號は同月二十五日の發兌にして、自分は移春檻第一「花底の蛇」の壹篇を揭ぐ。この移春檻はスケッチ風の短篇ものを取集めて揭載する筈にて初篇は佛國雜誌中より見出したる同地に於る屍體賣買の極短きものにて目新らしきものばかり撰まんとの目論見なりし。此篇にて漣の五月鯉大尾となる。眉山は續いて自宅（本鄕春木町二丁目）紅紫亭の記を揭ぐ。

この號にて都々逸を全廢するの議決せり、其理由たる紅子戲語中にあるが如く都々逸は其調其想ともに野鄙にして純文學の一部として硏究するの價値なし、抑々硯友社なる一團は、明治文壇に於て、新思想新文學の皷吹者となつて現はれたるものなれば、舊時の殘骸にして然も陳腐の俗歌、且は單に花柳の巷に於てのみ唱謠せられ、醜劣の情緒を說くこの種のものを、文庫紙上に揭載するは、衣冠正しき座に尻切袢天に大安踞かく者ある如く、調和を失する甚敷ければ、

斷然之を割愛せよと世間の攻撃も喧しく、社中の者も今更團珍や人情雜誌の眞似するでもあるまいと、玆に議論沸騰して取捨の悶着を生じたるなり。當時思案は此黜者として、都々一は平民文學として已に一種の短詩形を具へたるもの、作り樣によりては、斷じて捨つべきものにあらずと主張せしも、多勢に無勢無理やりに推付られて、果は君も當代の文學者として、たつた都々逸位の存廢で大きな頭。。。。を湯氣を立てゝそんなに怒出(むくれ)すにも當るめへ、諸事僕の方寸(はうすん)にあるようつちやつて置かつしなぞと、とう／＼文庫紙上より抹殺せり。後に思案は左の一文を草して本號に掲ぐ。

都々一を送る文

それ都々一といつぱ。盃盤狼籍の席、朱唇に唱はれてよく行雲とともに甚句活惚の殺風景を遏め、雨蕭々の小座に、人目を忍び駒のゆかしきは、軒端の戀猫もひと思に死んで皮とならんことを願ふ、春の花に戯るゝ胡蝶も羽を擧げて舞ふべく、秋の月に嘯く秋鹿もとゝに唱はん、いたづらに喉佛を傷める義太夫、聞かざるに睡氣さす一中よりは、手輕くして更に味深し、物の本に詩は志なりとありて思ふところを述べ、都々一また心意氣とひねつて、胸の中を明かにするものなり、されど戀を心にすればにや淫詞に流れ易く、巴人下里の調といやしまれて君子の耳に入らず、我是を悲み、そもじが爲に文庫の一欄を借受け改良の力を盡し丶、斯道の全盛を望みしも、石部金太夫等わが心をお推文字(すもじ)なく、一圖一徹に野郎娼婦のまねびをすと心得、文庫の格を下げ候の、社員の顏にかゝはり候のと日夜の異見うゐぞつらいぞ、いかに都々一の君、御身一人がある爲に人樣の名作を傷つくるとあらば、罪や深く科や恐ろし、御身も亦かく骨無げなる淺黃裏と、棟わりに詫住居せんこと定めて心憂かるべし、われ今飛花落葉の中より御身を連れ出し、野の末山の奥へも逃れんと思ふ心は山々なれども、少し用事もあれば道行はかなひがたし、心元なけれど一人旅して、何處の里へなりと身を忍ばし、花咲く春を待たまへ、緣もあらばそんじよそこに一日微醉の夕、お目もじのふしは昔馴染のわれな忘れそ

前都々一撰者　思案外史

拾參號は同年十二月の出版にして、此號より漣は隔戀坊の名を以て鬼事の短篇を讀載す。蓋し子は是より數回お伽話

様のものを試み、時に獨逸の神仙談なぞ譯載して、面白く讀まれしかば、當時紅葉眉山が筆を專ら戀愛小説に染め、人情の極徴を穿たんと企てたる、漣山人が劇本を專としたる、自分が新體詩と靈怪物を好める、是等の範圍を脱して茲にお伽話の區域に筆をつけて、後年我國唯一の少年文學者として、淡純輕妙他に類と眞似出來ざるに至りしは、此時代に於て其基礎を定めしものなり。

紅葉が紅子戯語此卷にて大尾となり、古聞新報に傾城歌三味線を掲ぐ。當時八文字屋又は西鶴物は、唯僅に好事家が舊本にて珍藏するのみなれば、追ては此種の珍籍を世に紹介せんとの主旨なり、紅葉眉山自分等が一代男の類を謄寫せしは當時の事なり。

第十四號、明治二十二年一月二日の發行にして、眉山初めて黄菊白菊なる小説を掲ぐ。兎に角子の小説として雜誌に掲げ、世に示したるは本篇を以て創始とせんか。

第十五號は同年一月二十五日出版、此年山田美妙初刷「國民の友」に掲げたる小説「胡蝶」の挿畫に裸美人の像を出す。この畫はしなくも當時の一問題となつて、裸體畫なるものは美を爲すや否やなぞといへる問題となり、曲線の配合であるとか陰影の奇妙であるとか、甲論乙駁喧ましきこととなりし。紅葉は我樂多紙上に左の一文を掲げて大に之を諷す當時の狀況を知るの便あれば茲に掲ぐ

國民の友三十七號附錄にて

胡蝶殿　　　紅葉山人

ゆかしき御名は世の人の未だ御姿を拜しまゐらせぬ間に美妙殿の物語にて愚考を驚かし候、須磨の浦邊にての雪の肌、今日や明日やと思ひ焦がれ候、此程國民の友紙上にて漸く本懷を達し候。

本文によれば（黒松の根方に裸體のまゝ腰をかけ濡れはてた衣物を半ば身に纏ひて、四方には人一人も居ぬながら猶どこやら

吾とわが身へ對するとでもいふ可き羞を帶び……）とあるに、噯れて御見に入り候へば、あられもなき立姿、とかうの言葉はなく、ひたもの驚かれ候、此處あたりの宿も定めぬ賤の女なんどにも候はゞ、いざ知らず、金雞障の内に裳をひき、やごとなきにかせづかせたもひたる〇〇との御身、なでふかくははしたなに振舞せ給ふらむ。見候へ讀賣新聞には、書中の裸胡蝶とて京童がさがなきを傳へ候、これ御身一人に限る恥辱に候か。さいつ頃政教社懇親會席上にても、御身が養ひ親なる德富氏は、御身故にさる翁にいたく詰られつるをわれ親しく見及び候。斯く翁と京童は、御身が赤裸の姿を咎め候ひけれど、われはそれをばとかふ言ふ者には候はで、却て美の神髓といへる說に味方候者ながら、只言ふ可きは女氣のあるましき人目を愧ぬ景色にて、剰へ憚からず思ふ男の前に立はだかり、何かは知らず是見よがしの御姿何事ぞ。厚かましさの程こそうとましけれ、又父なる人の美妙殿が言葉を用ひ給はず。我儘にかく淺ましく振舞つる心の程こそ憎けれ。本文にしたがひて、松の根に腰打かけ、耻かしげに身構へたらんには、やさしき心の心入れも知れ可申候、たとへば日影と須磨の波と鷗の聲と浦風より、外に見るものなければとて、無禮なる男が夕涼するてふ丸裸となつて、誰に憚る色もなく候ては、其人の常の心のほども知れて、上もなくうとましき事に候

寛永氣質の人は知るまじけれど、後の世に出て來し俳優の女形などは、寢食も婦女の心を忘れず、人の見ぬ間も男のごとく振舞す候へば、舞臺に顯れ出るときは初めて神にも逼ると聞及び候、よしや人目なければとて、下司はしたも得せぬ淺ましき姿して露ほども耻らふ色なきほどならば、日頃の御心掛も思はれ候、ましてや男の見る目もいとはせ給はざるなや

源典侍と聞へはいみじき雲上人に候はずや、至尊に近く侍るべき人に冊かせ給ふ御身のかく淺ましき御心に渡らせたもふは畢竟は誰が耻辱に候ぞ、典侍の面目にかゝり候はずや、上禮ありて下不禮なるはなし、かけまくもあやにかしこき九重の内にかくまで賤んずべき女をはべらして、玉座の淸きをほしいまゝに汚し奉るこそ、平家の内政亂脈に相成候を知るべくなんど、人々の申候はんづる時は、胡蝶殿御身は何の面目候て、主と二位の君を初め奉り、平氏一門の諸侍に、西海の底にて見參らせたもふや、御身等が大將と仰ぎ奉る宗盛の君は、京都の傘張の倅とや、されば御身も其軒近く住つる、辻君なんどの父なし子にこそ候はんづれと人の申さんには、其祖を耻かしめ其主をはづかしむるに候はずや、海に入らせたまひしからはさこそ衣の濡れもせめ、さては裸身にておはし候ひしもつや〳〵無理とは覺えず候なれども、死すとも隱すべきところを得も隱さで、男の前にいと誇りが

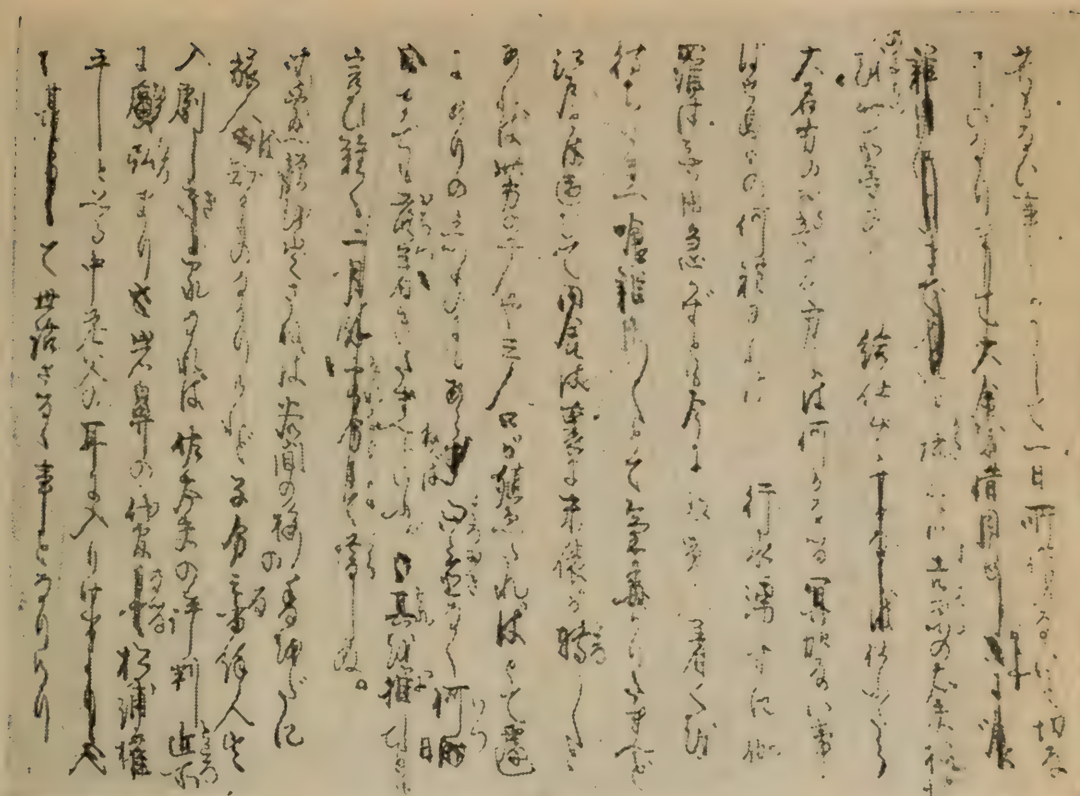
に立はだからせ給ひしは、中々に與さむる業に候、さても御身が雪の肌故に、千歳の下にて平氏に新らしき耻辱を與へ、剰へ生みの親美妙氏は申すもさら、養ひ親富徳氏まで寃罪に苦しめさせたまひしを不束なることゝは思したまはずや。かゝらんよりは沖中にて、雑兵の心に從かはせたまいしぞいみじかりき。なまじゐなる貞操だてして角を摘めしは今更遺憾に候、さなくとも誤て入水の折底の藻屑となりはて、二位の君の御伴いたされ候はんなれば、芳名は末世に傳はらずともせめては臭聞を千歳に遺すことあるまじきに、實にや死ぬべき時にこそ人は死ぬべけれ。生て何の効か候ひし、賴み奉りし帝は果敢なくも隱れさせたまひ、偕老を契りし夫をいかに君の御爲めなればとて、無殘にもわが手にかけ、言甲斐なき身を墨の衣に包みて、なに樂しみに此世を送らせたまひしぞ、憂目見ん爲めに生を貪らせたまひしか。野に舞ふ心なき胡蝶さへなを慕ふなるに、有情の胡蝶は名を捨てゝ外の花にも遊ばず、却つて紅葉に遊ばるゝは口惜きことに候はずやあなかしこ

隱すべき雪の膚をあらはして
まことにどうもすまぬ浦風

源惡太郎　紅葉

胡蝶どの

この十五號に初めて紅葉が新著「色懺悔」二月下旬出版發賣の豫告あり、この作は紅葉に取りて最も懸命のものにして、先段にも記せし如く美妙は已に文壇に立つて、其奇才を擅にし、目下稱贊の焦點となり、また後には社中の面々腕を撫り肱を張つて控へたるに、その處世作を捧げて世間譽毀の猛火中に投ぜんとする、苦心煩悶察するに難からず、此一擧、幸に名を成さば從來優に文壇の金麾を握り得べきも、萬一不評に終らば子が文名は永く煙滅して、再擧事を爲すに多大の障碍たらずんばあらず、稿を起してより幾日、句を改め章を替ること幾回なるを知らず、友人としても氣の毒なほどにて、殊には美妙には言文一致といへる創造の呼物ありて、想の高下文の巧拙は別物としても、目新らしき點に於て讀者を欣ばしむべきものあり、然るに紅葉は文體に雅俗折衷といへる創體らしき招牌は揭げたりといへども、行文の難易――俗に言へば讀者をして在來の小說稗史の文に比して、目新しく面白く讀ませ得るといふ點に於ては、美妙が言文一致と比して遙に苦心を要するものあり、子が苦心は實に玆に存せり。十六號は今年二月十六日の出版にて硯友



尾崎紅葉筆蹟（加羅枕原稿）

社の我樂多文庫の歴史中、更らに特筆すべき變動起れり、即ち今回よりこの文庫の出版權を、神田乘物町三番地吉岡書籍店（理學士吉岡哲太郎君）に引渡し、印刷は勿論發賣方法も一切委任することゝなり。即ち社員は編輯と起稿といふ事ばかりになりたり、此原因たる、從來九段中坂の本社に於て、紅葉思案を初め自分等は一切取次の老爺を信じて印刷物の發送より收金の事までをも托したるに、この爺利益を何時か我物にして、印刷所同益社への仕拂金は毎月滯りとなり積り積つて、貳百餘圓となり、是ではたまらぬといふ時は老爺はいつか姿を隱したるなり。殊には我樂多文庫は從來唯一の文學雜誌たりしに、金港堂都の花の發賣以來大に其販路を狹められて、此分にては持續せば、徒に道樂に借金する始末なれば、いよ〳〵相談まとまりて吉岡氏へは壹部々々を原稿料にて賣り、貳百餘圓の借金は月拂として支辨する事として結了せり。是が爲め紅葉は二三年同益社の爲め苦しまされたり。

かくて我樂多文庫は最初の發兌より、明治二十二年廢

刊に至るまでの變遷を摘めば左の如し。

第壹號より第八號まで　八　册

右は紅葉美妙二人が筆耕して社中の兩面廻覽せしもの明治十八年二月より十九年十一月に至る一ヶ年九ヶ月間

第九號より十六號まで　八　册

是は前記の非賣品を印刷に付したるまでにて發行編輯は紅葉方、明治十九年二月より二十一年三月迄三ヶ年と一月

第一號より十六號まで　拾　六　册

公賣品にして發行所九段中坂と硯友者編輯紅葉、思案、美妙、明治二十一年四月より二十二年一月迄十ヶ月間

但し十六號は吉岡書籍店より發賣す。

第十七號より二十七號まで　拾　壹　册

文庫と改題して吉岡書籍店にて發賣、明治二十二年二月より二十二年十月廢刊、九ヶ月間

通　計　四　拾　貳　册

年　數　滿四ヶ年七月

かくてこの拾六號は吉岡發賣にして、表紙の體裁等は前の如きも、本誌中改めて左の廣告を掲載せり。

我樂多文庫再度の大改良

一、我樂多文庫は十七號（本月二十五日）より文庫と改題す。

一、文庫は紙數を七十頁とし紙面を改良す。

一、文庫は定價を七錢とす。

一、文庫は挿畫を高名の畫家に依賴す。

一、文庫は十七號より淨瑠璃、滑稽物語、テールの三種を加へ、名家の特別寄書を掲ぐ。

一、文庫は十七號より小說上の議論を掲ぐ。

一、文庫は一派の戯文新體詩等を精選して毎號之を掲ぐ。

一、文庫は古文新報の欄を改良して、小說早學びといふべき逸聞を掲ぐ。

一、文庫の批評は最激烈にして、最公明なるなるべし。

一、文庫は實に我朝文學社小說雜誌の誨導師たり。木鐸たり、先陣者たり、開祖たり、世間後の雁にして先の様なことを臆面なく言觸らす曲者ありといへども色をも香をも知る人ぞしる。

文庫發行所飯田町二丁目硯友社大賣捌所神田乘物町吉岡書籍店

本號には紅葉の「伊勢物語誤意」を掲ぐ。風變りの滑稽物なり。

伊勢物語誤意

「むかし男うひかうむりして」

むかしと言へるはなべての物語の發語に昔お爺さんとお婆さんがあつたとさの如く物語の初めに使ふ言葉なり。

一說にむかし男といふは、年ふりたる男のよしいへり、年よりたる男のうひ冠することならば、年老たる女は振袖もや着なん、取るに足らぬ說なり、異本眞名伊勢物語に「無貸」とかいて「むかし」と訓せり「無貸」とは人に貸といふもの一文もないといふ反語のやうに書なせり、伊勢屋の息子なれば、けちな親父は小使壹文もくれず、人から貸りて凌いで居る男と見るも面白き考なり。

後の世に色男をむかし男といふは金と力はなかりけりといふ川柳點の意に基き、これ伊勢屋の若旦那を取合せしものか（下略）

前に掲げし文庫豫告の中に古聞新報の欄には、必ず珍らしきものを掲ぐとは、左記一篇の如きものを撰したるなり。

雪盡しのせりふ

凱陣太平記

新田義貞　○市村龜藏

大森彦七　×大谷廣次

○「それ眉上の笠には無影の月を傾け

×「擔頭の柴には不香の花を挿む

○「實や降積む雪の笠、月に似たれど影もなし

×「木毎につもる白雪は、花に似たれど香もなし

○「詩人の目には鵞毛とながめ

×「下人の目には鹽と見立て

○「謝安が娘は柳絮にたとへ

×「おらが心はきらずと見る

○「猫はかぢけて繼母か降ろとゆつべの雪の空

×「犬は勇んでお叔母樣かふるとや雪の朝ぼらけ

○　下戸は炬燵で雪みどり

×「上戸はぬスりで鐵鉈汁

○「加羅に白雪

×「豆腐に淡雪

○「雪秦嶺に横たはつて家何處にかあり宗のむかし男の富士の雪

×「雪燈籠を掩して馬道すゝまぬ駕籠かきの酒手をねだる夜の雪
○「雪の約束まへ宵の大門口のつけ禿(かむろ)は、唐子(からこ)に似たる雪まろめ
×「雪ころばしや雪打に戯れ遊ぶ女郎を、ふすべる遣手は雪女
○「雪見の客の床陰に、逢ふてとろける雪佛
×「佛も元(もと)は色男、かの耶須多羅女が雪の肌、雪や氷と隔つれど、とくればおなじ戀の淵
○「戀の山の手奴の顔は、雪間に咲ける紅梅の、色に染たる赤ッ面
×「つら〳〵椿水仙や
○「寒菊、山茶花、冬たんぜん
×「牡丹の富貴天より降る、雪の貢の銀世界
○「世界一統御贔負な、粗み揚羽の蝶ならで空に舞たるはだれ雪、ふれ〳〵小雪丹波の小雪
×「ふつと降り出す丹前羽織
○「雪の白柄花(しらつか)かひらぎ
×「さすがに香る一家の風
○「今日顔見世の
×「吉例と
○「ホ、
二人「敬つて〳〵白す

右の如く文庫と改題して、吉岡書店の一手販賣となりしは第拾七號よりなり。此號にて再度表紙の體裁を改め、紙面を縮めて紙數を増加し前號とは甚其趣を殊にせり。されど卷中の小說は多くは前回の續きものにして、只自分の散浮花の

み此號にて大團圓となれり多田漁山は「積雪節松枝」なる劇本を掲げ、淡島愛鶴軒（號寒月）は「そゞろ歩行き」なる短文を掲ぐ。。

因に記すこの淡島寒月子は、當時淺草門跡附近に居住せられ、好古の藏書家にて、また人の知らぬ中より深く元祿文學なぞ探究せられ、西鶴は勿論其磧團水あるは八文字屋物なぞあらゆる珍本奇籍を收集して、其妙を同好の士に漏されしより、社中に於ては紅葉最初に知己となり、露伴君とも交深く、いよ／＼元祿文學の吹聽盛んになつて、紅葉の如きは子より一代男一代女等の珍本を借覽して之を筆寫し、それを社中の誰彼もまた借覽しては筆寫する等、子が硯友社の文運のみならず所謂元祿文學を世に紹介せし功勞に於ては決して沒す可からざるなり。

本號には前號に掲げし紅葉が國民の友美妙の「胡蝶」に對して掲げし戲文に付き、美妙は左の如き返事を寄せしを、更に之に答へたる紅葉の文、二つながら併せて出せり。美妙の寄せしは左の如し。

久敷打絕え候ひき、されば此頃の胡蝶へたまはりつる御手紙は、これも千百の手荒き中、こればかりはやさしかりきと、いといとう打喜び候からつらねて候、御覽候へかし

物語草となりはべりては昭君のふる事も思ひ出されて

今ぞしろおなじ鏡ともろこしのえみしにとつく人もありしに

萬々とかの繪につきては、ゆゝしき騷ぎを引起して候今はそれがしも蓮月にかぶれて候みそなはせこの歌を

こゝを給と思ひ立ちにし早乙女の名になかれたる須磨のうら風

右近頃の筆のまゝかくの如くに候、我樂多にのせたもふとも、御覽じたる後にてやぶりすてたもふとも、そは御心のまゝに候かしこ

二月中の八日　美妙

もみぢ様　おもと

美妙が公開文に對して左に揭るは紅葉が返事なり、相對して讀まば兩者の間、交通已に踈隔したるも尙竹馬の友情の忘るゝ能はざるもの其間に髣髴として存在するを見ん

其方よりも此方よりもごぶ沙汰とはまことに此事に候、いぬる日蝶様へ参らせし一通、日頃に似けなくやさしかりしはこは御身の前にて申すべきにはあらねどかの君に思召ありての事に候二郎春風とやらいふノッペリ武士なかりせはこの惡太郎が手に入れべきものを彼奴にやみ／＼宇治川を遣られては源家に對する太郎が不面目御推察候へかしたとひ一命かけて焦れ候とも様ははや佛門に入りたれば今更邪淫を犯かさせ申も心ならずと胸を推靜めあじきなき此頃を送り申候「今ぞしる」の御返歌までにはあらねど

君ゆへにまる裸とはなりにけり末忘るなよ糟糠のつま

われながらいしくも詠みつるもの哉赴仲人が因果ふくめるやうなれど道歌には此體多く候十體外の一體にて說諭體と稱ふる由西行頭陀袋といふありそうなさそうな秘書に見へたりかの綺姿は勅によつて寫せしものゝ由毛延壽が側杖の迷惑さこそと察入候此頃は蓮月にかぶれとは乙に思付かれ候事よ紅葉が風月に耽りて胃を傷むる不風流とは格別の御心入れ今にも一段と御上達あらばそんじよその物ある比丘尼を見るに至らんかと是のみおかしく心懸りに候「こゝを繪に」の返歌とて

こゝを繪と思ひ立ちしは不覺なり肌の素きは後にすること

いかに是は此頃は貞柳にかぶれてと申したしいつもの妄語御ゆるし／＼

二月廿日　　紅より

美　様

とにかく文學上の交通は、この裸胡蝶の往復を以て最後とし、其後文壇上の應答は勿論私交との文通さへ打絶たるなり、此以後十餘年、社中にて時たま美妙を訪問したる自分も眉山も、其後絶へて子を訪はず、美妙は勿論來る事もなければ、其居所さへ不明になりて、唯人傳に彼は今何處にあり。何々の事業を企て何々の事に失敗せりなど、殆んど文學者以外の人となりし風評など傳はりては、子が性情の時とともにあらぬ方に移り行くのみ知れて、机並べし當時の溫厚なる子が俤は、何時とはなしに社中同人の記憶より消去たり。

十八號は三月の出版にして、此號にて紅葉の京人形完結す。自分は移合檻第二として、鏡裏花なる一篇を出す。漣は練糸涙なる人情物を掲ぐ。こゝに珍とすべきは、紅葉が路用三貫文の記あり。これ三十錢だけ持ちて思案子と大森蒲田の梅見に行きし記行にして、我樂多印刷後に於ける子が記行の初篇なり、其中の一節

十二時過ぎかの茶漬屋山本へ着く、出女「お仕度は」「何がある」此山本へ來て何かとは野暮の至り、言つた事は再び返らず。いかなる返事することかと思へば「お刺身、酢の物、寄せ鍋、お茶椀、煮肴」といふ。こは〳〵いかに一服一泉の山本でこんなものを出來かす樣になつたか——アヽ、世も末だ、法隆寺の什物もない〳〵無くなる事かと嘆息せられたり。されど腥きもあるといへばたべたく、寄せ鍋に漬物一ト通りを命す、程なく持來る、膳の上の小皿に——やたら漬、座禪豆、梅びしほ、あられ紫蘇、燒海苔、さながら繪具函の抽斗なり。外に誂へたは、辛子漬、初夢漬、加羅蕗、甘露梅、辛子びしほ、さても我ながら喰つたる事を、土産に梅の花漬買つてぶら〳〵こゝを立出て梅林に行けば、こゝも南枝北枝十の七八までは中といふ字ばかり、大失望して、

不可もなし香もなし梅の蕾かな

紅葉が句としては以前に試みたるものありしならんも吹聽せしものなし、世に名乘り出たるものとしては是が初一聲ならん紅葉が食道樂此時初めて文に現はる其後また檀林派を妙なりとして、

天渺々海漫々中にひよつくり松魚船

稻妻や二尺八寸そりやこそ抜いた

なぞと妙不思議なるを悦れしがりしが、また一變して紫吟社の正風このかた、幾度か變體變想して、遂に新派の宗匠と號せり。

十九號は四月の發行にして、紅葉の「やまと昭君」なる新篇出づ。また「清少納言」の變名にて「犬枕」なる短篇を掲ぐ。

此號に合作小説の披露あり。そもそも合作小説の趣向たる、最初より趣向の打合も文體の相談をも成さず。初回を引受たるものは勝手氣儘に書放して、次回の者はその趣向をまた己れが好むまゝに變化し、互に人困らせのわれ面白、どうなるか行く處まで遣つて見様といふので創めたるなり。

御披露

そもそも合作小説といふは、一篇の小説を數人して作るなり。其法鬮にて順序を定め、わが心まかせに題を設け人物を點出すれば第二回は第二番が其意義つぎ「かうもあらうか」と筆を採る。第三第四もまたしかなり、もとより銘々其趣向を互に語らざれば、善人に點出せし人物が惡人となり、美人と思へばそれが化物長命の積の翁が頓死し、戀の出來そうもない息子が打て變つて祝言するなぞすべて趣向のいきつまりから出る新想妙案、文體も亦一樣ならず言文一致あり雅俗折衷あり、各著者の心まかせ、窮鼠却つて猫を嚙む。案外の出來あるやとも計られず、合作小説のをかしい處なり、來る廿一日よりお目にかくべし其番號は

第一番	紅葉山人	第二番	思案外史
第三番	春亭九華	第四番	古木山人
第五番	眉山人	第六番	漣山人

然してこの合作小説の第一回は、第二十一號に掲載せしを以て、後に之を述ぶべけれども、兎に角後連を困らせてやらうといふ書振りなりし爲め、妙不可思議のものとなつて、遂に何が何やら分らず仕舞になりて、其儘中途にして立消えとなれり。

(未完)

時評

菊五郎と靜枝

坪内士行

新橋演舞場で菊五郎の「保名」と「刺客」とを見、帝國ホテルで藤間靜枝の藤蔭會の一部を見た。

「新舞踊」とは全體何であるか。新日本の生むべき舞踊はどんなものであるか。それについての議論は區々であらうが、兎に角、一時流行した「新」舞踊熱が近頃かなりに冷めたのは事實である。然し、それは決して新舞踊運動が消滅したのでなくて、かへつて着實な進歩をしてゐる證據だと樂觀しえられないでもない。菊五郎の「保名」は、曲も振りも昔のものには相違ない。が、彼の心意氣は立派な「新」舞踊を創作してゐる。と云ふ意味は、あながちに褒める意味ではない。むしろ古典舞踊清元地の「保名」としては甚だしい不滿を覺えさせるものがあると云ふ事を意味する。彼の保名には艶麗な曲線美もあり、こなし盡された技巧もある。然し、到底葛の葉に別れ戀に狂ふ、ファンタスチックな、幼い、現代離れのした保名ではない。その點では宗十郎の保名の方が遙に適任であり、傑作である。たゞ、菊五郎に新舞踊「保名」として、即、モダーンな演出振りに於て唯一であるとの折紙に値する。彼の「保名」はむしろ新舞踊「春怨」とでも名づけらるべきものである。田中良氏の舞臺裝置も亦よくそれにかなつてゐる。

「刺客」は菊五郎としてはよほど得意の新舞踊であるらしい。彼が「西洋舞踊なんてわけのないものだ」と傲語してゐるのを聞いた位であるから、「へん、どんなもんだい」と云ふ氣持は全體の振附によく現れてゐる。然し、もし舞踊にも大學、中學、小學、幼稚園などの階段があるものならば、「刺客」如きはその最も初歩の幼稚園にも比すべきものである。幼稚園式童謠舞踊と云ふのではない。最も簡單な、最も受け入れられ易い、最も藝術味の薄い舞踊だと云ふのである。作曲にしてもさうである。西洋音樂上の素人に振附けやすい爲めにか、非常に强い拍子を繰返した原始的音樂で、萬一菊五郎がこれによつて「西洋音樂くみしやすし」と思つたのなら間違ひである。又「刺客」の成功を藝術的な成功と思ふのも間違ひである。恐らく彼とても「刺客」如きは歯牙にかけてゐまい。あの三人揃つた中にも、彼一人が特に形をくづし、間をはづして、さながら樂屋で仲間といたづら遊びをしてゐる如くに踊つてゐる。随分とキザである。それほど彼には容易な舞踊である。が、彼ほどの天分をもつてしても、西洋音樂と提携しての新舞踊創始のためにはまだ／＼數段の研究と努力が必要である。

菊五郎の舞踊が大關の獨角力であるとすれば、藤蔭會は鳴く音を磨く鶯と云つた感じがする。これは又決して惡い意味ではない。その眞劍の努力を褒める心である。女の力で、兎に角あれだけの仕事を續けて行く藤間靜枝には敬意を表さずには

られない。然し、彼女の今後行くべき道はかなり困難でもあり、方向も定めがたいのではないかと思ふ。長唄や、西洋樂や、箏樂や、或は其等の混成や、いろ／＼の音樂も使ひ、古典舞踊童謠舞踊舞踊劇と、內容にもいろ／＼の研究題目をひつさげてゐるが、到底今では全くの暗中摸索たる事をまぬがれない。

帝國ホテルでの第十六回の發表會では、不幸にして彼女の得意らしい後段の三舞踊を見落したが、前段の一二について云ふならば、小品Aの童謠舞踊三種は、皮肉に云へば、いかにも現代思想によく合つた作曲なり、振附であつた。と云ふのは、よくまあゝコセ／＼と急がしいものを三つもこしらへたもの、と感心したのである。西條八十君が洋行してから、童謠と云へば北原、野口の兩氏にとゞめをさすやうであるが、兩氏の歌についての評は兎に角として、中山氏の作曲が第一に間違つてゐるのではあるまいか。それに、どうも靜枝の童謠振附はこゝで一變しなければならないところまで行詰つて來てゐると思ふ。

その行詰りから一展しようと云ふ試みか何か知らぬが、「訶梨帝母」と云ふ大がゝりな劇詩に振りをつけてゐるが、これは又一言にして云へば荷が勝ち過ぎた。彼女の努力に敬意を表するからは、惡口は云ひたくないが、彼女の鬼女の最初の振りなどは、どうしても臺灣蕃女が虱でも探してゐるやうに、下ばかり見てゐて感心しない。全體「劇詩」らしく作られた「詩」に振りをつけるのからして考へものだ。「詩」は必らずしも「舞踊」にはならない。

かうは云ふものゝ、菊五郎も靜枝も、共に舞踊の熱愛者であり、已のためにも何にもせよ、常に新境地を目がけて突き進ん　その意氣は充分過ぎるほど認められる。どんな場合にも多少の非難や攻擊は受けねばならぬのであるから、絕えず、ます／＼新舞踊のために努力して貰ひたい。一般人の間の新舞踊「熱」こそ冷めたれ、今は確に土臺石の築かれつゝある最中だと信ずる。（六月十一日）

隱れたる新人の爲めに

新井紀一

「徒黨を組む」と云ふ言葉は少じ感心しないが、併し、文壇へ出る爲めには矢張り多勢が一束になつて、何か目新らしい、そして華々しい旗幟を押し立てゝ、揉みに揉んで打つて出るのが得策のやうである。得策ではなくとも尠なくとも近道のやうである。殊に文壇が今のやうに喧騷を極めて、表皮的昂奮狀態に陷つてゐるやうな時に當つては、それは最も得策のやうである。地道におとなしく、こつ／＼とやつてゐる者は、よし、いつかは認められるにしても兎に角認められるまでに相當の時間がかゝる。或は認められずに一生終つて了ふかも知れない。同人雜誌を出さうにも主義主張を同じくするいゝメンバーがない爲めに、或は、あるにしてもさういふ喧騷さを嫌ふ爲めに、その不得策を充分知りつゝ淋しく歩んでゆく。それがやがて認められない事の原因となる。ところで世にはさういふ眞面目な、本當

の意味の藝術家が必ず澤山あることと思ふ。が、文壇が今のやうな狀態をつゞける限り、さういふ人達は誠に氣の毒な目を見なければならない。

併し、さういふ事は案外第三者から見たくだらない忖度で、さういふ當人達に取つては今のやうな文壇から無視さ　、輕蔑されてゐることにより大きな滿足と矜持とを持つてゐるかも知れない。つまり、あべこべに今の文壇を無視し輕蔑してゐるのであるかも知れない。が、事實はよしさうであつても、文壇はもう少し冷靜を取り戻して、野に聖賢を求むるの態度を持つて、隱れたる新人を探し求むるだけの餘裕と推量を見せてもよくはないだらうか。新人出でよ新人出でよ——と聲ばかり大きくしてそつぽうを見てゐないで、もう少し足許に氣をつけてよくはないだらうか。氣のつかない足許に案外、珠玉のやうな作家が居はしないだらうか。不公平はどこにもあることとは云へ、併し、吾々はせめて吾々の棲む文壇だけにはかうした不公平を除きたいものではないか。

認めてゐる者は疾くに認めてゐるだらうが、こゝで私は最近作家としての坪田讓治君を發見したことを悅びない。少し潜越過ぎた言葉ではあるが、坪田君よ、どうか許してくれ給へ。私は最近六月號の「文藝日本」と「鐵鎚」を讀んで、前者では「コマ」に後者では「蛇」に、埃道で眞珠を拾つたやうな驚喜を感じたのである。それから、それを讀んで更に思ひ出したことは、五月號の「文學界」で讀んだ「笑ひの後」である。これも優れたものの一つであつた。が、さうは云つても同君の作品には決して人目を引くやうな華々しさとか、アンビシアスなところがない。殊に、人目を引くには量に依て愕かさうとするこの文壇で餘りに片々たる短篇ばかりである。その點が、路傍の花の如く捨てゝ顧みられないのであるかも知れないが、同君の如きもつともつと認められていゝ人だと思ふ。殊に、私が嘗て仲間に入れて貰つた雜誌「黑煙」が、藤井眞澄君とこの坪田讓治君の創刊したものである關係から、同君の名前だけは可なり前から知つてゐたし、作品としての腕前も相當前から知つてて、その當時自分の到底及ぶところでないと云ふやうな記憶があるので、一層隱れたる眞珠と云ふ感じを深くするのであるかも知れない。

それは決して坪田君一人に限つたことでないかも知れない。さういふ不當な待遇を受けてゐる作品は必ず澤山あるに違ひない。默々として生眞目にやつてゐる者は損だ。大いに旗を押し立て、鳴を鼓らして世に問ふのが文壇處世術の一つだ。そしてさういふことが出來る人ならどんどんさういふ事をするのがいゝことであるのだが、併し、さういふ方法を取らなければ出られないといふ文壇は當に呪はれて然るべき存在でなければならない。いゝ加減に血迷つた頭を冷却させ、優れたるもの、正しいものをその價値なりに發見し認めるだけの冷靜さを取り戻したいものである。こゝに、新進坪田讓治君の名を籍りて敢て、隱れたる新人の爲めに鼓を鳴らす次第である。（T）

爛醉私論

（築地小劇場の公演に）

中野秀人

新しい時代の尖端に逆ふことは困難である。私は築地小劇場の新演出に接する少し前先驅座と劇場の三科とを見た。先驅座は「文藝戰線」が疲れてゐるやうに疲れてゐる。三科は亂雜で、生活に對する革命的精神からずつと別な方向に外れてしまつてゐる。そこでは吉田謙吉と神原泰とが僅に異色を示してゐた。村山知義は貴婦人のお氣に入りさうな餘りに可愛らしき無邪氣さに耽溺してゐた。そこに新時代の陷穽がある。

「文藝時代」の諸氏は何故に文壇の過去帳の中に折り込まれた生田長江や福士幸次郎の激怒を買つたか。しかも問題の中心は一つの惠まれざりし「パシキンの死」に涙をそそぐアルツイバーセフの熱情を缺くことにあるのではないか。民衆を現實的なる知識から拒むカラクリが如何に牢固としてゐることであらう。そこにプロレタリヤ派は倒れた。そして新感覺派も倒れんとしてゐる。よりよき藝術の打つて出る活路に横つてゐる石は何だ。その石を打ち碎く力は何處にあるのだ。

新しい時代の尖端に逆ふことは困難である。築地小劇場に幸あれ。——小劇場の正に戰はうとしてゐるところは以上の如き渾沌に對する打撃にこそあるべきだ。藝術の爲に利用された財源が畫家を役者を、ころがつてゐる思想を、新しがりの輕薄を、あらゆる時代の傾向を、そして新時代の尖端を引き具して、半身不隨の文壇に擬した。小劇場はそれ自身の有利なる立場に於て、藝術のない同胞の生活に肉迫しなければならぬ。

小劇場はストリンドベルク作「爛醉」によつて一つの階段を踏むだ。

小劇場が本年にはいつて意義ある演出を見せて呉れたのは僅に「櫻の園」一つである。そして今度こそは演出者土方與志の番が廻つて來たのだ。もう一つの記錄を作つても宜い頃だ。そして實に當つた。成功したのだ。ストリンドベルク最後の戲曲、クリスチヤニテイーへの敗北、そこに感情の粗雜さと、古配しきれない强引とがあるけれども、喜劇的解決として見るとき大きな迷がある。それは新演出の冒險をするにもつて來いの素材だ。鳥目觀を失つたストリンドベルクが、多少耄碌をしながらも如何に端的に、一流の哲學を物語るぞ。ただヂヤンヌが敎會で倒れる原作にない場面などを、くつつけて呉れたのは意外千萬だ。あれが小劇場の惡趣味であり、如何に風俗で、右傾的で、興味中心への遊藝に走りたがるかといふ一つの證據物件ともなるべきだ。爲にコンポヂシヨンがゆるみ、舞臺裝置さへ灰色に見えた。

花柳はるみのストリンドベルクは既に定評あるものである。小劇場に於ける彼女は、天才女優として期待されてゐるだけの效果をこれまで擧げてゐるとは言へなかつた。彼女は二つの系統の役しか出來ない。あきらめの愛に寂しく笑つてゐる女と、限りない反逆の昂揚に息もつかせぬ苦悶の女と、そしていつ

色つぽくて自制的である。彼女はその中間では失敗する。彼女は溝をまたぐことが出來ない。彼女は嵌らない役では跛になる。ただ不思議な肉體の魅力であらぬ方に觀客の眼を奪ふ。だが花柳はるみの全靈を打ち込む役が廻つて來たのだ。私はアンリエツトの役に於て何人の追隨も許さない奇蹟的な成功を信ずる。ルクサンブルク公園の上で示すあの輪廓、あの音量、あの精力、そこには寫實を拔け切つた素晴しい飛躍があつた。

横田儔は全然新しい時代に出しやうとしてゐる。その素朴と頑強とはモーリスの役を一部分表現してゐる。だが力があつて、光がない。神經の鋭さがない。花柳はるみの相手役としてはどうしても物足らぬことを免ぬからぬ。山本安英のジヤンヌは彼女の平常の深刻な表情に溯える低い野心を捨ててゐるのを買はう。彼女の眞劍さは歩一歩として肉體の上に何ものかを積みつゝある。

最後に舞臺裝置だ。村山知義は再び記錄を殘した。彼の特長を革命的な斬新奇拔なものと考へるのは誤りである。彼はその敏感性と女性的なるものとによつて時代の傾向に投じてゐる。三角や、圓や、紗の幕や、廻轉する背景や、ぶら下つてゐる十字架や、豚や、指や、一寸法師や、あらゆるものが事件の發展につれて一つの目的に向つて呼び合ひながら動作する。そしてルクサンブルグ公園の赤い峰が全體を支配する。ホリゾントが實にゆたかだ。きらきらする光澤と、氣取つた美々しさて、無邪氣な享樂と、それが全體の雰圍氣である。だが濃厚さと、もうもうたる心靈の世界とを繰り擴げることは出來ない。その早熟と完成とに於て彼は劇場藝術家として卓越せる一人である。

これだけのあらゆる分子を綜合し、寫實派、表現派、構成派、と言はず、役者の技倆の長短を補ひ、「爛醉」に新しい意義と、そこから未來に向つての人生觀を引き出さうとしたこの演出は特筆されなければならぬ。そこに小劇場の持つてゐる缺陷と、日本の現在の藝術の持つてゐる混濁と、すべての塵をかぶせても、底から光つて來るものを否定することが出來ない。おそらく無名作家の作品であつたなら、今日の無情な批判なき編輯者によつて一顧だにされなかつたかも知れないやうなこの「爛醉」がかくも潑剌として上演された、この記錄、この出來事に自分の筆を染めることを光榮に思ふ。終りにのぞんで演出者土方與志に盲評を謝す。（六月二日）

永田衡吉氏の戯曲集「廐戸皇子」を讀む

長谷部孝

永田氏の處女戯曲集に收められた七篇の戯曲のうち、その量から云つてもその質から云つても最も注目すべきものは、矢張り標題となつてゐる「廐戸皇子」であらう。

日本文化史の上で最初の劃期點である飛鳥時代――佛教の渡來から惹いて大陸文化浸潤の時代にあつて、時代精神の指導者であり、時代民衆の崇敬の標的であり、その憧憬の焦點であつ

た稱徳太子を主人公にし、新文化の吸收に從つて共處に必然的に捲き起される新舊思想の衝突を描き出したこと、既にそのことだけでも興味の深い問題であるのに、作者はそれを啻に舊い一つの時代、舊い歴史的人物としてのみ扱はず、それに近代の、いや永遠の時代性、人間性を吹き込んで、作者の透徹した個性の眼を各人物の總てに植ゑ付けた點に、常に新しい問題があり、又同時も最も深い興味が繋つてゐるのである。

作劇法の上から云ふなら、余りにも手堅い從來の作劇法の正道を踏んだもので、科白その他にも先人の轍踏んだところが見えないではないけれど、その表現法の上に於て從來の史劇に忘れられ勝ちな心理描寫の細かさと、各人物を透して感じられる作者の感情の顫動の細かさとは、當にこの五幕十場の一大雄篇を單なる史劇から抽んで、新しい國民史劇としての價値を確認させるものであると云つていゝであらう。

量の上に於てこれに次ぐものに「煩惱無安」がある。壇の浦の戰ひに敗れた平維盛があらゆる嘘を方便としても生に執着して行く悲劇、客觀的に見れば喜劇と云はれるものであるが、結構に於て「厩戸皇子」に劣ると同時に、質に於てもやゝ劣るものではあるまいか。そのテーマの摑まえ方、並びに悲劇的人物、と同時に喜劇的人物である維盛に、作者の鋭い眼は光つてゐるけれど、その眼が光りすぎたためか、主人公の維盛はやゝ作者の傀儡に驅使された傾きがあつて、維盛の性格からにじみ出して來なければならない皮肉な悲喜劇味が薄くなつてゐることが遺憾である。恐らくこの作は作者の長所を短所を最も赤裸々に顯はした作であつて、「厩戸皇子」と並び稱されるものであるけれど、私は寧ろ氏の他の一幕物に相通じた味を持つたものであると思ふ。

以上の二作は新聞にも雜誌にも樣々に論じられたものであるから、それを簡單にして私は他の一幕物の喜劇について少しく云つて見たい。

この集の中に收められたものには「春の夜の出來事」「或偕のまぼろし」「市場」の三篇がある。以上三篇は悉く共通した喜劇味を持つものであつて、最初に東から西へ流れたものを、最後に西から東へ流して見せるのが、その最も異なつた特色である。そこに我々はこの作者の聰明さと人生觀と、そして皮肉な味とを十分に掬することは出來るけれど、最初に東から西へ流れる間の作者の卽かず離れずの態度が、西から東へ流れるに當つて卽きすぎる、或は離れすぎるといふ非難がありはしまいか。云ひかへれば一つの事件を作者はある一點にゐて見る。途中からで作者はその裏に廻つて見る。その作者の眼の置き所が異なるために、最初感情的に人物について行つた我々は、途中から理智的に直接作者の興の中に入つて行く。勿論そこに面白さもあり、作者の狙ひ所も其處にあるのではあるが、私にはどうも重心が二つになるやうな氣がしてならない。

とは云へ、技巧の方面に勝れた才分を持つこの作者は、さうした難點を巧みに拾收して喜劇の新しい體系を產み出すことに成功するであらうと思ふ。結構の雄大な新國民史劇の上に今後作者の雄飛を望むことは勿論であるが、尙ほ又短い一幕の喜劇

に於てもこの作者の大成を期待したい。

以上述べた作の他に好個の一幕物である「蓬萊」並びに「寂光の路」の二篇があるが、それは他日に讓ることゝして、最後に私はかうした新進劇作家の戯曲集を公にした四紅社主大井氏の勇氣を買つて筆を擱く。（完）

藝術的價値と人生的意義

戸川貞雄

かつては所謂プロレタリア文藝に非ずんば新時代の文藝でないと云つたやうな一時期があつた。そしてまた先頃は、新感覺派の作品以外には、新しい文藝がないと云つたやうな時期があつた。然も今日、プロレタリア文藝は、殆んど文壇にそれらしい作品の跡を絶ち、新感覺派は、非難の中心となつてゐるやうな有樣である。

併しながら、私は必しもこの文藝上の主義なり運動なりが、主義そのもの或ひは運動そのものとしては、無意義であつたとは思はない。私は寧ろ、現在でも、プロレタリア文藝にも、また新感覺主義にも、充分な好意を寄せてゐるものである。私が本誌昨年の十二月號誌上で、「解放の文藝」を公けにした如きは、その好意の現れである。好意といふよりも、それは私の文藝に對する熱意の現れであつたのである。が、プロレタリア文藝の諸家も、同樣に新感覺派の諸氏も、私の好意を無視した。

プロレタリア派は、既に當時殆んど作品を示すことの出來ないやうな頽勢に在つたが、新感覺派は文藝時代に據つて旺んな勢を示してゐた。然も今日では、倶に與に、末の見極めを著けられてしまつてゐる。私の遺憾に堪えないところだ。私は彼等に對する二倍の好意から、云ひ換えると文藝に對する二倍の熱意から、かやうな大勢を招いたこの兩派の作家の態度なり作品なりの、致命的な缺陷を簡單に指摘したい。主義として、運動としてのプロレタリア文藝論は、文藝を、その本來の使命にまでブルジョア文藝の祭壇から引下さうとした點で、確かに正しかつたと思ふ。文藝の人生的意義を、時代思潮の呼吸によつて、甦生せしめようとする運動であつたのである。だが、もと藝術の世界のことは、主義なり主張なりによつてのみ、その運動が目的するところを成就するわけにはいかない。畢竟、作によつてすべての解決はつけられねばならないのである。プロレタリア文藝運動は、不幸にも失敗した。文壇にあれだけの波紋を起し、自覺を與へたこと、それだけで充分だと云ふのは、不熱心な運動者の負惜しみに過ぎない。

新感覺派の運動も亦、それに劣らぬ衝動を文壇に與へたことは確かである。川端、石濱、片岡諸氏の論評は、尠くとも所謂新時代（それが古いか新しいかは別問題）の藝術に、理論を與へることによつて、それの藝術的價値を確立しようとした點で充分認めらるべき意義を有つてゐたと思ふ。が、この運動も不幸にして敗れた。最後の勝負は、作品によつて決せられねばならぬのが、文藝上の運動の宿命であるからだ。

この目醒しい二つの運動は、何故作品の上で最後の止めをさされるか？

私の見るところによれば、もとその主義の性質上、プロレタリア文藝派は、餘りに文藝の人生的意義に價値を置き過ぎて、藝術的價値を無視した點に、失脚の第一歩があつたのではないかと思ふ。一々例證すれば首肯されようが、この點、或ひは實例を俟つまでもなく、夙に夫子自身も氣付いてゐるかとも思はれる。新感覺派のそれはこれに反して、主義に於いては、存外文藝の人生的意義を自覺しながらも、作品の上では、餘りにその藝術的價値を重視した點に、失敗の因があるのではないかと思ふ。彼等の示すところの新しい感覺が、果して人生に何れだけの深い、必然的な交渉を有してゐるかといふのが、大體一致した論難の根本であることは、その證據に他ならない。實際、彼等の二三は、明らかに表現上の新感覺振りにのみ凝つて、内容的價値を無視するの過りを事としてゐる。むしろそこに新時代の文藝の生命が、價値轉換が、價値創造が、存するとさへ妄信した。

さて以上を對照してみると、そこに私は、單にプロレタリア文藝派と新感覺派と云ふ如き、一時代の派別の失敗ではなく、文藝上の根本的な派別、人生派と藝術至上主義派との、宿命的な失敗を、對立的に見ることが出來るやうな氣がするのである。人生的意義をのみ、文藝に詰めようとする態度と、藝術的價値以外に、文藝の存在價値を認めまいとする態度と。實際に於いて、あらゆる文藝上の主義なり運動なりは、結句この根本的藝術觀の對立にまで歸納されるものではあるが、さてかゝる對立的態度から、我々は果して正しく文藝を解し得るか何うか、そこに深い疑惑を抱かざるを得ない私は、プロレタリア文藝派と新感覺派の沒落によつて、一層その疑ひを深うしたことを附記して、慌しいこの稿の筆を擱く。　（十四年、六月十三日）

批評の無い文壇

中村星湖

新感覺派の事が文壇近ごろの問題となつたのは、二三の相當な批評家が所謂新感覺派の主義主張や作品に對して批評らしい批評を書いたからである。中にあつて、筆鋒の最も鋭かつたのは生田長江君であるが、この人の文藝批評家としての努力は今日に始まつた事ではなく、二十年間一日の如く、かん〳〵がく〳〵の議論を發表してゐる。が、そのともすれば逆說的、循環的に流れやすい筆癖は、しば〳〵君自身の立場の何れにあるやを疑はせる。人道主義が現れゝば人道主義に反對し、傳統主義が唱へられゝば傳統主義にけちを付け、階級藝術論、新感覺論、一として君の非難の及ばざるはない。

批評にも色々あるが、君の批評はアゲアシトリ、またはアラサガシの批評である。英語に所謂フォルト・ファインディング・クリチシズムである。批評の職能の一面はたしかにそこにあつて、それによつて、批評の對象を是正し、反省せしむる效果は

疑ふべくもない。

だが、生田君の批評はよく言へば、アイコノクラストの批評であり、ナイヒリストの批評であるが、わるく言へば天邪鬼的であり、何事へでも反對する批評である。批評の消極的方面は君によつて代表されて遺憾ないと思ふが、もつと積極的の批評、言葉を換へれば、自己の理想と立場とを明示して、その尺度にかなつた物を引き起こし、育て上げるやうな批評、即ち破壊的批評の反對の創造的批評もあつて然るべきだと思ふ。これこそは批評の本道であり、その眞職能であらう。

然るに、さきにも言つた通り、最近の批評壇は生田君の一人舞臺の觀があるのは（これは僕の僻見ではあるまい。）文壇に眞の批評の無い證據ではあるまいか？　僕がさう言ふのは、生田君の聲名を嫉妬する爲めでもなく、その業績を無視しようとする爲めでもない、（どころか、僕はいつも陰では尙今文藝批評家らしい批評家は生田君一人だとさへ言つてをるのだ。）實に、反動時代の壓迫と商業主義の腐蝕とによつて、萎靡沈滯の極に達してゐる文壇に一條の活路を開かせようが爲めである。

出版界の不況といふ事も、文藝の批評を書肆の手前味噌の廣告文とほうかん的新刊紹介のお座なり言葉とにまかせて、多くの批評家がその職能と權利とを十分に發揮しない事にも源因するであらう。

文藝に對する眞の批評の出現を僕は待ち望んでゐる。だが、文藝に對する眞の批評の出現は、人生に對する眞の理想の確立の後でなければならない。

時事消息

●青峰會の設立　俳壇の權威島田青峰氏のため、虚子、吉藏、百穗、秋江、溫亭外文壇の九氏によりて青峰會設立され、同氏の句と文とを集めて『青峰集』なる一書を春陽堂より刊行することとなつた。

●ハッガアド氏逝く　英國の現代作家として、社會問題の研究家として高名なサア・ヘンリイ・ライダア・ハッガアド氏（一八五六—）は五月十四日逝いた。享年七十歲。

●ロオプシン氏逝く　『蒼ざめたる馬』によつてわが國にも夙に知られてゐるロオプシン氏は、この程自殺を遂げた。

●六朝唐宋書畫名蹟展覽會　山本悌二郎氏を會長とする大東美術振興會の主催に、、五月廿三日より廿五日まで美術學校にて開催された。

●故鈴木泉三郎氏追悼會　「鈴木泉三郎戲曲全集」の出版につき菊地寛、小山內薰、長田秀雄、菊五郎、勘彌、嘉久子外五十餘諸氏發起となり六月二日夜三共ビルにて同氏追悼會を催した。

●バアナアド・リイチ氏陶器展　六月一日より四日まで鳩居堂に同氏の陶器とエッチングの個展が催された。

●川上邦世氏逝く　六月二日腦溢血で逝いた。その告別式は三日石神井三寶寺の自宅に催された。

●近松秋江氏誕生五十年記念會　同氏の誕生五十年を祝賀し、記念するため、知巳五十一氏の發起にて五月二十三日夜帝國ホテルに開催された。

●日佛藝術社展覽會　日佛藝術社はその第二回小品展として、ロダンの「カレーの市民」の一人、ブールデルの「サッフオ」等その他油繪五十點を六月一日より十日まで三共ビルに開催した。

●青色の室第二回詩展覽會　早大文學部關係の新進詩人の團體である同會は、その第二回詩展を六月一日より十日まで早大裏のカフエー松原に開催した。

●ギトリイ氏逝く　フランスの名優として、また現代戲作家のサシヤ・ギトリイの父として高名なリユシアン・ギトリイ氏は六月二日逝いた。享年六十五歲。

●富岡鐵齋翁遺作展覽會　一昨臘逝いた南畫の泰斗富岡鐵齋翁の遺作八百餘點が、六月十七八の兩日高島屋美術部によつて美術俱樂部に展列された。

●大町桂月氏逝く　六月十日青森蔦溫泉にて胃潰瘍を病んで逝いた。その告別式は十七日雜司ケ谷町の自邸に於て催された。

●本鄕繪畫展覽會　同研究所、主催にて六月四日より十五日まで上野美術協會に開催され、なほギリシヤ古美術品二百點を參考展覽に供した。

●ロオウエル女史逝く　米國の女流詩人エーミー・ロオウエル女史は、五月十二日逝いた享年五十一歲。

創刊雜誌

●「文藝戰線」の復活　休刊中の同誌は、雜司ケ谷龜原五四山田清三郎氏方を編輯所とし、六月號より復活した。

●「信天翁」　の創刊早大文學部の學生有志によつて如上の同人雜誌が六月號より創刊された。

新刊書一覽

●婦人問題十六講　奧むめお著新潮社五月發行四六版四七二頁定價二圓五十錢、著者はわが國における女流思想家でもあり、婦人問題研究家でもあり、實際の婦人運動の中心人物でもあるから、本書は單なる紹介的著書と異り、著者その人の情熱と人格とを裏つけた近時の好著である。十六講目の何れも重大な問題であるのは改めて云ふまでもない。

●廐戶皇子　永田衡吉著、四紅社五月發行四六判四六〇頁定價二圓五十錢　著者は新進の劇作家として、また眞摯なる演劇研究者として夙に識者の重望を擔つてゐる新人である。本書は著者がはじめて世に問ふところの處女作集である。發表當時世評を高めた史劇「廐戶皇子」をはじめ「寂光の路」「煩惱無安」「蓬萊」等すべて七篇をおさめてゐる。いづれも一粒撰りの作品ばかりである。

●籠の小鳥　德田秋聲著文藝日本社五月發行四六判三四三頁定價二圓三十錢　短篇作家と

ーての秋聲氏を知るためには、本集はあつらへむきのものである。この老大作家を短篇作家として見たいといふ興味が今日非常に強くなつて來てゐるやうである。この點本書の出版はまことに時を得たものと言はなくてはならない。おさむるところのものは、すべて最近にものされた短篇ばかりであつて、「籠の小鳥」「ファイア・ガン」「恥辱」「花が咲く」等すべて十篇。他に最近の傑作として世評を涌かした中篇「未解決のまゝに」を添へてゐる。

●少女　廣津和郎著文藝日本社五月發行四六判一九五頁定價一圓同社の現代短篇小說選集の第一編である。著者の數多短篇小說のうちからその粹を拔いてなつた新集である「少女」「指」「父と子」「庭」「隱家」等すべて十篇をおさめてゐる。この著者の最近の勞作は、この集に見ることが出來る。

●晩唱　宇野千代著文藝日本社五月發行四六判一八九頁定價一圓同上の第二編である。短篇作家の花形としての著者は、この集に遺憾なくその手腕を見せてゐる。この著者の明敏な感受性、新鮮な表現力、新しい理知をこの集にあますところなく見ることが出來る。「晩唱」「跫おと」「夢」「幸福」「夜」「鳳仙花」等すべて十五篇をおさめてゐる。

●輪舞　田中純著新潮社六月發行三四六頁定價一圓七十錢著者が久しぶりに世に問ふた長篇小說である。描かれてゐるものは戀愛の三角關係で、或る知名な文學者の情死事件がそのモデルになつてゐる。藝術小說としても家庭小說としても面白く、すら〳〵と書いてのけてゐるうちにも、深いところまで摑んで書いてゐる。著者の老練を思はせる。

●弱過ぎる　加能作次郎著新潮社六月發行新四六判二〇四頁定價七十錢同社の短篇シリイズの第七篇である。著者の郷土的な素朴さが出てゐる作品が多く集められてゐる。著者の作集のうちでも、或は本書は最も會心の集ではないかと思はれる。「弱過ぎる」「老婆の唄」「窮鳥」などは著者の持味が最もよく出てゐる作である。その他「金魚」「幼女たち」「丁稚同志」等すべて七篇をおさめてゐる。

●戀から愛へ　近松秋江著春陽堂五月發行四六判五二二頁定價三圓二十錢著者の誕生五十年記念として出版された作集である。卷頭の「子の愛のために」は、「從來自己の戀愛經驗を材料とせし作風ーが最近初見を得るに到つて一變した作境を語るものであり、「作者は遂に戀愛に倦み、戀愛に敗れて、結局殘れるきんとす」と、著者自ら言つてゐる長近の心終生を愛によつて生境の變化を、最も遺憾なく語りおほせてゐるものは、ひとり本書である。「第二の出產一子供」「舊戀」「祕密」「疑惑」をおさめ、なほ著者の年譜を添へてゐる。

●玄朴と長英　眞山青果著新潮社六月發行四六判二二八頁定價一圓眞山青果戲曲集の第二編である。「玄朴と長英」は、弘化の時代とその先覺者を描いた史劇であつて、著者のかへり咲きの第一輪であつた。「平將門」に比して遜色ない史劇であるとはすでに一般の言ふところとなつてゐる。その他「梶屋久兵衞」ー「淺草寺境内」の二篇を添へてゐる。

●文學思想研究第一卷　早稻田大學文學思想研究會編新潮社五月發行菊判四一四頁定價二圓八十錢早稻田大學の教授講師をもつて組織されてゐる文學思想研究會の第一回の發表である。それ〴〵專攻の學術についての會員の研究の發表機關である本書は、實に、わが國に於ける外國及日本文學研究の最高標準を示すものである。文學、藝術を語るものには本書はその教科書とされなければならない。本書は他日詳評の機會があることゝ思ふ。執筆者は、山口剛、山岸光宣、浦上后三郎、會子馬治、河面仙四郎、西村眞次、武田豐四郎窪田通治、吉江喬松、イナ・メタクサの十氏である。

●近代藝術論序說　本間久雄著文省社五月發行四六判三一二頁定價二圓三十錢著者の最近の研究と鑑賞との中から特に藝術論及び近代英文學に關する研究論文を收めたもので、「ボオル・ゴオルチエの美學」「ボサンケの美學」「クライブ・ベルの美學」を始め「近世英文學上の二つの快樂主義」「近世英文學上の頹廢派の運動」「近代南畫の革命家管原白龍」「我國デカダン時代の男女關係」其他數、何れも有益にして且つ味ひ深い鑑賞論文である。

●世界文學思潮　茅野蕭々著日進堂五月發行四六判三六一頁定價二圓七十錢同社の最近思潮叢書の第九編である。外國文學に造詣深い著者が、現代の世界文學に對して正當なる解說を與へたものである。「世界文學」「現代の文學」「形式」「典型と契機」「現代世界文學の組成」「個性」「大戰後の世界文學」の七章に分つ

●明治文學十二講　宮島新三郎著新詩壇社五月發行四六判二八二頁定價二圓明治文學に關しての最も手頃な概論である。明治文學思潮の變遷推移の順路は本書によつて明かにされ、合せて社會文化の變遷も示されてゐる。たゞ單なる過去の報告にとゞまることなく、歷史をば、未來の豫想であり、又將來を導く力であるとする立場に立つて、明治文學を眺めてゐるといふところに、本書の大きな特色がある。

●藝術改造の序曲　宮島新三郎著泰文社五月發行四六判三四九頁定價二圓　著者の最近の文藝評論を集めたものである。上編「現代文藝の新傾向」では現代文藝の進路をたしかめ中編「現代文藝と環境」では文藝と社會環境との不卽不離なる關係を明かにし、下編「現代文藝の諸問題」は、社會關係が文藝の上でどう取扱はれてゐるかに對する考察がなされてゐる。

●明治大正新文學史觀　小島德彌著敎文社六月發行四六判六七四頁定價四圓二十錢明治大正文學史は本書によつて皮切りされることとが出來た。この點著者の勞は大いに謝さなければならない。異常なる抱負と情熱とをもつて眞向からあたつてゐる眞面目な態度は賞新されなければならぬ。上篇は「啓蒙運動と揚文學の曙光」「東西思想の交錯と明治文學の樹立」「明治文學の爛熟と浪漫主義の運動」「明治詩歌及俳句の革新運動」に大別し、下篇を「自然主義文學の全盛時代」「非自然派小說と新浪漫主義的傾向」「混沌たる大正文學界への展望」に大別してある。

●更級日記錯簡考　玉井幸助著育英書院五月發行菊判三二〇頁定價三圓國文學界の謎とされてゐた更級日記錯簡の次第を說明し復舊して、更級日記の正しい姿を世に紹介する目的で公にされたものである。「昔から色々な學者が研究して見たがどうしても解らなかつた。どうしても解らないものとあきらめられてゐた位だつたが、今度御物本の發見によつてすつかり明白になつて、誰にでも讀めるやうになつてきた。それは實に學問界の一大驚異といはねばならぬ」と芳賀矢一氏は序してゐる。

●泉を掘る　荻原井泉水著層雲社四月發行四六判二八八頁定價一圓五十錢本書は層雲社の新俳句運動の記念塔をなすもので、その第五集である。層雲社に據るすべて二百九十二氏の作、すべて一千三百二十六句をおさめてゐる。

●海南小記　柳田國男著大岡山書店四月發行四六判三七九頁定價三圓二十錢南日本の巡禮記である。「唯自分は旅人であつた故に、常に一個の島の立場からは、この群島の生活を觀なかつた。僅かの世紀の間に作り揚げたる歷史的差別を標準とはすることなく、南日本の大小遠近の島々に、普遍してゐる生活の理法を尋ねて見ようとした。……この心持を以て、人間の無用なる鬪諍を悔い難き、必ずこの道を步んで次第に人種平等の光明世界に入らんとするだらうと信じてゐる、」と著者は言つてゐる。

●銀婚式　岡田三郎譯新潮社五月發行四六判二六〇頁定價一圓四十錢、同社の現代フランス文藝叢書の第十一編である。原作者ポォル・ジェラルディと言へば、現在のフランス文壇の寵兒である。そしてその「銀婚式」と言へば、彼地では劇を愛する者にしてこれを觀ないものはないといふ名作である。親子の愛の相剋といふありふれた家庭悲劇的主題を、これほど抒情的な音樂的美をもつて、纖細に描きあげたものはない。フランス劇の一典型としても何人も讀む必要がある。

●椿姬　久米正雄編文藝日本社五月發行菊半截判二〇〇頁定價一圓二十錢同社の世界文藝映畫傑作集の第三編である。サラ・ベルナアルによりフランチスカ・ベルチニにより、或はナヂモヴによつて、映畫「椿姬」の名は不朽である。久米氏の妙筆は實に手に入つたもので、凡庸の到底及ぶところでない。本文の外に寫眞及解說を附して完璧を期してゐる。

●詩岳に登る　山宮允著大雄閣四月發行四六判三五二頁定價二圓著者の詩に關する評論をおさめたもので、特に象徵主義神秘主義についての研究などにその銳鋒を見せてゐる。その他ブレーク及エイ・イーについては、得意の筆を運んでゐる。詩獄の嶺に志す者に對しては好個の寄與である。

●夢の破片　河本緑石著層雲社四月發行四六判二〇三頁定價一圓七十錢著者の第一詩集である。全體に細いけれども張りつめた絃でなければ出せない音が響き出してゐる。ロマンティックな、或は時に牧歌的でさへもある

清らかな情愁が、その基調をなしてゐる。愛誦するに足る詩集である。

●西歐を行く　大藤治郎著新潮社六月發行菊半截判一五一頁定價六十錢同社の現代詩人叢書の第十八編である。著者は大戰の最中數奇な運命の弄ぶところとなり、獨逸、佛蘭西白耳義、英國、印度、南亞を旅して來た詩人である。「刺戟が人を育てしめる」といふ一行を大きく燒印されて、來たと著者は言つてゐる。「獨逸にて」「英國にて」「佛蘭西にて」「その他」等に章を分つてゐる。詩壇の一異彩である。

●自然の惠み　生田春月著新潮社五月發行菊半截判二五〇頁定價八十錢「澄める青空」の後二年半の收獲をおさめたものである。著者の近作に親しむためには本書は是非とも讀まなければならない。「雪深し」「春近し」「心境詩」「鎮魂の秋」「抒情小曲」其他。

●はつ戀　川路柳虹著新潮社四月發行四六半截判二九二頁定價一圓三十錢既刊の小曲詩集「はつ戀」「蘆の笛」「温室の花」を合してなつた新集である。すべて抒情小曲のみをおさめてゐる。青春の追憶と春春の心に生きたい憧憬とをもつて、若き人々の愛誦するにふさはしい。

●貧民詩歌史論　井上增吉譯八光社發行四六判二三九頁定價二圓五十錢　著者は古今の二百數十冊の原書を繙いて、直接、間接に、貧民の詩に關せらるものゝみ、こゝに選擇して本書をなしたのである。未だ他に類書を見ないところのものである。第一章英米の部、第一章獨逸の部、第三章佛蘭西の部よりなり、おさむるところの詩實に二百餘篇におよんでゐる。近時の快出版として大方にすゝめる。

●死の島の美女　福田正夫著新潮社六月發行四六判二四七頁定價一圓四十錢長篇幻想詩劇である。未拓の地に足を踏み入れてゆく著者のたゆみない精進は、けなげなものであると言はなければならない。本篇の如きはまた映畫臺本としても興味多いものである。

●プロレタリヤ劇と映畫及音樂　昇曙夢編新潮社六月發行新四六判一四〇頁定價壹圓同氏の編にかゝる新ロシヤパンフレットの第五編である。「革命ロシヤの要求と理想とを、最も大膽に最も率直に表現せる新ロシヤ藝術の最も特色的な方面が、プロレタリヤ劇とソヴヰート映畫とに集中されてゐる」ことは言ふまでもないことである。本書の出現は、これら當然紹介されなければならなかつたことの懇切周到を極めた紹介である。挿入寫眞も他に得がたい。

●改造新語辭典　相田隆太郎著新潮社四月發行三六判三〇二頁定價壹圓本書は近時書籍雜誌に散見する社會改造思想に關する新熟語を集め、それに平易な說明を加へたものである。辭書體でありながらまた讀物としても面白いところに特色がある。何人も一本は備へて置く必要がある。

●社會學通俗教科書　神永文三譯述新潮社五月發行新四六判二二八頁定價一圓二十錢同社の新學說大系の第八編である。米國の社會學者ギッヂングスの著を抄譯したものである。社會學入門の教科書として教養人は何人も一讀しておく必要がある。平明にして且つ科學的な、しかも相當に完備した社會學理論の說明書を要求する聲に應じて書いたものであると原著者も言つてゐる。

●日本小說集　小說家協會編新潮社六月發行四六判五〇〇頁定價二圓本年度より創刊された年刊小說集の第一集である。現小說壇に活躍する廿八氏の作を一篇づつおさめたもので、大正十三年の小說壇の鳥目觀をなすものであらう。

●夜とざす　堀口大學譯新潮社六月發行四六判二九〇頁定價一圓四十錢同社の佛蘭西文藝叢書の第九編である。ポオル・モオランの原作。最近頻りに問題にされつゝある「夜ひらく」の姉妹篇であり、「夜ひらく」とともに讀んで興味深い。「ポルトヒノ・ケルムの夜」「シャルロテンブウルグの夜」「バビロンの夜」「パッツネイの夜」からなつてゐる。なほ巻頭に、バンジヤマン・クレミユウの「ポオル・モオラン論」を添へてゐるのは周到である。

●政黨心理の研究　西村二郎譯述新潮社六月發行新四六判二二三頁定價一圓二十錢同社の社學哲學新學說大系の第七編である。本書はロベルト・ミヒエルスの名著「政黨論」の中から、特に民主主義の急先鋒たる社會黨勞働黨に關する事實的叙述を抄譯したものであつて、例によつて平明なる解說である。

八月號豫告

本誌前號の明治文學胎生期研究號は三月號の混沌期研究號にも劣らない好評を博しました。本誌のコンマアシャリズムを超越したこの眞面目な計畫が、幸ひにわが讀書界に歡迎されたことを喜びます。本誌は機を見て、更に明治文學の研究をつゞけ、やがて明治文學研究を大成つもりで居ります。

さて來八月號は

短篇小說號

として文壇十家の名篇を乞ひ收めることゝいたしました。論說欄にも歐洲現代文學の紹介わが現文壇の評論等についての諸家の精選力篇が載る筈になつて居ります。

■早稻田文學（毎月一回一日發行）

定價及郵稅

毎號定價を六十五錢とす。
臨時特別號を發行することゝし、該定價はその都度これを定む。
毎號の郵稅は內地一錢五厘。
外國行八錢。特別號の郵稅はその都度これを定む。

▲本誌の御註文はすべて東京堂（振替東京二七〇番）へ御申込の事
▼御註文の際は必ず（早稻田文學何月號より）と御明記の事
▼郵券代用の御送金は一割增の事
▼轉居の際は誌名と新舊兩住所御通知の事

大正十四年六月廿五日印刷納本
大正十四年七月一日發行

No. 233

禁轉載

編輯兼發行者 本間久雄
印刷者 關根慶寛
印刷所 早稻田印刷株式會社

編輯所 東京市小石川區雜司ケ谷町一四四 早稻田文學社 電話牛込一九〇八

發行所 東京市神田區表神保町三番地 東京堂 電話牛込六一〇七 振替東京二七〇番

世界名著叢書

バルザック著 新城和一譯、

結婚の契約

（附）ウウジエニイ・グランデエ

四六判 五六〇頁 函入洋布
定價二圓八十錢 送料十八錢

ゴオチエをして「結婚契約の恐しき最初の物語」と云はしめたる傑作と、純潔百合の如き少女の熱情を描いた二大長篇小說を以てバルザックの天才を傳へた。

屋根裏部屋の青い布をかけた小さい卓に座り白い僧服を身に纏ひ、四本の蠟燭の光の下に一日十六時間以上も書き續けたバルザックによつて、こんな偉大な作品が後から後から生れたことは驚嘆すべきである。本書の物語はパリイ及びボルドオの上流社會で、樂しい結婚にも關らずその影に男女兩性の辛辣な爭鬪が續けられる眞實と解剖の極をつくした逸品である。附錄の「ウウジエニイ・グランデエ」は、純潔百合の如き少女が貪欲飽くことない父親に虐げられ、戀人に裏切られ乍らも信仰の生活を辿る、崇高と醜惡との戰ひを描いた傑作で、前者が都會の腐敗を、後者が田園の清淨を描いた代表作として此一書により巨人バルザックを完全に味讀することが出來る。

東京神田 **東京堂** 振替東京二七〇番

The Waseda Bungaku
BY THE WASEDA BUNGAKU-SHA PUBLISHED MONTHLY. ENTERED AT THE Post OFFICE AT LOS ANG EH CAL. U.S.A. At SECOND CLASS MAIL MATTER.